

船岡山遺跡発掘調査報告書

—紀の川河川改修工事に伴う発掘調査—

1986. 2

和歌山県教育委員会

序 文

船岡山は、萬葉の昔から妹山・背山とともに景勝の地として巷間に知悉されてきたところです。阿閉皇女をはじめとする貴紳がこの地を訪れ、多くの和歌を今に伝えています。現在もその偉容を留め、右岸堤防上の国道24号線から望むことのできる地であります。

建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所では、紀の川の治水安全度を向上させるため、船岡山の一部と南岸妹山麓の紀の川狭隘部を開削することになり、ここに所在する船岡山遺跡の取り扱いについて再々協議を重ね遺跡の保護に務めてきたところでございます。

その結果、昭和54年度に遺跡の範囲確認調査を実施し、その成果を受けて昭和55年度～昭和57年度の3か年を要して発掘調査を実施し、貴重な遺構・遺物を数多く検出し多大な成果を収めました。

発掘調査によって出土した遺物は、遺構とともに縄文時代から中・近世に至る人々がこの島に営みの痕を遺したことを見らかにし、歴史的背景を反映する貴重な資料であります。なかでも弥生時代の遺構・遺物が最も多く、遺跡の主体を成すものであります。これらの貴重な資料は、発掘調査終了後、昭和58年度～昭和60年度の3ヶ年を要し整理調査をすすめてまいりました。ここに、その発掘調査結果をとりまとめて報告書を刊行いたします。本書が県民の皆様のみならず、学界の調査研究の一資料として大きな役割を果すものと信じます。

最後に、発掘調査ならびに本書の作成に際し格別の御理解と御協力を賜った関係各位に対し、深く感謝いたしますと共に今後とも文化財保護行政により一層の御理解を賜わりますようお願いいたします。

昭和61年2月14日

和歌山県教育委員会

教育長 中川 昭

例 言

- 1、本書は、建設省近畿地方建設局より委託を受けて、昭和54年度から同57年度にかけて実施した船岡山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2、発掘調査、出土遺物整理に要した経費は、全て建設省近畿地方建設局が負担した。
- 3、発掘調査、出土遺物整理は、和歌山県教育委員会の指導のもとに、社団法人和歌山県文化財研究会が和歌山県より委託を受け事業を実施した。
- 4、発掘調査は、昭和54年度に県教育委員会文化財課技師松田正昭、県文化財研究会技術員富加見泰彦・渋谷高秀が担当し、昭和55年度から同57年度まで文化財課技師松田正昭、県文化財研究会技術員土井孝之が担当した。出土遺物整理業務は、昭和58年度から同60年度まで土井が担当して行なった。
- 5、本書の作成について、和歌山県文化財保護審議会委員の指導および県教育委員会文化財課、県文化財研究会、県立紀伊風土記の丘資料館資料諸氏の助言・協力を得て、松田と協議の上、土井が執筆・編集した。尚、遺物の実測は渋谷・土井・松田智子・中村悦子・伊藤智子・松嶋成子・造構・遺物の製図は根来令子・林美幸・仲岡由自・藤田由香が行ない土井が統一した。造構・遺物の写真撮影は全て土井が行なった。
- 6、本書に記述した内容で、「発掘調査概要」4冊と異なる場合は、本書をもって正報告とする。
- 7、出土金属製品の保存処理は、(財)元興寺文化財研究所に委託した。また、土壤のリン酸分析は、紀ノ国環境衛生分析センターに委託した。
- 8、調査の組織は下記に示すとおりである。

調査組織

調査委員 小野山 節 県文化財保護審議会委員（在任期間 昭和55年2月28日まで）

岡田 英男 “ (昭和57年4月1日から)

都出比呂志 “ (昭和55年3月1日から)

藤澤 一夫 “

獨磨 正信 “

巽 三郎 “

事務局 理事 井上 至 県文化財課長（昭和56年3月31日まで）

畠村 半亮 “ (昭和56年4月1日～昭和57年5月31日まで)

山田 実 “ (昭和57年6月1日～昭和58年5月31日まで)

鍋島伊津夫 “ (昭和58年6月1日～昭和60年3月31日まで)

梅村 善行 “ (昭和60年4月1日から)

局長 海野 正幸 (社)県文化財研究会事務局長（昭和57年8月31日まで）

伊藤 正也 “ (昭和57年9月1日～昭和60年3月31日まで)

垣内 茂 “ (昭和60年4月1日から)

次長 山田 義男 県文化財課主幹（昭和56年3月31日まで）

土井 清司 県文化財課長補佐（昭和56年4月1日～昭和57年10月15日まで）

梅村 善行 “ (昭和56年4月1日～昭和60年3月31日まで)

北野 全美 県文化財課主幹（昭和58年4月1日～昭和60年5月31日まで）

幹事 桃野 真晃 県文化財課第2係長（昭和54年10月16日から）

書記 田尻 佳敏 県文化財課主事 (昭和55年3月31日まで)
 宮本登志夫 ツ (昭和55年4月1日～昭和57年3月31日まで)
 森本 一臣 ツ (昭和57年4月1日～昭和59年3月31日まで)
 今田 一里 ツ (昭和59年4月1日から)
 調査員 松田 正昭 県文化財課技師 (昭和57年3月31日まで)
 ツ ツ 主査 (昭和57年4月1日から)
 富加見泰彦 (社)県文化財研究会技術員 (昭和55年3月31日まで)
 渋谷 高秀 ツ (ツ ツ)
 土井 孝之 ツ (昭和55年4月1日から)
 補助員 藤田 由香 ツ 嘘託 (昭和60年4月1日から)

凡 例

1、本書に使用した遺構の略称は次のとおりである。

S B01～S B14—堅穴住居跡、S B 101～S B 116—壠立柱建物跡、S A—縦列、S D—溝、S K—土壙、S X—土壙墓、P—柱穴

尚、遺構番号は現場調査時のものを使用したため欠番を生じるものもある。

2、本書の遺物の写真図版は、特に縮尺を統一していない。縮尺は必要に応じ写真片隅に明示した。また、各遺物番号は、実測図と写真図版で一致する。

3、各々の遺物番号は、頭に略称をつけて示し、以下のとおりである。

J 1・2・3・…—縄文土器、J S 1・2・3・…—縄文時代石器、B 1・2・3・…—堅穴住居跡出土弥生土器、P 1・2・3・…—柱穴出土弥生土器、K 1・2・3・…—土壙出土弥生土器、Y D 1・2・3・…—弥生時代土製品、1・2・3・…—包含層出土弥生土器、Y S 1・2・3・…—弥生時代石器、Y I 1・2・3・…—弥生時代鉄器、C 1・2・3・…—古墳時代土器・須恵器、C I 1・2—古墳時代鉄器、H 1—平安時代土器、T 1・2・3・…—鎌倉・室町時代土器・瓦器・陶磁器、T I 1・2・3・…—鎌倉・室町時代鉄器、T・E S 1・2—鎌倉～江戸時代石器、E 1・2・3・…—江戸時代遺物として表記する。

4、紙面の度合上、遺物の出土遺構・出土地点・出土層位は全て巻末の「出土遺物一覧」に明記した。

5、縄文土器実測図の拓本は、外面を左に、内面を右に示した。片面の拓本のみの場合は、土器の外面である。

本文目次

序 文	
例 言	
第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
1 発掘調査	1
2 出土遺物整理業務	3
第Ⅱ章 船岡山遺跡とその周辺	4
第1節 自然環境	4
1 地理的環境	4
2 地形からみた遺跡周辺	4
第2節 周辺の遺跡	4
第Ⅲ章 調査の概要	11
第1節 調査の範囲と方法	11
1 調査の範囲	11
2 調査の方法	11
第2節 調査区の層序	12
第3節 検出遺構と出土遺物	12
第Ⅳ章 検出遺構	13
第1節 縄文時代の遺構	13
1 土壙・焼土壙	13
2 集石遺構	14
第2節 弥生時代の遺構	17
1 円形竪穴住居跡S B	17
2 挖立柱建物跡	34
3 方形竪穴住居跡S B	34
4 竪穴住居跡・掘立柱建物跡の柱穴深度	36
5 土壙S K	37
第3節 古墳時代の遺構	48
1 竪穴住居跡S B	48
2 その他	48
第4節 鎌倉～江戸時代の遺構	49
1 掘立柱建物跡S B	49
2 ピット列S A	54
3 土壙墓S X・土壙S K	54
4 溝S D	58

第5節 その他の遺構	58
1 方形周溝遺構	58
2 S K 549	59
第6節 南岸調査区	60
1 調査区の土層	60
2 検出遺構	61
第V章 出土遺物	64
第1節 縄文時代の遺物	64
1 縄文土器	64
2 石器	69
第2節 弥生時代の遺物	72
1 弥生土器	72
2 石器	122
3 その他の遺物	128
第3節 古墳時代の遺物	129
1 土師器	129
2 鉄器	129
3 陶磁器	133
4 銅製品・銅貨	136
第4節 鎌倉・室町時代の遺物	130
1 土師器・瓦器	130
2 須恵質捏ね鉢・椀	133
3 陶磁器	133
4 鉄器	134
第5節 その他の遺物	136
1 S B 10上部落ち込み出土土器	136
2 S K 549出土土器	136
3 銅製品・銅貨	136
4 南岸調査区出土遺物	136
第VI章 まとめ	138
第1節 縄文時代の遺構・遺物	138
1 遺構	138
2 遺物	138
第2節 弥生時代の遺構・遺物	143
1 遺構	143
2 遺物	147
第3節 古墳時代の遺構・遺物	164
1 遺構	164
2 遺物	164
第4節 鎌倉～江戸時代の遺構・遺物	165
1 遺構	165
2 遺物	165
第5節 総括	166
出土遺物一覧表	167

図 版 目 次

巻頭図版	航空写真	⑨ S B10柱穴33断面
P L. 1	① 航空写真	⑩ S B10-c 壁溝遺物出土状況
	② 遺跡遠景	P L. 11 ① S K165 検出状況
	③ 織文時代遺構全景	② S K234 遺物出土状況
P L. 2	① S K725 織文土器出土状況	③ S K241 検出状況
	② 織文時代集石遺構	④ S K634 検出状況
	③ W230 南北トレンチ中央土層	⑤ S K635 検出状況
P L. 3	① 弥生時代第I区全景	P L. 12 ① S K37 検出状況
	② 弥生時代第III-V区全景	② S K196 検出状況
	③ 弥生時代第III-V区全景	③ S K235 検出状況
P L. 4	① 弥生時代第III-V区全景	④ S K554 検出状況
	② S B01-c 検出状況	⑤ S K604 検出状況
	③ S B02検出状況	⑥ S K608 検出状況
P L. 5	① S B03検出状況	P L. 13 ① 掘立柱建物跡検出状況
	② S B04検出状況	② S A2・S A3 検出状況
	③ S B05-a・b 検出状況	③ 落ち込み状地形検出状況
P L. 6	① S B05-c 検出状況	④ W220 南北試掘トレンチ土層
	② S B06-a 検出状況	P L. 14 ① 落ち込み状地形遺物出土状況
	③ S B06-b 検出状況	② 落ち込み状地形鉄製品出土状況
P L. 7	① S B07検出状況	③ 第VII区北斜面遺物出土状況
	② S B08検出状況	④ S B14検出状況
	③ S B09検出状況	⑤ S B14炭化材検出状況
P L. 8	① S B10-b・c 検出状況	P L. 15 ① 西挖堀区全景
	② S B10完掘状況	② 第II区上面全景
	③ S B11検出状況	③ 第III区上面全景
P L. 9	① S B12検出状況	P L. 16 ① 第IV・V区上面全景
	② S B13検出状況	② 第VI区全景
	③ S B01-b 検出状況	③ S B114・S B115・S B116 検出状況
	④ S B01-a 検出状況	P L. 17 ① S B106 検出状況
P L. 10	① S B01柱穴14・6断面	② S B108 検出状況
	② S B04粘土塊出土状況	③ S B112 検出状況
	③ S B05-b 検出状況	④ S B113 検出状況
	④ S B05-b 炉検出状況	⑤ S B109・S B110 検出状況
	⑤ S B05柱穴20断面	⑥ S A5 検出状況
	⑥ S B06-b 炉検出状況	P L. 18 ① 中世土壤基盤検出状況
	⑦ S B10炉堤断面	② S X2 検出状況
	⑧ S B10柱穴8断面	③ S X3 検出状況

④ S X 6 検出状況	P L. 40	住居跡出土土器
⑤ 試掘 S X 1 検出状況	P L. 41	住居跡出土土器
⑥ 試掘 S X 2 検出状況	P L. 42	土壤出土土器
P L. 19 ① S K197・S K198・S K219 検出状況	P L. 43	土壤出土土器
② S K544 検出状況	P L. 44	土壤出土土器
③ S K544 東西土層	P L. 45	土壤出土土器
④ 第Ⅲ区上面西半遺構検出状況	P L. 46	包含層出土土器
P L. 20 ① S K61検出状況	P L. 47	包含層出土土器
② S K81検出状況	P L. 48	包含層出土土器
③ S K81掘り方検出状況	P L. 49	包含層出土土器
④ S K549 検出状況	P L. 50	包含層出土土器
⑤ 方形周溝遺構検出状況	P L. 51	包含層出土土器
⑥ S B10上部落ち込み遺物出土状況	P L. 52	包含層出土土器
P L. 21 ① 土壁状遺構検出状況	P L. 53	包含層出土土器
② 南岸調査区全景	P L. 54	包含層出土土器
③ 南岸調査区北縁土層	P L. 55	包含層出土土器
	P L. 56	包含層出土土器
P L. 22 繩文土器	P L. 57	包含層出土土器
P L. 23 繩文土器	P L. 58	包含層出土土器
P L. 24 繩文土器	P L. 59	包含層出土土器
P L. 25 繩文土器	P L. 60	弥生土器搬入品・装飾文様ほか
P L. 26 繩文時代石器	P L. 61	弥生土器の装飾文様・紡錘車
P L. 27 繩文時代石器・装身具・剝片・用途不明石器	P L. 62	土器の細部
	P L. 63	弥生時代石器
P L. 28 住居跡出土土器	P L. 64	弥生時代ほか石器
P L. 29 住居跡出土土器	P L. 65	弥生時代砥石・台石
P L. 30 住居跡出土土器	P L. 66	弥生時代用途不明石器・石器細部
P L. 31 住居跡出土土器	P L. 67	弥生時代装身具・土製品・鉄器,
P L. 32 住居跡出土土器		古墳時代鉄器・土器
P L. 33 住居跡出土土器	P L. 68	鎌倉・室町時代土師器・瓦器
P L. 34 住居跡出土土器	P L. 69	鎌倉・室町時代瓦器・土鍬・羽釜ほか
P L. 35 住居跡出土土器	P L. 70	鎌倉・室町時代瓦器・土師器・羽釜・
P L. 36 住居跡出土土器		須恵質捏ね鉢・磁器
P L. 37 住居跡出土土器	P L. 71	鎌倉・室町時代鉄器・江戸時代瓦質土器・銅製品・銅貨ほか
P L. 38 住居跡出土土器		
P L. 39 住居跡出土土器		

挿 図 目 次

第1図 船岡山遺跡周辺の地形 5 第2図 船岡山遺跡とその周辺 7

第3図 佐野遺跡住居跡位置図	8	第43図 落ち込み状地形土層図	44
第4図 佐野発寺調査全体図	9	第44図 落ち込み状地形遺物出土位置図	44
第5図 粉河產土神社第2経塚出土遺物実測図	10	第45図 調査区北壁土層実測図	45
第6図 調査の範囲	11	第46図 S B14実測図	48
第7図 基本的層序と範囲	12	第47図 掘立柱建物跡実測図1	50
第8図 S K725 楔文土器出土状態実測図	13	第48図 掘立柱建物跡実測図2	51
第9図 集石遺構実測図	14	第49図 掘立柱建物跡実測図3	52
第10図 楔文時代遺構全体図	15・16	第50図 掘立柱建物跡・ピット列実測図	53
第11図 W 3 南北トレンチ土層図	15・16	第51図 錦倉・室町時代土壤実測図	55
第12図 弥生時代主要遺構位置図	17	第52図 錦倉～江戸時代土壤実測図1	56
第13図 S B01-a・b実測図	18	第53図 錦倉～江戸時代土壤実測図2	57
第14図 S B01変遷図	19	第54図 方形周溝遺構実測図	58
第15図 S B01-c実測図	19	第55図 S K549 実測図	59
第16図 S B02実測図	20	第56図 S B10上部落ち込み遺物出土状況実測図59	
第17図 S B03実測図	21	第57図 南岸調査区全体図	60
第18図 S B04実測図	22	第58図 南岸調査区土層図	61
第19図 S B04粘土塊実測図	23	第59図 南岸調査区土壤実測図	61
第20図 S B05変遷図	23	第60図 楔文土器実測図1	65
第21図 S B05挖掘前痕実測図	24	第61図 楔文土器実測図2	66
第22図 S B05柱穴実測図	24	第62図 楔文土器実測図3	67
第23図 S B05-a実測図	24	第63図 楔文土器実測図4	68
第24図 S B05-a・b実測図	25	第64図 楔文時代石器実測図1	70
第25図 S B06変遷図	26	第65図 楔文時代石器実測図2	71
第26図 S B06-a・b実測図	26	第66図 弥生土器形態各部位の名称	72
第27図 S B07実測図	27	第67図 弥生土器実測図の表現法	73
第28図 S B08実測図	28	第68図 弥生土器の形態分類	75
第29図 S B09実測図	29	第69図 住居跡出土遺物取り上げ概念図	77
第30図 S B10変遷図	30	第70図 S B01出土土器実測図	80
第31図 S B10柱穴実測図	30	第71図 S B01・S B02出土土器実測図	81
第32図 S B10-a完掘状況実測図	31	第72図 S B03出土土器実測図	82
第33図 S B10-b・c遺物出土状況実測図	32	第73図 S B03・S B04出土土器実測図	83
第34図 S B11実測図	33	第74図 S B05出土土器実測図1	84
第35図 掘立柱建物跡実測図	34	第75図 S B05出土土器実測図2	85
第36図 S B12実測図	34	第76図 S B05出土土器実測図3	86
第37図 S B13実測図	35	第77図 S B05出土土器実測図4	87
第38図 弥生時代土壤実測図1	39	第78図 S B06出土土器実測図	88
第39図 弥生時代土壤実測図2	40	第79図 S B07出土土器実測図	89
第40図 弥生時代土壤実測図3	41	第80図 S B08・S B09出土土器実測図	90
第41図 弥生時代土壤実測図4	42	第81図 S B09出土土器実測図	91
第42図 ピット列実測図	43	第82図 S B10出土土器実測図1	92

第83図	S B 10出土土器実測図 2	93	第10図	包含層出土土器実測図 10	119
第84図	S B 10出土土器実測図 3	94	第10図	その他の弥生土器	120
第85図	S B 10の S D 6出土土器実測図 1	95	第10図	弥生土器の婆娘文様	121
第86図	S B 10の S P 6出土土器実測図 2	96	第10図	弥生時代石器実測図 1	123
第87図	S B 11出土土器実測図 1	97	第10図	弥生時代石器実測図 2	124
第88図	S B 11出土土器実測図 2	98	第10図	弥生時代石器実測図 3	125
第89図	S B 12・S B 13・S B 14・pit・掘立柱建 物跡出土土器実測図	99	第10図	弥生時代石器実測図 4	126
第90図	土壤出土土器実測図 1	102	第10図	弥生時代石器実測図 5	127
第91図	土壤出土土器実測図 2	103	第10図	弥生時代袋身具・鉄器実測図	128
第92図	土壤出土土器実測図 3	104	第10図	古墳時代鉄器実測図	129
第93図	土壤出土土器実測図 4	105	第10図	古墳時代土器実測図	129
第94図	土壤出土土器実測図 5	106	第10図	鎌倉・室町時代土器実測図 1	131
第95図	土壤出土土器実測図 6	107	第10図	鎌倉・室町時代土器実測図 2	132
第96図	包含層出土土器実測図 1	110	第10図	陶磁器・土鍊実測図	133
第97図	包含層出土土器実測図 2	111	第10図	鎌倉・室町時代鉄器実測図	135
第98図	包含層出土土器実測図 3	112	第10図	南岸調査区出土遺物実測図	136
第99図	包含層出土土器実測図 4	113	第10図	その他の土器実測図	137
第100図	包含層出土土器実測図 5	114	第10図	銅製品・銅貨	137
第101図	包含層出土土器実測図 6	115	第10図	縄文時代遺物の分布	139・140
第102図	包含層出土土器実測図 7	116	第10図	堅穴住居変遷図	144
第103図	包含層出土土器実測図 8	117	第10図	弥生土器の出土密度	159・160
第104図	包含層出土土器実測図 9	118	第10図	弥生時代石器の分布	159・160
			第10図	鎌倉～江戸時代の主要遺構配置図	164・165

表 目 次

第1表	遺跡地名表	6	第11表	縄文土器 時期別出土地点	141
第2表	縄文時代主要遺構一覧	15・16	第12表	縄文時代遺物ブロック別組成	142
第3表	堅穴住居跡・掘立柱建物跡の柱穴深度	36	第13表	縄文時代 石器組成表	142
第4表	弥生時代主要遺構一覧 1	46	第14表	堅穴住居跡の面積と差	145
第5表	弥生時代主要遺構一覧 2	47	第15表	堅穴住居跡の面積と柱穴	146
第6表	S B 14柱穴深度	48	第16表	弥生土器の器種構成比率 1	148
第7表	鎌倉～江戸時代主要遺構一覧 1	62	第17表	弥生土器の器種構成比率 2	149
第8表	鎌倉～江戸時代主要遺構一覧 2	63	第18表	弥生土器・土師器の器種構成比率	150
第9表	弥生土器分類基準表	74	第19表	弥生時代石器ブロック別組成	158
第10表	縄文土器対照表	141	第20表	弥生時代石器組成表	158

写 真 目 次

写真 1	試掘調査全景	1	写真 3	渋田 1号墳と出土遺物	8
写真 2	佐野遺跡堅穴住居跡	6			

第Ⅰ章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

船岡山遺跡は、昭和25年5月笠田高等学校の生徒が船岡山の開墾地において土器片を探集したことから同年夏に、当時国学院大学に奉職されていた金谷克己氏と笠田高等学校郷土研究部の生徒によって小規模な発掘調査が行なわれ、弥生時代の遺跡であることが明らかにされていた。
〔註〕

この度、建設省近畿地方建設局は、紀の川の治水安全度を向上させるためかつらぎ町渋田の妹山麓の紀の川南岸と中島・船岡山間の狭隘部を開削し、流路拡幅のうえ護岸・築堤工事を改修計画の一環としてもっていたが、掘削の対象とされた船岡山には、弥生時代の遺跡である船岡山遺跡が周知されていたため、昭和53年度に近畿地方建設局和歌山工事事務所と本県教育委員会との間で、その取り扱いについて協議を重ねた。

協議の結果、船岡山遺跡は上述の如く、昭和25年に金谷克己氏等によって小規模な調査が行なわれたのみで、その範囲・内容については不分明であるので昭和54年度において遺跡の範囲・内容等を確認するための調査を実施することとし、その調査結果に基づき次年度以降の取り扱いを再度協議することになった。

試掘調査の結果、ほぼ削平予定地全域に遺物包含層が確認され、一部拡張した西端部において堅穴住居跡、掘立柱建物跡等が検出されたことから、昭和55年度より3ヶ月計画で全面発掘調査を実施する運びとなった。

〔註〕 舟田左門・金谷克己 「紀伊国船岡山遺跡予報」『上代文化』21号 国学院大学考古学会 に当時の状況が詳述されている。

第2節 調査の経過

1、発掘調査（第6図）

発掘調査は、昭和54年度に試掘調査を、昭和55年度から昭和57年度にかけて本調査を継続して実施した。尚調査範囲が広範なため、調査地区を第Ⅰ区から第Ⅶ区に6分割して行なった。

（1）昭和54年度（昭和54年7月14日～昭和55年3月25日）

調査の対象は、建設省近畿地方建設局が削平を予定している船岡山南半部の幅員（南北）約30～40m、延長（東西）約500mの緩傾斜面である。昭和54年度は、遺跡の範囲・内容を確認するため削平予定地内に幅員2m、長さ20m（南北方向の試掘溝は、地勢からこれより短い）の試掘溝を設定し調査を実施した。発掘調査は、遺構を確認した場合はその検出面で掘削を止め実測・写真撮影を行ない、確認されない場合は地表面までの掘り下げを行なった。各試掘溝については、土層断面図・写真を作成した。また、当初予定の試掘調査が見込み



写真1 試掘調査全景

より早期に終了することが確実になったため、昭和55年1月31日付けで事業計画変更の協議を行ない2月中旬より西拡張区約500m²の全面発掘調査を実施した。

(2) 昭和55年度（昭和55年4月9日～昭和56年3月31日）

昨年度に実施した試掘調査の成果を受けて昭和55年度から昭和57年度にかけて全面発掘調査を計画した。昭和55年度は、昭和54年度の試掘調査で確認した竪穴住居跡(SB01)を含め、島城の西半部(第I・II・III区)約5,000m²を対象として弥生時代と鎌倉～江戸時代の二面について調査を実施した。また、島城との関連を把握するため南対岸の水田・畑地となっている平坦地部分の試掘調査を計画していたが、諸事情により試掘途中で次年度に延期する運びとなった。

(3) 昭和56年度（昭和56年4月7日～昭和57年3月30日）

昭和56年度の調査は、島城の中央部(第IV・V区)約4,000m²を対象として、昨年度同様に弥生時代と鎌倉～江戸時代の二面について調査を実施した。また、紀の川を挟んで島の南西対岸に位置する水田・畑地(南岸調査区)約4,000m²を対象として、幅員2mないしは3mの試掘溝による調査を実施し、西半部約1,800m²について全面発掘を必要とすることが明らかとなつた。更に、島城第II区東半から第V区にかけて、幅員0.5m・長さ1mの試掘溝を計60ヶ所に設定し、弥生時代遺構面より掘り下げを行なった結果、縄文時代後期を中心とした土器・石器の遺物包含層と生活面と認められる範囲を推定することができ、協議により次年度に縄文時代を対象とした発掘調査を実施することになった。

(4) 昭和57年度（昭和57年4月6日～昭和58年3月31日）

昭和57年度の調査は、昨年度の調査区に続き島城の東半部(第VI区)約1,400m²の範囲を対象として行なった。当調査区は、昭和54年度の試掘調査で遺構・遺物の検出密度が小さいこと、砂層の堆積であることが明らかにされていたため、E80以東については調査対象外とした。また、縄文時代の遺構・遺物包含層の調査を目的として、昭和55年度・同56年度の調査範囲に重複する第II区東半から第V区の南半部約2,000m²の調査を実施した。南岸調査区については、調査を必要とした西半部の水田約1,800m²の調査を実施した。

発掘調査に伴い地元の方々より多大な御協力を得た。記して感謝したい。

発掘調査参加者

今木善将・岸岡義雄・岸岡政久・木下鶴市・国井光雄・地村茂治・西岡幹夫・竹田正実・三井由信・地村陞・高崎高繁・堀内康夫・山本政春・岸岡孝和・窪田雅秀・若澤尚樹・内田貴夫・青木照幸・平岡利幸・林敏三・土谷晃夫・山本恭久・酒井孝之・松山恭久・栗山享祐・斎藤浩実・地村知三・尾崎好則・守安政弘・堀米一・木村清志・三井一也・井辺吉則・東野安記・松山和弘・神徳政幸・徳山尚孝・山本秀樹・島本和久・井川明高・松克之・山本幸良・木村久次・中谷勝吉・和田政治・大田文彦・森本省一・寒川貴仁・山口智久・窪田賢・妹背恒弘・森本一男・池尻陽一・辻本能之・上野靖弘・岩阪優之・北戸政春・山本佳孝・西川義彦・門重宏・城向良郎・北本敦義・大岡康之・平里一・楠本守・片木昇・成瀬享・山本美代四・八百喜久二・窪田佳代・上田文子・渋田チャ・岡本佳子・南畠豊子・国井順子・岩阪圭子・滝上くに子・高峰スミ子・松本豊美・木村音美・井田君枝・中瀧義子・竹田花子・堀内幸子・北峰文子・大川トミコ・平岡とし子・星川隆子・園田和恵・中沢節子・中阪洋子・田村美佳・三井チズ子・椎葉智恵子・阪口美喜子・藤範美恵・奥田敏美・山田恭子・山本敦子・長岡睦美・中村憲代・堀内美和・大西さだ子・公文スエ子・和田佐代子・片浦佐宜子・松下美智子・日高ユキ子・世儀サチ子・木下タマエ・松岡えみこ・小鳴加奈子・舟木ハルエ・樹岡加代子・平原たか子・額田多都子・前田弥榮子・林弘子（順不同）

2. 出土遺物整理業務

出土遺物については、発掘調査と併行して一部応急的な整理作業を行なっていたが、大半は未整理の状態であったため、本格的な整理作業を行なう必要があった。昭和58年度より3ヶ年計画で整理作業を進め、最終年度に調査報告書を刊行することとなった。

(1) 昭和58年度 (昭和58年4月10日～11月30日)

昭和58年度は、主に出土遺物の洗浄・注記作業を行ない、接合・復元・実測・写真撮影等の各作業についても一部着手した。また、金属製品の保存処理を(財)元興寺文化財研究所に委託して行なった。

(2) 昭和59年度 (昭和59年7月2日～昭和60年1月31日)

昭和59年度は、出土遺物の接合・復元・実測・写真撮影を行ない、これと併行して遺物実測図・遺構図面の製図及び各遺構出土遺物に関する各種データーの抽出を行なった。

(3) 昭和60年度第1次 (昭和60年5月21日～9月30日)

昭和60年度第1次は、出土遺物の復元・実測・写真撮影・製図等の作業を行なないほぼ完了した。また、遺構及び出土遺物に関する各種データーの抽出を行ない、調査報告書刊行の準備を進めた。

(4) 昭和60年度第2次 (昭和60年10月1日～昭和61年2月15日)

昭和60年度第2次は、第1次に引き続いて写真撮影・製図等の作業を行なうとともに、原稿執筆・レイアウト等の報告書作成作業を行ない、調査報告書を刊行した。

出土遺物整理業務参加者 松田智子・中村悦子・佐々木美知・森下枚子(整理補助員)、森本和子・丸谷知子・田津原晴美・佐々木邦子・林知子・伊藤智子・山本さゆり・前田美穂子・松嶋成子・楠本真紀子・岩田恵美子・林美幸・根来令子・北浦優子・仲岡由自・石田廣代・北浦江美・畠中ひとみ・土井龍子・永尾弘子・高岡三千代(整理作業員)

尚、発掘調査及び出土遺物整理に伴い下記の諸氏・諸機関より御教示・御協力を受けた。銘記して謝意を表する。

水野正好・田代克己・菅原正明・奥野義雄・橋本久和・富成哲也・森岡秀人・泉拓良・寺沢薰・萩本勝・高島徹・松村隆文・入江正則・広瀬和雄・山田隆一・松尾信裕・日野宏・酒井龍一・米田文孝・大野左千夫・久貝健・宮脇薰・前田敬彦・植田法彦・中尾憲市・楠宜田佳男・松下勝・米田敏幸・小賀直樹・田中和弘・三宅正浩・蜂屋晴美

茨木市立歴史資料館・奈良県立橿原考古学研究所附属博物館・関西大学文学部考古学研究室・和歌山市郷土資料室・(財)大阪文化財センター・(財)大阪府埋蔵文化財協会・海南海市教育委員会・御坊市遺跡調査会・南部川村教育委員会・南部町教育委員会・かつらぎ町教育委員会・近畿地方建設局和歌山工事々務所・同かつらぎ出張所

第Ⅱ章 船岡山遺跡とその周辺

船岡山遺跡は前章にも示したとおり、和歌山県伊都郡かつらぎ町島に所在し、那賀郡那賀町との境界付近に位置する。遺跡周辺は紀の川水系の中では遺跡の少ない地域のひとつである。

第1節 自然環境

1. 地理的環境

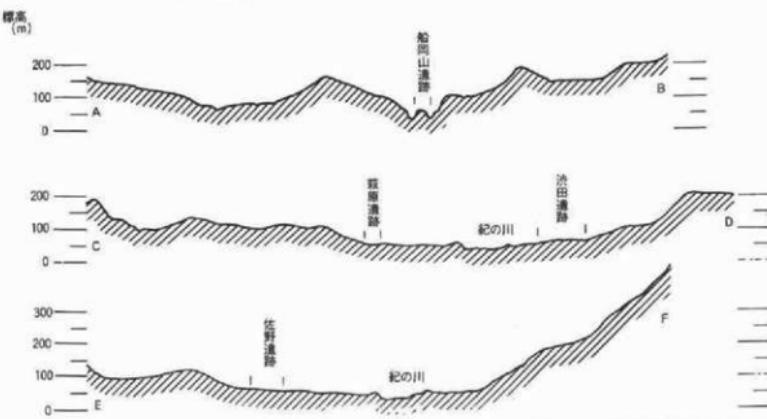
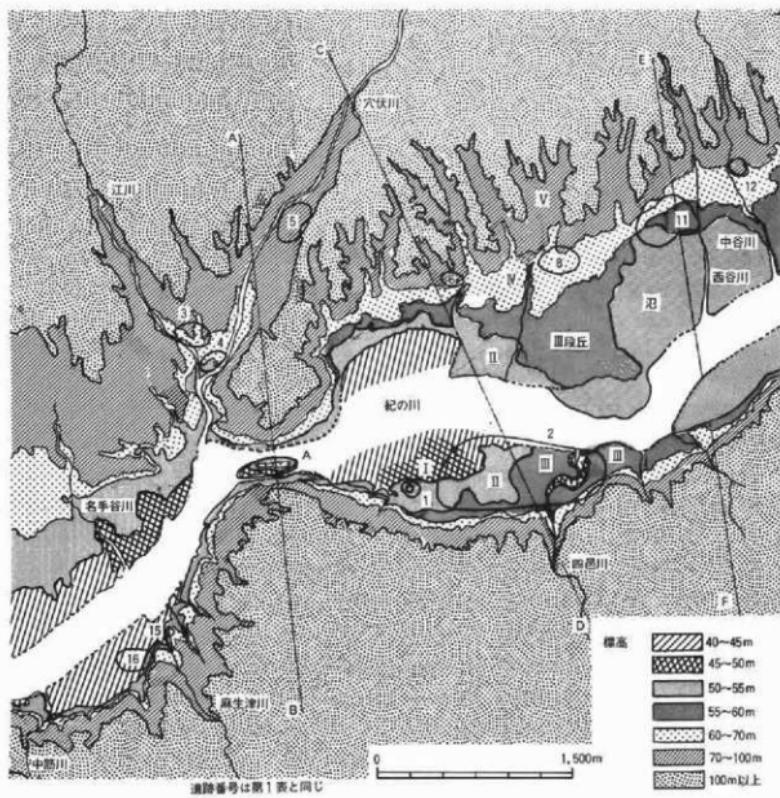
奈良県大台ヶ原山系に源を発する吉野川は、奈良県高見峰から西流する高見川を吉野の国柄で合流して西に方向をかえ、県境を越えるとその名を紀の川と改め小さな蛇行を繰り返しながら西流し紀伊水道へ流れ込む全長136kmの河川である。紀の川は日本の外帯と内帯を分ける中央構造線の地溝に沿って流れ、北岸は砂岩・礫岩・頁岩からなる和泉層群（和泉山脈）、南岸は三波川系に属する綠泥片岩・石墨片岩などを主体とする結晶片岩（竜門山脈）によって構成される。北岸には紀の川と40余の支流によって、奈良県五条市から和歌山県粉河町付近まで約2kmの幅を以て丘陵状高位段丘が典型的に発達する。これに付随して谷口に複合扇状地が形成され中位段丘をなすが、粉河町から下流では複合扇状地の下位段丘が発達し和歌山市六十谷付近に達する。岩出町以西では紀の川によって運び出された土砂が堆積した肥沃な沖積平野を形成する。南岸では部分的に下位段丘、中位段丘を形成するが、北岸に比して狹少である。紀の川流域の遺跡の内、多くは高位段丘の先端部に位置する中位段丘ないしは下位段丘に密集し、沖積平野部では微高地に密集する。このような地形の形成の中で、船岡山遺跡は高位段丘の突出により紀の川の河幅が狭まつたところの中島・船岡山に位置し、その南岸に妹山が、その北岸に背（兄）山が対峙して紀の川下流域と中流域を分断する立地をみせる。同様の立地は、県境に位置する橋本市真土にもみられ、紀の川中流域と上流域を分断する立地をみせる。

船岡山は東西500m・南北120mの後状の島で、南側は緩傾斜の幅30~40mの平坦部が広がり、これに続く南斜面は川原石・片岩の石垣による畠が頂上部付近までつくられているが、東半は岩盤の露頭がみられるなど戦島神社が祀られていることもある。そこから北斜面は雜木林となっている。南側平坦部と頂上部との比高は13~14mあり、また島の四周は断崖状になっている。南岸とは30mしか離れておらず妹山北麓とはかつて地続きであったことを窺わせる。北岸とは紀の川主流を挟んで約80mの距離があり、現在は麓に人家の密集した背山を望むことができる。

2. 地形からみた遺跡周辺（第1図）

船岡山遺跡周辺の地形は、大きく丘陵状高位段丘・中位段丘・下位段丘に分けられるが、地形図の読み取りから段丘を更に細分することができ、同一段丘上に立地する遺跡の相関関係を知る手掛かりを得ることができる。大まかには、第1図の穴伏川より東側ではI~Ⅲ段丘が下位段丘に、IV~V段丘が中位段丘に、100m以上が高位段丘に対応する。穴伏川より西側ではV段丘の一部以上が高位段丘に対応する。その中で船岡山遺跡はI~II段丘で形成された船岡山に位置し、同様の立地には紀の川南岸の渋田遺跡（2）・中遺跡（16）が所在する。紀の川北岸の遺跡はⅢ・Ⅳ段丘ないしV段丘の突端部に位置し、現在それより下位では繩文~弥生時代の遺跡は確認されていない。このことは紀の川の流路変更と各支流の土砂堆積作用の時代を反映するものと考えられる。これらの点から、周辺に位置する弥生時代の遺跡が形成された頃には、船岡山遺跡そのものも段丘（島）上に形成されていたと考えられ、却って立地の特殊性を導き出せるものとなる。

第2節 周辺の遺跡



第1図 船岡山道路周辺の地形

周辺の遺跡の分布は、考古学的な資料の蓄積と比例するが、現状では那賀町と粉河町東部で遺跡が極端に少ない。全体に資料の少ない中で比較的明らかにされてきた歴史の一端を紐解くことにしたい。(第2図・第1表)

先土器時代~縄文時代草創期

当地域の先土器時代の実態は、表面資料も限られ不明瞭である。粉河町荒見中筋遺跡(21)から有舌尖頭器2点が、猪垣遺跡(35)からナイフ形石器2点が出土している。先土器時代の資料は貴志川流域に豊富であるし、猪垣遺跡の立地する低位段丘先端部に位置する打田町堂坂遺跡からもナイフ形石器が出土していることを考えれば、資料の少なさは地形的な側面に起因する結果であるかもしれない。

縄文時代

当地域の縄文時代の遺跡は、多くの未解決の問題を抱え④たまま現在に至っている。紀の川水系では播磨市市脇遺跡を始め、打田町堂坂遺跡など後期初頭から晩期の様相の一端が明らかにされつつあるが、当地域では遺物の出土量も少なく、僅かに浜田遺跡(2)・西風山遺跡(29)を参考にするほかない。地理的に最も近接する浜田遺跡(2)からは後期初頭の中津式に属する深鉢をはじめ多数の縄文土器・

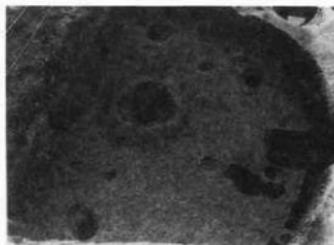


写真2 佐野遺跡竪穴住居跡 第13号住居跡

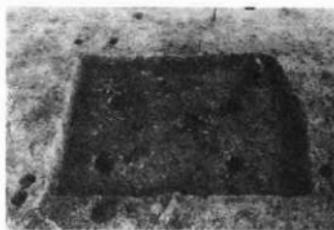
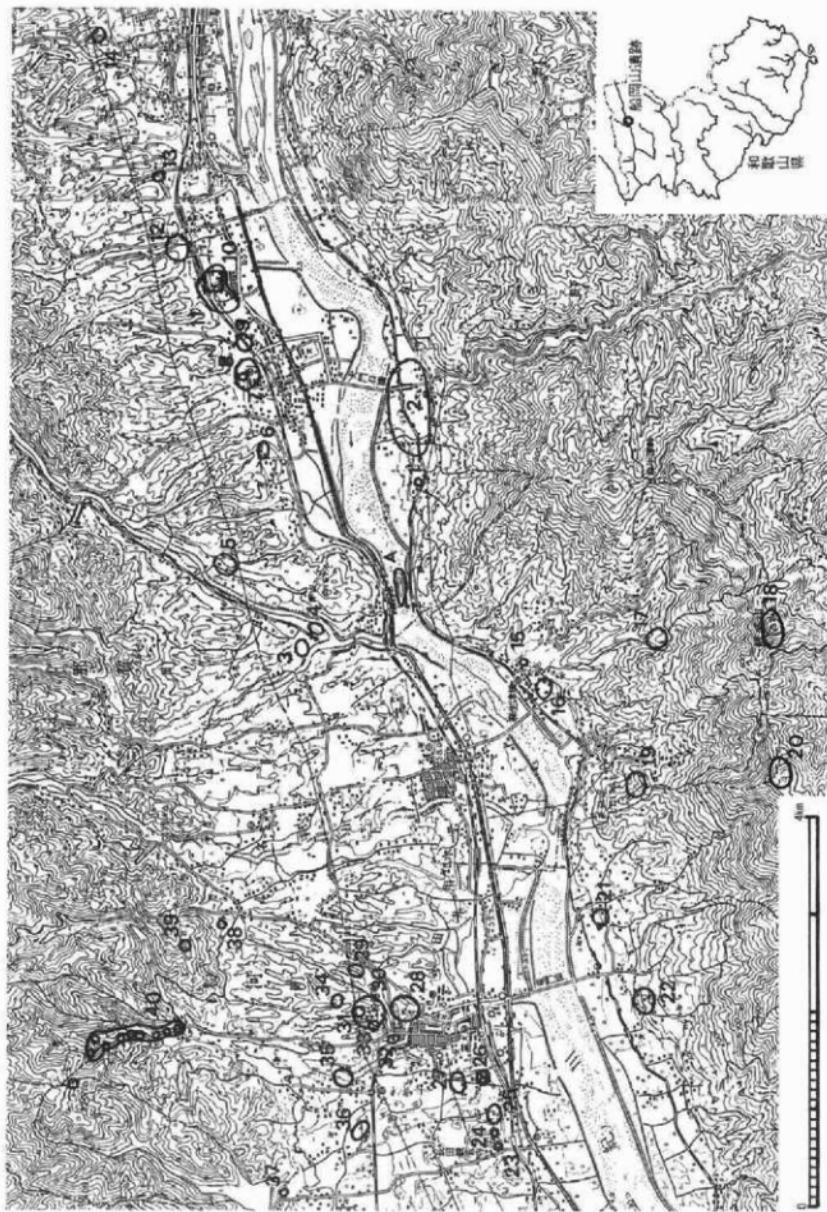


写真2 佐野遺跡竪穴住居跡 第17号住居跡

No.	遺跡地名	遺跡の種類・時代(時期)・備考	No.	遺跡地名	遺跡の種類・時代(時期)・備考
⑥	船岡山遺跡	本報告書にて詳述	21	荒見中筋遺跡	散布地・縄文 ・有舌尖頭器、石器
①	西沖田1号墳	古墳 ・縄文石棺、直刀、人骨	22	荒見麻寺	寺院跡・平安 ・瓦
2	浜田遺跡	散布地・縄文後期 土器	23	尾鼻古墳	古墳・古墳 ・円墳・横穴式石室、直
3	名手下Ⅱ遺跡	散布地・縄文・弥生	24	春日塚古墳	古墳・古墳 ・円墳・横穴式石室
4	名手下Ⅰ遺跡	散布地・縄文・弥生	25	円満寺遺跡	散布地・弥生 ・有舌、石器7、土器1 ・石器1
5	移漕路	散布地・縄文	26	下打田古墳群	古墳・古墳 ・円墳2基、1号墳箱式 石棺(?)
⑥	萩原塚遺跡	散布地・弥生・室町 ・萩原野遺跡	27	上打田遺跡	散布地・縄文 ・石器
7	笠田遺跡	墳墓 ・径2m、高1mの土盛 が2基	28	猪岡山城跡	城跡・近世
8	笠田Ⅰ遺跡	散布地・縄文	29	西風山遺跡	散布地・縄文 ・縄文土器、石器
9	笠田Ⅱ遺跡	散布地・弥生	30	磐河寺	寺院・ ・瓦、土師器、瓦、陶磁
⑩	佐野魔寺	寺院跡・奈良 ・瓦、埴輪、法船寺式御 器配置	31	庄土神社経塚	經塚・平安・縄文 ・3基、方形の盛土、常 清焼造等
⑪	佐野遺跡	墓葬跡・弥生中期 ・古墳前期 ・住居跡円形14、方形6	32	不動谷遺跡	寺院跡・南町一农土 ・井戸、礎石、瓦器
12	大谷遺跡	縄文	33	湯屋谷遺跡	出土地・安土桃山 ・宋錢多數出土
13	大藏莊塚	経塚・室町 ・和鏡、絹笥	34	善郎谷遺跡	散布地・平安(?) ・有孔石製模造品、瓦器
14	妙寺遺跡	・古墳 ・壇棺	35	猪垣遺跡	散布地・縄文後・晚期 ・石器4、サヌカイト片 254
15	中古墳	古墳・古墳 ・円墳	36	北長田遺跡	散布地・縄文 ・石器5、石器3、サヌ カイト片端
16	中遺跡	散布地・縄文・弥生 ・石器	37	桜池莊塚	経塚・江戸 ・径4mの円形の盛土、 石碑
17	植木段城跡	城跡・中世(南北朝) ・平担部を残す	38	弁天山経塚	経塚
18	飯盛城跡	城跡・中世(南北朝) ・三段築城、土	39	觀音山経塚	経塚 ・径2mの盛土
19	茶臼山城跡	城跡・中世(南北朝)	40	中津川経塚	経塚・江戸 ・精円形の盛土、一字一 石絆
20	小無盛城跡	城跡・中世(南北朝) ・不明瞭な平坦部を残す	No.印		一部、発掘調査された遺跡

参考文献「和歌山県遺跡地名表」 和歌山県教育委員会 昭和58年3月

第1表 遺跡地名表



第2図 船岡山遺跡とその周辺

石鐵が採集されている。今回の調査に伴い周辺部の分布調査を行ない同時期の多数の遺物を採集し、Ⅲ段丘西端が渋田遺跡の中核になることを確認した。また、近接する穴伏川・江川の河岸段丘上には名手下Ⅱ遺跡（3）・名手下Ⅰ遺跡（4）・移遺跡（5）が位置し、凹基式石鐵の出土が知られる。粉河町の中位段丘上には、広範囲にわたり猪垣遺跡（35）・北長田遺跡（36）などが散在する。これら後期初頭が集落出現の画期となるのに対し、船岡山遺跡では早期末葉～前期初頭に成立が認められる。

弥生時代

和歌山県下の弥生文化の伝播・発達は各河川を媒介として成立していく。^{註②}紀の川流域においても河口域や島崎^{註④}嶼に弥生前期の集落が出現し、急速な勢いで紀の川を通り岩出町吉田遺跡・堂坂遺跡・橋本市東家遺跡などに定着し始める。紀の川の下流域と上流域の中継地となる当地域では、現在のところ荻原遺跡（6）から出土した中期中葉の壹棺を上限とし顯著な集落遺跡を確認していない。これら実施不明の遺跡群の中にあって、昭和50年^{註⑤}度から11次にわたる調査が行なわれ集落の内容が鮮明化されてきた佐野遺跡（11）がある。佐野遺跡（11）では後期の竪穴住居跡・環濠・段丘地形の落ち等を検出したことによって、船岡山遺跡との密接な関連性を指摘できるようになった。佐野遺跡で検出された円形竪穴住居跡の大半は、中央部分の炉に炉堤をもち、住居跡の規模・重複関係において船岡山遺跡のそれと酷似する。また、佐野遺跡が後期から庄内式併行期に継続する集落であることは、船岡山遺跡を含め周辺部の遺跡の動向を探る上で重要な位置を占めている。^{註⑥}紀の川南岸に位置する渋田遺跡（2）・中遺跡（16）からも遺物の出土が認められるが、当地域の弥生時代全期間を系統立てて考えられるのは今後の資料の増加を待たなければならない。

古墳時代

紀の川中流域における古墳時代遺跡、中でも集落遺跡は明確ではなく、下流域の岩出町吉田遺跡と上流域に近い橋本市脇遺跡・東家遺跡で前期ないし中期の集落が検出されているが、その間の当地域は不明である。集落遺跡の在り方同様に古墳についても不明な点が多いが、高位段丘の先端部に位置する妙寺遺跡（14）から布留式併行期の壹棺墓1基が検出された。また、紀の川南岸のⅡ段丘では渋田1号墳（1）が調査され組合式箱式石棺が検出された。棺内からは歯・大腿骨が出土し長さ約60cmの直刀が副葬されていた。周辺部の踏査により、5世紀から6世紀の土器を探



第3図 佐野遺跡住居跡位置図

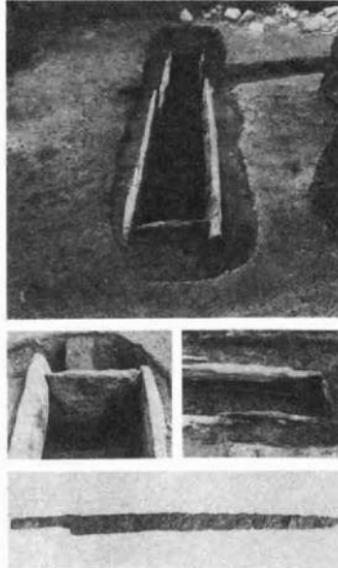


写真3 渋田1号墳と出土遺物

集していることを考え合せれば、1号墳以外の古墳の存在を示唆するものである。粉河町の下位段丘先端部に位置する尾鼻古墳(23)・春日塚古墳(24)・下打田古墳群(26)などの散在する6世紀代の古墳の在り方は、打田町八幡塚・三昧塚古墳群など、橋本市八幡宮古墳・岡山古墳などの在り方に類似する。紀の川河口域・下流域に密集する古墳群の性格と異なり、古墳築造に際し中枢権力の支配権が当地域において規制の強いものであった結果にほかなりない。そのほか、船岡山遺跡の南西約1.5kmに中古墳(15)の存在が伝えられている。周辺地域にこれらの古墳を築造した人々が、居住の拠点をどこに設いたか未だに不明である。

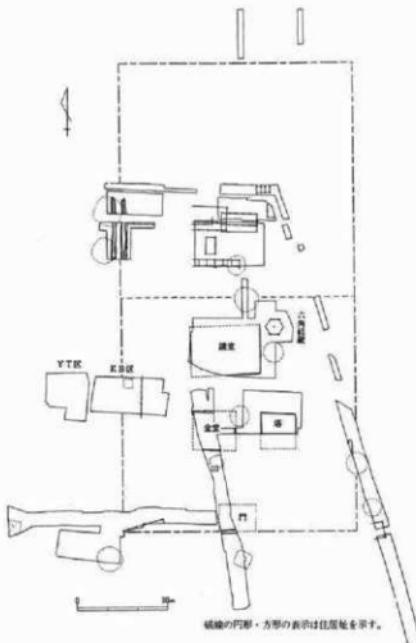
奈良時代

紀の川は禍文・弥生時代から既に文化伝播の交通路としての役割を荷なってきたが、古墳時代になると陸路(紀の川筋)が大和への重要な交通路として発達したことは紀の川流域の道路・古墳が示すところである。奈良時代になるといわゆる南海道筋にあたる紀の川北岸にあって、集落遺跡・寺院跡が顕著になる。集落遺跡^{註3}は岩出町吉田遺跡・岡田遺跡・西国分II遺跡などの大規模な掘立柱建物跡が示すように、「駅家」的な性格を、また「官衙」的な性格を考えられるものである。当地域ではかつらぎ町萩原に位置する萩原遺跡(6)が、弘仁3年(812年)以前の南海道萩原駅家跡推定地として昭和53年度に調査が行なわれたが、前述の壹岐墓と室町時代頃の掘立柱建物跡等を検出しただけであった。寺院跡は紀の川筋に多く11寺を数え、当地域では「日本靈異記」にみえる「伊刀の郡桑原の狹屋寺」との関連を推定させる寺院跡・佐野庵寺(10)が所在する。佐野庵寺(10)は金堂・塔・講堂跡の確認により法起寺式の伽藍配置をとることが判明したものの、中門および回廊については不明瞭である。そのほか、六角経蔵・木製灯籠修理設備・掘立柱建物跡などが検出されている。佐野庵寺(10)は出土瓦・塑像仏・塔仏などからみて、極めて中央色の濃い寺院で、旧伊都郡内でもっとも重要な寺院の一つに数えられる。

^{註4} 墓蓋については三彩の藏骨器で知られる高野口町名古曾塚墓と、須恵器の藏骨器が出土したかつらぎ町妙寺塚墓があり、共に高位段丘先端部の東斜面中腹に埋葬されていた。当地域の墓蓋も同様に佐野庵寺(10)を見下ろす高位段丘の先端部に位置するものと考えられるが、未発見である。

平安時代

律令制の崩壊にともない土地制度が大きく変革し、私的所有地が増大する。その様は当地域一部が神護寺領・伴田庄の庄域として、伴田庄絵図(京都神護寺藏)と紀伊國伴田庄絵図(地元萩原に鎮座する宝来山神社藏)から明らかなることである。文献からみれば当地域は8庄の庄園から成る。この時期、大規模な土地開発が物語るかのように考古学的資料が見い出せない。おそらく当時の集落の発展の痕跡の上に、中・近世もしくは現在



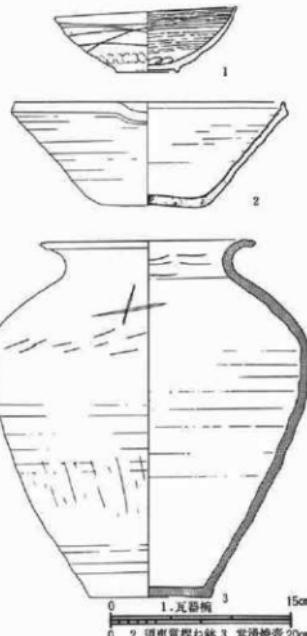
第4図 佐野庵寺調査全体図

の家並みが発掘するためと考えられる。但し、佐野庵寺（10）の周辺には顯著でないにしろ平安時代の遺構・遺物が確認されている。

鎌倉・室町時代

伊都郡内における荘園の成立と展開は、高野山の開創・所領獲得と不可分の関係にある。後にこの地は官省符庄園となり、平安時代末期には志富田庄が高野山大法院領となっている。また、現那賀郡内に中世までに成立していた荘園は、大きく根来寺領と高野山領に分れ、南北朝時代から室町時代にかけて次第に高野山領が増大していく。伊都郡・那賀郡内の荘園の動きが活発になる中で、中世村落も確実な発展を遂げる。その現れとして萩原遺跡（6）・笠田Ⅰ遺跡（8）・佐野庵寺（10）・粉河寺（30）・不動谷遺跡（32）・薬師谷遺跡（34）・かつらぎ町中飯降Ⅰ・Ⅱ遺跡などから、土師器・瓦器・陶磁器等が出土している。また、葬制の変化に伴い平安時代末期以後、粉河寺を中心として粉河産土神社経塚群（31）が、かつらぎ町では大蔵経塚（31）^{註③}がつくられるようになる。経塚の外容器にみられるように、紀の川筋にも常滑・東播・備前・中国製陶磁器が商品流通の波にのって頻繁に入ってくる。この時期、南海道を繼承する高野街道に沿って当地域も発展し、近世へと移り変わっていくのである。

このように当地域での考古資料は局部的なものであって、歴史の流れを構成するには未だに不明確な部分が多いようである。



第5図 粉河産土神社第2経塚出土遺物実測図

（註）

- 註① 小池洋一 「紀北地方の諸街道」 「歴史の道調査報告書」（Ⅲ）和歌山県教育委員会 昭和55年3月
註② 中野栄治 「自然」 「那賀町史」 和歌山県那賀郡那賀町 議会 昭和56年8月
註③ 松下 彰 「紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 昭和53年3月
註④ 横堀正信・岩鶴敏治 「考古」 「貴志川町史」 第三巻史料編2 貴志川町史編集委員会 昭和56年3月
註⑤ 横堀正信はか 「考古資料編」 「打田町史」 第一巻史料編I 打田町史編纂委員会 昭和56年7月
註⑥ 吉田宣夫 「市協遺跡発掘調査概報」 和歌山県教育委員会 昭和49年3月
註⑦ 大岡康之ほか 「市協遺跡ほか発掘調査概報」 橋本市教育委員会 昭和59年3月
註⑧ 武内雅人 「岡田遺跡発掘調査概報Ⅲ」 岩出町教育委員会 昭和57年3月
註⑨ 渋谷高秀 「和歌山県・紀北」 「弥生前期地域論」 帝塚山考古学研究所 弊生文化研究部会 1984年
註⑩ 松田正昭 「萩原遺跡発掘調査概報」 かつらぎ町教育委員会 昭和54年3月
註⑪ 昭和51年度以後、和歌山県教育委員会もしくはかつらぎ町教育委員会により11次の調査が実施され、豊穴住居跡17棟（円形14棟、隅丸方形2棟、方形1棟）、古墳時代の豊穴住居跡3棟が検出されている。
註⑫ 林 博道・辻林 浩 「吉田遺跡第2次調査概報」 和歌山県教育委員会文化財課 昭和46年3月
註⑬ 昭和54年度に調査が実施された。写真は担当者の高見加見泰氏の了解を得て掲載させて頂いた。
註⑭ 5世紀後半から6世紀後半にかけて、10基前後の古墳で下坂坂古墳群を形成していたと考えられる。
註⑮ 5世紀から7世紀にかけて、8基前後の古墳で隅田古墳群を形成していたと考えられる。
註⑯ 武内雅人 「岡田・西園分Ⅱ遺跡発掘調査概報」 岩出町教育委員会 昭和56年3月
註⑰ 佐野庵寺は佐野遺跡と重複する遺跡であり、現在、回廊と考えられる遺構は未検出である。
註⑱ 「三彩青骨壺」「高野口町誌」上巻 高野口町誌編さん委員会 昭和43年10月
註⑲ 「妙寺経塚」「和歌山県史 考古資料」 和歌山県史編さん委員会 昭和58年2月
註⑳ 萩本勝 「中世村落の成立」 「岡田八幡宮周辺遺跡群調査概報」 海南市教育委員会 昭和56年3月
註㉑ 「粉河産土神社経塚」「和歌山県史 考古資料」 和歌山県 昭和58年2月。※第5図は、辻林浩・松下彰 「紀の川用水建設事業に伴う発掘調査報告書Ⅱ」 和歌山県教育委員会 昭和55年3月より抜粋。
註㉒ 「大蔵経塚」「和歌山県史 考古資料」 和歌山県 昭和58年2月

第Ⅲ章 調査の概要

第1節 調査の範囲と方法

1. 調査の範囲

調査の対象は、削平を予定している船岡山南半部の幅員（南北）約30~40m、延長（東西）約500mの緩斜面にあたる約20,000m²と、紀の川を挟んで島の南西側に位置する水田、畠地約4,000m²である。

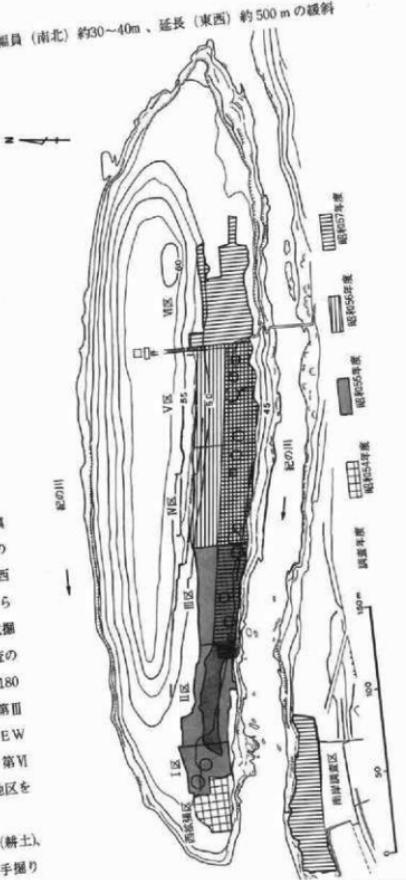
発掘調査は、各々の試掘調査の結果を受けて、島域では弥生時代から古墳時代と鎌倉から江戸時代の遺物包含層・造構についてE 80以東を調査対象外として幅員約25~40m、延長約380mにわたる各々約11,000m²の二面を対象とした。また、桃文時代の遺物包含層・造構についても、前者と重複する範囲で、幅員約10m、延長約200mにわたる約2,000m²を対象としている。

南岸調査区では、試掘調査の対象4,000m²の内約2,200m²については、耕作土を除去した状態で片岩の風化の著しい地山となり無遺物であつたため調査対象外とし、調査の必要が認められた西半部約1,800m²について行なった。

2. 調査の方法

調査地区の地区割は、基準線を島の高所に鎮座する嚴島神社に到る階段の側縁に求め、この延長線上に原点を設けた。原点より東はE、西はW、南はS、北はNを冠し、これに原点から距離で地点を表示した。また、地区名は試掘の調査のW 260ライン以西を西拡張区、本調査のW 270~W 240ラインを第I区、W 240~W 180ラインを第II区、W 180~W 120ラインを第III区、W 120~W 60ラインを第IV区、W 60~E W 00ラインを第V区、E W 00~E 80ラインを第VI区とし、嚴島神社参道の東側斜面の調査地区を第VII区北斜面地区と呼称した。

調査の方法上、全区画において第1層（耕土）、第2層を重機により機械掘削し、以下は手掘りないしは期間等の制約により必要な場合にのみ機械掘削を行なった。

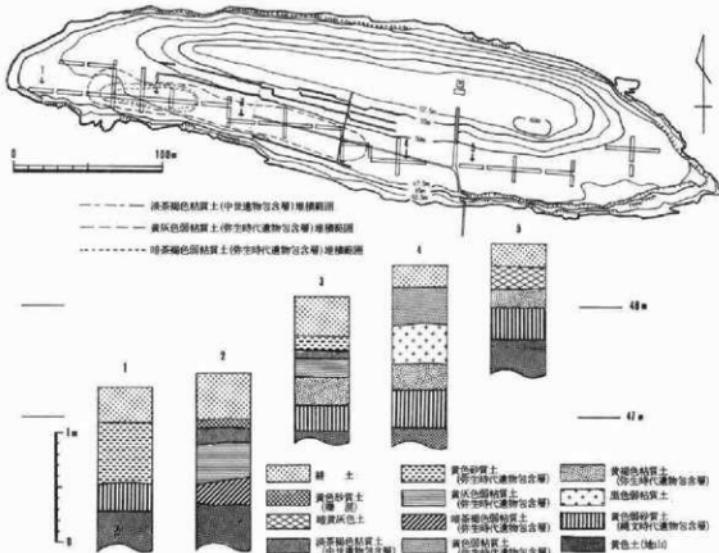


第6図 調査の範囲

第2節 調査地区の層序

調査地区は東西に約380mと長く、それに比して南北約25~40mと狭く続く。標高は45m~50mを測る。一見平坦に見えるが、北から南へ緩やかな傾斜をもっている。現在、船岡山は島となっているが、地形からみて往時南岸妹山麓とは地続きであった可能性が大きく、調査対象地が谷状になっていたと考えられる。

層序は、地点により異なり現在の地表から地表面まで3~6層に分けることができ、特に東端部では紀の川が運んできた砂層が顕著となる。基本的層序は、耕土・間層（1層）・中世遺物包含層（2層）・弥生~古墳時代遺物包含層（1層）、弥生時代遺物包含層（3層）、縄文時代遺物包含層（1層）となり、第Ⅱ区落ち込み状地形の堆積土が最も良好な状況を示している。



第7図 基本的層序と範囲

第3節 検出遺構と出土遺物

調査の結果、縄文時代早期から晩期、弥生時代後期、古墳時代前期、鎌倉時代後半から江戸時代の四期に大別できる遺構・遺物を確認している。

検出遺構として、縄文時代の土壙10基、焼土壙17基、集石遺構1ヶ所、弥生時代の円形竪穴住居跡11棟、方形竪穴住居跡2棟、焼土壙、土壤墓、土壤群、溝状遺構、ピット群、ピット列、落ち込み状地形など、古墳時代の方形竪穴住居跡1棟、鎌倉時代から江戸時代の掘立柱建物跡16棟、土塹墓、土塹群、ピット列などがある。

出土遺物として、縄文土器、弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器、瓦器、須恵賃捏ね鉢、青磁、白磁、土鍬など、石器では石槍、石鎧、スクレイパー、叩石、磨石、石皿、凹み石、台石、砥石、投弾など、装身具では勾玉、管玉など、鉄器では鉄斧、鎌、鉄鎌、刀子状鉄器、鉄釘、楔などがある。これらの検出遺構・出土遺物より四期に大別される生活領域の一端を推し量ることが可能となった。

第IV章 検出遺構

第1節 繩文時代の遺構

縄文時代の遺物包含層は、第II区の東端部から第V区にかけて延長約200m・幅員約10mに広がる黄色弱粘質土・黄色弱砂質土・暗黄色砂質土などで確認した。包含層は、期間的な制約もあって遺物密度の小さい上半部を機械掘削により除去し、以下、各遺物の出土地点を記録しつつ掘り下げを行なった。遺物は主に後期前半の縄文土器を中心で、早期末から後期前葉にかけての遺物群であり、大半が包含層からの出土である。特に、第II区から第III区にかけてのW 192～W 170においては、暗黄色砂質土から多量のサヌカイト剝片と共に石錐（JS 1・JS 5）・凹み石（JS 24・JS 26）が出土し、最下層の岩盤直上の淡灰色砂層より粗製深鉢（J 87）1個体分が出土している。当範囲は弥生時代の落ち込み状地形に即した南縁部にあたり、縄文時代から岩盤そのものが凹み地形を成していることの検証となった。また、第V区東半の南縁部に延長約40m・幅約5mの範囲に広がる淡黄灰砂質土（一部機械掘削により削平）からも、まとまって縄文土器が出土している。他に遺物の集中する範囲として、W 140～W 120では縄文土器・石器・サヌカイト剝片が出土している。また、W 100～W 70及びW 280～W 260にかけて集中する傾向が見られるが、総体的にみると散布密度は小さい。

1. 土壌・焼土壌

土壌は、明確な掘り方をもたない浅い凹み状のものが大半で、W 30～W 20にかけて集中して10基検出した。土壌の規模・形態は、小型の楕円形を呈するSK 721・723・726～729、大型の楕円形を呈するSK 724・725、大型の不整形を呈するSK 722・730があり、各々、覆土は地山土（黄色弱粘質土）に類似し、縄文土器・石器が若干出土した。遺物は、SK 722-J 75、SK 723-J 93、SK 726-J 33、SK 728-J 4・J 30、SK 730-J 23が各々出土した。

S K 725 (第8図・P.L. 2①)

土壌群のほぼ中央に位置し、東西

2.83m・南北1.4m、

深さ0.2mを測る

楕円形の土壌であ

る。土壌の覆土は

極めて地山土に似

るが若干砂質であ

る。遺物は、深鉢J

44・J 47・J 58・J 64

が出土、特にJ 58

は底部を欠くが一

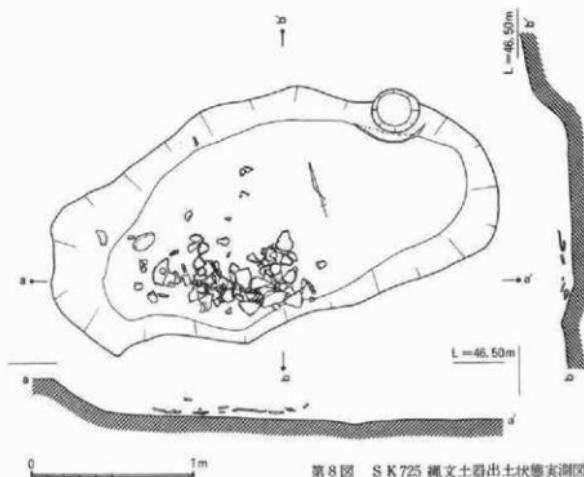
個体が押しつぶさ

れた状態で出土し

ている。中期初頭

の中津式を含む一

群の土器である。



第8図 S K 725 縄文土器出土状況実測図

土壌群の遺物からみて、土壌群の北半に早期末～中期の物が、南半に後期初頭の物が集中している。

焼土壌

焼土壌は、土壌にも況して明確な掘り方をもたず浅い凹み状を呈し、砂質っぽい赤桃色の焼土のみを含み、炭化材・炭粒は全く含まない。規模・形態は、土壌に類似し、小型の楕円形を呈する焼土B～G、大型の楕円形を呈する焼土P、大型の不整形を呈する焼土H～Jがあり、縄文土器・石器などが混入したと思われる状況で出土した。遺物は、焼土Nから石器JS 2が出土した。

焼土P

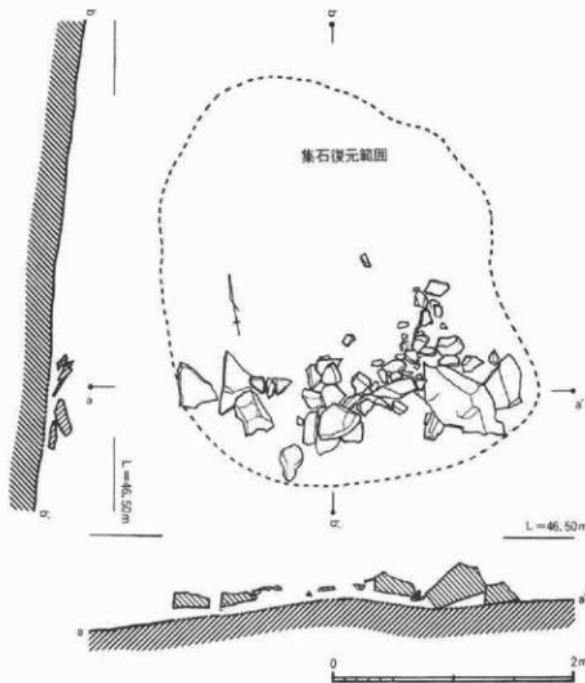
N 4 W136に位置し、東西2.7m、南北1.0m、深さ0.1mを測る最大規模の焼土壌である。検出レベルは、標高45.90mを測る。覆土は、焼土のみがまんべんなく堆積し、かなりバサつく。遺物は、サヌカイト側片が2片ほど出土したのみである。焼土P付近からは、J 10・J 18・J 19・J 31・J 41・J 45・J 52・J 55・J 66などの縄文土器が出土しているが、時期決定し難い。

2. 集石遺構 (第9図、P.L. 2②)

S 5 W67地点に位置し、北東から南西方向へ下降する緩傾斜面上にある。集石の復原範囲は、東西約3m、南北約3.5m（北半は機械排土の工事により消失している）にわたり、楕円形を呈していたようである。集石は、大きな石で長さ90cm・幅50cmを測り、比較的大きな石を外回りに配し、10cm大の円礫から40cm大の片岩を多用している。全て地山を掘り込んだ痕跡がなく、乱雑な状況を呈している。集石遺構に伴う遺物は皆無である。

尚、N S 00～N 5・W 65～W 80の範囲において10cm大の円礫を中心とした散逸的な広がりを検出したが、雖然としたもので、集石・配石の何れにも該当しないものと考えられる。

縄文時代の遺構検出に伴い、W 3 ライン・W 80 ライン・W 230 ラインにトレンチを設定し、岩盤まで掘り下げ土層の観察を行った。



第9図 集石遺構実測図

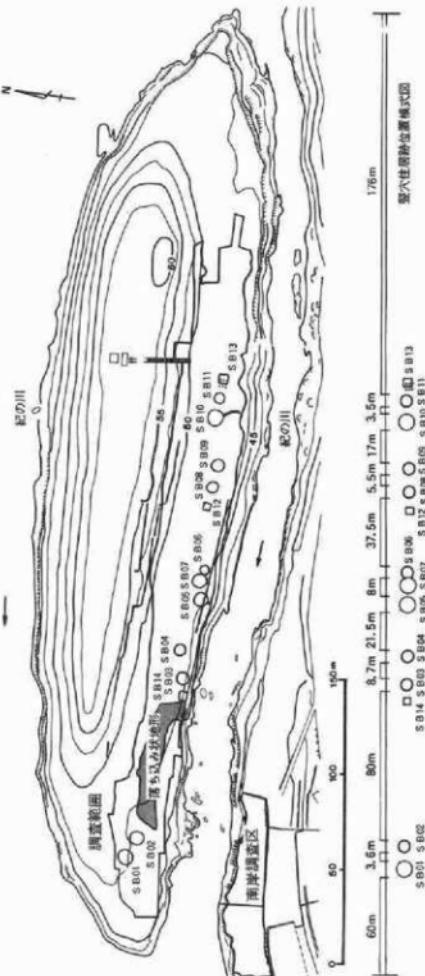
第2節 弥生時代の遺構

弥生時代の遺構面は、一部で二面で確認することができ、特に第IV区・V区で顕著になる。基本的層序にみる黄褐色粘質土上面での検出遺構と、黄色弱砂質土（縄文時代遺物包含層）上面での検出遺構とに区分できる。黄褐色粘質土上面の遺構は、小片の土器を含む土壤を中心とするに対し、黄色弱砂質土上面の遺構は堅穴住居跡・掘立柱建物跡・焼土壙などの一連の生活遺構を示す。本来の弥生時代後期の生活面を示す遺構は後者にある。また、調査区が緩傾斜面であって広範にわたるために土砂の堆積が一律ではなく、良好な遺物包含層が認められる。特に、調査区西半に位置する落ち込み状地形では遺物量も豊富で良好な遺物包含層となる。

1. 円形堅穴住居跡 SB

円形堅穴住居跡は、計11棟検出した。各々SB 01～SB 11と呼称する。調査区の西端から各住居跡の位置関係・概要を列記すると以下通りである（第12図）。

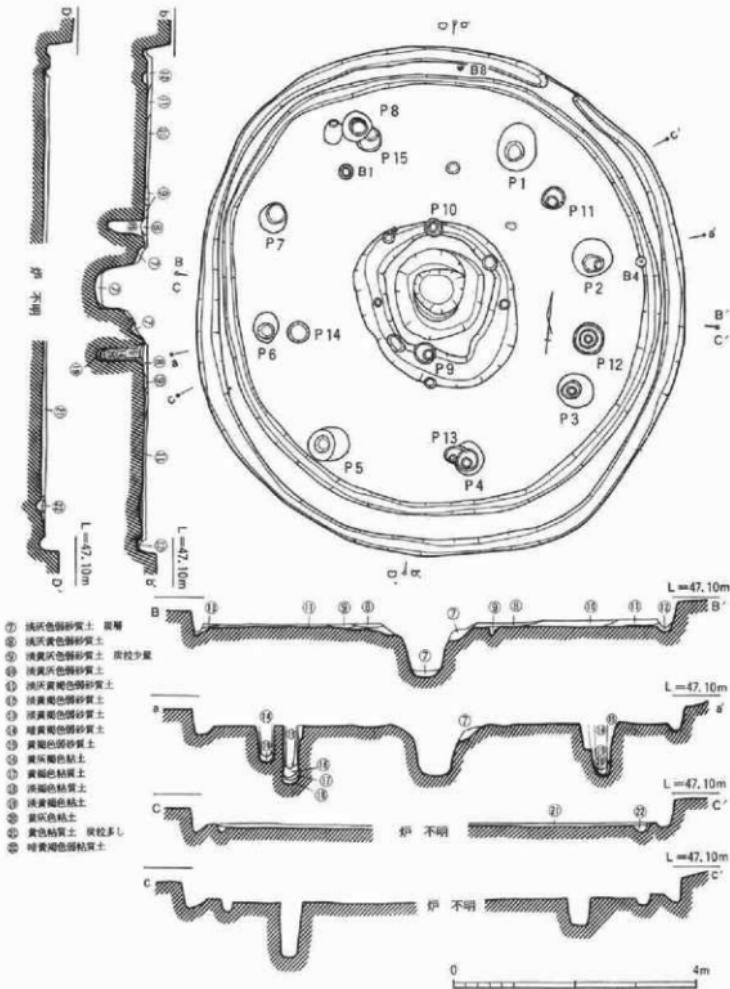
SB 01は調査区の西端に位置し、直径約8.2m（最終形以下同じ）で拡張・改築と二度の建替えが認められる住居跡である。SB 02はSB 01の約3.6m南東に位置し、直径約7.2mで一部後世の削平の認められる住居跡である。SB 03は落ち込み状地形の東側に位置し直径6.8mの住居跡である。SB 02から約80m離れる。SB 04はSB 03の約8.7m東に位置し、直径約6.0mで後出する土壙SK 239～SK 241に切られている住居跡である。SB 05はSB 04の約21.5m東南東に位置し、直径約8.0mで拡張・改築が認められる住居跡である。SB 06はSB 05の約8m東に位置し、長径6.2m・短径5.9mで拡張が認められる住居跡である。SB 07はSB 06の北西隅を切る直径約7.7mの住居跡である。SB 08はSB 06の約37.5m東に位置し、長径5.8m・短径5.5mの住居跡である。SB 09はSB 08の約5.5m東に位置し、長径6.8m・短径6.5mの住居跡である。SB 10はSB 09の約17m東に位置し、長径9.1m・短径8.5mで拡張・改築の認められる最大規模の住居跡である。SB 11はSB 10の約3.5m東に位置し、長径6.8m・短径6.2mの住居跡である。



第12図 弥生時代主要遺構位置図

(1) S B 01 (第13図～第15図・PL. 4 ②・PL. 9 ③④・PL. 10 ①)

S B 01は、同心円拡張と上層構造の改築が認められる住居跡で、各々原形S B 01-a、拡張S B 01-b、改築S B 01-cと呼ぶ。原形S B 01-aの規模は、長径7.4m・短径7.1mを測る。壁高は、拡張後の住居跡S B 01-b掘削のため定かでないが、S B 01-bの床面より約4～8cm低い床面となる。壁際に沿って幅約20cm・深さ5～10cmの壁溝が廻らされる。炉の構造は、S B 01-bと同様の状態を示すものと考えられる。主柱穴は5本 (P 11～P 15) で、各々直径30～45cm・深さ30～80cmの掘り方をもち、直徑15～22cm・深さ30～60cmの柱当りをもつ。主柱穴の最下部には、全て淡黄褐色粘土ないし黄灰色粘土が認められる。



第13図 S B 01-a・b・c実測図

S B01-bの規模は、長径8.16m・短径7.92mを測る。壁高は、北側で40cm、南側で30cmを測り、壁際に沿って幅15~22cm・深さ約10cmの壁溝が廻らされるが、北東側において約40cmの間一部存在しない。床面の中央部分に、直径約1.6m・深さ約0.8mの二段掘りの炉が設けられ、周囲には幅約20cm・高さ5cmの炉堤が廻らされる。炉堤の外周に幅約40~60cm・深さ15cmの凹みが廻り、焼土・炭粒混入土で堅く締まった状態であった。主柱穴は、8本(P1~P8)で、各々直径30~60cm・深さ60~102cmの掘り方をもち、直径20cm内外・深さ50~97cmの柱当りをもつ。また、炉の南北両際に直径約30cm・深さ約60cm・柱当り直径16cmの柱穴(P9・P10)があり、棟持柱の構造をもつと考えられる。遺物は、床面から広口壺口頭部(B1)・高杯(B4)が倒立した状態で出土した。床面は、柱穴の内周りが比較的堅く踏み締められていた。

S B01-cの規模は、S B01-bと変化なく、僅かに主柱穴の位置が変わると、炉堤と外周の凹みがなくなる。炉内には、黄色土が充填され深さ50cmとなり、厚さ20cmの炭層(第5層)が堆積する。床面は、S B01-bの床面に約5~10cmの貼り床を施し、壁際に沿って幅15~20cm・深さ約15cmの壁溝が廻らされる。主柱穴は、8本(P1~P8)で、最下部に粘土を再充填し、柱当りの深さ36~88cmを測る。遺物は、壁溝から脚台付細頭壺(B10)・把手付鉢(B12)が、床面から楕底部(B9)・石

鐵(YS4)

が、炉肩東

側から高杯

(B5)が

出土した。

また、柱穴

P5柱当り

下部から高

杯脚台部が

出土した。

出土土器点

数は、上部

包含層-289

点(点数は

集計方法A

類による)、

覆土-391

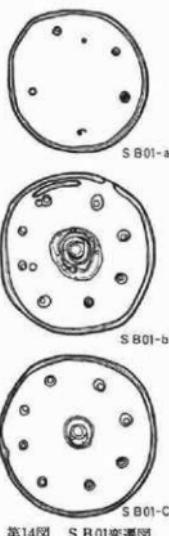
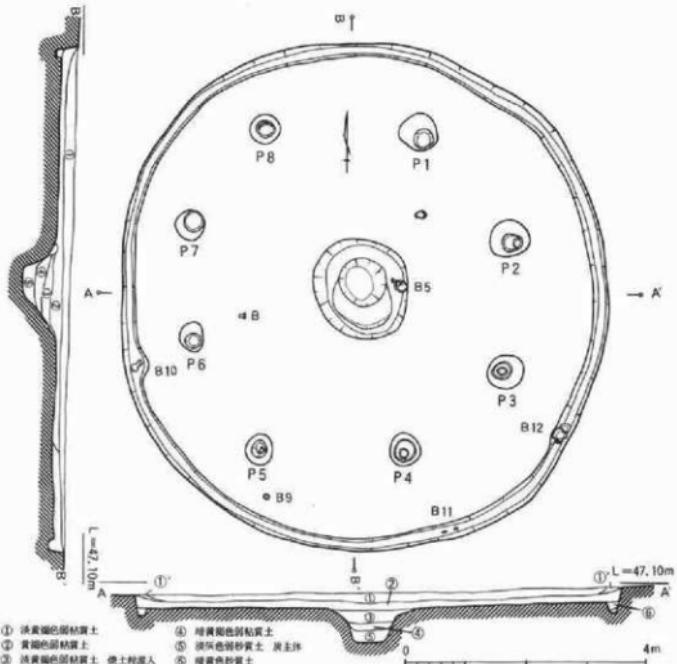
点、床面直

上(貼り床

を含む)-

165点を数

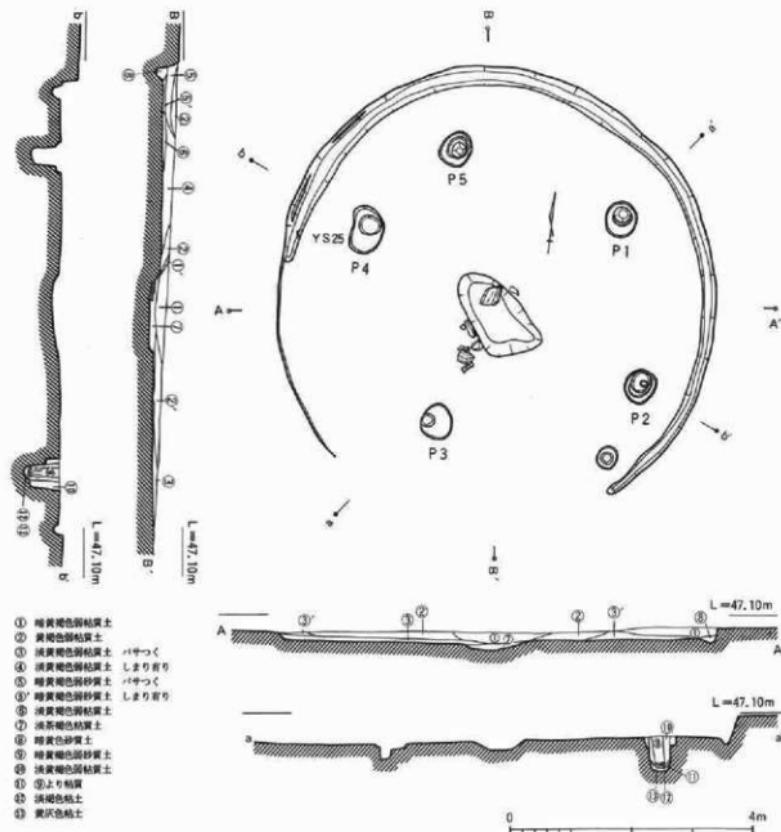
える。



第14図 S B01変遷図

(2) SB 02 (第16図・P L. 4③)

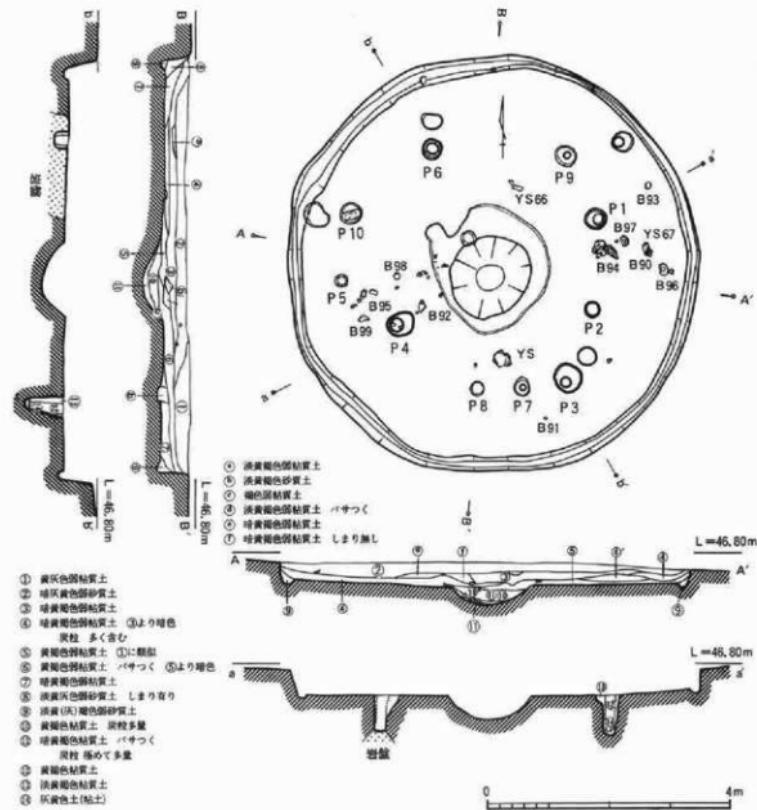
SB 02の規模は、直径 7.2m を測る。壁高は北側で約30cm、南側は後世の削平のため定かでない。壁際に沿って幅約16~22cmの壁溝が廻らされるが、南側から南西側にかけて約36°の間は存在しない。床面の中央部分に、長軸 1.6m・短軸 0.9m・深さ0.18m の浅い炉が設けられ、炉内北肩から板石状の台石が出土している。また、炉の南西側で、30cm大の片岩が数点集中して置かれた状態であった。炉内には、他の住居跡で認められるような炭層がなく、覆土は比較的バサつく感が強い。主柱穴は5本 (P 1~P 5) で、各々直径60~80cm・深さ約25~70cmの掘り方をもち、直径15~36cmの柱当りをもつ。主柱穴 P 1・P 2・P 5 の最下部には淡灰褐色粘土ないしは黄灰色粘土が認められる。主柱穴 P 3 は非常に不安定である。遺物は、壁溝から磨石 a 類 (YS 25), P 5 掘り方から石鏡 (YS 2) が出土している。覆土は、基本的に4層で、出土土器点数は第1~第4層で542点と極端に多く、床面上からの完形品がなかった。床面は、全体に繊りがなく北から南へ向って緩傾斜となる。



第16図 SB 02実測図

(3) S B 03 (第17図・PL. 5①)

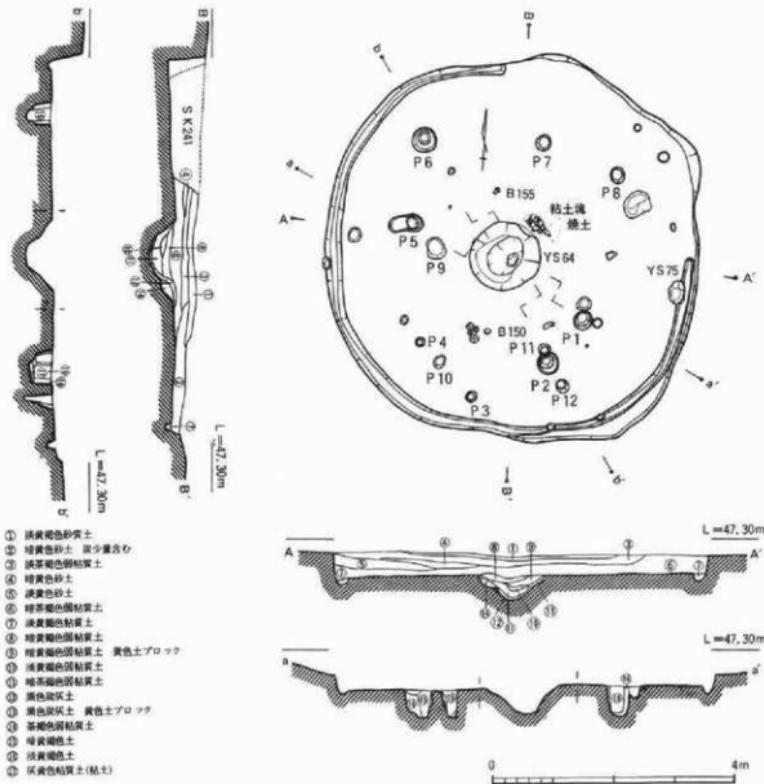
S B 03の規模は、直径 6.8m を測る。壁高は約50cmを測り、壁際に沿って幅15~20cm・深さ10cmの豊満が全周に廻らされる。床面のほぼ中央南寄りに、直径 1.4m、深さ 0.3m の炉が設けられ、炉内には厚さ10cmと5cmの炭層が認められる。柱穴は、不揃いで P 1・P 3・P 4・P 6 を主柱穴とし、P 2・P 8・P 5・P 9 を副柱穴とする構造をもつ。主柱穴は、各々直径30~43cm・深さ27~60cmの掘り方をもち、直径10~23cmの柱当りをもつ。P 4・P 6 は、岩盤（軟質片岩）を割り貫いて掘削しており、同様に P 6 周辺の床面は岩盤を整形している。P 1~P 5 の最下部には、灰黄色粘土が認められる。床面は、ほぼ平坦で一部に貼り床を施す。P 1~P 9 間の床面において炭・焼土が顕著に認められる。遺物は、P 1~P 2 間の東側と P 4~P 10 間の 2ヶ所に集中して見られ、前者からは高杯（B 94・B 96）、瓶（B 93）、砥石（Y S 67）などが、後者からは高杯（B 95）、底部（B 98・B 99）などが、その他から手捏ね壺（B 91）、砥石（Y S 66）などが出土。覆土は、主に北東方向から堆積し、第4層・第5層において多量の焼土粒・炭粒が認められる。出土土器点数は、第1~第3層で423点を数え、大半を占める。



第17図 S B 03実測図

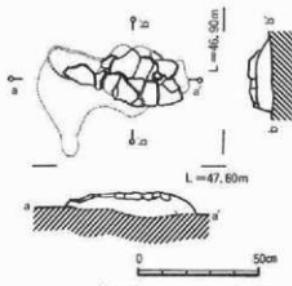
(4) S B 04 (第18図・第19図・PL. 5②・PL. 10②)

S B 04の規模は、直径 6.0m を測り、若干隅丸方形を呈する。壁高は北側で約70cm、南側で後世の削平のため約10cmとなる。壁際ないしは壁の内周に沿って、幅約10~22cm・深さ15cmの壁溝が廻らされるが、北東側約4mの範囲は後出する S K241に切られるため不明である。床面の中央部分に、直径1.4m・深さ0.42mの炉が設けられ、炉内には厚さ10cmと5cmの炭層が認められる。柱穴は、極めて不揃いでP 1~P 8が生柱穴となる。主柱穴は、直径30~42cmの掘り方をもち、直径20cmの柱当りをもつもの (P 1・P 2・P 5・P 6) と、直径15~24cmと掘り方と柱当りを区別できないもの (P 3・P 4・P 7・P 8) の両者がある。柱穴の深さは、32~53cm (P 7・P 8は除く) を測る。P 2の最下部にのみ、灰黄色粘土が認められる。床面は、P 2~P 4・P 5間が踏み締められた状態であった。遺物は、床面から高杯基部 (B 155) ・壺底部 (B 150) が、炉底から砾石 (YS 64) が出土、また、東側壁溝上から台



第18図 S B 04実測図

石(Y S 75)が出土した。炉の北東際からは、長軸50cm・短軸22cm・厚さ3cmの粘土塊がドーム状になって出土、粘土塊そのものも火を被けて桃色を帯び、下部において65cm×45cmの範囲で焼土の広がりを見る。覆土は、基本的に6層で、主に北西方向から堆積し、全体に炭粒を微量含む。出土土器点数は、覆土-71点、床面直上-31点を数え極めて少量化である。



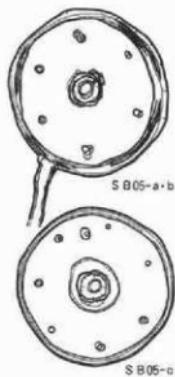
第19図 S B 04粘土塊実測図

(5) S B 05 (第20図-第24図・PL・5③・PL・6①・PL・10③~⑤)

S B 05は、同心円拡張と上屋構造の改築が認められる住居跡で、各々原形S B 05-a・拡張S B 05-b・改築S B 05-cと呼称する。原形S B 05-aの規模は、南北8.0m・東西7.35mを測り、若干橢円形を呈する。壁溝は、西半部がS B 05-bと大部分重複しつつ、幅20cm内外・深さ約8cmで全周するものと思われる。壁高・炉の構造は不明。主柱穴は、S B 05-bと重複して6本(P20・P3・P10・P6・P23・P9)の可能性が高い。床面は主柱穴の内周が非常に堅く踏み締められていた。

S B 05-bの規模は、南北8.45m・東西8.0mを測る。壁高は、約55~65cmで、壁際に沿って幅約20~40cm、深さ10cmの壁溝が西側でS B 05-aと重複しつつ廻らされる。床面の中央部分に直径1.4m・深さ0.82mの二段掘りの炉が設けられ、周囲には幅約10~20cm・高さ3~7cmの盛り土による炉堤が築かれる。炉堤の外周には、多量の炭粒が認められる。主柱穴は6本(P20・P3・P10・P6・P23・P9)で、各々直径約30~48cm・深さ46~80cmの掘り方をもち、直径15~24cm・深さ29~58cmの柱当りをもつ。主柱穴の最下部には、全て黄灰色粘土が認められ、粘土の上部には30cm大の片岩ないしは川原石を敷くもの(P6・P10)、15cm大の川原石を敷くもの(P3・P20)がある。床面は、S B 05-aと同様に主柱穴の内周が堅く踏み締められていた。尚、炉の検出に際し、上部の掘削痕を検出することができた。掘削痕の平均値は、幅7cm・長さ13cm・深さ約5cmを測り、炉の北側では東→西へ、西側では南→北へ、南側では不定方向への掘削を想定することができる。また、南側壁溝に付属した幅74cm・深さ60cmの溝SD 7を、延長2.9mにわたり検出した。溝の覆土は基本的に二層に分れ、少量の土器(B 198~B 202)が出土した。

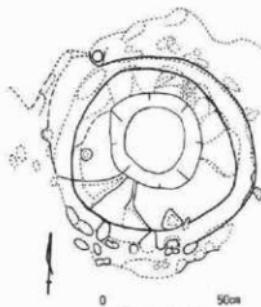
S B 05-cの規模は、直径8.0mを測るほぼ正円である。壁高は、約60cmで壁際に沿って幅22cm前後・深さ10~15cmの壁溝が廻らされる。床面は、S B 05-bの旧床面より約5~10cm高くなり、中央部分に位置する炉内にも同様の暗褐色弱粘質土の堆積を認める。炉は、直径1.25m・深さ0.3mと浅くなり、下部には厚さ5cmの炭粒を主体とする暗灰色弱粘質土が認められる。主柱穴は8本(P1・P2・P21・P10・P22・P7・P24・P9)で、各々直径34~65cm・深さ48~60cmの掘り方をもち、直径14~22cm・深さ48~58cmの柱当りをもつ。主柱穴の内P1・P10・P22・P7・P24・P9には、最下部に黄灰色粘土が認められる。P10は、僅かに柱位置をずらせて、P9はS B 05-bの柱穴内に粘土を再充填し柱を固定させている。床面は全体に均質に繰り、P10~P22間に不定形な焼土の広がりを確認した。遺物は、床面北側から高杯脚台部(B 175・B 176)などが、南側から磨石b類(Y S 17)・台石(Y S 74)が出土した。床面からの遺物の出土は、A区に比較的多い。覆土は基本的に5層から成り、北ないしは北東方向



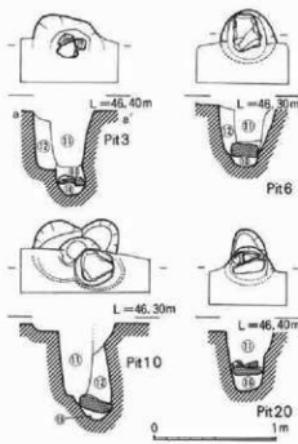
第20図 S B 05実測図

から堆積し、第3～第5層にかけて多量の炭粒を含む。出土土器点数は、他の住居跡に比して多く、第1層—224点、第2層—570点、第3層—161点、第4層—267点、第5層—195点を数える。地区別では、A・B区で

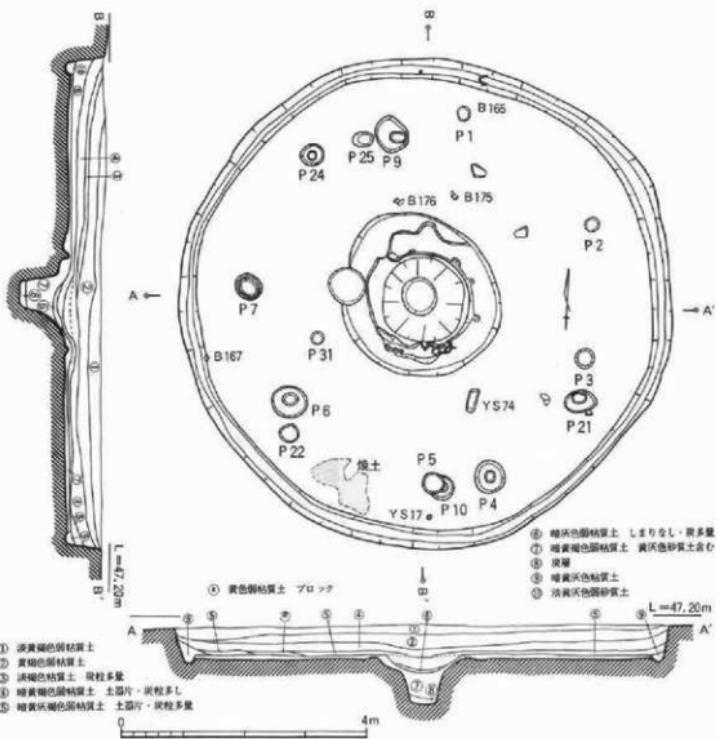
の土器点数が圧倒的に多い。これら多量の土器は、SB05廃絶後の土砂堆積過程において、後出するSB07からの遺物の発掘の一端を示すものと考えられる。



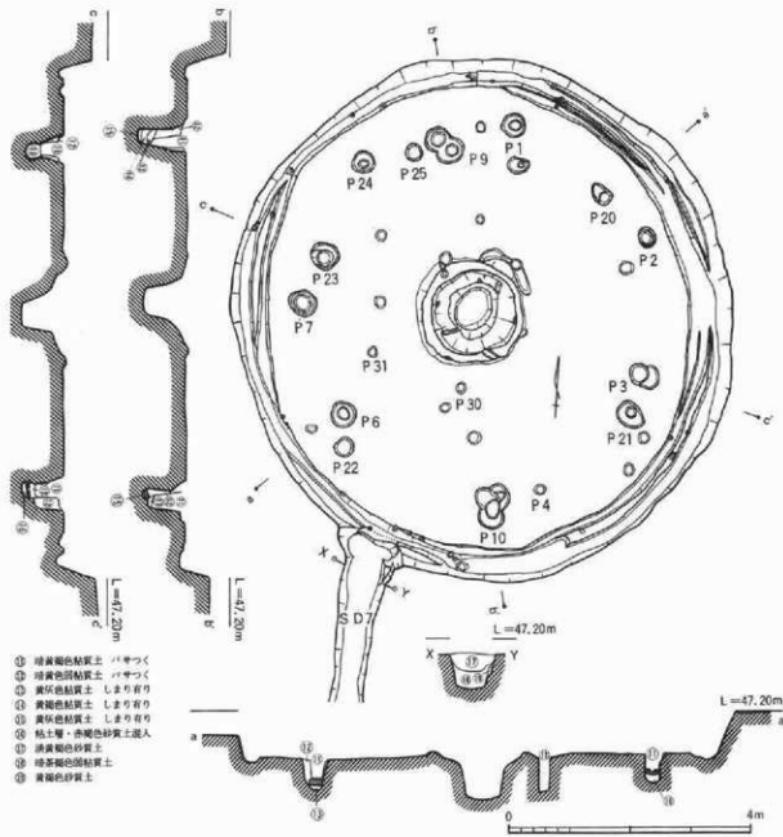
第21図 SB05-b 掘削痕実測図



第22図 SB05柱穴実測図



第23図 SB05-b-c 実測図



第24図 S B 06-a・b 実測図

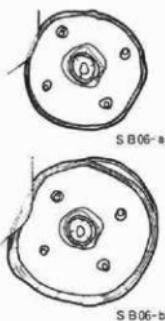
(6) S B 06 (第25図・第26図・PL 6・②③・PL 10・⑥)

S B 06は、同心円拡張の認められる住居跡で、各々原形S B 06-a、拡張S B 06-bと呼称する。原形S B 06の規模は、南北4.74m・東西5.0mを測り若干楕円形を呈する。壁溝は、幅12~20cm・深さ10~12cmで全周に廻らされる。壁溝は、S B 06-bの掘削に伴い一部削平されているものと思われる。炉・主柱穴は、後出するS B 06-bと同一位置をとると考えられる。床面の南東際と北西際の範囲において、直径10cm・深さ5cmの小ピットを検出した。

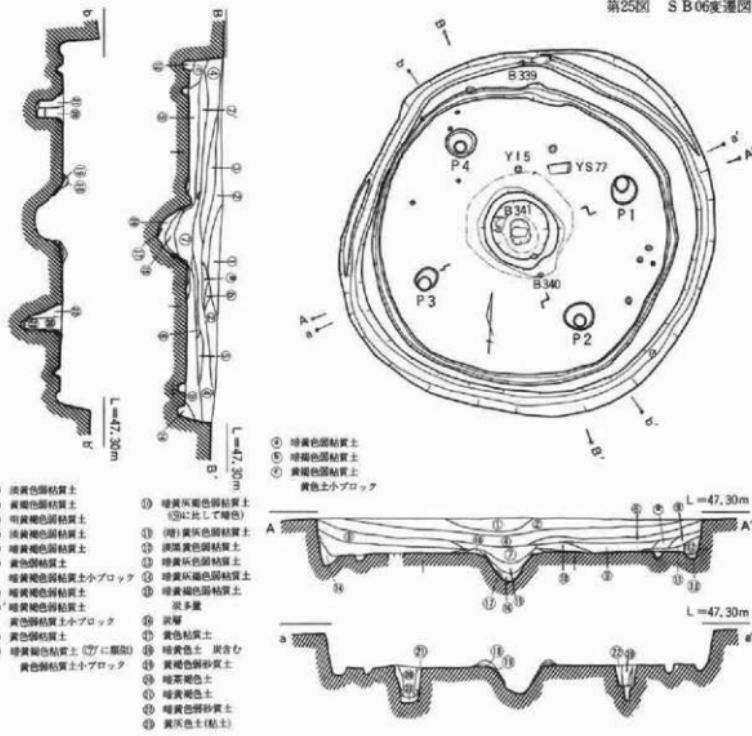
S B 06-bの規模は、南北5.9m・東西6.2mを測り若干楕円形を呈する。壁高は、南側で約50cm、北側で約60cmを測り、壁際ないしは内回りに幅18~26cm・深さ4~12cmの壁溝が廻らされる。床面の中央西寄りには、直径0.95m・深さ0.52mの炉が設けられている。炉内の覆土は、基本的に2層に分れ、上層は炭粒を多量に含む暗黄褐色粘質土、下層は厚さ14cmの炭層となる。炉の周囲には、幅12~18cm・高さ10cmの炉堤が廻らされ

る。炉堤の盛り土は、上層炭灰を含む暗黄色土、下層黃褐色弱沙質土で構成される。炉堤の東半部から内周り肩部にかけて焼土範囲が認められ、炉堤の外周約30cm幅（第26図一点破線内）において薄い炭層が堆積する。主柱穴は、4本（P 1～P 4）で、各々直径40～44cm・深さ45～67cmの掘り方をもち、直径20～24cm・深さ36cm～61cmの柱当りをもつ。P 1は、S B06-aでの柱穴を埋め込んで同一位置に重複させていることが確認できる。床面は、全体に堅く踏み締められた状態であった。遺物は少量で、床面の北側から鉄鏃（Y I 5）・台石（Y S 77）が、炉の南側から鉢底部（B 340）が、炉内から脚台部（B 341）が、北側壁溝内から鉢（B 339）が出土した。覆土は、基本的に9層から成り、北ないしは南方向から除々に堆積した状況である。出土土器点数は、覆土上層（第1～第3層）-152点、覆土下層（第4～第8層・第9層上半）-106点、覆土床直（第9層下半）-45点を数え、さほど多くはない。

尚、SB06は、北西側の壁の一部が後出するSB07に切られる。



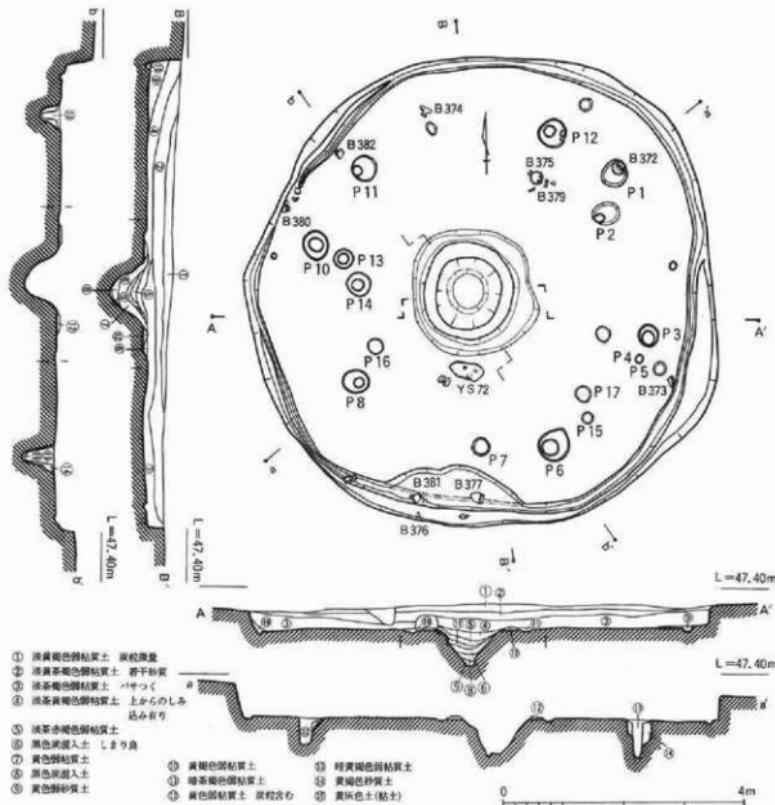
第25回 S B 06度遷回



第26圖 S B06-a+b 實測

(7) S B 07 (第27図・P.L. 7①)

S B 07の規模は、長径 7.8m・短径 7.6m を測り、一部歪な円形を呈する。壁高は、北側で約50cm、南側で約30cmを測り、壁際ないしは内周に沿って幅8~20cm・深さ5~8cmの壁溝が廻らされる。壁溝は床面の北西域において約80cmの間一部存在しない。床面の中央部分に、長径1.18m・短径1.10m・深さ0.62mの炉が設けられ、炉内には厚さ8cmの炭層が2層認められる。炉の周囲には、幅14~20cm・高さ約6cmの炉堤が廻らされる。炉堤の盛り土は、炭粒を微量に含む黄色弱粘質土で構成される。炉堤の外周には、幅20~35cm・深さ3~6cmの浅い凹みが廻る。床面と盛り土の間には、断面に出ない程度の厚みで炭層が認められる。主柱穴は、8本 (P1・P3・P6~8・P10~12) で、各々直径38~50cm・深さ29~60cmの掘り方をもち、直径16~26cm・深さ掘り方と同じ柱当りをもつ。P6・P10の最下部にのみ、黄灰色粘土が認められる。他の柱穴の内、P13・P16もS B 07に関連するものと考えられる。床面は、柱穴の内周が全体に堅く踏み締められた状態であった。遺物は、北西域の床面で壁際から脚台付細頸壺 (B 374)・鉢 (B 380・B 382) が、南側壁溝

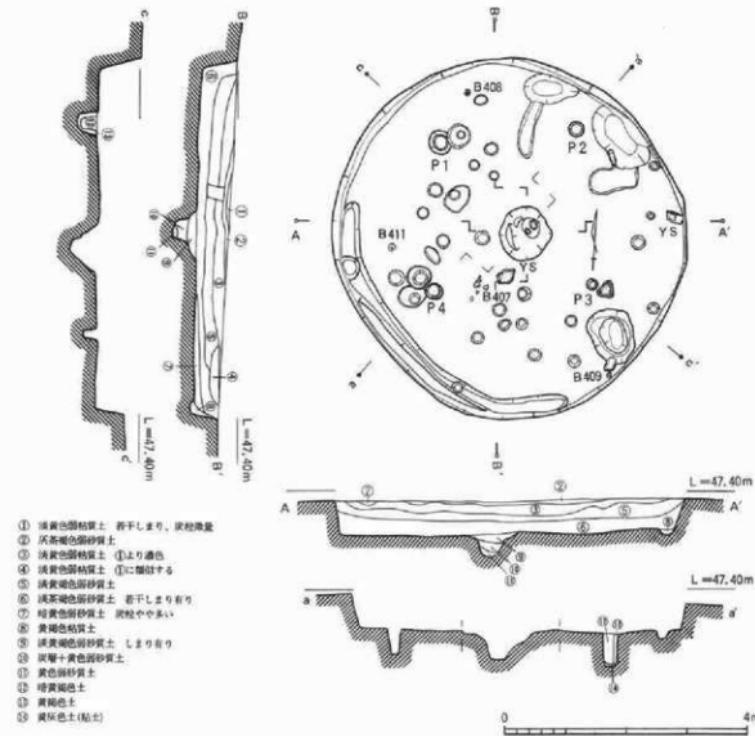


第27図 S B 07実測図

内から甕（B 377）・鉢（B 381）が、P 1 柱当り上部から壺口頸部（B 372）が、炉の南側から台石（Y S 72）に伴って15cm大の川原石が2個出土した。また主柱穴P 3 の柱当り下部から勾玉（Y S 104）が出土した。覆土は基本的に5層から成り、北ないし北西方向から堆積し、全体に不安定な状態である。出土土器点数は、他の住居跡に比して少量で、覆土—172点、床面直上—133点を数える。

(8) S B 08 (第28図・PL. 7②)

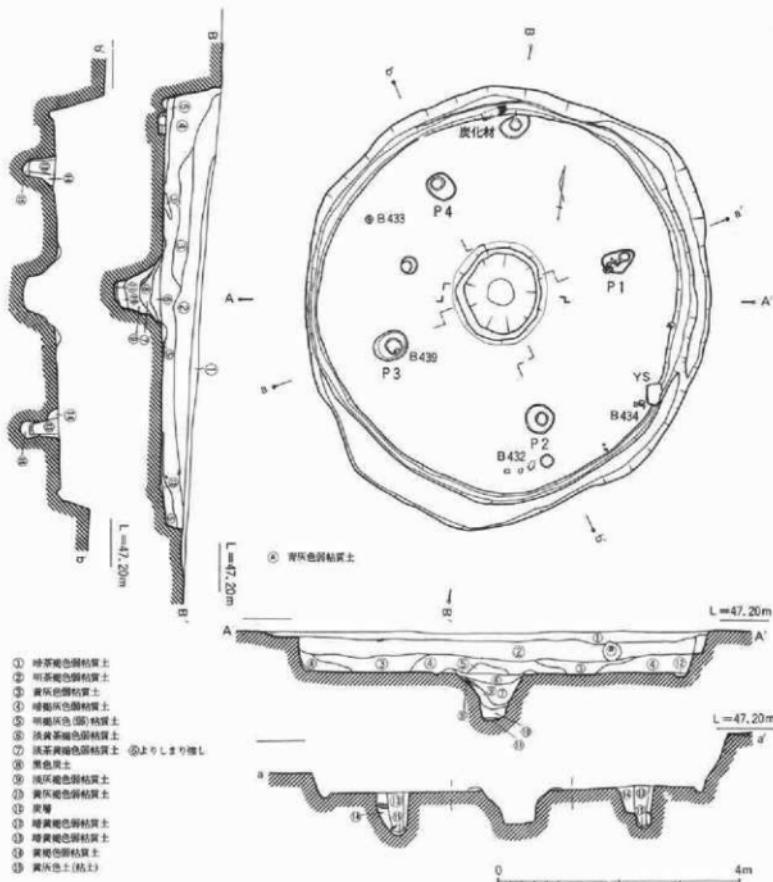
S B 08の規模は、長径 5.8m・短径 5.5m を測る。壁高は、北側で約70cm、南側で42cmを測り、南から南西にかけて約2mの間壁際ないし内周に幅22~32cm、深さ10~14cmの壁溝が廻らされる。床面の中央部分に、直径 0.9m・深さ0.41mの二段掘りの炉が設けられ、炉内には厚さ16cmの炭層が認められる。主柱穴は4本（P 1 ~ P 4）で、各々直径28~40cm、深さ22~48cmの掘り方をもち、直径13~18cm・深さ22~44cmの柱当りをもつ。P 4 の最下部にのみ、黄灰色粘土が認められる。その他、直径20cm前後のピットを多數検出しており、建て替えの可能性も考えられる。床面は、全体に軟質で凹凸が著しい。床面の東半に於ける三基の土壙は、覆土などからS B 08に先行する遺構と考えられる。遺物は、床面から高杯（B 407~B 411）・台石2点が出土した。覆土は、基本的に7層から成り、均質に堆積する。出土土器点数は、覆土—186点、床面直上—9点を数え、その内覆土第5層・第6層で113点となり大半を占める。



第28図 S B 08実測図

(9) S B 09 (第29図・P.L. 7③)

S B 09の規模は、長径 6.8m・短径 6.5mを測る。壁高は、北側で90cm、南側で50cmを測り、壁際ないし内周に沿って、幅15~25cm・深さ7~12cmの溝が廻らされる。床面の中央部分に、直径 1.2m・深さ 0.74m の炉が設けられ、炉内には厚さ 3cm と 5cm の炭層が認められる。炉の周囲には、幅 8~15cm・高さ 5cm の炉堤が廻らされる。炉堤の盛り土は、黄色弱粘土で構成される。主柱穴は、4本 (P 1~P 4) で、各々直径 48~64cm・深さ 54~71cm の掘り方をもち、直径 12~19cm・深さ 44~66cm の柱当りをもつ。主柱穴の最下部には、全て黄灰色粘土が認められる。床面は、均質に堅く縮まり、北側壁溝内で幅 12cm・長さ 22cm の炭化材を検出した。遺物は、床面壁際から高杯 (B 432・B 433)・鉢 (B 434)・台石 1 点が、P 1 掘り方上部から長頸壺 (B 440)・P 3 柱当り中位から脚台付細頸壺 (B 439) が出土した。覆土は、基本的に 4 層から成り、北方向からの堆積を示し、比較的安定した状態である。出土器点数は、上部包含層 -77 点、覆土 -283 点、床面直



第29図 S B 09実測図

上—17点を数え、他の住居跡に比して少量の部類に属する。

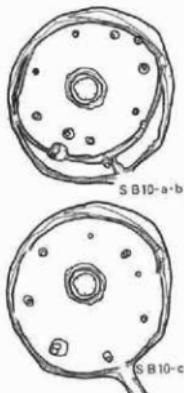
(10) S B10 (第30図—第33図・P.L. 8①②・P.L. 10⑦~⑩)

S B10は、同心円拡張と上屋構造の改築が認められる住居跡で、各々原形S B10—a、拡張S B10—b、改築S B10—cと呼ぶ。原形S B10—aの規模は、長径8.5m・短径7.5mを測り、横円形を呈する。壁高は拡張後の住居跡S B10—b掘削のため定かでないが、S B10—bの床面より南側で約15cm低い床面となる。壁溝は、北半部がS B10—bと重複しつつ、幅14~24cm・深さ5~10cmで壁際に沿って廻らされるが、一部南側の1.35m間にについて存在しない。炉は、S B10—aの時期から中央部分に設けられていたが、炉堤は当初構築されていなかったと考えられる。柱穴は、8本(P1・P4・P6・P8・P21・P13・P15・P24)で、各々直径28~54cm・深さ30~49cmの掘り方をもち、直径20~24cm・深さ21~40cmの柱当りをもつ。P1を除いた主柱穴の最下部には黄灰色粘土が認められ、P8・P15では粘土の上部に15cm大の川原石・片岩を敷く。P4・P13は人為的に埋め戻されている。床面は、柱穴の内周りが比較的堅く踏み締められるが、P1~P24間はさほど堅くない。また、床面は南に向って緩傾斜し、約20cm低い床面となる。遺物は、P6の柱当りから管玉未製品(YS 105)が出土した。

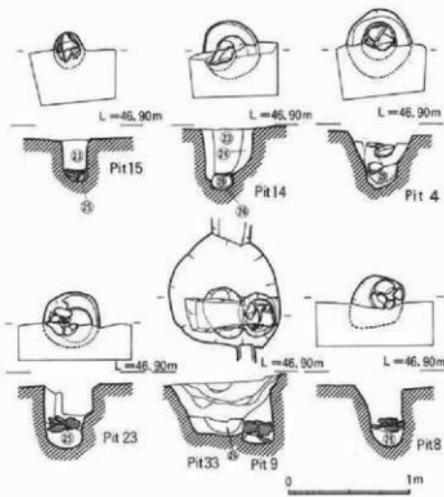
S B10—bの規模は、長径9.1m・短径8.5mを測り、若干横円形を呈する。壁高は、北側で80cm、南側で50cmを測り、北側約70cmの深さで幅0.4m・長さ約4.0mにわたり段を成す。壁際に沿って、幅14~26cm・深さ6~12cmの壁溝が廻らされる。床面の中央北寄りには、S B10—aの炉を整えた直径1.18m・深さ0.56mの炉が再使用され、厚さ5cmの炭層が2層認められる。炉の周囲には、幅16~24cm・高さ約10cmの盛り土による炉堤が廻る。炉堤の外周には、幅18~34cmの凹みが廻らされ、多量の炭粒が認められる。炉堤は、炭粒を少量含む黄色土によって構築され、炉肩南側ではS B10—a段階での炭層を被った状態で炉堤を構築している。主柱穴は、8本(P3・P5・P26・P7・P33・P14・P23・P32)で、各々直径30~52cm・深さ20~70cmの掘り方をもち、直径15~26cm・深さ29~60cmの柱当りをもつ。P3を除いた主柱穴の最下部には、黄灰色粘土が認められ、P14・P23内に15cm大の川原石・片岩が敷かれる。床面は、拡張部南側も堅く踏み締められ、炉堤の盛り土の状態・柱穴の検出状況などから、南側拡張部の段を有した状態での使用と考えられる。

S B10—c

の規模は、S B10—bと同様で、主柱穴の立て替え、床面の整地が認められる。S B10—b段階での主柱穴の内、P23を再使用し、P33南側にP9を掘削し最下部に片岩を二



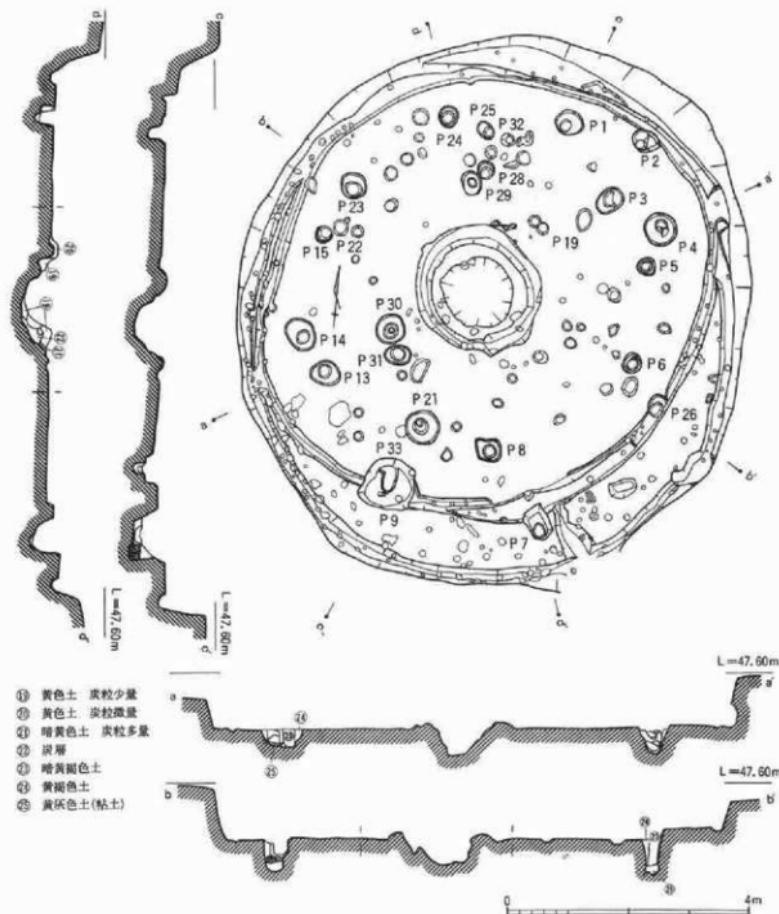
第30図 S B10変遷図



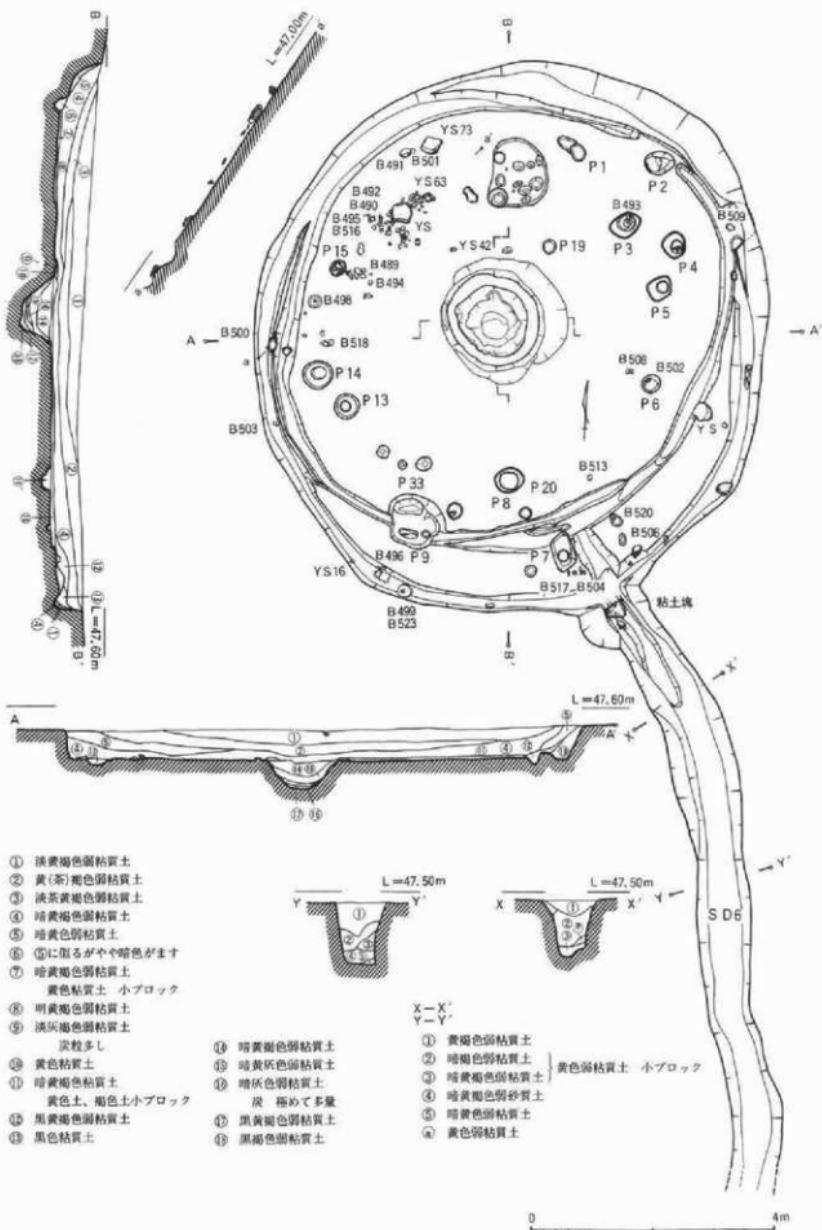
第31図 S B10柱穴実測図

重に数いている。P 9・P 33は、S B10の廻絶に伴って、何故か入為的に埋め戻される。床面は、南半部が暗黄褐色粘質土による貼り床が施されば水平となるが、軟質で不安定である。遺物は、床面の北西域に集中し、壺（B 489～B 495）・高杯（B 498）・砾石（Y S 42・Y S 63）・台石2点などが出土、その他南側壁溝内から脚台付壺（B 496）・高杯（B 497・B 499）・磨石b類（Y S 16）が出土した。また、床面から長さ10cm大の棒状礫が多数出土した。覆土は、基本的に5層から成り、南東方向ないし北西方向からの堆積を主体としている。出土土器点数は、上部包含層—214点、覆土—1073点、床面直上—236点を数える。

尚、南側壁溝に付属した幅0.9m・深さ0.8～1.0mの溝S D 6を、延長8.0mにわたり検出した。S D 6はS B10-a段階に掘削され、その後継続して機能していたと考えられる。溝の覆土は、基本的に4層から成り、出土土器点数は577点を数える。S B10同様に覆土の上層・中層が土器点数の大半を占める。

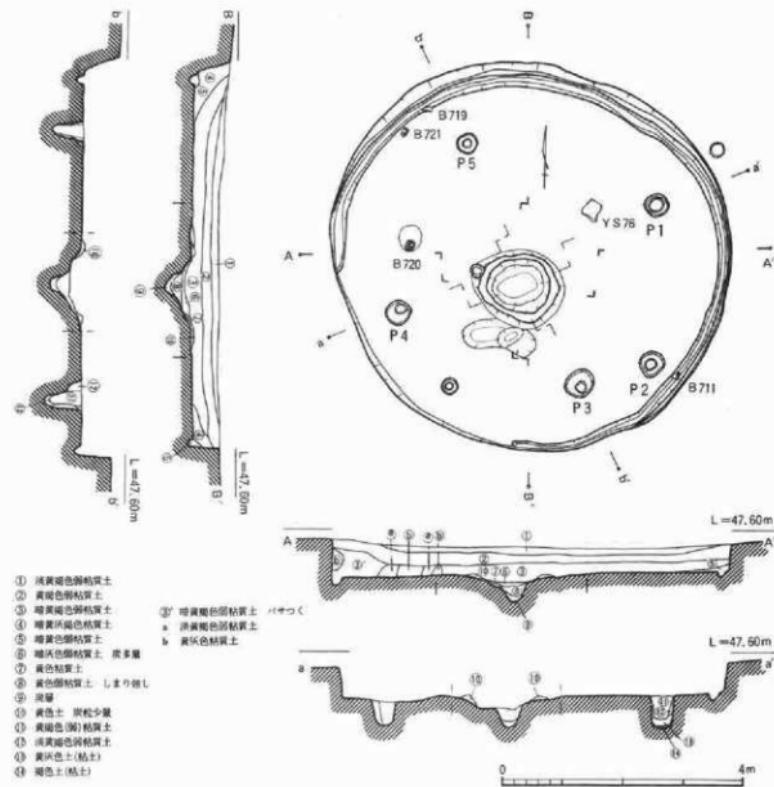


第32図 S B10-a 実掘状況実測図



(11) S B 11 (第34図・P.L. 8③)

S B 11の規模は、東西 6.8m・南北 6.8mを測る。壁高は、北側で60cm・南側で50cmを測り、南西約3/4を除く壁際に沿って幅14~20cm・深さ5~12cmの壁溝が廻らされる。床面の中央南寄りに長径1.06m・短径0.88m・深さ0.5mの炉が設けられ、炉内には炭粒を多量に含む厚さ6cmの暗灰色弱粘質土（第6層）と厚さ10cmの炭層（第9層）が認められる。第6層と第9層の間に推積する黄色弱粘質土（第8層）は、非常に堅く縮まり、炉の機能を二時期に考えることができる。炉の周囲には、幅10~18cm・高さ5cmの盛り土による炉堤が廻らされる。炉堤は、炭粒を少量含む黄色土で構成される。主柱穴は、4本（P 1・P 3~P 5）で、各々直径32~48cm・深さ40~61cmの掘り方をもち、直径13~23cm・深さ40~52cmの柱当りをもつ。P 4を除く主柱穴の最下部には、黃灰色粘土が認められる。床面は、南西隅を除く柱穴の内周りが堅く縮められた状態である。遺物は、壁際から甕（B 721）・高杯形部（B 719）が、壁溝上から壺口縁部（B 711）が、西側床面から甕（B 720）が出土した。また、炉-P 1間から台石（YS 76）が出土した。覆土は、基本的に4層から成り均質に堆積し、出土土器点数は上部包含層-244点、覆土-286点、床面直上-32点を数える。



第34図 S B 11実測図

2、掘立柱建物跡（第35図・P.L. 13①）

掘立柱建物跡は、S B11の2m東に位置し、一部S B13の掘削により削平されている。桁行2間（3.7m）梁行2間（3.4m）を測り、東西方向に棟をもつ建物跡である。柱間は、a-a'間で西から195cm・175cm、c-c'間で西から166cm・192cm、b-b'間で北から173cm・167cm、d-d'間で北から172cm・172cmである。柱位置では、P 4のみが南へずれる。

柱穴は、各々直径23~37cm・深さ22~44cmの掘り方をもち、直径12~24cm・深さ掘り方と同じ柱当りをもつ。P 1~P 3・P 5の最下部には、円形竪穴住居跡と同一の黄灰色粘土が認められる。遺物は、P 2掘り方下部から窓底部（B 801）が出土したのみである。遺物から時期は決め難いが、S B13・S K634・S D26との切り合い関係、柱穴の規模・覆土の状況から、S B10・S B11が機能していた段階に伴う建物跡と考えられる。

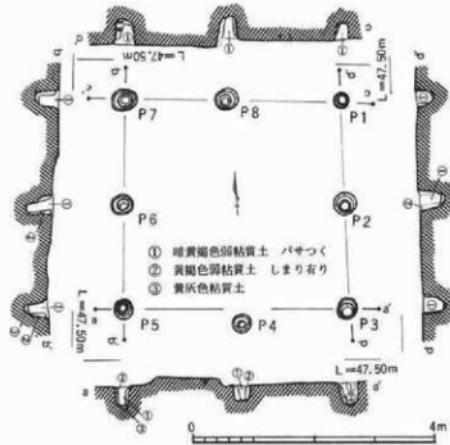
その他、S B02の北東側において柱穴の規模・覆土の状況が竪穴住居跡の柱穴に酷似するピットを検出したが、建物跡としての規則性を有していない。

3、方形竪穴住居跡 S B

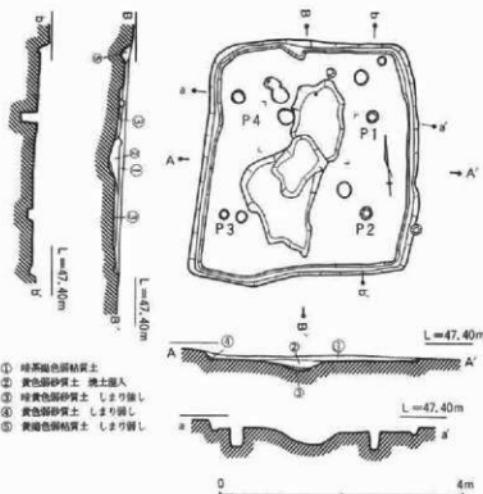
方形竪穴住居跡は、計2棟検出した。各々S B12・S B13と呼称する。位置関係・概要を列記すると以下の通りである。

S B12は島城平坦部のほぼ中心を占め、S B08の約5.5m西北西に位置する南北3.8m・東西3.6mの住居跡である。S B13は生活構造の東端を占め、S B11の約4.0m東南東に位置する南北5.4m・東西5.5mの住居跡である。S B12-S B13間の距離は、約64mである。

方形竪穴住居跡は、円形竪穴住居跡2棟毎の占地に類似するが、壁高・覆土の状況などが大きく異なる。



第35図 掘立柱建物跡実測図



第36図 S B12実測図

(1) S B 12 (第36図・P.L. 9①)

S B 12の規模は、南北 3.8m・東西 3.6mを測り重な方形を呈する。壁高は、北側で 8cm、西側で 15cmを測り、壁際に沿って幅12~20cm・深さ 5cmの壁溝が廻らされる。床面の中央南北方向に長軸 2.8m・短軸 0.8~1.2m・深さ 5~15cmの落ち込みがある。落ち込みの覆土を切り込んで、長軸 1.0m・短軸 0.6m・深さ 0.18mの土壤が掘削される。覆土は、焼土を含む黄色弱砂質土となりがの機能を有するものと考えられる。主柱穴は、4本 (P 1~P 4) で、各々直径15~22cm・深さ 10~30cmを測る。床面は、全体に軟質で南北に緩傾斜し南側で約24cm低い床面となる。覆土は、落ち込み・土壤を除くと單一層である。遺物は、覆土からの出土で、出土土器点数は85点を数える。尚、S B 12の上部には、約8m四方に弥生土器を含む暗茶褐色弱粘質土が広がる。

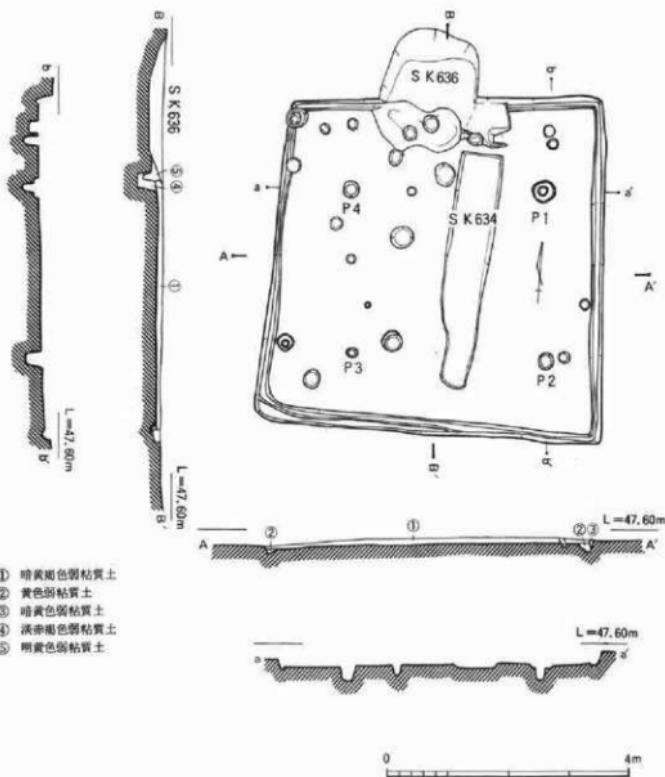
(2) S B 13 (第37図・P.L. 9②)

S B 13の規模は、南北 5.4m・東西 5.5mを測り若干盃な方形を呈する。壁高は、約10cmを測り、壁際に沿って幅18~22cm・深さ 12cmの壁溝が廻らされる。主柱穴は、4本 (P 1~P 4) で、各々直径16~28cm・深さ 20~28cmを測る。柱穴の内P 3が小規模で、東側へずれる。床面は、全体に軟質で、炉などの施設は存在しない。遺物は、

覆土からの
出土で、出
土土器点数
は32点を数
え、極めて
少量である。
覆土は、基
本的に單一
層である。

尚、S B
13と切り合
い関係にあ
る遺構の新
旧は、古い
順から掘立
柱建物跡→
S D 26、掘
立柱建物跡

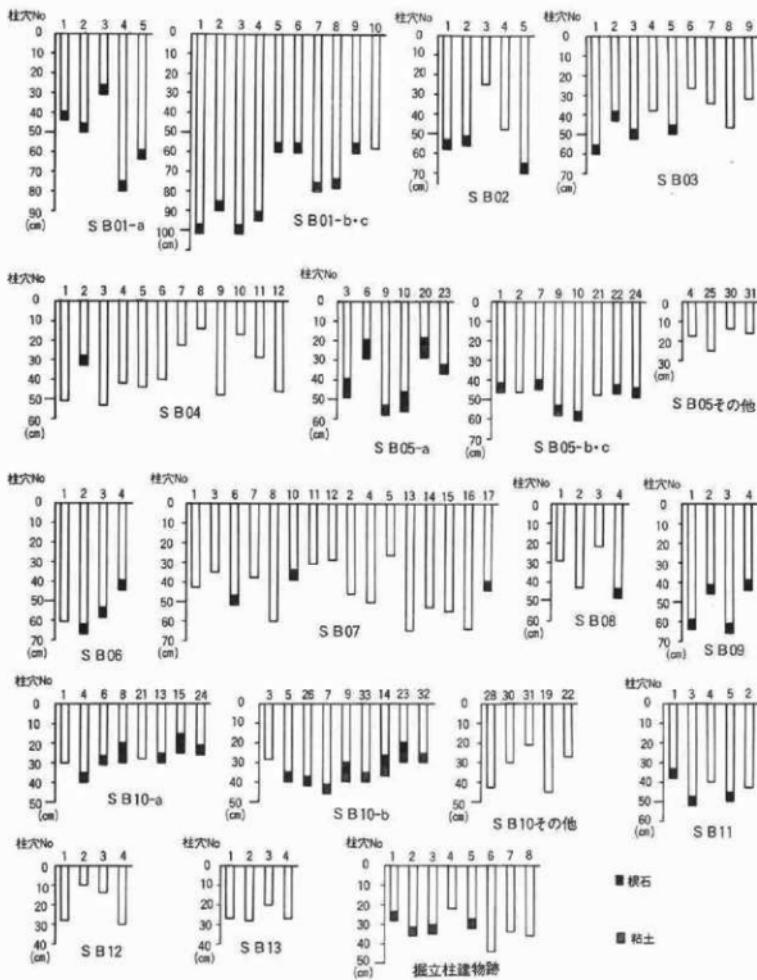
- ・ S K 634
 - ① 暗茶褐色弱粘質土
 - ② 黄色弱粘質土
 - ③ 暗茶褐色弱粘質土
 - ④ 淡茶褐色弱粘質土
 - ⑤ 明黄色弱粘質土
- S B 13 →
S K 636 と
なる。



第37図 S B 13実測図

4、竪穴住居跡・掘立柱建物跡の柱穴深度 (第3表・P.L. 10 ①⑧⑨)

弥生時代の建物に伴う柱穴は、各々の建物の規模・機能により共通した構造を有している。各柱穴の掘り方・柱当りの下部レベルは一律ではないが、最下部に灰黄色粘土ないし淡黄褐色粘土を回レンズ状に充填する点で共通する。S B05・S B10の住居跡では粘土の上部に根石を敷く例も見られ、大型化した上屋構造を支えるようになる。また、粘土の充填する枚数から柱の建て替え=上屋構造の改築回数を検討できる。柱穴の切り込むベースはさほど軟質ではないが、粘土・根石を敷くことにより沈下・腐食を防ぐと考えられる。



第3表 竪穴住居跡・掘立柱建物跡柱穴深度

5、土壤 S K (第38図～第41図・P L. 11・P L. 12)

弥生時代の土壤は総計 130基以上を検出しているが、層位から見れば黄褐色粘質土(住居跡上部包含層)上面と黄色弱砂質土(縄文時代遺物包含層)上面での検出遺構に区別できる。但し、黄褐色粘質土上面には鎌倉～江戸時代の遺構が重複するため、実態不明の土壤については一部後者の時代として扱う場合がある。各個別の土壤については遺構一覧及び検出遺構全体図を参照されたい。

土壤は規模・形態・遺物の出土状況などから、①1個体の完形土器が出土する土壤、②平面形が長方形を呈する土壤、③平面形が楕円形ないし円形を呈し、比較的まとまりのある遺物が出土する土壤、④平面形が楕円形、断面舟底形を呈する土壤、⑤平面形が不定形を呈し、覆土に焼土が混在している土壤、⑥形態を問わざず大形の土壤、⑦その他に分類することができる。

(1) ①類土壤—S K 165・S K 234・S K 241 極めて単独的な在り方を示し、遺物は壺が主体を占める。

S K 165 W 107N23に位置し、長軸 0.9m・短軸 0.65m・深さ 0.25m を測る楕円形の土壤。覆土は單一層で、下部から高杯脚台部(K 15)、上部から長頸壺(K 48)が倒立した状態で出土した。

S K 234 W 94N18に位置し、長軸 2.5m・短軸 1.6m・深さ 0.3m を測る下膨れの楕円形を呈する土壤。覆土は2層から成る。土壤の東半に広口壺(K 118)が横たえられた状態で20cm大の片岩が伴って出土した。

S K 241 W 152N19に位置し、S B 04を切り込んで掘削される。東西 3.9m・南北 1.8m・深さ 0.6m を測り、北側の緩やかな傾斜を除いて三方は急傾斜で基底部に達する。土壤の北寄り基底部に広口壺(K 137)が横たえられ、その上に40cm大の川原石が置かれた状態で出土した。土器の底部位置は一部凹地を呈する。覆土は4層から成り均質に堆積する。覆土は S K 240・S K 242と酷似する。

(2) ②類土壤—S K 622・S K 631～S K 635・S K 652・S K 657・S K 658・S K 673 W 49～E 29に集中し、主軸方向の違いにより分類可能である。S K 631・S K 634・S K 635は遺物にまとまりが認められる。

S K 631 W 4 N 8に位置し、長軸 1.50m・短軸 0.52m・深さ 0.16m を測り、基底部は南北に傾斜する。遺物は土壤の上部から広口壺(K 188)・高杯脚台部(K 189)が出土した。

S K 634 W 10 S 3に位置し、S B 13に切られる。長軸 3.84m・短軸 0.68m・深さ 8cm を測るが、南側でくびれ幅 0.5m と狭くなる。基底部は中央部分が若干凹む。遺物は土壤の上部から広口壺(K 191)が破碎した状態で、広口壺(K 190)・鉢底部(K 196)などと共に出土した。覆土は單一層である。

S K 635 W 24.5 S 5.5に位置し、S D 26に切られる。主軸が若干東へ振る。長軸 3.10m・短軸 0.86m・深さ 0.3m を測るが、北側でくびれ幅 0.5m・深さ 0.25m となる。基底部はくびれ部の南側が若干凹む。遺物は土壤の北半に集中し、主に下半から長頸壺口縁部(K 198)・鉢(K 199)などが出土した。覆土は單一層。

②類土壤の規模にはばらつきがあり、大半の基底部は傾斜して平坦でない。

(3) ③類土壤—S K 196・S K 228・S K 229・S K 230・S K 235・S K 554 黄褐色粘質土上面の土壤が主体を占め、W 93～W 57付近に集中する傾向がある。

S K 196 W 62N10に位置し、S K 229を切る。黄褐色粘質土上面の土壤。長軸 4.2m・短軸 0.6～1.2m・深さ 0.35m を測り長楕円形を呈する。遺物は土壤の上部中央に集中し、広口壺(K 68～K 71)・甕(K 72～K 75)・高杯(K 76～K 86)・鉢(K 87・K 88)などが出土した。覆土は4層から成り、遺物は第1層に集中して出土土器点数 182点を数える。

S K 228 W 91N14に位置し、長軸 2.7m・短軸 0.8m・深さ 0.3m を測る。遺物は小片が主体を占め、高杯(K 111)・把手付鉢(K 112)などがあり、出土土器点数48点を数える。

S K 235 W 92N15に位置し、長径約 1.3m・深さ 0.25m を測り歪な円形を呈する。遺物は少量であるが、小型の短頸壺(K 122)・鉢(K 123)・手捏ねの高杯(K 124)などが出土した。

(4) ④類土壙—S K23・S K29～S K31・S K34・S K37・S K38・S K50・S K53・S K63・S K237・S K239・S K613・S K614・S K615・S K621・S K623 全体に遺物量は極めて少量で、第Ⅱ区から第V区西半に分布し、特に第Ⅱ区落ち込み状地形の南側に集中する傾向がある。主軸方向に統一性がない。

S K29 W 211 N 25に位置し、長軸 2.5m・短軸 0.9m・深さ 0.2m を測る。土壙の基底部は凹凸がなく、ほぼ水平である。覆土は單一層、遺物は細片のみの出土である。

S K37 W 195 N 22に位置し、長軸 2.92m・短軸 0.6m・深さ 0.24m を測る。覆土は黄褐色弱粘質土の單一層、遺物は広口壺（K12）・鉢（K15・K16）などが出土した。出土土器点数は9点を数えるのみである。

S K237 W73 N 7に位置する黄褐色粘質土上面の土壙。長軸 2.32m・短軸 0.84m・深さ 0.2m を測る。覆土は單一層、出土土器点数は16点を数えるが細片のみである。

(5) ⑤類土壙—S K49・S K214・S K235・S K602～S K605・S K607・S K608・S K627・S K636 覆土は比較的堅く締まった焼土が主体、遺物は皆無。土壙の基底部は全体に凹凸が著しい。土壙は住居と住居の間に位置し、特にW98～W85に集中する傾向がある。⑤類土壙は円形整穴住居と密接な関係を示す。

S K49 W 216 N 30に位置し、長軸 1.32m・短軸 1.02m・深さ 0.25m を測る楕円形の土壙。土壙は落ち込み状地形の包含層（弥生時代遺物包含層）除去面で検出した。

S K235 W 143 N 1に位置し、S A 1の南側にある。長軸 3.5m・短軸 1.4m・深さ 0.8m を測る不定形の土壙。覆土は4層から成り、全体に焼土を含む。遺物は上層から細片のみの出土である。

S K604 W97 N 6に位置し、長軸 1.44m・短軸 0.96m・深さ 0.08～0.37m を測る不定形の土壙。基底部の一部は S K235と同様にピット状に落ち込む。

S K627 W38 S 2に位置し、S B10の南西側にある。長軸 2.94m・短軸 2.30m・深さ 0.19m を測り、南北両際に段を有する。

(6) ⑥類土壙—S K1・S K15・S K43・S K175・S K189・S K536・S K628・S K649・S K659・S K675 調査区全体に散逸的な在り方を示し、掘方が明確である。

S K1 W 245 N 38に位置し、長軸 1.5m・短軸 1.2m・深さ 0.8m を測る隅丸方形の土壙。覆土は黄褐色弱粘質土の單一層であって、一括性の認められる広口壺（K1・K2）・甕（K3）などが出土した。出土土器点数は37点を数える。

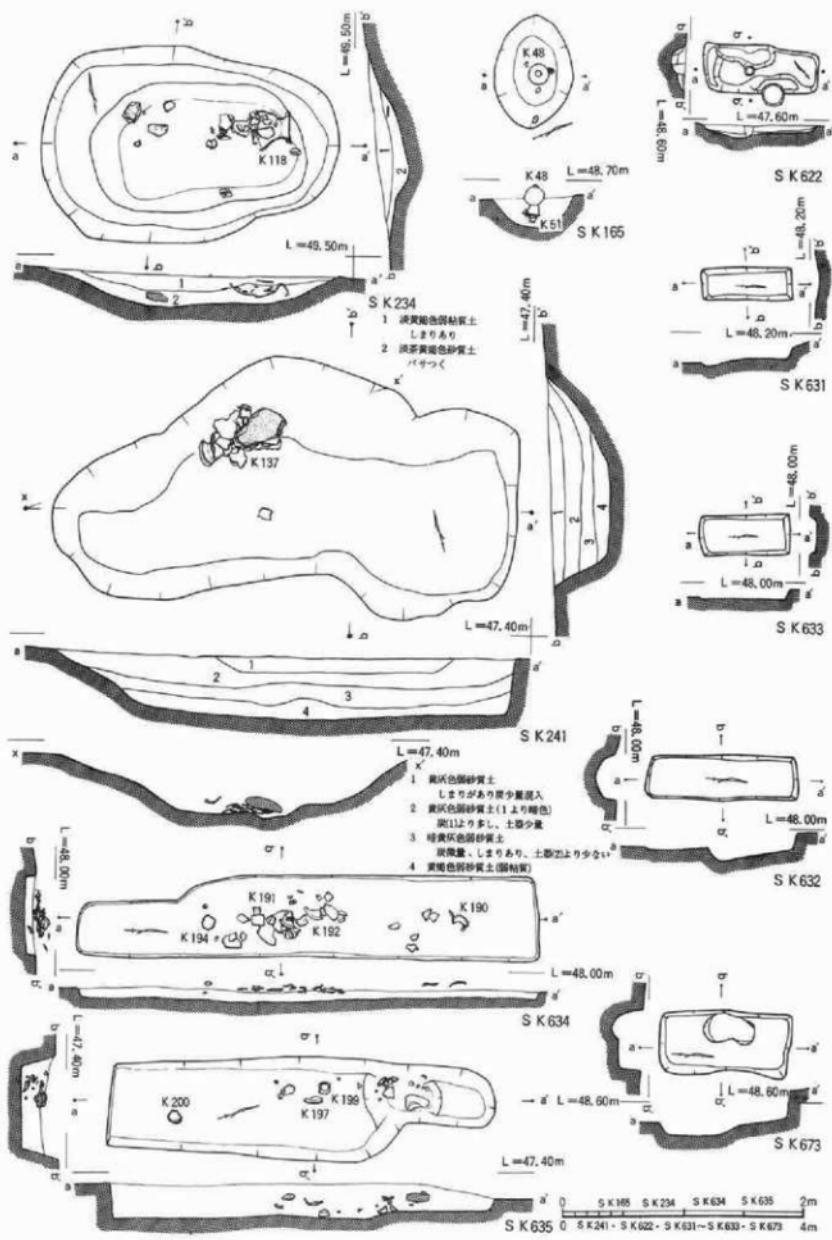
S K43 W 234 N 32に位置し、長軸 2.8m・短軸 2.34m・深さ 1.07m を測る楕円形の土壙で、南北両際に浅い段を有する。土壙は落ち込み状地形の包含層除去面で検出した。覆土は淡黄色弱粘質土の單一層、遺物は細片が主体となり出土土器点数 101点を数える。

S K175 W94 N 24に位置し、長軸 3.0m・短軸 1.7m・深さ 0.6m を測る不定形の土壙。覆土は全体に弱砂質土で疊で多く含む不安定な堆積である。遺物は上部に多く、甕（K53）・高杯（K54～K57）などの破片が主体となり出土土器点数 72点を数える。

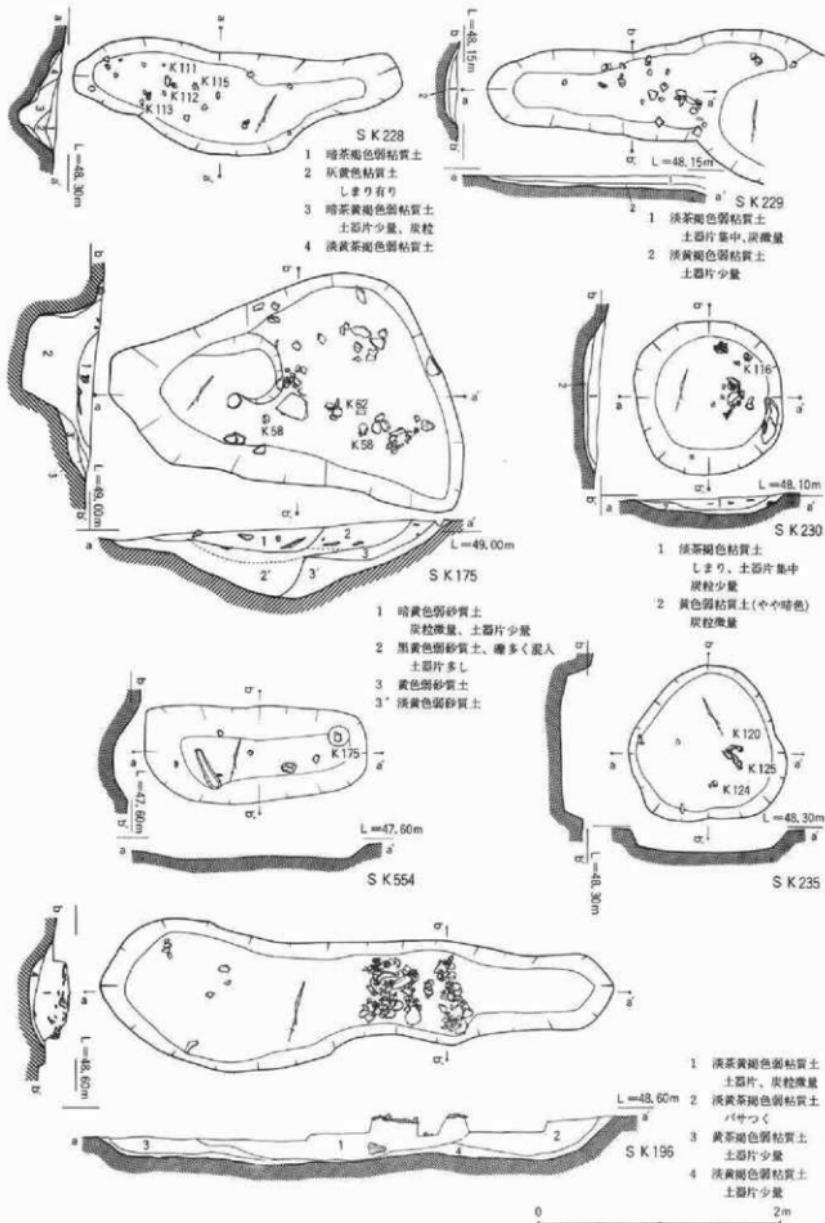
S K536 W51 N 14に位置し、長軸 3.0m・短軸 1.9m・深さ 1.0m を測る楕円形の土壙で、南北両際に浅い段を東西両際に深い段を有する。覆土は6層から成り、遺物は第1～第4層の弱粘質土から出土した。

S K649 W23 S 2に位置し、S B11に切られる土壙である。長軸 4.5m・短軸 4.0m・深さ 1.1m を測る不定形の土壙。覆土は9層から成り、全体に縦りのある堆積である。遺物は第3層北側肩部から短頸甕（K211）が、基底部から甕（K213）などが出土した。出土土器点数は91点を数える。

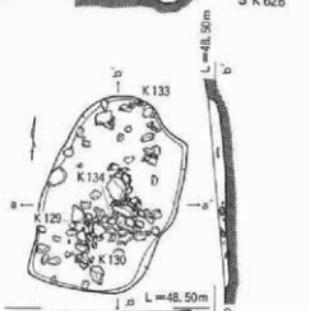
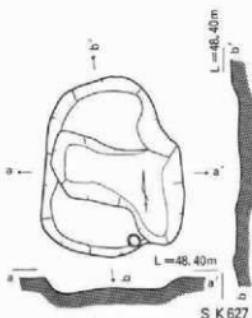
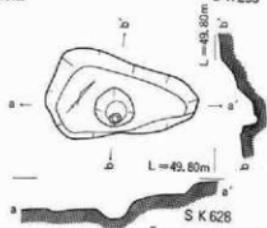
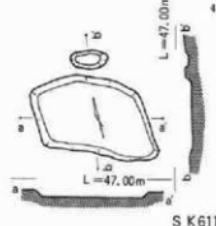
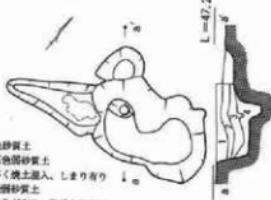
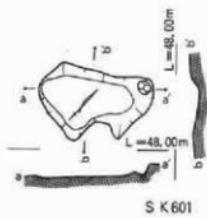
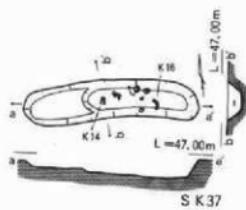
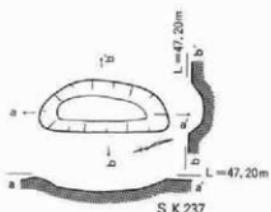
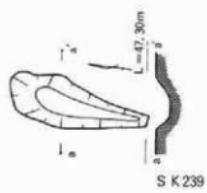
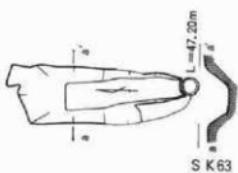
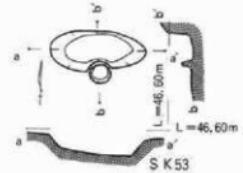
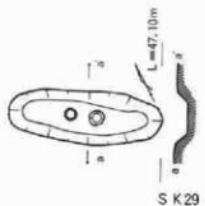
S K659 E13 N 50に位置し、長軸 4.5m・短軸 1.4m・深さ 0.94m を測る不定形の土壙。北端と南端で幅40cmほどの段状になり、調査では明らかにできなかったが少なくとも2基の土壙の切り合いを考えなければならない。覆土は3層から成り、第3層に縄まりがない。遺物は第3層の下半部で多くなり、出土土器点数は197点を数える。その内、第3層で 148点を数える。第3層下部からは縄文土器が数片出土した。

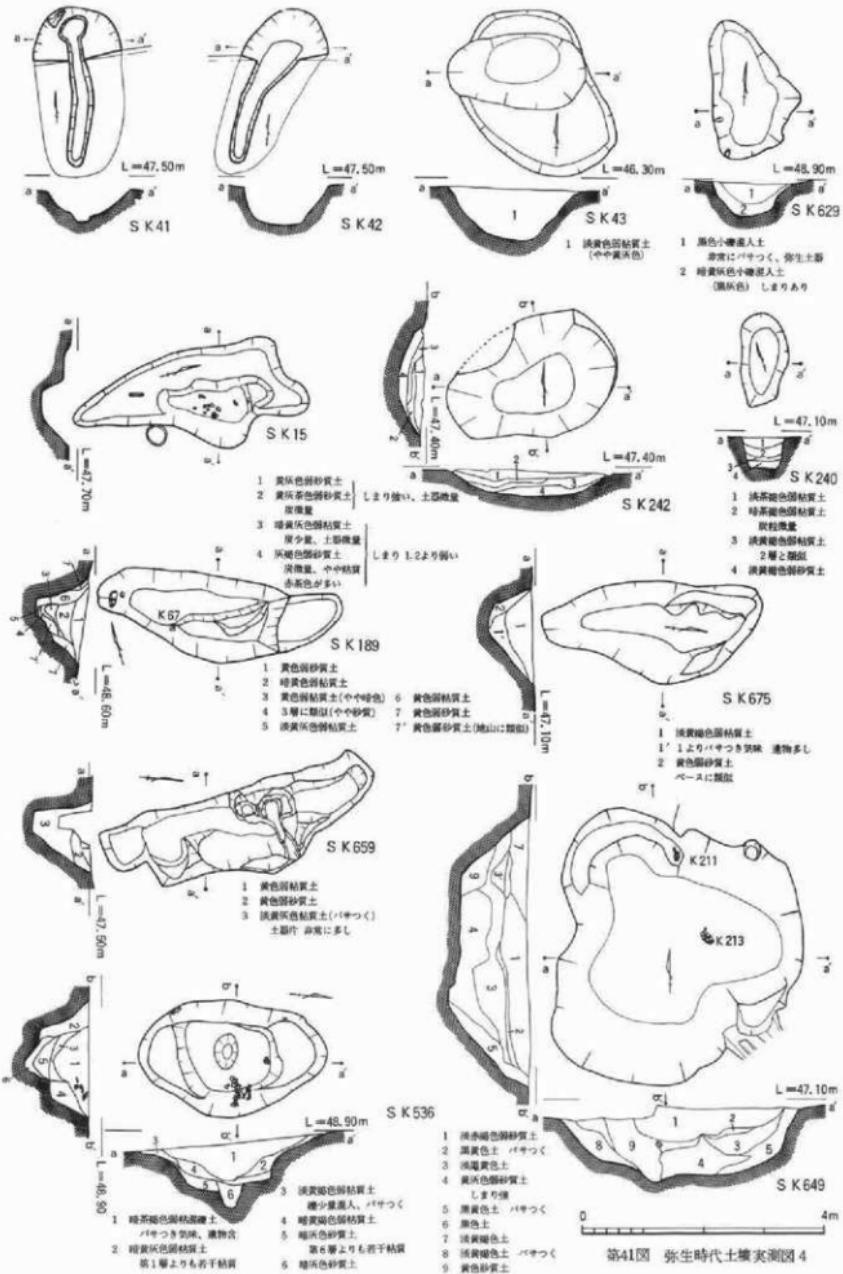


第38図 弥生時代土壤実測図 1



第39図 弥生時代土壤実測図 2





第41図 弥生時代土壤実測図 4

S K 675 E11 S 5 に位置し、長軸 3.6m・短軸 1.6m・深さ 0.75m を測る楕円形に近い土壌。覆土は 2 層から成り、遺物は全体に少量である。出土土器点数は 23 点を数える。

(7) その他の土壌

S K 41 W 185 N 29 に位置し、長軸 2.58m 以上・短軸 1.44m・深さ 0.47m を測る楕円状の土壌。最下部で一段落ち込み溝状を呈する。覆土は単一層、遺物は細片で出土土器点数 9 点を数える。

S K 42 W 182 N 29 に位置し、長軸 2.68m 以上・短軸 1.40m・深さ 0.62m を測る楕円状の土壌。覆土は S K 41 と同一、遺物は細片で出土土器点数 11 点を数える。S K 41・S K 42 共に④類土壌と考えられる。

S K 236 W 115 N 23 に位置し、長軸 3.1m・短軸 2.2m・深さ 0.2m を測る。覆土に多量の礫が混じる。遺物は破片が主体を占め、出土土器点数 55 点を数える。礫の量は遺構面（ベース）の質に類似する。

S K 656 E 2 N 1 に位置し、長軸 6.3m・短軸 4.7m・深さ 0.38m を測る楕円形の大型土壌。S K 656 の立ち上がりは緩やかで、長軸の南北線上に直径 40~50cm の掘り方をもち、直径 20cm・深さ 30~50cm の柱当りをもつビット 2 個が並ぶ。覆土は単一層である。S K 656 は主穴 2 本の建物跡の可能性が考えられる。

S K 671 E 20 N 13 に位置し、調査区外に延びる。長軸 3.7m 以上・短軸 1.4m・深さ 0.35~0.8m を測る断面 U 字形の土壌。遺物は破片が主体を占め、出土土器点数 48 点を数える。S K 672 と酷似する。

6. ビット列 S A (第42図・P.L. 13②)

弥生時代のビット列を 3 列検出しているが、柱穴の規模・構造などから建物跡の柱穴と異なり簡単な掘り方を有するものである。

(1) S A 1

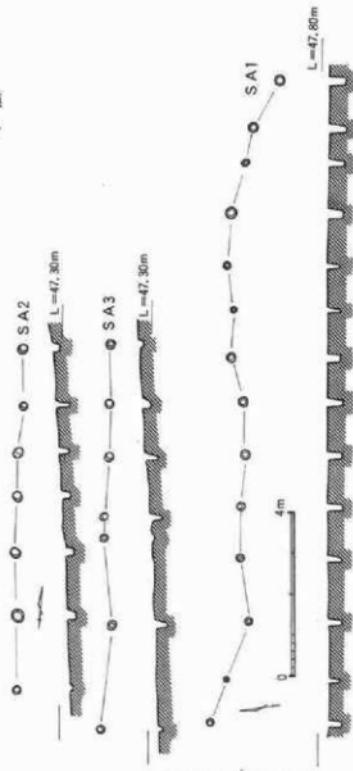
S A 1 は S B 04 と S B 05 の間に位置し、東西に延長 16.34m に及ぶビット列である。ビット間の距離は最短 0.88m・最長 1.56m を測り、1.12m から 1.32m に集中する。ビットは直径 12~24cm・深さ 26~44cm を測り、覆土は単一層である。尚、S A 1 の上部には幅 1.5~4.1m・延長 28.0m にわたり厚さ約 15cm の黄褐色弱粘質土（弥生時代遺物包含層）が堆積し、凹地状地形を呈する。

(2) S A 2・S A 3

S A 2・S A 3 は S B 06 の北東側に位置し、南北方向に延びるビット列である。S A 2 は延長 8.56m・最短 1.10m・最長 1.76m を測る。S A 3 は延長 9.64m・最短 0.52m・最長 2.56m を測る。S A 2・S A 3 共にビットは直径 18~24cm・深さ 20~32cm を測り、覆土は単一層である。両者は S B 06 に伴う櫛列と考えられる。

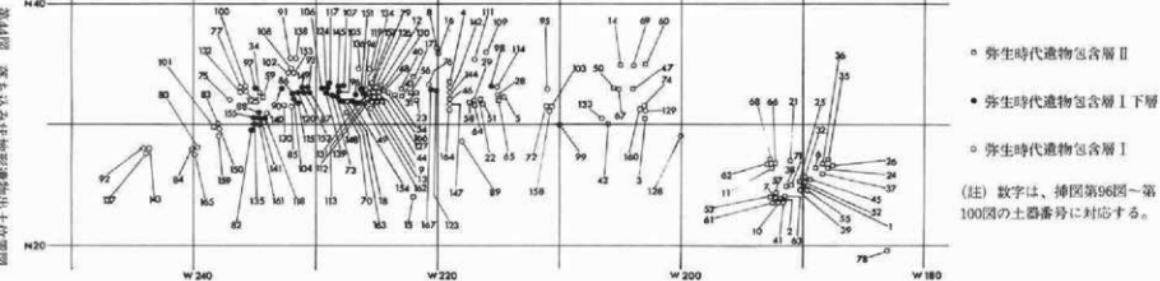
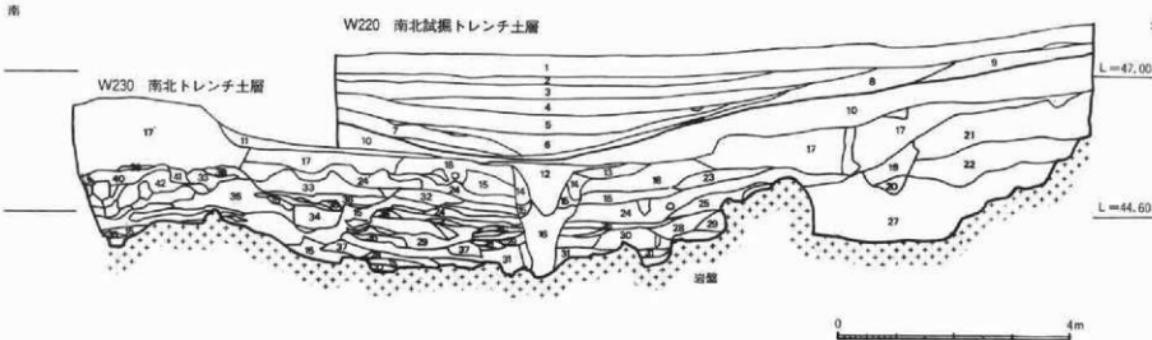
S A 1~S A 3 のビットは各々小規模で、掘り方・柱当たりの区別がなく、最下部の粘土の充填も認められない。

その他、S A 3 の東側において、東西方向の列状のビットを 2 列検出したが、その並びが不規則であるため判然としない。



第42図 ビット列実測図

7. 落ち込み状地形 (第43図・第44図・P.L. 13①④・P.L. 14①②)



落ち込み状地形は第Ⅰ区東半から第Ⅱ区全域にかけて、幅員 8.5~12m・延長約80m・深さ 1.2~1.5m にわたる凹地状の地形である。全体に緩傾斜でもって最深部に達し、最深部は比較的平坦な面を成す。最深部 W 186~W 197にかけては二段落ちとなって、直径 5~10cm・深さ10cm内外の小ピットが多数検出された。小ピットの性格は不明であるが、草木の根跡状のものが考えられる。落ち込み状地形の層序（第7図参照）は W 220南北試掘トレンドで、第1層一耕土・第2層一黄色砂質土・第3層一淡茶褐色粘質土（中世遺物包含層）・第4層一淡茶灰色土・第5層一灰褐色弱粘質土（弥生時代遺物包含層Ⅰ）・第6層一暗茶褐色弱粘質土（弥生時代遺物包含層Ⅱ）・第7層一灰褐色弱粘質土（第6層と同じ）・第8層一暗黄褐色土となり、第5層～第7層にかけて遺物量が豊富である。第8層以下は無遺物層となり、突出する岩盤を境として北辺と南辺で堆積状況が異なる。各々の土砂が北辺では厚く広く堆積するのに対し、南辺では薄く狭い範囲に堆積し灰色砂（第36層）・灰色粗砂（第37層）が目立ち、湧水が著しい。これらの土砂の堆積は、耕土下約4mの岩盤地形そのものが凹地状になっていたことに起因し、様々な流水作用・堆積作用が加わって弥生時代の落ち込み状地形が形成されたと考えられる。また、前節で触れた縄文時代においては、一部の岩盤が露頭した状態で人々の生活があったものと推測できる。

出土遺物の分布は、中世遺物—W 200~W 240・弥生Ⅰ—W 220~W 240・弥生Ⅱ—W 187~W 225付近に集中する。特に弥生土器の出土は、W 225~W 232にかけての弥生時代遺物包含層Ⅰ下層の土器群、W 188~W 193にかけての弥生時代遺物包含層Ⅱの土器群に包含層とは言え一括性の認められるものである。また、W 220~W 240の遺物は、S B01・S B02からの廐棄の一端を示すものと考えられる。

8. その他の造構

(1) 溝状造構 (S D1・S D21・S D26・S D27)

S D1 W 274N32に位置し、幅員 1.1m・延長3.06m・深さ0.82mを測り、平面形は④瓶土壤に類似する。土壤の南北両際は一段浅いテラスを有する。

S D21 W 77~W 85に位置し、南北方向に蛇行する。幅員0.86m・延長13.45m・深さ0.09mを測り、S B12との関係は不明である。覆土は淡黄褐色弱粘質土の單一層、遺物は弥生土器の細片のみである。

S D26 S B11の南側に位置し、掘立柱建物跡・S K 635を切る。幅員 1.8m・延長14.7m・深さ0.29mを測り、東半で S B11を取り囲むように屈曲する。覆土は淡黄褐色弱粘質土の單一層。遺物は弥生土器細片のみ。

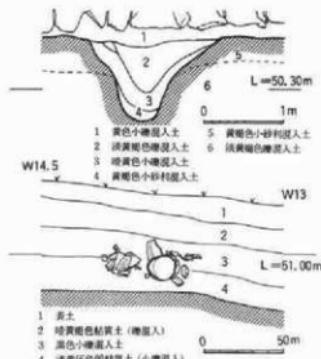
S D27 S B10の南東側に位置し、S B10に付属する S D 6に切られる。幅員1.35m・延長10.2m・深さ0.15mを測り、S B10を取り囲むように弯曲する。覆土・遺物は S D26・S D27は整穴住居の構造と密接な関係を有する造構と考えられる。

(2) 調査区北壁の造構 (第45図)

○調査区北壁のW83~W86に位置する幅員 1m・深さ約 1.2m の V 字状の落ち。覆土の状況から断面 V字構の可能性が強く、北傾斜面に延するものと考えられる。

○調査区北壁のW14から出土した土器の周辺。調査では明らかにできなかったが、第3層～第4層を切り込む土壤状の造構が考えられる。出土遺物（表 237）は包含層扱いとした。

尚、永久杭の埋設に伴い、頂上域 E W00N43地点において表土下60cmで造構の存在を確認した。



第45図 調査区北壁土層実測図

遺構名	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考	遺構名	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
S B01-C	直径8.2m、壁高0.4m	弥生土器、石鏡1、石切1	IV		S K 51	長軸3.24m、短軸0.62m、深さ0.23m			
S B02	≈7.2m ≈0.3~0m	弥生土器、磨石、石鏡1	I・II		53	≈1.6m、 ≈0.52m、 ≈0.35m	弥生土器		
S B03	≈6.8m ≈0.5m	弥生土器、印石、砥石	II		63	≈2.88m、 ≈0.92m、 ≈0.38m			
S B04	≈6.0m ≈0.7~0.1m	弥生土器、粘土陶、砾石	III・IV		87	≈1.88m、 ≈0.54m、 ≈0.18m	弥生土器	I	
S B05-C	≈8.0m ≈0.6m	弥生土器、磨石	II		165	長軸0.9m、短軸0.65m、深さ0.25m		III	遺物は倒立
S B06-b	長径6.2m、短径5.9m、≈0.5~0.6m	弥生土器、鐵鋤1	II・III		175	≈3.0m、 ≈1.7m、 ≈0.6m	弥生土器	II・III	
S B07	長径7.8m、短径7.6m、≈0.3~0.5m	弥生土器、勾玉1、砾石	IV	S B06より新	187	≈2.46m、 ≈1.0m、 ≈0.12m			
S B08	直徑5.8~5.5m、≈0.6~0.9m	弥生土器	III・IV		189	≈4.1m、 ≈1.4m、 深さ0.8m	底部1	弥生時代後期	土壤面(?)
S B09	長径6.8m、短径6.5m、壁高0.5~0.9m	弥生土器	II		195	≈4.2m、 ≈1.2m、 ≈0.35m	弥生土器	III	
S B10-C	≈9.1m、≈3.5m、≈0.5~0.6m	弥生土器、雲母製品1 石鏡1、砾石2	IV	礫土より訪越章	201	≈1.12m、 ≈0.5m、 ≈0.43m			
S B11	≈6.8m、≈6.2m、≈0.5~0.6m	弥生土器	III		203	≈1.04m、 ≈0.8m、 ≈0.13m			
S B12	南北38.3m、東西1.6m、壁高0.15m				204	≈1.45m、 ≈0.65m、 ≈0.22m	弥生土器		
S B13	≈5.4m、 ≈5.5m、 ≈0.1m				205	≈1.16m、 ≈0.36m、 ≈0.14m			
孤立柱建物	東西37.7m、南北3.4m (2層×2間)	弥生土器	弥生時代後期	S Bと同時期	206	≈1.3m、 ≈1.24m、 ≈0.42m			
S D 1	延長3.06m、幅1.1m、深さ0.82m			土壤状	210	≈1.44m、 ≈1.32m、 ≈0.21m			
S D 6	≈8.0m、≈0.5m、≈0.8~1m	弥生土器、劍1、印石1	II・III・IV	S B10に付属	211	≈1.26m、 ≈0.5m、 ≈0.5m			
S D 7	≈2.9m、≈0.74m、≈0.6m	弥生土器、砾石		S B05に付属	212	≈2m、 ≈0.68m、 ≈0.23m			
S D 21	≈13.45m、≈0.86m、≈0.09m	弥生土器			214	≈1.38m、 ≈0.78m、 ≈0.22m			
S D 26	≈14.70m、≈1.86m、≈0.29m				215	≈0.6m、 ≈0.48m、 ≈0.12m	弥生土器		
S D 27	≈10.20m、≈1.35m、≈0.15m				217	≈0.74m、 ≈0.38m、 ≈0.14m			
S K 1	長軸1.5m、短軸1.2m、深さ0.8m	弥生土器	I	S B02に隣接	218	≈0.54m、 ≈0.36m、 ≈0.21m			
15	≈3.5m、≈1.7m、≈0.5m	"	I		219	≈3.52m、 ≈2.16m、 ≈0.39m			
23	≈1.94m、≈0.86m、≈0.24m				220	≈1.2m、 ≈0.48m、 ≈0.05m	弥生土器		
25	≈1.25m、≈0.82m、≈0.12m				221	長軸2.54m、短軸1.6m、深さ0.1m			
27	≈1.40m、≈0.8m、≈0.09m				222	≈0.54m、 ≈0.52m、 ≈0.15m			
29	長軸2.5m、短軸1.9m、深さ0.2m	弥生土器、網片	弥生時代後期		223	≈1.82m、 ≈1.08m、 ≈0.13m			
30	≈2.0m、≈0.6m、≈0.36m				224	≈1.24m、 ≈0.7m、 ≈0.12m			
31	≈1.75m、≈0.86m、≈0.25m				225	≈0.84m、 ≈0.5m、 ≈0.21m			
34	≈1.98m、≈0.94m、≈0.24m				227	≈0.46m、 ≈0.24m、 ≈0.31m	弥生土器		
37	≈2.92m、≈0.6m、≈0.24m	弥生土器			228	≈2.7m、 ≈0.8m、 ≈0.3m	弥生土器	IV	
38	≈2.38m、≈0.84m、≈0.21m				229	≈2m、 ≈0.62m、 ≈0.06m			
39	長軸0.9m、短軸0.66m、深さ0.17m				230	≈1.26m、 ≈1.2m、 ≈0.11m	弥生土器		
41	≈2.58m(?)、≈1.44m、≈0.47m				232	≈4.127m、 ≈1.127m、 ≈0.1m			
42	≈2.58m(?)、≈1.40m、≈0.62m				233	≈0.78m、 ≈0.75m、 ≈0.14m			
43	≈2.28m、≈2.34m、≈1.07m	弥生土器			234	≈1.14m、 ≈0.84m、 ≈0.13m	弥生土器(夏1)	D地区, W133	
49	≈1.32m、≈1.02m、≈0.25m		地上		234	≈2.5m、 ≈1.6m、 ≈0.3m	弥生土器(壹1)	I	土壤面(?)
50	≈2.52m、≈0.96m、≈0.18m	弥生土器			235	≈3.5m、 ≈1.4m、 ≈0.8m	弥生土器網片		地土

遺構名	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考	遺構名	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
S K 235	長軸1.3m, 短軸1.25m, 深さ0.25m × 0.56m, × 0.48m, × 0.06m	弥生土器(ミニチュア2)	II		S K 614	長軸1.06m, 短軸0.42m, 深さ0.05m × 0.66m, × 0.56m, × 0.05m			
236	長軸3.1m, 短軸2.2m, 深さ0.2m × 2.32m, × 0.84m, × 0.2m	弥生土器	IV	C地区	615	× 1.38m, × 0.36m, × 0.28m × 1.66m, × 0.84m, × 0.11m	弥生土器		
237	× 1.44m, × 1.16m, × 0.24m × 2.36m, × 0.5m, × 0.21m			D地区, 墓覆石	616	× 0.74m, × 0.56m, × 0.13m × 1.12m, × 0.44m, × 0.67m	弥生土器		
238					617	× 1.92m, × 0.8m, × 0.24m	弥生土器		土壤層(?)
239					621	× 1.5m, × 0.62m, × 0.2m	弥生土器		
240	× 1.5m, × 1.0m, × 0.5m × 3.9m, × 1.8m, × 0.5m	弥生土器細片	III	土壤層(?)	623	× 3.16m, × 1.2m, × 0.4m × 1.18m, × 0.49m, × 0.12m	丸石, 弥生土器		
241					624	× 2.94m, × 2.30m, × 0.19m			
242	× 2.8m, × 2.0m, × 0.4m × 0.6m, × 0.36m, × 0.26m	弥生土器細片			627	× 1.92m, × 1.24m, × 0.24m × 1.50m, × 0.52m, × 0.16m	弥生土器	III	燒土
243					628	× 2.24m, × 1.46m, × 0.28m	弥生土器		土壤層(?)
244	× 1.04m, × 0.32m, × 0.17m × 0.48m, × 0.44m, × 0.11m				629	× 1.92m, × 1.4m, × 0.12m	弥生土器		
245					630	× 1.50m, × 0.52m, × 0.16m	弥生土器		
246	× 0.88m, × 0.7m, × 0.22m × 1.06m, × 0.68m, × 0.56m				631	× 2.52m, × 0.74m, × 0.18m	弥生土器		土壤層(?)
247					632	× 1.52m, × 0.64m, × 0.08m	弥生土器		土壤層(?)
250	× 0.64m, × 0.4m, × 0.41m × 3.82m, × 1.9m, × 0.34m				633	× 3.84m, × 0.68m, × 0.08m × 3.10m, × 0.86m, × 0.3m	弥生土器	II	土壤層(?)
501	× 3.6m, × 1.6m × 3.8m, × 3.8m	弥生土器		包含層覆石	634	× 1.86m, × 1.5m, × 0.49m × 4.50m, × 4.0m, × 1.1m	弥生土器	II	土壤層(?)
503					635	× 1.86m, × 1.5m, × 0.49m × 4.50m, × 4.0m, × 1.1m	弥生土器	II	土壤層(?)
516	× 0.8m, × 0.6m × 1.8m, × 1.8m	弥生土器			636	× 1.86m, × 1.5m, × 0.49m × 4.50m, × 4.0m, × 1.1m	弥生土器	III・IV	S B11より古 S B11より古
524					637	× 1.8m, × 0.7m, × 0.22m × 7.1m, × 1.5m, × 0.64m	弥生土器		土壤層(?)
526	× 4.2m, × 3.5m × 2.6m, × 1.4m	弥生土器	IV		638	× 6.3m, × 4.7m, × 0.38m × 2.8m, × 0.9m, × 0.05m	弥生土器		3段落ち
527					639	× 1.5m, × 0.4m, × 0.38m × 4.5m, × 1.4m, × 0.94m	圓文・弥生土器・火石	IV	
528	× 2.8m, × 1.0m 長軸3.0m, 短軸1.9m, 深さ1.0m	弥生土器			640	× 3.7m, × 1.4m, × 0.35~0.8m × 3.8m, × 1.3m, × 0.43m	弥生土器		溝状造構
536				土壤層(?)	641	× 2.3m, × 1.0m, × 0.39~0.45m × 3.6m, × 1.6m, × 0.75m	弥生土器		溝状造構
554	× 1.8m, × 0.8m, × 0.2m × 1.86m, × 1m, × 0.12m	弥生土器	IV		642	× (1.86)m, × 1.64m, × 0.68m	弥生土器		土壤層(?)
601					643				
602	× 1.9m, × 0.92m, × 0.68m × 1.96m, × 0.78m, × 0.33m	燒土			644				
603					645				
604	× 0.96m, × 1.44m, × 0.08~0.37m × 2.16m, × 1.42m, × 0.13~0.45m	燒土			646				
605					647				
607	× 1.72m, × 0.76m, × 0.55m × 1.70m, × 0.95m, × 0.1~0.43m	燒土			648				
608					649				
609	× 1.06m, × 0.66m, × 0.08m × 2.2m, × 0.8m				650				
610					651				
611	× 1.84m, × 1.28m, × 0.09m 磨石1, 弥生土器				652				
613	× 1.2m, × 0.5m, × 0.29m 弥生土器				653				

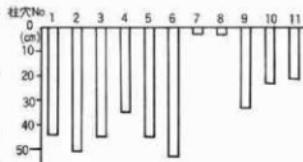
第3節 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構の検出は、弥生時代の整穴住居跡検出面と同一面である。遺構は落ち込み状地形とS B 03の間に位置する方形整穴住居跡1棟のみである。調査地区全体からの遺物量も極めて限られるため、古墳時代の船岡山については不鮮明である。

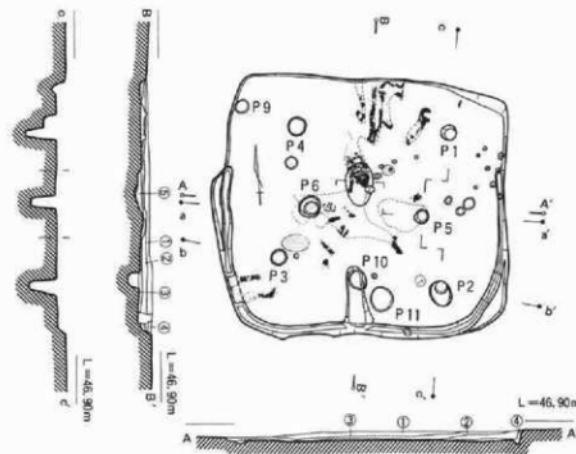
1 方形整穴住居跡 S B

S B 14 (第46図・第6表・P L. 14④⑤)

S B 14の規模は、東西 4.8m・南北 4.2mを測り若干長方形を呈する。壁高は西側を除いて約20cmあり、南半部の壁際に沿って幅20cm・深さ10cmの壁溝が廻らされる。床面の中央北寄りに、長軸 0.6m・短軸 0.4m・深さ 0.1mの梢円形状の炉跡があり、焼土が堅く堆積していた。床面の南側中央には、長軸 1m・短軸 0.4m・深さ 0.1mの綫長の土壠があるが、性格等は不明である。主柱穴は4本 (P 1~P 4) で、各々直径20~40cm・深さ約35~50cmの掘り方をもつ。炉際東西に直径24~36cm・深さ45~53cmの柱穴 (P 5・P 6) があり、棟持柱の構造をもつと考えられる。S B 14は床一面に炭化材・焼土が認められ、焼失住居と考えられる。遺物は床面から甕 (C 1)・小型丸底壺の破片 (C 3) が出土したのみである。覆土は全体に堅く締まった状態であった。



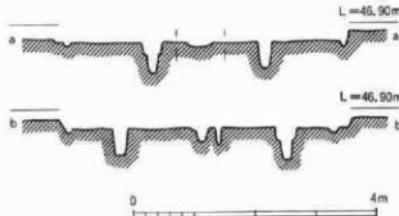
第6表 S B 14柱穴深度



2、その他

その他調査区内において微量の古式土器類・須恵器が出土したが、殆んど上層部からの出土である。そのため多少遺構の削平があったものとも考えられる。

- ① 暗黄褐色砂質土
- ② 暗赤褐色砂質土 炭化材・焼土
- ③ 黄褐色砂質土
- ④ 暗赤褐色砂質土
- ⑤ 燃土層 (P)



第46図 S B 14実測図

第4節 鎌倉～江戸時代の遺構

鎌倉～江戸時代の遺構は、基本的層序にみる黄褐色粘質土上面での検出である。また、第Ⅱ区落ち込み状地形上部での遺構検出は、中世遺物包含層上面と弥生時代遺物包含層Ⅰ上面とに区別できる。遺構は主に掘立柱建物跡・土壙があるが、遺物を伴わない遺構が大半を占めるため時期決定し難い。

1、掘立柱建物跡 S B (第47図～第50図・P.L. 16③・P.L. 17①～⑤)

掘立柱建物跡は計16棟検出したが、柱穴の規模は直径約20～30cm・深さ約30～60cmのものが大部分で、覆土は黒色土 (S B 108・S B 111) および黄褐色土となる。掘り方については大部分が不明である。

(1) S B 101 W 265N 38に位置し、桁行4間 (東5.16m・西5.0m)・梁行2間 (南4.0m・北3.84m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-4°-Wにおく。

(2) S B 102 W 272N 36に位置し、桁行2間 (東3.32m・西3.3m)・梁行2間 (南3.02m・北3.0m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-7°-Wにおく。

(3) S B 103 W 272N 38に位置しS B 102に重複する。桁行1間 (東2.64m・西2.4m)・梁行1間 (南1.62m・北1.74m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-13°-Wにおく。

(4) S B 104 W 272N 45に位置しS B 102の北側にある。桁行1間 (東3.1m・西3.2m)・梁行1間 (南2.68m・北2.72m) の規模をもち、南側に扉がつく構造と考えられる。桁行主軸はN-5°-Wにおく。

(5) S B 105 W 278N 41に位置し、桁行1間 (東2.48m・西2.44m)・梁行1間 (南1.62m・北1.68m) の規模をもつ。S B 103に類似する。桁行主軸方向はN-23°-Wにおく。

(6) S B 106 W 233N 43に位置し、桁行3間 (東4.46m・西4.24m)・梁行2間 (南・北2.5m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-5°-Wにおく。

(7) S B 107 W 216N 29に位置し、桁行3間 (東不明・西4.08m)・梁行1間 (南不明・北2.92m) の規模をもつ。西側に扉がつく構造と考えられる。中世遺物包含層除去面で検出。桁行主軸はN-5°-Wにおく。

(8) S B 108 W 115N 27に位置し、同規模の建物が2棟重複する。東建物跡は桁行3間 (中央6.12m)・梁行2間 (4.52m) の規模をもつ、総柱の建物跡である。桁行主軸方向はN-5°-Eにおく。

(9) S B 109 W 75N 2に位置し、桁行3間 (東3.56m・西3.76m)・梁行2間 (南3.15m・北3.18m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-31°-Eにおく。

(10) S B 110 W 75N 2に位置しS B 109に重複する。桁行3間 (東不明・西3.92m)・梁行3間 (南不明・北4.14m) の規模をもつ。柱間は極めて不揃いである。桁行主軸方向はN-16°30'-Eにおく。

(11) S B 111 W 45N 11に位置し、桁行3間 (東7.38m・西6.0m)・梁行2間 (北3.6m) の規模をもつ。柱穴は他の建物跡に比して大きい。桁行主軸方向はN-15°-Eにおく。

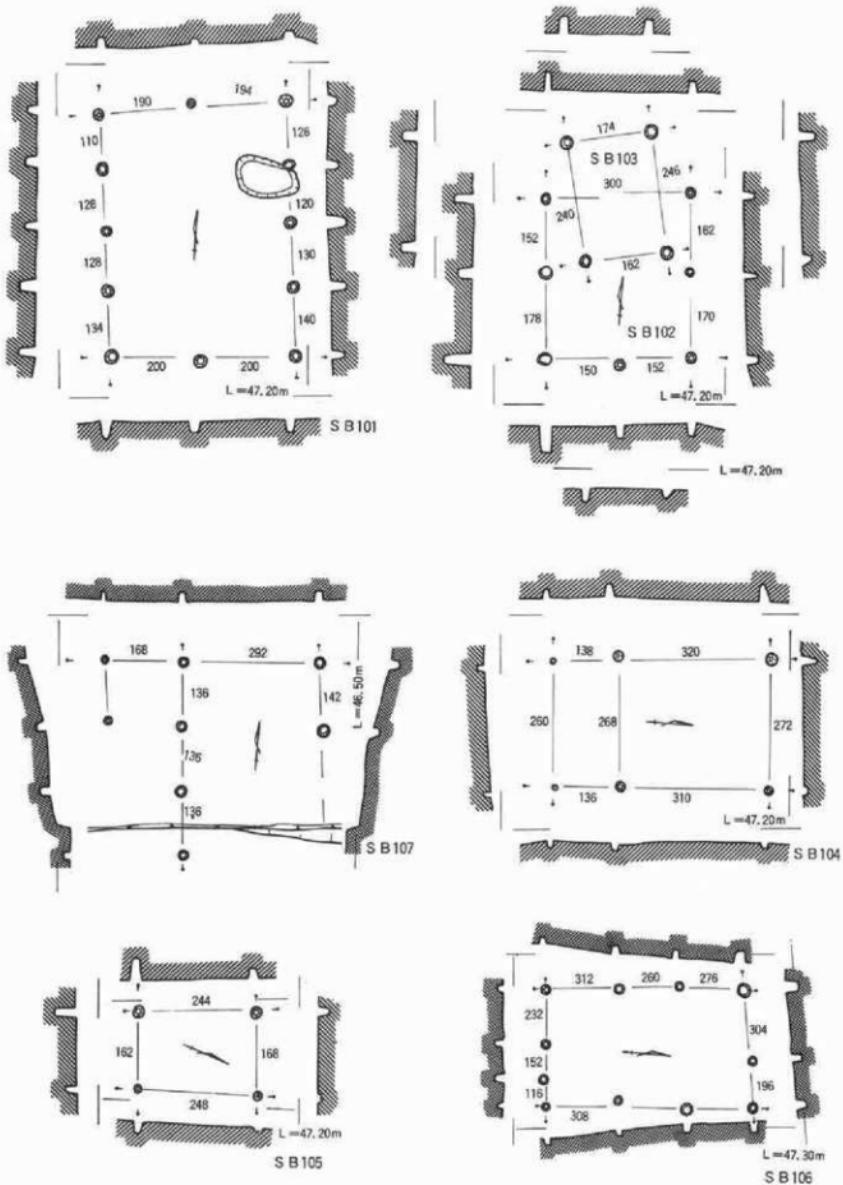
(12) S B 112 W 51N S 00に位置し、桁行2間 (南4.56m・北4.71m)・梁行2間 (東3.92m・西3.08m) の規模をもつ、総柱の建物跡と考えられる。桁行主軸方向はN-70°-Wにおく。

(13) S B 113 W 41N 3に位置し、桁行2間 (南不明・北6.13m)・梁行1間 (東3.0m・西不明) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-79°-Eにおく。

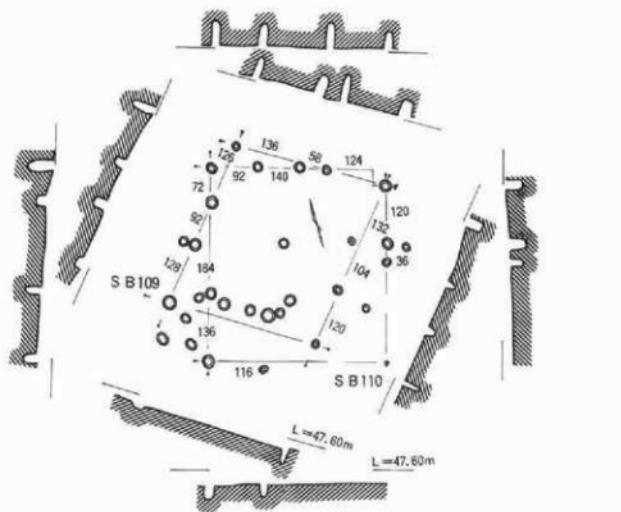
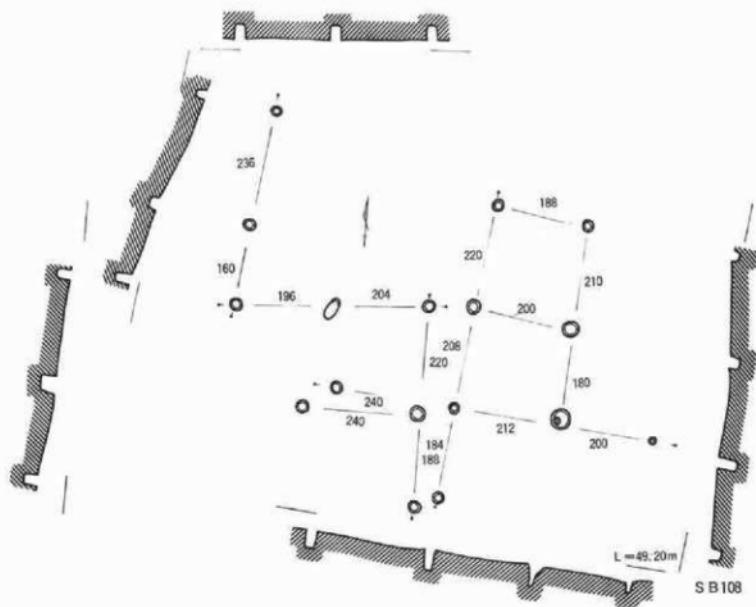
(14) S B 114 E 18N 2に位置し、桁行4間 (東5.01m・西5.04m)・梁行1間 (南3.44m・北3.4m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-11°-Wにおく。

(15) S B 115 E 24N 4に位置し、桁行2間 (東2.68m・西3.02m)・梁行1間 (南2.52m・北2.64m) の規模をもつ。桁行主軸方向はN-5°-Wにおく。

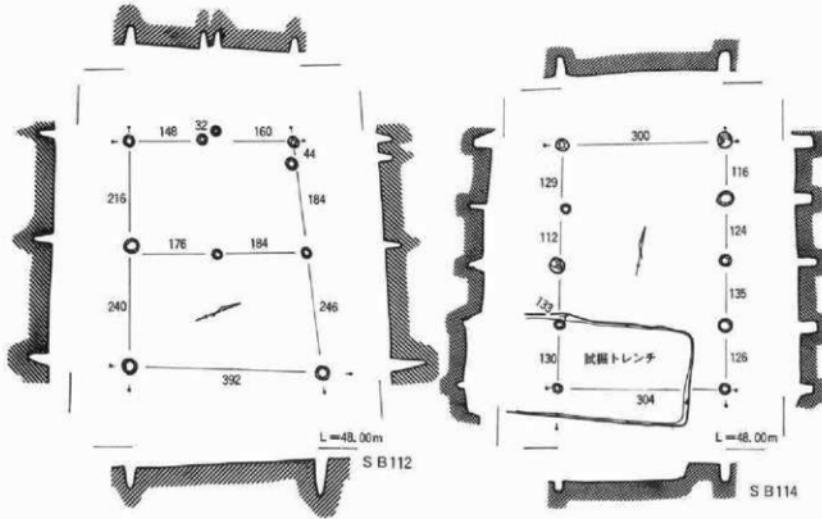
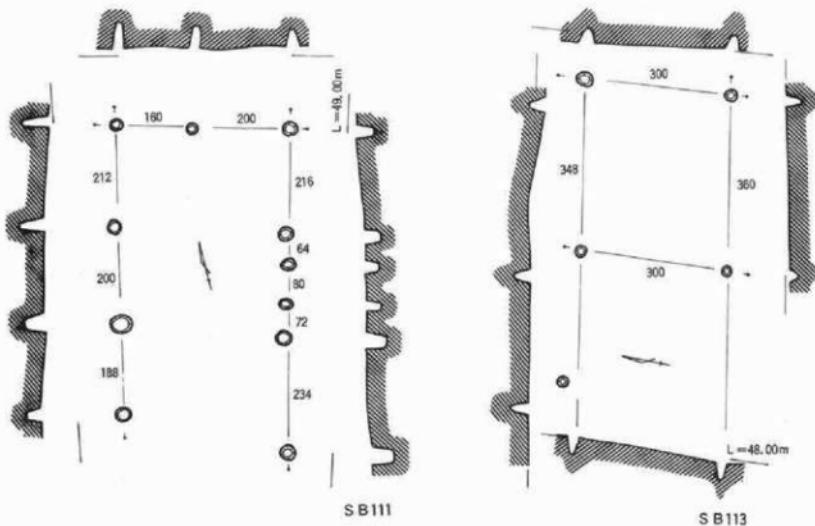
(16) S B 116 E 35N 6に位置し、桁行2間 (南4.5m・北4.44m)・梁行1間 (東2.04m・西2.2m)



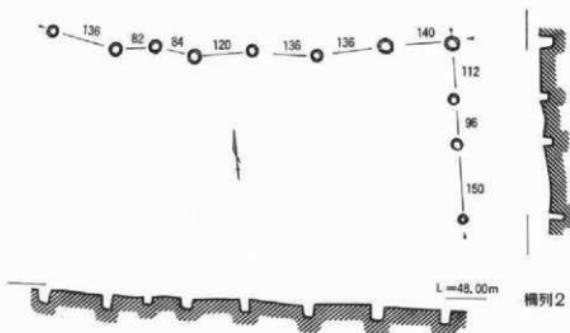
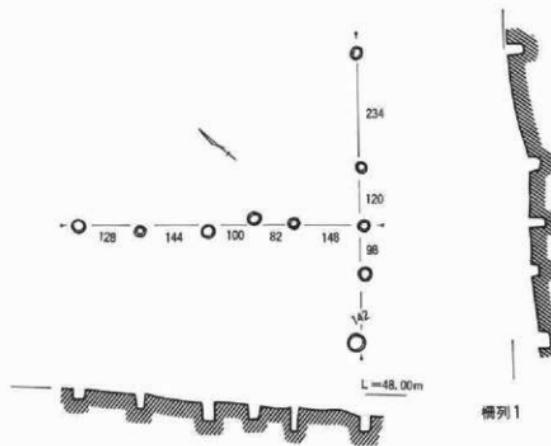
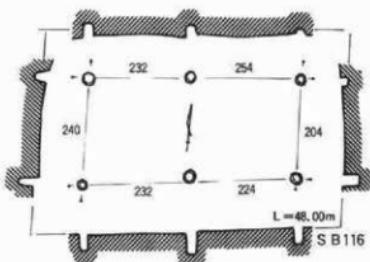
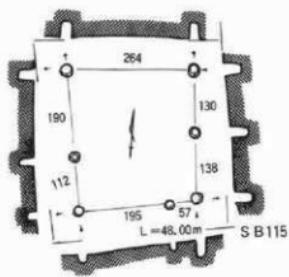
第47図 据立柱建物跡実測図 1



第48图 挖立柱建筑物实测图 2



第49図 振立柱建物跡実測図 3



0 2m

第50図 摂立柱建物跡・ピット列実測図

) の規模をもつ。平行主軸方向は N-85°-E におく。

その他、S B 102西側の W 276N37.5において礎石3ヶ所(4.3m)を、W 148N22とW92N 9付近においてピット列を検出したが、建物跡としての確認までには至らなかった。

2、ピット列 S A (第50図・P.L. 17⑤⑥)

鎌倉～江戸時代のピット列を2列検出しているが、柱穴の規模・構造は建物跡の柱穴と同様のものである。

S A 2・S A 3

S A 2 は S B 109の北西側に位置し、長辺6.02m・短辺5.94mを測り、一字形を呈する。ピット間の距離は、最短0.82m・最長2.34mを測る。ピット列は比較的直線的に延びる。

S A 3 は S B 109の北側に位置し、長辺8.42m・短辺3.58mを測り、一字形を呈する。ピット間の距離は最短0.82m・最長1.5mを測る。東西に並ぶピット列が比較的蛇行する。

3、土壤墓 S X・土壤 S K (第51図～第53図・P.L. 18・P.L. 19・P.L. 20①～④)

中世以後の土壤はW 194N34にある露頭の大岩を意識するかのように集中している。土壤は出土遺物・覆土の状況などから、①中世遺物を含み、覆土に多量の炭粒が混入する土壤、②遺物を含まないが、覆土が①と同一の土壤、③覆土に多量の焼土粒(塊)を含む土壤、④掘り方の基底部で長方形を呈し、基底部まで小礫をため込んだ土壤、⑤大型で、炭層と焼土層で形成された土壤、⑥その他に分類することができる。

(1) ①類土壤—S X 1～S X 8・S K33・S K40・試掘 S X 1・試掘 S X 2 落ち込み状地形の肩部に多く、W 220～W 181に集中する。S X 8・試掘 S X 2 は集石遺構であるが、遺物を伴うため当項で扱う。

S X 2 W 196N33に位置し大岩の南西際にある。①類の中では大型で長軸3.1m・短軸1.8m・深さ0.1mを測り、楕円形を呈する。土壤の南北中軸線上に人頭大から拳大の川原石・片岩が集中している。遺物は石の間に挟まれたもの(T19・T21)・基底部のもの(T18・T48・T49)・覆土中のもの(T16・T17)がある。

S X 3 W 194N33に位置し大岩の南際にある。長軸1.6m・短軸1.5m・深さ0.15mを測り、垂な円形を呈する。覆土は2層から成り、上層に、多数の片岩が込められ、下層は無遺物である。

試掘 S X 1 W 220N39に位置し、長軸1.35m・短軸1.1m・深さ0.2mを測り、隅丸長方形を呈する。壁周に焼土が認められ、下層に厚さ4cmの炭層が堆積し、壇内に多数の川原石・片岩が込められていた。遺物はなかったが、中世遺物包含層を切り込んでいる。

S X 8 W 197N31に位置し、南北1.7m・東西1.1mの範囲に集石がみられる。集石は30～50cm大の片岩を多用し、石の間の堆積土から多量の炭粒が検出された。遺物は石の間に挟まれて羽釜片が出土した。

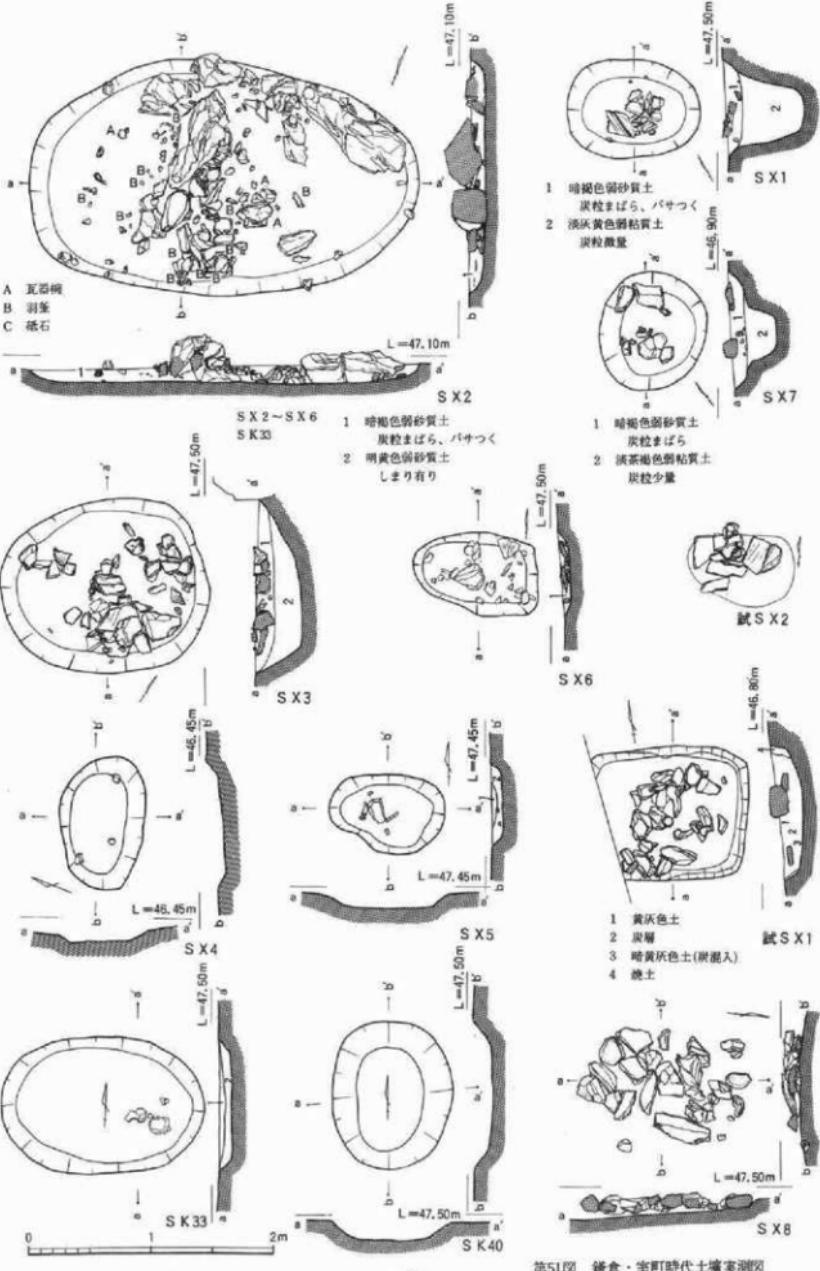
(2) ②類土壤 S K47・S K48 ①類の集中範囲内にあり、覆土の状況も同一である。

(3) ③類土壤 S K17・S K18・S K61・S K62・S K72・S K75・S K100・S K101・S K122～S K124・S K202・S K214・S K535・S K674 調査区全体に分布するが、中でも①類の集中する東側W 178～W 159に集中する傾向がある。

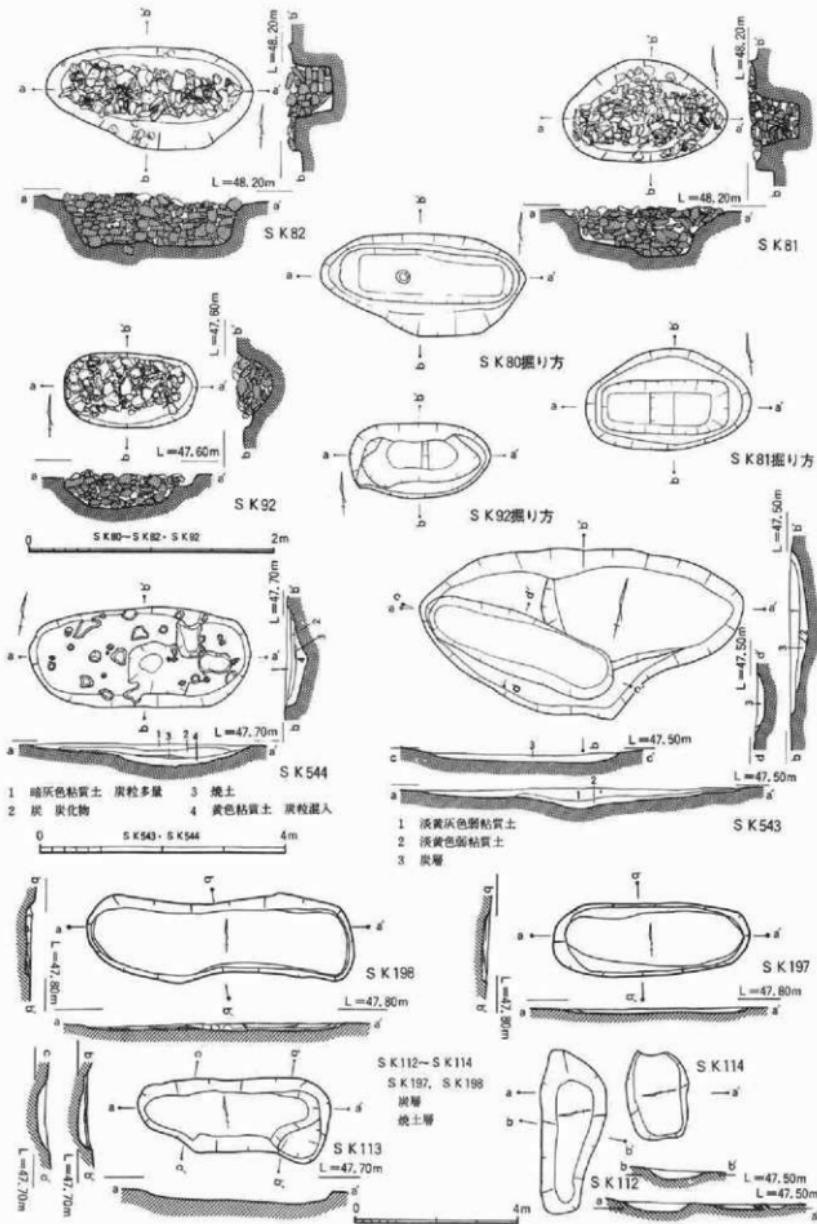
S K61 W 176N31に位置し、現代の溝に切られる。長軸1.2m・短軸0.6m・深さ0.4mを測り、楕円形を呈する。遺物はなく、覆土は焼土塊(粒)が主体となる。

(4) ④類土壤 S K80・S K81・S K92・S K119・S K221～S K223・S K225 W 149ライン上とW84N16付近の2ヶ所に集中し、土壤内に土砂の堆積がみられない。

S K81 W 149N27に位置し、溝S D 4を切る。長軸1.4m・短軸0.8m・深さ0.4mを測り、楕円形を呈する。周囲に幅10～25cm・深さ5cmの段をもち、基底部の東半が一段深くなる。土壤内は5～15cm大の円礫が込められる。遺物は上部で瓦器碗の細片が1点出土したのみで、土壤に伴う遺物であるか否か判断し難い。



第51図 錦倉・宝町時代土壤実測図



第52図 錦糸～江戸時代土壤実測図

S K 225 W 85N 18に位置し、長軸 3.0m・短軸 2.4m・深さ 0.2mを測り、不定形を呈する。土壌の基底部は凹凸が著しく、乱雜な集石が4ヶ所ほど認められる。土壌の上部には縮まりのない砂質土が堆積していた。出土遺物はないが、上部の堆積土（切り込み面は不明）の状況などから新しい時期を考えなければならない。

(5) ⑤類土壌 S K 112～S K 115・S K 197・K 198・S K 217・S K 543・S K 544 第V区の2基を除けばW 125～W 108に集中し、二群を成す。

S K 198 W 111N 6に位置し、長軸 6.6m・短軸 2.0m・深さ 0.2mを測る最大規模の土壌である。土壌の基底部は比較的平らで堅く縮まった状態であった。覆土は4層から成り、東半は炭混入土と炭層、中央は焼土層、西半は焼土層と炭層が堆積する。

S K 544 W 23S 5に位置し、長軸 3.6m・短軸 1.7m・深さ 0.35mを測る橢円形の土壌である。土壌の基底部は凹凸が著しく堅く縮まった状態であった。覆土は4層から成り、第1層一炭粒を多量含む暗灰色粘質土、第2層一厚さ10～20cmの炭層・第3層一厚さ5cmの焼土層（土壌全体に薄く広がる）・第4層一炭粒を含む黄色粘質土が堆積する。出土遺物は炭層から瓦器碗の小片が1点出土したのみである。

(6) その他の土壌

その他の土壌とは、基本的層序にみる黄褐色粘質土上面での検出遺構を主体としている。同一遺構において弥生時代の遺構と判断した土壌があり、それらの土壌との関係を明確にすべきであったが、結果的には弥生土器がまとまって出土した土壌のみを弥生時代の頃で扱うことになった。また、調査では明らかにできなかったが、検出面が南へ向かって低くなる緩傾斜地であることから弥生時代以後の凹凸の著しい面に弥生時代遺物包含層の二次的な堆積が考えられるものもある。

4. 溝 S D

S D 1 W 241～W 253に位置する幅員 0.3m・延長約12m・深さ 0.1mの溝。中世遺物除去面での検出。

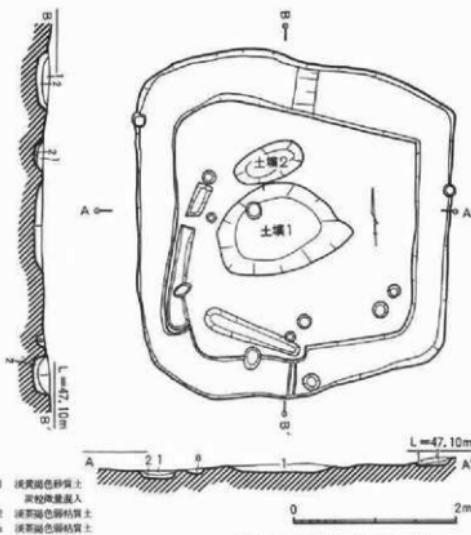
S D 4 W 148～W 152に位置し、S K 80・S K 81などに切られる溝である。幅員0.88m・延長12.5m・深さ0.17mを測る。出土遺物はない。

S D 11 W 20～W 37に位置する幅員 0.3m・延長20.0m・深さ 0.1mを測る溝状遺構である。緩傾斜面の南側に向けてU字形に折れ曲がり、一部で瓦器碗を伴う土壌に切られる。

第5節 その他の遺構

1. 方形周溝遺構 (第54図・P.L. 20⑤)

S B 04の南西側に位置し、弥生時代遺物包含層の滲りを切っている。東西 3.0m・南北 3.1mを測り、幅員 0.4～0.6m・深さ 0.1mの溝が方形に廻る。小ピット12個は当遺構と関係のないものと考えられる。ほぼ中央に橢円形の土壌2基を検出したが、覆土に微量の炭粒を含み遺物は出土しなかった。



第54図 方形周溝遺構実測図

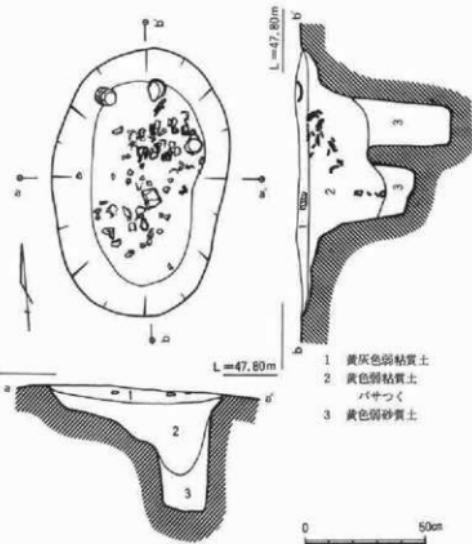
2、SK 549 (第55図・P.L. 20

(4)

W 5 S 4 に位置し、長軸 1.1m・短軸 0.7m の橢円形を呈する。深さは北側で 0.65m を測り柱穴の可能性がある。遺物は第 1 層・第 2 層から黒色小皿 (E 9~E 16) が多數出土した。また、SK 549 檜出面において寛永通宝 6 枚 (E 19~E 24)・銅製笄 (E 17) が出土した。

3、SB 10 上部落ち込み (第56図
・P.L. 20(6))

弥生時代 SB 10 上部に東西 11.2m・南北 10.4m に広がる落ち込み伏地形を検出した。堆積土は厚さ 20cm の黒色弱粘質土で、SB 08・SB 11 の上部でも検出した。遺物は SB 10 上部においてのみ多量の土師器皿 (E 4~E 8) が出土した。



第55図 SK 549 実測図



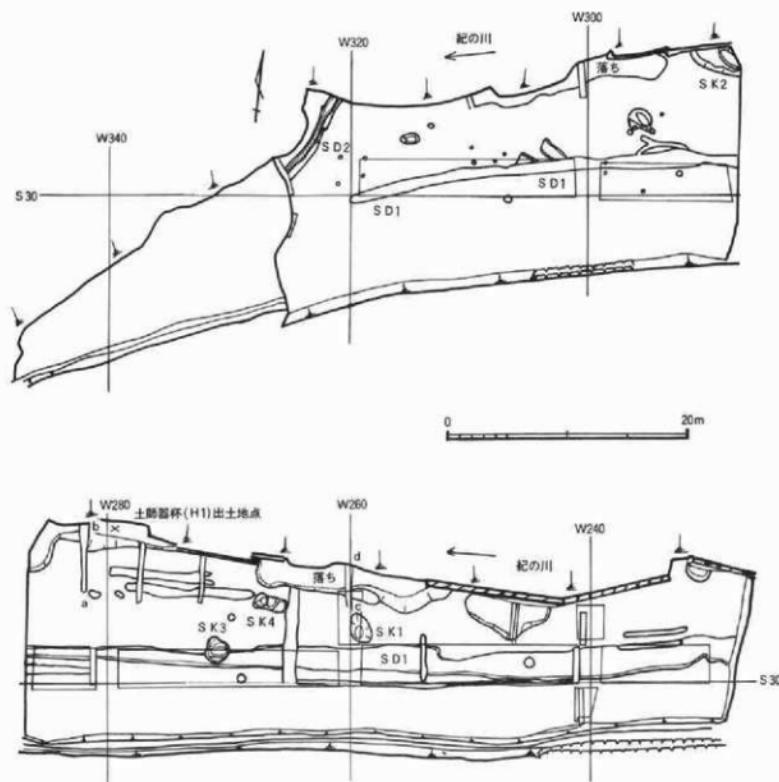
第56図 SB 10 上部落ち込み遺物出土状況実測図

第6節 南岸調査区

当地区は調査前まで水田・畑地として利用されていた地で、島域の南縁部とほぼ同レベルの遺構面を成している。結果的には、島域と関係する縄文時代から古墳時代にかけての遺構・遺物は検出されなかった。

1、調査区の土層（第58図・P.L. 21③）

調査区の基本的層序は、耕土・床土・灰褐色粘質土（中・近世遺物包含層）、以下地山となる。W 240～W 250 S 32以前では、山上（妹山）からの湧水の影響で深さ約0.5mまで青灰色粘泥となり、W 255～W 285にかけての北縁部では黄灰色土・茶褐色土・暗黄色土（中・近世遺物包含層）などが堆積している。また、W 310以西S 32以前には岩盤まで小砂利の堆積が認められた。北縁部の土砂の堆積状況は、島域の南縁部と類似した状況を示している。尚、北縁部の淡黄色土から土師器の皿（H 1）が出土した。



第57図 南岸調査区全体図

2、検出遺構 (第57図・第59図・P.L. 21②)

検出遺構は、溝状遺構SD 1を中心とした溝状遺構と土壌4基などがあり、全て地表面で検出した。

(1) SD 1 幅員約0.6~3.0m・延長92m・深さ0.1~0.2mを測り、W288以西では南へ緩やかにカーブする。覆土は灰褐色粘質土に類似し、遺物は摩滅の著しい土師器小皿(E 1・E 2)・瓦器碗・陶磁器(E 3)・鉄釘などが出土した。SD 1に平行する溝状遺構は、全て同質の覆土である。

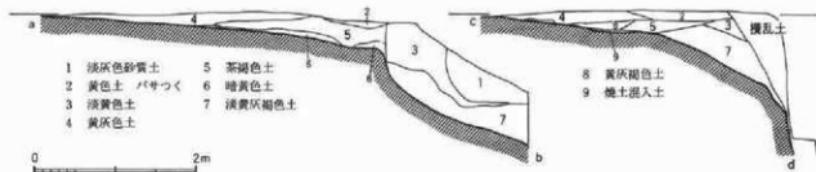
(2) SD 2 幅員0.4~0.6m・延長7.4m・深さ0.08mを測り、地形に沿う溝である。覆土は2層から成り、第1層一褐色土、第2層一淡褐色土、以下地山となる。

(3) SK 1 W 259 S 29に位置し、長軸2.7m・短軸1.6m・深さ0.54mを測る橢円形の土壙である。覆土は4層から成り、第2層・第3層は暗赤色~明赤色を呈する焼土となる。遺物は出土しなかった。

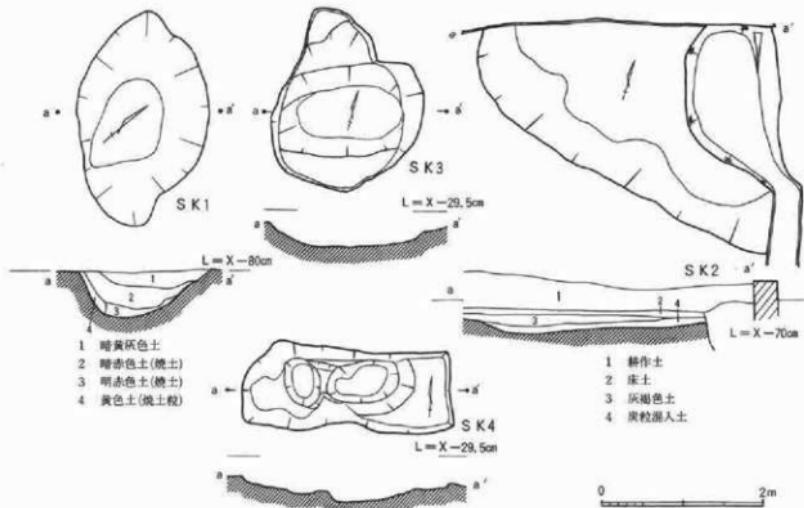
(4) SK 2 W 289 S 19に位置し、長軸3.4m以上・短軸2.8m以上・深さ0.24mを測る大型の土壙。

(5) SK 3 W 271 S 27に位置し、長軸2.3m・短軸1.9m・深さ0.26mを測り不定形を呈する。覆土はSK 1と同様に多量の焼土を含む。遺物は出土しなかった。

(6) SK 4 W 266 S 24に位置し、長軸2.6m・短軸0.88m・深さ0.28mを測り長方形を呈する。土壙の基底部は凹凸が著しい。覆土・遺物は、SK 1・SK 3と同じである。



第58図 南岸調査区土層図



第59図 南岸調査区土壙実測図

遺構名	規 模	出 土 貨 物	時 期	備 考	遺構名	規 模	出 土 貨 物	時 期	備 考
S B 101	東西2間×南北4間 (3.8X5.2m)				S K 20	長軸2.18m, 短軸1.42m, 深さ0.15m			
102	× 2間 × 2間 (3.0X3.4m)				21	× 0.62m, × 0.56m, × 0.07m			
103	× 1間 × 1間 (1.8X2.5m)				26	× 0.98m, × 0.82m, × 0.11m			
104	× 1間 × 1間 (2.7X3.2m)		廻をもつ		33	× 1.7m, × 1.1m, × 0.1m	瓦器柄, 羽釜	縄文時代	土壌堆
105	× 1間 × 1間 (1.7X2.4m)				40	× 1.2m, × 1.1m, × 0.15m	× ×	×	焼土, 土壌堆
106	× 2間 × 3間 (2.7X4.5m)	瓦器細片	中世 (?)		47	× 0.78m, × 0.48m, × 0.09m	なし		灰, 土壌堆
107	× 1間 × 3間 (2.9X4.1m)		廻をもつ		48	× 1.10m, × 0.70m, × 0.06m	なし		灰, 土壌堆
108	東西1間×南北3間 (4.6X6.1m) 豎壁×2面 (4.0X4.8m)		2棟		61	× 1.2m, × 0.6m, × 0.4m		中世以後 (?) 焼土塊	
109	× 2間 × 3間 (3.2X3.6m)				62	× 1.08m, × 0.42m, × 0.21m			焼土
110	× 3間 × 3間 (4.1X3.9m)	瓦器細片			67	× 0.86m, × 0.50m, × 0.11m			
111	東西2間×南北3間 (3.6X5.0m)				68	× 2.50m, × 1.30m, × 0.11m			
112	× 2間 × 2間 (4.5X3.5m)				69	× 1.32m, × 0.72m, × 0.12m			
113	× 2間 × 1間 (6.2X3.0m)				70	× 1.30m (?) × 0.58m, × 0.05~0.37m			
114	東西1間×南北4間 (3.4X5.1m)				71	× 0.88m (?) × 0.92m, × 0.13m			S K 91
115	× 1間 × 2間 (2.6X3.0m)				72	× 1.02m, × 0.56m, × 0.33m			焼土
116	東西2間×南北1間 (2.4X4.8m)				75	× 0.70m (?) × 0.72m, × 0.33m			焼土
試掘S×1	長軸1.35m, 短軸1.1m, 深さ0.25m	をし	縄文時代	焼土, 灰	76	× 0.80m, × 0.54m, × 0.06m			
× S×2	× 0.75m, × 0.6m	羽釜		黒石	80	瓦軸1.6m, 短軸0.8m, 深さ0.4m			小標
S×1	長軸1.1m, 短軸0.9m, 深さ0.1m	なし		土壌堆	81	× 1.4m, × 0.8m, × 0.4m	瓦器細片		小標
2	× 3.1m, × 1.8m, × 0.1m	瓦器柄, 羽釜		土壌堆	86	× 0.94m, × 0.76m, × 0.27~0.50m			
3	× 1.6m, × 1.5m, × 0.15m			土壌堆	88	× 1.32m, × 1.24m, × 0.09m			
4	× 1.1m, × 0.7m, × 0.07m			焼土粒	89	× 2.32m, × 0.78m, × 0.17m			
5	× 1m, × 0.7m, × 0.05m	羽釜		土壌堆	90	× 0.86m, × 0.70m, × 0.17m			
6	× 1m, × 0.65m, × 0.15m	瓦器柄, 土師小瓶		土壌堆	92	× 1.1m, × 0.36m, × 0.3m			小標
7	× 1m, × 0.9m, × 0.1m	瓦器細片		土壌堆	93	× 0.76m, × 0.46m, × 0.07m			黒トレンチ
8	南北1.7m, 東西1.1m,	羽釜		集石	95	× 1.10m, × 0.48m, × 0.09m			
S K 4	長軸1.94m, 短軸1.8m, 深さ0.68m				98	× 2.26m, × 1.12m, × 0.18m			
5	× 1.10m, × 0.64m, × 0.13m				100	× 2.78m, × 1.92m, × 0.14~0.18m			焼土
6	× 2.06m, × 1.36m, × 0.28m				101	× 0.76m, × 0.50m, × 0.27m			焼土
8	× 1.42m, × 1.3m, × 0.41m				104	× 2.06m, × 1.66m, × 0.16m			
9	× 1.38m, × 0.80m, × 0.20m				109	× 0.54m, × 0.54m, × 0.06m			
10	× 1.42m, × 1.22m, × 0.10m				110	× 0.64m, × 0.40m, × 0.09m			
11	× 0.94m, × 0.56m, × 0.07m				111	× 1.78m, × 0.70m, × 0.10m			
12	× 2.86m, × 0.72m, × 0.14m				112	× 4.4m, × 1.7m, × 0.3m		中世以後	焼土, 灰
13	× 0.88m, × 0.68m, × 0.14m				113	× 4.9m, × 1.9m, × 0.4m			
16	× 0.92m, × 0.70m, × 0.29m				114	× 2.1m, × 1.4m, × 0.15m			
17	× 0.92m, × 0.78m, × 0.24m				115	× 3.7m, × 1.9m, × 0.1m			
18	× 0.90m, × 0.80m, × 0.16m				116	× 1.38m, × 0.88m, × 0.21m			焼土
19	× 0.90m (?) × 0.72m, × 0.21m				118	× 2.52m, × 2.18m, × 0.27m			

遺構名称	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考	遺構名称	規 模	出 土 遺 物	時 期	備 考
S K 119	長軸1.45m, 短軸0.69m, 深さ0.46m			小甕	S K 504	長軸0.98m, 短軸0.54m, 深さ0.16m			
120	~ 1.58m, ~ 0.86m, ~ 0.12m				506	~ 2.20m, ~ 1.92m, ~ 0.08m			
121	~ 0.56m, ~ 0.50m, ~ 0.11m				507	~ 0.94m, ~ 0.42m, ~ 0.22m			
122	~ 2 m, ~ 1.3 m, ~ 0.45m		中世以後	燒土柱	508	~ 0.54m, ~ 0.76m, ~ 0.20m			
123	~ 1.2 m, ~ 0.6 m, ~ 0.2 m				509	長軸0.88m, 短軸0.36m, 深さ0.13m			
124	~ 2.2 m, ~ 1.8 m, ~ 0.3 m				513	~ 1.38m, ~ 1.14m,			
169	~ 1.84m, ~ 1.36m, ~ 0.16m				514	~ 1.7 m, ~ 0.7 m, ~ 0.2 m			
171	~ 1.52m, ~ 1.60m, ~ 0.07m				515	~ 1.18m, ~ 0.72m, ~ 0.32m			
172	~ 3.76m, ~ 1.60m, ~ 0.10m				518	直径0.54m,	深さ0.10m		
187	長軸1.10m, 短軸0.80m, 深さ0.16m				519	長軸0.96m, 短軸0.76m, 深さ0.20m			
190	~ 1.96m, ~ 1.24m, ~ 0.46m				520	~ 1.14m, ~ 0.96m, ~ 0.14m			
192	~ 1.45m, ~ 1.44m, ~ 0.07m				529	直徑0.62m,	深さ0.12m		
194	~ 2.12m, ~ 1.12m, ~ 0.31m				530	~ 0.68m,	~ 0.18m		
195	~ 2.22m, ~ 1.28m, ~ 0.19m				531	長軸0.96m, 短軸0.50m, 深さ0.15m			
197	~ 4.8 m, ~ 1.8 m, ~ 0.15m		中世以後	燒土, 灰	533	~ 1.80m, 短軸1.48m, 深さ0.12m	瓦器細片		
198	~ 6.5 m, ~ 2.0 m, ~ 0.2 m				534	直径0.60m,			
199	~ 3.36m, ~ 1.38m, ~ 0.05m				535	長軸0.1 m, 短軸2.0 m, 深さ0.4 m			燒土
200	~ 2.04m, ~ 1.60m, ~ 0.17m				539	~ 1.1 m, ~ 0.89m, ~ 0.25m			
202	直徑2.34m, 深さ0.12~0.50m			燒土	543	~ 5.0 m, ~ 2.7 m, ~ 0.3 m		中世	燒土, 灰
203	長軸1.13m, 短軸0.81m, 深さ0.09m				544	~ 3.6 m, ~ 1.7 m, ~ 0.35m	瓦器片1		燒土, 灰
205	~ 1.07m, ~ 0.70m, ~ 0.18m				546	直径0.9 m,	深さ0.35m		燒土, 竹穴(?)
206	~ 0.88m, ~ 0.54m, ~ 0.08m				547	長軸0.54m, 短軸1.25m, 深さ0.17m			
207	~ 1.8 m, ~ 1.46m, ~ 0.21m				548	~ 1.6 m, ~ 1.4 m, ~ 0.25m			
208	~ 1.38m, ~ 1.0 m, ~ 0.06m				549	~ 1.1 m, ~ 0.7 m, ~ 0.05m	瓦質小皿	江戸時代	柱穴(?)
214	~ 1.7 m, ~ 1.2 m, ~ 0.1 m			燒土	550	~ 1.21m, ~ 0.94m, ~ 0.16m			
215	~ 1.1 m, ~ 1.0 m, ~ 0.18m				551	~ 0.96m, ~ 0.78m, ~ 0.10m			
216	~ 2.52m, ~ 0.76m, ~ 0.21m				554	長軸0.1 m, 短軸2.2 m, 深さ0.70m			ピット状凹凸
217	~ 0.90m, ~ 0.66m, ~ 0.22m				555	~ 1.3 m, ~ 1.3 m, ~ 0.55m			
219	~ 4.2 m, ~ 1.7 m, ~ 0.25m		中世以後	燒土, 灰	560	~ 1.2 m, ~ 0.5 m,			
220	長軸1.2 m, 短軸0.4 m, 深さ0.1 m			燒土	661	~ 0.9 m, ~ 0.6 m, 深さ0.71m			燒土
221	長軸1.0 m, 短軸0.5 m, 深さ0.3 m			小甕	662	~ 4.8 m, ~ 1.5 m, ~ 0.35m			
222	=	=		小甕	663	~ 1.4 m, ~ 1.0 m, ~ 0.35m			
223	=	=		小甕	664	~ 5.4 m, ~ 1.6 m, ~ 0.22m			
224	長軸1.05m, 短軸1.05m, 深さ0.17m			小甕	665	~ 3.1 m, ~ 0.7 m,			
225	~ 3.6 m, ~ 2.4 m, ~ 0.2 m				674	~ 0.7 m, ~ 0.7 m,			
226	~ 2.2 m, ~ 1.9 m, ~ 0.12m				S A 2	長辺6.02m, 幅辺5.94m			燒土
227	~ 3.08m, ~ 2.10m, ~ 0.32m			S K 193属	3	長辺0.42m, 幅辺3.58m			一字状壠列
237	~ 1.02m, ~ 0.80m, ~ 0.25m				S D 4	長さ12.5 m, 幅0.88m, 深さ0.17m			一字状壠列
502	~ 1.06m, ~ 1.04m, ~ 0.30m				11	~ 20.0m, ~ 0.3 m, ~ 0.1 m			

第V章 出土遺物

第1節 繩文時代の遺物

繩文時代の遺物の大半は遺物包含層（黄色粘砂質土ほか）から出土したもので、層位に関係なく時期を異にする遺物がみられる。遺構出土遺物は遺構の少なさに比例して少量である。遺物は繩文時代早期末から後期末にかけての繩文土器・石器・装身具があり、石器類の所属時期は同一地区から出土した繩文土器に対応させる。

1. 繩文土器

繩文土器は、早期末から前期初頭の条痕文土器を最古として、晚期後葉に位置付けられる突帯文土器が出土している。繩文土器の大部分は、深鉢と考えられるもので明らかに浅鉢・注口土器と判断できる資料は稀れである。このうち、後期前葉と中期前葉の土器が大半を占め、早期末～前期初頭・前期中葉・中期中葉・後期中葉～晚期後葉の土器群が少量出土している。

繩文土器の整理方法　出土した繩文土器は、2・3の例を除くと細片化した資料である。これらの土器を資料化する方法として、個体点数（判別できる限り同一個体一点とした）を集計すると共に出土位置図（第123図）を作成した。繩文土器は異なる遺構・層位もしくは別地区から出土したものとの接合関係を明確にしつつ作業を進めた。資料121点の内実測図を作成し得たものだけで72個体を数える。遺構から出土した土器が少ないため実測図作成は均等に行なった。

繩文土器は各々の文様の有無から有文土器と粗製土器に、これに底部を加えて分類し、更に、器形の特徴・文様構成から小区分した。

早期末～前期 (J 1～J 17) (第60図・P L. 22)

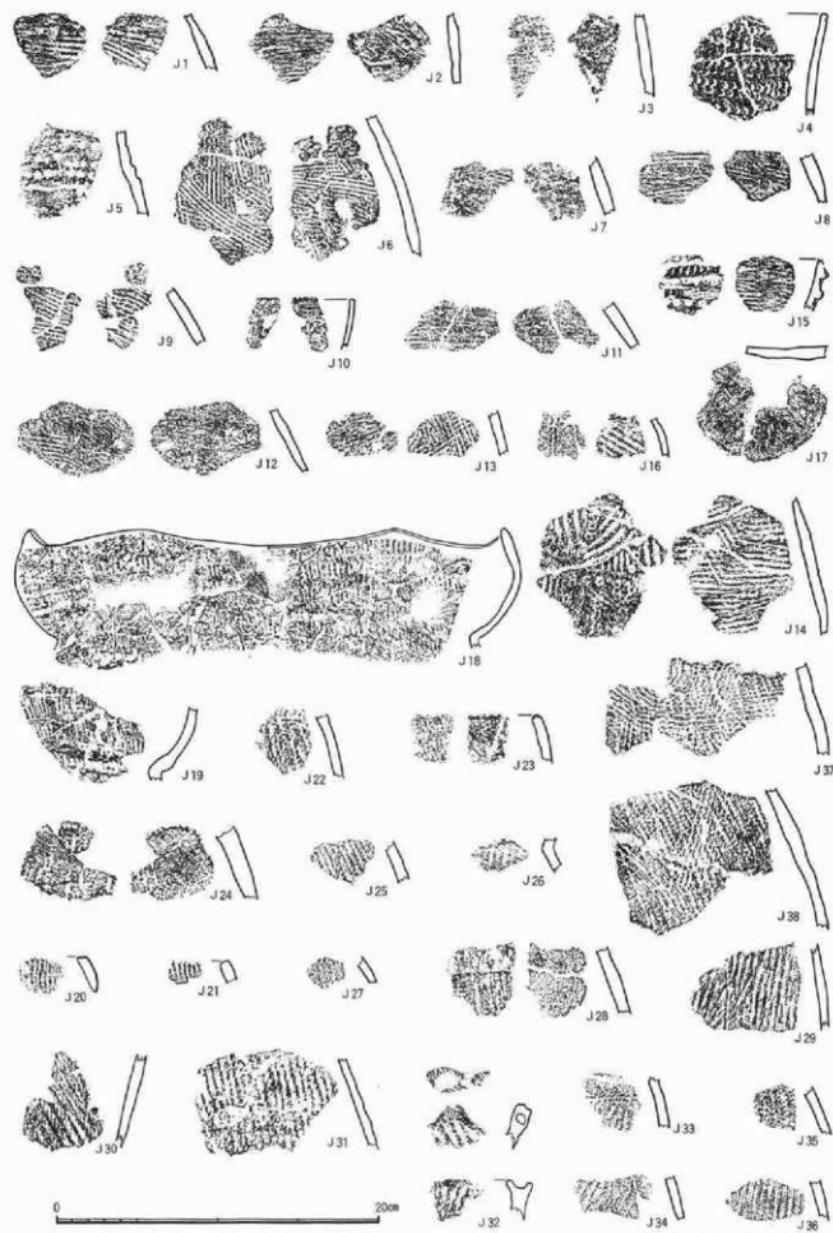
当期の繩文土器の器壁は全般に薄く黒褐色・褐色・黄褐色を呈し J 5・J 17を除く胎土に角閃石・金雲母と纖維を多量に含み一見して他の時期の土器と異なる。また、当期を特徴付ける粗い条痕文が施される。

有文土器 (J 4・J 5・J 10・J 14～J 16) J 4は口縁端部直下に一条の沈線が施され、沈線より下部に2列5段の半抜竹管文が施される。内面は浅い条痕文。北白川下層1 a式ないし羽島下層2式に比定でき、川辺町和佐遺跡に類例がある。J 5は刺突系の土器で、3段の刺突文が施される。内面は細い条痕文。北白川下層2式に比定できる。J 10は器壁が極めて薄く、胎土は砂質である。口縁部は若干内寄ぎみで、上端内面に刻目が施される。外面はC字形の連続爪形文が少なくとも2段以上施される。北白川下層2 a式に比定でき、福井県鳥浜貝塚に類例がある。J 14は器壁が若干厚く、他に比して金雲母が多い。内面の条痕文は深く、V字状に施される。外面は内面同様の条痕文に巻貝によるV字状区画の施文が施され、更に円形竹管文が方形区画状に刺突される。茅山下層式に類似するが定かでない。J 15は二条の貼付突堤上に刻目が施され、突堤に接して3段の円形竹管文が施される。川辺町和佐遺跡B地点・京都市一乗寺南地点と比較でき、羽島下層1式に関連するものである。J 16は幅の狭いD字爪形文が施される。北白川下層1 a式に比定できる。

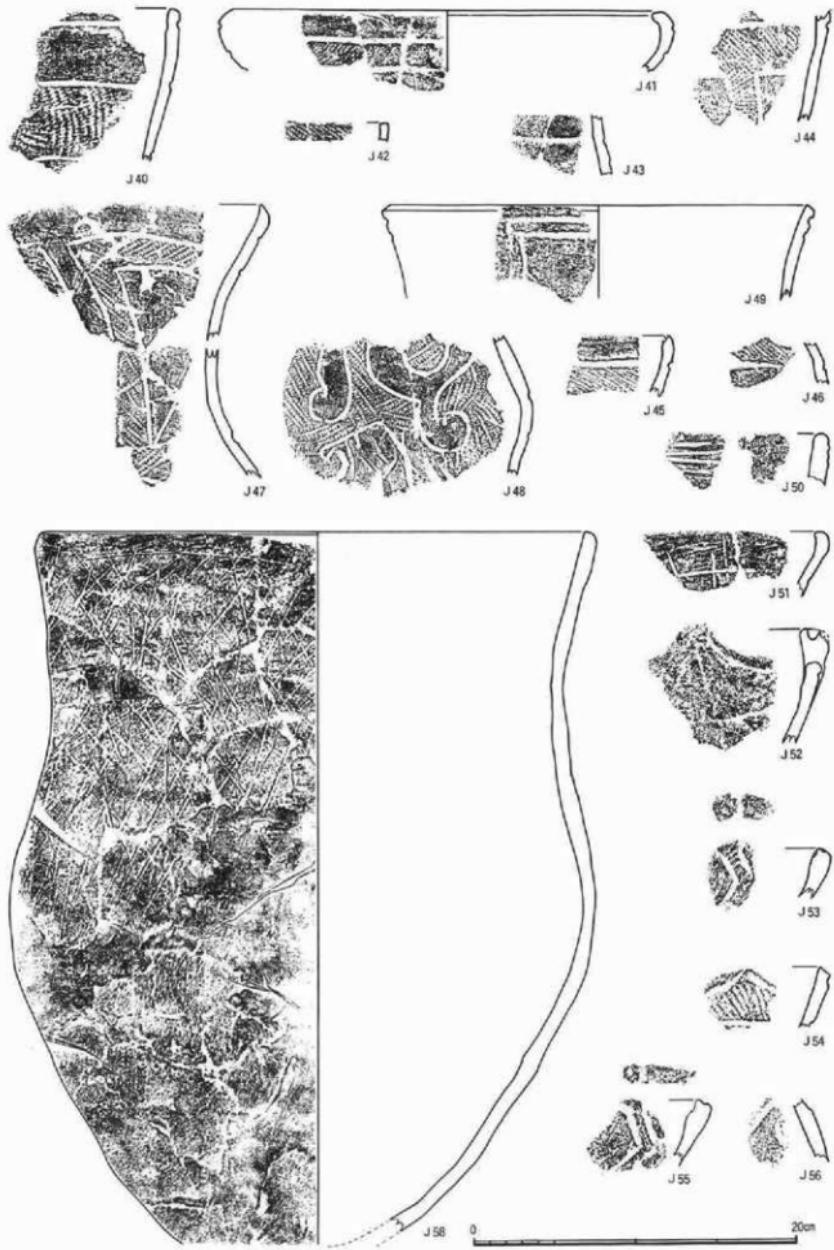
無文土器 (J 1～J 3・J 6～J 9・J 11～J 13) 胎土・色調・調整からJ 2・J 3・J 7・J 8は同一個体、J 6・J 13が同一個体である。J 6・J 11は胎土に粗い角閃石を含むのに対し、その他の細かい角閃石を含んでいる。条痕文は全般に細く浅い。早期末から前期初頭に位置付けられる一群の土器である。

底部 (J 17) J 17は内外面に粘土縫の接合部を調整した爪形文が同心円状に付される。北白川下層2式ないし北白川下層3式に比定できる。

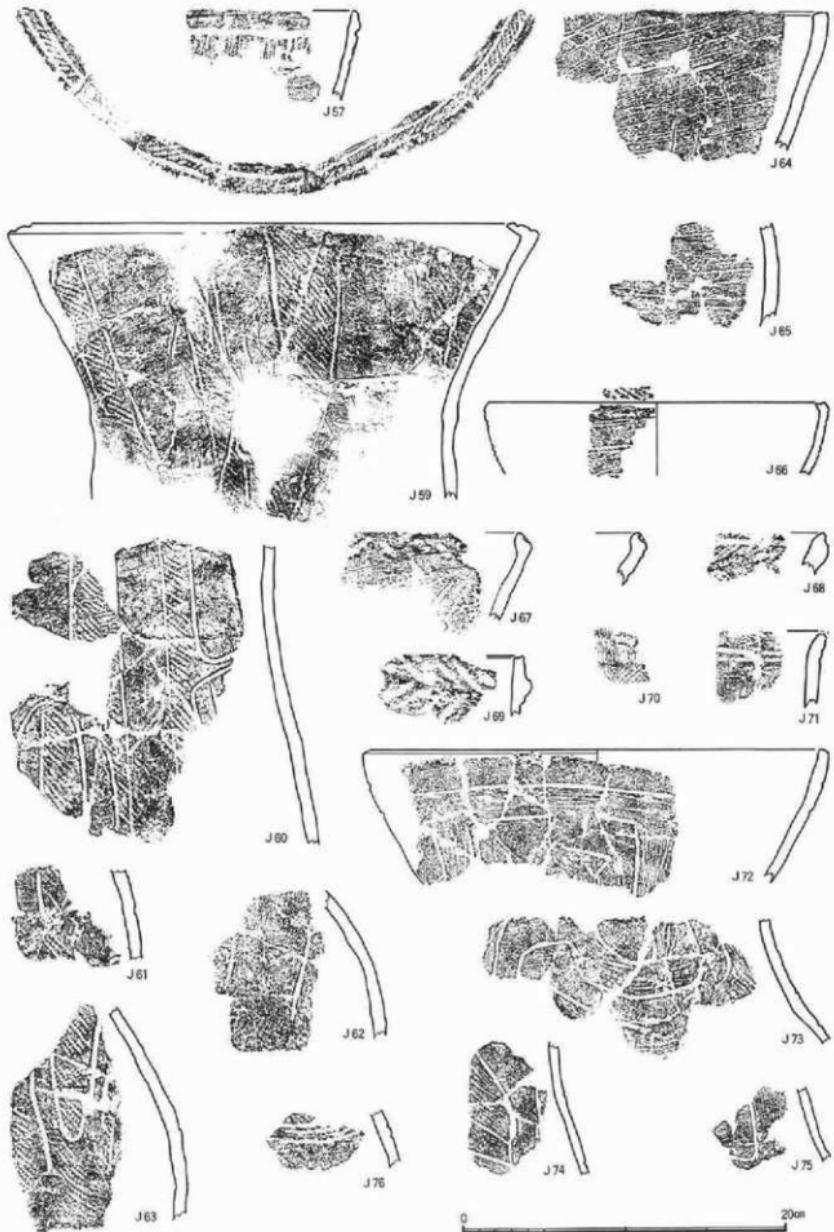
その他、図示しなかったが、内外面2枚貝による条痕文の施された石山式に比定しうる土器が1点ある。



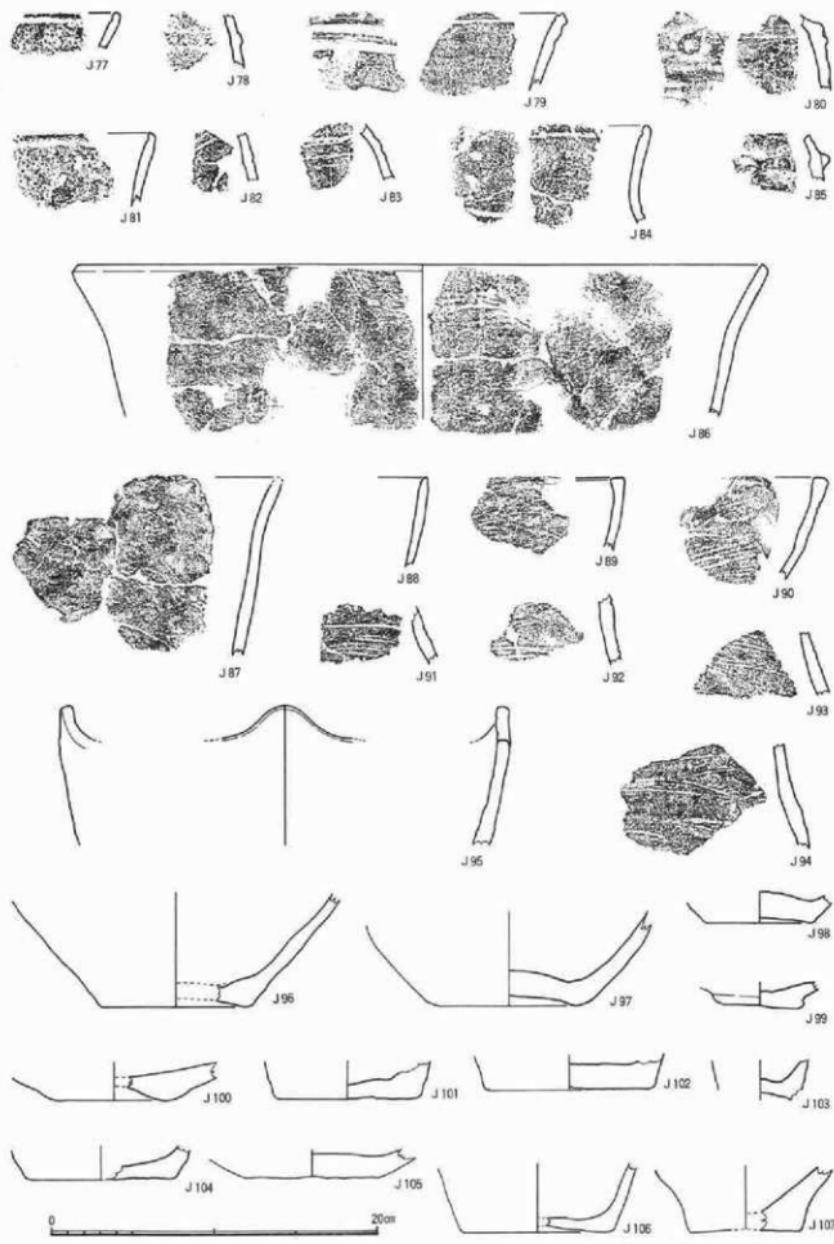
第60図 横文土器実測図 1



第61図 純文土器実測図 2



第62図 楠文土器実測図 3



第63图 梅文土器实测图 4

中期 (J 18~J 39・J 68・J 69) (第60図・第62図・P L、23・P L、24)

当期の縄文土器は、資料的にはさほど多くないが鷹島式ないし船元式に比定でき、有文土器に限られる。J 18・J 19・J 24・J 28・J 29・J 33~J 36・J 37・J 38は、各々同一個体である。J 18は6山ないし7山の山形になる波頂部をもつキャリバー形の深鉢である。口縁部は緩やかに内彎しながら開き、屈曲した頸部をもつ。外面にはC字形の爪形文が、口縁部に4段、頸部直下に1段施される。胎土に片岩を含み、明らかに紀北地域の產と考えられる。J 31は粗い撚りによる縄文が施され、J 32は同一個体と考えられる波頂部に円孔文を穿ったものである。胎土に片岩を含み、J 18同様鷹島式に比定できるものである。J 20・J 21は口縁部に継位置の刺突文が施される。J 22は粗い撚りにより鋭角に縄文が施され、低い突帯に刻みを入れる。J 23は口唇部に半截竹管による刻みが施される。J 24は口縁突起部の破片で、J 28同様R Lの縄文が施される。J 27は撚りの強い縄文が施される。J 37・J 38は7本ないし8本の沈線文帯で文様を構成し、R Lの縄文が施される。J 20・J 21・J 39が船元1式、J 22が船元2式、J 25・J 30が船元1式ないし2式、J 24・J 29・J 37が船元3式、J 23・J 26・J 27が船元式の何れかに比定することができる。J 29・J 30以外は胎土に片岩が認められる。

J 68は口縁部が肥厚し、内面に縄文が施され、外面に継方向の垂下縄文帯が付される。J 69は口縁端部に縄文が施され、口縁部直下の貼付突带上に沈線によって綾杉文を構成する。

その他、多角形の底部1点、条痕文が施された胎土に角閃石・金雲母を多量に含む土器が1点ある。

後期 (J 40~J 67・J 70~J 76・J 78・J 80・J 82・J 83・J 86~J 95) (第61図~第63図・P L、23~P L、25)

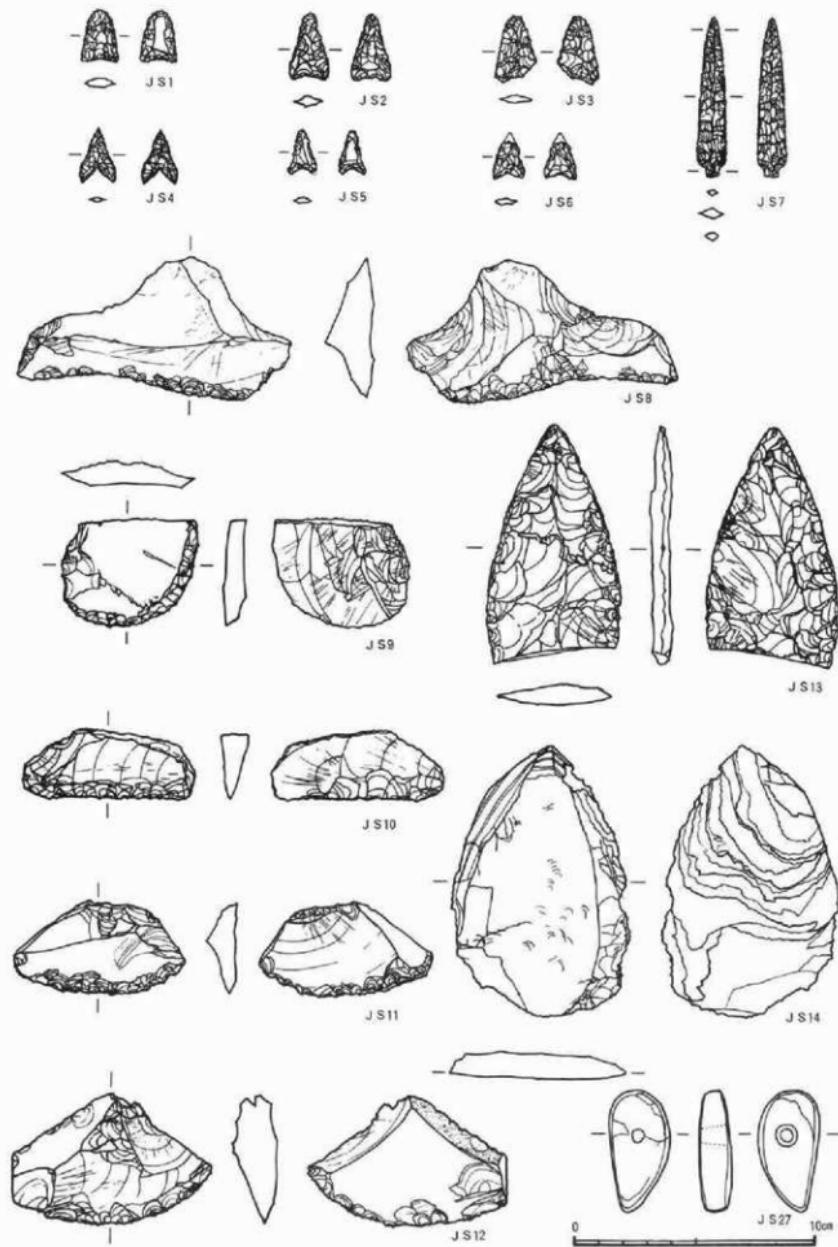
当期の縄文土器は、量的に豊富で各種多様の文様構成が見られる。有文土器は、縄文と沈線で文様を構成するa類、沈線と条線で文様を構成するb類、沈線で文様を構成するc類、太い沈線で文様を構成するd類、刺突文の施されるe類に区分する。粗製土器は条線の残るa類、条線を消すb類に区分することができる。

有文土器a類 (J 40~J 48・J 50~J 56・J 59~J 63・J 70) J 45~J 46、J 60~J 63は各々同一個体である。J 40は条がカーブして筋が伸びる。J 44・J 42はR Lの縄文、J 47・J 48・J 60はL Rの縄文が施される。J 40・J 42・J 43・J 44・J 48・J 53~J 56は中津式、J 59は中津I式、J 41・J 47は中津II式に比定できる。J 70は同一原体による羽状縄文が施され、北白川上層式に比定できる。b類 (J 72) は沈線間に条線を入れ文様帯を構成する。中津式の可能性がある。c類 (J 49・J 51・J 58・J 71) J 49は2条の沈線で区画文様を構成する。J 58は本米条線文のタイプであるが、斜格子状の文様を構成する。共に中津式に併行するものと考えられる。d類 (J 77・J 79~J 81・J 84) J 77・J 81・J 84は内面に太い沈線が施され、J 79同様官窓式に比定できる。J 80は線状圧痕文帯の上に円形の貼付符文が付され、元住吉山2式に比定できる。e類 (J 57・J 67・J 78) J 57は沈線と竜による刺突で文様を構成し、中津式に比定できる。J 67は口唇部に刺突が施される。九州地方に関連するものか。J 78は低い突帯に刻みが施され、堀之内I式ないしII式に比定できる。

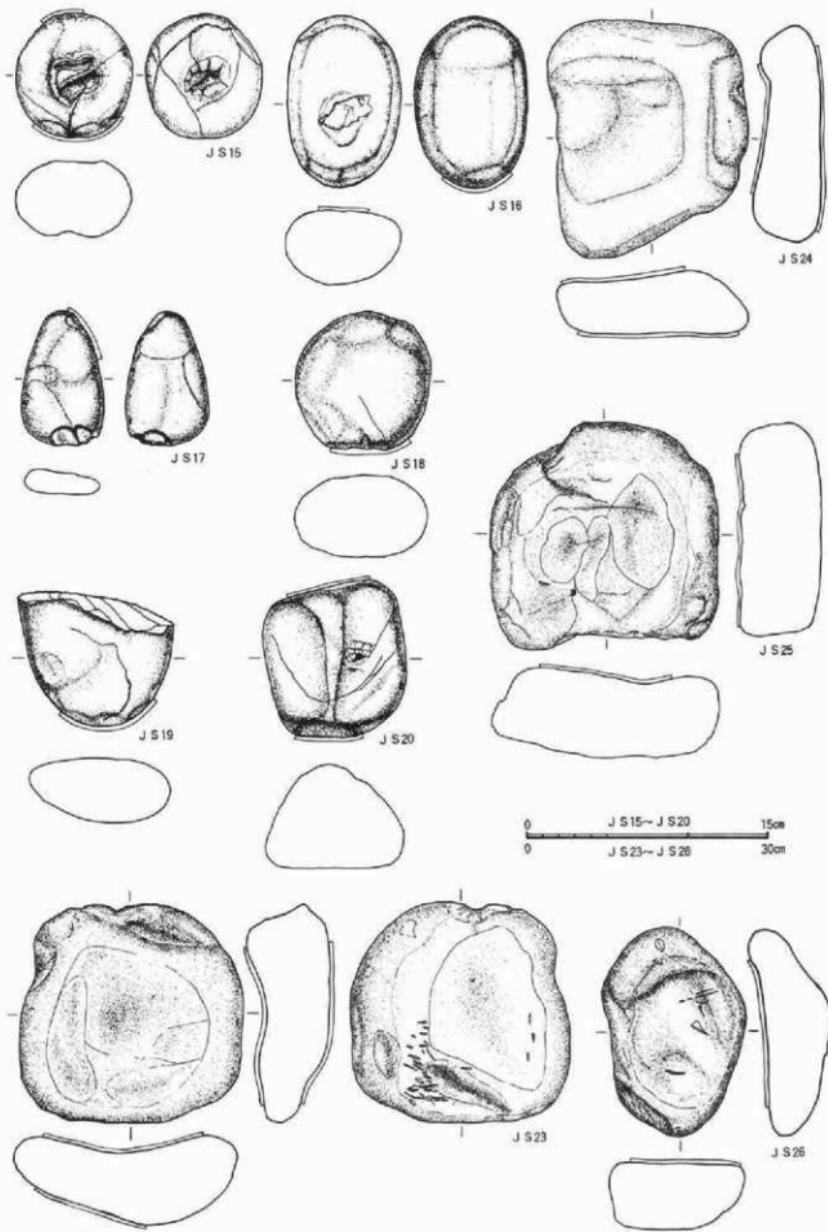
粗製土器a類 (J 50・J 64~66・J 76・J 89~J 94) J 89~J 94は同一個体である。b類 (J 86・J 87) がある。その他、底部には平底 (J 101・J 102・J 104・J 105)、凹み底 (J 96~J 98・J 100・J 106)、くびれ底 (J 99・J 107) があり、33点を数える。J 85は晩期の突帯文土器の体部と考えられる。

2. 石器

石器には、石鏃・石槍・削器・叩石・磨石・凹石・用途不明石器がある。勾玉は装身具であるが当項で扱う。石鏃は回基無茎式 (J S1~J S6) と細身の凸基有茎式 (J S7) がある。J S6は石材の器面が粗く、白色微粒を多く含む金山産のサスカイトと考えられる。石槍 (J S13) は早期~前期に比定できる資料である。削器 (J S8~J S12) J S9は片面削離により刃部を作り出す。比較的古い時期に属するものである。叩石 (J S15~J S18) J S15は両面に、J S16は片面に、J S17・J S18は側面に敲打痕がみられる。J S16は側面を磨石として使用している。磨石 (J S19・J S20) の使用痕はさほど顕著でない。凹石 (J S23~J S26) J S23には長さ 1.4cmないし1.6cm・幅4mmの敲打痕がみられる。用途不明石器 (J S21・J S22) には刃部がないがその形態は石庵丁状を呈する。



第64図 縄文時代石器実測図 1



第65図 繪文時代石器実測図 2

第2節 弥生時代の遺物

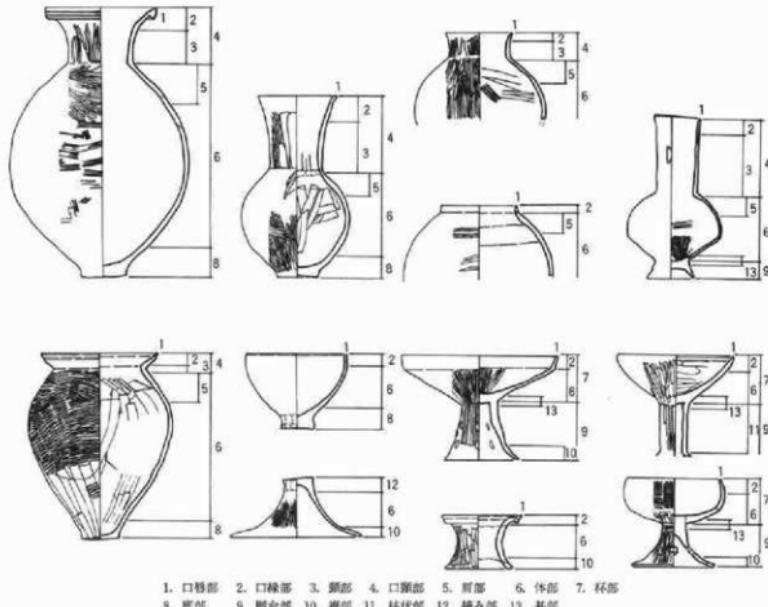
弥生時代の遺物の大半は遺物包含層（弥生時代遺物包含Ⅰ・Ⅱほか）から出土したもので、層位に関係して時期を異にする遺物がみられる。遺構出土遺物は竪穴住居跡・土壙・溝などの床面（基底部）や覆土から出土している。遺物は弥生時代後期前葉から中葉にかけての弥生土器・石器・装身具・鉄器があり、石器・装身具・鉄器類の所属時期は同一遺構内もしくは同一地区内から出土した弥生土器に対応させて考える。

1、弥生土器

弥生土器には壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋・瓶の7器種があり、ほかにこれらの器種を模倣した手捏ね土器・土器を転用した紡錘車（有孔円板）・土製品・7器種にあてはまらない特殊土器がある。出土した弥生土器は多量であるが、全体からみれば壺・甕・高杯が大多数を占める。

（1）弥生土器の整理方法

弥生土器の出土は遺構と遺物包含層に分けられ、多くは細片となって出土したものである。これらの土器を資料化する方法として、數的な集計を二通り行ない（第VI章第2節（1）弥生土器 器種構成を参照）、包含層出土土器について調査区内での出土密度図（第125図・弥生土器の出土密度を参照）を作成した。弥生土器は異なる遺構・層位もしくは別地区から出土したものとの接合関係を明確にし、特異と認められる土器・文様の施された土器を抽出しつつ作業を進めた。資料8,263点（集計方法B類）の内、実測図を作成し得たものだけで1,435点を数える。竪穴住居跡に関する土器（床面直上・柱穴・炉等）は、住居の時期決定要素となり得

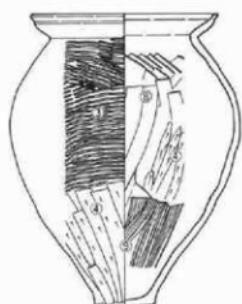
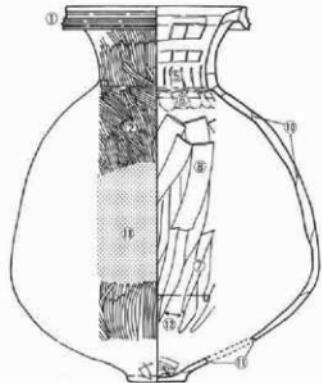


第66図 弥生土器形態各部位の名称

るため、また、住居跡の覆土・上部包含層の土器は床面直上等の土器との相関関係、隣接する住居跡との関係を把握する点において重要であるため残存径約12分の1までの土器を実測の対象とした。土壤に関する土器（基底部・覆土）は、一括性を重要視するため残存径8分の1程度の土器までを対象としたが、覆土上部の細片には包含層からの混入も認められる。遺物包含層に関する土器は、包含層そのものが地点によりかなり異なるためできる限り安定した包含層で隣接した地区内の土器を選び、残存径4分の1程度の土器までを実測の対象とした。これらの作業を進める中で、従来の器種名にそぐわない土器もみられたが混乱を招く恐れがあるため従来の器種の範疇に留めることに努めた。

（2） 弥生土器形態各部位の名称 （第66図）

各器種における形態各部位の名称は第66図の呼称名に統一するように努め、場合によって頸体部などのように二ヶ所の部位を連続させて使用することもある。各名称の部位を列記すると下記の通りである。1 口唇部一口縁端部。2 口縁部—最終的に横方向の撫での認められる部分。3 頸部—口縁部より下の屈曲（屈折）する部分で内面もしくは外面に指揮えの認められる部分。壺では筒状の部分を含める。4 口頸部—口縁部と頸部を合せた部分。5 肩部—頸部以下から体部最大径までの部分。6 体部—壺・壺では頸部以下から底部上位までの部分。高杯では口縁部以下から基部までの部分。鉢・器台・蓋でも体部の位置は基本的に同じ。7 杯部—基部より上位の口縁部と体部を合せた部分。8 底部—最下部の部分で外面に指揮えの認められる部分。9 脚台部—基部より下位の柱状部と脚部を合せた部分。10 撫部—最下部の最終的に横方向の撫での認められる部分。11 柱状部—基部以下から脚部までの部分。12 捲み部—蓋のみで外面に指揮えの認められる部分。13 基部一体部—脚台部の接合部分。



第67図 弥生土器実測図の表現法

- ⑨刷毛目—一定の幅をもつ刷毛状工具で器壁を整え、刷毛目が明瞭に残るもの。実測図では細い平行線で表現。
- ⑩接合痕—粘土帶の接合面、粘土の貼り付け。実測図では細線で表現する。
- ⑪破断面—土器の破片面。実測図では鋸歯状の細線で表現する。
- ⑫技法の方向—技法の上下関係、左右の関係、または技法の施された順を表現する。
- ⑬黒斑・煤の付着—土器焼成時に付くものを黒斑、二次的な加熱によって付くものを煤として表現する。

(4) 弥生土器の形態分類 (第68図)

弥生土器の形態分類は器形全体の形により分類するのが最も望ましいが、細片が多いため口頭部の形態を中心に分類を行なったものが大半を占める。数的な集計では器種別の数量を算出できたが、形態別の数量を算出するまで至らなかった。各器種は第9表(弥生土器分類基準表)の諸要素を複合することにより分類可能である。

壺 壺は広口壺・広口長頸壺・長頸壺・短頸壺・太頸壺・無頸壺・脚台付壺・細頸(脚台付)壺・小型壺に分類できる。広口壺・長頸壺・短頸壺は細部の形態により、更に分類が可能である。

広口壺 頸部から口縁部にかけて一定の広がりをもち、口縁端部に粘土帶を付加する。口頭部の傾き・口縁部の屈曲度・口縁端部の垂下部の形状などに形態的特徴を有し、A類～K類の11種類が存在する。更に口縁端部の形状によりB類をB₁～B₄、C類をC₁～C₂、E類をE₁～E₂、F類をF₁～F₂に分類する。

広口長頸壺 広口壺としての口縁形態を示し、筒状の長い頸部を有するもの。

長頸壺 直線的な長い頸部を有するもの。口頭部の傾き・口縁部の外反度・口縁端部の形状などに形態的特徴を有し、A類～D類の4種類が存在する。更に口縁端部の形状・文様の有無によりA類をA₁～A₂に分類する。

短頸壺 直線的な短い口頭部を有するもの。口頭部の傾き・体部の形状などに形態的特徴を有し、A類～C類の3種類が存在する。

太頸壺 膨らみのある太い口頭部を有するもの。

無頸壺 原則的には頸部をもたない土器。ごく短く直立する口縁部を備えるものを含める。

脚台付壺 脚台部を付加する壺を一括して扱う。

器種	器形	内面の調整	外面の調整	胎土・砂粒	備考
壺	広口壺	○板削で	○口縁部 横方向の削で	○やや緻密～緻密	○口縁部 垂下部に剥離・凹面・竹箒文等
	長頸壺	○刷毛拭糞による塵で	○窓磨き	○砂粒・比較的の少量	
	短頸壺	○塵で	○板削で	○少量	
	細頸壺	○指押え(指壓延展)	○叩きのち重壓き	○搬入品とした物には衝めて多量の砂粒が含まれる	
	無頸壺		○丁寧な施削	○緻密	○脚台部は高解脚台部と分類可能
	脚台付壺		○口縁部 横方向の削で	○やや粗い～やや緻密	○中型・小型品に運搬者が目立つ
甕	A	○裏削り	○口縁部 横方向の削で	○やや粗い～やや緻密	○中型・小型品に運搬者が目立つ
	B	○板削による塵で	○叩き ○施削り ○板削で	○砂粒 多量(少量の物もある)	○口縁部が「く」の字形に屈曲する
	C	○丁寧な重壓き	○丁寧な重壓き	○緻密(稀にザラつき)	○脚台部は逆縮脊状・柱状影響を受ける
高杯	三形		○砂粒を混入	○砂粒	○脚台部より口径が大きい
	楕形		○稀に軽い重削り		
鉢	楕形	○板削による軽い削で ○拂で	○拂で ○板削具による軽い削で	○やや粗い物が目立つ	
	E	○裏削き ○拂で	○裏削き	○緻密	
器台		○口縁部施削き多用	○口縁部 横方向削で ○窓磨き	○やや緻密～緻密	○口縁部の形態は広口壺に類似する
					○内部に穿孔の比率が高い
蓋	壺用	○拂で	○拂で ○窓磨き	○比較的緻密	○縦脊状・円盤状を呈する
	甕用			○比較的粗い	○器内部の運搬者が顯著
手掘れ	壺・高杯	○拂で	○窓磨き	○緻密	○形態で判別
	鉢・蓋				
その他	特殊土器				

第9表 弥生土器分類基準表

広口壺A	広口壺B ₁	広口壺B ₂	広口壺B ₃	広口壺B ₄	広口壺C ₁	広口壺C ₂	広口壺D
広口壺E ₁	広口壺E ₂	広口壺F ₁	広口壺F ₂	広口壺G	広口壺H	広口壺I	広口壺J
広口壺K	広口長頸壺	長頸壺A ₁	長頸壺A ₂	長頸壺B	長頸壺C	長頸壺D	無頸壺
短頸壺A	短頸壺B	短頸壺C	太頸壺	脚台付壺	細頸(脚台付)壺	小型壺	器台A ₁
器台A ₂							
變A ₁ 大	變A ₃ 大	變B ₁	變D ₂ 大	變D ₃ 大	變D ₄ 大	變D ₅ 大	器台A ₃
變A ₁ 中	變A ₂	變A ₃ 中	變B ₂	變D ₂ 中	變D ₃ 中	變D ₄ 中	器台A ₄
變B ₃							變D ₅
變A ₁ 小	變C	變D ₁	變B ₄	變D ₂ 小	變D ₃ 小	變D ₄ 小	器台B
高杯A ₁	高杯A ₂	高杯A ₃	高杯A ₄	高杯A ₅	高杯B ₁	變E	器台C
高杯B ₂	高杯B ₃	高杯C	高杯D	高杯E ₁	高杯E ₂	高杯F	高杯G

縦頸（脚台付）壺 口径の小さな長い口頭部を有するもの。今次の出土品では全て脚台部が付く。

小型壺 一般的な壺の容量を下まわる小型品。実用品とは考え難い機能を有する手捏ね土器とも区分する。

甕 壺は口頭部の形態的特徴によりA類～B類に分類できる。

甕A 直線的な口縁部が斜め上方にたちあがり、口縁端部に面をもつもの。更に口縁部の形状によりA₁～A₃に分類する。A₁には大型品・中型品・小型品が、A₂には中型品が、A₃には大型品・中型品がある。

甕B 外反ないし外寄する口縁部を有し、口縁端部が丸くおさまるもの。体部径が口縁部径より小さいもので、ほとんどが中型品で占められる。更に口縁部の形状によりB₁～B₄に分類する。

甕C 外反する口縁部を有し、口縁端部が上方につまみ出され面をもつもの。本例の場合、甕Aと甕Bの折衷形態と考えられ粗雑な作りである。甕B同様中型品で占められる。

甕D 斜め上方に開き、口縁部で屈曲して上方ないし斜め上方にたちあがる口頭部を有する。一見、受口状口縁を呈する土器。更に口縁部の形状によりD₁～D₃に分類する。D₁には中型品が、D₂・D₃には大型品・中型品・小型品が、D₄には大型品・中型品が、D₅には中型品がある。

上述のように、甕には機能差を反映する大型品・中型品・小型品があり、本米、広口壺・長頸壺等と同様の形式一機能差を表すものと考えられる。

高杯 高杯は杯部と脚台部の形態的特徴によりA類～G類に分類できる。

高杯A 浅い皿形の体部に直線的にのびる口縁部を有し、円筒状ないしは逆漏斗状の脚台部をもつもの。更に口縁部の傾き・形状によりA₁～A₆に分類する。

高杯B 内寄する皿形の体部に外反する口縁部を有し、逆漏斗状の脚台部をもつもの。更に口縁部の外寄度・形状によりB₁～B₆に分類する。

高杯C 器壁の厚い直立する口縁部を有するもの。

高杯D 緩やかに外反する長い口縁部を有するもの。口縁高が体高をはるかに上回る。

高杯E 楕形の深い杯部を有し、逆漏斗状に聞く脚台部をもつもの。更に体部の内寄度・口縁部の形状によりE₁～E₆に分類する。

高杯F 楕形の浅い杯部を有し、円筒状の脚台部をもつもの。

高杯G 口縁径が体部径より小さい楕形の杯部を有し、逆漏斗状の裾部が大きく聞く脚台部をもつもの。

鉢 鉢は口縁部と法量の形態的特徴によりA類～H類に分類できる。更に口縁部の内寄度によりA類をA₁～A₂に、口縁部の形状によりD類をD₁～D₃に分類する。

器台 器台は口縁部と法量の形態的特徴によりA類～D類に分類できる。更に口縁端部の形状によりA類をA₁～A₄に分類する。尚、器台も完形品が少ないため広口壺口縁部との混同が生じる結果となる。

蓋 蓋は機能差により壺用と甕用に分類できるが、ここでは形態的特徴によりA類～C類に分類する。更に摘み部・裾部の形状によりA類をA₁～A₃に分類する。

甕 甕ないし鉢の底部に円孔を穿っているもの。底部が大半を占めるため口縁部の形状は不明である。

手捏ね土器 実用品と考え難いもの。壺・甕・高杯・鉢・蓋の器種がある。

脚台部 壺・甕・高杯杯部・鉢に付く脚台を分類するが、本例では壺と高杯の脚台部にしか分類し得ない。

脚台部はA類～H類の8種類に分類でき、壺は3種類、高杯は5種類がある。

底部 壺・甕・鉢・蓋の底部を分類する。底部はA類～M類の13種類に分類でき、壺は5種類、甕は5種類、蓋は1種類、鉢は2種類がある。鉢は壺・甕に類似する底部をもつものもある。

以上、各器種を形態的特徴により分類したが、これらが機能差と時期差の一部を反映するものと考えられる。

(5) 積穴住居跡S B出土土器

当項では積穴住居跡の床面直上（床面・炉・壁溝・柱穴・貼り床を含める）・覆土・上部の包含層から出土した土器を積穴住居跡出土土器として扱う。調査による遺物の取り上げ方法は、基本的に円形を右回りに4分割しA区～D区と呼称して層位毎に行なった。ただ時間的な制約もあり、S B 01～S B 05は覆土以下を層位毎に、S B 06～S B 11は上部包含層から覆土床直までを機械的に分けて掘り下がった。両者の層位の対応は第69図に示す通りである。土器が細片となりその機能を消失していたとしても、床面に接した土器を床面直上として取り上げ、覆土の最下部で床面に接しない土器を覆土床直として取り上げた。尚、紙面の関係上、個々の土器について説明することができないため、住居跡の時期決定要素と成り得る一群を中心に記述する。

④ S B 上部包含層

覆土上層	{ ①第1層 ③第3層
	{ ②第2層 ⑤第5層
覆土中層	{ ③第3層 ⑤第5層
	{ ④第4層
覆土下層	{ ④第4層 ⑥第6層
	{ ⑤第5層 ⑦第7層
覆土床直	—④～⑦最下部

⑤ 炉周囲の回み

中央炉	{ ⑨炉上層 ⑩炉下層
	{ ⑪炉中層

- ⑪炉提 ⑫壁溝上層 ⑬壁溝下層 ⑭柱穴柱当り ⑮柱穴掘り方 ⑯柱穴最下部粘土 ⑰貼り床
- S B 01 (第70図・第71図・P L 28・P L 33・P L 37)

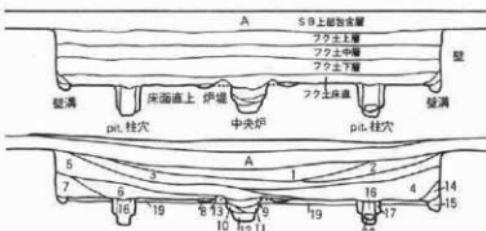
S B 01-aでは図示できる遺物がない。S B 01-bでは簡状の頸部から緩やかに外反する口縁部に厚手の垂下部が付く広口壺B₁ (B 1)、円筒状の柱状部に比較的浅い楕形の杯部が付く高杯F (B 4)がある。(B 1)の口縁端面には浅い4条の凹線文が施される。(B 4)の杯部内面は横方向の軽い窪削りが加えられる。(B 8)は小型鉢で擬斗縁の可能性がある。S B 01-Cでは擬斗状に外傾する口縁部に逆二等辺三角形状の垂下部が付く広口壺F₂ (B 2)、「く」の字状の頸部から外傾し更に上方に屈折する口縁部を付す壺D₄の中型 (B 3)がある。(B 3)の外面は平行叩き、内面は刷毛撫でにより調整される。(B 5)は直線的に上方に立ちあがる短い口縁部を付す高杯A₄で、脚台部に二段の穿孔がある。(B 10)は低い脚台部に球形の体部と細長い口頭部を付した脚台付細頸壺である。(B 12)は外傾する体部中位で内折し、窓位置の一対の把手を付す鉢Hで、内外面共に丁寧な施錠が加えられる。その他、脚台部Cの裾部 (B 15)、口縁部に厚手の垂下部が付く器台A₁ (B 16)などがある。上部包含層では口縁部に外開きする垂下部が付く器台A₂ (B 44)があり、口縁部内面に施錠文様が施される。(B 10・B 12)を除けば比較的シャープな形態を呈している土器が主体を成す。

S B 02 (第71図・P L. 37)

S B 02では襟部に段を有する脚台部H (B 55)、緩やかに外傾する頸部に強い横方向の撫による段をもつ口縁部を付す長頸壺D (B 59)、緩やかに外傾する直線的な口頭部を付す長頸壺B (B 58)がある。(B 60)は襟部が大きく開き、端部が外側に肥厚する器台A₂である。覆土第5層では手捏ねの脚台部 (B 88)、「く」の字に折れ曲がる頸部に端部に面を成す口縁部を付す壺A₁の中型 (B 72)がある。

S B 03 (第73図・P L. 28・P L. 29・P L. 33・P L. 37・P L. 38)

S B 03では外反する口頭部に若干肥厚する口縁部が付く広口壺I (B 90)がある。(B 92)は肩部が張らず、



第69図 住居跡出土遺物取り上げ概念図

体部径が口縁部径より小さく、口縁端部が上方にのみ肥厚する甕Cである。高杯には杯部が皿形（B94・B95）と楕形（B96）を呈するものがある。（B94）は立ち上がりの強い脚台Bを有し、杯部は深手の体部に外反する口縁部を付す高杯B₂で、体部と口縁部の屈折は比較的緩やかである。（B95）は直線的に斜め外方に伸びる体部に、直線的な口縁部を付す高杯A₁である。（B96）は深手の楕形の杯部を付す高杯E₂で、口縁端部は丸く納まる。（B93）は体部から口縁部にかけて直線的に伸び、底部に1孔以上の穿孔が認められる甕（底部K）である。（B91）は手程ねの無難甕。その他、口縁端部が上下に肥厚し端面に擬凹線が入る甕A₁（B100）底部A（B97・B98）・底部F（B99・B101）・底部H（B102）・底部J（B103）・底部L（B104）がある。覆土には厚手の垂下部が付く広口壺B₁（B105・B108）、逆二等辺三角形状の垂下部が付く広口壺F₂（B106）、装飾の豊かな広口壺E₁（B107）、撫で肩の体部に丸みのある頭部が続き口縁端部が丸く納まる甕B₂（B111）、丁寧な蒐磨きが加えられた楕形の高杯E₂（B115）、体部と口縁部が直立気味に外傾する高杯F（B116）、鉢D₂の大型品（B117）、檐部が大きく開き構み部が突出する蓋A₁（B118）、短脚の脚台F（B136）などがある。

S B 0 4 (第73図・P.L. 38)

S B 0 4では浅い皿形の体部に外反する口縁部を付す高杯B₂（B157）、底部が若干突出気味で体部にかけて緩やかに内寄しながら外傾する底部D（B150）、小さな底部に径の小さい体部が続く底部E（B151）などがある。高杯（B157）と脚台部（B155）は同一個体と考えられる。その他、覆土には口縁部の長い甕A₁の中型（B149）、甕B₁の口縁部（B147・B148）、内弯する体部に著しく外反する長い口縁部を付した高杯B₃（B158）がある。

S B 0 5 (第74図～第77図・P.L. 29・P.L. 33・P.L. 34・P.L. 38・P.L. 39)

S B 0 5では著しく外反する口頭部に下方にのみ肥厚する口縁端部が付く広口壺I（B159・B160）、直線的に延びる筋状の長い口頭部に口縁端部が面をもつ長頸壺A₁（B161）がある。（B161）には4条の浅い擬凹線が施される。甕には体部径が口縁部径より大きい甕D₂の中型（B165）、甕C（B166）がある。（B165）は口縁端部が強い横方向の撫でにより肥厚して丸く納まり外傾する。肩部には窓による縦位置の刺突文様が施される。遺存度が良くないが、甕D類の中では異質である。（B166）は内外面共に粗雑な調整である。高杯には浅い体部に直立気味の口縁部が付き、口縁端部が僅かに外方に屈折して面を成す高杯A₁（B173）がある。脚台部には円柱状を呈する脚台Aの柱状部（B177）、立ち上がりの強い脚台部B（B175・B176）がある。器台には細く絡まった体部中位から外傾しほぼ水平に屈折した口縁部が付く器台C（B179）があり、口縁端面に窓による刺突文が施される。蓋には檐部が若干外方に膨らみ檐端部が丸く納まる蓋A（B172）がある。その他、底部A（B162）・底部E（B163・B164）・底部J（B170）・底部L（B167）がある。また、西壁際には体部径が口縁部径より小さく口縁部が外方に屈折する鉢Cの小型（B192）、北壁際には手捏ね壺（B194）がある。S B 0 5に取り付く満S D 7では太い頭部から外傾して内弯する口縁部を付す太頸壺（B198）がある。覆土には壺I（B214）、長い筒状の頭部に屈折する口縁部が付く広口長頸壺（B215）、外反度が強く装飾豊かな広口長頸壺（B216）、長い頭部に外反して丸く納まる口縁部が付く長頸壺A₂（B217）、口縁部が直線的に外傾して端部に面をもつ甕A₁の中型品（B222・B225・B226）・大型品（B227）、口縁部の短い甕A₂の大型（B228）、口縁部の屈折度が緩く外傾する甕D₂の中型品（B231・B233・B234）、口縁部の屈折度が強く外傾する甕D₄の大型（B237）突出した器壁の薄い構み部に大きく聞く檐部が付く蓋A₁（B291）、ぐい呑み状の鉢E（B321）などがある。

S B 0 6 (第78図・P.L. 29・P.L. 34・P.L. 39)

S B 0 6では丁寧な撫でにより仕上げられた鉢E（B339）、突出度の著しい底部L（B340）、「ハ」の字形に外反し檐端部に面をもつ脚台G（B341）がある。（B341）は4方に円孔が穿たれ丁寧な蒐磨きが加えられる。貼り床には体部径が口縁部径より小さく外面蒐削りの行なわれた甕B₂（B336）がある。その他、覆土には口縁端部の垂下部が正三角形に近い形状を呈する甕F₁（B331・B332）、甕F₂（B334）、肩部の張らない甕A₂の小型

品（B338）、体部と口縁部の屈折部が緩く外傾する高杯B₂（B354～B356）がある。（B355）と（B361）は二次焼成を被けた同一個体の可能性がある。基部（B365）と柱状部（B366）は同一個体、杯部（B354）も同一個体の可能性がある。（B345）は水平な体部・口縁部に付く蓋Bの摘み部、（B359）は手捏ね高杯の脚台部、（B369）は口縁部に一条の凹線文を施した小型の鉢、（B371）は口縁部の形態から器台Cに属するものである。尚（B363～B366）は非常に丁寧な荒削りにより仕上げられる。

S B 0 7 （第79図・P.L. 30・P.L. 34・P.L. 40）

S B 07では緩やかに外反して立ち上がる頭部に三角形の厚手の口縁部が付く広口壺D（B372）、裾部の大きく開く脚台Cに平彫な体部が付く脚台付細頭壺（B373・B374）がある。（B373・B374）の外面は非常に丁寧な荒削り、内面は明瞭な粘土紐接合痕が残る軽い刷毛撫で調整による。壺には口縁部の直線的な壺A₁の中型（B375）、壺A₁の大型（B376）、体部径が口縁部径より小さく外面叩きのち荒削りされた壺B₄（B377）がある。高杯には器壁の厚い口縁部が直立する高杯C（B378）、短い口縁部が外彎する高杯B₁（B379）がある。鉢には内弯度の小さい体部に丸く納まる口縁部が付く鉢A₂（B380）、突出する底部に内弯度の大きい体部が付き口縁部に内彎する丸みのある面をもつ鉢A₁（B381・B382）がある。（B381）の外面は不定方向の軽く丁寧な指撫で調整、（B382）の外面は軽い刷毛撫で調整、内面は軽い板撫でにより仕上げられる。その他、底部D（B383・B384）、底部F（B386）、底部J（B385）、脚台C（B393）、低脚の器壁の厚い脚台E（B392）などがある。覆土には壺D₃の中型（B387）、口縁部が短く短部に面をもつ壺A₃の中型（B388）、長い脚台に橢形の杯部が付く高杯E₃の小型（B391）などがある。（B391）は内外面共に丁寧な荒削りにより仕上げられる。

S B 0 8 （第80図・P.L. 30・P.L. 34・P.L. 40）

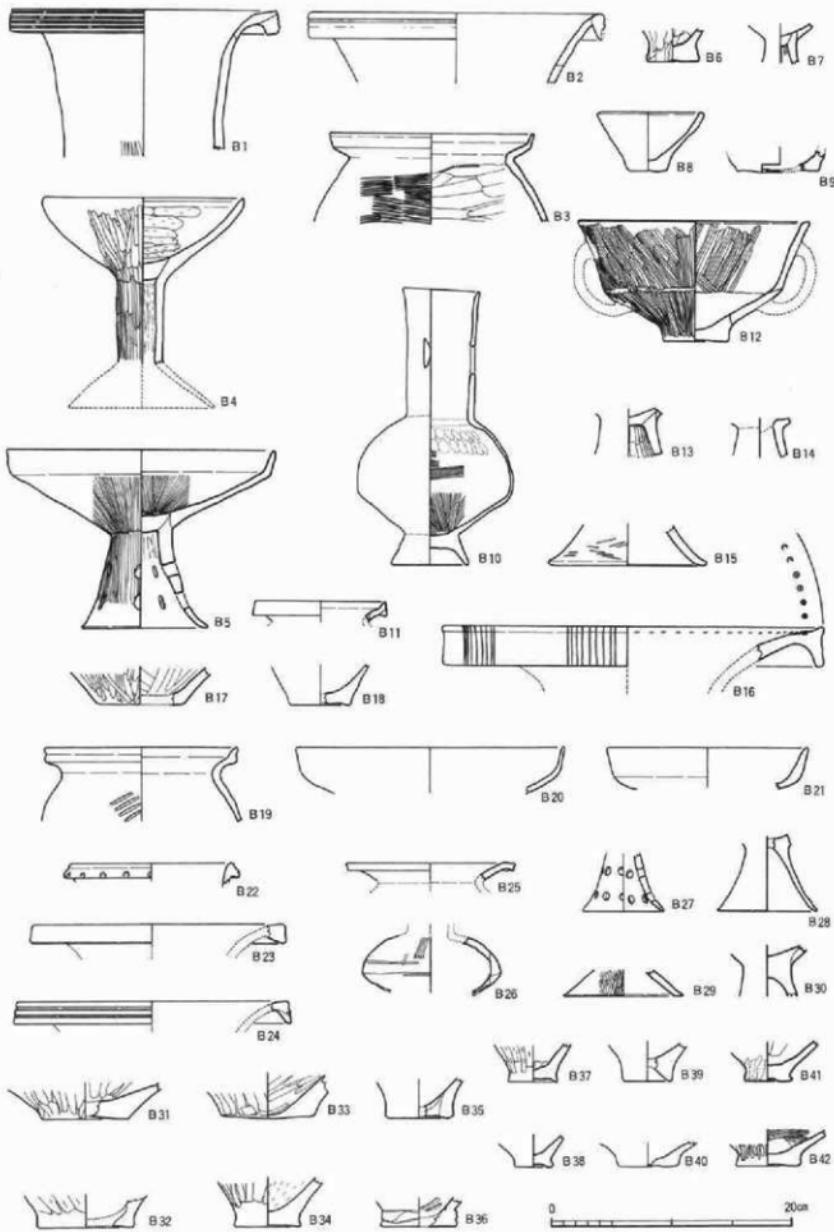
S B 08では裾部の大きく開く脚台Cに体部が内弯する橢形の杯部が付く高杯G（B407～B409）、基部が太く裾部があまり開かない脚台B（B410）、基部が細く縮まり襷部が大きく開く脚台D（B411）などがある。高杯Gは細部において各々違いを認めるが一括して扱う。（B407・B408）は丁寧な細かい荒削り、（B409）は板撫でにより仕上げられる。覆土には口縁部に三角形の粘土紐を貼り付け端面を広くした広口壺G（B415）、窓による鉛垂文が施された壺頭部（B416）、（B416）と同一個体と考えられる底部B（B417）、壺C（B418・B419）、器壁の厚い壺B₁（B420）、口縁部の屈折が緩く端部が肥厚して丸く納まる壺D₃（B423）、ぐい呑み形を呈する鉢E（B427）などがある。

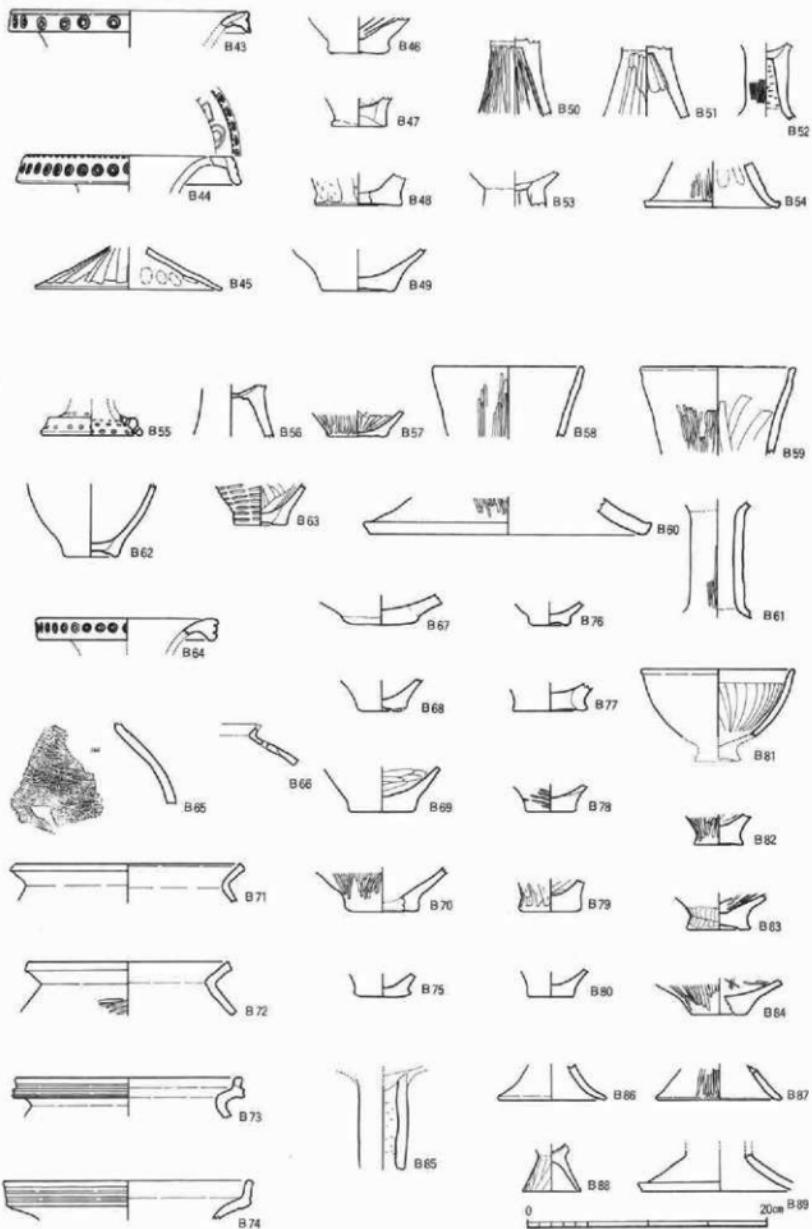
S B 0 9 （第80図・第81図・P.L. 31・P.L. 34・L.L. 35・P.L. 40）

S B 09では直線的な体部に直立気味の口縁部が付く高杯A₂（B432）、橢形の体部下位が少し張り出す高杯E₁（B433）、底部があまり突出しない橢形の鉢B（B434）がある。（B434）の外面は幅の広い単位で窓で撫でつけられる。柱穴には「ハ」の字に大きく開く低脚の脚台Gに張り出しの強い体部を付した脚台付壺（B439）、粘土紐接合痕の明瞭な長頸壺A₂（B440）がある。覆土には広口壺G（B442・B443）、球形の体部に直立する短い口縁部が付く無頸壺（B444）、縦長の体部に少し外傾する短い口縁部が付く壺の小型（B435）、口縁端部が上下に摘み出され若干肥厚する壺A₁の中型（B451）、直線的な体部に突出気味の摘み部が付く蓋A₃（B459）、器壁が厚く作りのシャープな底部M（B473）、短い柱状部に「ハ」の字に広く襷部が付く短脚の脚台A（B466）などがある。上部包含層には大きく開く口縁部に外開きする垂下部が付く器台A₂（B479）、深い体部に直立気味に外反する口縁部を付した高杯B₁（B483）などがある。

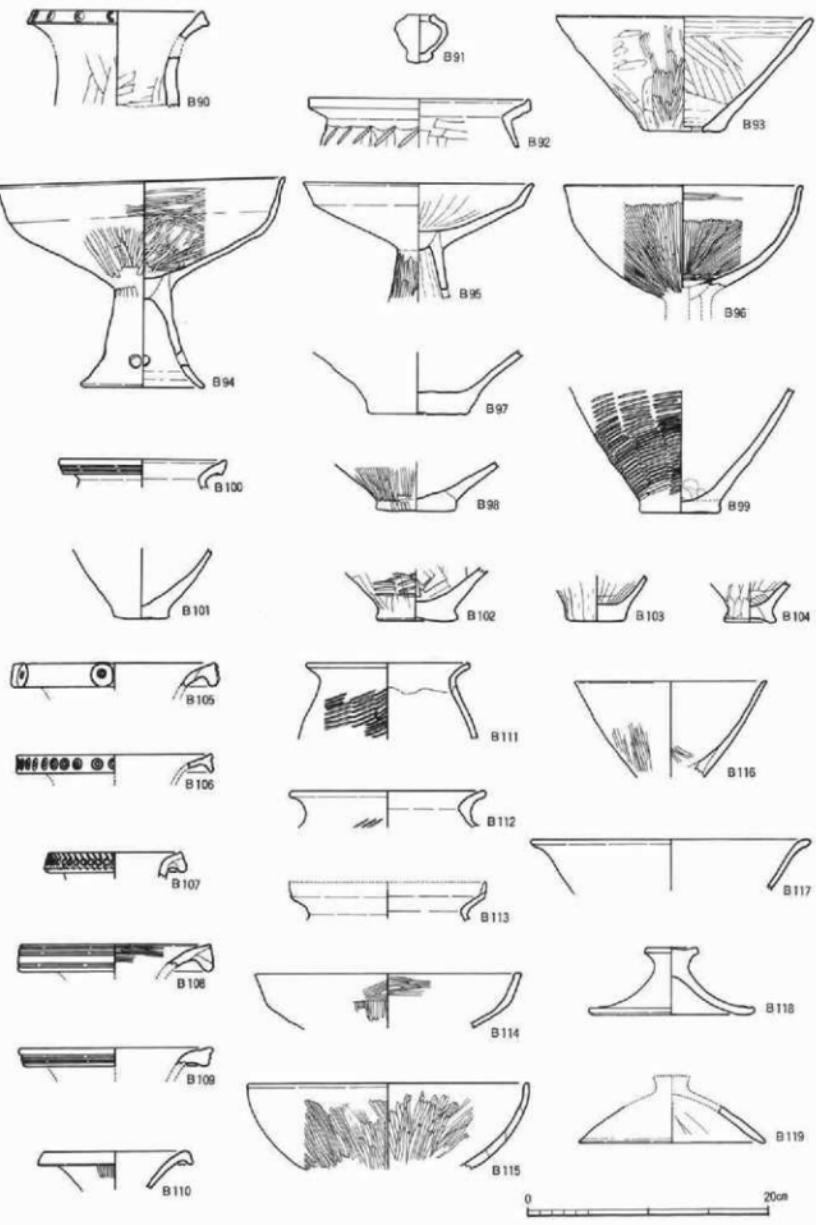
S B 1 0 （第82図～第84図・P.L. 31・P.L. 32・P.L. 35・P.L. 40・P.L. 41）

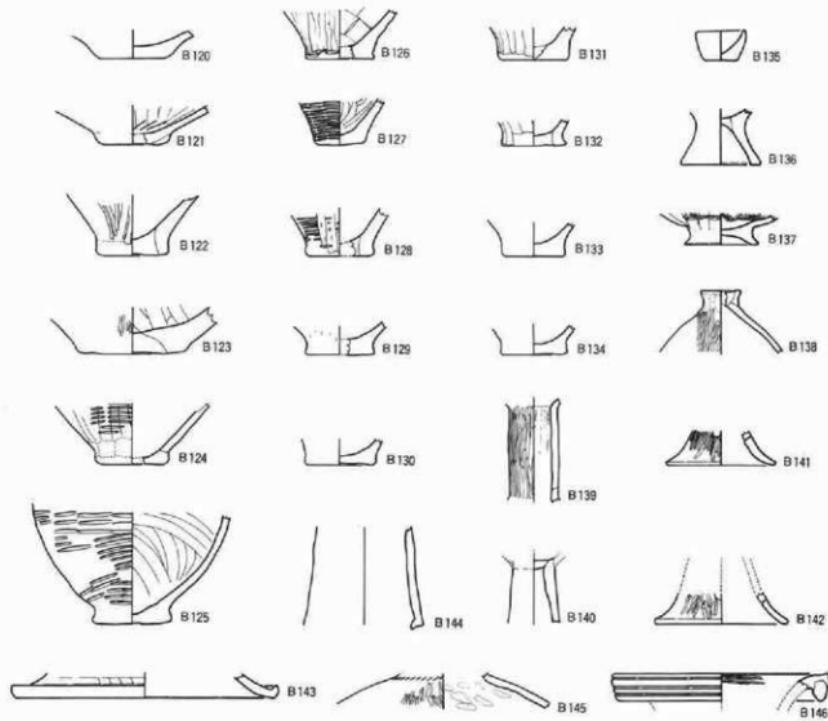
S B 10では外弯の著しい口縁部が付く広口壺I（B489）、縦長の体部に短目の口縁部が直線的に立ち上がる短頸壺A（B490）、縦長の体部に突出する底部を付す壺（B491）、球形の体部に緩く外弯する短目の口縁部が付く短頸壺C（B495）、器壁の厚い脚台Eに体部下位が張り出し頸部のくびれが緩い筒状の口縁部を付した脚台付壺（B496）、体部と口縁部との接縫が不明瞭な高杯B₁（B497）、緩やかに内弯する深手の体部に直立気味





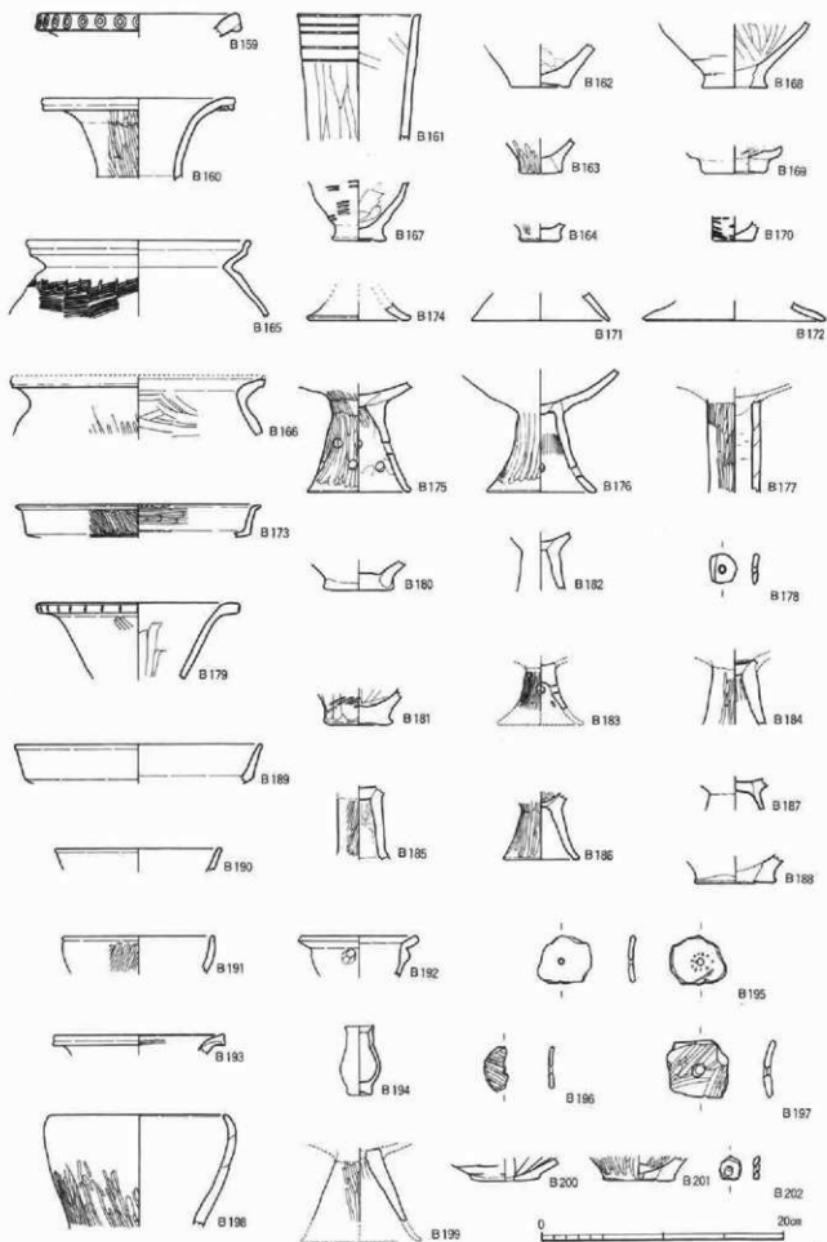
B43~B54—SB01上部包含層 B55~B89—SB02

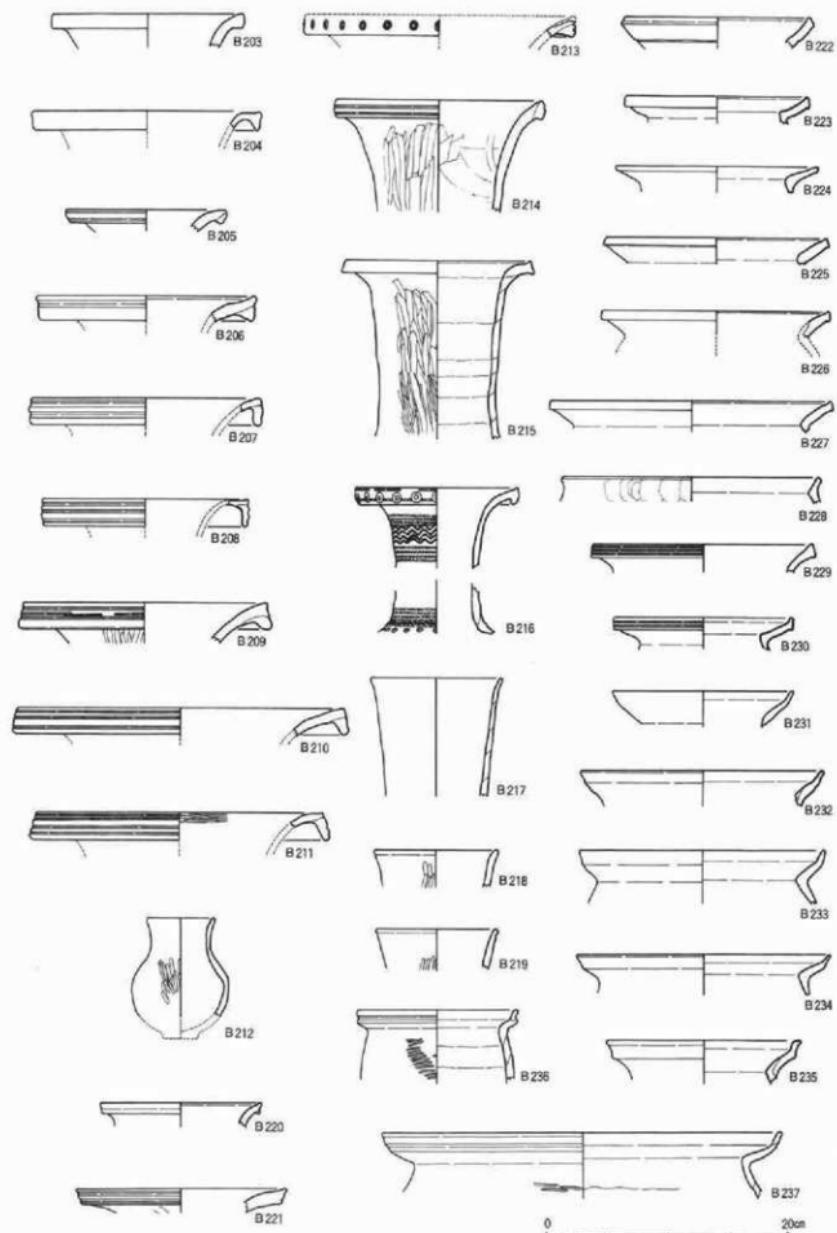


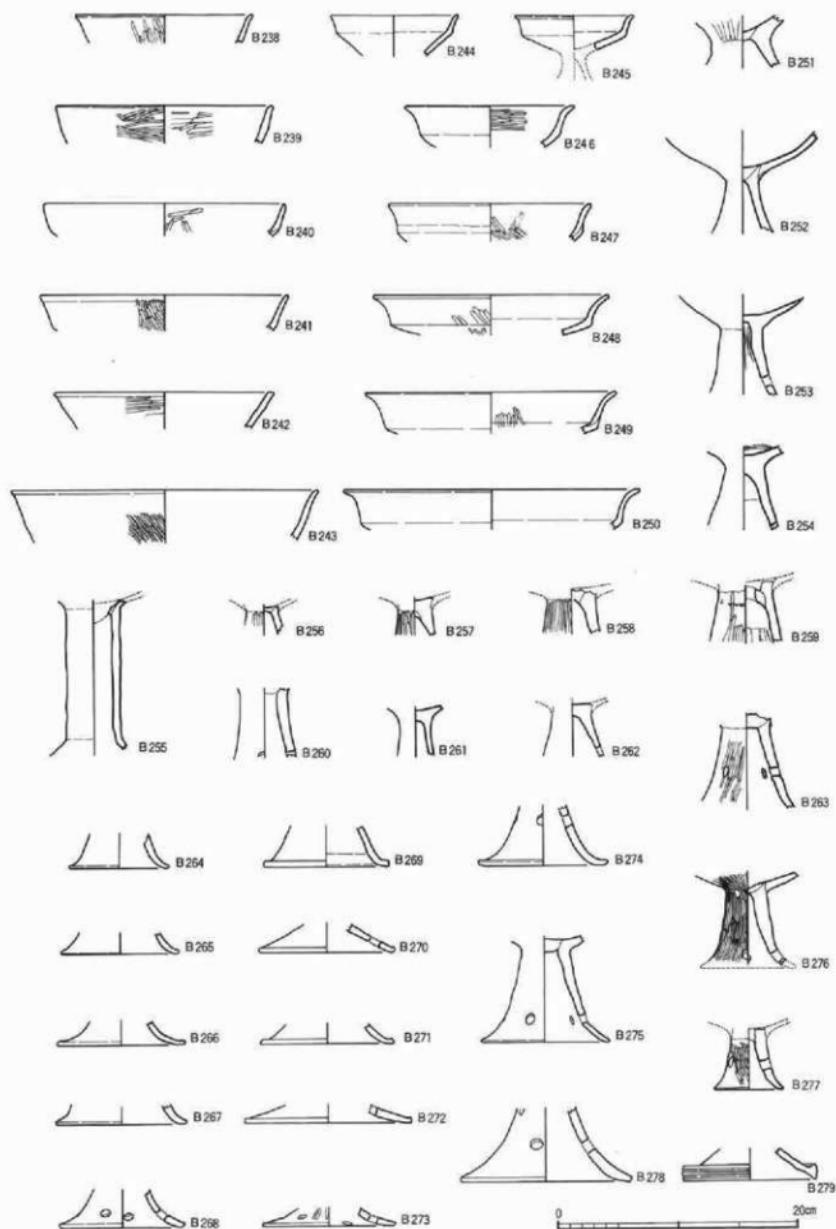


B120~B146—S B03, B146—S B03上部包含層, B147~B158—S B04

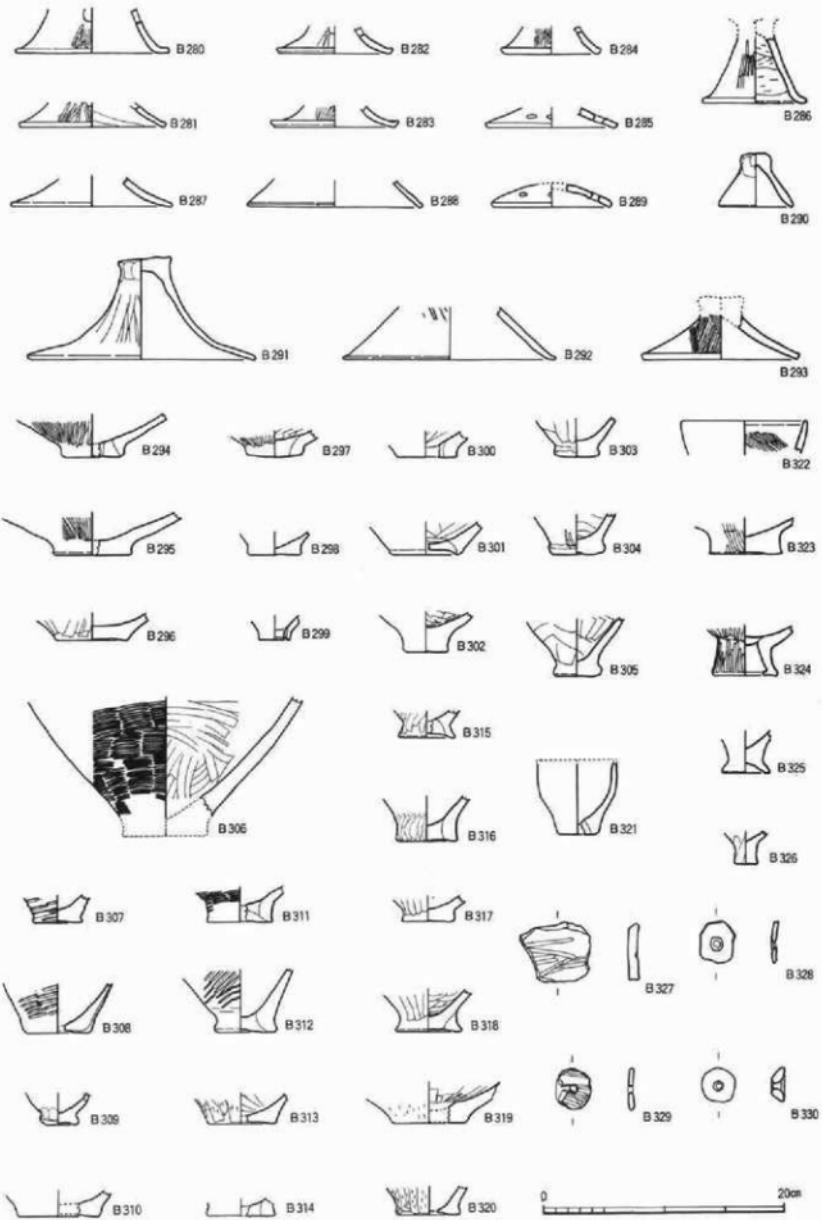
第73圖 S B03·S B04出土土器實測圖



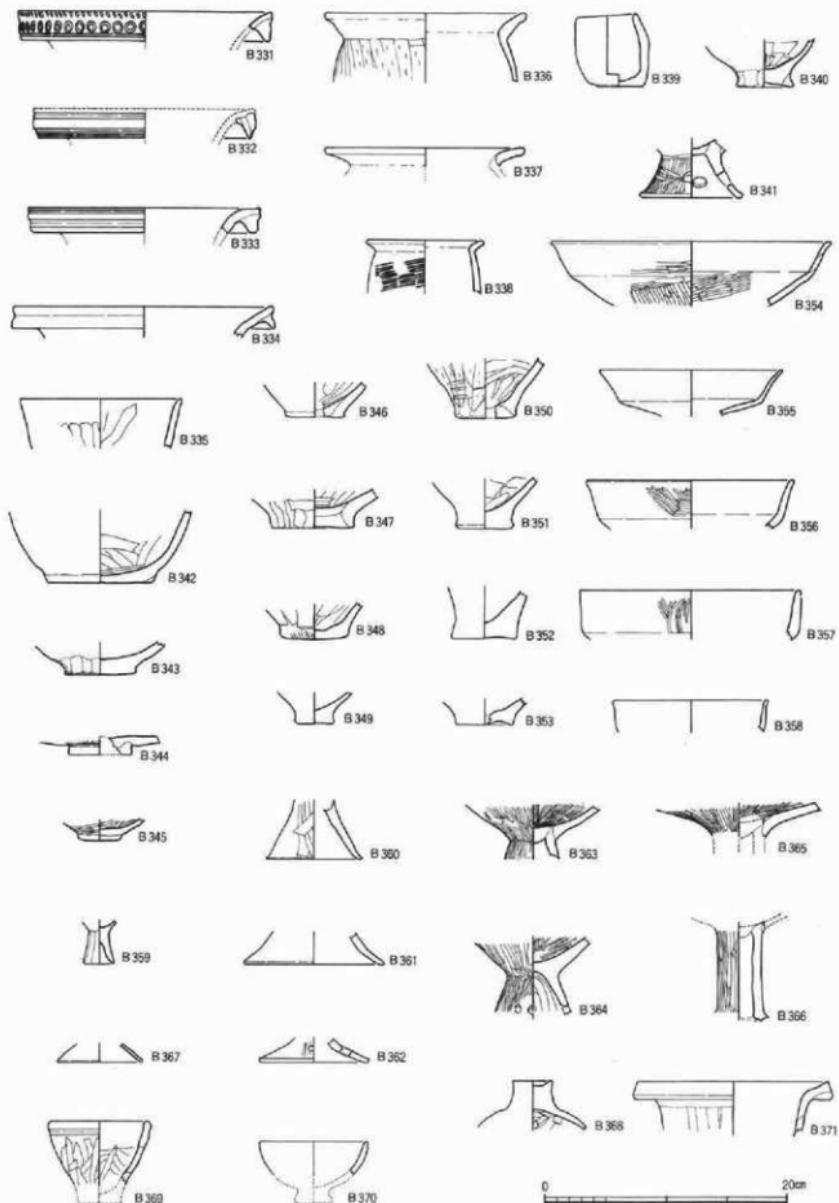




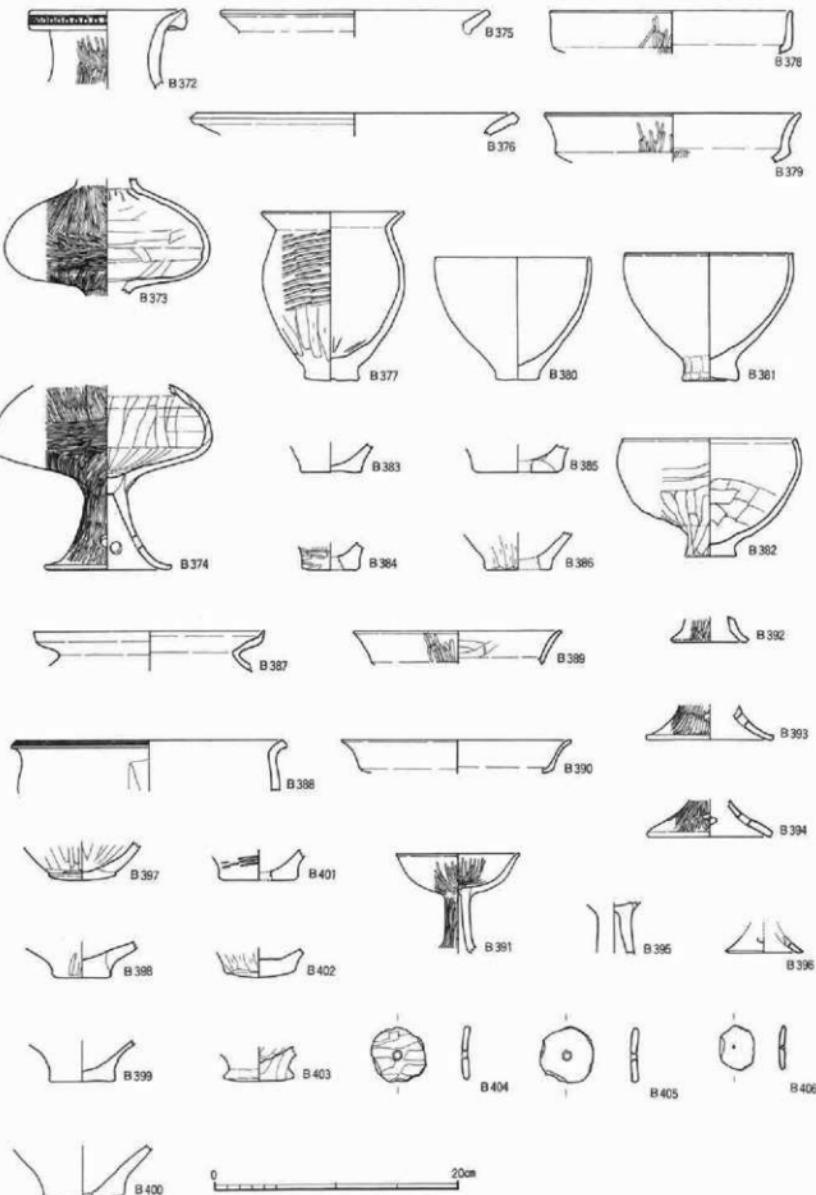
第76図 S-B05出土土器実測図 3



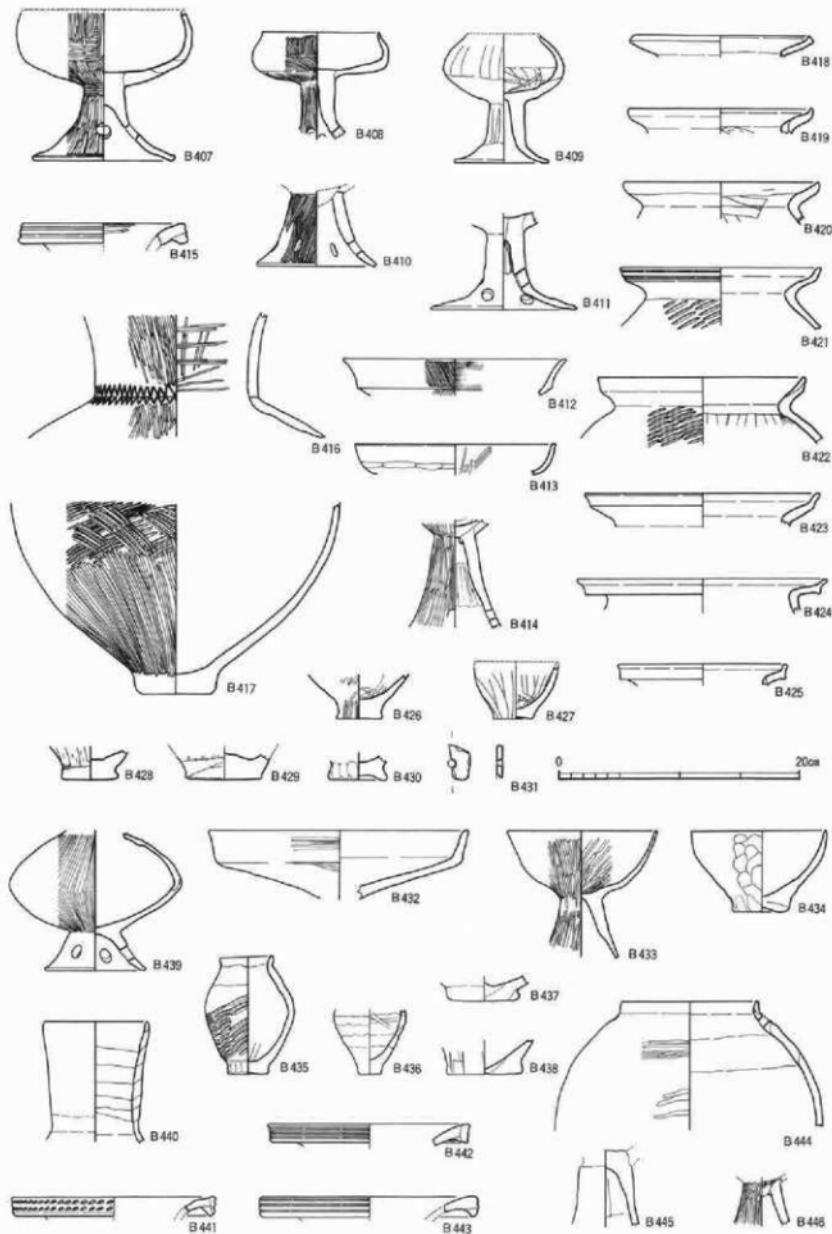
第77図 S B05出土土器実測図4



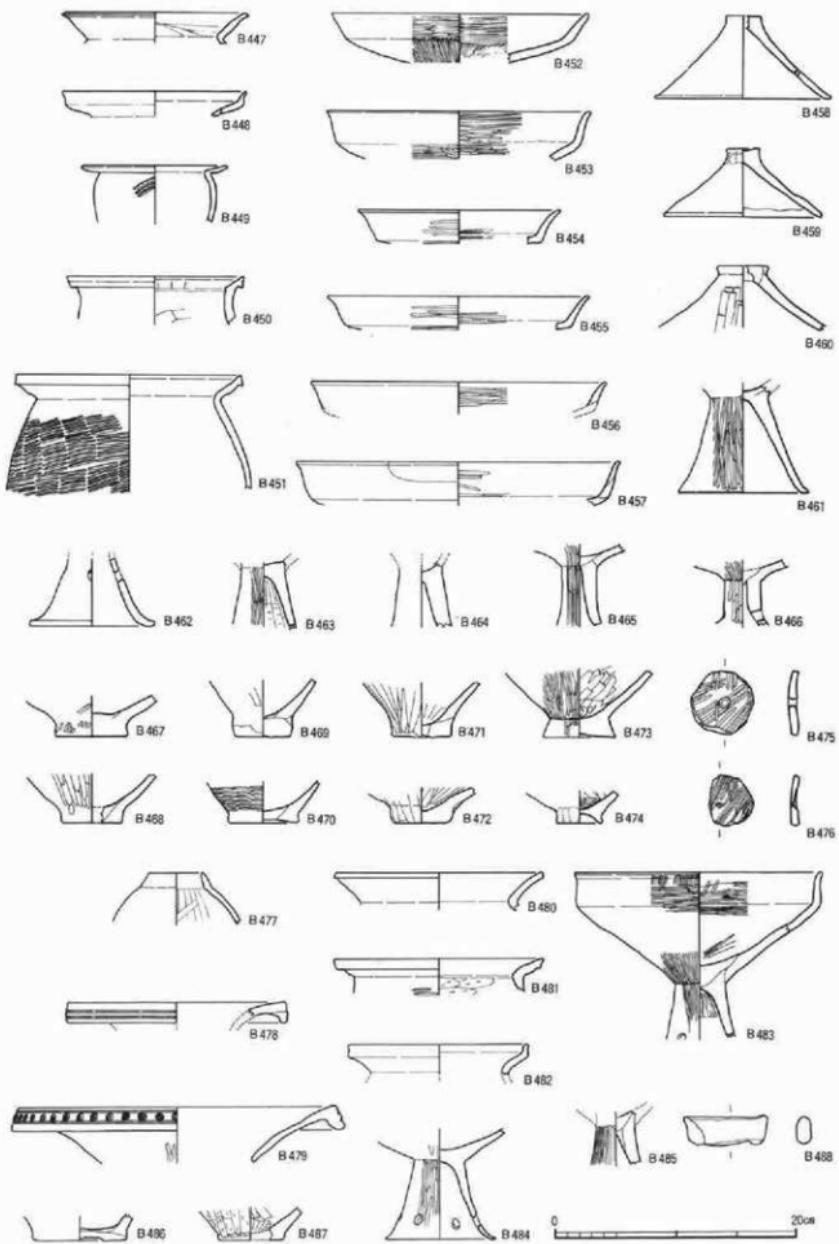
第78图 S.B.06出土土器实测图

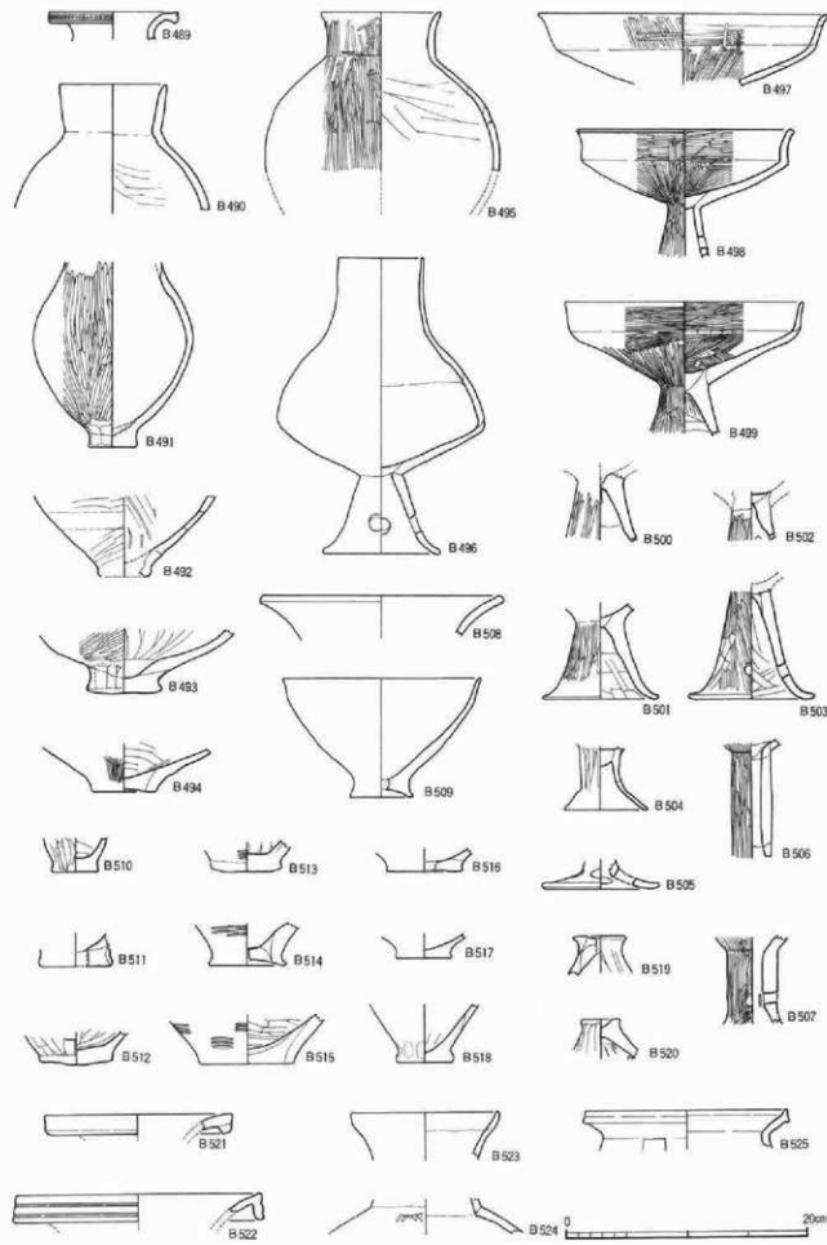


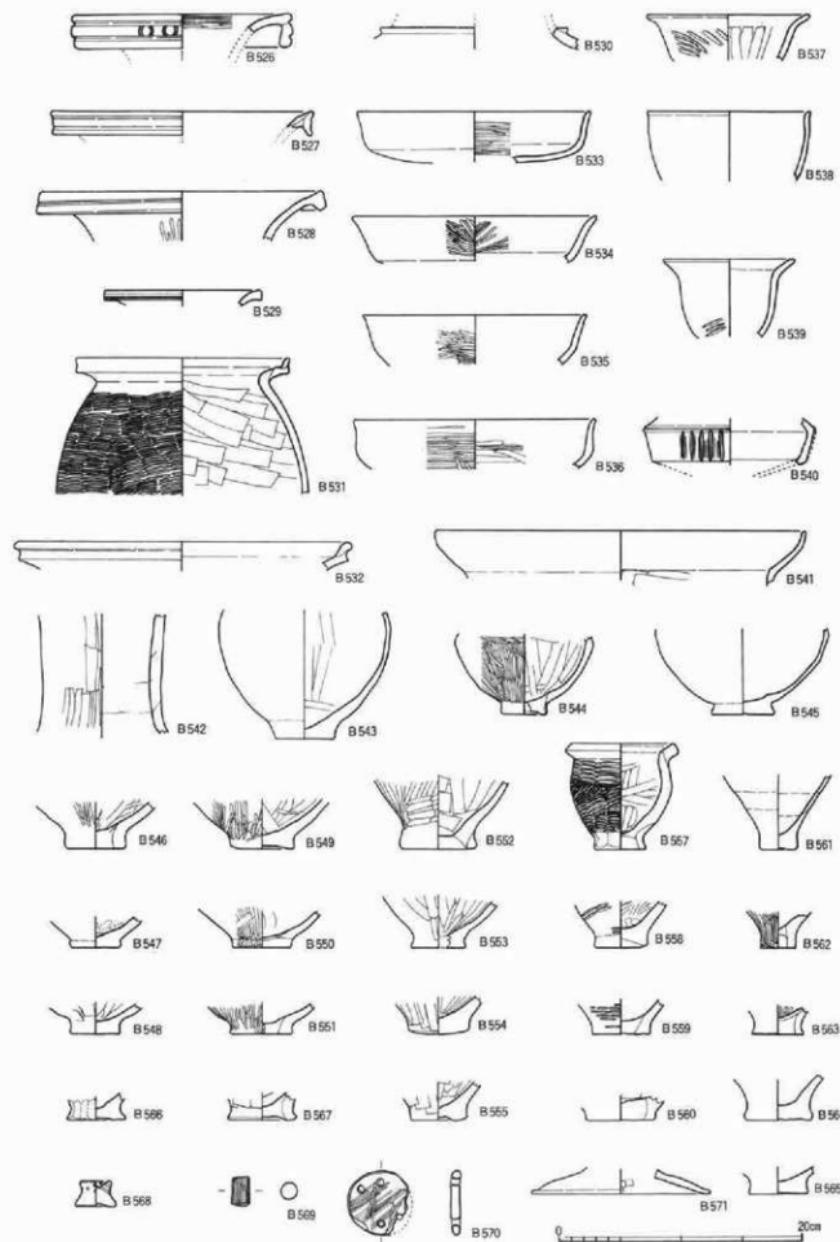
第79圖 SB 07出土土器測圖

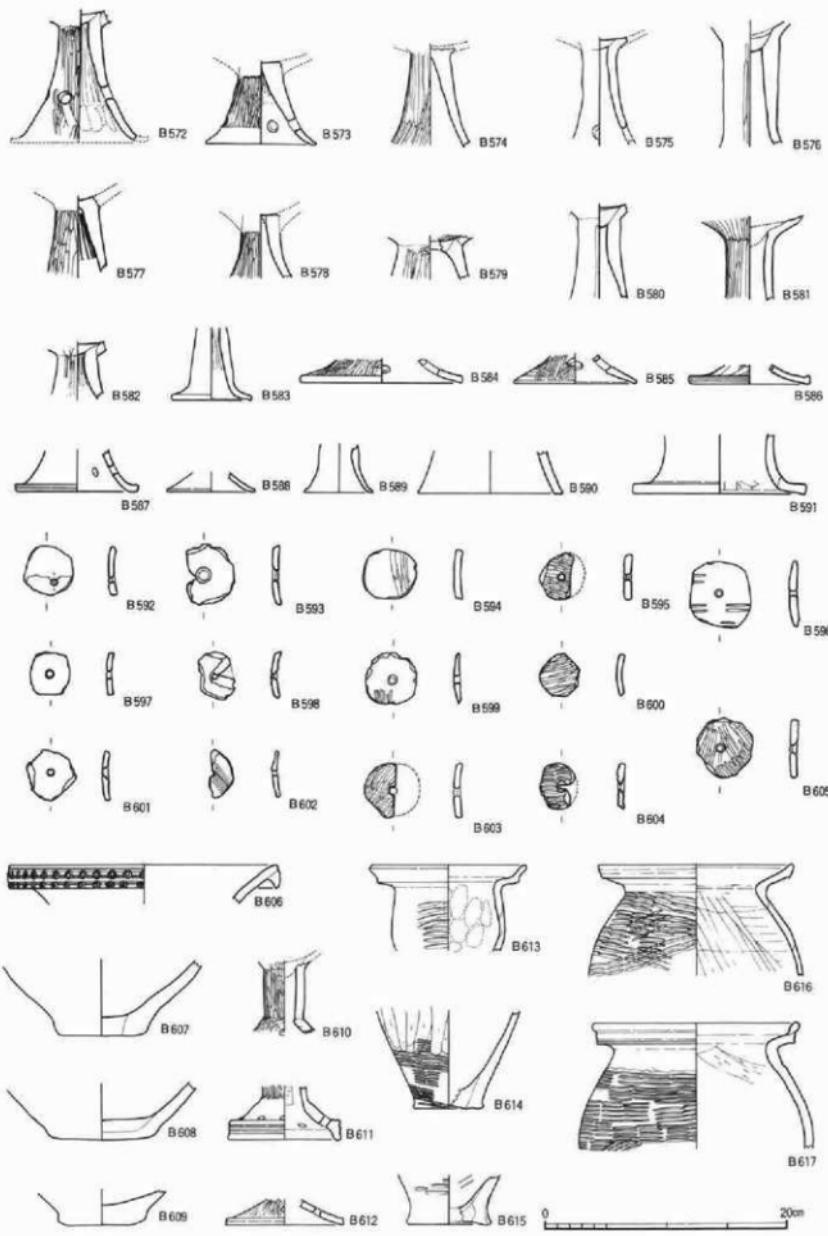


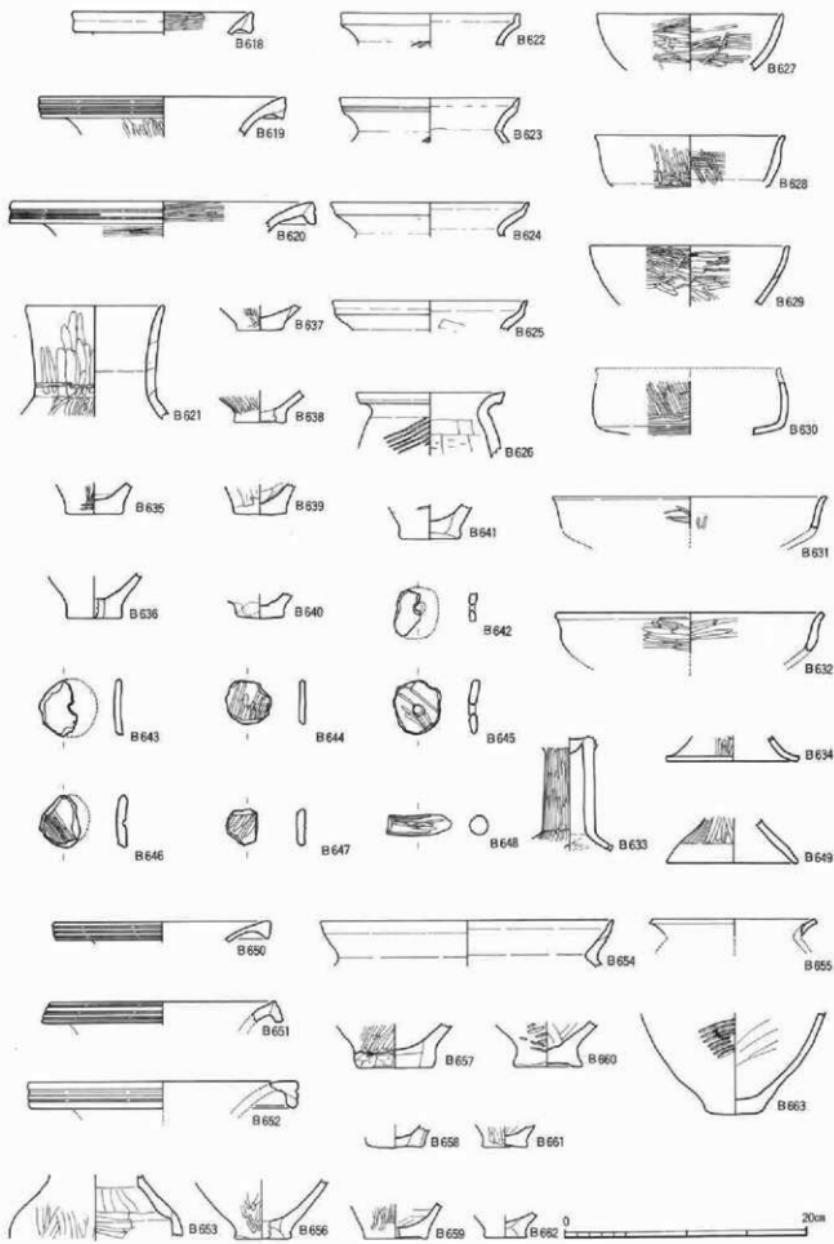
第80図 SB 08・SB 09出土土器実測図

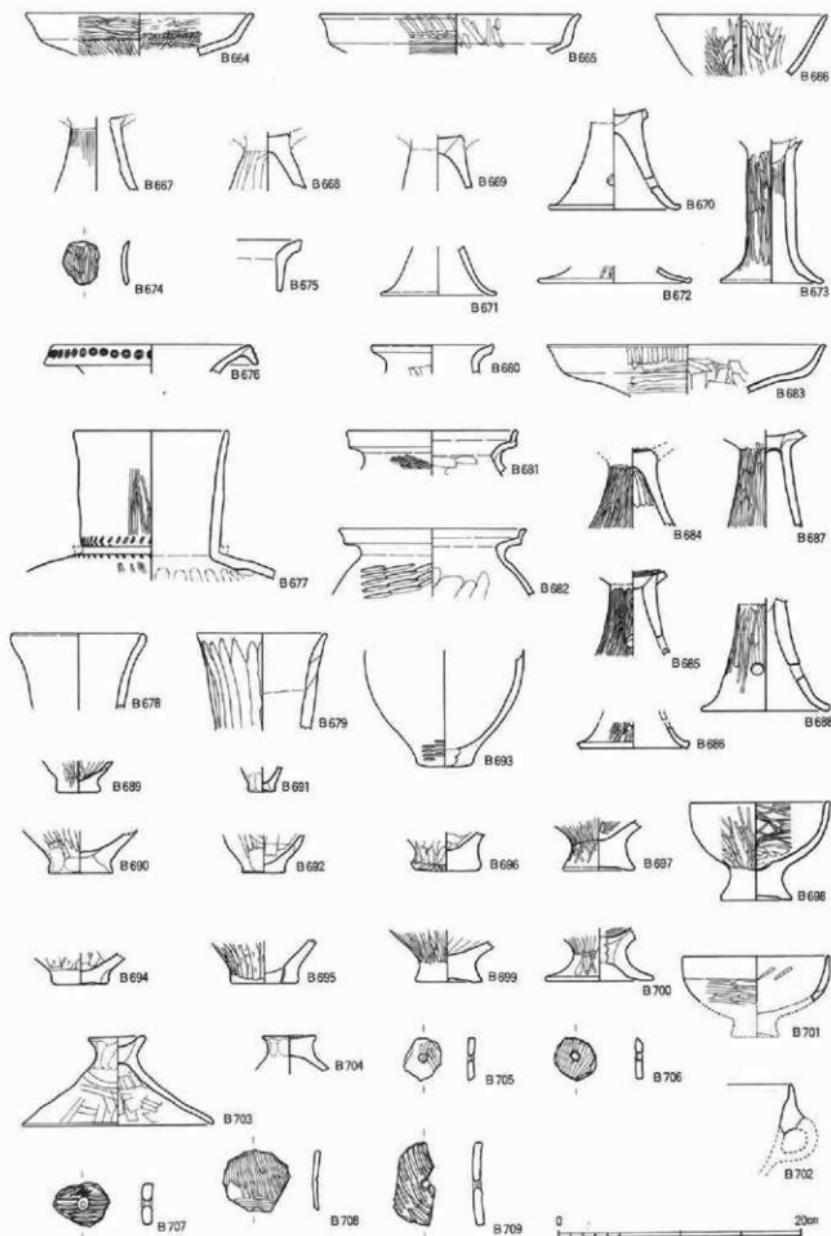


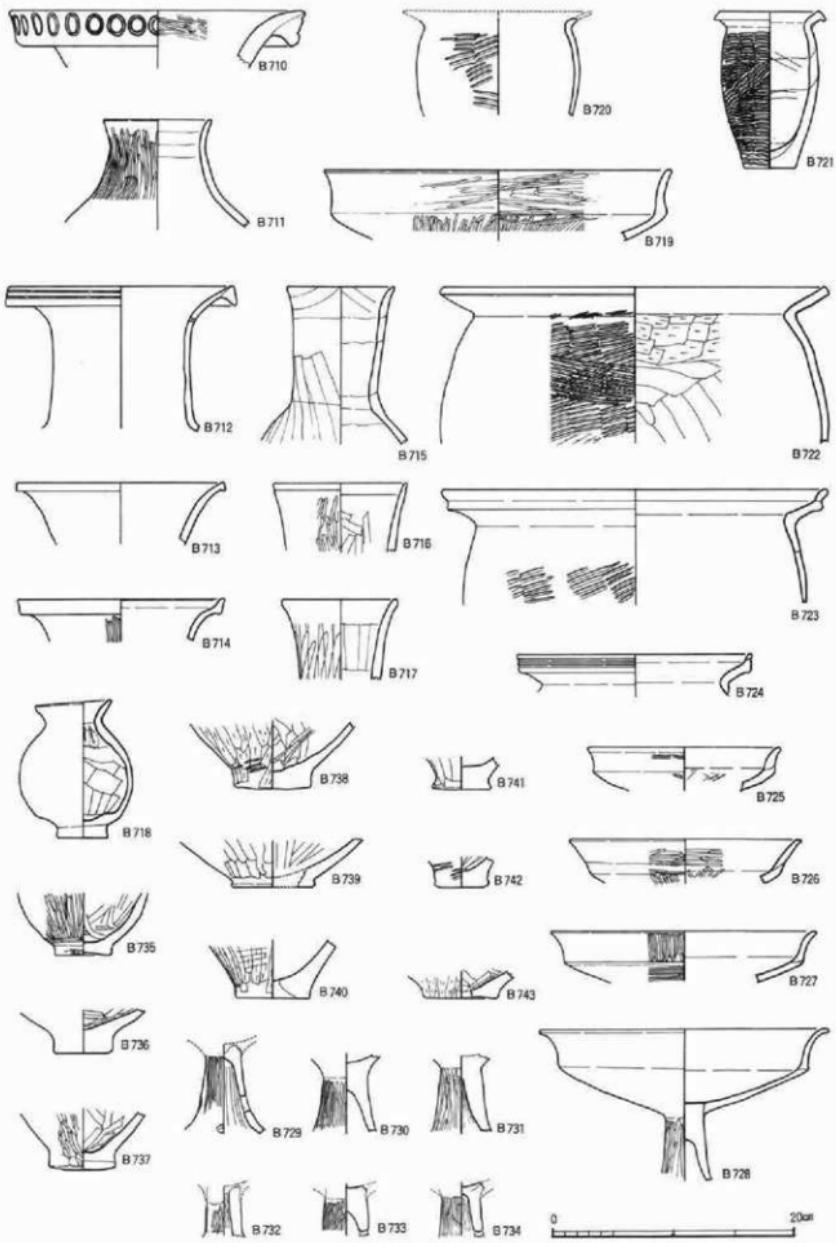


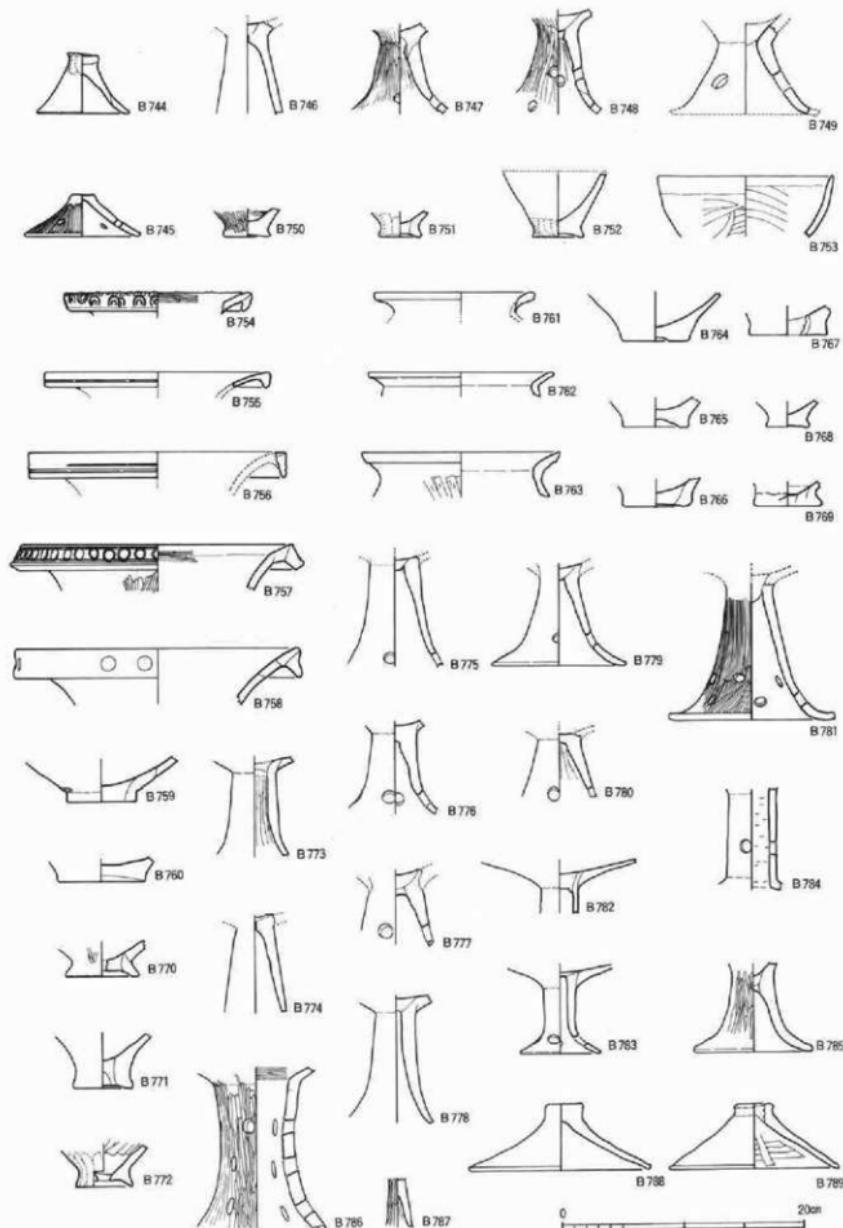




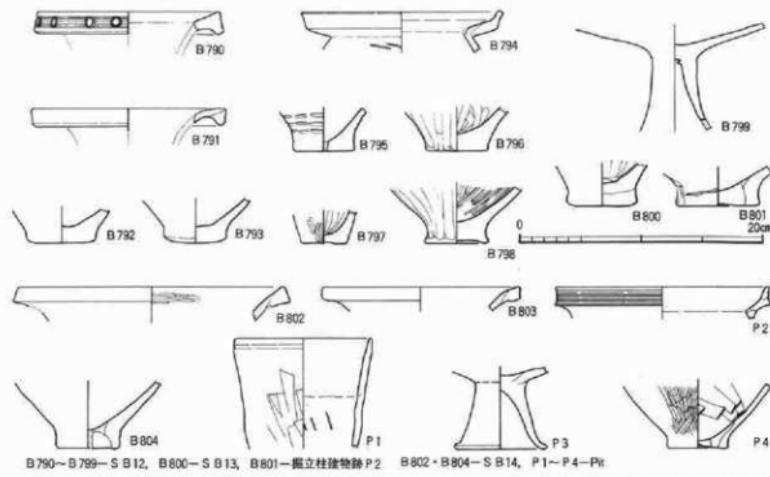








第88图 S B 11出土土器类测图 2



第89図 S B12・S B13・S B14・pit・櫛立柱建物跡出土土器実測図

に外弯する口縁部が付く高杯B₁(B498)、深手の直線的な体部に直立気味の口縁部が付く高杯A₂(B499)、突出気味の上げ底の底部に緩やかに内弯して立ち上がる口縁部が付く鉢A₂(B509)などがある。全体に遺存度が良好で丁寧な施磨きが顕著である。その他、著しく突出する底部に大きく開く体部が続く底部C(B493)、底部と体部とのくびれがなく直線的に体部に続く底部J(B515)、脚台C(B501・B503)、脚台Aの柱状部(B506・B507)、外傾する頸部に内弯する口縁部が付いて緩やかな段を成す短頸壺B(B523)などがある。(B524)の頸部には長短のある鉢文が施される記号文がある。覆土には器壁の薄い幅の広い垂下部をもつ広口壺B₂(B526)、撫で肩の体部から水平に近い状態に折曲し更に上方に立ち上がる壺D₃の中型(B531)、壺D₃の大型(B532)、器壁の厚い壺A₁の小型(B557)、屈折して外傾する短い口縁部を付した鉢D₃(B537・B539)、口縁部が内弯する鉢D₁の大型(B541)などがある。上部包含層には広口壺F₂(B606)、壺D₃の小型(B613)、壺A₁(B616)、壺D₂の中型(B617)、脚台H(B611)などがある。

S B10 の S D 6 (第85図・第86図・P.L. 32・P.L. 35・P.L. 36・P.L. 41)

S D 6では器壁の厚い長頸壺D(B621・B679)、垂直に立ち上がる太い口縁部を付した太頸壺(B677)、壺A₁の小型(B626)、壺D₅(B654)、体部が緩やかに外反し外傾する口縁部を付す高杯(B683)、高杯F(B666)、安定した底部に内弯する口縁部を付した小型の鉢B(B698)、摘み部と体部とのくびれが明確で摘み上面が凹む壺A₂(B703)、円柱状の長い柱状部に「ハ」の字に開く檐部を付した脚台A(B673)などがある。

S B11 (第87図・第88図・P.L. 32・P.L. 33・P.L. 36・P.L. 41)

S B11では頸部と口縁部の境めが明確でなく口縁部が緩やかに外弯する壺(B711)、体部径が口縁部径より小さく口縁端部が斜め下方に肥厚する壺A₁の小型(B721)、高杯B₁の大型(B719)などがある。(B721)の外面は叩きのち軽い施削りが加えられ全面に薄い焼が付着する。覆土には円筒状を呈する頸部にシャープな三角形の垂下部が付く広口壺F₁(B712)、長頸壺A₂(B715)、小型壺(B718)、口縁部の長い壺A₁の大型(B722)、口縁部が段を成す壺D₂の大型(B723)、口縁部が長く著しく外反する高杯B₁(B728)などがある。

S B12・S B13・S B14・P i t・櫛立柱建物跡 (第89図・P.L. 38)

覆土中の土器が大半を占めるが、時期決定の一要素として捉えておく。

(6) 土壙SK出土土器

当項では土壙の基底部・覆土から出土した土器を土壙出土土器として扱う。土器の中には細片も多く、二次堆積的なものも含まれるが、時期決定要素の一員として捉えておく。以下、主な土器のみ記述することにする。

S K 1 (K 1～K 5) (第90図・P L. 42・P L. 45)

S K 1 では直線的に外傾する頸部に縦の明確な口縁部が付く広口壺C₂ (K 1)、直立した頸部から屈折して伸びる口縁部が付く広口壺C₁ (K 2)、丸みのある頸部に緩やかに外寄する口縁部が付く壺 (K 3)、直線的に外傾する楕形の杯部を有する高杯F (K 4)などがある。(K 3) の内外面は板撫でによる調整。

S K 37 (K 12～K 16) (第90図・P L. 45)

S K 37 では口縁部内面に籠焼き文様の施される広口壺F₂ (K 12)、外反する短い口縁部をもつ壺 (K 13)、半球形の体部に外傾する短い口縁部を付した鉢C (K 15・K 16)、裾部が直線的な脚台B (K 14) がある。

S K 87 (K 20～K 24) (第90図・P L. 45)

S K 87 では広口壺C₁ (K 20)、やや後継の崩れた広口壺C₃ (K 22)、口縁部上半に凹線文を施した短頸壺 (K 21)、口縁端部の屈曲の著しい壺D₄ の中型 (K 23)、突出気味の底部G (K 24) などがある。

S K 103 (K 31～K 36) (第90図・P L. 44・P L. 45)

S K 103 では大きく直線的に開く口縁部に内傾する垂下部が付く器台A₂ (K 31)、口縁部が長く端部に垂平に近い面をもつ壺A₁ の小型 (K 33)、高杯B₁ (K 34)、口縁部が内傾して端部で外側へ折れ曲がる高杯H (K 35)、体部の張りの小さい体底部 (K 32) などがある。(K 32) の内外面共に刷毛撫でにより仕上げられる。

S K 118 (K 37～K 44) (第90図・P L. 45)

S K 118 では器壁の厚い広口壺D (K 37)、直立する筒状の口頸部に折れ曲がる垂下部が直接付く広口壺J (K 38)、垂下部が内傾する広口壺G (K 39)、高杯E の体部 (K 40)、蓋A の摘み部 (K 44) などがある。

S K 165 (K 48～K 52) (第91図・P L. 43・P L. 44)

S K 165 では球形に近い体部に外反する長い口頸部が付く長頸壺A₂ (K 48)、口縁部垂下面に凹線文を施した広口壺C₁ (K 49)、裾端部に面をもつ脚台E (50)、直線的に延びる裾部に基部が続く脚台B (K 51) などがある。(K 48) の頸部外面は磨きのちに板撫でを加え、肩部に籠記号が認められる。

S K 175 (K 53～K 63) (第91図・P L. 44)

S K 175 では口縁端面に擬回線を施した壺D₂ の大型 (K 53)、器壁の厚い垂直気味に立ち上がる口縁部をもつ高杯C (K 54)、直線的に外傾する口縁部を付す高杯A₂ (K 55)、楕形の高杯E₂ (K 57) などがある。

S K 196 (K 68～K 93) (第91図・P L. 42・P L. 44)

S K 196 では口縁端部の垂下の短い広口壺B₁ (K 69・K 70)、浅い凹線文の施された広口壺F₁ (K 71)、口縁部の立ち上がりの短い壺D₂ の中型 (K 72)、器壁の厚い頸部に外傾して上方に立ち上がる口縁部を付す壺 (K 73)、口頸部の器壁の厚い壺A₂ (K 74)、壺D₂ の小型 (K 75)、大きく開く脚台部に深い杯部が付く高杯 (K 76)、突出する底部に緩やかに内寄する口縁部が付く鉢A₂ (K 87・K 88)、脚台C (K 77) などがある。

S K 228 (K 109～K 115) (第92図・P L. 45)

S K 228 では壺D₂ の中型 (K 113)、著しく長い口縁部が緩やかに外反する高杯D (111)、凹線文の施される鉢G (K 109)、縦位置に把手の付く鉢G (K 112)、垂下部のシャープな器台A₂ (K 112) がある。

S K 234 (K 118) (第92図・P L. 42)

S K 234 では突出する底部に大きく開く体部が続き、体部下位で張り出し最大径をもち、体部から口頸部にかけて緩やかに外反する広口壺B₃ (K 118) がある。口縁垂下部は長く、内寄するのを特徴とする。

S K 234 (K 119) (第92図・P L. 44)

S K 234 では円盤状を呈し、内面の縁に沿って合せ溝が作られる蓋C (K 119) があり、4孔の紐穴がある。

S K 235 (K 120~K 127) (第92図・P.L. 44・P.L. 45)

S K 235では口縁垂下部に凹線文を施した広口壺B₁(K 120)、短頸壺A(K 121)、体部上位に最大径をもち直立する短い口頭部が付く小型壺(K 122)、手捏ねの高杯(K 123・K 124)などの小型品が目立つ。

S K 236 (K 128~K 136) (第92図・P.L. 45)

S K 236では直立する口縁部上位で屈曲して立ち上がる広口壺K(K 128)、突出する底部から直線的に外傾する体部に続く底部D(K 134)、脚台Aの柱状部(K 129)、脚台B・Cの基部(K 130~K 133)がある。

S K 241 (K 137~K 139) (第93図・P.L. 42・P.L. 45)

S K 241では突出気味の底部に卵形の体部が続き外反する口頭部に内傾する垂下部が付く広口壺H(K 137)、脚台Aの基部(K 138)、脚台B(K 139)がある。(K 137)は外面が板撫でのち磨きが加えられる。

S K 548 (K 171) (第93図)

S K 548では体部径が口縁部径より小さく口縁端部が上方に肥厚する壺C(K 171)に磨削りが加えられる。

S K 598 (K 176・K 177) (第93図・P.L. 42)

S K 598では外傾する頸部に屈曲する短い口縁部が付き垂下部が丸みを呈する広口壺D(K 176)がある。

S K 611 (K 178) (第94図・P.L. 43)

S K 611では器台A(K 178)の口縁部端面に凹線文3条と継位置の12条の籠書き直線文が施される。

S K 631 (K 188・K 189) (第94図・P.L. 42・P.L. 44)

S K 631では扁平な球形の体部に直立て外反する口頭部が続き、口縁端部が著しく肥厚する広口壺G(K 188)、裾部で若干開き気味になる脚台B(K 189)がある。(K 188)の外面は継方向の磨きを加える。

S K 634 (K 190~K 196) (第94図・P.L. 42・P.L. 43・P.L. 45)

S K 634では体部下位で張り出し最大径を成し接を成して屈曲する口縁部にシャープな垂下部が付く広口壺F₂(K 191)、縫穴の穿たれた広口壺D(K 190)、脚台付壺の体部(K 192)、口縁部に緩い段をもつ鉢G(K 193)、突出する上げ底状の底部に球形の体部が続く底部L(K 196)などがある。

S K 635 (K 197~K 203) (第94図・P.L. 44)

S K 635では長頸壺D(K 198)、脚台付壺の体部(K 197)、「ハ」の字形に突出する底部に緩やかに内弯して立ち上がる小振りの口縁部が付く鉢B(K 199)などがある。(K 199)は内外面共に板撫でを加える。

S K 649 (K 211~K 216) (第95図・P.L. 43・P.L. 45)

S K 649では卵形の体部に外傾する短い口頭部が付く短頸壺A(K 211)、体部上位で最大径を測り口縁部先端で緩やかに屈曲して立ち上がる壺D₅(K 213)、口縁部先端で屈曲して立ち上がる鉢D₂の大型(K 215)、底部B(K 212)、短脚の脚台Aの柱状部(K 214)などがある。(K 213)の外面は叩きのち磨削り。

S K 659 (K 217~K 233) (第95図・P.L. 43)

S K 659では口縁垂下部の短い広口壺D(K 217)、口縁部の立ち上がりの明確な壺D₄の中型(K 219)、口縁部の立ち上がりの緩い壺D₅(K 222)、擬四線の入る壺A₁の中型(K 221)、手捏ねの鉢(K 231)、内弯する長い口縁部が付く鉢D₁(K 220)、脚台Aの裾部(K 226)などの細片が多く出土している。

S K 671 (K 239~K 245) (第95図)

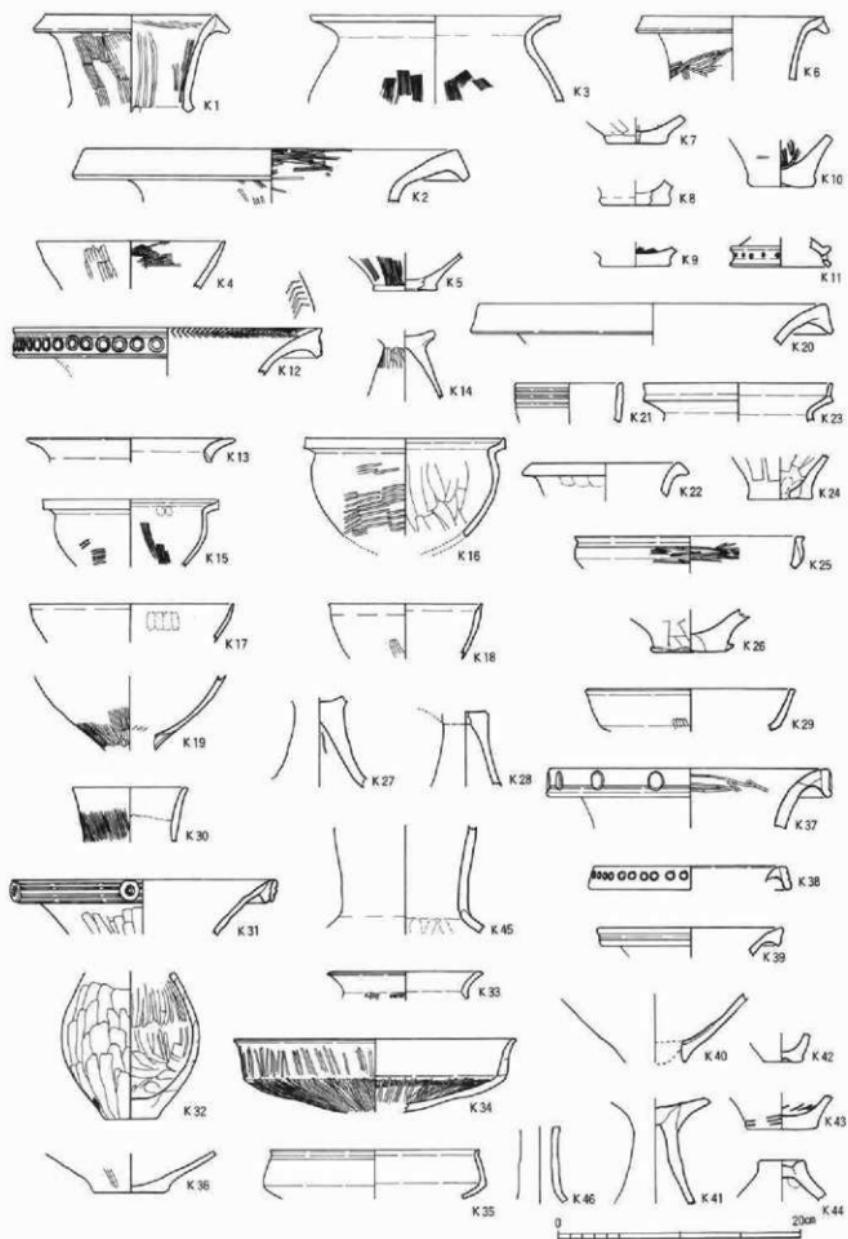
S K 671では広口壺H(K 239)、無頸壺(K 240)、脚台Aの柱状部(K 241)、脚台B・Cの基部(K 242~244)、蓋の摘み部(K 245)などがある。

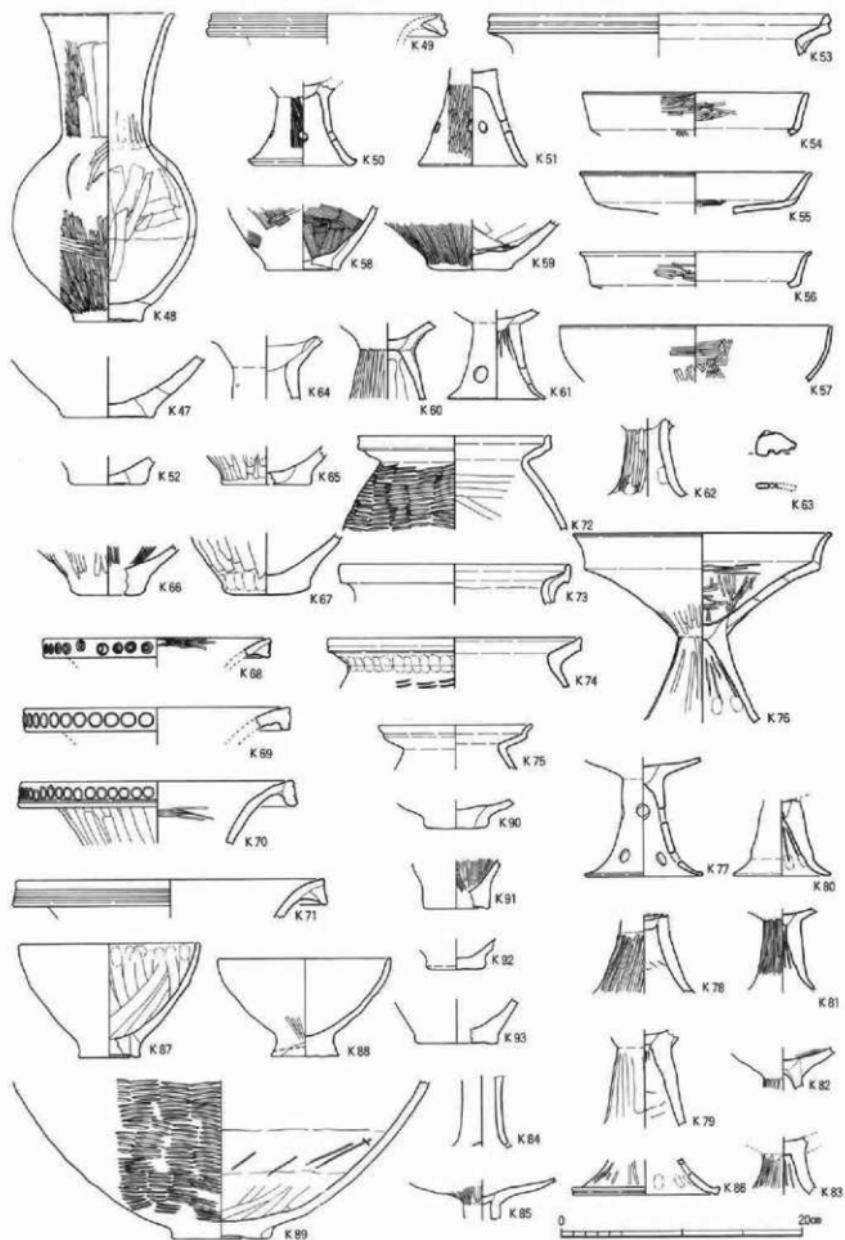
S K 675 (K 237・K 238) (第95図・P.L. 43)

S K 675では口縁部の外傾と立ち上がりの明確な壺D₂の中型(K 238)がある。外面は水平な平行叩き。

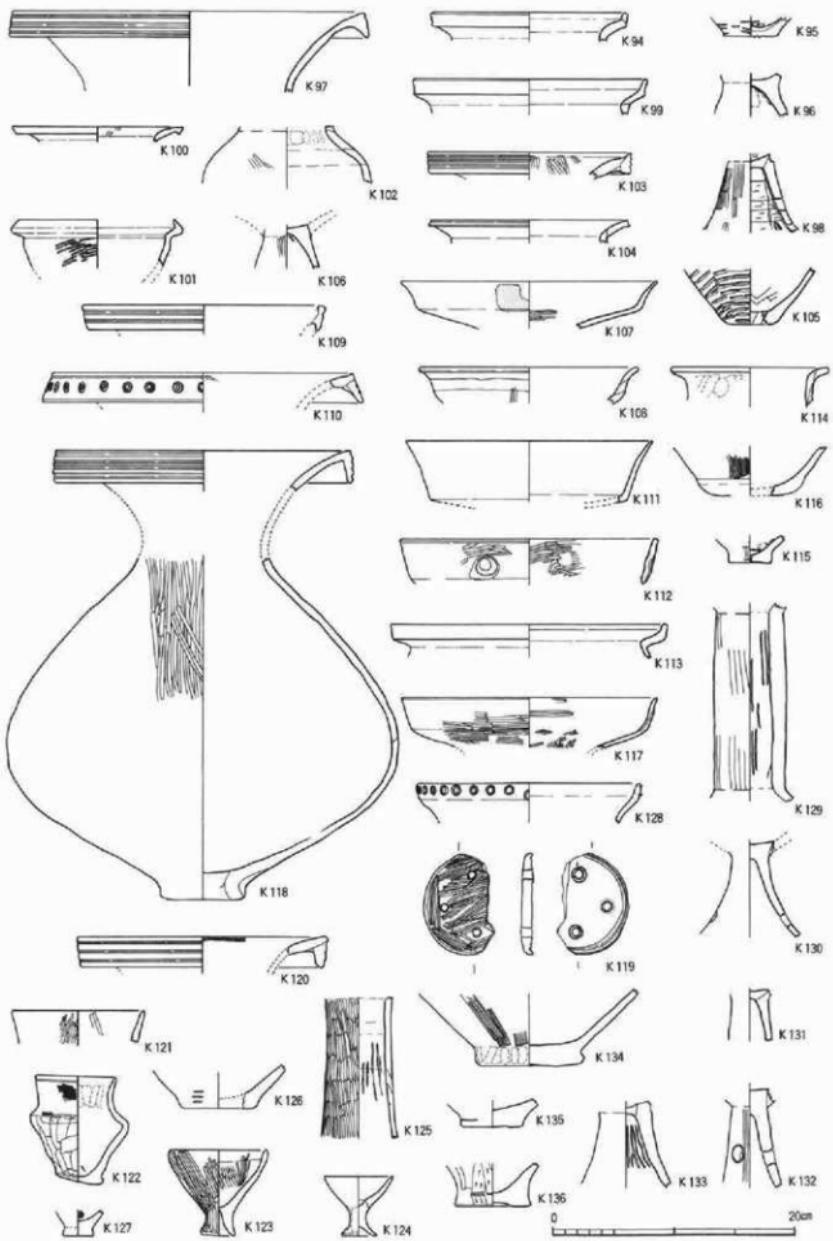
S K 701 (K 246~K 251) (第95図)

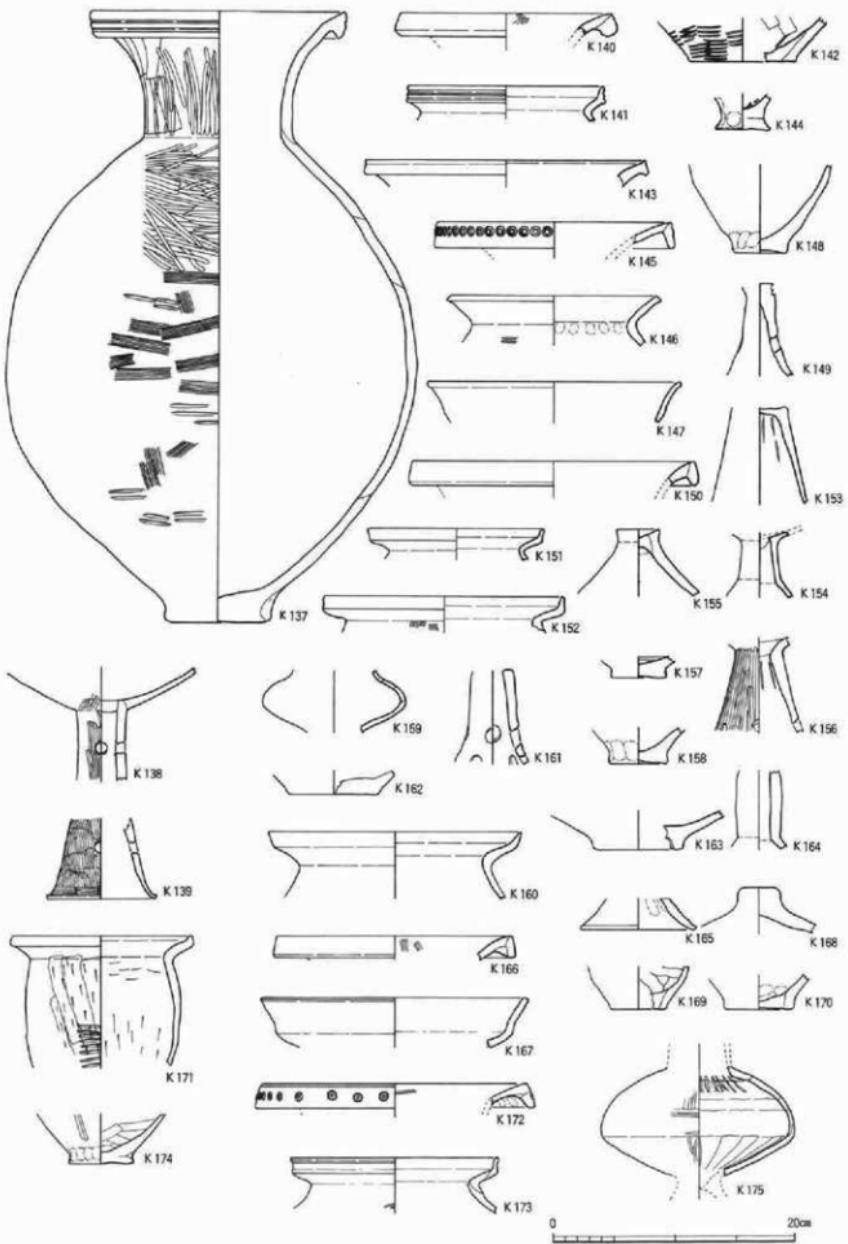
S K 701では口縁垂下部の薄いB₂(K 246)、屈折する口縁部が付く器台A₂(K 248)などがある。



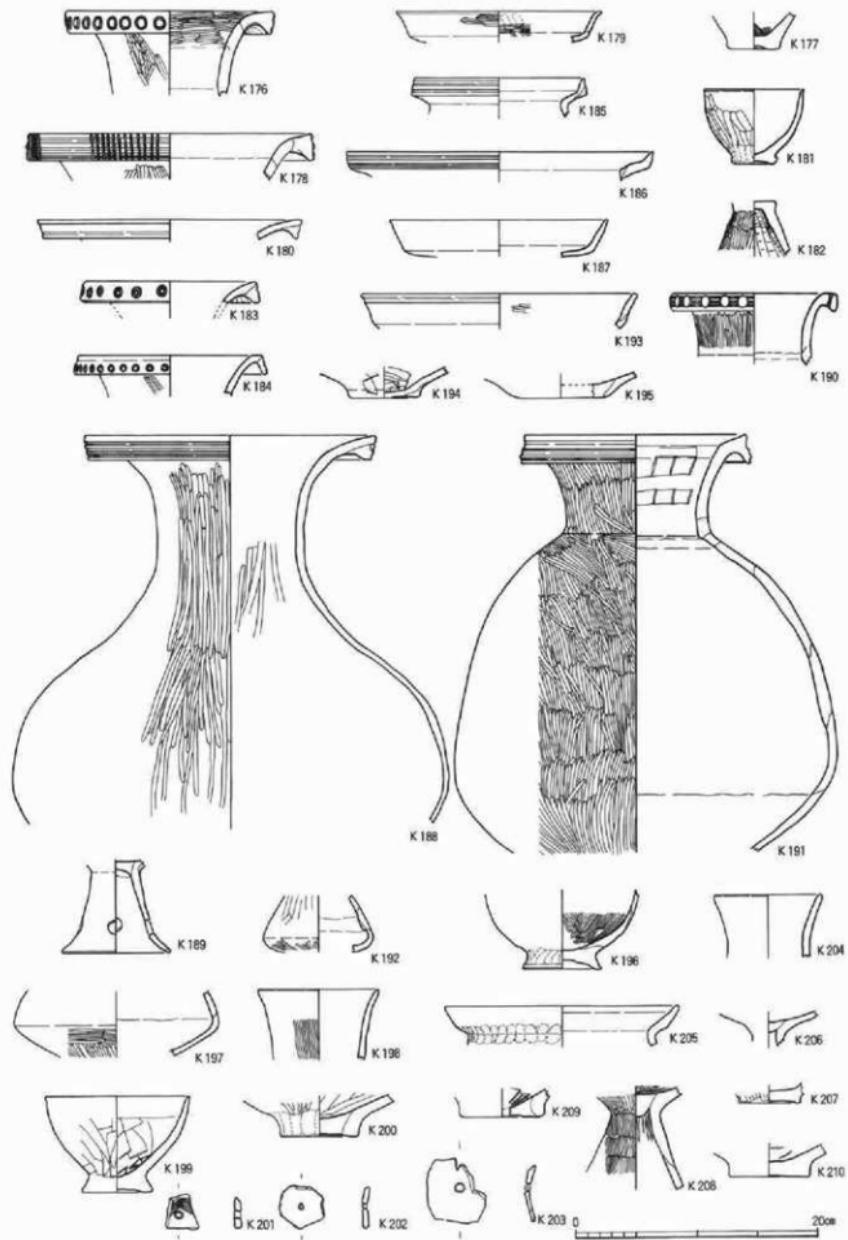


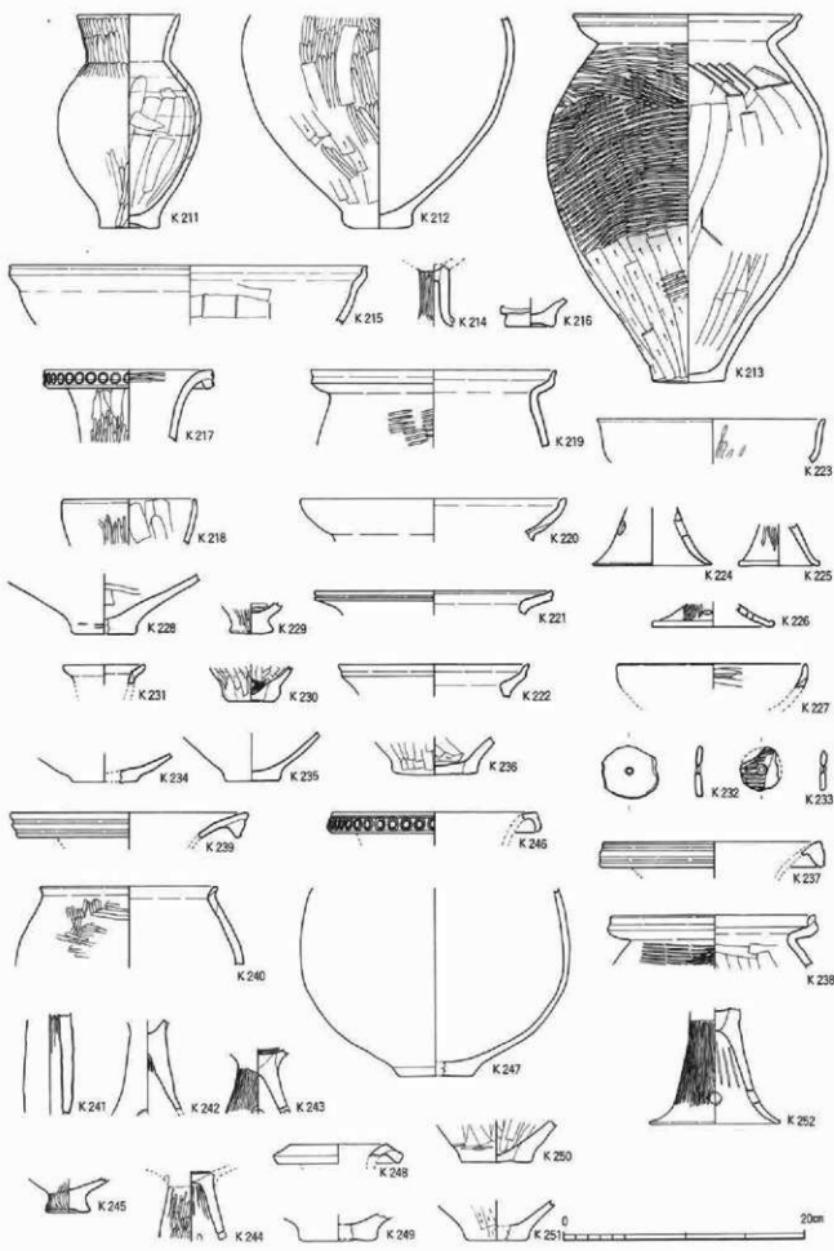
第91图 土壤出土土器实测图 2





第93図 土塚出土土器実測図 4





(7) 包含層出土土器

当項では調査区全体に広がる弥生時代遺物包含層から出土した土器を包含層出土土器として扱う。但し、第Ⅲ区の包含層・第Ⅳ区から第Ⅴ区の竪穴住居跡上部以外の包含層の大半は機械掘削を行ったため、良好な資料を得てない場合もある。また、竪穴住居跡上部の包含層出土土器は竪穴住居跡の項で扱っている。

弥生時代遺物包含層II (1~71) (第96図・第97図・P.L. 46・P.L. 47・P.L. 52・P.L. 56)

壺には体部中位で張り出し最大径を成し体部に比して太い頸部に屈折する口縁部が付く広口壺A (1)、緩やかに外反する頸部から水平に折れ曲がり更に長い垂下面を付す広口壺B (2)、外反する口縁部に正三角形状の端部をもつ広口壺F (3・4)、直線的に伸びる頸部に屈曲して口縁部が付く広口壺E (7・10)、卵形の体部に直線的に外傾する長い口縁部が付く長頸壺A (14・15)、やや長めの口縁部が付く無頸壺 (12)、筒状の短い頸部に円孔の穿たれた壺 (13)、脚台付壺 (16)などがある。(1)の肩部に備描直線文と備描波状文が口縁部端面に備描波状文が施され古い要素をもつ。壺には直線的な口縁部が付く壺Aの大型 (17)・中型 (18)、口縁部が丸く納まる壺B (19)、受け口状の口縁部が最もシャープに作り出された壺D (20・21)、受け口状の口縁部の器壁の厚い壺D₂の中型 (22)、受け口状の口縁部のシャープさが消失するが末だ稜を成して立ち上がる壺D₄の中型 (23・24)、受け口部分が長く伸びる壺D (25・26)、体部径が口縁部径より小さい壺D₂の中型 (29)などがある。(27)は受け口端面に退化凹線の施される壺Dに属する。高杯には口縁端部が水平に折れ曲がり面をもつ高杯A₃ (34)、口縁部が直線的に外傾する高杯A₃ (35)、口縁部が外反する高杯B₁ (36)、口縁部と体部の棱の不明瞭な高杯B₂ (37)、器壁が厚く脚台部と杯部を連続して形成したと考えられる高杯A₁ (39)、大きく聞く脚台部に口縁端部を摘み出した深手の楕形の杯部が付く高杯E₁ (38)などがある。鉢には突出する底部に小振りの楕形の口縁・体部が付く小型の鉢B (56~58)、外面水平方向の叩き内面水平方向の粗い蒐割りの加えられた鉢F (59)、体部に横位の二条の捻り出し突巻を付しその間に縦位の貼付け棒状符文を配した浅手の鉢C (60)、体部下位で屈折して立ち上がる鉢H (69)などがある。器台には大振りの口縁部A₁に統くと考えられる体・据部 (71)、口縁部上端で水平気味に折れ曲がる器台C (70)などがある。蓋には摘み部の突出度が小さく縫合部に面をもつ蓋A₃ (64)、円盤状を呈する蓋C (68)などがある。脚台には筒状の柱状部から屈曲して大きく聞く縫合部が付く脚台A (40~45・47)、直線的に聞く縫合部が付く脚台B (51・52・54)、縫合部が大きく聞く脚台C (50・53)などがある。(42)は3段12孔の円孔が穿たれている。

弥生時代遺物包含層I (72~167) (第98図~第100図・P.L. 47~P.L. 49・P.L. 52・P.L. 53・P.L. 57・P.L. 58) 当包含層の土器は包含層I下層と包含層Iとを区別して説明する。

弥生時代遺物包含層I下層 壺には著しく外反する頸部に僅かに肥厚する口縁部が付く広口壺I (73)、緩やかに外傾する頸部に内傾する口縁垂下部が付く広口壺J (82)、筒状の頸部から緩やかに外反して丸みのある垂下部が付く広口壺D (86)、直線的に外傾する頸部から水平気味に折れ曲がり三角形状の垂下部が付く広口壺E₂ (87)、シャープな口縁部が付く広口壺C₂ (88)、広口壺E₁類の形状に丸みのある口縁部が付く広口壺E₂ (90)、緩やかに外反する長く太い口縁部が付く長頸壺D (93)、長頸壺A₂ (94)、卵形の体部に直線的に外傾する長い口縁部が付く長頸壺B (96)、手捏ね壺 (98)などがある。壺には体部が大きく張り出す壺A₁の中型 (104)、体部径と口縁部径がほぼ等しい壺B₁ (105)、逆L字状に折れ曲がる口縁部が付く壺A₁の中型 (106)、体部径が口縁部径より小さい壺B₁ (107)、体部径があまり張り出さず口縁部径より小さく受け口部分が直立する壺D₄の中型 (124)などがある。高杯には口縁端部に平坦面を成す高杯A₂ (135)、高杯A₂の大型 (141)、体部と口縁部の接線が不明瞭な高杯B₂ (139)などがある。器台には据部から体部・口縁部にかけて一体化して外反し外傾する短い口縁部が付く器台B₂ (163)、器体外面に尾による刺突文・直線文が施される大型の器台B₁ (167)などがある。脚台には脚台A柱状部 (145)、脚台B (148)などがある。

弥生時代遺物包含層I 壺には緩やかに外反する頸部に若干肥厚する口縁部が付く広口壺D (72)、上半で

外反の著しくなる頸部に断面三角形状の口縁部が付く広口壺G (74)、外反の著しい頸部に丸みのある垂下部が付く広口壺 (75)、緩やかに外反する筒状の短い頸部に屈曲した口縁部が付く広口壺E₁ (78)、外傾する頸部に水平気味に折れ曲がる肥厚した口縁部が付く広口壺E₁ (83)、広口壺E₁に近い形状に丸みのある口縁部が付く広口壺E₂ (91)、口縁部のシャープな広口壺C₂ (89)、球形の体部に緩く外傾したちち口縁部で外反する長頸壺A₂ (95)、直線的に外傾する長頸壺D (92)、扁平な球形の体部に直立する短い口縁部が付く無頸壺 (101)、脚台付壺 (100) などがある。壺には口縁部が直線的に伸び端部に面をもつ壺A₁の中型 (102・103)、口縁部の長い壺B (110)、器壁の厚い口縁部が直立する壺D₂の中型 (108)、器壁の薄い受け口の口縁部が短く直立する壺D₄の中型 (109・111)、口縁下位と受け口の接線が不明瞭な壺D₃ (112) などがある。(100・112)の胎土は他と異なり緻密で砂粒を殆んど含まない。高杯には口縁端部に面を成す高杯A₂ (134)、口縁端部が水平に折れ曲がり面をもつ高杯A₃ (133・136・137)、直線的に伸びる体部に外反する口縁部が付く高杯B₁ (138)、高杯B₂ (140) などがある。器台には口縁垂下部の長い器台A₁ (76・80・81)、器台C (162)、器台A₄の裾部 (164・165) などがある。蓋には扁平な体部・裾部に著しく突出する摘み部が付く蓋B (125)、大きく聞く裾部に体部から続く摘み部が付く蓋A₃ (127)、平盤状を呈する蓋C (126) などがある。脚台には脚台Aの柱状部 (142・144・146・147)、脚台B (153)、脚台C (150) などがある。

黄色弱粘質土 (168~187) (第 101図・P.L. 53・P.L. 54・P.L. 58)

当包含層の土器は第Ⅰ区・第Ⅴ区から出土したものが主体を占め、小破片が多い。

壺には体部と頸部の接合部から外反傾向を示す長頸壺D (168)、口縁部上半が内弯気味になる長頸壺C (169)、円形竹管文を施した小型の無頸壺 (176) などがある。壺にはA₁の中型 (171)、A₂ (173)、D₂の中型 (172) などがある。高杯には小型の高杯 (178) がある。鉢には口縁部が体部より聞く鉢D₃の小型 (174) がある。

淡黄褐色粘質土 (188~211) (第 101図・P.L. 49・P.L. 50・P.L. 54・P.L. 58)

当包含層の土器は第Ⅳ区・第Ⅴ区西半から出土したものが主体を占め、完形品に近いものが含まれている。

壺には外反する頸部に薄い垂下部が付く広口壺B₂ (188)、著しく外反する頸部に断面三角形状の垂下部が付く広口壺G (189)、器壁の厚い垂下部が付く広口壺B₁ (193)、直立気味の筒状の頸部に屈折して外方に垂下する口縁部が付く広口壺J (196)、口頭部全体に外反して外方に折れ曲がる口縁部が付く広口壺C₂ (197)、器壁の厚い内傾する口縁部が付く広口壺H (191・198)、長頸壺A₂ (200)、脚台付無頸壺 (201)、手捏ね壺 (202) などがある。壺には体部と口縁部径がほぼ同じ壺A₁の中型 (203)、体部径より口縁部径が大きい壺B₁ (205)、受け口が直立する壺D₃の大型 (206) などがある。(203) の外面は右上がりの叩きを行なったのち底部から体部方向にかけて窪削りを行なう。蓋には摘み部の突出する蓋A₂ (211)、裾端部に面を成す蓋A₃ (210) などがある。

黄色弱砂質土 (212~225) (第 102図・P.L. 50・P.L. 54・P.L. 59)

当包含層の土器は第Ⅱ区・第Ⅳ区西半から出土したものが主体を占める。

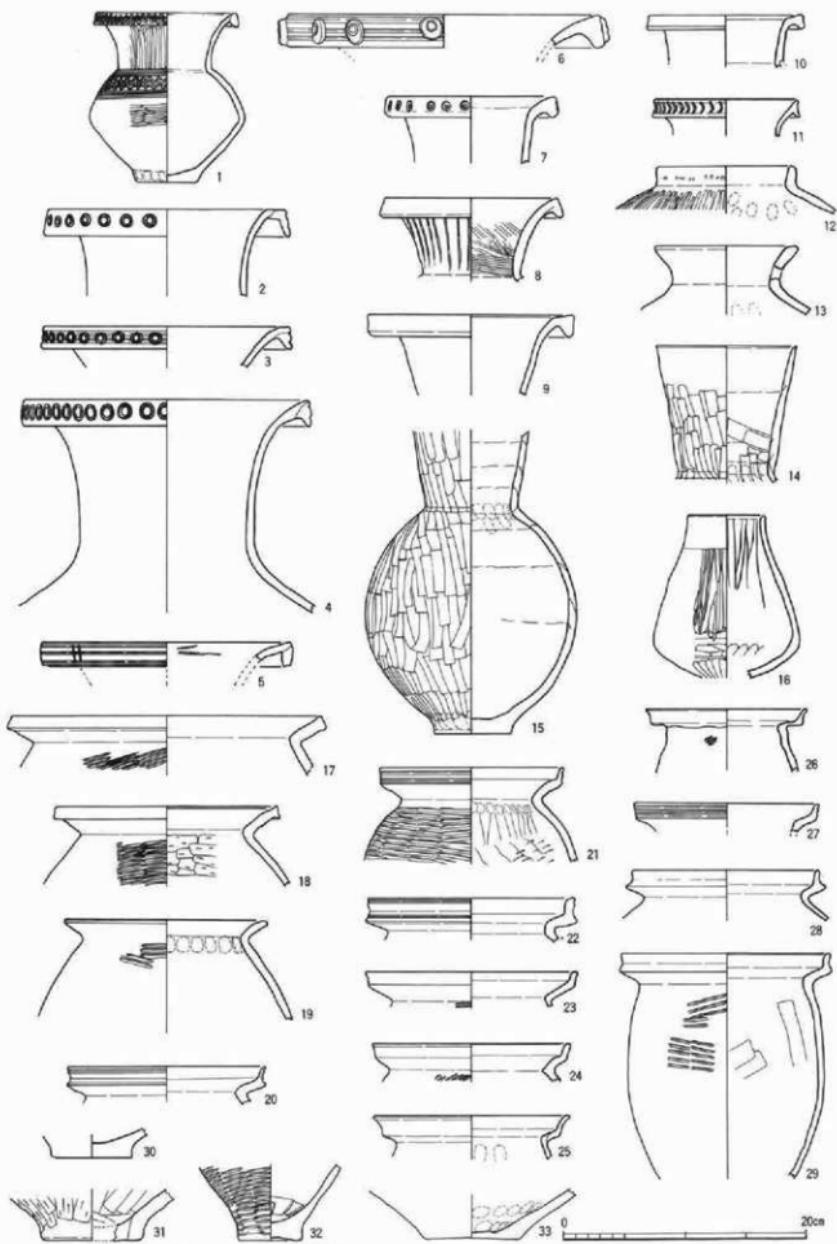
壺には外反する太い頸部に器壁の厚い口縁部が付く広口壺B₁ (212)、外傾する頸部に二等辺三角形状の口縁垂下部が付く広口壺B₂ (213)、無頸壺 (214)、脚台付細頸壺 (215)、手捏ね壺 (216・217) などがある。壺には指押えの著しい壺B₂ (218)、体部の長胴化した壺B₂ (221)、受け口の接線の甘い壺D₃の大型 (220) などがある。高杯には深手の楕形の杯部が付く高杯E₂ (222)、高杯A₂ (223)、口縁部が高杯A₃に類する高杯B₂ (224) がある。

黒色小櫻混入土 (226~253) (第 102図・第 103図・P.L. 50・P.L. 51・P.L. 54・P.L. 59)

当包含層の土器は第Ⅲ区東端・第Ⅴ区・第Ⅵ区西端の北半から出土したものが主体を占める。

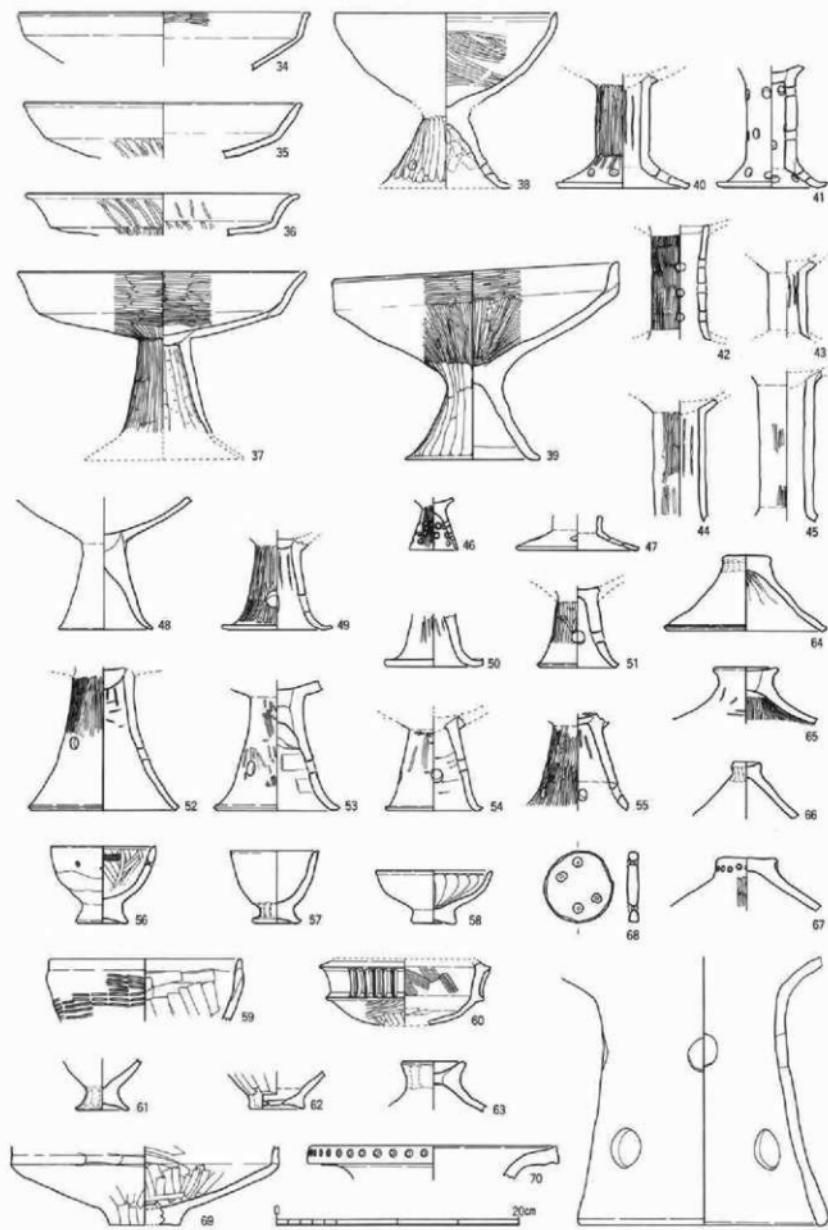
壺には口縁端部が内傾する広口壺H (226・231)、口縁端面に凹線文の施文を主体とする広口壺G (223・228)、凹線文と円形竹管文の施された広口壺B₁ (230)、広口壺B₃の大型 (232) など凹線文の施文比率が高い。壺には受け口のシャープな壺D₁ (242)、壺D₃の小型 (244)、壺B₃の小型 (245)、他と形態の異なる (241) などがある。

黒色弱粘質土 (254~277) (第 103図・P.L. 51・P.L. 54・P.L. 59)

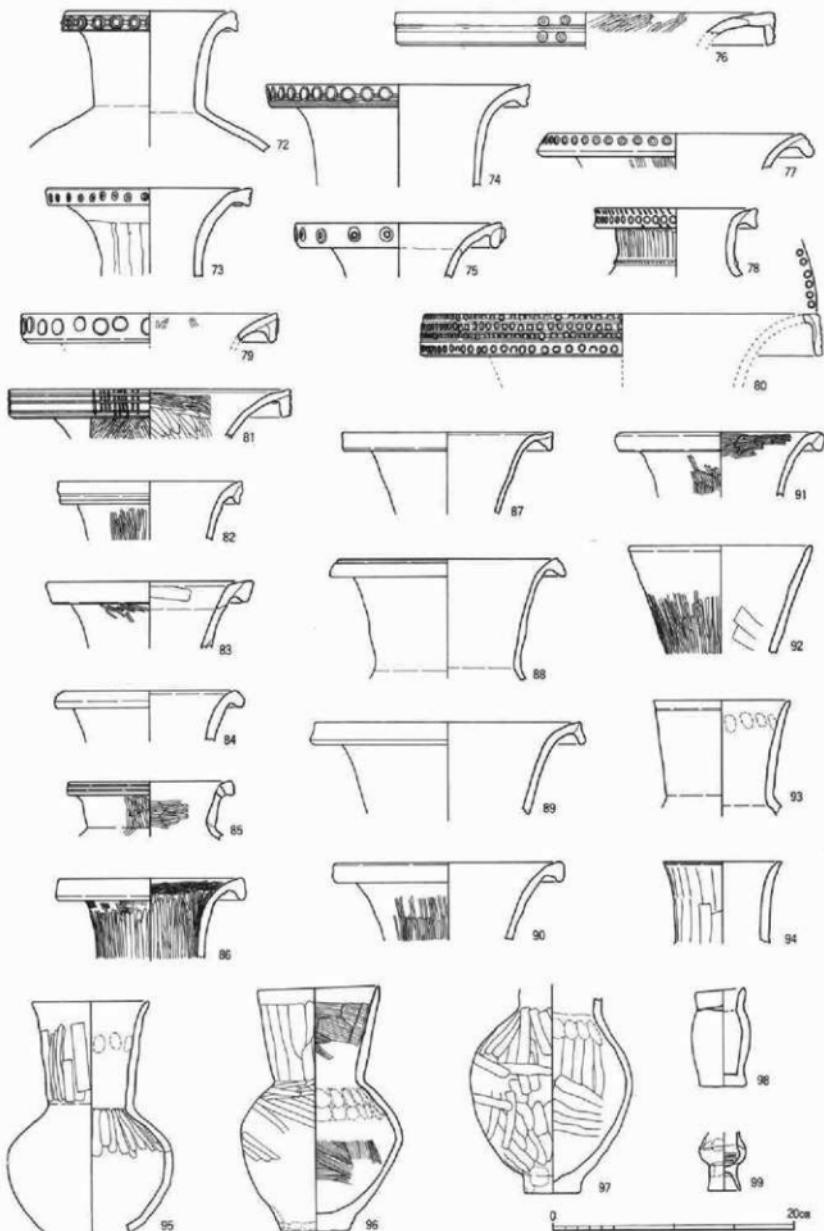


弥生時代遺物包含層Ⅱ、16・19・20・27・33—試掘調査

第96図 包含層出土土器実測図Ⅰ

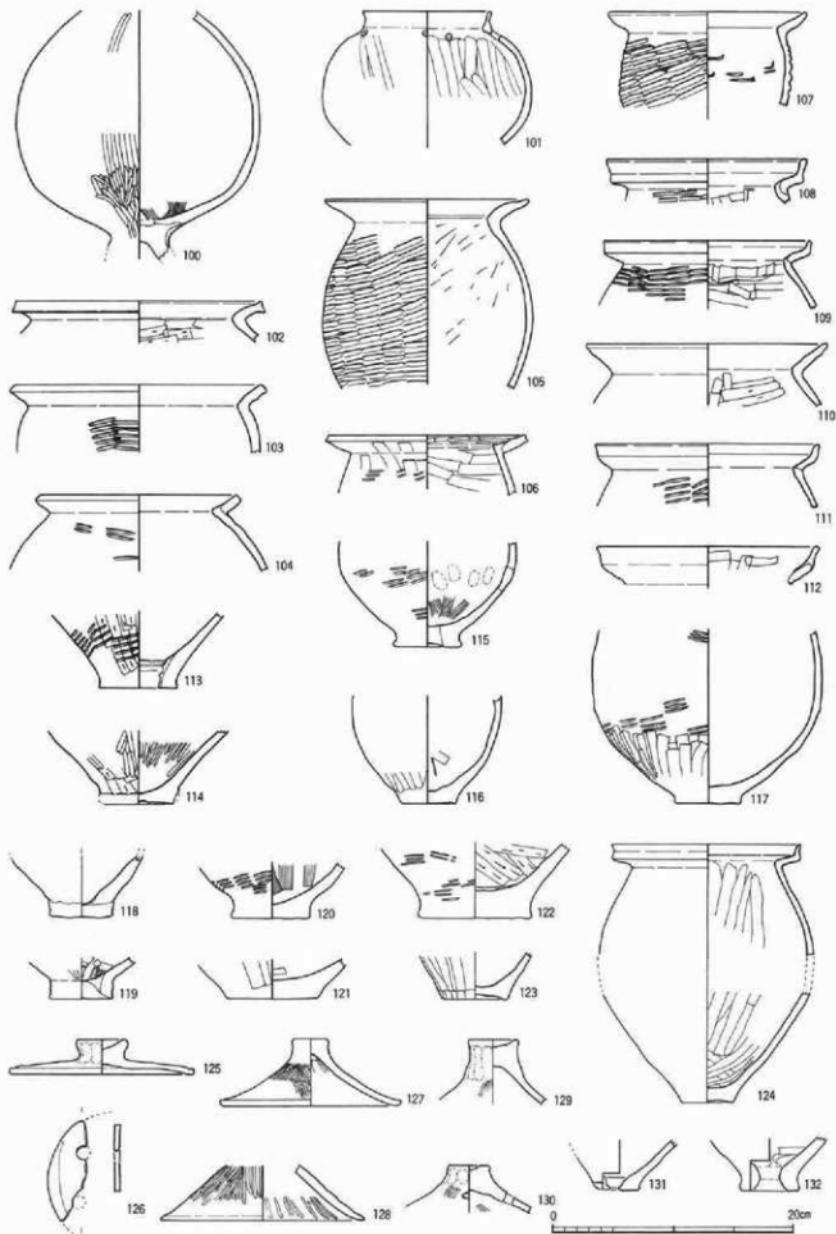


新石器時代遺物包含層 II 42-試掘調査



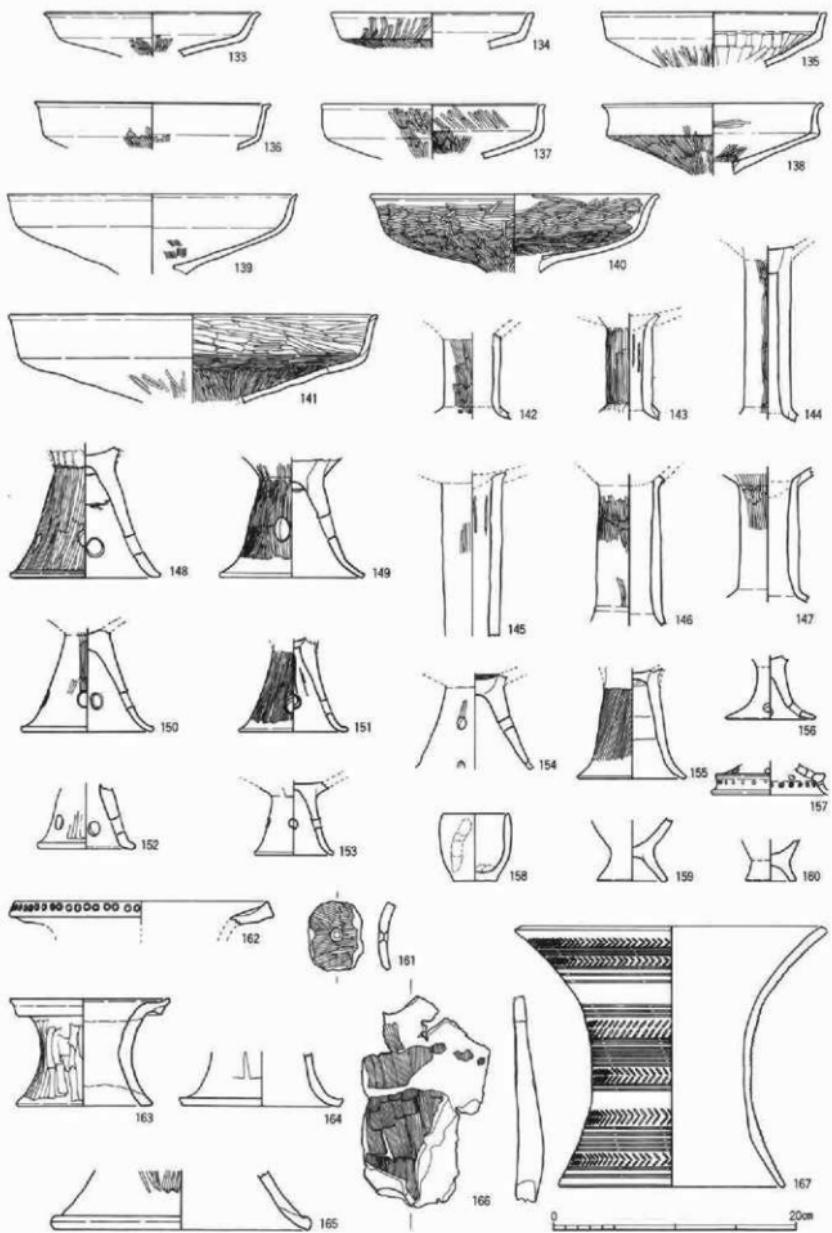
弥生時代遺物包含層Ⅰ 99-試掘調査

第98図 包含層出土土器実測図 3



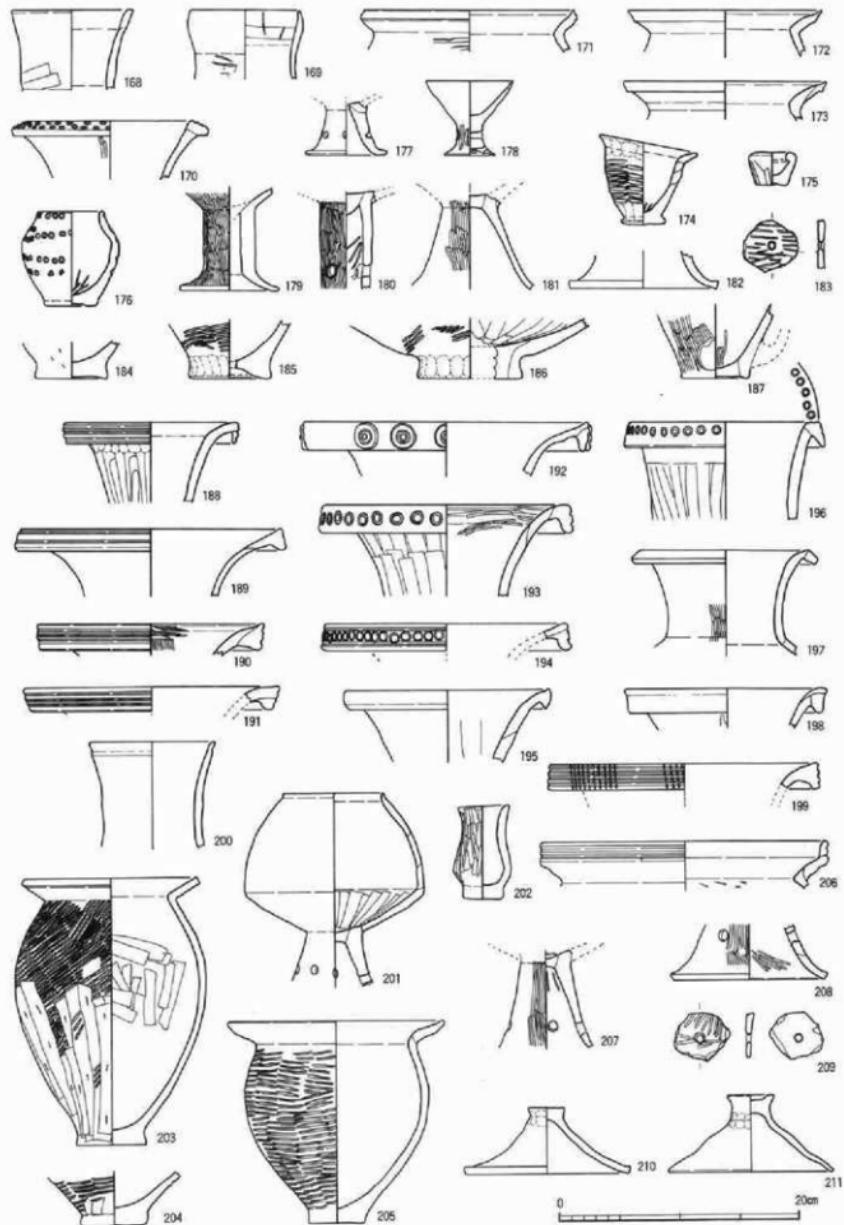
弥生時代遺物包含層 I

第99図 包含層出土土器実測図 4



先生時代遺物包含層 I 156—暗茶褐色泥質土

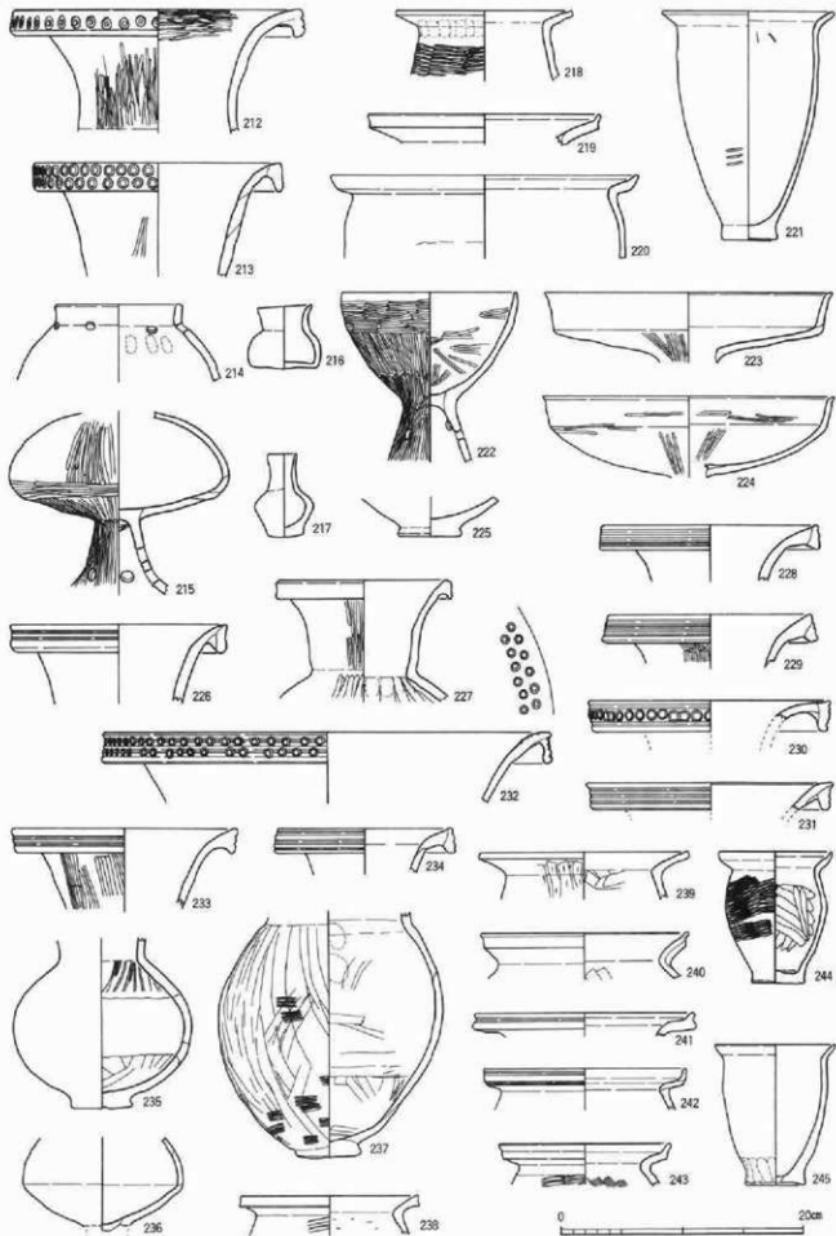
第100圖 包含層出土土器實測圖 5



168~187—黃色陶黏質土。188~211—淡黃褐色黏質土。

—115—

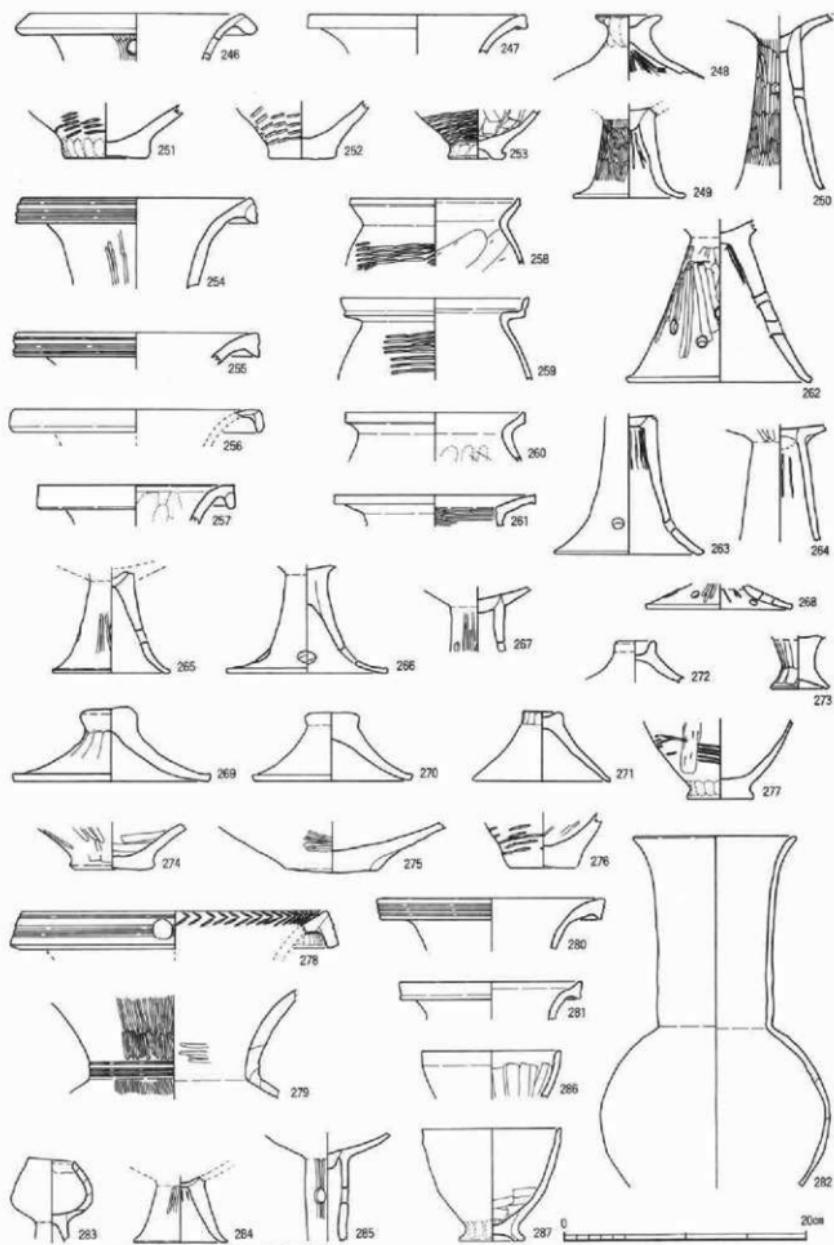
第101圖 包含層出土土器實測圖 6



212~225—黃色陶質土。226~245—黑色小磚泥土。

-116-

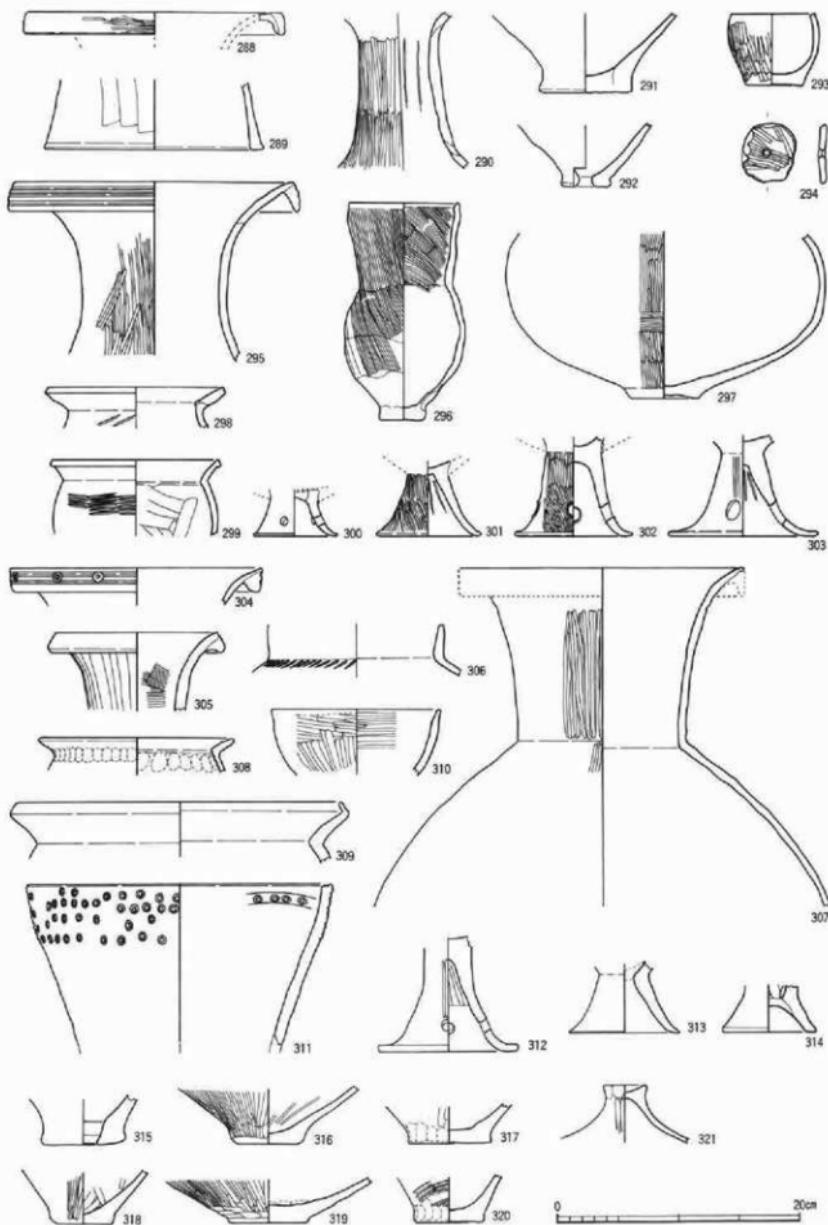
第102圖 包含層出土土器實測圖 7



246~253—黑色小堆混入土 254~277—黑色泥粘质土
278~287—黄色小堆混入土

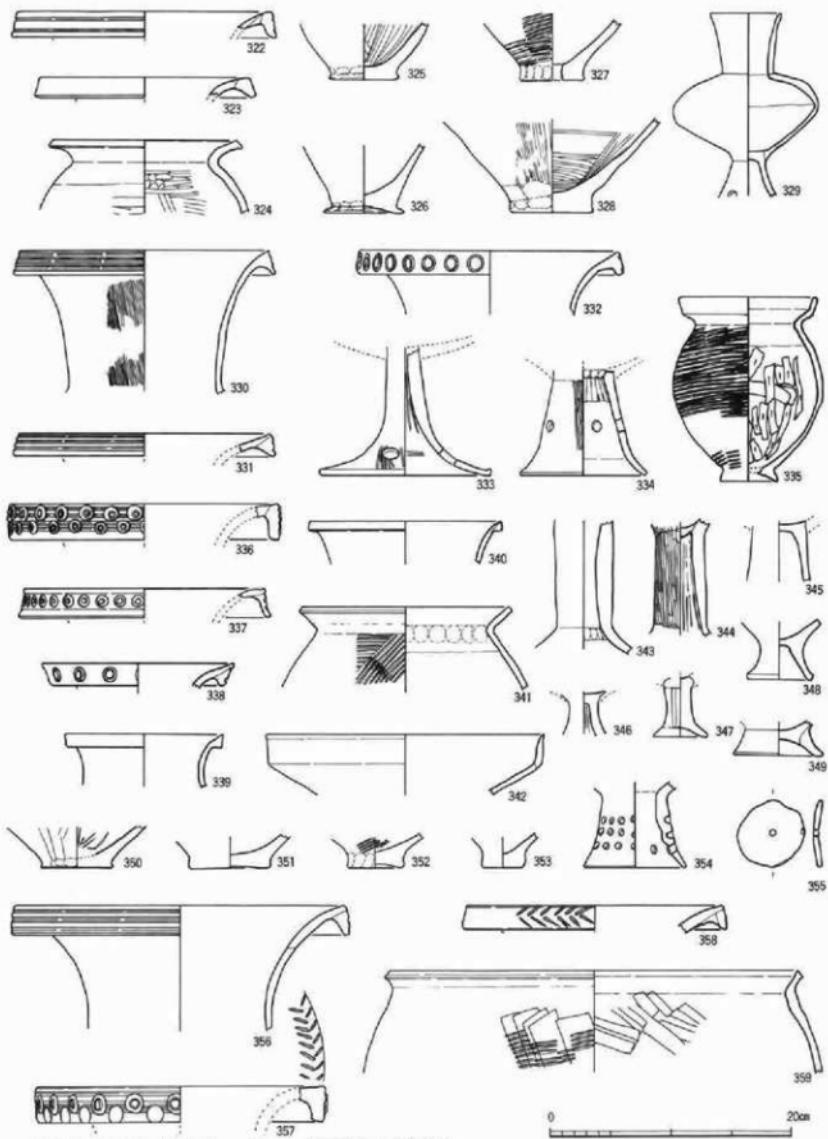
-117-

第103图 包含层出土土器实测图 8



288～292—黃色小繩混入土 293～294—島城頂上黃色帶粘質土 295～303—その他の遺物包含層
304～321—試掘調査、弥生時代遺物包含層 I

第104図 包含層出土土器実測図 9



試掘調査 322～329—黄色砂質土 331～335—暗黃灰色土・黒色泥粘質土
336～340・342・344・346・349・350・354・355—黄色泥質土 330・341・343・345・347・348・351～353・356～359—その他の遺物包含層

第105図 包含層出土土器実測図10

当包含層の土器は第V区西半の一部・第VI区北斜面地区から出土したものが主体を占める。

壺には外反する頭部に三角形状の口縁部が付く広口壺(254・255)、広口壺H(257)などがある。壺には口縁端面が外傾する壺A₂(258・260)、頭部に面を成す壺A₃に含まれる(261)などがある。蓋には裾端部に面を成す蓋A₃(269・270)、裾部が丸く納まる壺A₂(271)などがある。脚台は脚台B(262)、脚台D(266)などがある。

黄色小漆混入土 (278~292) (第103図・第104図・P.L. 51・P.L. 55)

当包含層の土器は第III区東端・第V区西半・第VI区西端から出土したものが主体を占める。

壺には口縁部内面に竜描き文様が施される広口壺B₁(278)、太い頭部に竜描き直線文が施される広口壺頭部(279)、球形の体部に外反する口縁部が付く長頸壺A₂(282)などがある。器台には(288~290)などがある。

試掘調査 弥生時代遺物包含層 I (304~321) (第104図・P.L. 51・P.L. 55・P.L. 59)

当包含層の土器は第II区・第III区西半から出土したものが主体を占める。

壺には頭部外面に板撫でを行なった広口壺C₂(305)、大型の体部に外反する口縁部が付く広口壺F₁(307)などがある。壺には頭部の指押えの顯著な壺B₂(308)、「く」の字形の頭部に口縁端部で内上方に伸びる突出部を付す壺E(309)などがある。(311)は外面上半と口縁上端面に円形竹管文の施された器台Bと考えられる。

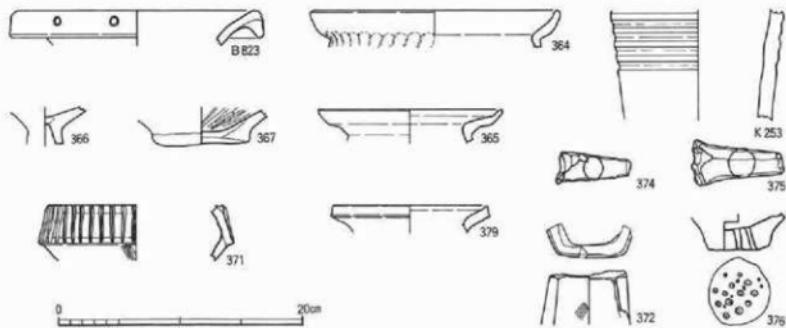
その他の遺物包含層 (293~303・322~359) (第104図・P.L. 51・P.L. 55・P.L. 58)

壺には口頭部全体に外反し内凹する口縁垂下部が付く広口壺B₃(295)、卵形を呈する体部に内寄気味の口縁部が付く長頸壺C(296)、緩やかに外反する頭部にシャープな三角形の口縁垂下部が付く広口壺F₁(330)、頭部の外反の著しい広口壺B₃(356)、加筋の豊かな広口壺B₁(336・357)、脚台付細頸壺(329)などがある。壺には体部が丸みをもった壺A₂の中型(298・299)、緻密な胎土で外面に幅広の範囲で加えられ体部が球形を呈する壺(324)、受け口の長い壺D₂の小型(335)、口縁部の短い壺A₃の大型(359)などがある。脚台には細く引き締まった基部から大きく開く裾部が付く脚台D(333)、基部の開く脚台B(334)などがある。

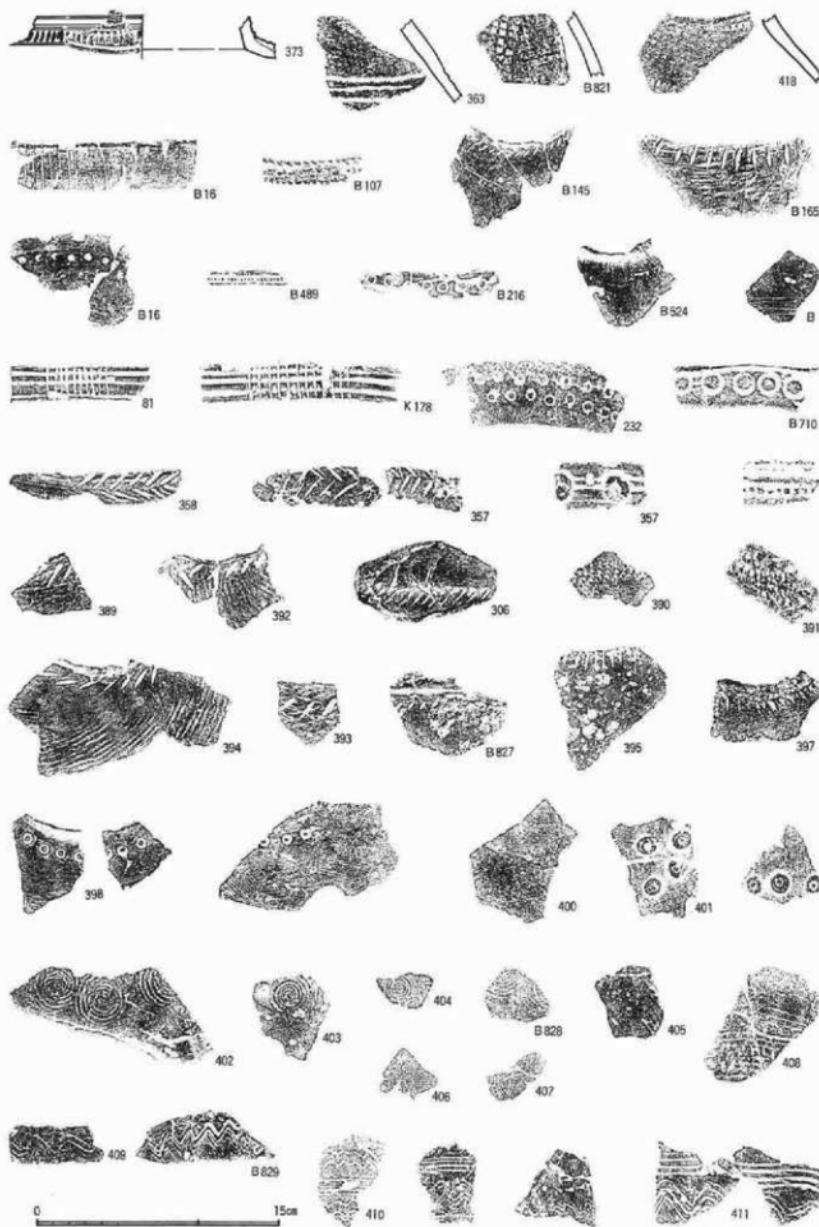
(8) その他の弥生土器・文様 (第106図・第107図・P.L. 56・P.L. 60~P.L. 62)

その他の土器には胎土に角閃石を含む広口壺(B823・367~370)、胎土に多量の砂粒を含み頭部の指押えの顯著な壺(364・365)、同じく砂粒を多く含み外面に回線文を施した器台の体部(K253)、丸みのある砂粒を多量に含み淡黄桃色を呈する小型の高杯基部(366)などがあり、他地域からの搬入品と考えられる。類別の数少ないものとして鉢C(371・377・378・B824・B825)としたもの、横断面が方形を呈する(372)、断面中実の棒状を呈する(374・375)、底部に多孔の穿たれたもの(376)、格子叩きの施されたもの(B821・418)などがある。

文様構成は壺の口縁端面に回線文・回線文+円形竹管文・円形竹管文・円形竹管文+竜刺突文・竜刺突文・貼付円形符文+円形竹管文が、壺体部に貼付符文・竹管文が主流を占め、壺の肩部に竜刺突文が主流を占める。



第106図 その他の弥生土器



第107図 弁生土器の装飾文様

2. 石器 (第108図～第112図・P L. 63～P L. 66)

石器には石鎚・石刃・投弾・叩石・磨石・石皿・台石・砥石・石庖丁・用途不明石器がある。

石鎚 (YS 1～YS 8) は8点出土している。全てサヌカイトを使用している。形態別には尖基無茎式 (YS 1・YS 7), 凸基有茎式 (YS 2～YS 6・YS 8) がある。YS 7・YS 8 は未製品である。尖基無茎式石鎚は小型品に限られる。凸基有茎式石鎚は形態にばらつきが認められる。YS 2 は粗い調整により直線的な側刃を成す。YS 4 はふくらみのある側刃を成し、断面形はより扁平である。YS 3 は五角形を呈し、逆刺が角を成し茎の抉りが明瞭である。YS 5 は逆刺が角を成さず、茎の抉りが緩やかである。側刃は鋸歯状削離を成す。YS 6 は幅狭・厚身の櫛身の長い形態を呈し、比較的粗い調整である。YS 8 は形態・法量からみて尖頭器の可能性もある。

石刃 (YS 9) は三日月状の形態を呈し、刃部は片面剥離となる。背部は刃溝しが認められる。

投弾 (YS 32～YS 35) は重量18～74gと軽量であるが、投弾としての機能をもつ。丸石と称することもある。

叩石 (YS 14・YS 18・YS 19・YS 23・YS 29・YS 30・YS 36・YS 38・YS 41) は対象物を敲打した際に石器の一部が欠損した明瞭なものである。中には磨石として兼用されたもの (YS 14・YS 18) もある。石材は砂岩を多用し、稀れに結晶片岩・花崗閃緑岩・白雲母花崗岩などが使用される。叩石はその敲打痕よりみて欠損の深い浅いの区別が成し得る。但し、欠損は石材の質にもより対象物が硬質か軟質かの判別は尽き難い。また敲打痕は長軸両端の何れかに認められ、石材の側刃・腹部の使用は認められない。

磨石は石材の形態により、棒状磨を利用した磨石 a類 (YS 24～YS 28・YS 37・YS 39) と楕円磨を利用した磨石 b類 (YS 14～YS 18・YS 20～YS 22・YS 31・YS 35・YS 40) がある。磨石 a類は砂岩・結晶片岩が使用され、磨石 b類は全て砂岩である。両者において使用区分があったと考えられる。磨耗痕は叩石と同じく長軸両端の何れかに認められる。YS 14～YS 16は両端の磨耗が著しく、頻繁に使用されたことを示す。YS 17は火を被けており、側刃の約1/4にタール状の黒色物が付着する。YS 39も火を被けた痕跡が認められる。

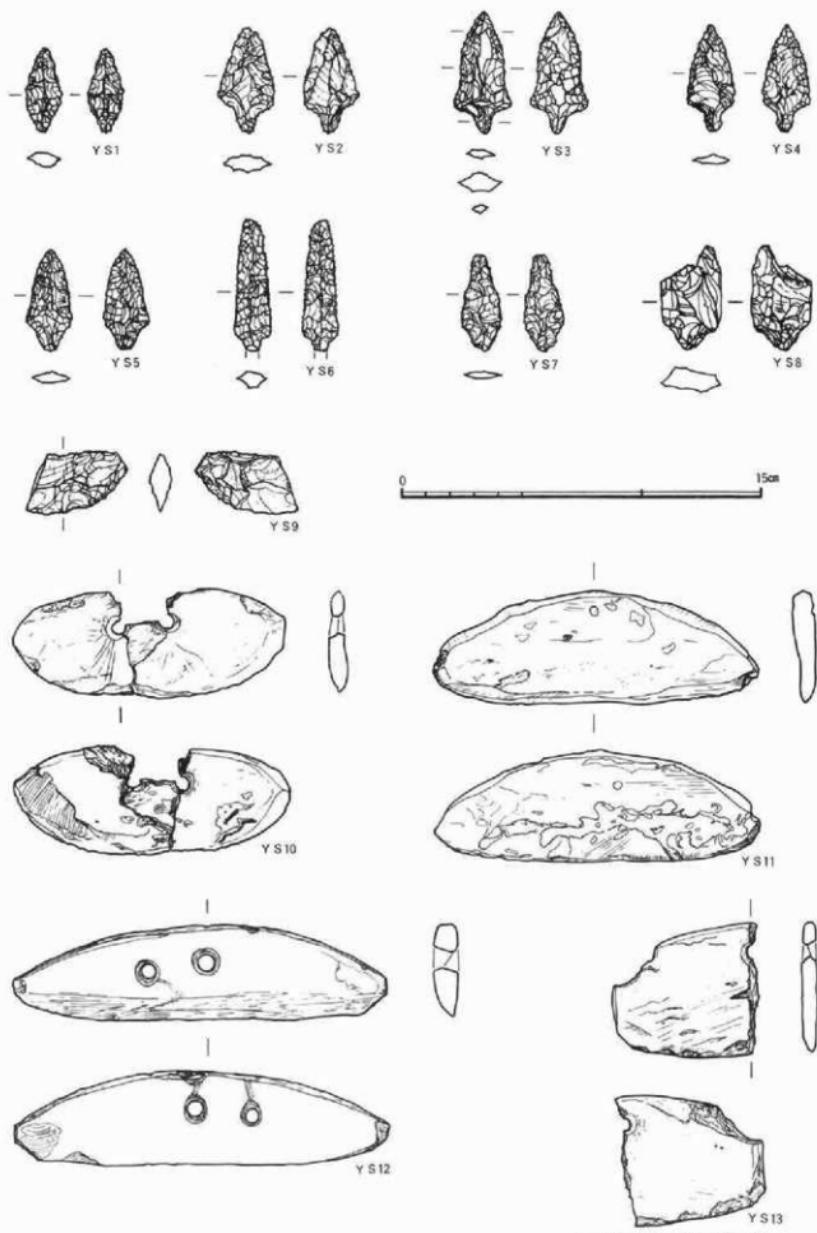
石皿 (YS 70) は典型的な凹みを呈するものとは異なり、主に砥石として使用されたものを兼用している。石材は緻密な砂岩を用い、大型で安定感がある。

台石 (YS 72～YS 77) は各住居跡から出土した大型の調理台を指すが、石皿 (YS 70)・砥石 (YS 69・YS 71) も含めて台石として機能したものと考えられる。石材は砂岩を多用し、結晶片岩・チャートも使用される。重量は板状の結晶片岩が軽量であるが、6.6kg～24.1kgを計り十分に安定感がある。YS 76の緑色片岩は風化が著しく全体に凹みを認める程度である。砂岩製の台石は凹んだ磨耗痕が明瞭に認められるが、硬質のチャートなどは凸面部に磨耗痕が微かに認められる。叩石による敲打痕の残る例はない。

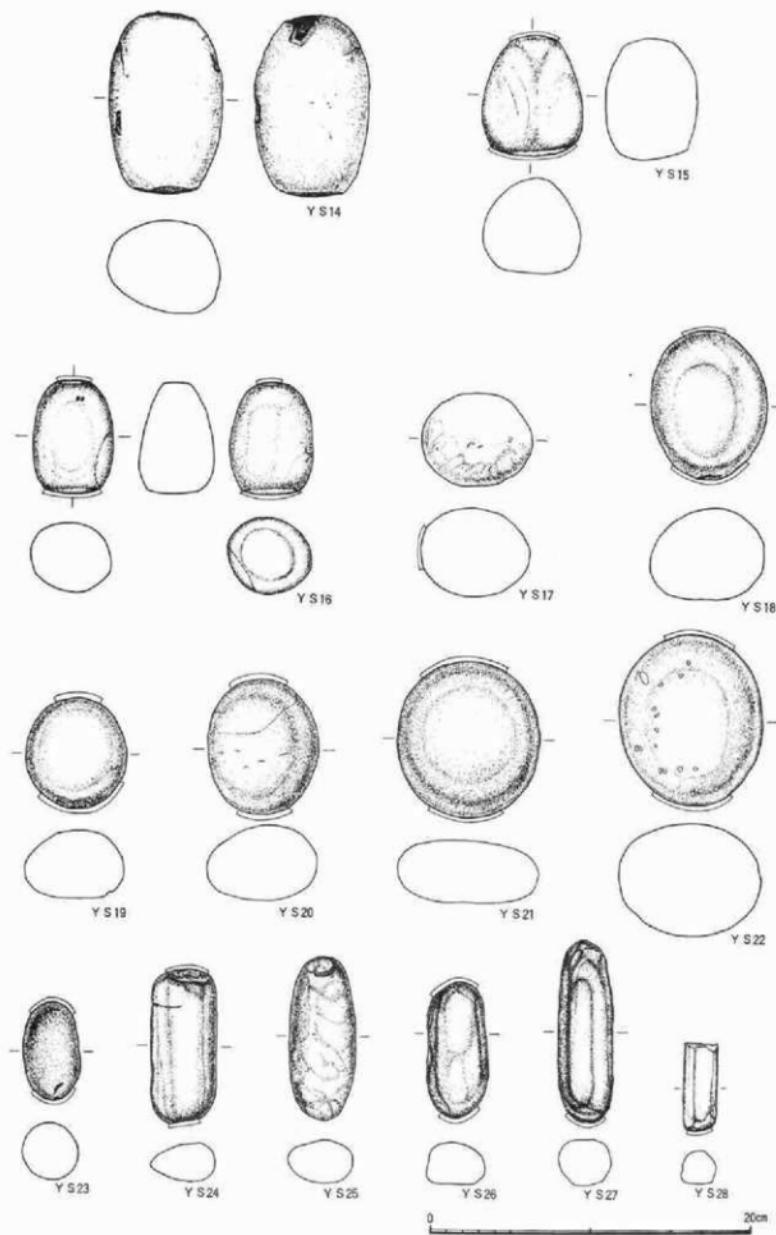
砥石 (YS 42～YS 71) は石材・形態により、a類 (YS 42～YS 62) とb類 (YS 63～YS 71) の2つに大別できる。a類は全て携帯可能な大きさであり、石英斑岩を主体とし、粘板岩 (YS 53)・花崗片麻岩 (YS 61)もある。a類の大半は長方形に加工したものを使用し、細筋状の擦痕が明確に認められる。また、研磨溝をもつもの (YS 52) や太く深い筋状の使用痕が認められるもの (YS 61) がある。b類は全て砂岩を用い、携帯可能なもの (YS 66～YS 68) と複数置いて使用したもの (YS 63～YS 65・YS 69～YS 71) がある。後者の大型品は研磨により凹面を成し、YS 63の研磨溝には明確な擦痕がみられる。また、YS 69には幅5～7mmの研磨溝が等間隔に6条走る。YS 63には長さ7mm幅2.5mm、YS 71には長さ10mmと19mm幅4mm・側面に長さ46～85mm幅5mmの敲打痕が認められる。

石庖丁 (YS 10～YS 13) は全て結晶片岩を石材とする。YS 10は杏仁形、YS 11・YS 12は長線刃半月形、YS 13は長方形を呈する。YS 11の紐孔は未貫通であるが、YS 10・YS 12同様に使用痕が認められ刃線の一部が細かく潰れる。YS 12の紐孔は左寄りに位置し、A面では双孔間・B面では上方の背方向にのびる縦擦れ痕がある。

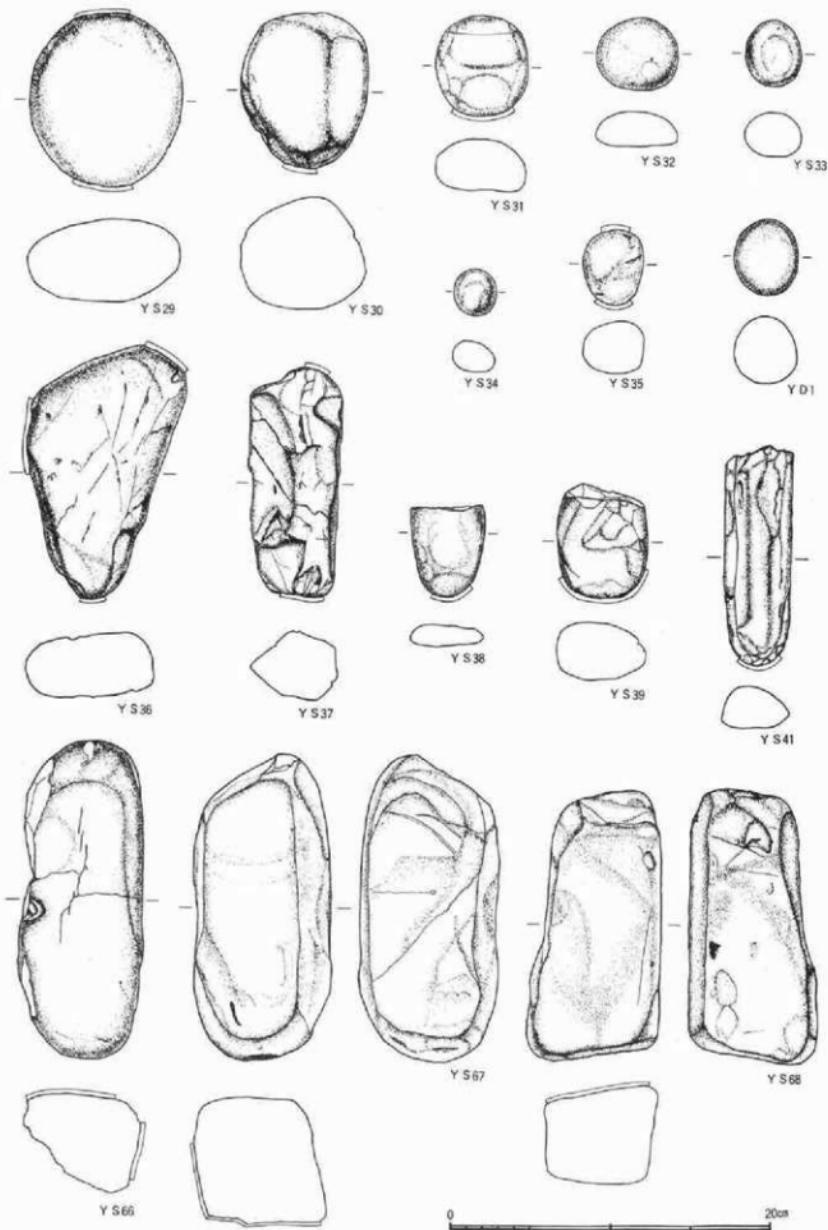
用途不明石器 (YS 78～YS 103) は形態により、楕円形磨 (YS 78～YS 85) と棒状磨 (YS 86～YS 103) に分類できる。前者の石材は石英斑岩・花崗片麻岩・砂岩、後者は砂岩・結晶片岩・花崗片麻岩・チャートである。何れにも明確な使用痕は認められない。



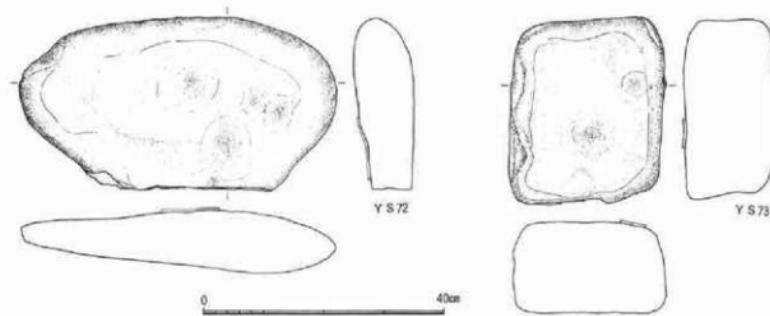
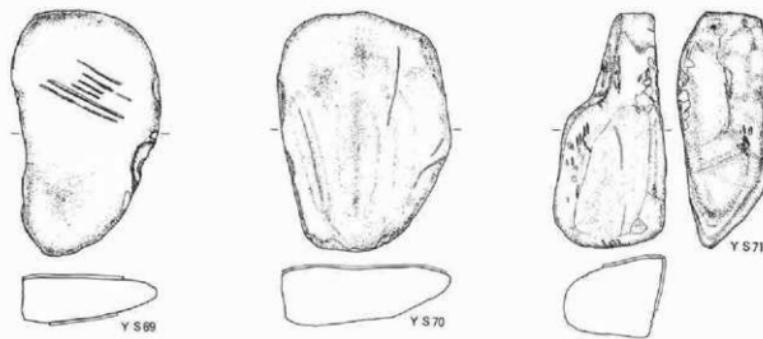
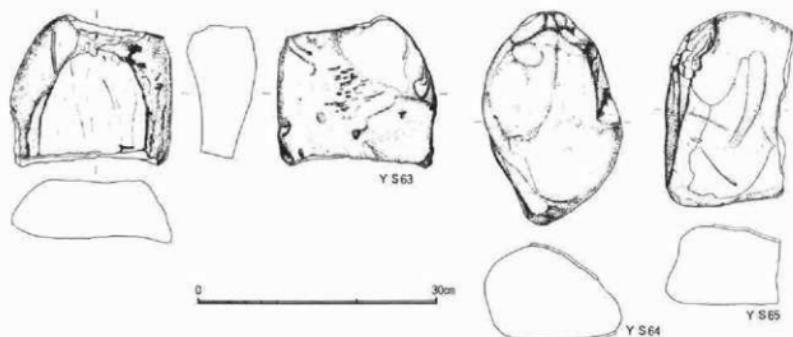
第108図 弥生時代石器実測図 1



第109図 弥生時代石器実測図 2







第112圖 野生時代石器實測圖 5

3. その他の遺物 (第113図・P.L. 67)

土製品 空穴住居出土土器の項で触れた鉢形を呈し刺突の施されたB568、円柱状を呈するB569、円柱状を呈し先端部が齊まるB648と球形を呈するYD1・YD2がある。YD2は貫通する2孔を穿つ

装身具 装身具には勾玉・管玉未製品がある。勾玉(YS104)は頭部が大きく、断面椭円形を呈する。孔は両側から穿たれる。管玉未製品(YS105)は多面体を呈し、多面の最終調整・穿孔が施されていない。

鉄器 鉄器には鉄鎌・鉈・鉄斧・不明鉄製品がある。鉄鎌(YI5)は茎の一部が欠損する。身の銹化が著しく本来の形態を留めないが、柳葉式に属するものと考えられる。鉈(YI1~YI3)は遺存度が比較的良好である。(YI1・YI2)共に刃部の反りが顕著で、背部が凸面を成し、腹部が凹面を成す。(YI2)は刃部と柄部の境に括れが入る。鉄斧(YI4)は鍛造によるもので、袋部の一部が欠損する。無肩式袋状鉄斧に属するものである。刃部は両刃を意識した断面二等辺三角形を呈する。不明鉄製品(YI6・YI7)は銹化が著しく、出土状況と処理後図示したものと形態が異なるかもしれない。一応、背部と刃部があり刀子状鉄製品と考えられる。



第113図 弥生時代装身具・鉄器実測図

第3節 古墳時代の遺物

古墳時代の遺物は、堅穴住居跡と中世以後の堆積層から出土した土師器・須恵器など断片的な資料に限られる。

1. 土師器 (C 1 ~ C 4) (第115図・P.L. 67)

甕(C 1)は外面が細かい刷毛調整、内面が丁寧な右上りの鉢削りによる頸部部の破片で、外面の全体に煤が薄く付着する。在地産の甕である。甕(C 2)は磨滅のため調整不明、口縁部が屈曲、肩部が張り出す。胎土はやや粗い。小型甕(C 3)は復元実測による。全体に器壁が薄く、底部は尖底ぎみになる。大型鉢(C 4)は球形の体部にやや平坦面のある丸底を有する。外縁の浅い叩きは底部と体部との境で2段階に分割され行なわれている。

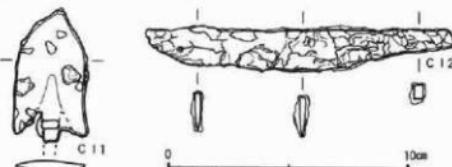
(C 1・C 3)はSB14出土。(C 2・C 4)は堆積層出土。

2. 須恵器 (C 5 ~ C 9) (第115図・P.L. 67)

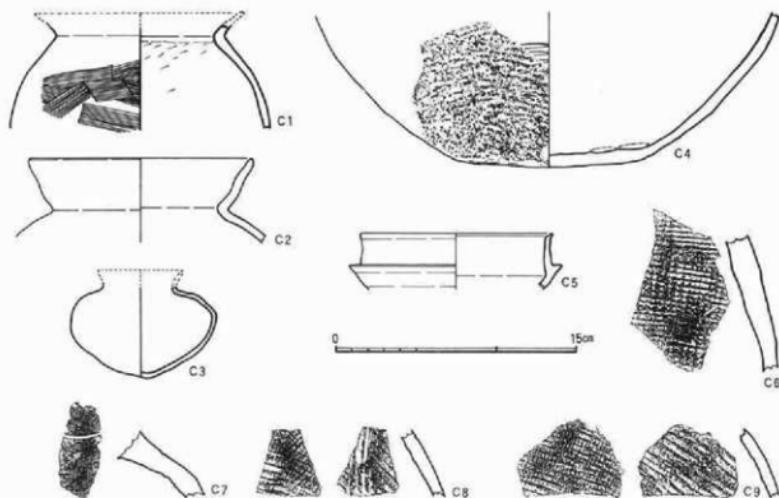
蓋杯身(C 5)は短く直立する立ち上がりを有し、端部は内傾する凹面を呈する。概ねTK47型式に並行するものであろうが比較的新しい要素を持つ。腰部部(C 6)は内面に丁寧な磨消しが認められる。(C 8・C 9)も腰部部の断片で、同時期の所産と考えられる。

3. 鉄器 (第114図・P.L. 67)

鉄鎌(C 11)は丸みのある五角形を呈し、逆刺を有した有茎鎌である。刀子(C 12)は刀形の刃部と、その刃側に丸みのある間をもつ茎部からなっている。柄部の一部が欠けた完形に近いもの。両者は伴出する遺物より弥生時代の可能性も考えられる。



第114図 古墳時代鉄器実測図



第115図 古墳時代土器実測図

第4節 鎌倉・室町時代の遺物

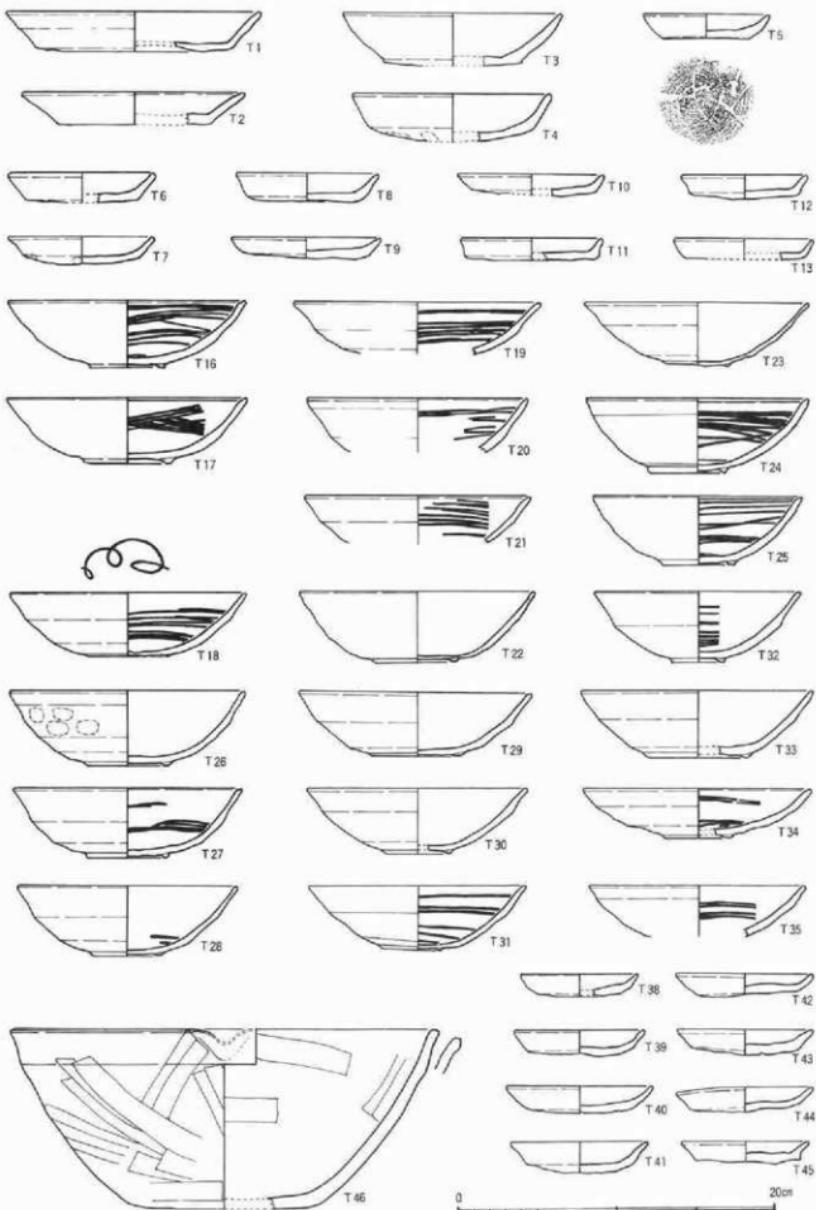
鎌倉・室町時代の遺物は、第II区を中心とする落ち込み状地形上層部の淡茶褐色粘質土に多く、造構に伴う遺物は少量である。遺物の大半は鎌倉時代に属するもので、土師器・瓦器・須恵質土器・陶磁器・鉄器がある。

1. 土師器・瓦器 (T1~T61・T77~T87) (第116図~第118図・P.L. 68~P.L. 70)

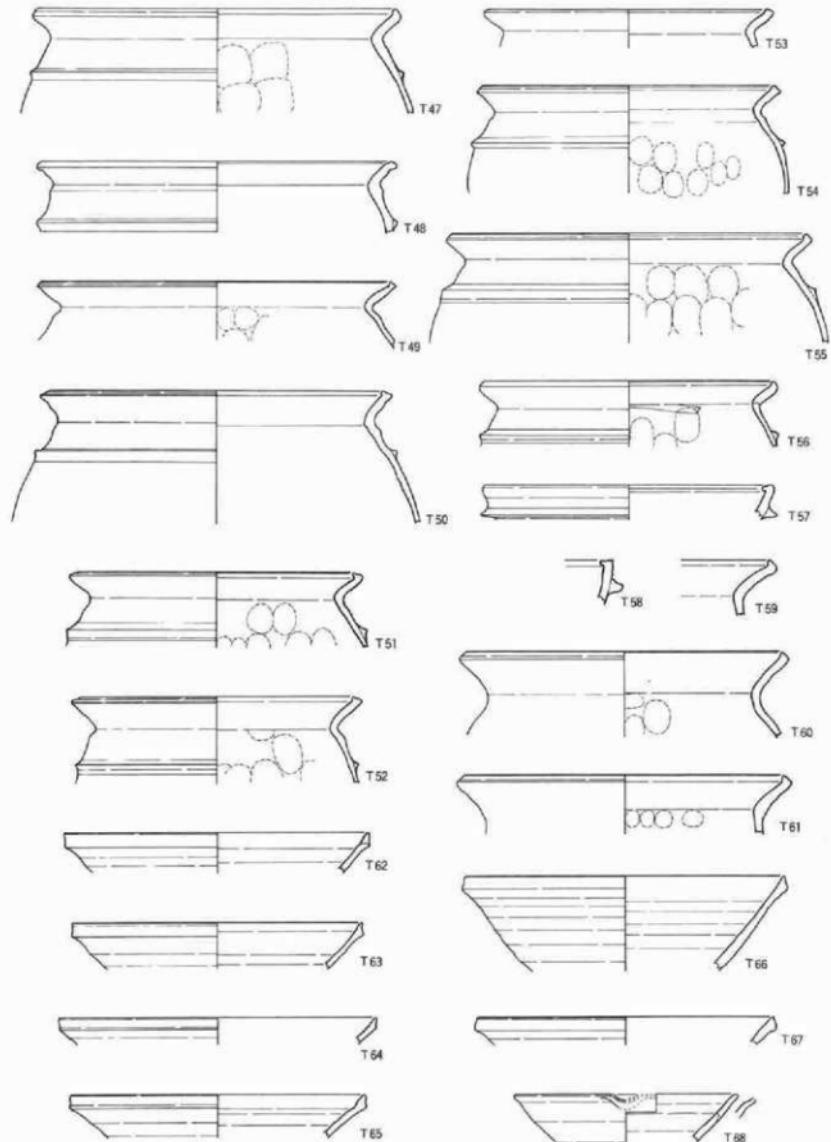
土師器皿(T1~T15) 皿には大皿(T1~T4)と小皿(T5~T15)がある。大皿(T1~T2)は外傾する口縁部に端部は丸く納まる。底部は指押え。大皿(T3)は内弯する口縁部を有し、底部は回転糸切りが施される。大皿(T4)は口縁部が肥厚し、底部は指押え。色調は灰黄色を呈し他と異なる。小皿は口径8~9cm・器高1.2~1.6cmと、浅いもの(T9~T15)と深いもの(T5~T8)がある。共通して口縁部を横方向に撫でるが、形態上バラつきがある。小皿(T5~T6)の底部は回転糸切りが施される。小皿(T15)の底部には板目圧痕が付く。他は未調整で指頭圧痕を残す。

土釜(土鍋) (T47~T61) 土釜は体部上位に形態化した断面三角形の突帯を貼り付けるものを通有とするが、付かないもの(T59~T61)も少數例認められる。土釜は形態から4タイプに分類できる。A類は口縁端部の差異により、内側にのみ肥厚し端面を成すA類(T47・T53・T56)、両側に肥厚し端面が凹線状になるA₂類(T49・T54・T55)、端面が水平に近い状態になるA₃類(T50~T52)に分類できる。B類(T48)は連続する強い横方向の撫でにより仕上げられ、丸みのある端面を成す。胎土は他類とは異なり、砂粒がやや少なく緻密である。C類(T57・T58)は直立する口縁部直下に鈎が付され、端部が内側にのみ肥厚する。胎土は緻密で透明茶色を呈する。D類(T59~T61)は丸みのある頸部に長い口縁部が付き、体部に鈎の付されないものである。A・D類の胎土はバサつき気味で、2mm前後の砂粒を多量に含む。外面には煤の付着するもの(A~C類)と、付着していないもの(D類)がある。煤の付着する位置に着目すると、外面全体に付着するもの(T47・T49・T55)、口縁部と突帯以下に付着するもの(T48・T50~T54・T56)、突帯以下ののみに付着するもの(T57・T58=C類)に区別できる。形態上の特徴を含め、煤の付着により土釜A類の突帯は機能を喪失したものとして、土釜B類の突帯は鈎としての機能を有するものとして、土釜D類は煮沸以外の用途を考えることができる。

瓦器 (T16~T46) 瓦器には檐(T16~T37)、小皿(T38~45T)、鉢(T46)がある。瓦器檐は法量の差異により口径14.5~15cm・器高4~4.5cmを測るA類、口径13~14cm・器高4~4.5cmを測るB類、口径14.5cm・器高3cmを測るC類がある。A・B類は口縁端部内面の沈線の有無により、沈線の有るものa類と無いもののb類がある。A a類(T16・T17・T27)は体部から口縁部にかけて内弯ぎみに立ち上がり、高台は貧弱な逆台形となる。内面側壁の磨きはやや密なもの(T16・T17)と粗いもの(T37)があり、見込みの暗文は2回転の連結輪状の痕跡が残るもの(T16)がある。体部外面の磨きは施されず、弱い2段に施された指押えが残る。A b類(T18・T19・T22~T23・T26~T29・T33)は体部から口縁部にかけて内弯する頻度が少なく、高台は扁平である。内面側壁の磨きはA a類に比して簡略化される傾向にある。見込みの暗文は3回転以上の連結輪状もの(T18)がある。口縁部の横方向の撫では、比較的幅が広く強く施されるものが目立つ。(T22・T23)は器壁が比較的薄く、撫で調整により口端部が丸く肥厚する和泉型Ⅲ-2期に対応する。その他も和泉型Ⅲ-2期に対応すると考えられる。B a類(T20・T21・T24~T25)は小径化の傾向にあるが、形態的特徴・器高・高台の形状はA a類に類似する。内面側壁の磨きは簡略化されていない。(T24)の磨き調整は太く幅2~3mmあり、見込みと側壁の区別なく粗く施される。B b類(T28~T30~T32~T35~T37)は、器高の低下と小径化が顕著である。内面側壁の磨きも太く粗く施され、高台もますます退化し粘土縞を貼り付けただけのものも見受けられる。C類(T34)は、器高の低下が目立つが口径14.5cmを測る。口縁端部の沈線は比較的浅い。大半の瓦器檐は磨滅



第116図 鎌倉・室町時代土器実測図1



第117図 鎌倉・室町時代土器実測図2

が著しく、胎土はバサつきぎみで淡黄茶色を呈する還元状態の不十分なものである。瓦器小皿は形態上土師器小皿との差は認められない。口径7.5cmの(T38)と口径8.0cmの(T45)を除けば、口径8.5~9.0cmに納まる。口縁部を横方向に撫で、底部は指頭圧痕を残し糸切り調整は存在しない。胎土・焼成は瓦器椀と同様である。瓦器鉢(T46)は平底から緩やかに内弯する体部と口縁部がつく、口縁部は面をもち小振りの片口を有する。口縁部は比較的強い横方向の撫でにより整えられ、器壁内外面に幅1.5cm程の板状工具により調整される。

土鍤(T77~T87) 土鍤には土師質のもの(T85~T87)と、瓦質のもの(T77~T84)がある。

2. 須恵質捏ね鉢・椀 (第117図・P.L. 70)

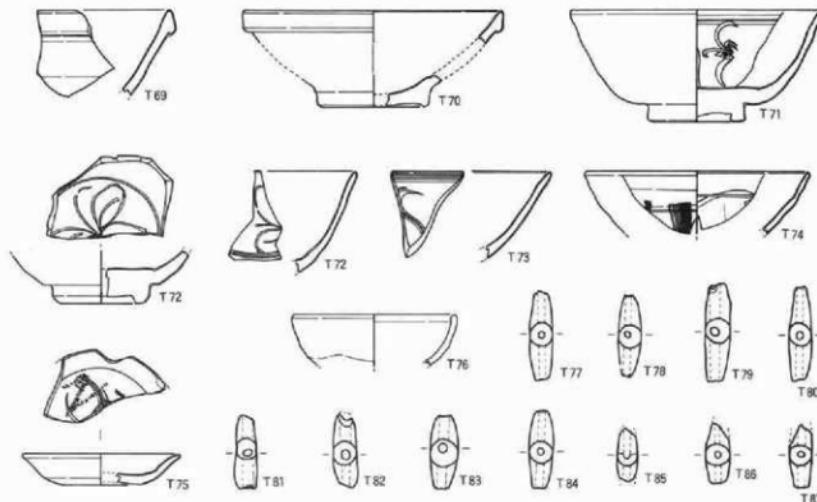
須恵質捏ね鉢(T62~T67) 捺ね鉢は口径24~26cmを測り、口縁部の形態・器壁の厚みにより3タイプに分類できる。A類(T62~T64)は器壁が薄く、口縁端部の上方への拡張が顕著である。B類(T65~T66)は器壁が厚く、口縁端部が肥厚する。C類(T67)は器壁が厚く、口縁端部が肥厚して端面の丸味が顕著である。捏ね鉢は灰色ないしは淡灰色を呈し、焼成の良好なもので東播系の製品と考えられる。

須恵質椀(T68) 楓は口径18cmを測る。口縁部が緩く外反し、端部は丸く納まり片口を有する。

3. 陶磁器 (T69~T76) (第118図・P.L. 70)

白磁(T69~T70) 白磁は楓に限られる。口縁部に玉線をもつタイプのもので体部下位を露胎とし、外底部の削り出しの浅い高台である。釉調は灰白色を呈し、胎土はややザラつく感がある。

青磁(T71~T75) 青磁には楓(T71~T74)と皿(T75)がある。楓(T71)は高台が断面四角で高台部豊付は施釉その内部は露胎である。口縁部上端に2本の沈線、体部内面に草花文が片切彫される。釉調は青緑色を呈する。楓(T72)は高台部豊付部分を箆で削り取り露胎となる。体部内面と内面見込みに草花文が片切彫され、その間に界線が施される。二次焼成を被けたため釉調は白緑色を呈し、斑点状を成す。楓(T73)



は（T71）と同類とみられ、釉調は青緑色を呈する。椀（T74）は内窓ぎみに外上方へ立ち上がり、体部上位で若干内側に屈曲する。内面上位に沈線を入れ、外面に細かい備目を施す。釉調は飴色を呈し、胎土は良質である。皿（T75）は器肉が薄く、口縁部をわずかに外反させる。外底部は焼成前に釉を削り取る。内面見込みに幽花文が施される。釉調は淡水色を呈し、胎土は緻密である。椀（T71～T73）・皿（T75）は龍泉窯系の青磁、椀（T74）は同安窯系の青磁である。

椀（T76）は体部下位を露胎とする京焼風の近世陶器と考えられる。

4. 鉄器（T11～T133）（第119図・P.L. 71）

鉄器には鉄鎌、鎌、櫻、釘などがある。当項で扱う鉄器は主に中世の遺物包含層からの出土であるが、形態上中世以前に遡る可能性のあるものも含んでいる。^{註①}

鉄鎌（T11～T18） 鉄鎌（T11）は先端部の一部が欠損する。U字形の抉りを有する雁股式鎌と考えられる。鉄鎌（T12）は身の内側に片刃をつけた、V字形の抉りを有する雁股式鎌である。茎の一部に矢柄の装着痕と考えられる編維質が薄く付着する。鉄鎌（T13）は身先端部が角張り刃部が欠損する。茎の錆化がすすんでいたため原形をとどめていない。鉄鎌（T14）も（T13）と類似しており、茎が錆化のため断面円形状を呈する。両者共に同タイプの鑿頭式鎌である。鉄鎌（T15）は身先端部の刃部がよく遺存しており、両刃に近い状態を成す。鑿頭式鎌に属するものであるが、身の先端部が（T13・T14）と比較して幅広になっている。鉄鎌（T16）は身先端部と茎の一部が欠損する。身と茎の間に段を作り、形態上において鉄鎌（T13～T15）との差を指摘できるが鑿頭式鎌に属するものである。鉄鎌（T17）は身先端部が欠損する。比較的大型の柳葉式鎌に属するものである。鉄鎌（T11～T17）は身の断面形は長方形を呈し、茎の断面形は方形を呈する点で共通している。鉄鎌（T18）は身と茎の区別がなく、先端部が少し反り返る。断面形は全て方形を呈する柳葉式鎌に属するものである。^{註②}

鉄鎌の祖型は4型式共に古墳時代まで遡り得るものであるが、刃先の研磨が先端部（T12を除く）のみにしか施されないなどの違いがある。

櫻（T110・T112） 櫻（T110）は両端部が欠損する。断面形は長方形を呈する。櫻（T112）も両端部が欠損し、断面形は方形を呈する。

鎌状鉄製品（T111） 刃先の鋸歯が僅かに遺存していて、形態から鎌と考えられる。

釘（T113～T133） 釘の断面形は方形ないしは長方形を呈する。各々の形態から短いものは3～4cm、長いものは5～6cmに分類できる。また、頭の形態から片側に折れ曲げたもの、両側に張り出すものがある。（T133）は金具とも考えられる。

〈註〉

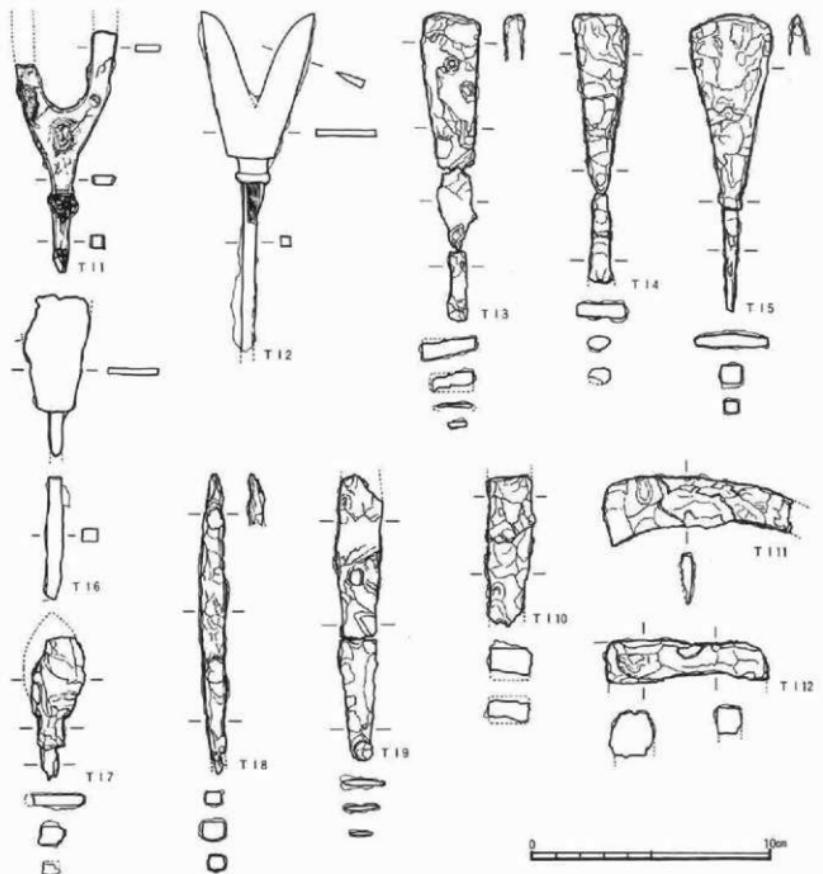
註① 鉄器は出土層位、形態から所属時期の判明し得たものについて弥生時代、古墳時代の項で扱った。

但し、出土層位、形態から所属時期の断定できないもの一部は当項で扱っている。

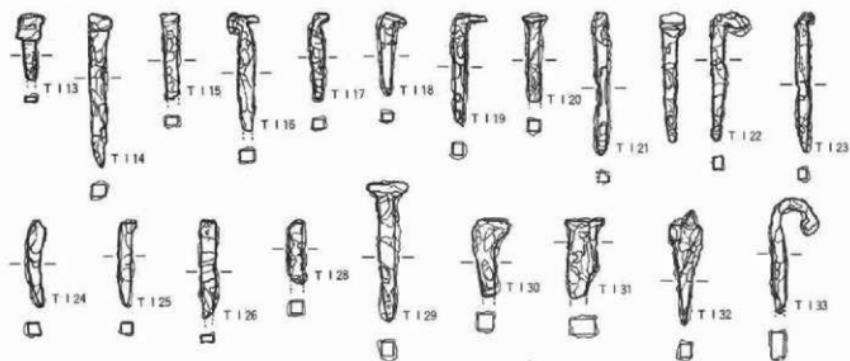
註② 鉄鎌の型式名は以下の文献に依っている。

小林行雄 「鉄鎌」 『図解考古学辞典』 水野清一・小林行雄編 東京創元社 1959年

大塚初重 「大和政権の形成」 『世考考古学大系』3日本Ⅲ 小林行雄編 平凡社 1959年
「副葬品」 『古墳辞典』 大塚初重・小林三郎編 東京堂出版 1982年。



10mm



10mm

第5節 その他の遺物

当節では、島の高所に鎮座する嚴島神社の裾付近の調査区から出土した遺物と南岸調査区からの出土遺物について説明する。

1. S B10上部落込み出土土器 (E 4～E 8) (第121図・P.L. 69)

土師器皿 (E 4～E 8) 皿は全て同一タイプに限られる。底部は指揮え、口縁部は横方向の抜き拂でにより仕上げられたため片側のたちあがりが強くなり他方は緩やかに外傾するのを特徴とする。底部・器壁の厚みは比較的均質に整えられている。皿(E 8)のようにたちあがりの緩やかなものもあるが、法量は口径11cm前後・器高2.5cmと一定である。色調は淡茶黄色を呈し、胎土は砂粒を殆んど含まず緻密である。皿(E 4)は口縁部内面に燈心の煤痕が残る好例である。破損品が多いが、総数で40～50個体を数えることができる。

2. S K549出土土器 (E 9～E 16) (第121図・P.L. 71)

黒色小皿 (E 9～E 16) 小皿は全て同一タイプに限られる。底部内外面共に指揮えを行ない、後外面は拂でによって平坦面を成す。口縁部は横方向の軽い抜き拂でにより仕上げられ土師器皿 (E 4～E 8) と類似したたちあがりを呈する。小皿(E 15)は反転復元のため底部は丸い形状を示す。小皿(E 16)の内面は指揮えの後板状工具による拂でが認められる。法量は口径8cm前後・器高2.5～3.0cmと一定である。色調は外面、器壁断面共に黒色を呈し、胎土は粗く1mmの大砂粒を多量に含む。これらの小皿は鎌倉～室町時代の瓦器ないしは瓦質土器とは異なる特徴を有するものである。破損品が大半で、30個体前後を数えることができる。

3. 銅製品・銅貨 (E 17～E 27) (第122図・P.L. 71)

笄 (E 17) 銅製笄は何れの遺構に伴ったものか不明である。形態は太く短く、耳搔が付けられるべき部分が欠損する。表面中央部に桶が切り込まれ、その周囲に輪郭を入れる。裏面は断面凸レンズ状を呈し、良く研磨されている。

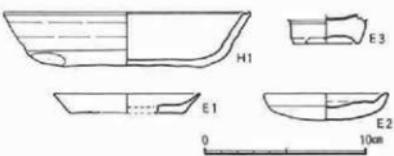
煙管 (E 18) 煙管は雁首のみの出土である。火皿は半球形を呈し、膨返しの弯曲が小さく直線的である。^{HD}灰落しのための使用痕である背面のつぶれが認められる。

銅貨 (E 19～E 27) 鎔化の著しいものもあるが、銅貨は全て寛永通宝に限られる。(E 19～E 24)は同一地点からの出土であるが銭径に大小の差があり、銭文にも差が認められる。(E 19)は背に「文」文字が認められる。銭径は銕化のため正確さを欠くものもあるが、(E 19)は25.3mm、(E 20)は24mm、(E 21～E 24)は21.8mmを測る。(E 25～E 27)は表採資料であるが、銭文が比較的明確である。銭径は(E 25・E 26)が21.9mm、(E 27)が23.3mmを測る。銭文は全て異なる。銭径、銭文の差は鋳造年次、鋳造場所に違いがある。

4. 南岸調査区出土遺物 (H 1・E 1～E 3) (第120図・P.L. 69・P.L. 71)

土師器皿(H 1) 平坦な底部に浅く外傾する口縁部をもつ器形である。法量は口径15.3cm・器高3.5cmを測る。口縁部は完結する3段の横施を施し、端部は若干内側に巻き込んで沈線状を呈する。底部は指揮え、後に軽い拂で調整を加える。

土師器皿(E 1・E 2) 共に磨滅の著しい土器



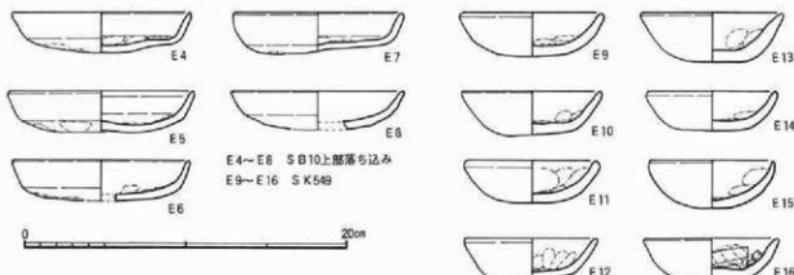
第120図 南岸調査区出土遺物実測図

である。小皿(E1)は口縁部が著しく外傾し、器壁が薄くなる。底部は回転糸切りの痕跡が残る。小皿(E2)は丸みのある底部から短く外傾する口縁部が付く。全体に器壁の厚い土器である。

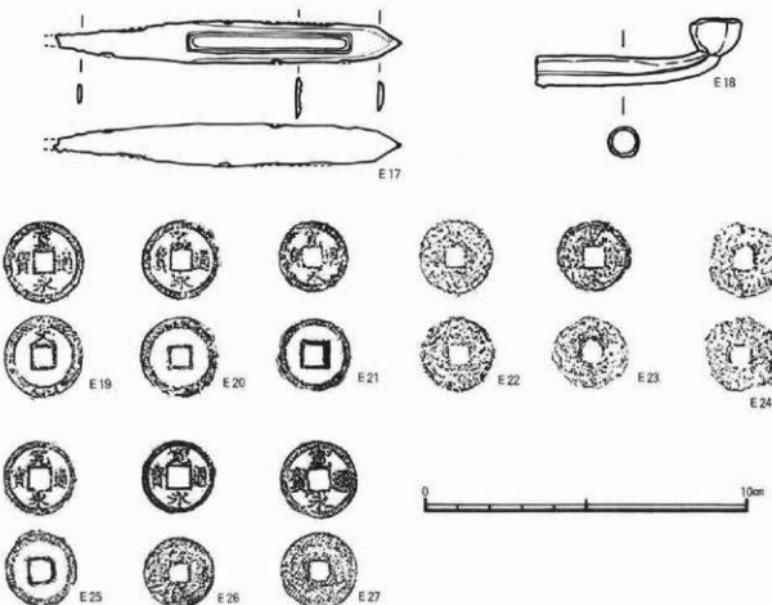
青磁(E3) 高台と体部の間に沈線を施す。高台疊付の脚は削り取られ、その内部は露胎である。国産の磁器であろう。

〈註〉

註① 各部位の名称は、古泉弘「銅製品」「江戸一都立一橋高校地点発掘調査報告」都立一橋高校内遺跡調査団 1985年 に掲っている。



第121図 その他の土器実測図



第122図 銅製品・銅貨

第VI章 ま と め

第1節 繩文時代の遺構・遺物

繩文時代の遺構は、W30—W20に集中する土壌、W40—W 140にかけて散逸的に存在する焼土壌、調査区のほぼ中央に存在する集石遺構に限られ、明確な生活遺構は検出されなかった。W 180南縁付近においては岩盤直上でまとまりのある繩文土器・石器が出土しており、繩文時代の生活環境の一端を垣間見ることが可能となった。遺物は遺構と直接結びつくものが少ないため、個々において所属時期を明らかにするに留め、統計処理により生活領域の一端を推量するよう努めた。

1. 遺構

遺構は、集中こそそれその性格等を検討するには困難がある。それ故に、各遺構の相対的な関係のみを記述することになる。特に、少量ではあるが遺構から遊離した遺物をも含めて考えるとみる。

(1) 土壌

土壌は、W30—W20に集中し、形態は楕円形が主流を成している。SK 725のみからまとまった繩文土器が出土し、他は細片である。SK 725のJ58の同一個体片が南5mから南西約15mにかけて散逸している様は、土器が破損した後、流出したものと考えられる。同様にSK 722のJ75にも南西約5mにかけて散逸した状態がみられる。これらの状態は、本来、土壌内に埋もれていたものが、土砂の流出と共に削平され再堆積したものである。SK 722・SK 725に関しては、土壌内に完形品が埋もれていた可能性が強いと言える。他の土壌に関しては、破片も小さく、散逸した状態が不明であるため上記の土壌と同様には考え難い。一応、土壌から出土した細片の土器をもって時期決定したが、必ずしも正しく対応しているとは限らない。

(2) 焼土壌

焼土壌は、前項の土壌と重複することなく、W40—W 140にかけて大小17基が散逸的に存在する。これらの焼土壌は、三形態に分類できるが何れも浅い凹み状を呈する点で共通し、基底部に凹凸は認められない。本遺跡の弥生時代や鎌倉～江戸時代の焼土がブロック状に入る焼土壌とは明らかに異なる。焼土壌は土壌と集石遺構の間に3基、W80—W 100に6基、W 115—W 140に8基がありまとまりをみせる。まとまりは、前者を除けば比較的遺物の分布と対応し、生活に直接関係する遺構と考えられる。住居に関係する遺構がないために断言し得ないが、炉であった可能性が強い。

(3) 集石遺構

集石遺構は、1ヶ所に限られ、土壌・焼土壌と重複することはない。遺物の分布も最も希薄であるため、生活遺構に直接関係するものとも考え難い。集石の構造そのものは一見乱雑に見えるが、比較的大きな石を外回りに配し、小さな石を中心部に配する規則性が看守できるものである。これらの事から、集石遺構は自然に堆積したものではなく人為的に手の加えられたものである。海南市溝の口遺跡例では配石墓とされているが、本例は遺物もなく、下部に土壌も存在しないため墓としての可能性が弱いものである。ただ、祭祀的性格をもち得ることは十分考えられる。

2. 遺物

繩文時代の遺物は、第V章第1節に記述したように少量であるが、紀の川流域の早期末から後期の資料として橋本市市立道路に次いでまとまりのある貴重なものである。

(1) 繩文土器

縩文土器を資料化する方法として、細片であっても全て抽出し個体点数を集計すると共に、出土位置図を作成して集中する範囲と土器を表(第11表)に示した。

早期末から前期にかけての土器は、胎土に多量の角閃石・金雲母を含むものが多く、生駒西麓産の土器胎土に類似するものである。

詳細に観察すれば、これらの砂粒の構成は2種類に区別できる。在地の胎土の土器もあるが少量である。中期以後は、在地の胎土が圧倒的に多く、搬入品と認められる土器は稀れである。

縩文土器は出土状況から、流出して再堆積したものが含まれるが極端に遠距離に移動するものはなく、出土分布により一定の生活範囲を推量することが可能である。全体の遺物出土の傾向は、第123図に示すように密度の差こそあれ4ヶ所に集中する。第12表では各地区の遺物点数を表わし、第11表では時期別に各地区的遺物を示した。これらの表から、早期末～前期にかけて3ヶ所、中期初頭～前葉

時期	地方	中国・四国	近畿	関東
早期	臺原 羽島下層	[石山]	■ 道	船ヶ島台 茅山下層 茅山上層
前	羽島下層② 羽島下層③	[免田川①]		花林下層④ 岡山⑤ 加須
期	森の森 森崎乙Ⅰ 森崎乙Ⅱ	[北白川②] 北白川③	a b c	猪崎 a 深島 b c
	田井	大瀬山		内家、十三芳郡
中	■ 船光 四 ■ 草木 三	[櫛原]		下野、五霞台 阿賀台 猪崎 1 2 3
期		櫛原2 櫛原3 (上野町)		加賀利玉 1 2 3
後	中津 福田KⅡ 津田A 森崎KⅠ 片桐 竹原	天理		和泉市 城之内Ⅰ 城之内Ⅱ 1 2 3
期	馬取 福田KⅢ			加賀利B 1 2 3
晚	岩田 黒田BⅠ 羽下層	[御賀里]		安行Ⅰ*
期		丹治		安行Ⅱ*

式名は「世界歴史全集」1 日本書紀 「萬葉土器編年表」小林達也・永井吉輔による。

第10表 縩文土器対照表

地区 時期	O地区 W280～W200	A地区 W200～W150	B地区 W150～W100	C地区 W100～W50	D地区 W50～EW00
早期末～前葉初		J 1・J 6・J 11・J 12	J 16・○	○	J 2・J 4・J 9・J 15 ○
前期	J 5		J 10・○・○・○	J 17	
中期初			J 18・J 31・○	J 32	○・○
中期前葉			J 20・J 21・J 27・J 34	J 24・J 29	J 22・J 23・J 30・J 33 ○
中期末	J 68・J 69				
後期初	J 43・○	J 42・J 71	J 40・J 41・J 44・J 49 J 50・J 51・J 52・J 53 J 54・J 57・J 66・J 67 ○・○・○・○	○	J 47・J 48・J 58・J 59 J 60・J 64・J 65・J 72 J 89・J 91*
後期前葉		J 70		J 76	
後期後葉		J 80・J 86・J 87			
後期末		J 79・J 81・○・○・○			J 84
晚期	J 85				

○は実測図がない土器；記号は除外

第11表 縩文土器 時期別出土地点

		石 砂	石 楠	削 器	叩 石	磨 石	凹 石	勾 玉	石 核	サヌカイト 剥 片	合 計	土 器
A 地区	W200～W150	3		3	1		2			76	85	26
B 地区	W150～W100	2		2					2	46	52	32
C 地区	W100～W50	1		1		1				16	19	13
D 地区	W50～E W00	1	1		2	1	2	1		10	18	53
合 計		7	1	6	3	2	4	1	2	188	174	124

第12表 繩文時代遺物ブロック別組成 1

にかけて2ヶ所、後期初頭に2ヶ所、後期後葉から末にかけて1ヶ所の集中域が存在する。土器の集中域は、そのまま主要な生活範囲と考えられる。

(2) 石器

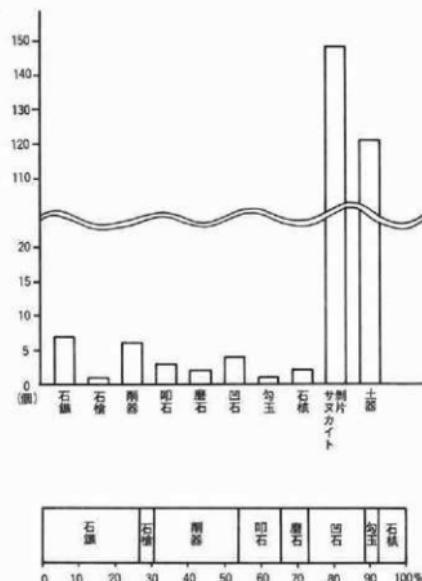
石器を資料化する方法として、サヌカイト剥片を含め、土器と同様に分布図と表を作成した。但し、所属時期が明確でないものもある。

石器（剥片を含む）の分布は、土器の分布に比較的良く対応し、A・B・C地区ではその場で石器の製作を行なったと考えられる。D地区での剥片の分布は、早期末～前期の土器が出土する範囲に限られ、中期～後期の土器集中域では凹石・磨石の出土がみられるに過ぎない。また、A地区でも石器の分布は、主に早期末～中期初頭の土器が出土する範囲に限られ、後期後半の土器集中域では剥片が認められない。B地区では早期から後期の土器が混在して出土するため、石器製作の実状は不明確であるが、石器は早期末～中期の土器の範囲に集中する傾向にある。O・C地区では石器と土器の関係は不明である。以上のことから、各地区における石器の製作は早期末から中期にかけてのものであり、後期における石器製作は集落内で行なわれていない可能性が強いと言える。

〈註〉

註① 中尾市・前田敬彦『満ノ口遺跡』海南市教育委員会・海南市文化財調査研究会 昭和59年3月 では繩文時代後期前葉の配石遺構4ヶ所を検出している。また、昭和59年度第4次調査においても配石遺構1基、集石遺構2基を検出しており、配石墓としての性格付けはされている。

註② 吉田宣夫『市脇遺跡発掘調査概報』和歌山県教育委員会 昭和49年3月 大岡康之・村田弘『市脇遺跡ほか発掘調査概報』橋本市教育委員会 昭和59年3月 昭和61年度市脇遺跡の発掘調査資料については、担当者の大岡康之より御教示を受けた。



第13表 繩文時代 石器組成表



第2節 弥生時代の遺構・遺物

弥生時代の遺構は、重複関係が少なく極めて単純である。それ故に、遺構の前後関係を知る手順となる弥生土器の変化も把握し難い面がある。同心円状に拡張される住居・住居相互の重複・遺物包含層の上下関係・遺構の切り込み面の違いなどと弥生土器の形態変化を指標として、遺構の前後関係を決定した。その結果、古墳時代前期を含めて6期の変遷をみることができる。遺物は基礎的な資料となるため最低限の統計処理を行ない、数量の表示・図化を試みた。また、紙数の許す限り他遺跡の類例を挙げることにした。

1. 遺構

本来、遺構は各々の遺構が相互に関連して成り立つものであるが、竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土壙・ピット列・落ち込み状地形など個々の遺構の性格と変遷を考え、集落の中で占める位置について追求するよう努めた。遺構からみて、船岡山集落が高地性集落或は一般集落の何れに類するかの検討も必要である。

(1) 竪穴住居跡

円形竪穴住居は、多くても二回の拡張・改築が認められる程度で単純な様相を示し、他住居との重複関係もSB06とSB07の1例に限られる。遺物も豊富とは言えないが、床面遺物や覆土の遺物から各住居の時期変遷が大まかに捉えることができる。各住居の位置関係にも重要な関係があり、単純故に単位の把握が可能である。加えて、時期の不明瞭な方形竪穴住居の位置関係も円形住居に類似する。また、竪穴住居の構造・規模においても類似と相違が見られ、特殊な住居でない限りその構造・規模がそのまま集落の中での主従関係を反映したものである可能性が強いと言える。但し、今回調査対象となったのは島城南側の緩傾斜地面のみで、北側の斜面・頂上域の遺構は調査していないため、それらの存在を十分に考慮する必要がある。

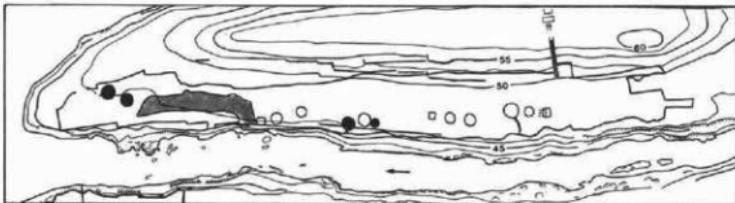
竪穴住居の時期と変遷（第124図）

竪穴住居の時期は、主に床面遺物と住居の拡張・改築の重複関係により決定し、覆土の遺物・遺構の配置により補足した。

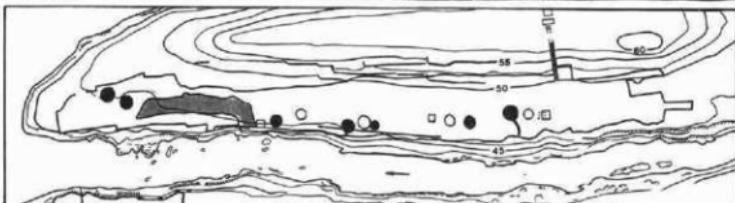
SB01は第I・II・IV期に属し、拡張・改築と覆土の遺物から第IV期が第III期に入る可能性もある。SB02は第I・II期に属し、覆土の遺物も比較的古い様相を呈する。覆土の遺物は大半が上層部に集中し、第III期以後SB01からの廐棄と周辺部からの堆積が認められる。SB01・SB02は落ち込み状地形を挟んで他住居とは離れた位置にあり、第I・II期に落ち込み状地形への遺物の廐棄が認められる。SB03は第II期に属し、第III期以後覆土の上層部にSB04からの廐棄・堆積が認められる。落ち込み状地形東端部の遺物が第I期に集中するため、SB03は第I期から存在する可能性がある。SB04は第III・IV期に属するが、SK241に切られるため少なくとも第IV期前半に終息する。SB05は第I・II・III期に属し、第III期後半以後にSB06から、第IV期以後にSB07からの廐棄・堆積が認められる。SB06も第I・II・III期に属するが、拡張から第I期に構築されていない可能性がある。SB06とSB07の重複関係から、SB06終息後少しの時間を置いてSB07が構築されたとみるべきである。SB08は第III・IV期に属する。SB12とは検出面を異にするが、包含層に第IV期の遺物を若干含むためSB08の第V期は前半で終息する。SB09は第II期に属し、第III期以後にSB08からの廐棄・堆積が認められる。SB10は第II・III・IV期に属し、第IV期後半以後にSB11と北側斜面からの廐棄・堆積が認められる。SB11は第III・IV期に属し、第IV期後半以後に北側斜面からの堆積が認められる。SB12は検出面の違いから、円形住居の時期に対応させて考えざるを得ない。そのため、SB12は第IV期後半以後ないしは不明瞭な第V期とした。SB13についても遺構の重複関係から第V期とした。

各住居の所属時期を中心に変遷を述べたが、配置から見て各々隣接するSB01とSB02・SB03とSB04・SB05とSB06とSB07・SB08とSB09・SB10とSB11が密接な関係をもつ。

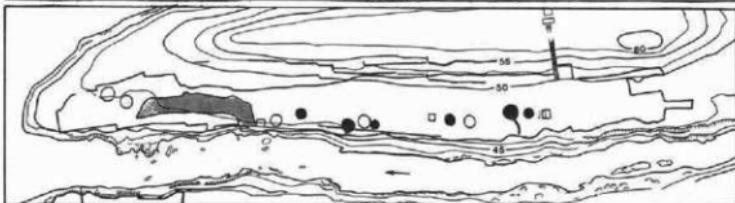
第Ⅰ期



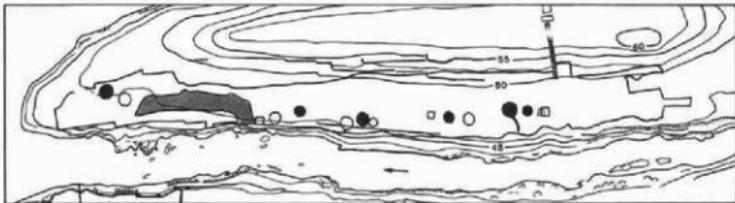
第Ⅱ期



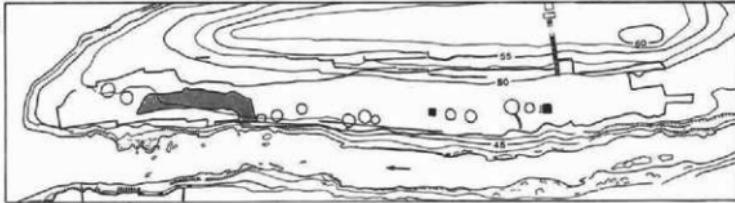
第Ⅲ期



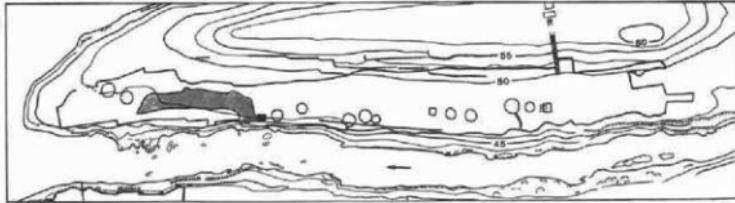
第Ⅳ期



第Ⅴ期



第Ⅵ期



竪穴住居間の距離と配置 (第12図)

検出された13棟の竪穴住居跡は、等間隔でないにせよある一定の距離をもって配置している。前項において時期設定した各住居跡には、隣接して構築される他住居が廃絶している場合も見られ、円形住居全てが同時に存在しないことを明らかにした。これらの住居は、間隔と配置によりいくつかのまとまりが認められる。各住居の間隔は、第12図に示したように隣接する2棟毎の単位では近距離に存在し、また、2棟2対の4棟の単位では比較的遠距離に存在する。各住居は大きくSB03からSB06(B単位)、SB08からSB11(C単位)の4棟の単位を成す。SB01・SB02に対応する2棟は、弥生土器の出土密度などから調査区外の北側に存在するものと予測される(A単位)。また、円形住居の廃絶直後に構築される2棟の方形住居は、C単位の両端に位置し有機的な関係が維持されている。

即ち、各4棟単位の住居は、第Ⅰ期ではA単位—2棟+α棟・B単位—2棟、第Ⅱ期で全ての単位が出揃いA単位—2棟+α棟・B単位—2棟+1棟・C単位—2棟、第Ⅲ期ではB単位—2棟+1棟・C単位—2棟+1棟、第Ⅳ期ではA単位—1棟+α棟・B単位—1棟+1棟・C単位—2棟+1棟の変遷と推移を辿ることになる。実際4棟単位の住居は、2棟ないし3棟で最小単位を構成することになる。最小単位の構成は、既往の調査でも報告されており類似した構成を示している。^{註③}

竪穴住居の規模と面積 (第13表・第14表)

円形住居には構築当初から大小の差のある住居や拡張による建替えにより差の生じる住居がある。各住居の内、最小面積はSB06-aの18.6m²、最大面積はSB10-cの60.7m²を測り、その面積比は3倍強にもなる。各単位内で面積の大小を比較すると、第13表の結果を得ることになる。各々、第Ⅰ期から第Ⅳ期を通じて各単位の中でSB01・SB05・SB10が広い面積を占める事実は、土器・石器の保有量の多さに比例して、住居の規模の差が優劣の差を表わすものと考えられる。各単位・時期における住居の面積は、ほぼ一定の差を維持しており、優劣の逆転は認め難い。

拡張される住居は規模の大小にもよるが、最小7.2m²・最大17.3m²の増加を見、平均値は11.7m²を測る。

	A 単位	B 単位	C 単位
第Ⅰ期	SB01-a = SB02 (40.7m ²) ↓ (0 m ²) 12.1m ²	SB05-a > SB06-a (46.2m ²) ↓ (27.6m ²) 7.2m ²	SB10-a > SB09 (43.4m ²) ↓ (34.7m ²) 10.1m ²
第Ⅱ期	SB01-b > SB02 (52.8m ²) ↓ (12.1m ²)	SB05-b > SB03 > SB06-b (53.4m ²) ↓ (36.3m ²) ↓ (28.7m ²) ↓ (17.1m ²) ↓ (7.5m ²)	SB10-b > SB11 > SB08 (60.7m ²) ↓ (33.1m ²) ↓ (25.0m ²) ↓ (27.6m ²) ↓ (8.1m ²) ↓ 17.3
第Ⅲ期	SB01-c (52.8m ²)	SB05-c > SB06-b > SB04 (53.4m ²) ↓ (28.7m ²) ↓ (28.3m ²) ↓ (24.7m ²) ↓ (0.4m ²)	SB10-c > SB11 > SB08 (60.7m ²) ↓ (33.1m ²) ↓ (25.0m ²) ↓ (27.6m ²) ↓ (8.1m ²)
第Ⅳ期		SB07 > SB04 (46.5m ²) ↓ (28.3m ²) ↓ (18.2m ²)	SB10-c > SB11 > SB08 (60.7m ²) ↓ (33.1m ²) ↓ (25.0m ²) ↓ (27.6m ²) ↓ (8.1m ²)
第Ⅴ期			SB13 > SB12 (29.7m ²) ↓ (13.7m ²) ↓ (16.0m ²)

第14表 竪穴住居跡の面積と差

本稿では、具体的に他遺跡と比較検討する余裕がないので、参考までに他遺跡の事例を挙げる。本遺跡に近隣する佐野遺跡では弥生時代後期の円形竪穴住居10棟の内、最小面積は28.3m²・最大面積は63.6m²を測り、拡張例では13.4m²の面積増加を見る。岩出町吉田遺跡では円形竪穴住居9棟の内、超大型住居1棟を除くと最小面積は34.2m²・最大面積は72.4m²を測り、拡張例では最小3.6m²・最大18.2m²・平均10.6m²の面積増加を見る。同遺跡の中後半では円形(椭円・隅丸)竪穴住居7棟の内、超大型住居1棟を除くと最小面積22.1m²・最大面積47.8m²を測る。和歌山市西ノ庄遺跡では円形竪穴住居1棟の拡張では22.3m²の面積増加を見る。海南市龟川遺跡では中期後半の円形竪穴住居5棟の内、最小面積は12.9m²・最大面積43.0m²を測る。以上の事例では、円形竪穴住居は後期前葉から中葉にかけて大型化の傾向にあり、後葉には再び小型化する傾向にある。庄内式併行期には大半が(隅丸)方形竪穴住居に変化する。

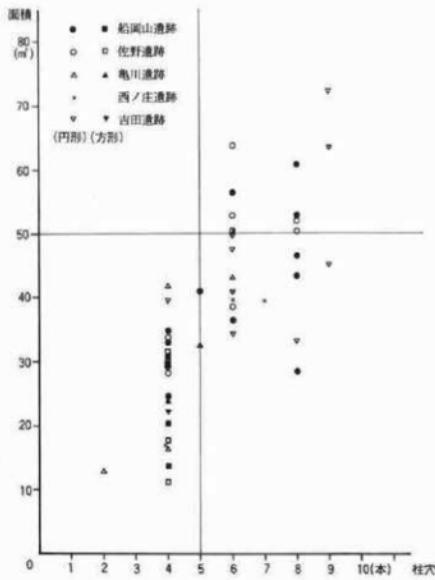
竪穴住居の構造

出入口　本遺跡の住居は緩傾斜地面に掘削されているため、当然高位置になる北側の壁が深く南側が低い。出入口と断定できる遺構は検出されなかったが、各住居跡について推定してみる。出入口は、主柱穴の位置および柱間の乱れ、壁溝の途切れ、壁際の小柱穴の存在、床面の遺物の出土状況・炉の位置・排水溝の位置・壁の凹凸などにより推定できる。各々、出入口はSB01-aではP11-P12間、SB01-b・cではP6-P7間、SB02ではP4-P5間、SB03ではP5-P10間、SB04ではP2-P4間、SB05-aではP3-P20間、SB05-b・cではP2-P21間、SB06ではP1-P2間、SB07ではP8-P10間(P13-P16間)、SB08ではP1-P4間、SB09ではP2-P3間、SB10-aではP6-P8間、SB10-b・cではP7-P26間、SB11ではP1-P2間に推定できる。不明瞭なSB02を除くと、出入口の位置は住居の南半に集中し、住居の立地する地形にも合致する。

炉　各住居跡の中央には、円形もしくは不定形の炉が存在する。炉の断面形態は、二段掘り・椭形・不定形を呈し、炉内には炭層(灰層)が堆積する。炉内は各図に示すように、間に黄色土を挟んで二層から三層の炭層が認められる。炭層は、住居が拡張・改築され炉が再使用される際に炉底の深さを変える場合と、季節によって深さを変える場合とが考えられる。SB11の例では、新旧の炉底の間に堆積する土砂は非常に堅く縮まる。炉の周囲には、同心円状に炉堤が廻らされる。炉堤は県下の弥生時代後期の円形竪穴住居にあっては普遍化した施設であったと考えられ、最近、和泉・摂津を始めとした地域でも検出例が増加している。^{註⑨}

(2) 据立柱建物跡

円形竪穴住居と同一時期に構築される据立柱建物は1棟のみである。据立柱建物は、集落構成のC単位に属し第Ⅱ期に出現を見る。建物は、SB10の居住者の管理・統制のものと倉庫としての機能を荷なっていたものと考えられる。尚、据立柱建物の柱廻り面積は12.5m²を測る。



第15表 竪穴住居跡の面積と柱穴

2. 遺物

弥生時代の遺物には、第V章第2節に記述したように多くの細片と化した弥生土器を始め、石器・裝身具・鉄器があり、各々、弥生時代後期の中にあって重要な位置付けを与えるものである。弥生土器については、遺跡内の出土密度と遺構の対応関係、既往の調査を含めた器種構成の差異と変化、畿内との対応を考える上で急がなければならない編年作業を中心に記述する。石器・鉄器にあっては集落内での分布状況に触れてみる。

(1) 弥生土器

弥生土器を資料化する方法として、包含層出土土器について調査区内での出土密度図を作成し、全ての遺構・包含層出土土器について数的な集計を二通り行なった。第125図、弥生土器の出土密度は、調査区を4m方眼に割付け集計方法A類による数量を斜線により表わした。弥生土器の取り上げは、調査区が広範にわたるためかなり広い区画で取り上げているが、一度実際の取り上げ範囲を図化し、再度4m区画に均等割りしたものである。全ての遺構の密度を知るには、第125図に各遺構を重複させて考えればよいわけである。取り敢えず數値を明記した各窓穴住居跡の遺物量と第125図を重複させることにより、各住居からの遺物の廐棄状況・調査区外の遺構の想定が成り立つ。調査区の内、EW00以東・W280以西については遺構の密度に比例して遺物量も僅かとなり、集落の縁辺であることに違いない。各住居間の関係は、床面上に遺物の時期設定にもほぼ正しく対応し、隣接した住居の機能消失後に隣接他住居からの遺物の廐棄が行なわれている。また、堆積覆土の遺物量を詳細に検討することにより、一定の廐棄進行状況の想定が可能である。各住居の関係は、第Ⅲ期以後SB01からSB02への廐棄・堆積（以下同じ）、SB04からSB03へ、第Ⅱ期後半以後SB06からSB05へ、第Ⅳ期以後SB07からSB05へ、第Ⅲ期以後SB08からSB09へ、第Ⅳ期後半以後SB11からSB10への廐棄・堆積が考えられる。但し、ここでの廐棄・堆積は遺物の一括廐棄的なものを意味せず、散逸した破片の回地への自然堆積と考えられ、隣接他住居から古相の遺物が再堆積するものもみられる。

器種構成

本来、後期弥生土器の器種構成は、主要器種となる壺・甕・高杯・鉢と、その他に副次的な器台・蓋・瓶・手捏ね土器・手捺り形土器がある。本項では上記の器種の他に、本来の器種の意味あいから逸脱する紡錘車・土製品・特殊土器・その他を含めて器種構成比率を算出した。集計方法については、体部など全ての破片を対象とした集計方法A類と壺・甕・鉢の口縁部・底部・高杯の口縁部・脚襠部・蓋の摘み部・裾部、その他はA類と同じ破片を対象とした集計方法B類の二通り行なった。当然、集計方法A類では集計方法B類に対して器体の大きさとそれに伴う破損状態に比例して数量の増減が認められる。また、集落の中での遺構の位置・遺構の性格により数量の増減が認められる。逆に言えば、数量の増減により遺構の性格の一端が解明できる場合もある。全体として第17表上段に示すように、大型の器体の壺が破損しやすく、甕・高杯・鉢の順に破損し難い。但し、第15・16表に示すように各器種における増減は一律ではない。集計方法B類では、口縁部と底部を各1点として集計するため実数の約2倍の個体数となる。当遺跡のように完形品の少ない遺跡にあっては、集計方法B類と從来の口縁部のみによる集計方法との比率に大差は認められない。当遺跡の口縁部のみによる集計方法の全體量は、壺1,464点(29.7%)、甕1,654点(33.6%)、高杯1,348点(27.4%)、鉢131点(2.7%)、器台56点(1.1%)、蓋摘み部・円盤71点(1.4%)となり、集計方法B類の合計比率との大差は認められない。

各住居跡の床面上に遺物は、少量であって本来の使用状態の器種構成を示さない場合も見受けられる。SB02・SB04・SB06以外は床面において完形品が遺存しており、土器が少量であっても使用状態の一端を示すものである。本集計は破片をも含むものであるが、各住居の床面や覆土では高杯が比較的高率を占めている。次いで全体として壺・甕の順で高率を占める。これらの中にあってSB08の高杯100%（集計方法B類）は、特異な數値を示している。包含層にあっては、落ち込み地形内の土器群では高杯は壺・甕と同率か上回るのに対し、他の良好な包含層では高杯は壺・甕を下回りかなり低率を示す。鉢は後期の資料としては低率のままである。

遺構 器種	SB01 床面直上	SB01 覆 土	SB01 上 面 部 含 庫	SB02 床面直上	SB02 覆 土	SB03 床面直上	SB03 覆 土	SB04 床面直上	SB04 覆 土	SB05 床面直上	SB05 覆 土	SB06 床面直上	SB06 覆 土	SB07 床面直上	SB07 覆 土
壙	12 (29.3%)	21 (27.3%)	14 (29.8%)	6 (27.3%)	16 (19.5%)	2 (23.1%)	30 (20.0%)	2 (20.0%)	4 (13.8%)	23 (22.1%)	59 (19.2%)	1 (8.3%)	13 (17.1%)	9 (34.6%)	10 (19.6%)
甕	7 (17.0%)	15 (19.5%)	17 (36.2%)	7 (31.8%)	20 (24.4%)	9 (45.0%)	31 (23.8%)	3 (30.0%)	4 (13.8%)	20 (24.1%)	74 (25.0%)	3 (34.2%)	26 (34.9%)	7 (33.3%)	
高 瓶	18 (44.0%)	32 (41.6%)	11 (33.4%)	4 (18.2%)	36 (43.9%)	6 (36.0%)	48 (36.9%)	4 (40.0%)	21 (72.4%)	40 (38.5%)	134 (43.6%)	5 (41.7%)	7 (31.6%)	7 (35.9%)	18 (35.3%)
鉢	2 (4.9%)	5 (5.5%)	1 (2.1%)	5 (6.1%)	1 (5.0%)	5 (3.8%)				4 (3.8%)	7 (2.3%)	2 (16.7%)	6 (7.9%)	2 (7.7%)	
器 台	1 (2.4%)	1 (1.2%)	1 (2.1%)	1 (4.5%)	2 (2.4%)		5 (3.8%)			1 (1.0%)	7 (2.3%)		2 (2.6%)		
蓋			2 (4.3%)		1 (1.2%)		9 (6.9%)	1 (10.0%)		3 (2.9%)	14 (4.6%)		3 (3.9%)		3 (5.3%)
瓢	1 (2.4%)			1 (4.5%)	2 (2.4%)	1 (5.0%)									
手 担 ね			1 (2.1%)		1 (5.0%)	1 (0.8%)				2 (1.9%)	3 (1.0%)		2 (2.6%)		
轎 車		1 (1.3%)								10 (3.8%)	8 (2.6%)	1 (1.3%)		1 (3.8%)	3 (5.3%)
土 製 品															
特殊土器				3 (13.6%)											
そ の 他		2 (2.6%)				1 (0.8%)			1 (1.0%)	1 (0.3%)					
合 计	41 (100.0%)	77 (100.1%)	47 (100.0%)	22 (99.9%)	82 (99.9%)	20 (100.0%)	130 (98.9%)	10 (100.0%)	29 (100.0%)	104 (100.0%)	307 (100.0%)	12 (100.0%)	76 (99.9%)	26 (99.9%)	51 (100.0%)

遺構 器種	SB08 床面直上	SB08 覆 土	SB09 床面直上	SB09 覆 土	SB09 上 面 部 含 庫	SB10 床面直上	SB10 覆 土	SB10 上 面 部 含 庫	SD 6 覆 土	SB11 床面直上	SB11 覆 土	SB11 上 面 部 含 庫	SK195	SK635	SK639
壙		6 (10.3%)	2 (20.0%)	16 (17.4%)	1 (4.8%)	20 (28.2%)	52 (28.7%)	5 (13.5%)	30 (18.8%)	2 (22.2%)	20 (29.0%)	12 (24.0%)	3 (26.1%)	7 (12.5%)	7 (15.2%)
甕		24 (41.4%)	3 (30.0%)	29 (31.5%)	11 (52.4%)	14 (19.7%)	28 (16.0%)	14 (37.8%)	32 (20.0%)	2 (22.2%)	19 (27.5%)	15 (32.0%)	19 (41.3%)	8 (38.3%)	12 (26.1%)
高 瓶	5 (100.0%)	24 (41.4%)	4 (40.0%)	36 (39.1%)	6 (28.6%)	26 (36.6%)	60 (34.3%)	36 (43.2%)	68 (42.5%)	4 (44.4%)	18 (28.1%)	14 (28.0%)	12 (26.1%)	4 (16.7%)	22 (47.8%)
鉢		2 (3.4%)	1 (10.0%)	3 (3.3%)		4 (5.6%)	7 (4.0%)	1 (2.7%)	10 (6.3%)	1 (11.1%)	7 (10.1%)	2 (4.0%)	3 (6.5%)	5 (20.8%)	2 (4.3%)
器 台				1 (1.1%)	1 (4.8%)	2 (2.8%)	4 (2.3%)				1 (1.4%)				
蓋				3 (3.3%)			5 (2.9%)	1 (2.7%)	5 (3.1%)		2 (2.9%)	4 (3.0%)			
瓢				1 (4.8%)											
手 担 ね				2 (2.2%)		1 (1.4%)			2 (1.3%)		1 (1.4%)			1 (2.0%)	1 (2.2%)
轎 車	2 (3.4%)		2 (2.2%)		4 (5.6%)	13 (7.4%)			12 (7.5%)		1 (1.4%)			4 (16.7%)	2 (4.3%)
土 製 品						2 (1.1%)									
特殊土器						1 (0.6%)			1 (0.6%)		1 (1.4%)				
そ の 他				1 (4.8%)		3 (1.7%)					1 (2.0%)				
合 计	5 (100.0%)	58 (99.9%)	10 (100.0%)	92 (100.1%)	21 (100.2%)	71 (99.9%)	175 (100.0%)	37 (99.9%)	160 (100.1%)	9 (99.9%)	69 (99.8%)	50 (100.0%)	46 (100.0%)	34 (99.9%)	66 (100.0%)

遺構 器種名 部類	SB01 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB01 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB02 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB02 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB03 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB04 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB04 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB05 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB05 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB06 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB06 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB07 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層			
壺	80 (46.5%)	200 (51.2%)	104 (56.0%)	83 (54.6%)	296 (49.4%)	14 (28.0%)	312 (45.4%)	9 (28.0%)	21 (28.6%)	268 (51.1%)	585 (41.3%)	41 (54.7%)	123 (40.1%)	54 (40.6%)	67 (39.0%)
甕	41 (24.0%)	69 (17.6%)	117 (40.5%)	28 (18.4%)	171 (28.5%)	22 (44.0%)	240 (35.7%)	17 (54.8%)	6 (8.5%)	96 (18.5%)	439 (31.0%)	11 (14.7%)	86 (28.0%)	29 (21.8%)	50 (29.1%)
高杯	40 (24.2%)	113 (26.9%)	62 (21.5%)	36 (23.7%)	120 (23.0%)	11 (22.0%)	99 (14.7%)	4 (12.9%)	44 (62.0%)	133 (25.7%)	353 (24.9%)	20 (25.7%)	85 (27.7%)	47 (35.3%)	48 (28.5%)
鉢	2 (1.2%)	5 (1.3%)	1 (0.3%)	—	5 (0.8%)	1 (2.0%)	5 (0.7%)	—	—	4 (0.8%)	7 (0.5%)	2 (2.7%)	6 (2.0%)	2 (1.9%)	—
器 古	1 (0.6%)	1 (0.3%)	1 (0.7%)	—	3 (0.5%)	—	5 (0.7%)	—	—	1 (0.2%)	7 (0.5%)	—	2 (0.7%)	—	—
壺	—	—	—	—	—	—	9 (1.3%)	1 (3.2%)	—	3 (0.6%)	14 (1.0%)	—	3 (1.0%)	—	3 (1.7%)
瓶	1 (0.6%)	—	—	—	1 (0.7%)	—	1 (2.0%)	—	—	—	—	—	—	—	—
手捏ね	—	—	1 (0.3%)	—	2 (0.3%)	1 (2.0%)	1 (0.1%)	—	—	2 (0.4%)	3 (0.2%)	—	2 (0.7%)	—	—
結 様 杯	—	1 (0.2%)	—	—	—	—	—	—	—	19 (2.0%)	8 (0.6%)	1 (1.3%)	—	1 (0.6%)	3 (1.7%)
土 製 品	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
特殊土器	—	—	—	—	3 (2.0%)	2 (0.3%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—
その他の	—	2 (0.5%)	—	—	—	—	1 (0.1%)	—	—	1 (0.2%)	1 (0.1%)	—	—	—	—
合 计	165 (99.9%)	291 (100.0%)	289 (99.9%)	152 (100.1%)	599 (98.8%)	50 (100.0%)	572 (97.7%)	31 (99.9%)	71 (100.1%)	518 (100.1%)	1417 (100.1%)	75 (100.1%)	307 (100.2%)	133 (100.0%)	172 (100.0%)

遺構 器種名 部類	SB08 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB08 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB09 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB09 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB10 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB10 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SD 6 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB11 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	SB11 床面直上 覆 土 上 部 包 含 層	S K196	S K635	S K659			
壺	2 (22.2%)	52 (24.0%)	6 (35.3%)	100 (35.3%)	21 (27.3%)	119 (50.4%)	359 (33.5%)	93 (41.5%)	224 (38.8%)	11 (34.4%)	123 (45.0%)	100 (41.0%)	70 (38.5%)	28 (28.0%)	54 (27.4%)
甕	—	69 (37.1%)	5 (29.4%)	91 (32.2%)	38 (43.4%)	34 (14.4%)	469 (43.7%)	62 (29.0%)	138 (37.5%)	12 (23.9%)	78 (34.8%)	85 (32.4%)	59 (34.0%)	34 (43.1%)	85 (41.5%)
高杯	7 (77.8%)	61 (32.8%)	5 (29.4%)	81 (28.6%)	15 (19.5%)	72 (30.5%)	210 (19.6%)	57 (26.6%)	185 (32.1%)	8 (25.0%)	73 (25.5%)	51 (20.9%)	50 (27.5%)	28 (28.0%)	32 (36.4%)
鉢	—	2 (1.1%)	1 (5.9%)	3 (1.1%)	—	4 (1.7%)	7 (0.7%)	1 (0.5%)	10 (1.7%)	1 (3.1%)	7 (2.4%)	2 (0.8%)	3 (1.5%)	6 (6.0%)	3 (1.5%)
器 古	—	—	—	—	1 (0.4%)	1 (1.3%)	2 (0.8%)	4 (0.4%)	—	—	1 (0.3%)	—	—	—	—
壺	—	—	—	—	3 (1.1%)	—	—	5 (0.5%)	1 (0.5%)	5 (0.9%)	—	2 (0.7%)	4 (1.6%)	—	—
瓶	—	—	—	—	1 (1.3%)	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
手捏ね	—	—	—	—	2 (0.7%)	—	—	1 (0.4%)	—	2 (0.3%)	—	1 (0.4%)	—	—	1 (0.5%)
結 様 杯	—	2 (1.1%)	—	—	4 (1.7%)	13 (1.2%)	—	13 (1.2%)	—	12 (2.1%)	—	1 (0.2%)	—	4 (4.0%)	2 (1.0%)
土 製 品	—	—	—	—	—	—	2 (0.2%)	—	—	—	—	—	—	—	—
特殊土器	—	—	—	—	—	—	1 (0.1%)	—	1 (0.2%)	—	1 (0.3%)	—	1 (0.4%)	—	—
その他の	—	—	—	—	1 (1.3%)	—	—	3 (0.3%)	—	—	—	—	—	—	—
合 计	9 (100.0%)	188 (100.1%)	17 (100.0%)	283 (100.1%)	77 (100.1%)	236 (99.9%)	1073 (100.2%)	214 (100.1%)	577 (100.0%)	32 (100.0%)	286 (99.8%)	344 (99.9%)	182 (100.0%)	100 (100.0%)	197 (99.9%)

船岡山遺跡

—150— 他遺跡 参考例 集計方法B類（%は四捨五入）

弥生土器の編年予察

船岡山遺跡出土の弥生土器は、従来の畿内五様式編年の第五様式に対応する土器群である。その中でも厳密に言えば、第五様式を前葉・中葉・後葉に区分した場合の前葉・中葉の土器群が大半を占めている。今、和歌山県下全域の当期の資料を網羅する用意がないため、全体の流れを当遺跡の土器から組立てるものとする。但し必要に応じ、他遺跡の弥生土器についても記述する。また、竪穴住居跡の頃で触れた第Ⅰ期から第Ⅳ期の変遷を把握するため、第Ⅰ期の前段階と第Ⅳ期に後続する段階の土器について概述することとした。

前段階の土器

ここに言う前段階とは、畿内五様式編年における第四様式の後半部分に対応する段階のものである。当期の資料は県下では少なく、最近の調査により若干の増加を見る程度である。また、従来、当期の指標とされる西の辻N式土器の一群と比較した場合、県下の土器の地域色が強く、前者の土器群と正しく対応しない部分も見受けられる。

本期の器種構成は、第四様式の前半部分と変わりないが、各器種内においてかなりの変化が認められ、形態の小型化が始まっている。壺には広口壺・広口短頸壺・段状口縁壺・直口壺・無頸壺がある。第四様式の前半まで統一していた断面三角形の貼付突部を付加する系譜の直口壺は完全に消失し、広口太頸壺・細頸壺もその系譜を辿るもののがなくなっている。代って、異形の壺が目立つ。妻は紀伊型妻の技法の踏襲されるものが僅かに残り、稀少例となっている。外面に刷毛調整されるものと叩き技法が施されるものがあり、後者が主体となる。また、器体の大きさに大・中・小関係があるが、大型は減少し、中・小型が多い。小型では前段階まで見られた大きさより一回り小さいものとなる。高杯も全体に小型になり、杯部が楕円形・皿形の無文化したものとなる。鉢は一部に大型が残るが、全体に小型になる。脚台部の付く形態は、依然として遺存している。器台・蓋は資料的に少ない。

前段階は資料不足を否めないが、今後、資料の増加を待って各器種の頻度、第V様式への変遷を考える必要がある。前段階の資料は市立遺跡第2号住居跡、東田中神社遺跡S B II^{注②}、鴨神V遺跡B地区S K O 51^{注③}・同B地区S K O 53^{注④}、滝ヶ峰遺跡I-65地点、富安I遺跡1号方形周溝墓溝の一部、龜山遺跡などから出土している。^{注⑤}また、橘谷遺跡^{注⑥}には第Ⅰ期より古相の一群の土器が存在するが、前段階に含めることに検討を要する。

第五様式の土器

第五様式の資料は、第四様式前半でのような華やかさが全く無く、器体の大きさにも大きな変化が生じている。この変化には第四様式までの変化より大きな意味が内在しており、質的に異なる問題と考えられる。本様式の上記の変化は、各河川流域に所在する第四様式後半から第五様式期の集落の動向と密接な関係をもち、第五様式を6小期に編年付けることができる。そして、前半と後半に区分する場合、第五様式で最も大きな画期となる第Ⅳ期と第Ⅴ期（当項の第V・VI期は弥生土器の小期）を境として、第Ⅰ期から第Ⅳ期を前半に、第V期から第Ⅳ期を後半に設定することができる。

第五様式の器種構成は、第四様式後半の延長上にあり各器種内での分化が続いている。長頸壺が新たに出現し、高杯の比率がかなり高まり、各器種の小型化・無文化が達成された段階である。後半段階には二重口縁壺、手焙り形土器が出現し、特定の器種が再び飾られるようになる。壺には広口壺・広口長頸壺・二重口縁壺・長頸壺・短頸壺・太頸壺・細頸壺・無頸壺がある。各形態の体部に文様が施されることは稀少例となるが、広口壺の口縁端面に凹線文・貼付符文・竹管文が多用され続ける。また、鹿記号を描く器体や、手捏ね土器のミニチュアが目につく。後半段階では擬回線や退化回線に変化し、前半段階の名残りを留める。妻は紀伊型妻が完全に消滅し、刷毛調整されるものが減少し、叩き技法が一般的となる。形態では口縁端部が上方に拡張され、受口状口縁を呈するものが多い。成形においても、下半部と上半部を別々に作る分割成形技法が定着する。後半段階には、底部から体部にかけて一気に叩き技法を施す連続螺旋叩き手法や口縁部を連続的に叩き出す口縁部叩き出

し手法が盛んに用いられるようになる。高杯は、本様式の中で変遷がスムーズに迫ることができる。前様式に比較すれば、全器種に占める高杯の比率はかなり高いものとなる。杯部の形態は、楕形と皿形が依然として続いている。脚台部に段をもつ形態のものが現われている。文様が施されることはなく、後半段階になると小型化が著しい。鉢は大型のものも残るが、全体に小型化が著しい。前半段階ではさらに小型化したものが見られる。後半段階には器種構成の中で鉢の占める比率が激増している。大型は口縁部が屈曲し、小型は口縁部が内寄するものと、屈曲する二者が安定した形態を示し、庄内式併行期へと連続する。器台も大型のものから小型化したものへ変化し、後半段階では資料的に減少している。蓋は前様式よりも、却って目立つ存在となり、三形態が存在する。

第Ⅰ期

第Ⅰ期の器種構成は、壺・甕・高杯・鉢・器台・蓋があり、各器種内での分化が認められる。壺には広口壺・長頸壺・太頸壺・無頸壺がある。広口壺・長頸壺の一部には、依然として凹線文や擬凹線が施されるものが続き、各部位の境目は比較的明確となる。甕は紀伊型甕が消失し、叩き技法を施すものが一般的となる。第Ⅰ期から小型の器体には分割成形技法が認められ、口縁端部を上方に拡張させる受口状口縁を作り出すものが出現する。第Ⅳ様式後半に祖元を求めるこどもできるが、本期の受口状口縁は肥厚させるだけでなく明らかに拡張させている。内面の粗い窓削りも増加し、一般化する。高杯は一部に大型のものが残存するが、前段階からの小型化の延長上にある。杯部が皿形と楕形の二形態が確立され、第Ⅱ期へと続いている。第Ⅰ期から高杯の増加が目立つようになる。鉢は形態が一定していない。大型の脚台部が付く形態は、本期ではみられなくなっている。特に小型の鉢が目につく。器台には大中関係があり、中型のものが多い。蓋は資料的に少ない。

第Ⅰ期の資料は、船岡山遺跡 S B01・S B02・S B05・S B06・S B09層土の一部・SK1・SK87・SK24
・弥生時代遺物包含層Ⅱ（弥生Ⅱ）・弥生時代遺物包含層Ⅰ（弥生Ⅰ）の一部、佐野遺跡・血浦遺跡・橋谷遺跡・滝ヶ峰遺跡・龜山遺跡などから出土している。

広口壺は良好な資料を欠くが、口縁部の形態に差が認められる。広口壺にはA・B₁・B₃・B₄・C₁・C₂・E₁・F₁・Iがある。広口壺A（1）は形態こそ第五様式であるが、輪描文の構成は第三様式後半の壺に類似する。広口壺B₁（B 1）は筒状の頸部に、断面四角形の粘土紐を付加した垂下部が付き、端面に凹線文が施される。広口壺B₃（K 118）は体部下位に最大径をもち、丸みがある。体部との境が不明瞭な頸部から外反する口縁部が付き、口縁端部は下方に拡張される。口縁垂下部には細い凹線文が施される。広口壺B₄（2）は水平に屈曲する口縁部が付く。広口壺C₁（K 2・K 20）は、種の明確な口縁部が付く。器台になるかもしれない。広口壺C₂（K 1・8）は広口壺C₁の小型である。広口壺E₁（7・10）は短い頸部に屈曲した口縁部が付く。広口壺F₁（3・4）は断面三角形状のシャープな垂下部が付く。広口壺I（B 160）は綺麗のある頸部から著しく外反する口縁部が付く。以上のように器体の大きさに大・小関係があり、口縁部に粘土紐を付加し口縁端部を作り上げる。長頸壺にはA₂がある。長頸壺A₂（B 161・K 21・14・15）は胴長の体部に直線的に外傾する口縁部が付く、口縁部には凹線文（K 21）、擬凹線（B 161）が施される。太頸壺（B 198）・無頸壺（12）は資料的に少ない。外面調整は鬼面きが主体で、板撫でなどがあり叩き技法の残るものがない。底部は全体に突出するものが多い。

甕には大・中・小関係があり、A₁大・A₂中・A₃大・D₁・D₂中・D₃中がある。前段階と同一方向の叩きに加えて、斜め左上がりの叩きが少ない。体部径が口径を凌駕するのを通例とし、最大径は体部の中位にあって胴長の体部が張り出しが少ない。壺同様、口縁部の形態に差が認められるようになり、D類がA類より主流となる傾向がある。甕A₁大（B 722・17）は口径25~35cmを測り、直線的に外傾する長い口縁部が付く。甕A₂中（B 451・18）は口径18cm前後を測り、口縁端部が若干肥厚して面を成す。甕A₃大（359）は口径34cm前後を測り、直線的に外傾する短い口縁部が付く。甕D₁（B 165・20・21）は口径15~18cmを測り、口縁端部が上方へ

拡張されシャープな受口状口縁を作り出す。B 165の肩部への範刺突文は唯一の文様表現である。壺D₄中（B 73・22）は口径17cm前後を測り、シャープさのない肉厚の受口状口縁甕である。壺D₄中（B 3・23・24）は口径16~17cmを測り、丸みのある受口部が斜め外方にのびる。受口状口縁甕は河内・和泉・大和・攝津でも認められる形態だが、紀伊に多く見られる。

高杯にはA₁・A₂・A₃・A₄・A₅・E₄・Fがある。高杯A₁（39）は脚台部と杯部を連続的に成形し、円盤充填する。高杯A₂（223）は口縁端部に狭い面を成す。高杯A₃（B 173・34）は口縁端部が僅かに屈曲して水平面をもつ。高杯A₄（B 5）は口縁端部がシャープに納まる。高杯A₅（35）は口縁部の外傾度が著しい。高杯Aは全般に直線的に外傾する体部に直線的な口縁部が続く。口縁部長と体部長の比率は段階を追う一つの目安となり、第Ⅰ期の高杯Aは1:4から1:3と、口縁部がかなり短い。高杯E₄（38）は深手の椀形の杯部が付く、高杯A₁同様連続的な成形とみられる。高杯F（B 4）は浅い楕形の杯部が付く。両形態共に、脚台部を杯部に挿入し、中空部を円盤充填して埋め込んでいる。本期以後一般化する技法である。第Ⅰ期の高杯脚台部には、脚台A・B・Cの壺端部に面を成すものが主体となる。また壺部に段のつく脚台H（B 55）が出現している。

鉢にはB・C・F・Hがある。鉢B（56~58）は底部が著しく突出する小型品である。鉢C（60）は突堤間に棒状符文を付加する。鉢F（59）は粗雑な作りである。鉢H（69）は体部下位で屈曲して立上がる第四様式的な形態である。

器台にはA₁・A₂・B・Cがある。器台A₁（B 16・71）は中型の器体に垂下する口縁部が付く。器台A₂（6）も大型で、斜め下方に開く口縁垂下部が付く。器台B（167）は鼓状の形態を呈し、範描による直線文帯と刺突文帯が交互に配された装飾が豊かである。本例は弥生I下層出土であるが、第Ⅰ期の形態・文様構成をもつ。器台C（B 179・70）は口縁部が屈曲して外方にのびる。

蓋にはA₂・A₃・Cがある。蓋A₂（65）は著しく突出する摘み部が付く。蓋A₃（64・67）は突出気味の摘み部から直線的な壺部が続き端部に面を成す。蓋C（68）は円盤状を呈し紐穴が穿たれている。

第Ⅱ期

第Ⅱ期の器種構成は前段階とあまり変化がなく、各器種内での分化が続く。形態上、第Ⅰ期との判別がつかないものもある。壺には前段階から分化した各形態が続き、主体となる広口壺のみに凹線文や擬四線文が残る。長頸壺は口縁部が外反するものが始め、体部が球形に近いものもある。壺は口縁部形態に新たな一形態が加わり、安定した組成を示すようになる。高杯は形態差が顕著になり始め、皿形のものは口縁部が外反するものが現われ、脚台部が開き始める。鉢は三形態に落ち着く。器台には広口壺と同様の垂下部が貼り付けられるものに、装飾性に富むものがある。蓋はこの段階でも多く見受けられ、三形態がある。

第Ⅱ期の資料は、船岡山遺跡SB02・SB03・SB09・SB10上部・SK 103・SK 235・SK 634・弥生I下層・弥生IIの大部分・黄色弱砂質土・淡黄褐色粘質土の一部・佐野遺跡・血縄遺跡・橋谷遺跡・滝ヶ峰遺跡D58地点の一部・同Cトレ溝状遺構の一部などから出土している。

広口壺は口縁端部が大きく垂下するものが少なく、全体に短くなる。器形の全体を窪めるものは少ないが、口縁部の形態に顕著な差が認められる。広口壺にはB₁・C₂・D・E₁・E₂・F₁・F₂・Iがある。広口壺B₁（212・336）は口縁部端面に竹管文・貼付符文が施される。広口壺C₂（88・89・197）はシャープさが残るが、口縁部が薄くなる。広口壺D（K 190・86）は短い頭部に巻き込むように外反する口縁部が付く。広口壺E₁（83・85）は直線的に外傾する短い頭部に屈曲する口縁部が付く。広口壺E₂（87・90）は外反する長い頭部に屈曲する口縁部が付く。広口壺F₁（330）はシャープな断面三角形の垂下部が付く。広口壺F₂（K 191）は頭部の屈曲が明確でシャープな垂下部が付く。広口壺I（73）は口縁部の肥厚が小さい。以上のように、小型の形態が増加する傾向にあり口縁部の形態にも差が認められ、大半は口縁部上端に粘土紐を付加して垂下部を作り出す。第Ⅰ期に比して、断面三角形状を呈するものが多い。文様も各種の組み合せがあり、本来の凹線文と共に

擬凹線・退化凹線が多用され、竹管文・貼付符文・兜刺突文などと組み合わされる。長頸壺にはA₂・B・Dがある。長頸壺は第五様式を通して最も多く見られる段階である。長頸壺A₂(B715・95)は球形の体部に緩やかに外反する口縁部が付く。長頸壺B(96)は直線的な口頭部で壠部は丸く納まる。長頸壺D(B59・93)は長頸壺A・Bに比して太い口頭部が付く。太頸壺(B677)、無頸壺(B444・101)は第Ⅰ期同様に稀少例である。脚台付壺(B341・K192)は第Ⅰ期より増加しており、脚台付細頭壺(B439)が出現している。また、手捏ねが多い。

甕は第Ⅰ期同様に大・中・小関係があるが、大型は減少する傾向にある。甕にはA₁中・A₁小・A₂・B₁・B₂・C・D₁大・D₂中・D₃中があり、口縁部の形態に顯著な差がある。また、形態では、D類が最も多く、A類・B類・C類の順となる。甕Bは体部径が口径を凌駕するものと、その逆の二者がある。甕A₁中(102~104・203)は口径15~20cmを測り、中には口径が体部径を凌駕するもの103・106が現れる。甕A₁小(B338)は口径9cm前後を測る。甕A₂(B616)は口径15cm前後を測る中型品に限られる。甕B₁(105・107)は口径16~17cmを測り、内面の粗い箝削りが目立つ。甕B₂(218)は口径14cmを測り、長胴の体部をもつ。甕B₃(221)は口径14cmを測り、体部の張りが弱い。甕C(B92・171)は口径14~17cmを測り、口縁端部が上方に僅かに肥厚する。甕D₁大(B723・206)は口径24~30cmを測り、第Ⅰ期の甕D₂中の口縁形態に類似する。甕D₂中(108)は口径16cm前後を測り、口縁端部は丸く納まり擬凹線が失くなる。甕D₃中(109・111・124)は口径15~18cmを測り、肉薄の短い受口部が付く。口縁部にはシャープさが残る。

高杯にはA₂・A₃・A₅・B₁・B₂・E₂があるが、当期のB類はあくまでA類からB類への過渡期のものである。高杯A₂(B432・134・135・141)、高杯A₃(136・137)、高杯A₅(B95)が主体となり、過渡期とみられるB₁(K34・138)、高杯B₂(B94・139・140)が補足的な位置を占める。口縁部長と体部長の比率は1:3から1:2.5と、口縁部長がまだ比較的短い。当期では楕形の高杯E₂(B96・222)があり目立たない存在となっている。第Ⅱ期の高杯脚台部には脚台A・B・C・Hがある。脚台C(149~151)は脚部が大きく開く形態のものであるが、当期ではまだ開きが小さい。

鉢は第Ⅰ期に比してさほど多くなく、体部が屈曲する鉢Hは消失する。鉢にはB・E・Gがある。

器台にはA₁・A₂・A₄・B・C・Dがある。器台にも甕同様大小関係があり、大型のA₁(76・80)は口径32~33cm、中型のA₂(81)・A₄(K31・77)・C(162)は口径21~25cmを測り、両者共に口縁部の加飾が豊かである。小型のD(163)は口径13cmを測り無文である。

蓋は目立つ存在で、A₃(127~130)・B(125)、円盤状を呈するC(126)がある。第Ⅰ期からの形態変化は僅かである。

第Ⅲ期

第Ⅲ期の器種構成は前段階とあまり変化がなく、各器種内の分化も一応定着したように見える。甕の各形態では太頭壺が消失し、甕そのものの比率も前段階に比して減少している。広口壺の一部に擬凹線や退化凹線が施されるが減少傾向にある。無頭壺に脚台部の付くものが目立っている。甕は第Ⅱ期からの四形態が続き、細部に退化現象が現われる。鉢は前段階とあまり変化が認められない。高杯は皿形が増加している反面、楕形が一時減少している。皿形のものは口縁部が長くなりつつあり、体部と口縁部の境が不明瞭なものが始める。器台も無文になる。蓋は依然として見受けられる。

第Ⅲ期の資料は、船岡山遺跡S B04・S B10・S B10覆土の一部・S B11・S K 165・S K 196・S K 241・S K 649・淡黄褐色粘質土の一部、血縄遺跡、瀬ヶ峰遺跡Cトレ溝状遺構の一部などから出土している。

広口壺は口縁部の形態に前段階ほどの差が認められない。広口壺にはB₁・F₁・G・H・I・Jがある。広口壺B₁(69・70)は第Ⅰ・Ⅱ期に比して口縁垂下部が丸く短くなる。広口壺F₁(71)は口縁垂下部のシャープさが失くなる。前二者は、当期では稀少例となる。広口壺G(K188・233)は球形の体部から外反する口頭部に

厚い口縁部が付く。口縁垂下部は外傾もしくは内傾する。広口壺H(B710・K137・198)は器壁の厚い内傾する口縁部が付く。端面は強い横方向の撫でにより凹むもの(B710・198)がある。広口壺I(B214・K68)は口縁端部が若干肥厚する。広口壺J(196)は直立気味の頸部に屈折する口縁垂下部が付く。第Ⅲ期には広口壺Iのように口縁端部の垂下部の貼付が省略されるものが始め、文様そのものも無文化の傾向にある。長頸壺にはA₂・Dがあるが、量的に減少している。長頸壺A₂(K48・282)は前段階に比して大型の器体をもち、球形の体部から外反する口縁部が付く。K48は一時期遡る可能性もある。長頸壺D(B621・B717)は口縁部長が前段階より短くなり、短頸壺に近似する形態となる。短頸壺(K211)は体部に比して太い口縁部が付く。脚台付無頸壺(201)・脚台付壺(B496)は脚台部に体部の形態が一定しないものが組み合わされる。

壺は大型が減少し、前段階までの中・小型が主流となる。壺にはA₁中・A₂小・A₂・B₁・B₂・D₂中・D₃があり、A類が減少しD・B類が主流となる。また、形態では体部最大径が上位にあるものが多く、底部は壺同様径の小さいものが増加し不安定な形態になるものが多い。壺A₁中(B149)は口径21cmを測り、口縁部が長く体部径が口径とほぼ等しくなる。壺A₁小(299)は口径13cmを測り、体部は丸みを帯びる。また、体部の形態の全く異なるB721もある。壺A₂(K74)は口径20cmを測り、口縁部の器壁が厚い。壺B₁(205)は口径17cmを測り、体部の成形は三分割による分割成形技法が認められる。壺B₂(B720)は口径14cmを測る小型である。壺D₂中(B531・K72)は口径15~17cmを測り、受口部が薄く短くなる。壺D₃中(K160)は口径16~20cmを測り、シャープさに欠ける口縁部がつく。壺D₃(K213)は口径18cm前後を測り、体部下半に古い技法としての箝削りが施される。壺D類は口縁部が薄くなりつつ斜め外方に拡張され、本来の受口状から形態を異にする。

高杯は本期でも楕形が目立たない存在である。脚台部と杯部の接合部になる基部は、前段階までに比して縮まりのあるものが増加し、逆に裾部が開くようになる。比率的にはA類が激減し、主体となるB類が激増する。高杯にはA₂・B₁・B₂がある。高杯A₂(B499)は前段階に比して丸みをもつ。高杯B₁(B498・B719・K76)は未だ体部が直線的で、立上がりの強い外反する口縁部が付く。B719は大型の稀少例である。高杯B₂(B157・B497)は体部と口縁部の縦線が緩く、体部も内寄気味である。口縁部長と体部長の比率は、高杯B₂では1:3から1:2.5と前段階の高杯A類ときほど変化せず、高杯B₂では1:2.5前後で口縁部が若干長くなりつつある。

鉢は器體に対して底部の大きく突出する鉢B(B697・B698)が目立つが、前段階よりは減少している。口体部が直線的な鉢A₂(K87・K89)の中には、鉢Bの底部と類似するK88も見受けられる。その他、湯呑み形の鉢E(B321)も存在するが稀少例である。

器台はAが僅かに残存し、主体は小型で無文の器台A₂(246)・A₄(195)に変化する。

蓋は円盤状の蓋Cが僅かに残存し、突出する摘み部に大きく開く裾部が続くA₁(B291)・A₂(B519)がある。

第Ⅳ期

第Ⅳ期の器種構成は、前段階の器種構成から蓋が激減する。各器種の内、壺・鉢に再び分化が認められる。壺の各形態では長頸壺・無頸壺が減少し、反面、短頸壺・脚台付細頸壺が増加する。また、新たに広口長頸壺が出現する。器體の大きさも大型のものが減少している。壺は第Ⅲ期からの四形態が続くが、形態により増減が認められる。高杯は相変わらず楕形が減少したままで、皿形が主体となっている。皿形は口縁部が長くなり、外反度が強くなると共に体部と口縁部の接ぎ縫が緩やかになる。脚台部に段をもつものが遺存し、脚台基部が中実になったり、標部が内弯するものが出現する。鉢は底部の突出する小型のものが減少し、代って口縁部が屈曲する大型の鉢が出現する。器台・蓋は資料的に少ないが続いている。

第Ⅳ期の資料は、船岡山遺跡S B01-C・S B07・S B08・S B10-C・S K 228・S K 236・S K 659・黒色弱粘質土、血縄遺跡、佐野遺跡、滝川峰遺跡Cトレ溝状遺構^{註33}一部、亀川遺跡第4次第IV・V層の一部、^{註34}富安I遺跡溝3の一部などから出土している。

壺は形態上前段階より粗雑となり、次段階ほど多くないが垂下部を付加しない貼付が省略されるものが多

くなる。また、体部に施磨きせず叩き痕跡を残したまま仕上げてしまう壺が見え始め粗雑化の一因を荷負っている。広口壺は資料的にはさほど多くないが、D・G・H・Kがある。広口壺D(B372)はG類に近い形態を有している。広口壺G(254・255)は粘土紐の貼付けが薄く、垂下部が小さくなる。口縁端面には依然として凹線文の遺存するものがあるが、主体は擬凹線・退化四線に変化している。広口壺H(257)は形態変化が少ない。広口壺K(K128)は、本来、短頸壺ないしは太頸壺に含めるべきものである。広口長頸壺(B215)は筒状の太い頸部に、屈曲して外反する口縁部が付く。長頸壺C(169・296)は口頸部の粘土紐痕跡や粗い刷毛調整に粗雑化が現われる。口縁部と体部径がほぼ等しく、口頸部も比較的短くなる。短頸壺は新たに二形態が出現し、球形の体部に外反する口縁部が付く短頸壺C(B495)、口縁部の上位で屈曲して内弯する短頸壺B(B523)がある。口縁部が直線的にのびる短頸壺A(B490)は、第V期以降連続する。脚台付細頸壺(B10・B373・B374)は二形態が存在し、粗雑化の中にあって極めて丁寧に作られる。脚台部と体部の接合は高杯のそれと同様である。無頸壺は量的に少ない。

壺は大型が稀少例となる。壺にはA₂・A₃中・B₄・D₃中・D₅小・D₄中・D₅があり、D類の主流的な位置に変化がない。D類にはシャープさが消失し、退化現象が著しい。壺A₁(B525・258・260)は口径14~16cmを測り、頸部が丸みを帯びる。壺A₃中(B388)は口径21cmを測り、外面は板撫でされる。壺B₄(B377)は口径12cmを測る小型である。壺D₃中(B422)、D₄中(B421・K219)、D₅(B423・K222)は口径16~19cmを測り、受口部が更に薄くなるものが多い。外面の叩き方向は水平方向より斜め右上がりが多いようで、下部を施削りする技法が僅かに残る。また、前段階を含めて分割成形技法が顕著にみられる。

高杯はA類が稀少例として遺存する程度で、B類が主体となる。高杯にはB₁・B₂・B₃・C・D・Gがある。前段階には高杯B₂を主体としてまとまりのあったのに対し、当期では一応高杯B₃を主体とするが分化が見られまとまりのないものになる。高杯B₁(B379・B727)は体部が内弯するようになる。高杯B₂(B534)は形態としてはさほど変化は認められない。高杯B₃(B158・B728)は口縁部が長く、外反が著しい。高杯C(B357・B378)は口縁部が肥厚し直線的に立ち上がる。高杯D(K11)は第五様式の中にあっては異形を呈している。高杯B₃・C・Dは当期を初現とする。高杯G(B407~B409)は口縁部が内弯する楕形の杯部に据部の開く脚台部が付く。G類の中でも若干の相違が認められる。口縁部と体部長の比は、高杯B₁・B₂では1:2.5から1:2と若干長くなる。高杯B₃では1:2となり全体に長めである。第IV期の高杯脚台部には脚台B・C・D・Hがあり、短脚のK154も見受けられるようになる。

鉢は量的に決して多くはないが、第五様式内での大方の形態が出揃う。鉢にはA₁・A₂・B・C・D₁・D₂・D₃・E・G・Hがあり、A・D類が主体的な位置を占め、その他は補助的となる。外面の調整は鉢A₁(B381・B382)、鉢A₂(B380)、鉢B・E・G・Hでは施磨き・指撫で・板撫でが加えられる。また、鉢D₁(B541・K220)、鉢D₂(K215)、鉢D₃(B537・B539)は叩きもしくは板撫でが加えられる。K101は手焼り形土器の祖形と考えられ、從来考えられていたよりも一時期古く置くことができる。

器台は小型の無文のA₂(356)、A₄(247)がある。壺にはA₂(271)、A₃(269・270)がある。

第V期

第V期の器種構成は前段階を境として、第五様式の中では最も大きな画期を迎える。高杯が半減し、代って鉢が倍増する。新たに二重口縁壺と手焼り形土器が出現する。広口壺は垂下部が付加されないものが一般的で垂下面をもつものでも貼付ではなく捻出した程度のものである。大型のものがなくなり体部も球形を呈する。体部の外面は叩きを施したまま仕上げとなるものが多く、前段階まで壺と壺、鉢の判別が可能であったものが判別不能となるものが多い。内面の粘土紐の接合痕も顕著に残り、粗雑化が目立つ。器体も更に小型化したものが出現する。広口長頸壺は短命に終っており、本期まで続くものと考えられる。長頸壺は本期を最後に、本来の形態のものが姿を消す。二重口縁壺は資料に欠けるが、口縁部の装飾性に富むものが存在する。短頸壺・

脚台付細頸などもある。甕は受口状口縁甕が激減し、他の形態にも変動が生じる。甕Bは口縁部が外反するものの、内弯するものと前段階以来の端部が丸く納まるものが主流を占める。口縁部の成形は、口縁叩き出し手法が一般化し、端部に刻目の施されるものが多く出現する。当期以降、口縁端部に面を成す甕Aが再び増加し、甕Bに近い比率を占める。本期では下半部を削り切る技術はみられない。底部は鉢を含め突出するものが基本となり、外底がドーナツ状に凹むものが多い。いわゆる底部輪台技術が盛んになるのも本期以後である。高杯は半減する中で、再び形態の分化が認められる。主体は皿形だが、椀形が増加する。高杯Bの口縁部長と体部長の比率は1:2から1:1.8と平均的には第Ⅳ期より口縁部が長くなる。椀形では口径と脚台幅部径がほぼ同じもの、杯部高と脚台部高がほぼ同じものがある。また、口縁部に擬凹線の施されるものが見られる。鉢は大小関係のある三形態が存在する。本期の鉢の激増は畿内全域より一時期遅れ、高杯の激減と関連した鉢々器の変化である。器台・手培り形土器は資料的に少ない。

第Ⅴ期の資料は、西ノ庄遺跡第2次1号住居跡、鬼川遺跡第4次第Ⅳ・V層の大部分、井辺遺跡第一土器列^{註⑩}の一部、東田中神社遺跡S B^{註⑪}、富安I^{註⑫}遺跡溝3などから出土している。また、西田井遺跡・田屋遺跡に良好な資料がある。

第VI期

第Ⅴ期の器種構成は前段階とさほど変化がなく、各器種の形態も前段階の延長上にある。壺では二重口縁壺が増加すると同時に、個別に形態名称を与えるのが多くなっている。第四様式以来の系譜をひく無頸壺は本期を最後に姿を消す。広口壺は、全般に球形の体部に突出した底部がつく。口縁端面の幅の広いものには、擬凹線や対刺突文が施される。二重口縁壺は口縁部の加飾が豊かで、擬凹線・竹管文・貼付符文・刻目などで飾られる。甕は前段階と判別がつき難いものが多い。前段階で減少した甕Dは稀少例として残存するのみである。紀南では小さな脚台部を付すものが出現している。甕は体部が球形に近付くものと胴長になるもの認められる。前段階同様ドーナツ底が多く、底部輪台技術が一般的となる。口縁部の刻目は甕全体の約30%を占める場合があり、次段階の庄内式併行期の前半にも通用されている。高杯は皿形・椀形・段皿形があり、皿形（高杯B）が主体をなす。口径・器高の著しい小型化と共に、脚台高も低くなり扁平なもの多見され、脚台基部の中実化や脚部の内弯傾向が確実に進行する。口縁部長と体部長の比率は1:1.5から1:0.8と口縁部と体部の長さが逆転するものが現れる。椀形の中には杯部が半球形を呈し、脚台部が緩やかに外反するワイングラス形の形態が出現し、庄内式併行期で一般化する。鉢は前段階のものをそのまま受け継ぐ形態変化の少ないものとなる。形態上、前段階との区別は困難であるが、内弯が緩くなるようである。器台は小型化したものがあるが少ない。手培り形土器・蓋もあるが、資料的に少ない。

第VI期の資料は、井辺遺跡第一土器列の大部分、鬼川遺跡A地点第1溝・同第5次土器溝C・同土器溝り^{註⑬}B・同S K04、野田地区遺跡4区C・D地区灰色粘土・田殿・尾中遺跡3区溝2下層・中層、笠嶋遺跡の一部、紀伊阿須賀神社遺跡などから出土している。また、秋月遺跡井戸^{註⑭}、西田井遺跡に良好な資料がある。

以上、船岡山遺跡出土の弥生土器を基軸に6小間に編年付けようと試みたが、各々の小間は第Ⅰ期一西ノ辻I式、第Ⅱ期一西ノ辻E(D)式の古相、第Ⅲ期一西ノ辻E(D)式の新相、第Ⅳ期一西ノ辻E(D)式の最新相ないし寺沢氏の4期・様式4の一部、第V期一上六万寺式、第VI期一北鳥池下層式の一部にはほぼ対応させて考えることが可能である。しかし、現状では一括性に富む資料が少ないため、多分に型式的な側面を利用してしての羅列に終ってしまった部分もある。今後、個々の形態の変遷を把握することが、畿内との対応に課せられた問題であろう。また、本稿では成し得なかったが、将来的には各々の画期に即して再編する必要がある。従来、庄内式併行期として扱ってきた資料は、土器のみでみた場合紀伊では在地色が強く土師器とするよりは、弥生土器の延長と考えた方がよりスマーズである。なおかつ、庄内式併行期と布留式併行期の間にみられる画期の方がより大きなものであったと考えられる。弥生時代から古墳時代への変化については、期を改めて別稿を用意したい。

(2) 石器

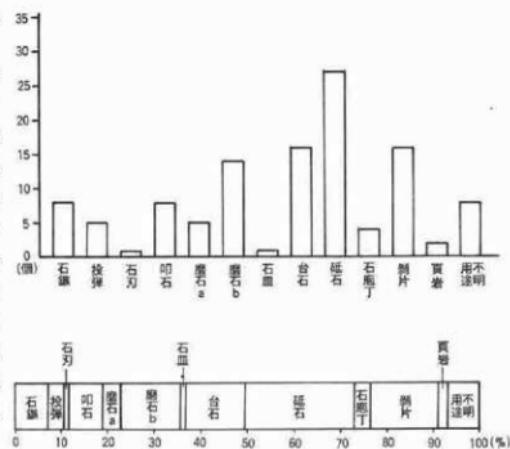
弥生時代の石器を資料化する方法として、縄文時代の遺物と同様にブロック別組成表と分布図を作成した。ブロック別組成は各住居跡・2棟毎の住居跡を含む地区・落ち込み状地形・E W00以東に区分して表示した。表中の用途不明石器は楕円形座のみの数量を表わしている。各住居跡での出土状況は、住居の存続期間・規模に比例して多く、2棟毎の住居の配置の内、SB01・SB03・SB05・SB07・SB10が石器保有で優位にある。また、組成からみればSB01を除く全ての住居に台石が存在し、SB02・SB03・SB05・SB10には食物調理器具としての磨石がセットとなる。このことは各住居において個別に食物調理が成されたと考える一因に

遺構地区名	石 刀	槍 矛	石 刀	叩 石	磨石 a	磨石 b	石 皿	台 石	石 器	石 磨	石 磨丁	刮 削 片	貝 器	用途不明	合 計
SB01	2	1	1		1	1						1	1		8
SB02	1					1		1	1						4
A 地区	W300~W240					1			2	2	1		1		7
B 地区	W240~W180	4		3		1	1		4	2	3	1	4		23
SB03				1		3		1	2		1				8
SB04								2							2
C 地区	W180~W140					1			1			1		1	4
SB05					1	2		3	1			1			8
SB06								1	1						2
SB07					1			1	4						6
D 地区	W140~W90		1						1						2
SB08								2				1			3
SB09								1					1		2
E 地区	W90~W45				1		1					4			6
SB10		1			1	2	1		3	7		2	1		18
SB11									1	1					2
F 地区	W45~EW00		2		1	1	2			2		1			9
G 地区	EW00~E60		1												1
合 計	8	5	1	8	5	14	1	16	27	4	16	2	8		115

第19表 弥生時代石器ブロック別組成

なる。磨製石器・鉄器の研磨に使

用されたと考えられる砥石は、E地区を除く地区に分布し、磨製石器・鉄器の分布に合わないが何れかの研磨が成されたと見るべきである。これらの中にあって、SB10では調理具の他砥石a類・b類が多く、用途不明石器の内棒状砾の大半がSB10から出土している。当初、棒状砾はSB09・SB05で出土数の多い紡錘車と併せて用いられるものと考えたが、SB05に棒状砾の出土がないため否定せざるを得ない。打製石器は少ないが、A地区的SB01・SB02からの4点の出土はB地区的住居から遊離した石器をも含め意義深い。



第20表 弥生時代石器組成表

それは、第Ⅰ期・第Ⅱ期に位置付けられる住居・遺物包含層からの出土であり、打製石器が第Ⅲ期まで使用されていた事例となる。また、石庵丁^{註5}についても同時期に位置付けられるため、第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけて鉄器の普及が著しく進行したと考えられる。S B08・S B09では台石が存在するため食物調理が成されたと考えられるが、E地区全体においても砥石の出土例がなく集落の中で従的な位置を占めるものと考えられる。石器組成と土器の数量・器種構成が比較的合致する住居として、S B04・S B06・S B08・S B09・S B11があり、石器保有で優位にある住居に対して従的な位置を占める可能性が強い。

以上のブロック別組成を集落全体の石器組成でみた場合、狩猟具（石鎌・投弾・石刃）・農具（石庵丁）・食物調理加工具（叩石・磨石・石皿・台石）・工具加工具（砥石）・その他に区分して割合を算出したのが第20表である。その内、その他を除いた割合は狩猟具15.7%（全体から砥石を除いた割合22.6%）・農具4.5%（6.5%）・食物調理加工具47.4%（71%）・工具加工具30.3%を示す。縄文時代の石器組成・弥生時代の他遺跡との石器組成の比較は、統計資料の少ない県下の現状では今後の問題とせざるを得ない。一例として他地域の良好な資料を提示した東山遺跡報告例と比較してみる。東山例では総数107点に対して狩猟具43.9%（53.4%）・農具1.9%（2.3%）・食物調理加工具42.1%（51.1%）・工具加工具12.1%を示す。東山例では弥生時代中期中葉から後期に至る石器を一括しているため、船岡山例より狩猟具が多く、工具加工具が少ないものと考えられる。また、より多くの鉄器の存在を考えるのであれば工具加工具（砥石）を含めて考えるべきである。これらを加味したとしても、船岡山例は狩猟具が少なく、工具加工具の比率が高い。今後、既往の調査を含め、時期別に石器・石器組成の変化を詳細に検討する必要がある。その点で会下山遺跡・四分遺跡報告例があり、船岡山例に対応するものを数えて挙げれば会下山例に近い比率を示すことになる。四分例では食物調理加工具が欠落しており、食生活の一端を垣間見ることができない。石器組成を通して、船岡山例が一般集落・高地性集落との差異を見い出しえるには、時期別と共に地域間での在り方をも検討しなければならない。

尚、石器の石材はサヌカイトを除けば、全て紀の川の河原で採集できるものである。砥石の石材の内、石英斑岩は河原でも採集できるが、量的にみて原産地からの入手も考慮しなければならない。打製石器の製作はその数量と剥片が少ないが、一応集落内で製作したとみられる。ただ大型の剥片・石核の出土が全くない。

（3） その他の遺物

装身具 装身具の出土はS B07・S B10の2例に限られる。出土住居は各住居の中にあって石器保有の優位にある住居である。県下での弥生時代の装身具の出土例はきほど多くないが参考までに列挙しておく。和歌山市北田井遺跡^{註6}・岩出町吉田遺跡^{註7}・橋本市血縄遺跡^{註8}・かつらぎ町佐野遺跡^{註9}・有田市糸我中畠遺跡^{註10}・日高町向山遺跡^{註11}から出土例が報告されている。その内、北田井例は中期に遡る資料である。吉田例は工房と考えられる住居跡から多量に出土している。北田井例以外は全て弥生時代後期に属する資料である。県下において、中期後葉に一集落内的一部で小規模に工作りが行なわれ、後期に紀北・紀中に広がりを見せるが、他地域に比して工作りそのものが後進的で小規模である。

鉄器 鉄器の出土は、落ち込み状地形の遺物包含層と住居跡に分かれる。住居出土の鉄器は、石器保有の優位にあるS B10と石器保有・土器量において従的な位置にあるS B06に限られる（S B01は覆土第2層からの出土であるため除外する）。先に石器の項で記述した2棟毎の住居の主従関係に矛盾を強いる点もあり、鉄器そのものが遺存し難い事を考え合せば全ての石器・鉄器保有から見た主従関係が崩れる恐れもある。鉄器保有の意義は重要であるが、S B06では狩猟具・武器としての鉄器（鉄鎌）を保有していた事実に留めておきたい。

集落全体の中での鉄器は、第Ⅰ期・第Ⅱ期に出現しており、集落の形成段階で既に保有していたものと考えられる鉄斧（Y I 4）・刀子状鉄製品（Y I 7）・鉈（Y I 3）がある。石器との関係から見れば、集落形成段階から既に石器は激減し、鉄器化が進んでいる。畿内他地域の事例を見ても決して矛盾することはない。^{註12}また、第Ⅱ期から第Ⅲ期にかけての急速な鉄器化の進行は、県下の他遺跡の出土を検討しなければならない。

（註）

- 註① 県下の券生時代の住居跡は、岩出町吉田遺跡の重複の多さを除けば、比較的単純な構成を示す。特に後期においては、拡張・改築以外の重複は稀である。
- 註② 拡張と改築は建て替えと言う意味において同じであるが、拡張は同位置で窓穴の面積を拡大するのに対し、改築は窓穴の面積に変化がない場合に用いる。尚、主柱穴は、拡張では柱位置を変えるのに対し、改築では柱位置を変えないのが通常である。厳密には床面の貼り床なども状態が異なる。
- 註③ 岩田謙 「豊谷遺跡」 「広島県文化財調査報告」第14集 昭和58年3月 広島県教育委員会
岩田謙 「豊谷遺跡」 「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」（Ⅰ）昭和58年3月 広島県教育委員会・財團法人広島県埋蔵文化財調査センター
「石鏡橋現地踏査発掘調査報告・C地点」 昭和60年3月 広島県立埋蔵文化財センター
「須賀古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書」 昭和60年3月 財團法人広島県埋蔵文化財調査センター
「大橋遺跡群」 昭和60年3月 財團法人 広島県埋蔵文化財調査センター
- 註④ 佐野遺跡では、後期の窓穴住居跡は1例の扯幅を除くと重複例がなく、本遺跡と類似した配置を示す。方形住居は、船岡山第Ⅳ期に出現している。
- 註⑤ 吉田遺跡では、9棟の内4棟に拡張が見られ、本遺跡と類似した数値を示す。
- 註⑥ 西ノ庄遺跡では、第1号住居跡に拡張と改築が認められる。
- 註⑦ 亀川遺跡の窓穴住居は全般に小型が目立っている。
- 註⑧ 本稿に挙げた事例の他に、現在、調査中の和歌山市田屋遺跡・同西田井遺跡があり、船岡山第Ⅳ期から庄内式併行期にかけての集落である。両遺跡の円形窓穴住居は、大型住居に一般的な規模の住居が併せて集落を構成する形態をとる。全般に住居の規模は小型化の傾向にある。
- 註⑨ 炉場の週らされる住居跡は、南下ではからぎ町佐野遺跡・岩出町吉田遺跡・和歌山市宇森遺跡・同田屋遺跡・同西田井遺跡・同太田黒田遺跡・海南市亀川遺跡・磯崎町東郷遺跡などで検出されている。他地域では、和泉・揖津に多例があり、播磨・南河内でも少數例検出されている。
- 註⑩ 同時期の掘立柱建物跡と面積規模を比較してみると、決って大きな建物と言えない。
- 註⑪ 滝ヶ峰遺跡（和歌山市）出土遺物については、昭和46年度調査区の内、最も遺物量の豊富な遺構（Cトレンチ溝）のものを集計した。
- 註⑫ 橋谷遺跡（和歌山市）の調査の内、昭和51年度関西大学文学部考古学研究室調査資料を橋谷Ⅰとした。出土遺物は同大学米田文孝・山田隆一両氏の御配慮で実見させていただき、集計については両氏より御教示をうけた。
- 註⑬ 橋谷遺跡の調査の内、昭和52年度和歌山市教育委員会調査のものを橋谷Ⅱとした。出土遺物は大野佐千夫氏の御配慮で実見させていただき、全遺構・包含層をまとめて集計した。
- 註⑭ 植田法彦・前田敬彦 「龜川遺跡Ⅴ」 海南省文化財調査研究会・海南市教育委員会 昭和60年3月 提載の全文資料をまとめて集計した。尚、出土遺物は両氏の御配慮で実見させていただいた。
- 註⑮ 植田法彦・中尾憲市 「亀川遺跡Ⅵ」 海南省文化財調査研究会・海南市教育委員会・昭和53年3月・中尾憲市 「亀川遺跡Ⅶ・第Ⅳ次発掘調査概報」 同上昭和56年3月、註14の文献により集計した。
- 註⑯ 井辻遺跡（和歌山市）の調査の内、大野嶽夫 「和歌山市井辻遺跡の岡崎団地より出土の後期弥生式土器」 「古代研究」第51号 昭和43年4月 掲載の資料を井辻Ⅰとした。また、井羅徹ほか「井辻弥生式遺跡発掘調査報告」 「社会教育資料」24 和歌山市教育委員会 昭和40年3月 掲載の第一土器列・第二土器列土器資料を井辻Ⅱとした。
- 註⑰ 大野中遺跡（海南市）は、昭和59年度のわかやま市民生活協同組合集配所建設工事に伴う発掘調査資料について集計した。布留式併行期の資料は除外している。
- 註⑱ 渋谷高秀ほか 「田殿・屋中遺跡」 吉備町教育委員会 昭和57年3月 により集計した。
- 註⑲ 吉田宣夫ほか 「鳴神地区遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 昭和59年3月 によりJ地区S D204下層・同上層資料をまとめて集計した。
- 註⑳ 註⑲の文献により、J地区S D204下層・同上層、F地区S D094、H地区S D097、I-I地区S D204、J地区S X280、M地区S D128資料をまとめて集計した。
- 註㉑ 渋谷高秀 「野田地区遺跡」 「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 昭和60年3月 により4区溝10、溝9、溝8、C・D地区灰色粘土、D地区黑褐色粘土、C地区黑褐色粘土、C地区灰色粘土、D地区灰色粘土・青灰色砂質土、C・D間セクション・混入・表様資料をまとめて集計した。
- 註㉒ 吉田宣夫 「市舎遺跡発掘調査概報」 和歌山県教育委員会 昭和49年3月
- 註㉓ 松田正昭 「東田中神社遺跡発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 昭和56年3月
- 註㉔ 註㉓の文献と同じ。
- 註㉕ 笠井保夫 「滝ヶ峰遺跡発掘調査概報」 和歌山県教育委員会 昭和47年3月、藤井保夫・大野嶽夫 「紀伊」 「三世紀の考古学」 学生社 昭和58年6月
- 註㉖ 久貝健 「富安Ⅰ遺跡発掘調査概報」 御坊市教育委員会 昭和57年3月

- 註④ 畿三郎・久貝健 「亀山遺跡」 「御坊市史」第三巻 史料編 御坊市史編さん委員会 昭和56年3月
- 註⑤ 註③、註⑥に同じ。橋谷遺跡資料には、船岡山遺跡より古い様相を示す土器群があり、弥生時代後期にあって最も古く位置付けられる資料である。
- 註⑥ 上田秀夫・松村重貴 「佐野遺跡発掘調査概要」 かつらぎ町教育委員会 昭和52年3月、笠井保夫 「佐野廃寺発掘調査概報」 和歌山県教育委員会・社団法人和歌山県文化財研究会 昭和52年3月、藤井保夫 「佐野遺跡発掘調査概報」 かつらぎ町教育委員会 昭和58年3月、また、昭和56年度調査による集落縁辺部の3区自然落込み(河岸段丘落ち)資料を、藤井保夫氏の御配慮で実見させていただいた。
- 註⑦ 笠井保夫 「血縄遺跡緊急発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会・橋本市教育委員会 昭和48年3月、松下彰・小貫直樹 「紀の川用水水路予定地内遺跡発掘調査」 「紀の川用水建設事業に伴なう発掘調査報告書」 和歌山県教育委員会 昭和53年3月
- 註⑧ 註⑨の文献に同じ。
- 註⑨ 註⑩の文献に同じ。
- 註⑩ 村林浩ほか 「西庄地区遺跡発掘調査概要Ⅱ」 和歌山県教育委員会 昭和54年3月
- 註⑪ 中尾憲市 「亀川遺跡第Ⅲ、第Ⅳ次発掘調査概報」 海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会昭和56年3月
- 註⑫ 註⑬の文献に同じ。
- 註⑬ 註⑭の文献に同じ。
- 註⑭ 昭和60年度調査資料を、調査担当の上田秀夫氏の御配慮で実見させていただいた。
- 註⑮ 昭和56年度から昭和59年度調査資料を、調査担当の山本高照氏の御配慮で実見させていただいた。
- 註⑯ 植田法彦・中尾憲市 「亀川遺跡発掘調査概報」 海南市文化財調査研究会・海南市教育委員会昭和53年3月
- 註⑰ 註⑱の文献に同じ。
- 註⑱ 註⑲の文献に同じ。
- 註⑲ 安井良三ほか 「笠嶋遺跡」 笠嶋遺跡発掘調査報告書刊行会 昭和44年3月
- 註⑳ 望月豊弘ほか 「紀伊阿須賀遺跡 第3・4・5次発掘調査」 新宮市教育委員会 昭和57年3月
- 註㉑ 昭和60年度調査資料を、山本高照氏の御配慮で実見させていただいた。
- 註㉒ 鹿江門也・菅原正明ほか 「東山遺跡」 大阪府教育委員会 1979年3月での呼称を使用し、本項では卯石・磨石・石皿・台石を食物調理加工具、石鏟・投弾・石刃を狩猟具、石庵丁を農具、砥石を鉄器・磨製石器の研磨に使用する工具として分類した。
- 註㉓ 砧石に残された研磨痕(擦痕)により、部分的な研磨を行なった小型の砥石・研磨溝の付く大型の砥石・幅の広い研磨を行なった全体に亘る大型の砥石に分類できる。
- 註㉔ 現状では、既往の調査で統計処理のされた資料がない。弥生時代中期末から後期前半にかけての横谷遺跡・滝ヶ峰遺跡・血縄遺跡でも少量の打製石器と共に磨製石器・その他の石器が伴うが、後期後半にあたる田屋遺跡・西田井遺跡・亀川遺跡・佐野遺跡では殆どどの石器が消滅している。
- 註㉕ 註㉖の文献に同じ。
- 註㉖ 註㉗の文献、第Ⅱ章2.C「石器の組成と生活形態」
- 註㉗ 西弘海 「石器の器種構成とその意義」 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅲ」 奈良国立文化財研究所 1980年3月 と註㉘において主要遺跡全体の石器組成を統計処理されており、大筋において大過ないものである。石器組成の点から高地性集落の特質を抽出するには、土器の器種構成同様に同一地域における同時期の高地性集落・低地性集落・それに前後する集落の資料を比較することにより生活形態の復元が可能となる。このことより、高地性集落の特徴の有無が明確となる。
- 註㉙ 村川行弘・石野博信 「食下山遺跡」 芦屋市教育委員会 1964年3月
- 註㉚ 註㉛の文献に同じ。
- 註㉛ 藤丸詔八郎・笠井保夫 「和歌山市北田井遺跡発掘調査概要Ⅱ」 和歌山県教育委員会 1971年3月
- 註㉜ 林博道・辻林浩 「吉田遺跡第2次調査概報」 和歌山県教育委員会 1971年3月
- 註㉝ 註㉞の後者の文献に同じ。
- 註㉞ 昭和59年度調査担当の當加見泰彦氏より御教示をうけた。
- 註㉟ 畿三郎 「糸我の弥生式土器」 「糸我山万葉吹奏会記念して」
- 註㉟ 註㉞の文献に同じ。
- 註㉞ 県下の弥生時代の鐵器は少量であるが、和歌山市橋谷遺跡・同滝ヶ峰遺跡・同北田井遺跡・同田屋遺跡・同西田井遺跡・橋本市血縄遺跡・海南市亀川遺跡に出土例がある。中期後業の龜川例を除けば全て後期初頭から末に位置付けられる資料である。少ないながらも鐵器の普及は畿内同様後期になって普遍化するようである。

第3節 古墳時代の遺構・遺物

古墳時代の遺構は、方形竪穴住居跡1棟と当時においても凹地化していた落ち込み状地形である。遺物も少なく、その全体像を解明するには無理な点が多過ぎる。

1. 遺構

古墳時代の方形竪穴住居跡は、出土遺物から布留式併行期に位置付けられる。弥生時代の集落からすれば、かなり長期の断絶が存在し、再び住居が構築されることになる。遺構の検出面は弥生時代のそれと同一面であるが、弥生時代の方形竪穴住居跡同様に床面が浅く掘削面が更に上層に存在し削平されたか、或は円形竪穴住居から方形竪穴住居へ変化する過程の中で住居そのものの構造に変化が生じた結果であるか、何れにしても全体の遺物量から見ても他に遺構の存在する可能性が低い。それ故に、古墳時代の住居は集落としての機能を持ち得ない存在であったと考えられる。^{註①}

住居跡は、若干長方形を呈し面積20.2m²を測る小型の住居跡である。主柱穴の他に棟持柱の構造をもつ2本の柱穴があり、床面の有効面積はかなり狭小である。出入口はP2-P3間の南側に推定でき、縦長の土塙は出入口に伴う施設と考えられる。住居跡は覆土・炭化材・焼土の状況から、焼失して廃棄されたものである。

2. 遺物

古墳時代の遺物は、極めて少量で図示した物に限られる。住居跡に伴う遺物は(C1・C3)のみで、包含層出土の(C3・C4)と共に大まかに布留式併行期の在地の土器である。大型鉢(C4)は、丸底の底部に依然として叩きが施され、庄内式併行期の伝統を受け継ぐ在地の土器である。その他、少量の須恵器が出土しており、概ね6世紀初頭と考えられる。鉄器は、その形態から布留式併行期に位置付けられるものである。

(註)

註① 布留式併行期の単独的な住居の在り方は、未検出であるが遺物から見て橋本市血禍遺跡・和歌山市横谷遺跡・同滝ヶ峰遺跡などに可能性が求められる。他地域では天理市豊田山遺跡に事例がある。

註② 布留式併行期まで叩きが残る例として、和歌山市瑞神地区遺跡・吉備町野田地区遺跡出土の甕がある。



- ① ● 中世遺物を含み覆土に多量の炭粒が混入している土壌
- ② □ 遺物は含まないが覆土が①と同一の土壌
- ③ ■ 焼土粒(甕)を多量に含む土壌
- ④ ▲ 掘り方の基底部で長方形を呈し基底部まで小礫をつめ込んだ土壌
- ⑤ △ 大型の土壌で厚さ約10~20cmの炭層と約2~3cmの焼土層で形成されている土壌
- ⑥ ◆ 黒色の瓦質土器出土土壌

第4節 鎌倉～江戸時代の遺構・遺物

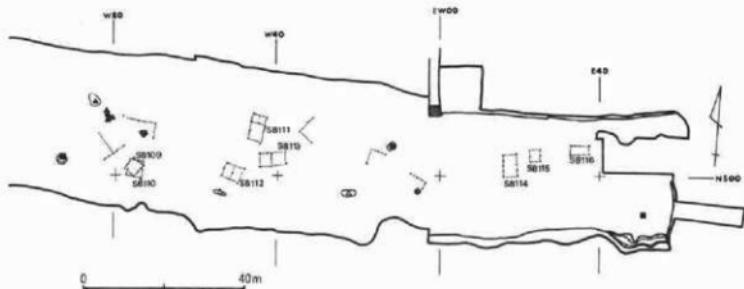
鎌倉～江戸時代の遺構は、遺物からみて鎌倉時代ないし江戸時代に区別すべきであるが、大半の遺構が遺物を伴わないため時期決定し難い。そのため、時期の不明確な遺構は、遺物の伴う遺構に対応させ細片と化した遺物や遺構の配置関係などから時期決定する方法をとることにした。

1. 遺構

鎌倉～江戸時代の遺構を具体的に理解するため、時期の明確な遺構・同種類の比較的まとまりのある遺構・掘立柱建物跡の配置をまとめたのが第127図である。掘立柱建物跡は、遺物が皆無に近い状態でS B106・S B110の柱穴から瓦器の細片が出土したため、鎌倉時代の建物跡と考えられる。建物跡の方向性からS B106に類似するS B101・S B102・S B104・S B107・S B113～S B116とS B110に類似するS B108～S B112とS B110と方向が逆に振れるS B103・S B105の3グループが存在する。建物の重複・配置から時期変遷を考えられるが、当資料のみでは明確にし難い。恐らく、不規則な配置から規則的な配置に変化したと考えられる。土壇はその形態・出土遺物・覆土の状況などから6分類した。①・②類土壇は、遺物から鎌倉時代13世紀前半から14世紀初頭に位置付けられる。④・⑤類土壇には瓦器の細片が出土したため、一応①・②類土壇に近い時期を与えることができる。⑥類土壇と弥生時代の円形堅穴住居上部の落ち込みは、遺物から江戸時代の中での短期間に形成されたものである。③類土壇は、遺物が皆無で形態が異常に不整形である。①・②類土壇は鎌倉時代の土壇墓と考えられ、④類土壇も形態の異なる土壇墓である。⑤類土壇は茶堀に付す場と考え、土壤のリン酸分析を行なったが良好な結果は得られなかった。⑥類土壇は、その状態から判断して焼土を人為的に埋め込んだ土壇と木株の焼成痕と考えられる土壇である。各類の土壇は、その配置に歴然とした差が見い出せる。

2. 遺物

鎌倉時代の遺物は、形態の組み合せから二時期に区別できる。瓦器椀A類・土釜A・B類・須恵賀捏ね鉢A類が13世紀前半に、瓦器椀B類・土釜C・D類・須恵賀捏ね鉢C類が14世紀初頭に位置付けられる。中国製陶磁器は時期的に聞きがあるが、伝世品を含め13世紀前半の遺物に伴うものである。S B10上部落ち込み、SK



第127図 鎌倉～江戸時代の主要遺構配図

549出土土器は成形技法を同じくする江戸時代に位置付けられる土器である。鉄器は中世のまとまった資料として重要であり、大半は土器と共に土壙墓への副葬品とされていたものであろう。

第5節 総括

前章・前節までにおいて、発掘調査及び出土遺物整理によって得られた諸事実を列記し、第Ⅷ章においてそれぞれの諸事実を通有と考えられる方法によって、他遺跡との差異と共通性を導き出すよう試みた。各節において出来る限り遺構と遺物の相関関係を重視し、遺構・遺物共に同程度の頁数を割いてきた。最後には、出土遺物の形態の観察ではなく、実測図・図版では観察できない胎土の砂粒組成と色調を一覧化し、出土地点を明確に記載した。以上のような方法を取りながらも、紙数の制約と諸般の事情により、各々の章節を完結できていない点は否めない。

当遺跡において最も良い資料を得られた弥生時代に関しては、県下の弥生時代の集落の動向と弥生土器の形態変化を通して、後期弥生土器を6小期に細分し、堅穴住居の拡張・改築、住居間の距離と配置、規模と面積、住居の構造、住居から出土した土器の数量、石器・鉄器を絡み合わせ、最小単位の構成と主従関係の抽出を試みた。言うまでもなく、最小単位を構成する2棟ないし3棟の小集団は、生計を共にする世帯共同体を意味しており、その中でも主従関係と言ふ言葉に置き換えて使用した各住居間の優劣の差は中核的な存在を意味するものである。また、集落全体を通して見た場合、後期の時期、県下においても高地性集落の出現には遅れが見られる。高地性集落は一般的な集落とは明らかに有機的な繋がりを維持しているが、現状では一般集落の改変に伴う離合集散を意味する集落とは考え難い。それは、船岡山弥生時代集落が主たる生産基盤を保有しない点や、紀の川と言う大河川の中に立地する点において、他とは隔絶されているもの一大交通の要衝を掌握し得る点にある。加えて、洪水の被害を受け易い河川の中にあっての集落の形成は、他の同時期の弥生時代集落の形成が洪水に起因して、高地に集落を営むものでないことが察せられる。これらの諸点から考えて、船岡山集落は一般的な集落と機能を異なる軍事的な性格の強い高地性集落の要素を保持しうる集落と考えられる。但し、船岡山集落と比較する和歌山市橋谷遺跡・同瀬ヶ峰遺跡などの高地性集落や船岡山集落に類似する立地にある橋本市血縁遺跡などの検討資料、また、高地性集落を取り巻く一般的な集落の比較が十分でない当報告においては断定を避けておきたい。

当報告では、諸事実の列記を中心に進めたため、近隣に所在する佐野遺跡との関連が希薄となっているが、佐野遺跡の弥生時代集落そのものが活発化するのは船岡山第Ⅲ期以後の事であり、現状では母村と分村の関係は成り立ち難い存在である。以上、当報告において明確にし得なかった他遺跡との関係は、今後も資料の検討を通して船岡山集落の位置付けをより明確にするものである。これらの諸問題は、現在発掘調査・資料整理の進められている和歌山市田屋遺跡・西田井遺跡などの一般集落を考える際に、橋谷遺跡を含め様々な再検討を強いられるところである。

当報告において結論を導き出すことができなかつたが、近畿全体に存在する高地性集落は地域において集落の形成・盛衰に遅れが認められる事実や一般集落を全て集約できる集落数がない点などから考えて、県下においても弥生時代後期の高地性集落と同時期の一般集落が今後、平野部で確認されるものである。

その他、今回の調査では、生活遺構こそ少ないが繩文時代早期末から晩期にかけての生活領域の一端を推量することが可能となり、出土遺物の重要性と共に方法論の在り方を検討する一資料を提供することができた。また、時期・性格の不詳な遺構が多い中にあって、中・近世の掘立柱建物と土壙墓の関係を導き出す結果となつた。

最後に、弥生時代の船岡山集落に関して、掘立柱建物の管理形態、集落の墓域、弥生時代から古墳時代への空白期間などの問題に言及し得なかった点があり、今後も集落の動向解明の中で明らかにすべきであろう。

出土遺物一覧

凡例

1. 出土遺物一覧は、繩文土器、弥生土器、土製品、古墳時代の土器、平安時代～江戸時代の土器、江戸時代の銅製品・銅貨、繩文時代石器、弥生時代石器、弥生時代鉄器、古墳時代鉄器、鎌倉時代～江戸時代鉄器の順に列記した。

2. 通巻番号は全て挿図・写真図版と共通する。

3. 弥生土器の器種・器形は挿図第68図を基本として、文中で記述した鉢・蓋・瓶・手捏ね土器・脚台部・底部についても分類した。

4. 土器胎土の砂粒組成は、下記の通りに表示した。

砂粒の大きさ 0.5mm以下—⑤、0.5~1mm—⑥、1~2mm—⑦、2.5~4mm—①、4.5mm以上—④

砂粒の種類 長石—1、石英—2、チャート—3、片岩—4、赤色酸化粒—5、砂岩—6、花崗岩—7、金色微粒—8、雲母—9、黒色粒—10、輝石—11、鄧物—12、角閃石—13

砂粒の量 微量(稀少)一微、少量一少、中量(まばら)一中、多量一多、極めて多量一極

5. 土器の内外面の色調は、不統一であるが下記の番号で表わした。

①茶黄色 ②淡茶黄色③明茶黄色④黄茶色 ⑤淡黄茶色⑥明黄茶色⑦淡赤茶色⑧淡黄白色

⑨淡茶褐色⑩淡褐色 ⑪明褐色 ⑫淡黃褐色⑬暗黃褐色⑭淡茶色 ⑮淡茶(灰)黄色⑯淡茶桃色

⑰淡桃黄色⑮淡黃桃色⑯灰黄色 ⑰黃灰色 ⑱淡黃灰色⑲灰白色 ⑳暗灰褐色⑳淡灰色

㉑黑色 ㉒淡黑色 ㉓黃褐色 ㉔黑黄色 ㉕茶褐色 ㉖暗灰褐色 ㉗黃土色 ㉘淡灰黄色

㉙明茶色 ㉚濃茶色 ㉛黑灰色 ㉜明茶桃色㉝暗黃桃色㉞暗茶色 ㉟淡灰褐色㉟淡黑黄色

㉞黒茶色 ㉟灰色 ㉟明淡茶色㉟淡茶灰色㉟茶色 ㉟暗黃茶色㉟暗茶褐色㉟濃茶桃色

㉟桃黄色 ㉟淡茶黑色㉟明黃褐色㉟淡褐黄色㉟黑褐色 ㉟暗茶黄色㉟明淡茶黄色㉟茶桃色

㉟淡灰茶色㉟明黄色 ㉟(茶)灰色㉟褐色 ㉟暗黃色 ㉟赤茶色 ㉟灰茶色 ㉟淡黃(桃)褐色

㉟暗褐色 ㉟淡綠白色㉟暗茶灰色㉟淡赤色 ㉟淡明茶色㉟暗黃灰色㉟淡赤茶色㉟淡桃褐色

㉟淡赤黄色㉟明黑黄色㉟灰褐色 ㉟淡黃褐色㉟桃褐色㉟白黄色 ㉟黃茶灰色㉟淡黑褐色

㉟淡黑灰色㉟赤灰色 ㉟黃茶褐色㉟淡黄色 ㉟淡赤褐色㉟赤褐色 ㉟淡青灰色

6. 石器・鉄器の重量は、下記を使用して測定した。

100gまで 音又式電子天びん LG-100 (新光電子株式会社)

101gから4,000gまで 自動ばかり4,000 (ヨシダ)

4,001g以上 家庭用体重測定器 110kg (ヨシダ)

但し、鉄器の重量は保存処理を行った後の測定結果である。

7. 石器・鉄器の法量の内 () で示した寸法は現存長を表わす。

8. 石器の石材は、益富壽之助『原色岩石図鑑』 保育社 1984年

『東山遺跡』 大阪府教育委員会 1979年 を参考にした。

縄文土器

土器No.	種類	器形	出土地区・遺構・層位	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	種類	器形	出土地区・遺構・層位	胎土・砂粒組成	色調 内外
J 1	第60回	N 22, W182, サブトレ	⑤⑥1-3-13多	◎					N 4-8, W134-140	⑤⑥1-2-4中, ③④少	⑦④
J 2	~	S B10以下、B区	⑤⑥2-13少, 黄微	◎◎①	J 42 第61回				黄色弱粘質土	⑤2-3-5少	⑧⑨
J 3	~	S B08, 新床東部	⑤⑥1-13少	◎				N 13-15, W179-180	⑤2-3-5少	⑧⑨	
J 4	~	S B10南小砂利土壤	⑤⑥1-2-13多	◎◎②	J 43	~		第1区	N 50W270第2層土層	⑤⑥2-3-4-5多	⑧⑨
J 5	~	黄色弱粘質土	N 38-44, W220-240	⑤⑥多⑦少2-1-3	◎◎①	J 44	~		黄色弱粘質土	⑤⑥2-3-4-5多	⑧⑨
J 6	~	第Ⅱ区、B区	⑤⑥3-1-9少, ⑥5少	◎				S 6-N4, W110-120	⑤⑥2-1-3少, ⑥5少	⑧⑨	
J 7	~	S B10, 新床面	⑤⑥3-1-13少	◎	J 45	~		黄色弱粘質土	⑤⑥2-1-3少, ⑥5少	⑧⑨	
J 8	~	S B10底F	⑤⑥3-2-13少	◎				N 6-10, W135-140	⑤⑥3-1-5多	⑨	
J 9	~	S K729	⑤⑥3-2-9少, ⑥13少	◎◎②	J 46	~		黄色弱粘質土	N 6-10, W130-140	⑤⑥2-1-3-4多	⑧⑩
J 10	~	黄色弱粘質土	N 3-N S O, W131-135	⑤⑥9-13少	◎	J 47	~		S K725	⑤⑥2-3-5多	⑧
J 11	~	溝伏遺構	N 30, W⑥-190	⑤多⑦少2-3-3	◎②	J 48	~		W31-38, S 12-15	⑤⑥2-3-5少⑦3少	⑧⑨
J 12	~	溝伏遺構	N 30, W160-180	⑤⑥3-1-2-13多	◎	J 49	~		第Ⅲ区、下層	⑤⑥4-2-1-3少	⑨
J 13	~	第Ⅲ区、B'区	⑤⑥3-1-2-9多	◎◎②	J 50	~		第Ⅲ区、下層	⑤⑥2-1-3-5多	⑧⑨	
J 14	~	S K81	⑤⑥3-1-3-9-13多	◎◎②	J 52	~		麦土一下へ			
J 15	~	S K729	⑤⑥1-3-9少	◎②①	J 53	~		N 5-7, W140-142	⑤⑥2-1-3-4少	⑧⑨	
J 16	~	黄色弱粘質土	S 6-N4, W110-124	⑤⑥3-1-13多, 飯1量	◎			N 4-6, W134-140	⑤⑥1多⑦3少2-多	⑧⑨	
J 17	~	黄色弱粘質土	S 6-N3, W100	⑤⑥81-2-3多	◎②	J 54	~		N S O-7, W123-131	⑤⑥2-1-3少	⑧
J 18	~	黄色弱粘質土	N 6-10, W135-140	⑤⑥⑦4-3-2-3多	◎②④	J 55	~		S B07	⑤⑥3-2-1少	⑧⑨
J 19	~	黄色弱粘質土	N 6-10, W135-140	⑤⑥⑦4-3-2-6多	◎②④	J 56	~		黄色弱粘質土	⑤⑥1-2-3中⑦2少	⑧⑨
J 20	~	S B05, 足り床	N 6-10, W135-140	⑤⑥⑦4-3-2-6多	◎②④	J 57 第62回			W31-38, S 12-15	⑤⑥2-1-3-4少	⑧⑨
J 21	~	S B05, 足り床	S 6-N4, W110-120	⑤⑥82-2-4-5少	◎②	J 58 第61回			S B01A区	⑤⑥多⑦少2-1-6	⑧⑨
J 22	~	黄色弱粘質土	S 6-N4, W110-120	⑤⑥82-2-3-5少	◎②④	J 59 第62回			サブトレ内	⑤⑥2-1-3少	⑧⑨
J 23	~	S K730	S 5, W82	⑤⑥81-2-3-4少	◎②④	J 60	~		黄色弱粘質土	⑤⑥2-1-3少	⑧⑨
J 24	~	黄色弱粘質土	S 5, W82	⑤⑥81-2-3-4少	◎②④	J 61	~		N 5-7, W124-130	⑤⑥2-1-3少⑦1少	⑧⑨
J 25	~	溝伏遺構	N 30, W160-180	⑤2-3多, ⑥6少	◎②④	J 62	~		S K725	⑤⑥6-5-4多⑦1少	⑧⑨
J 26	~	第Ⅱ区、灰色落ち	⑤⑥2-3-5多	◎②④	J 63	~		W74, S 6	⑤⑥2-1-3中⑦2少	⑧⑨	
J 27	~	黄色弱粘質土	S 6-N4, W110-120	⑤⑥2-4-5少	◎②④	J 64	~		S 12, W15	⑤⑥2-1-3少2-1-5	⑧⑨
J 28	~	黄色弱粘質土	S 5, W82	⑤⑥2-3-4多	◎②④	J 65	~		S 15, W17	⑤⑥2-1-3中⑦2少	⑧⑨
J 29	~	N S O-5, W60付近	⑤⑥3-6少	◎②④	J 66	~		S K725	⑤⑥3-1-4中⑦2少	⑧⑨	
J 30	~	S B10南小砂利土壤	⑤⑥3-4少	◎②④	J 67	~		S K415	⑤⑥2-1-3少2-1	⑧⑨	
J 31	~	黄色弱粘質土	N 4-8, W135-140	⑤⑥8少⑦微2-4-5	◎②④	J 68	~		N 3-8, W135-141	⑤⑥2-3-1少4	⑧⑨
J 32	~	黄色弱粘質土	W80-90, S 5-10	⑤⑥4-1-9少	◎②④	J 69	~		N S O-N5, W70-75	⑤⑥1-3-4少	⑧⑨
J 33	~	S K725	⑤⑥2-1-3少	◎②④	J 70	~		S K4	⑤⑥3-2-1多	⑧⑨	
J 34	~	黄色弱粘質土	S 6-N4, W110-120	⑤⑥2-1少	◎②④	J 71	~		N 15-19, W192-203	⑤⑥4-2-1-3多	⑧⑨
J 35	~	灰色弱粘質土	N 7-10, W142-146	⑤⑥2-3少	◎②④	J 72	~		S K722	⑤⑥2-1-5少	⑧⑨
J 36	~	黄色弱粘質土	N 7-10, W142-146	⑤⑥2-3-4-5少	◎②④	J 73	~		S K181	⑤⑥3-2-1多	⑧⑨
J 37	~	黄色弱粘質土	S 8, W79	⑤⑥2-1-3-9多	◎②④	J 74	~		S 12-15, W31-35	⑤⑥4-1-3-2多微	⑧⑨
J 38	~	黄色弱粘質土	S 8, W79	⑤⑥8少⑦微2-3-5	◎②④	J 75	~		S 12-15, W31-35	⑤⑥2-1-3少2-1	⑧⑨
J 39	P L 23	第Ⅱ区灰色落ち	⑤⑥4-1少	◎②④	J 76	~		S 5, W82	⑤⑥2-1-3少4-2-1	⑧⑨	
J 40	第61回	W128-140	⑤⑥1-2-4中	◎②④	J 77 第63回			W31-38, W220-221	⑤⑥2-3多	⑧⑨	
J 41	~	黄色弱粘質土	⑤⑥1-2-4中	◎②④	J 78	~		N S O-N5, W115-120	⑤⑥2-1-3少2-5-4	⑧⑨	
					J 79	~		旁生Ⅱ(但し現磨石塙)	⑤⑥1-9-2微⑦13微	⑧⑨	

土器No.	接着 番号	出土地区・遺構・層位	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	接着 番号	出土地区・遺構・層位	胎土・砂粒組成	色調 内外
J 80	第63回	淡黄色弱粘質土 N10-20, W155-165	⑤2-3-1-5多③微 ④⑤	J 93 J 94	第63回	S K723 黄色弱粘質土 S5-10, W20-30	⑤2-2-1-5多 ②④		
J 81	*	黄色弱粘質土 N13-南縁, W170-180	⑤2-1-2-3少①D180 ⑥	J 95	"	黄色弱粘質土 N10, W60-80	⑤2-1-3-4-5多 ②④		
J 82	*	淡黃褐色弱粘質土 S 8, W29	⑤2-1-3少, ⑦2 ⑥	J 96	"	S 12-15, W31-38 S4, W81.5	⑤2-1-3-2-1-9 ③		
J 83	*	黄色弱粘質土 N10-15, W20-30	⑤2-3多④微 ⑦⑧	J 97	"	黄色弱粘質土 N10-33, W120-160後面	⑤2-1-3-2多 ②④		
J 84	*	第VI区、サブトレ	⑤2-3多 ⑨	J 98	"	N10-33, W120-160後面	⑤2-1-4多 ②④		
J 85	*	弥生 I N31-35, W227-239	⑤1多⑤少2-2-1 ⑤	J 99	"	北斜面、芸土層	⑤2-1-3-5多 ②④		
J 86	*	黄色弱粘質土 N13-南, W170-180	⑤2-1多 ⑥⑦	J 100 J 101	"	N17, W182, サブトレ 黄色弱粘質土 N10, W60-80	⑤2-6-2少, 8微 ⑤2-3-2-4多 ②④		
J 87	*	淡灰褐色弱粘質土 S K701	⑤2-3少①少4-2-1 ⑦⑧	J 102	"	第2層、N50, W280 黒色小礫混入層	⑤2-1-3-2-1-3 ⑤2-1-3-2-1-5 ②④		
J 88	*	黄色弱粘質土 N13-南縁, W170-180	⑤2-1-4極 ⑧	J 103	"	N15-16, E 0-5 N17, W182	⑤2-1-5-7多 ⑤2-1-3-4少 ②④		
J 89	*	S 13-15, W31-35	⑤2-3-1-2-4多 ⑦⑧	J 104	"	第2層、N50, W270 淡灰色弱粘質土	⑤2-1-3-2-1-3 ②④		
J 90	*	黄色砂質土 N10-15, W37-42	⑤2-3-2-1-4多 ⑤⑥	J 105	"	N17, W182	⑤2-1-3-4少 ②④		
J 91	*	黄色砂質土 S 10-15, W37-42	⑤2-2-1多 ②④	J 106	"	N10-13, W130-140 黄色弱粘質土	⑤2-1-3-4少 ②④		
J 92	*	淡黃褐色砂質土 S 105前, W60-65	⑤2-5-3-4多 ②④	J 107	"	N13-南縁, W170-180 黄色弱粘質土	⑤2-1-3-9中 ①		

弥生土器

S 801 出土土器

土器No.	種番	出土地点・遺構・層位	器種器形	胎土・焼粧組成	色調 内外	土器No.	堆 番	図 号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・焼粧組成	色調 内外					
B 1	70回	b 床面	広口壺B	⑧-⑪, ④-2-5少	⑩⑫	B 61	71回	A区壁溝	脚台A柱状足	⑤⑥2-5微	④						
B 2	2	C区床面	広口壺F	⑨⑩1-5-4-6微	⑦⑫	B 62	-	柱穴1	底部E	③④2-1微	⑤						
B 3	3	A区床面	壁D, 中	⑤~②-2-1少, 8	⑪⑬	B 63	-	柱穴1	底部F	⑤⑥2-1-3少	⑥⑦						
B 4	4	b 床面	高杯F	④⑩, ⑨⑩2-5-2-1中	⑪⑬	B 64	-	B区堆積褐色粘土質	口直壺	③2-1-微, 8多	⑦						
B 5	5	炉屑	高杯A	④2微, 8多	⑪⑬	B 65	-	ベルト第5層	煮豆部	④⑤2-1-2少, 8	⑩⑪						
B 6	6	C区床面	底部H	⑤⑥2-5-1微, 8	⑪⑬	B 66	-	A区堆積褐色粘土質	無縫壺	④⑤5-2-6少, 8	⑤						
B 7	7	B区床面	脚台基部	⑤6-1微	①	B 67	-	腰下(下)	底部A	③2-5-少	⑥⑦						
B 8	8	b 床面	小型杯	①-2微, 8	⑧	B 68	-	A区堆積褐色粘土質	底部E	③2-5-少	⑥⑦						
B 9	9	床面	底部K	⑤1-6少	⑩⑫	B 69	-	ベルト第5層	底部D	④⑤2-4-5-6少, 8	⑩⑪						
B 10	10	C区壁溝	腰溝合付	⑤⑥⑦2少	②	B 70	-	A区堆積褐色粘土質	底部D	④⑤2-6-1少, 8	⑩⑪						
B 11	11	腰溝上層	壺A	⑤⑥⑦3-3少, 8	⑪⑫	B 71	-	D区堆積褐色粘土質	壺A, 中	③2-3, 1-1, 8	⑪						
B 12	12	B区壁溝	脚H	⑤⑥⑦4-2少, 8	⑤⑦	B 72	-	第4層	壺A, 中	⑤⑥2-4-18, 58, 8	⑩⑪						
B 13	13	B区壁溝	脚台	⑤2-1-5微, ⑤	⑪⑫	B 73	-	A区堆積褐色粘土質	脚D, 中	④⑤2-3-4多	⑩⑪						
B 14	14	壁溝	脚台	⑤2微	⑤	B 74	-	A区堆積褐色粘土質	脚D	④⑤2-1-5, 8少	⑩⑪						
B 15	15	壁溝上層	脚台C	⑤2-3微, 8	②	B 75	-	D区堆積褐色粘土質	底部H	④⑤2-4-5少, 8	⑩⑪						
B 16	16	壁溝上層	器台A	⑤⑥7-3-1中, 8多	⑥	B 76	-	A区サブトレ	底前G	④⑤2-1-6, 8少	⑩⑪						
B 17	17	柱穴1	底部J	⑤6, 8	⑪⑫	B 77	-	A区堆積褐色粘土質	底部H	④⑤2-3-4-5, 8少	⑩⑪						
B 18	18	柱穴4	底部D	⑤2-4微, 8	⑤⑦	B 78	-	ベルト第2層	底部J	④⑤2-6-4少, 8	⑩⑪						
B 19	19	柱穴6	壺D	⑤⑥⑦1-2-4-6多	⑪⑫	B 79	-	A区堆積褐色粘土質	底部J	④⑤2-4-6中, 8	⑩⑪						
B 20	20	柱穴1柱当り	高杯B	⑤⑥⑦1-2-6少	⑪⑫	B 80	-	D区堆積褐色粘土質	底部J	④⑤2-6少	⑩⑪						
B 21	21	A区サブトレ	高杯C	⑤2-4微, 8少	⑧	B 81	-	A区堆積褐色粘土質	跡B	1微, 8多	⑩⑪						
B 22	22	B区第1層	広口壺J	⑤⑥6微, 8	⑩⑫	B 82	-	周辺ベース面西側	底部L	④⑤2-6-1中, 8	①						
B 23	23	B区第1層	器台	⑤⑥2-1-4-8, 8	⑫	B 83	-	D区堆積褐色粘土質	底部L	③2-3微, 8	⑩⑪						
B 24	24	第1層	広口壺B	⑤⑥6-2少, 8	⑪⑫	B 84	-	D区堆積褐色粘土質	底部A跡	④⑤1-5少, 8	⑩⑪						
B 25	25	A区第1層	広口壺	⑤2-3-6少, 8	⑪⑫	B 85	-	D区堆積褐色粘土質	脚台A器台	④⑤2-1-5微	⑩⑪						
B 26	26	B区第1層	兼体部	砂粒痕	⑪⑫	B 86	-	D区堆積褐色粘土質	脚台A器台	5少, 8多	⑩⑪						
B 27	27	第2層	脚台E	⑤2-1-5微	②	B 87	-	A区堆積褐色粘土質	脚台B器台	2-5微, 8	⑩⑪						
B 28	28	第3層	脚台B	⑤⑥⑦6-4-2微	⑩⑫	B 88	-	ベルト第4層	手掘ノ脚台	③2-1微, 8微	⑩⑪						
B 29	29	D区第2層	脚台A器台	⑤6微	①	B 89	-	A区堆積褐色粘土質	器台廻部	④⑤1-3少, 8少, 8少	⑩⑪						
B 30	30	第2層	脚台	⑤⑥⑦2-1-4少, 8	⑩⑫	S B 03											
B 31	31	C区第2層	底部J	⑤⑥⑦2-3-6微	⑪⑫	B 90	72回	床面	広口壺I	④⑤2-5微	②						
B 32	32	C区第1層	底部F	⑤⑥⑦2-6少, 8	⑦⑫	B 91	-	床面	手捏ね壺	③2微, 8	⑩⑪						
B 33	33	B区第1層	底部J	⑤⑥1-3-7少, 8	⑪⑫	B 92	-	床面	壺C	④⑤2-1-8, 8	⑩⑪						
B 34	34	C区第1層	底部F	⑤⑥⑦1-2-3-5少, 8	⑪⑫	B 93	-	床面	底部K瓶	⑤2少, 8	⑩⑪						
B 35	35	C区第1層	底部J	⑤⑥⑦2-6-4少	⑦⑫	B 94	-	床面	高杯B	④⑤2-5-4微, 8多	⑩⑪						
B 36	36	C区第1層	底部G	⑤⑥⑦6-7-3少, 8	⑪⑫	B 95	-	床面	高杯A	④⑤2-6, 8	②						
B 37	37	B区第2層	底部F	⑤6	⑪⑫	B 96	-	床面	高杯E	④⑤2-1-4多	⑩⑪						
B 38	38	D区第2層	底部H	⑤⑥2-1-5微	⑤	B 97	-	床面	底部A	④⑤2-1-5微, 8微	⑩⑪						
B 39	39	C区第2層	底部E	⑤⑥1-2微, 8	②	B 98	-	床面	底部A	④⑤2-1-9, 8微	⑩⑪						
B 40	40	D区第1層	底部A	⑤6	⑪⑫	B 99	-	床面	底部A	④⑤2-1-9, 8微	⑩⑪						
B 41	41	B区第1層	底部L	⑤⑥2-3-1微, 8	⑤	B 100	-	床面	底部F	④⑤2-4-5, 8	⑩⑪						
B 42	42	B区第2層	底部A鉢	⑤⑥⑦2-1微, 8	⑪⑫	B 101	-	中央炉	壺A	④⑤2-4-5少, 8	⑩⑪						
B 43	43	第71回	広口壺I	⑤⑥⑦2-5-3-4微	⑪⑫	B 102	-	床面	底部F	④⑤2-1-8, 8	⑩⑪						
B 44	44	B区第2層	器台A	⑤2-5微	⑪⑫	B 103	-	貼り床	底部H	④⑤2-1-5-35, 8少	⑩⑪						
B 45	45	B区第2層	壺A ₁	⑤2微, 8微	B 104	-	床面	底部J	④⑤2-6-5-4少, 8	⑤							
B 46	46	B区第2層	近底C	⑤少	⑨	B 104	-	床面	底部L	④⑤2-6-1, 8	⑩⑪						
B 47	47	B区	底部J	⑤少少	③	B 105	-	第4層	広口壺B	③2-1微, 8	①						
B 48	48	B区	底部F	⑤⑥⑦2-3-1少, ⑨微	⑪⑫	B 106	-	第5層	広口壺F	④⑤2, 8少	⑩⑪						
B 49	49	B区第2層	底部J	⑤⑥⑦2-5-4少	⑪⑫	B 107	-	ベルト第5層	広口壺E	③2-5微, 8	⑩⑪						
B 50	50	B区	脚台	⑤2-1-5少	③⑨	B 108	-	第4層	広口壺B	④⑤2-2-4-5微, 8少	②						
B 51	51	B区	脚台	⑤⑥2-4-6少	⑤	B 109	-	西端	広口壺G	④⑤2-4少, 8	②						
B 52	52	B区第2層	脚台A	⑤⑥⑦1-2少	③	B 110	-	覆土	脚台A小	④⑤2-6少	⑤						
B 53	53	B区第2層	脚台	⑤⑥⑦5-2少	③	B 111	-	第2層下面	壺B	④⑤2-6少, 8	⑩⑪						
B 54	54	B区第3層	脚台C廻部	⑤⑥2-5微, 8微	⑪⑫	B 112	-	ベルト第5層	壺B	④⑤2-1-8, 8少	①						
						B 113	-	第3層	壺D廻部	④⑤2-1少	⑩⑪						
						B 114	-	上層部	高杯A	④⑤2-4-2微, 8	⑥						
B 55	55	71回	A区床面	脚台H	⑤⑥2-3微, 8	②	B 115	-	高杯E	④⑤2-5微	⑩⑪						
B 56	56	-	C区床面	脚台	⑤⑥⑦2-1-3少, ⑦2	B 116	-	第2層	高杯F	④⑤2-1-5少, 8少	⑨						
B 57	57	-	床面	底部J	⑤⑥⑦2-3-5-4少, 8	⑪⑫	B 117	-	覆土	壺D	④⑤2-3-4-6少	⑩⑪					
B 58	58	-	壁溝	長縫壺B	⑤⑥⑦4-2-3中	B 118	-	ベルト第2層	壺A	④⑤2少, 8	⑩⑪						
B 59	59	-	A区壁溝	長縫壺A	砂粒痕、8多	⑪⑫	B 119	-	ベルト第6層	壺A	④⑤2-1微, 8	⑩⑪					
B 60	60	-	A区壁溝	脚台A, 廻部	⑤⑥2-3-6少, 8	⑪⑫	B 120	73回	覆土	底部A	④⑤2-3少, ⑦2-6少	⑩⑪					

土器No.	番号	出土地区-遺構-層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	種類 番号	出土地区-遺構-層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
B 121	第73回	3層	底部A	⑤2重、8	⑪⑫	B 179	74回	A区床面	器台C	⑤⑥⑦2-4少	⑨
B 122	*	ベルト第2層	底部D	⑤⑥2-6重、8	⑪⑫	B 180	*	中央炉	底前C	④2重、②、8	⑩
B 123	*	第2層上面	底部J	⑤6重1-9、⑩重6-9少	⑪⑫	B 181	*	中央炉	底部H	⑤6重1-3少、8	⑪⑫
B 124	*	第2層5cm掘下1f	底部F	⑤⑥2-1-6重、8	⑪⑫	B 182	*	中央炉	脚台基部	⑤6重、8少	⑩
B 125	*	第3層	底部G	⑤6重1-2少、8	⑪⑫	B 183	*	中央炉底	脚台C	砂粒混、8少	⑩
B 126	*	覆土	底部H	⑤⑥2-3-1少、8	⑪⑫	B 184	*	柱穴10	脚台基部	⑤6重、8	⑩
B 127	*	ベルト第3層	底部I	⑤⑥2重、8	⑪⑫	B 185	*	新壁溝	脚台E	⑤6重、4-8	⑪⑫
B 128	*	第2層	底部J	⑤⑥2-3少、8	⑪⑫	B 186	*	新壁溝	脚台基部	⑤⑥2-1-6重、8	⑩
B 129	*	ベルト第4層	底部K	⑤⑥2-2-1-4少、8	⑪⑫	B 187	*	新壁溝	脚台B	⑤6重、8	⑩
B 130	*	第1層	底部L	⑤-4重2-1-3少、8	⑪⑫	B 188	*	壁溝	底前C	⑤2重、④3、8少	⑪⑫
B 131	*	第4層	底部M	⑤⑥2-1-3少、8	⑪⑫	B 189	*	新壁溝	高炉B	⑤6重、8	⑪⑫
B 132	*	第3層	底部N	⑤-4重2-1-6少、8	⑪⑫	B 190	*	D区壁溝	鉢B	2、8	⑩
B 133	*	ベルト第3層	底部O	⑤⑥2-1-4多、8	⑪⑫	B 191	*	C区壁面上層	鉢C	⑤2-1-5多、8多	⑩
B 134	*	第3層	底部P	⑤⑥2-4少、8	⑪⑫	B 192	*	C区壁面上層	鉢D	⑤6重、②、8多	⑩
B 135	*	第3層	手捏ね鉢	⑤2-4少、8	⑪⑫	B 193	*	南窓構横	広口壺I	2、8少	⑩
B 136	*	第2層下面	脚台F	⑤2-2-1-8、⑩重9少、8	⑪⑫	B 194	*	北壁	手捏ね壺	⑤⑥3-6多、8	⑩
B 137	*	ベルト第3層	底部L	⑤2重、8	⑪⑫	B 195	*	南壁溝	筋縫車	⑤6重	⑩
B 138	*	第3層	蓋A	④6重、8	⑪⑫	B 196	*	A区壁溝	筋縫車	⑤6重	⑩
B 139	*	第4層	脚台基部	⑤2-2-5少	⑪⑫	B 197	*	壁溝	筋縫車	⑤6重	⑩
B 140	*	第2層	脚台A	⑤2-1-6重、8	⑪⑫	B 198	*	S D7下層	太頭壺	⑤⑥2-1-4-6少、⑩重、8	⑩
B 141	*	西壁	脚台A 前部	⑤2重、8	⑪⑫	B 199	*	S D7下層	脚台B	⑤⑥2少、8	⑩
B 142	*	第4層	脚台C 前部	⑤2-4重、8	⑪⑫	B 200	*	S D7下層	底前A	⑤6重2-5少	⑩
B 143	*	覆土	筋縫車	⑤2-2少、8	⑪⑫	B 201	*	S D7下層	底前D	⑤⑥1-6-4中、8	⑩
B 144	*	第2層	脚台体部	⑤⑥2-5少、④6、8	⑪⑫	B 202	*	S D7下層	筋縫車	⑤6重	⑩
B 145	*	第3層	蓋屏	①1枚、8	⑪⑫	B 203	75回	I層	広口壺E ₁	⑤⑥1-5重、8	⑩
B 146	*	上層部	広口壺G	④6重、8	⑪⑫	B 204	*	B区第4層	広口壺E ₂	⑤2-2-1重、8	⑩
S B 04											
B 147	第73回	覆土	蓋B ₁	⑤1-5重、8多	⑪⑫	B 205	*	A区第2層	広口壺E ₃	⑤2-2少、①、8少	⑩
B 148	*	覆土	蓋B ₂	⑤1-2-6少、8	⑪⑫	B 206	*	C区第4層	広口壺E ₄	⑤6重2-8、8多	⑩
B 149	*	覆土	蓋A ₁ 中	⑤2重、①2、8多	⑪⑫	B 207	*	A区第2層	広口壺E ₅	⑤6重2-8	⑩
B 150	*	覆土	底部D	⑤⑥2-1-1、8	⑪⑫	B 208	*	B区第2層	広口壺E ₆	2-4、8多	⑩
B 151	*	床面	底部E	⑤⑥1-6重、8	⑪⑫	B 209	*	A区第2層	広口壺E ₇	⑤2-1-5少、8少	⑩
B 152	*	覆土	底部F	⑤⑥1-1重、8	⑪⑫	B 210	*	B区第2層	広口壺E ₈	⑤2-4-6少、8多	⑩
B 153	*	中央炉	蓋C	⑤⑥2-3-5重、8	⑪⑫	B 211	*	B区第2層	広口壺E ₉	⑤6重2-1少	⑩
B 154	*	覆土	脚台基部	⑤2-6重、④2-6	⑪⑫	B 212	*	南窓サブトレ	小型壺	⑤6重2-1少	⑩
B 155	*	床面	脚台C	⑤6-4少	⑪⑫	B 213	*	新含土下層	広口壺I	⑤⑥2-2-4多	⑩
B 156	*	覆土	高杯	⑤2重、④2	⑪⑫	B 214	*	D区第1層	広口壺F	⑤6重	⑩
B 157	*	中央炉	高杯B ₁	⑤⑥2-1重、8少	⑪⑫	B 215	*	D区第2層	広口長縫壺	⑤4-2-5少	⑩
B 158	*	覆土	高杯B ₂	⑤⑥2-2-4少、8少	⑪⑫	B 216	*	D区第4層	長縫壺A	⑤6重2-5少、8	⑩
S B 05											
B 159	第74回	A区床面	広口壺I	⑤⑥2-4少、8多	⑪⑫	B 217	*	D区第3層	短縫壺A	砂粒混、8多	⑩
B 160	*	A区床面	広口壺I	⑤4-4少、8多	⑪⑫	B 218	*	A区第2層	更	⑤6重2-3少	⑩
B 161	*	床面	長縫壺A ₁	⑤2-5-4少	⑪⑫	B 219	*	A区第2層	更	⑤6重2-3少	⑩
B 162	*	床面	底部A	①2枚、8少	⑪⑫	B 220	*	A区第2層	器台B ₁	⑤2-1-3少、8	⑩
B 163	*	A区床面	底部E	⑤⑥2-1-6、8多	⑪⑫	B 221	*	A区第2層	器台B ₂	⑤2-1-6少、8多	⑩
B 164	*	A区床面	底部E	⑤2-3重	⑪⑫	B 222	*	C区第1層	器A ₁ 中	⑤6重2-8、8多	⑩
B 165	*	床面	蓋D ₁ 中	⑤4-1少、2-2、8少	⑪⑫	B 223	*	第2層	器A ₂	⑤1-2少、8	⑩
B 166	*	床面	蓋C	⑤4-2多、8少	⑪⑫	B 224	*	新含土下層	器A ₃	⑤2-1-6少、8	⑩
B 167	*	床面	底部L	⑤⑥2-1-3少、8	⑪⑫	B 225	*	C区第2層	器A ₄ 中	⑤2-1-3-5多、8	⑩
B 168	*	貼り床	底部C	砂粒混、8多	⑪⑫	B 226	*	B区第1層	器A ₅ 中	⑤2-2-3-5少、8	⑩
B 169	*	貼り床	底部C	④4枚、8	⑪⑫	B 227	*	B区第1層	器D ₁ 中	⑤2-1-4-8、8	⑩
B 170	*	A区床面	底部J	②2枚、8	⑪⑫	B 228	*	第2層	器D ₂	⑤2-1-3少、8	⑩
B 171	*	A区床面	蓋	⑤2-2重、④6-8多	⑪⑫	B 229	*	新含土上層	器D ₃ 中	⑤2-2-4少、8	⑩
B 172	*	A区床面	蓋A ₁	⑤2重、8	⑪⑫	B 230	*	第2層サブトレ	器D ₄ 中	⑤2-1-5少、8	⑩
B 173	*	A区床面	高杯A ₁	④6、8少	⑪⑫	B 231	*	D区第2層	器A ₅ 大	⑤2-2-3-5少、8	⑩
B 174	*	貼り床	脚台基部	砂粒混、8	⑪⑫	B 232	*	C区第4層	器D ₅ 小	⑤2-1-2-3少、8	⑩
B 175	*	床面	脚台B	④8少	⑪⑫	B 233	*	第1層	器D ₆ 大	⑤2-2-3-1多、8	⑩
B 176	*	床面	脚台B	⑤⑥4-2-1、8	⑪⑫	B 234	*	新含土上層	器D ₇ 中	砂粒混、8	⑩
B 177	*	床面	脚台A基部	⑤⑥2-1-2、8	⑪⑫	B 235	*	最下層	高杯C	⑤2多、8多	⑩
B 178	*	A区床面	筋縫車	④6重	⑪⑫	B 236	*	旧植土	高杯B	砂粒混、④6、8	⑩

土器No.	種番	図号	出土地区-遺構-層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	種番	図号	出土地区-遺構-層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
B 241	第76回	A区第2層	高杯B ₁	◎2中、8	⑦	B 303	第77回	A区第3層	底部E	◎2-5-1-4少、8多	◎2		
B 242	"	A区第2層	高杯A ₁	◎2-6-3少、8	⑤	B 304	"	C区第4層	底部E	◎2-2-5少、8	◎		
B 243	"	A区第2層	高杯B ₁	◎2、8多	⑪⑫	B 305	"	第2層	底部E	◎28、8多	◎2		
B 244	"	サブ2レ	小型高杯	◎28-8-③59、89	⑩⑪	B 306	"	C区第1層	製作部	◎28強、8多	◎		
B 245	"	D区第2層	小型高杯B ₁	◎2-1-2-1少	⑤	B 307	"	D区第2層	底部H	◎2-2-1-5少、8	◎2		
B 246	"	B区第4層	高杯B ₁	◎2-2-5少、8	④	B 308	"	A区第2層	底前J	◎2-2-2少	◎2		
B 247	"	第2層	高杯B ₁	◎2-4少、8	⑥⑦	B 309	"	第3層	底部H	◎2-1、8	◎2		
B 248	"	C区第4層	高杯B ₁	◎2-2-6少、④5、8	⑤	B 310	"	第1層	底部J	◎2-2-6少、8	◎2		
B 249	"	B区第1層	高杯B ₁	◎2-1-5少、8	⑪⑫	B 311	"	D区第2層	底部G	◎2-1-2少	◎2		
B 250	"	D区第4層	高杯B ₁	◎2-2-6少	⑧	B 312	"	第3層	底部F	◎2-2-6少、8多	◎2		
B 251	"	新覆土下層	脚台基部	◎2-5-2少、8	⑪⑫	B 313	"	A区第2層	底部J	◎2-2-4少、8多	◎2		
B 252	"	第2層サブトレ	脚台基部	◎2-4-2-59、8多	②	B 314	"	B区第1層	底部H	◎2-2-5少、8	◎2		
B 253	"	第2層サブトレ	脚台基部	◎2-5-4少、8	⑤	B 315	"	C区第1層	底前L	◎2-2-6少、8	◎2		
B 254	"	A区第2層	脚台基部	砂粒微、8多	⑪	B 316	"	A区第2層	底部J	◎2-3-6-5少、8	◎2		
B 255	"	A区第2層	脚台A部	◎2-5-4少、④5、8	⑪⑫	B 317	"	第3層	底部G	◎2-2-2少	◎2		
B 256	"	D区第3層	脚台基部	◎2-2-6-3少、8	①	B 318	"	A区第2層	底部H	◎2-2-5少、④7.8	◎2		
B 257	"	第1層	脚台基部	◎2-2少、8	⑪⑫	B 319	"	D区第2層	底部J	◎2-4-5少、8	◎2		
B 258	"	第5層	脚台基部	◎2、8	⑪⑫	B 320	"	第3層	底部K	◎2-2-1、8少	◎2		
B 259	"	C区第2層	脚台基部	◎2-2-5少、8	⑧	B 321	"	B区第4層	跡E	◎2-2-4-5少、89	◎2		
B 260	"	A区第2層	脚台C柱狀部	◎2-2-1-5少、8	②	B 322	"	C区第1層	跡B	◎2-2-6少、8	◎2		
B 261	"	A区第2層	脚台基部	◎2-5-1少	⑤	B 323	"	新覆土上層	跡B底部	◎2-2-2中、8	◎2		
B 262	"	不明	脚台基部	◎2-1-2-4少、8	③	B 324	"	D区第3層	脚台F	◎2-2-4少、④4.8	◎2		
B 263	"	C区第3層	脚台基部	◎2-2-5少、8	⑥	B 325	"	B区第2層	底部L	◎2-2-2少、8	◎2		
B 264	"	D区第2層	脚台B部	◎2、8少	⑪⑫	B 326	"	第4層	蓋模み部	◎2-2-2少、8	◎2		
B 265	"	第4層	脚台B部	◎2-2-5少、8	②	B 327	"	C区第2層	筋錆車		◎2		
B 266	"	第3層	脚台B部	◎2-1少、②1	①	B 328	"	C区第2層	筋錆車		◎2		
B 267	"	D区第2層	脚台B部	◎2-1少、8	⑧	B 329	"	B区第4層	筋錆車		◎2		
B 268	"	A区第3層	脚台C部	◎2-1-4-5少、8	⑦	B 330	"	C区第1層	筋錆車		◎2		
B 269	"	A区第3層	脚台C部	◎2-2-4少、8	⑪⑫								
B 270	"	D区第2層	脚台A部	◎2、8	②								
B 271	"	D区第2層	脚台A部	◎2-5	⑤								
B 272	"	B区第2層	脚台A部	◎2-1-5、8多	⑪⑫	B 331	第78回	C区覆土上層	広口壺F ₁	◎2-2-1強	◎2		
B 273	"	新覆土下層	脚台A部	◎2-2-5少、8少	⑤	B 332	"	不明	広口壺F ₁	◎2-2-8	◎2		
B 274	"	第2層	脚台C	◎2-3-10-1少、8	⑪⑫	B 333	"	覆土灰質	広口壺F ₁	◎2-2-5少、④1.1	◎2		
B 275	"	D区第4層	脚台C	◎2-1少、④2.8少	②	B 334	"	覆土灰質	広口壺F ₁	◎2-2-4-5、8	◎2		
B 276	"	B区第1層	脚台C	砂粒微、②.8	②	B 335	"	C区覆土下層	短頭鋸A	◎2-2-4-5少、8	◎2		
B 277	"	A区第2層	脚台C	◎2-2-5少、8	①	B 336	"	貼り床	甕B ₁	◎2-2-4少、8	◎2		
B 278	"	B区第4層	脚台C部	◎2-2-1-2-19、8少	⑪	B 337	"	覆土灰質	甕A ₁ 中	◎2-2-3少、8	◎2		
B 279	"	D区第4層	脚台	◎2-2-5少、8少	⑧	B 338	"	ベルト覆土上層	甕A ₁ 小	◎2-2-1-6多	◎2		
B 280	第77回	B区第1層	脚台C部	◎2-2-1少、④5、8	⑦	B 339	"	床面	甕E	◎2-2-8多	◎2		
B 281	"	最上層	脚台A部	◎2、8	②	B 340	"	床面	底部L	◎2-2-8、8	◎2		
B 282	"	A区第3層	脚台A部	◎2-2少、8少	①	B 341	"	b床面	脚台G	◎2-2-5少、8	◎2		
B 283	"	D区第2層	脚台A部	◎2-2-1	⑤	B 342	"	C区覆土上層	底部	◎2-2-4-5少、8	◎2		
B 284	"	第5層	脚台A部	砂粒微、8	⑤	B 343	"	D区覆土上層	底部C	◎2-2-8、8	◎2		
B 285	"	D区第2層	脚台A部	◎2-2、8	②	B 344	"	C区覆土上部	蓋模み部	◎2-2-8、8	◎2		
B 286	"	A区第2層	脚台C	◎2-2-1-5少、8	④	B 345	"	C区覆土上層	底影B	◎2-2-4-8、8多	◎2		
B 287	"	C区第2層	蓋A	◎2-2-4-1-5少、8	④	B 346	"	覆土灰質	底部A	◎2-1-8少	◎2		
B 288	"	A区第2層	蓋A	◎2-2少、8多	⑨	B 347	"	D区覆土下部	底部G	◎2-2-1-5少、8	◎2		
B 289	"	第2層	蓋C	◎2-1-2-4少、89	③④	B 348	"	A区覆土上層	底部J	◎2-2-1-4少、8	◎2		
B 290	"	A区第2層	手捏ね蓋	◎2-5少、8多	②	B 349	"	壁溝	底部H	◎2-1-2-4少、8	◎2		
B 291	"	第1層	蓋A ₁	砂粒微、8	⑨	B 350	"	覆土灰質	底部F	◎2-2-4-9少、④4.5	◎2		
B 292	"	C区第1層	蓋A ₁	◎2-4少、8多	④	B 351	"	覆土上層	底部H	◎2-2-1少、8	◎2		
B 293	"	C区第2層	蓋A ₁	◎2-3-4-1少	⑧	B 352	"	C区覆土上層	底部H	◎2-2-1-8少	◎2		
B 294	"	不明	底部A	◎2-2-5少、8	①	B 353	"	ベルト蓋土下層	底部J	◎2-2少	◎2		
B 295	"	第2層	底部A	◎2-2-6-5少、④5	⑤	B 354	"	D区覆土上層	高杯B ₂	◎2-2-6-4少、8	◎2		
B 296	"	第1層	底部D	◎2-1少、8	⑤	B 355	"	覆土上層	高杯E ₂	◎2-2-5-4少、8	◎2		
B 297	"	C区第2層	底部C	◎2-2少、8	①	B 356	"	C区覆土下部	高杯B ₂	◎2-2-1-8、8多	◎2		
B 298	"	不明	底部D	◎2-2少、8少	⑤	B 357	"	C区覆土下部	高杯C	◎2-2-4少	◎2		
B 299	"	第2層	底部E	◎2、8	④	B 358	"	ベルト蓋土下層	高杯C	◎2-2-8、8	◎2		
B 300	"	第4層	底部C	◎2-1少、8多	⑪⑫	B 359	"	C区覆土上層	手捏ね高杯	◎2-2-1少、8	◎2		
B 301	"	第4層	底部A	◎2-2-5少、8	⑤	B 360	"	C区覆土下部	脚台B	◎2-2少、8	◎2		
B 302	"	D区第2層	底部E	◎2-2少、8	⑪⑫	B 361	"	A区覆土下部	脚台C部	◎2-2-5-4少	◎2		

土器No.	番号	出土地区・遺構・層位	器種形器	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	番号	出土地区・遺構・層位	器種形器	胎土・砂粒組成	色調 内外
B 362	第78回	C区覆土下部	脚台A型	⑤⑥2-5・8	②	B 420	第80回	第IV区	要B ₁	⑤⑥⑦4-2-3多・8	
B 363	"	B区覆土上層	脚台基部	⑤⑥2-5少・8多	③	B 421	"	第6層	要D ₁ 中	③④⑤2-4-5少・8	②
B 364	"	C区覆土上層	脚台A型	砂粒微・8.6.3多	①	B 422	"	第2層	要D ₁ 中	④⑤2-4中・8	②
B 365	"	ベルト覆土上層	脚台A型	⑤⑥2-4-5少・8	①	B 423	"	第5層	要D ₁	⑤⑥⑦4-2-3多・8	②
B 366	"	ベルト覆土上層	脚台A型	⑤⑥2-5-4少・8	③	B 424	"	第5層	要D ₁	⑤⑥⑦2-1少	②
B 367	"	ベルト覆土上層	手捏ねぎ	⑤砂・8	②	B 425	"	第6層	要D ₁ 中	⑤2-5-3少・8微	①
B 368	"	覆土下部	連續み部	⑤砂・8多	③④	B 426	"	第6層	底部E	⑤4	⑤
B 369	"	C区覆土上層	脚台B	⑤⑥2-5中・8多	②	B 427	"	第6層	底部F	⑤⑥4-5少	⑤
B 370	"	A区	脚台B	⑤砂・8多	③	B 428	"	第6層	底部H	⑤砂少	⑤
B 371	"	A区覆土下部	脚台C	⑤⑥2-4-5少・8多	④	B 429	"	第6層	底部J	⑤⑥⑦2-1-3-4中	②
	S B 07					B 430	"	第6層	底部H	⑤⑥2-5微	
						B 431	"	第6層	粘土車	⑤粘微	①
B 372	第79回	床面	広口壺D	⑤⑥2-1-5少・8			S B 09				
B 373	"	床面	脚台A型	⑤砂・8	④	B 432	第80回	床面	高杯A ₁	⑤⑥⑦2-1-4中	
B 374	"	床面	脚台A型	⑤⑥2-4-5少・8	④⑤	B 433	"	床面	高杯E ₁	⑤⑥2-4少・8多	④
B 375	"	床面	要A ₁ 中	⑤⑥2-1-5-6少・8	②③	B 434	"	床面	杯B	⑤2-4微・5微	④
B 376	"	床面	要A ₁ 大	⑤⑥2-3-5少・8	②	B 435	"	覆土床底	要	⑤少	④
B 377	"	床面	要B ₁	⑤⑥2-4-5少・8	②	B 436	"	C区覆土中直	底部E	砂粒少	④
B 378	"	C区床面	高杯C	⑤⑥2-1-5少・8	①	B 437	"	D区覆土	底部H	⑤⑥2-3他・多	②
B 379	"	床面	高杯B ₁	⑤⑥2-4-5少・8	④⑤	B 438	"	A区覆土	底部H	⑤⑥⑦2-3-1少・8	④⑤
B 380	"	床面	杯A ₁	⑤⑥2-1-5少	②	B 439	"	柱穴	脚台付窓	⑤⑥2-4少	④
B 381	"	床面	杯A ₁	⑤⑥2-3-4少・8	②	B 440	"	柱穴	長窓造A ₁	⑤⑥3-4中・5微	④
B 382	"	床面	杯A ₁	⑤⑥2-3-4少・8	②	B 441	"	C区覆土	広口壺E ₁	⑤2-10少・4微	④
B 383	"	A区床面	底部D	砂粒少・8		B 442	"	A区覆土	広口壺G	⑤2-10少	
B 384	"	床面	底部D	⑤砂少・8少	⑥	B 443	"	A区覆土	広口壺G	⑤⑥2-4少	②
B 385	"	C区床面	底部J	⑤⑥2-6少・8	③	B 444	"	A区覆土	無頭蓋	⑤⑥⑦2-4-1中	
B 386	"	C区中央炉	底部F	⑤⑥2-1-5少・8	②③	B 445	"	覆土床直	脚台基部	⑤2	④
B 387	"	C区覆土	要D ₁ 中	⑤⑥2-6少	⑤	B 446	"	C区覆土中直	脚台A型	⑤微	④
B 388	"	A区覆土	要A ₁ 中	⑤⑥2-4-5少・8	③④	B 447	第81回	A区覆土	要A ₁ 中	⑤6.能・微	④
B 389	"	覆土	高杯B ₁	⑤微・8少	②③	B 448	"	C区覆土	要	⑤⑥2-1-5・8	④
B 390	"	B区覆土	高杯B ₁	⑤微・8少	②	B 449	"	D区覆土	要B ₂	⑤⑥2-4-3-1少・8	②
B 391	"	B区覆土	高杯E ₁	⑤砂・8	②	B 450	"	A区覆土	要	⑤⑥2-4中・8	④
B 392	"	D区床面	脚台E型	⑤砂・8少	②	B 451	"	A区覆土中層	要A ₁ 中	⑤⑥2-3-4少	④
B 393	"	床面灰土	脚台C型	⑤2-1少・8	②	B 452	"	C区覆土	高杯A ₁	2-4-3-5微・⑤微	④
B 394	"	D区覆土	脚台A型	⑤砂・8多	②③	B 453	"	B区覆土	高杯B ₁	2-3-5・8多	④
B 395	"	C区覆土	脚台基部	⑤⑥2-4-20少・8	②⑨	B 454	"	A区覆土	高杯B ₁	④-5微・8多	④
B 396	"	D区覆土	脚台C型	⑤2-1少	②	B 455	"	D区覆土	高杯A ₁	④-5少	④
B 397	"	D区覆土	底部B	⑤⑥2-6少・8	②③	B 456	"	B区覆土	高杯B ₁	④-5少	④
B 398	"	A区覆土	底部D	⑤砂・1少・8	②	B 457	"	B区覆土	高杯B ₁	④-5微	④
B 399	"	D区覆土	底部D	⑤⑥2-6少・8	②③	B 458	"	A区覆土	高杯B ₁	2-3-5・8多	④
B 400	"	十字ベルト内	底部D	⑤2-2少・8	②③	B 459	"	覆土直	高杯B ₁	④-5微・8多	④
B 401	"	A区覆土	底部G	⑤砂・8少	②③	B 460	"	覆土直	高杯A ₁	④-5少	④
B 402	"	A区覆土	底部G	⑤⑥2-1-3-4少・8	②③	B 461	"	A区覆土中層	高杯A ₁	④-5少	④
B 403	"	B区覆土	底部H	⑤⑥2-3少・8	②③	B 462	"	D区覆土	高台B	④-2-1少	④
B 404	"	A区覆土	粘輪車	⑤	③	B 463	"	C区覆土	脚台C型	④-2-5少	④
B 405	"	A区覆土	粘輪車	⑤	②	B 464	"	A区覆土	脚台基部	④-4-3・⑤少	④
B 406	"	C区覆土	粘輪車	⑤	②	B 465	"	A区覆土中層	脚台基部	④-2-5少・8	④
	S B 08					B 466	"	A区覆土	脚台基部	④-2-5-10少	④
B 407	第80回	床面	高杯G	⑤⑥2-5少	③	B 467	"	C区覆土	底前A	④-2微・8	②
B 408	"	床面	高杯G	⑤⑥2-1微・8	③	B 468	"	A区覆土中層	底前A	④-2少	④
B 409	"	床面	高杯G	⑤⑥2-3少	③④	B 469	"	A区覆土	底前E	④少	④
B 410	"	床面	脚台B	⑤2微・8	①	B 470	"	A区覆土	底前F	④-4-2-5-1少・8	①
B 411	"	床面	脚台D	⑤⑥2-1-5少・8	②	B 471	"	A区覆土中層	底前J	④-4-2-4多	①
B 412	"	第6層	高杯A ₁	⑤2微	①	B 472	"	D区覆土	底前J	④-2少	④
B 413	"	第5層	高杯C	⑤2-2微	②	B 473	"	A区覆土	底前M	④-2-4微・8	②
B 414	"	第6層	脚台基部	⑤2-4-5	③④	B 474	"	C区覆土	底前部	④-4-2-1・10	
B 415	"	第6層	広口壺G	⑤2-3-4少・8	②	B 475	"	A区覆土中層	粘輪車	④-2	④
B 416	"	第6層	壺頭部	⑤砂5	②	B 476	"	C区覆土	粘輪車	④2	④
B 417	"	第6層	底部G	⑤⑥2-3-5少・8	②③	B 477	"	淡黃茶褐色粘質質	脚台A ₁	④-2-4-5少	④
B 418	"	控張部	壺C	⑤⑥2-4-3-5少・8	②	B 478	"	淡黃茶褐色粘質質	広口壺	④-4-2-1-5少	④
B 419	"	サブトレ	壺C	⑤⑥2-4-1-3少・8	②③	B 479	"	上部包含層	脚台A ₁	4-2微	

土器No.	種類	出土地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調内外	土器No.	標番	図号	出土地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調内外
B 480	第81回	淡黃茶褐色弱粘質土	盤A ₁ 中	◎◎◎D-4-5少	②	B 540	第83回	第2層	鉢C	◎少、3	◎◎◎	①
B 481	"	淡黃茶褐色弱粘質土	盤A ₂	◎◎◎D-3-2少、8	②	B 541	"	B区覆土床底	鉢D	◎◎◎D-1-2多	◎◎◎	①
B 482	"	淡黃茶褐色弱粘質土	盤D ₁ 中	◎◎◎D-2-4少	②	B 542	"	D区覆土中層	壺頭部	◎-◎-2-4少	◎◎◎	⑤
B 483	"	淡黃茶褐色弱粘質土	高杯B	◎◎◎D-2-4少	②	B 543	"	A区覆土上層	底部E	◎-2-1-4少	◎◎◎	④
B 484	"	淡黃褐色弱粘質土	脚台C	◎◎◎D-4-2-1少	②	B 544	"	C区覆土上層	底部B	◎◎◎D-5-5少	◎◎◎	⑦
B 485	"	上部包含層	脚台基部	◎-◎-2-5-1少-5	②	B 545	"	B区覆土上層	底部B	◎◎2-1-5少、◎4少	◎◎◎	②
B 486	"	淡黃茶褐色弱粘質土	底部G	◎◎◎D-2-4-3少	②	B 546	"	C区覆土中層	底部E	◎-2-1-4多、8少	◎◎◎	②
B 487	"	淡黃茶褐色弱粘質土	底部G	◎◎◎D-2-3-4少、8	②	B 547	"	C区覆土中層	底部E	◎-2-4少	◎◎◎	②
B 488	"	淡黃茶褐色弱粘質土	把手	◎◎◎D-3-4-2少	②	B 548	"	B区覆土床底	底部B	砂粒微、8	◎◎◎	②
S B 10												
B 489	第82回	床面	広口盤I	5枚	③	B 550	"	十字バット上半部	底部A	◎◎◎D-1-2強	◎◎◎	②
B 490	"	床面	短縫蓋A	◎◎◎D-3-中、8	③	B 551	"	覆土上層	底部A	◎◎5-4	◎◎◎	⑨
B 491	"	床面	底部E	◎◎少-微	③	B 552	"	A区覆土上層	底部C	◎◎2強、8	◎◎◎	④
B 492	"	床面	底部D	◎◎◎D-2-5-1強	②②	B 554	"	A区覆土中層	底部C	◎◎◎D-2-4-11少、8	◎◎◎	⑧
B 493	"	床面	底部C	◎◎◎D-1-微	②②	B 555	"	D区覆土	底部J	◎◎◎D-2-6	◎◎◎	⑥
B 494	"	床面	底部A	◎◎◎D-5-4-2-1多	②②	B 556	"	A区覆土上層	底部F	◎◎◎D-2-1強	◎◎◎	⑥
B 495	"	床面	短縫蓋C	◎◎◎D-2-5少	③	B 557	"	B区覆土上層	蓋A ₁ 、小	◎◎◎D-1-中	◎◎◎	⑨
B 496	"	床面	脚台付道	◎◎◎D-1-2-5少、8	②	B 558	"	覆土上層	底部F	砂粒微	◎◎◎	①
B 497	"	床面	高杯B ₁	◎◎◎D-2少-2-1-5少	②	B 559	"	A区覆土中層	底部J	◎-2-1-4-3多	◎◎◎	④
B 498	"	床面	高杯B ₂	◎薄	③	B 560	"	C区覆土中層	底部F	◎◎◎D-2-1-4-6多	◎◎◎	④
B 499	"	C区覆土、W.S.柄	高杯A ₁	◎-◎-2-5強	②	B 561	"	A区覆土上層	底部E	◎少、8	◎◎◎	⑤
B 500	"	床面	高杯蓋E	◎◎◎D-2-5少、8	②	B 562	"	B区覆土上層	底部E	◎◎◎D-2-8	◎◎◎	④
B 501	"	床面	脚台C	砂粒少	③	B 563	"	C区覆土中層	底部H	◎-2-1-4-8少	◎◎◎	⑤
B 502	"	床面	脚台基部	◎◎◎D-2-10強	②②	B 564	"	D区2層	底部H	◎◎◎D-2-1強、8多	◎◎◎	⑤
B 503	"	床面	脚台C	◎◎◎D-2-10強	②②	B 565	"	C区覆土上層	底部H	◎-2-2	◎◎◎	④
B 504	"	床面	手舟E	◎◎◎少	⑤	B 566	"	A区覆土床底	底部L	砂粒微、8	◎◎◎	④
B 505	"	中央炉覆土	脚台A附部	◎◎◎D-1強、8	②	B 567	"	C区覆土中層	底部L	◎◎◎D-2-8	◎◎◎	④
B 506	"	床面	脚台A附部	◎◎◎D-2-5強、8	②	B 568	"	B区覆土床底	土製品	砂粒なし	◎◎◎	④
B 507	"	B区新壁溝	脚台A附部	◎◎◎D-2-5少	②	B 569	"	C区覆土中層	土製品	◎少	◎◎◎	①
B 508	"	床面	石台B ₁	◎-◎-5-4少	②	B 570	"	A区覆土	蓋C	◎-1-2-4強	◎◎◎	⑤
B 509	"	床面	跡A ₁	◎-◎-2-4-4少	②	B 571	"	A区覆土	蓋A ₁	◎-1-2-4強、8	◎◎◎	⑤
B 510	"	床面	底部E	◎-1-2-4強	②②	B 572	第84回	D区覆土上部	脚台B	◎-2-5強	◎◎◎	④
B 511	"	新床面	底部H	◎2-2	②	B 573	"	D区覆土上部	脚台B	◎-2-3-8	◎◎◎	④
B 512	"	中央炉覆土	底部J	◎2-5微	②②	B 574	"	C区覆土中層	脚台基部	◎-2-1-4	◎◎◎	⑤
B 513	"	床面	底部H	小砂粒、少	②②	B 575	"	第2層	脚台基部	◎-2-1-2強、H-2-1	◎◎◎	⑪
B 514	"	S K2	底部H	◎◎◎D-2-1-4-5多	②②	B 576	"	A区覆土上部	脚台A附部	◎-2-8、8多	◎◎◎	⑪
B 515	"	床面	底部J	◎2-1少	②②	B 577	"	D区覆土上部	脚台基部	◎-2-5-8	◎◎◎	⑪
B 516	"	床面	底部H	◎◎◎D-2-1-2少	②②	B 578	"	B区覆土直底	脚台基部	◎-1-2-1-2	◎◎◎	④
B 517	"	床面	底部H	◎◎◎D-2-1-2少	②	B 579	"	D区覆土床底	脚台基部	◎-1-2-1	◎◎◎	④
B 518	"	床面	底部H	◎2-4強、8	②②	B 580	"	十字バット上半部	脚台基部	◎-2-4少	◎◎◎	⑤
B 519	"	床面	蓋A ₁	◎◎◎D-2-1少	②②	B 581	"	B区覆土上部	脚台A	◎-2-5強	◎◎◎	④
B 520	"	床面	蓋A ₂	◎◎◎D-2-4少、8	②	B 582	"	D区覆土中層	脚台基部	◎-2-5強、8	◎◎◎	④
B 521	"	B区壁溝	石台A ₃	◎2-1-2少	②	B 583	"	上部包含層	脚台C	◎-2-1-2少、◎2-1	◎◎◎	④
B 522	"	中央炉覆土	底部H	◎-◎-2-1少	②	B 584	"	C区覆土中層	脚台C	◎-2-5強、8	◎◎◎	④
B 523	"	C区、S.W.鍋	短縫蓋A	◎2-5強、8	②②	B 585	"	覆土	蓋C	◎-2-8、8	◎◎◎	④
B 524	"	B区覆土新壁溝	壺頭部	砂粒微	②	B 586	"	B区覆土床底	脚台A腹部	◎-2-8、8	◎◎◎	④
B 525	"	B区旧壁溝	甕A ₁	◎◎◎D-2-1-2多	②②	B 587	"	B区覆土直底	脚台C	◎-2-2	◎◎◎	④
B 526	第83回	C区覆土中層	広口盃F ₂	◎◎◎D-2-8	②	B 588	"	C区覆土上部	脚台C	◎-2-8	◎◎◎	④
B 527	"	覆土	広口盃F ₃	◎◎◎D-2-1-5少、8	②	B 589	"	D区覆土直底	脚台C	◎-2-5-8	◎◎◎	④
B 528	"	D区覆土上部	石台A ₂	◎◎◎D-2-5多	②②	B 590	"	S K	脚台C	◎-2-5-8	◎◎◎	④
B 529	"	B区覆土底灰	甕A ₂	◎5-2強	②	B 591	"	B区覆土中層	脚台C	◎-2-5-8	◎◎◎	④
B 530	"	C区覆土中層	壺A ₂	◎-◎-2-4少	②	B 592	"	中央炉覆土	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 531	"	B区覆土上層	甕D ₁ 中	◎◎◎D-1-5-6少、8	②	B 593	"	柱子D-5-茶褐色	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 532	"	D区覆土上部	甕D ₁ 大	◎◎◎D-2-4-5-11	⑤	B 594	"	B区壁溝	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 533	"	中央炉覆土	高杯C	◎◎◎D-2-4-1-5強	②②	B 595	"	B区壁溝	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 534	"	B区壁溝	高杯B ₂	砂粒など含まざ	②	B 596	"	B区覆土上層	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 535	"	C区覆土中層	高杯B ₂	◎2-8	②②	B 597	"	B区覆土直底	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 536	"	B区覆土底灰	高杯B ₂	◎5強、◎6	②	B 598	"	A区覆土直底	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 537	"	C区覆土中層	甕D ₂	◎◎◎D-2-8強、8	⑤	B 599	"	B区覆土上層	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 538	"	C区覆土中層	甕A ₂	◎◎◎D-2-5-3強、8	⑤	B 600	"	B区覆土直底	脚踏車	◎-2-5	◎◎◎	④
B 539	"	北側段	甕D ₂	◎◎◎D-2-8	②②	B 601	"	B区覆土上層	脚踏車	◎-2-5-3少	◎◎◎	④

土器番号	持田号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・彩粒組成	色調内外	上器No.	棒番	回号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・彩粒組成	色調内外
B 722	第87回	A区覆土上層	甕A:大	⑤⑥⑦-2-4少、8	②③	B 784	第88回	上部包含層	脚台A柱狀部	⑤⑥⑦-2-1少	⑤	
B 723	~	ベルト覆土上層	甕D:大	④⑤-2-3少、8	①	B 785	~	上部包含層	脚台E	⑤⑥⑦-2-1-4少	⑩⑪	
B 724	~	B区覆土中底	甕D:中	⑤⑥⑦-2-4少、8	⑤	B 786	~	上部包含層	臺面	⑤⑥⑦-2-1多、8	⑫⑬	
B 725	~	A区覆土上層	高杯B:	⑤⑥2重、8少	②③	B 787	~	上部包含層	手握石杯	②③-2、8	⑭	
B 726	~	ベルト	高杯B:	⑤⑥-2-3少、8	⑤⑥	B 788	~	上部包含層	甕A:	⑤⑥⑦-2-1-4少、8	⑮	
B 727	~	D区覆土上層	高杯B:	⑤⑥⑦-2-1-4少、8少	①	B 789	~	上部包含層	甕A:	⑤⑥-2-1少、8少	⑯⑰	
B 728	~	A区覆土下層	高杯B:	⑤-2-1少、8多	①							
B 729	~	ベルト覆土下層	脚台基部	⑤⑥-4-1-3少、8	②							
B 730	~	A区覆土中底	脚台基部	⑤⑥-2-1-4少、8	②	B 790	第89回	A区覆土	広口壺E	⑤⑥⑦-3-2少、8	⑰	
B 731	~	ベルト	脚台基部	⑤⑥-2-5少、8	⑥	B 791	~	A区覆土	広口壺D	⑤⑥⑦-1-2少、8	⑱	
B 732	~	A区覆土上層	脚台基部	砂粒微、8	⑤	B 792	~	A区覆土	底部A	⑤-6-5-4-2	⑲	
B 733	~	C区覆土上層	脚台基部	⑤-6	②	B 793	~	D区覆土	底部A	⑤-5少、8	⑳	
B 734	~	ベルト覆土下層	脚台基部	⑨1重、8	①	B 794	~	D区覆土	甕D:中	⑤⑥-2-3少、8多	㉑	
B 735	~	覆土	底部E	⑨-2-1重、8少	⑧⑨	B 795	~	A区覆土	甕F	⑤-4-1-3-6少、8	㉒㉓	
B 736	~	A区覆土上層	底部E	⑨-2-4少、8	①	B 796	~	D区覆土	底部J	⑤-1-2-4少、8	㉔㉕	
B 737	~	D区覆土上層	底部E	⑨-5-2重、8	④⑤	B 797	~	D区覆土	底部L	⑤-1-2少、8	㉖㉗	
B 738	~	A区覆土上層	底部G	⑨⑩-2-4少、8少	⑧⑨	B 798	~	D区覆土	底部M	⑤⑥⑦-2-1-3少、8	㉘㉙	
B 739	~	南清掃	底部E	⑨-2-1-4少、8	②	B 799	~	D区覆土	脚台基部	⑨⑩-2-1重、8少	㉚㉛	
B 740	~	D区覆土上層	底部J	⑨⑩-2-3少、8少	①②							
B 741	~	C区覆土上層	底部H	⑨⑩-5少、8	⑨							
B 742	~	D区覆土上層	底部G	⑨⑩-2-4-3少	④	B 800	第89回	以南直横掘出	底部E	⑤⑥⑦-2-3少、8	㉛	
B 743	~	C区覆土上層	底部J	⑨⑩-2-1-2重	⑧							
B 744	第88回	ベルト覆土下層	手捏泥A:	⑨4他微	②							
B 745	~	D区覆土上層	蓋A	砂粒微、8多	④	B 801	第89回	柱穴P2	底部G	⑤⑥-2-3中、8	㉛㉜	
B 746	~	C区覆土上層	脚台基部	⑨⑩-4-2-1-3-4	②							
B 747	~	C区覆土下層	脚台基部	⑨⑩-1-5少、8少	⑨							
B 748	~	D区覆土上層	脚台基部	⑨-2重、8	②⑦	B 802	第89回	覆土	脚台B:	⑤⑥-2-1少、8	㉟	
B 749	~	B区覆土上層	脚台E	⑨⑩-1-5少、8少	①	B 803	~	第2層	脚台A:	⑤⑥⑦-4-1、8	㉟	
B 750	~	D区覆土上層	底部L	⑨⑩-2-1-3少、8	④	B 804	~	覆土	底部G	⑤⑥⑦-2-1-3多	㉛㉜	
B 751	~	B区覆土床底	底部L	砂粒微	②							
B 752	~	覆土	鉢A:	⑨⑩-5少、8多	①							
B 753	~	A区覆土下層	鉢B	⑨⑩-2-1-2-4	①	B 805	P L39	S B05、第1層	底部L	⑤⑥-2少	㉛㉜	
B 754	~	上部包含層	広口壺	⑨⑩-2-1-3少、8	⑤	B 806	P L61	S B12、底面	軽鍊車			
B 755	~	上部含泥、黑色落ち込み	広口壺	⑨⑩-5-2-1微	②	B 807	P L40	S B07、第5層	甕			
B 756	~	上部包含層	広口壺B:	⑨-2-1微、8多	②	B 808	~	S B08、第1層	脚台C:網部	⑤⑥-2-6、⑥6	㉛㉜	
B 757	~	上部包含層	広口壺C:	⑨-2-3微、8多	②	B 809	~	S B08、第6層	底部F	⑤⑥-2-3微	㉛㉜	
B 758	~	上部包含層	広口壺F:	⑨⑩-2-1-4少	②	B 810	~	S B08、第5層	底部F	⑤⑥⑦-2-5、8	㉛㉜	
B 759	~	上部包含層	底部H	微、8少	①	B 811	~	S B09、上部包含層	甕			
B 760	~	上部包含層	底部H	⑨-2-1-5-6中、8	⑤	B 812	~	S B09、上部包含層	脚台裸部			
B 761	~	上部包含層	甕	⑨⑩-1-2-3少、8	⑨	B 813	~	S B10、壁溝	底部			
B 762	~	上部包含層	甕	⑨-1-4少、8	②③	B 814	P L41	S B10、覆土上層	脚台			
B 763	~	上部包含層	甕A:	⑨⑩-2-1-2-4少	③	B 815	~	S B08、覆土	底部H			
B 764	~	上部包含層	底部J	⑨⑩-1-2-1-3少	①	B 816	~	S B10、上部包含層	脚台A:網部			
B 765	~	上部包含層	底部H	⑨-2-1-5-3-4②、8	⑤⑥	B 817	P L61	S B10、A区黄色弱B質土	軽鍊車			
B 766	~	上部包含層	底部F	⑨⑩-2-1少、8	⑥⑦	B 818	~	S B10、C区覆土中層	軽鍊車			
B 767	~	上部包含層	底部G	⑨-2-4少、8	②③	B 819	~	S B10、B区覆土中層	軽鍊車			
B 768	~	上部包含層	底部H	⑨⑩-4-2-1-3少、8	④⑤	B 820	~	S D6下部	軽鍊車			
B 769	~	上部包含層	底部H	⑨-1-5微	②	B 821	P L62	S B05	甕	㉟㉛	㉛㉜	
B 770	~	上部包含層	底部L	砂粒微、8	②	B 822	~	甕				
B 771	~	上部包含層	底部H	⑨-2-1-5-4少、8	③	B 823	第89回	S B10、覆土	甕B:	⑤⑥⑦-9-2-1多	㉛㉜	
B 772	~	上部包含層	底部K	⑨-2微、8少	②③	B 824	P L60	S B10、第2層	鉢			
B 773	~	上部包含層	脚台基部	⑨-5-2-4-多	②③	B 825	~	S B02、D区第1層	鉢			
B 774	~	上部包含層	脚台基部	⑨-5、⑩-2	④⑤	B 826	~	S B06、A区覆土下部	甕体部			
B 775	~	上部包含層	脚台基部	⑨-2-1少、12、8	④	B 827	~	S B10、B区覆土上部	甕体部			
B 776	~	上部包含層	脚台基部	⑨⑩-5-2-1-4、8	⑤	B 828	P L61	S B02、C区宋器	甕体部			
B 777	~	上部包含層	脚台基部	⑨-4-5少	④	B 829	~	S B05、B区第3層	甕			
B 778	~	上部包含層	脚台基部	⑨⑩-1-2-4-3少、8	②							
B 779	~	上部包含層	脚台C	⑨⑩-4-2-1-5多	①							
B 780	~	上部包含層	脚台基部	⑨-5少、⑩-2、8	①	P 1	第89回	柱穴204	長頸甕B	⑤⑥-2-5-1-3少、8微	㉛㉜	
B 781	~	上部包含層	脚台C	⑨⑩-4-2-1少、8	⑤	P 2	~	柱穴257	甕D:	⑨⑩-5-5-3-3微、8微	㉛㉜	
B 782	~	上部包含層	脚台A:網部	⑨-2-1微、8	②	P 3	~	柱穴	脚台E	⑤⑥-2-5-1-3-6-8微	㉛㉜	
B 783	~	上部包含層	脚台A	⑨-1-2少	④	P 4	~	柱穴267	底部D	⑤⑥-2-2微、8微	㉛㉜	

土壤出土器

土器No.	番号	出土地地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調	土器No.	番号	出土地地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調
K 1	第90回	S K 1	広口壺C ₂	51-39.1.8 黄	③	K 63	第91回	S K 175	轟錐車	42-2.5R. 8多	220
K 2	*		広口壺C ₁	51-39.2.3-5. 中	④	K 64	*	S K 178	圓台基部	51-5少. 1.2	2
K 3	*		甕	52-1.多	②	K 65	*		底部G	51-2.1-3.5少	3
K 4	*		高杯F	51-1.8. 8	②	K 66	*		底部A	51-5.8	220
K 5	*		底部F	51-1.8. 1.1.3-中	⑤⑥	K 67	*	S K 189	底盤G	51-5.8. 1.2-5. 細	2
K 6	*	S K 15	広口壺C ₂	51-2.5.1.2. 1.8	①	K 68	*	S K 196	広口壺I	51-2-1.微	2
K 7	*		底部G	51-2.5-1.9. 1.2-5.8	⑨	K 69	*		広口壺B ₁	51-2.5.8. 5.8	2
K 8	*		底部G	51-2.8. 8微	④	K 70	*		広口壺B ₁	51-2.8. 8微	220
K 9	*		底部G	51-2.8. 8微	④	K 71	*		広口壺F ₁	51-2.8. 8微	2
K 10	*	S K 43	底部J	51-3-5. 1.1.2. 細. 滑	①	K 72	*		甕D ₁ 中	51-2-6.5少	2
K 11	*	S K 53	脚台H	52-5少	②	K 73	*		甕	51-1.8. 8微	220
K 12	*	S K 37	広口壺F ₂	51-2.1.中. 1.2.8. 細	①	K 74	*		甕A ₁	51-2.8. 8少	32
K 13	*		甕	51-1.5-1.8. 1.2-5.8	⑤	K 75	*		甕D ₁	51-2.5	2
K 14	*		脚台B	52-1.5微	②	K 76	*		高杯	51-少. 5.8. 2.5-6	2
K 15	*		鉢C	51-2.1.5. 8. 細. 滑	④	K 77	*		脚台C	51-少. 5.8. 2.5-1.4	2
K 16	*		鉢C	51-2.8. 8	②	K 78	*		脚台基部	51-2.5微. 8微	220
K 17	*	S K 46	鉢A ₂	51-2.3-1.5. 8微	④	K 79	*		脚台基部	51-少. 5.8. 2.4-3	2
K 18	*		鉢A ₂	51-2.8. 8. 1.5-6	④	K 80	*		脚台E	51-少. 5.8. 2.5-6	32
K 19	*	S K 50	高杯E ₁	51-少. 5.8. 2.3-少	⑩	K 81	*		脚台C	51-少. 5.8. 2.8	220
K 20	*	S K 87	広口壺C ₁	51-2.5-1.2. 1.2-5	①	K 82	*		脚台基部	51-少. 5.8. 2.5. 細	2
K 21	*		短腹甕	51-5.8. 8. 8	②	K 83	*		脚台基部	51-少. 5.8. 2.1-6	220
K 22	*		広口壺C ₂	51-2.1-3.6. 8. 細	③	K 84	*		脚台E粗部	51-少. 5.8. 2.5	2
K 23	*		甕D ₁ 中	51-2.9	⑤	K 85	*		脚台E粗部	51-2.5-4.9. 8微	2
K 24	*		底部G	51-少. 1.2. 5-6	⑤	K 86	*		脚台D粗部	51-少. 5.8. 2.5-8	2
K 25	*	S K 91	鉢G	51-2.5微. 8微	④	K 87	*		鉢A ₁	51-少. 5.8. 2.5	2
K 26	*	S K 92	底部H	51-1.8. 1.2. 8微	④	K 88	*		鉢A ₁	51-少. 5.8. 2.5-4	2
K 27	*	S K 72	脚台	51-2.5-3.8. 8少	⑦	K 89	*		近前G	51-少. 5.8. 2.5-6	220
K 28	*		脚台基部	51-2.5-1.9. 8. 8微	②	K 90	*		底部C	51-2.5微. 8微	2
K 29	*	S K 96	高杯A ₁	51-少. 5.8. 8. 細	④	K 91	*		底部J	51-少. 8微	220
K 30	*	S K 102	短腹甕A ₁	51-2.1.8. 8. 微	⑤	K 92	*		底部G	51-少. 2-3-1-3	5
K 31	*	S K 103	器台A ₂	51-2.1.8. 8. 微	⑤	K 93	*		近前F	51-少. 5.8. 2-1.8微	2
K 32	*		底部E	51-8少	①	K 94	第92回	S K 193	甕D ₁ 中	51-2-3-1.中. 8微	220
K 33	*		甕A ₁ 小	51-2.5-1.6-8	②	K 95	*		近前J	51-2.5少. 8微	2
K 34	*		高杯B ₁	51-2.5微. 8少	②	K 96	*		脚台基部	51-2-1.8. 1.8	220
K 35	*		高杯B ₁	51-2.8	④	K 97	*	S K 204	広口壺F ₁	51-少. 5.8. 2.5-1.8	2
K 36	*		底盤A	51-2.5-1.8. 8多	⑤	K 98	*		脚台基部	51-少. 8	1
K 37	*	S K 118	広口壺D	51-2.4-5. 8微	⑤	K 99	*	S K 202	甕D ₁ 中	51-少. 5.8. 2.5-6	220
K 38	*		広口壺J	51-2.5微. 8少	⑤	K 100	*	S K 207	甕	51-少. 5.8	2
K 39	*		広口壺J	51-2.8. 10	③	K 101	*		鉢C	51-2-3-1.8	2
K 40	*		高杯E	51-2.5-1.8. 8少	⑤	K 102	*	S K 208	重前F	51-2-3-9. 8. 8微	220
K 41	*		脚台茶器	51-2.5-1.8. 1-5-1	①	K 103	*	S K 215	広口壺	51-少. 5.8. 2.5-1.8	2
K 42	*		底部J	51-3.9. 1.2. 8微	④	K 104	*		甕A ₁ 中	51-2-1.8. 8. 8少	2
K 43	*		底部J	51-5-1.8. 1.8微	②	K 105	*		近前J	51-2-1.8. 8. 8少	2
K 44	*		蓋擴F ₂	51-2.5-3.8少	⑤	K 106	*	S K 216	脚台基部	51-2-1.8. 8. 8少	220
K 45	*		蓋擴F ₂	51-2.5-3.8. 1.2. 8微	③	K 107	*	S K 227サブトレ	高杯B ₁	51-2-1.8. 8. 8少	220
K 46	*		脚台A茶器	51-2.9-1.10	⑤	K 108	*		高杯B ₁	51-3-4. 8. 8. 8少	2
K 47	第91回	S K 150	底部A	52-3-1	④	K 109	*	S K 228	鉢G	51-3-4. 8. 8. 8少	2
K 48	*	S K 165	底盤A茶器	52-1.8	④	K 110	*		蓋F ₂	51-5-1.8. 8. 8少	2
K 49	*		広口壺C ₂	52-1.8	⑨	K 111	*		高杯D	51-2-1.8. 8. 8少	2
K 50	*	漢茶器	脚台E	51-8少	④	K 112	*		鉢G	51-5-1.8. 8. 8少	2
K 51	*	漢茶器	脚台E	51-8少	④	K 113	*		甕D ₁ 中	51-3-4. 6. 8. 8少	2
K 52	*		底部A	52-1.5-9	⑪②	K 114	*		鉢D ₁	51-2.5-2.5. 8. 8少	2
K 53	*	S K 175	甕D ₁ 大	51-8. 8. 9-13-4	⑤⑪	K 115	*		底部D	51-2-1.8. 8. 8少	220
K 54	*		高杯C	51-1.5-6. 8. 8少	⑤⑩	K 116	*	S K 230	底部	51-2-1.8. 8. 8少	220
K 55	*		高杯A ₂	51-5-1.8. 1.8. 8. 8少	⑤⑪	K 117	*		高杯B ₂	51-2-1.8. 8. 8少	2
K 56	*		高杯B ₁	51-2-1.5-8. 8. 8少	③	K 118	*	S K 234	広口壺B ₂	51-2-1.8. 8. 8少	2
K 57	*		高杯E	51-2.5. 8. 8少	⑨②	K 119	*		甕C	51-少. 8	2
K 58	*		底部B	51-2-1.5-8. 8多	⑤	K 120	*	S K 235	広口壺B ₁	51-2-1.5-8. 8多	2
K 59	*		底部J	51-2-1.8. 1.5-9	②	K 121	*		短腹甕A ₂	51-2-1.8. 1.5-9	220
K 60	*		脚台基部	51-1.5-8. M. L. 8微	②⑤	K 122	*		小型甕	51-2-1.8. 8微	220
K 61	*		脚台C	51-9. 8. 8. 1.5-2. 8微	②	K 123	*		手握丸杯	51-1.8. 8微	220
K 62	*		脚台基部	51-2.8. 8多	⑤	K 124	*		手握丸杯	51-少. 8. 8少	2

土器号	排 号	出土地区-遗物-层位	器種器形	胎土-砂粒組成	色調 内外	土器号	排 号	出土地区-遗物-层位	器種器形	胎土-砂粒組成	色調 内外	
K 125	第92回	S K235	脚台A柱状部	⑤⑥1-5-39, ⑦⑧0, 89	②	K 187	第94回	S K629	高杯A ₁	⑤⑥1-5少	④⑤	
K 126	~	~	底部J	⑤⑥⑦⑧2-1-5-4多	①②	K 188	~	S K631	庄口壹G	⑤⑥少⑦⑧2-5-6	②	
K 127	~	~	底部H	⑤⑥⑦⑧2-3-4-5多	①	K 189	~	~	脚台B	⑤⑥2-5-1微、8少	②	
K 128	~	S K236	庄口壹J	⑤⑥2-19, ⑦⑧2-8微	③④⑤	K 190	~	S K634	庄口壹D	⑤⑥2-1-1中, ⑦2微	①	
K 129	~	~	脚台A柱状部	⑤⑥2-23484545-19, 18	②③	K 191	~	~	庄口壹F ₁	⑤⑥2-519, ⑦2-8微	③	
K 130	~	~	脚台基部	⑤⑥1-少, ⑦⑧2, 8微	①	K 192	~	~	脚台付壹	⑤2-1-度、8少	⑤	
K 131	~	~	脚台基部	⑤⑥2-2-3-4少, 8度	③④	K 193	~	~	鉢G	⑤2-2-度、8多	⑨	
K 132	~	~	脚台基部	⑤⑥2-19, ⑦⑧2, 8微	③	K 194	~	~	底部J	⑤⑥2-3-1-5少, 8少	④⑤	
K 133	~	~	脚台基部	⑤⑥2-5-1-3少, 8度	⑤	K 195	~	~	底部A	⑤⑥2-3-5-9, ⑦3, 8少	④⑤	
K 134	~	~	底部	⑤⑥2-2-3-1-3, 8	③④⑤	K 196	~	~	底部L	⑤⑥2-2-3-8, 8微	⑤	
K 135	~	~	底部J	⑤⑥2-1-3-8, 8微	③	K 197	~	S K635	脚台付脚	⑤⑥2-3-8, ⑦2-8微	②	
K 136	~	~	底部J	⑤⑥2-3-6-9, ⑦⑧2, 8微	③④⑤	K 198	~	~	長期壹D	⑤⑥2-2-5-9, 8多	①	
K 137	第93回	S K241	庄口壹H	⑤⑥2-1-2-1-5-4	③④⑤	K 199	~	~	鉢B	⑤⑥2-1-5-9, 8	②	
K 138	~	~	脚台A	⑤⑥2-19, ⑦⑧2, 8微	①②	K 200	~	~	鉢C	⑤⑥2-1-5-9, 8	①②	
K 139	~	~	脚台B	⑤⑥2-19, ⑦⑧2, 8微	③	K 201	~	~	鉢D	⑤⑥2-1-5-9, 8	③	
K 140	~	S K301	暗灰黃色	⑤⑥2-8, 8微	③	K 202	~	~	鉢E	⑤⑥2-1-5-9, 8	④	
K 141	~	S K501	雙D ₁	⑤⑥2-1-2少, 8微	⑤	K 203	~	~	鉢F	⑤⑥2-1-5-9, 8	④	
K 142	~	~	底部J	⑤⑥2-1微	⑤⑥	K 204	~	S K651	長頸壹D	⑤⑥2-1-3-1少, 8	⑤	
K 143	~	S K503	雙A ₁ 中	⑤⑥少2-1-5, 8微	①②	K 205	~	~	雙A ₂	⑤⑥少2-1-5-6-8	⑤	
K 144	~	S K506	底部L	⑤⑥2-1-6微	③④⑤	K 206	~	~	腳台基部	⑤⑥2-1-6-8	⑤	
K 145	~	S K512	庄口壹B ₁	⑤⑥少2-1-6-8, 8微	③	K 207	~	~	底部G	⑤⑥2-3-少, ⑦6, 8	⑤	
K 146	~	S K515	雙A ₁ 中	⑤⑥2-5微, ⑦⑧2	②	K 208	~	S K656	腳台基部	⑤2-1-少, ⑥1-5, 8	②	
K 147	~	上層	高杯B ₁	⑤⑥少2-1-5-1	③	K 209	~	S K657	底部G	⑤⑥少2-1-5-6, 8	②③	
K 148	~	S K516	底部E	⑤⑥多1-少	⑤	K 210	~	S K653	底部G	⑤⑥少2-4-1, 8	⑤	
K 149	~	S K524	脚台基部	⑤⑥少4-1-5-1-5-1	③④	K 211	第95回	S K649	短頸壹A	⑤⑥少2-1-5-9, 8	②	
K 150	~	S K526	庄口壹B ₂	⑤⑥少2-1-5-9, 8微	③	K 212	~	A区	底部B	⑤⑥2-5-9, ⑦⑧2, 8微	②③	
K 151	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥2-1-10多	③④⑤	K 213	~	~	雙D ₂	⑤⑥2-1-3-5-8, 8	④	
K 152	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥少2-1-8, 8微	③	K 214	~	~	脚台柱狀部	⑤⑥2-1-6-9, 8微	④	
K 153	~	~	脚台基部	⑤⑥1-5少, ⑦⑧2	⑤	K 215	~	~	鉢D ₂	⑤⑥2-4	④	
K 154	~	~	脚台基部	⑤⑥少2-1-5-2-8少	①	K 216	~	A区	底部G	⑤⑥2-3微, 8微	②	
K 155	~	~	雙A ₂	⑤⑥少2-1-5-2-1-5-4	③	K 217	~	S K659	上層(北)	庄口壹D	⑤⑥少2-1-5-9, 8	②
K 156	~	S K528	脚台B	⑤⑥1-5少, 8微	③	K 218	~	~	砂粒微	⑤⑥2-3-8	④	
K 157	~	~	底部G	⑤⑥2-5微	①	K 219	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥2-3-4-9, 8	④	
K 158	~	~	底部G	⑤⑥2-1-5少, ⑦⑧2	①	K 220	~	~	鉢D ₁	⑤⑥2-3-8, 8	④	
K 159	~	S K536	脚台付脚	⑤⑥多1-少	⑤	K 221	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥1-5-8, 8多	③	
K 160	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥2-1-5-6-8, 8微	⑤	K 222	~	~	雙D ₃	⑤⑥2-4-5-8, 8微	②	
K 161	~	~	脚台柱狀部	⑤2-1微	①	K 223	~	~	下層	⑤⑥3-1微, 8	④⑤	
K 162	~	S K527	底部J	⑤⑥2-1-5少, 8少	③	K 224	~	~	脚台C部	⑤⑥2-3-8, 8微	④	
K 163	~	S K539	底部A	⑤1-5-6微, ⑦⑧2	①	K 225	~	~	底部E	⑤⑥2-3-8, 8微	④	
K 164	~	~	脚台A柱狀部	⑤⑥少2-5-1-8微	③	K 226	~	~	脚台A部	⑤⑥2-3-8, 8	④	
K 165	~	S K536	脚台C部	⑤2-1微	③	K 227	~	~	高杯E ₂	⑤⑥2-1-8, 8	④⑤	
K 166	~	S K544	混入	庄口壹G	⑤⑥2-9-5微, 8多	③④⑤	K 228	~	~	底部A	⑤⑥2-4-微, 8	④⑤
K 167	~	~	高杯B ₁	⑤⑥少2-5-2-5-8, 8微	①	K 229	~	~	底部L	⑤⑥2-8, 8	④⑤	
K 168	~	S K546	道A ₂	⑤⑥2-1多, 8微	⑤	K 230	~	~	底部E	⑤⑥2-3-8, 8微	④	
K 169	~	S K547	底部E	⑤2-5-1微, 8微	①②	K 231	~	~	手捏小鉢	⑤⑥2-8, 8	④	
K 170	~	~	底部G	⑤⑥1-5少, 8微	③④⑤	K 232	~	S K659	下層(北)卜除去	幼稚車	⑤⑥2-5-8, 8	④
K 171	~	S K548	雙C	⑤⑥少2-3-4-6	⑤⑥	K 233	~	S K659	下層(北)	幼稚車	⑤⑥2-1-8, 8	④⑤
K 172	~	S K550	庄口壹B ₂	⑤⑥2-3-5-9, 8微	③④⑤	K 234	~	S K663	ベルト除去	底部A	⑤⑥少	④
K 173	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥2-1-5-9, 8微	①	K 235	~	S K672	北壁	底部D	⑤⑥2-4-微, 8多	④⑤
K 174	~	S K548	底部J	⑤⑥1-5-9, 8微	⑤	K 236	~	~	底部J	⑤⑥2-1-6-8, 8	④⑤	
K 175	~	S K554	脚台脚	⑤⑥2-5-8, 8微	③④⑤	K 237	~	S K675	(北)	庄口壹F ₁	⑤⑥2-5-8微	④
K 176	第94回	S K598	庄口壹D	⑤⑥2-3-9, 8微	①	K 238	~	~	雙D ₂ 中	⑤⑥2-1-5-3少, 8	④	
K 177	~	~	底部J	⑤⑥2-1-3少, 8微	③④⑤	K 239	~	S K671	第1層	庄口壹H	⑤⑥3-6-4-8, 8	④
K 178	~	S K611	器台A ₁	⑤⑥3-1微, ⑦⑧2	①	K 240	~	~	無頭壹	⑤⑥2-1-8, 8少	④	
K 179	~	S K613	高杯A ₂	⑤⑥2-20, ⑦⑧2, 8少	③④	K 241	~	~	脚台A柱狀部	⑤⑥2-3-1-5少	④	
K 180	~	S K616	庄口壹G	⑤2-1少, 8微	①	K 242	~	~	脚台C部	⑤⑥2-1-2-5微	④⑤	
K 181	~	S K617	鉢B	⑤2-5微, 8少	③	K 243	~	~	脚台基部	⑤⑥2-4-9, 8	④	
K 182	~	S K622	脚台基部	⑤⑥2-3-1-5, 8微	③④⑤	K 244	~	~	脚台基部	⑤⑥2-4-微, 8	④	
K 183	~	S K624	庄口壹E ₂	⑤⑥2-4-9, ⑦⑧2-8微	③	K 245	~	~	底部L	⑤⑥2-4-微, 8	④	
K 184	~	S K629	庄口壹B ₂	⑤⑥2-1-2少	①	K 246	~	S K701	庄口壹B ₁	⑤⑥2-3-8, 8微	④	
K 185	~	~	雙D ₁	⑤⑥1-5-3少	③④⑤	K 247	~	S K701	黑色小櫻花入土	底部A ₁	⑤⑥2-5-6-9, ⑦3, 8少	④
K 186	~	~	雙D ₂ 大	⑤⑥2-3-2-8, 8微	⑤	K 248	~	S K701	百合A ₁	⑤⑥2-5-9-10, ⑦3, 8少	④	

土器No.	地番	出土地区・遺構・層位	器種形態	胎土・彩絵組成	色調 内外	土器No.	地番	出土地区・遺構・層位	器種形態	胎土・彩絵組成	色調 内外
K 249	第95区	S K70黒色小鍵蓋入土	底部G	⑤微、②	④	53	第97区	N 20-28,W190-194	脚台C	⑤-⑧-2-5微、⑨	④
K 250	*	*	底部J	⑤-1-微、③-3-微	④②	54	*	N 31-33,W222-225	脚台B	③-1-2-微	①
K 251	*	*	底部J	⑤-3-少、8微	④②	55	*	N 25,W190	脚台基部	⑤-少微1-2-5	②③
K 252	*	S K 不規則織目土器上	脚台C	⑤-2-微、①、8微	④②	56	*	N 31-33,W222-225	脚B	④-⑤-少	①
K 253	第10区	S K178	器台全体	⑤-5-19、8-2-少、8少	⑥	57	*	N 20-28,W190-194	脚B	④中	②③
K 254	*	S K175	器台部	*	*	58	*	N 32,W217	脚B	⑤-少	*
						59	*	N 29-36,W230-239	脚F	④⑤-少、④-少、8少	②
						60	*	N 35,W203	脚C	⑤-微	①
						61	*	N 20-28,W190-194	底部L	④-少	①
						62	*	N 25-28,W190-195	底部K	④-2-5微、④-8微	⑤
包含層出土土器											
弥生時代遺物包含層II出土土器											
1	第98区	N 25,W190	広口壺A	⑤微、④少	⑨	63	*	N 20-28,W190-194	広口壺A	④⑩-10-少	①
2	*	N 20-28,W190-194	広口壺B	⑤-2-1-5少、④②	④②	64	*	N 32,W217	脚A	④⑨-13-28、③-1-少	②③
3	*	N 27-34,W201-205	広口壺F	⑤-5-1少	②	65	*	N 32-34,W215-218	脚A	⑤少、1-2-3少	①②
4	*	N 33.5,W 219	広口壺G	⑥-2-3-5-4-6、④-2	④	66	*	N 25-28,W190-195	脚A	④-5-2-8	②
5	*	N 32-34,W215-218	脚台A	⑤-2-5微、8微	④②	67	*	N 31-35,W201-210	脚A	④⑤-2-3-4-5-8少	②
6	*	N 25-28,W187-191	脚台A	④⑤-2-4-9、4-5	④②	68	*	N 25-28,W190-195	脚C	⑤-1-2-4少	②③
7	*	N 20-28,W190-194	広口壺E	⑤少	④②	69	*	N 35,W204	脚H	④⑤-3-5-8少、8中	②③
8	*	N 31-33,W222-225	広口壺C	⑤-5-2-6-7少、④⑤	④②	70	*	N 29-33,W225-230	脚台C	⑤-2-5-少、8少	②
9	*	N 32,W225	広口壺E	④⑤-1-3少、④-2-6、8少	④②	71	*	N 25,W191	脚台A	④⑤-8-2-11-8少	②③
10	*	N 20-28,W190-194	広口壺E	⑤-2-少、④-微	④②						
11	*	N 25-28,W190-195	広口壺A	④⑤-2-3-4-18、8少	④②						
12	*	N 31-33,W222-225	無縫壺	⑤-2-5少	②	72	第98区	N 29-34,W209-213	広口壺D	⑤-4-2-5少	②
13	*	N 32,W225	壺	⑤-2-5少	②	73	*	N 31-34,W226-230	広口壺I	④-少	②
14	*	N 35,W205	長縫壺A	④⑤-5-8、②-8	⑤	74	*	N 30-33,W201-205	広口壺G	④⑤-2-9、④⑤-2-8	②
15	*	N 34,W222	長縫壺A	④⑤-2-3-9少、④⑤-3少	②	75	*	N 29-35,W237、8-少	広口壺	④-8少	①
16	*	N 36,W220	脚台付壺	④少	④②	76	*	N 29-37,W212-220	脚台A	④⑤-1-3少、④-5-8少	②
17	*	N 34,W222	壺A、大	④⑤-2-3-6-14-4、④⑤-3少	②	77	*	N 31-35,W235-237	脚台A	④⑤-6少、④-1-微	②
18	*	N 29-33,W225-230	脚A、中	④⑤-3-4-2-1-6多	②	78	*	N 16-23,W180-185	広口壺E	④⑤-8-2-5-1-8少	②③
19	*	N 36,W220	壺B	*	*	79	*	N 29-36,W221-230	広口壺F	④⑤-2-9少、④-8少、1中	①
20	*	N 30-50,W200	壺D	④⑤-1-多	④②	80	*	N 28,W240	脚台A	④-2-5微、④-8微	②
21	*	N 27,W191	壺D	④⑤-中、8少	④②	81	*	第Ⅱ区	脚台A	④少	②③
22	*	N 27,W215	壺D、中	④⑤-4-3-2-也多	②	82	*	N 29-31,W234-236	広口壺J	④-1-少	①
23	*	N 31-33,W222-225	壺D、中	④⑤-少、④-2-1-4	②④	83	*	N 27-31,W237-239	広口壺E	④⑤-2-9少、④-2-3-8少	②③
24	*	N 25-28,W186-190	壺D、中	④⑤-中	④②	84	*	N 28,W240	広口壺	④⑤-8少、④-2-5-7-3	②③
25	*	N 25,W190	壺D	④⑤-1-微	④②	85	*	N 29-34,W230-234	広口壺E	④⑤-3-2-5-6-8微	②
26	*	N 25-28,W180-190	壺D	④⑤-2-多	④②	86	*	N 32-34,W230-233	広口壺D	④-2-1微	①
27	*	N 30,W204-208	壺D	④⑤-中	④②	87	*	N 32-34,W230-233	広口壺E	④⑤-微少、④⑤-少-2-2-5	②
28	*	N 32-34,W215-218	壺D	④⑤-1-2-3-2-1-3-6	④②	88	*	N 29-31,W234-236	広口壺C	④⑤-少-2-2-5-8少	②③
29	*	N 32,W217	壺D、中	④⑤-2-3-1-3-1-2-3-8少	④②	89	*	N 20-37,W212-224	広口壺C	④⑤-1-2-3-2-6-8少	②
30	*	N 36,W220	底部F	④微	②	90	*	N 32-34,W230-233	広口壺E	④-1-5少	②
31	*	N 32-34,W215-218	底部G	④⑤-少-2-3-7、④⑤-4少	④②	91	*	N 33-38,W230-234	広口壺E	④⑤-3-2-5-6-8微	②
32	*	N 25,W190	底部G	④⑤-少-2-1-5-3	②	92	*	N 28,W244	脚台D	④-2-5-3多	②
33	*	N 50,W240-260	底部A	*	*	93	*	N 32-34,W230-233	脚台D	④-2-1-5少、8少	②③
34	*	N 29-35,W230-239	高杯A	④⑤-1-2-3-6-8微	④②	94	*	N 31-35,W236-239	脚台D	④⑤-1-4-5少、④⑤-1-2-3-8少	②③
35	*	N 25-28,W186-190	高杯A	④⑤-1-5少、④⑤-5-8少	②	95	*	N 29-34,W209-213	脚台D	④⑤-1-2-3-6-8少	②③
36	*	N 25-28,W186-190	高杯B	④⑤-1-2-8少	②	96	*	N 32-34,W226-228	脚台B	④⑤-1-2-3-6-8少	②③
37	*	N 26,W188.5	高杯B	④⑤-4少、④⑤-中	②	97	*	N 33,W225	底盤E	④⑤-1-5少	②
38	*	N 25,W191	高杯E	9少	④②	98	*	N 33,W215.5	手握ね蓋	④⑤-1-4中	②
39	*	N 25,W190	高杯A	④⑤-4少、④⑤-10-1多	②	99	*	N 30,W200-220	脚D的前	④⑤-少	②
40	*	N 32-34,W215-218	脚台A	④⑤-2-1-5少、④⑤-8少	②	100	第99区	N 31-35,W235-237	脚台D	④⑤-2-3少、④⑤-2-3微	②③
41	*	N 20-28,W190-194	脚台A	④⑤-1-5少	④②	101	*	N 29-31,W237-239	無縫壺	④⑤-1-2-3-6-8少	②③
42	*	N 30,W204-208	脚台A	④⑤-少	④②	102	*	N 33-36,W230-234	脚A、中	④⑤-2-3-8少、④⑤-2-3-8少	②③
43	*	N 31-33,W222-225	脚台A	④⑤-50少	②	103	*	N 29-34,W239-243	脚A、中	④⑤-1-5少	②
44	*	N 31-33,W222-225	脚台A	④⑤-2-1-6微、④⑤-1少	④②	104	*	N 32-34,W230-233	脚A、中	④⑤-2-5-7少、④⑤-8少	②
45	*	N 25,W190	脚台A	④⑤-微少、④⑤-1少	②	105	*	N 31-34,W226-230	脚B	④⑤-2-10微、④⑤-1-4中	②③
46	*	第Ⅱ区ベルト	手握ね蓋	④⑤-5-6少、8微	②	106	*	N 31-34,W226-230	脚A、中	④⑤-2-1-少、8微	②③
47	*	N 33,W204	脚台A	④⑤-1-2-9-8微	④②	107	*	N 31-34,W226-230	脚B	④⑤-1少	②
48	*	N 32-34,W215-218	脚台B	④⑤-2-3-9-1-4-3-8少	②	108	*	N 33-36,W230-234	脚D、中	④⑤-2-3-9-1-4-3-8少	②
49	*	N 29-36,W221-230	脚台C	④⑤-2-1-5少、8少	②	109	*	N 34-38,W213-219	脚D、中	④⑤-2-3-9-1-4-3-8少	②③
50	*	N 31-35,W201-210	脚台C	④⑤-1-5少、8少	②	110	*	N 29-35,W221-230	脚B	④⑤-1-5少、④⑤-2-19-8少	②
51	*	N 29-35,W214-219	脚台B	④⑤-5-2-3少、8微	②	111	*	N 33-38,W210-224	脚D、中	④⑤-2-1-3少、8微	②
52	*	N 25,W190	脚台B	④⑤-少-1-5-1少	②	112	*	N 29-35,W221-230	脚D、中	④⑤-1-5少、④⑤-2-8-8少	②

土器番号	排番	図号	出土地地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	排番	図号	出土地地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
113	第988	N 29-36, W 221-230	底部F	砂質・G, 灰褐色, 8.8	①②	173	第988	N 38-44, W 220-240	變A ₁	S 66E3-2-1-54, 8.9	①		
114	-	N 29-37, W 221-230	底部J	S 66E3-2-1, G, 5.8	③	174	-	直横柄出	小型鉢D ₃	S 66E2-5微	②		
115	-	N 32-34, W 230-233	底部B	S 66E3-2-1, 8.9	②	175	-	N S O-S 9, W 10-15	手捏ね鉢	S 66E3-3-2, 8.8	③⑨		
116	-	第Ⅱ区, 落ち込み	底部B	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	176	-	N 20-30, W 80-95	小型壺	S 1-5少, 8.1	⑥		
117	-	N 31-34, W 226-230	底部B	S 66E3-2-1-7, 7.9	④⑤	177	-	N S O-S 9, W 1-10	脚台E	S 63-2多, 8.0微	⑥		
118	-	N 29-31, W 234-236	底部B	S 66E3-2, 8.9	④⑤	178	-	N 10-S 9, W 50-40	小型高杯	S 66E3-3-2, 8.9	⑤		
119	-	N 31-38, W 224-227	底部G	S 66E3-2, 8.8	①	179	-	N S O-23, W 20-40	脚台A	S 66E3-2-5少, 8.9	②		
120	-	N 32-34, W 230-233	底部G	S 66E3-2-1, 8.9	④⑤	180	-	N 24, W 94	舞台A柱底部	S 66E2-3-5微	②⑩		
121	-	ベルトW 219	底部J	S 66E3-2, 8.9	④⑤	181	-	N 24, W 248	脚台基部	S 66E3-5-4少, 8.9	③		
122	-	ベルトW 219	底部F	S 66E3-2-5-6, 8.9	④⑤	182	-	直横柄出	舞台C脚部	S 66E2-5-38	②		
123	-	N 29-37, W 221-229	底部F	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	183	-	直横柄出	結縫車	S 66E2-1-3少, ④	④		
124	-	N 31-34, W 226-230	變D ₁ 中	S 66E3-2-1-4, 8.9	④⑤	184	-	N 44-46, W 220-240	底部H	S 66E1-5-6, 8.9	④⑩		
125	-	N 31-35, W 235-237	蓋B	S 66E3-2, 8.8	④⑤	185	-	N 24, W 252	底部H	S 66E1-5-3少, ④	④⑪		
126	-	N 29-36, W 221-223	蓋C	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	186	-	N 26, W 248	底部G	S 66E3-2-1-5-6, 8.9	④⑨		
127	-	N 29-36, W 221-230	蓋A ₂	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	187	-	N 24, W 252	底部J	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑩		
128	-	N 28-30, W 199-201	蓋解部	S 66E3-1-5, 8.9	④								
129	-	N 30-33, W 201-205	蓋A ₂	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤								
130	-	N 31-32, W 231-234	蓋A ₂	S 66E3-2-1, 8.9	④⑤	188	第988	S 2, W 78	広口壺B ₁	S 1-5少, 8.8	②		
131	-	N 31-34, W 226-230	底部B	S 66E3-2-1, 8.9	④⑤	189	-	N 9, W 80	広口壺G	S 66E1-5-2-1-5, ④	⑦		
132	-	N 29-31, W 236-237	底部K	S 66E3-2, 8.9	④⑤	190	-	N 3-12, W 80-100	広口壺H	S 66E1-5中, ④	⑨		
133	第1008	N 27-34, W 200-213	高杯A ₁	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	191	-	N S O-N 7, W 40-52	広口壺H	S 66E少	④		
134	-	N 29-36, W 221-230	高杯A ₁	S 66E3-2-1-5, 8.8	④⑤	192	-	N 7-10, W 65-80	広口壺B ₁	S 66E少微2-1-5	⑤		
135	-	N 29-31, W 234-236	高杯A ₁	S 66E3-2-1-5	④	193	-	N 10, W 81	広口壺B ₁	S 66E1-5少, 8.9	②		
136	-	N 31-38, W 224-227	高杯A ₁	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	194	-	N 10-15, W 100	広口壺C ₁	S 66E2-5少, 8.9	④⑩		
137	-	N 28, W 244	高杯A ₁	S 66E3-2-1-5-6, 8.9	④⑤	195	-	S 5-N 3, W 70-80	舞台A ₁	S 66E2-5少, 8.9	②		
138	-	N 33-38, W 230-234	高杯B ₁	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	196	-	N 28, W 244	広口壺J	S 66E少1-5-3少, 8.9	④		
139	-	N 31-34, W 226-230	高杯B ₁	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	197	-	N 20, W 79	広口壺C ₂	S 66E2-5, 8.9	④		
140	-	N 29-33, W 232-236	高杯B ₁	S 66E3-2-1-5, 8.9	④⑤	198	-	N S O-S 10, W 1-15	広口壺H	S 66E少	①		
141	-	N 29-31, W 234-236	高杯A ₁	S 66E3-2-5	④⑤	199	-	S 5, W 75	舞台A ₂	S 66E2-1-5微	①		
142	-	ベルトW 219	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-3, 8.9	④⑤	200	-	S 3, W 73	長頸壺A ₂	S 66E少微2-1-5	④		
143	-	N 28, W 244	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-4, 8.9	④⑤	201	-	S 4-W 59	脚台付壺	S 66E2-5少, 8.9	④⑩		
144	-	ベルトW 219	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-4, 8.9	④⑤	202	-	N 5-S 2, W 114	手捏ね壺	S 66E少	④		
145	-	N 31-34, W 226-230	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-1-2	④⑤	203	-	N 8, W 63	壺A ₁ 中	S 66E2-3-5-4少, 8.9	④⑩		
146	-	第Ⅱ区	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-1-2	④⑤	204	-	N 9-16, W 40-50	底部G	S 66E2-1-7-9, 8.9	⑤		
147	-	ベルトW 219	舞台A柱底部	S 66E2-1-5-1-2	④⑤	205	-	S 0-S 5, W 68-74	壺B ₁	S 66E少1-5-3-8少	②		
148	-	N 31-34, W 226-230	舞台B	S 66E3-2-5	④⑤	206	-	N 10-13, W 106-112	壺D ₂ 大	S 66E2-5少, 8.9	②		
149	-	N 33-36, W 230-234	舞台C	S 66E3-2-5	④⑤	207	-	N 9-16, W 40-50	舞台基部	S 66E2-5少, 8.9	⑤②		
150	-	N 29-31, W 237-239	舞台C	S 66E3-2-5-9, 8.9	④⑤	208	-	N 10-13, W 106-112	舞台輪郭	S 66E2-1-5少, ④	③		
151	-	N 31-34, W 226-230	舞台C	S 66E3-2-5-9, 8.9	④⑤	209	-	N S O-N 5, W 90-95	結縫車	S 66E2-5少	②⑩		
152	-	N 32-34, W 230-233	舞台C	S 66E3-2-1-3	②	210	-	N S O-N 7, W 40-52	壺A ₂	S 66E2-5微	④		
153	-	N 33-36, W 230-234	舞台C	S 66E3-2-1-3	②	211	-	N S O-N 7, W 40-52	壺A ₂	S 66E2-1-5	④②		
154	-	N 31-34, W 226-230	舞台C	S 66E2-1-5-3少	②④								
155	-	N 29-31, W 234-236	舞台C	S 66E2-1-5-1-2	④⑤	212	第988	N 8, W 92	広口壺B ₁	S 66E少	④		
156	-	N S O-2-3, W 60-120	舞台D	S 66E2-1-5	④⑤	213	-	N 40, W 206	広口壺B ₂	S 66E少1-5微2-3-54	⑤		
157	-	N 29-36, W 221-230	舞台D	S 66E2-1-5-2-3	④⑤	214	-	N 10, W 90-80	無頸壺	S 66E2-1-5微	⑤②		
158	-	N 29-34, W 209-213	鉢E	S 66E3-2, 8.9	④⑤	215	-	N 16, W 92	細脚の壺	S 66E2-1-5-2, 8.9	④②		
159	-	N 29-31, W 237-239	舞台F	S 66E3-2, 10-14	④⑤	216	-	N 15.5, W 94.5	手捏ね壺	S 66E少1-5-4少	④		
160	-	N 30-33, W 201-205	舞台F	S 66E3-2-3-5微, 8.9	④⑤	217	-	N 15.5, W 94	手捏ね壺	S 66E少	④		
161	-	N 32-35, W 230-236	切妻壺	S 66E3-2-3-5少, 8.9	②	218	-	N 20, W 80	壺B ₁	S 66E少1-5-4少	④		
162	-	N 31-32, W 224-227	舞台G	S 66E3-2-5-1-5, 8.9	①	219	-	N 20, W 78	壺D ₂ 中	S 66E2-1-5微	⑤		
163	-	N 31-34, W 226-230	舞台G	S 66E3-2, 8	④⑤	220	-	N 50, W 244	壺D ₂ 大	S 66E2-5少, 8.9	④		
164	-	ベルトW 219	舞台A, 壁部	S 66E3-2-3-5微, 8.9	④⑤	221	-	N 40, W 206	壺B ₂	S 66E2-1-5-4少	④		
165	-	N 28, W 240	舞台A, 壁部	S 66E3-2-3-5-1-5, 8.9	②	222	-	N 17-20, W 200	高杯E ₂	S 66E少1-5-4少	④		
166	-	N 29-36, W 221-230	舞台A	S 66E3-2-3-5少, 8.9	①	223	-	N 20, W 190	高杯A ₂	S 66E少1-5-2-4	②		
167	-	N 29-37, W 212-219	舞台B	S 66E3-2-3-5少, 8.9	②④	224	-	S 10, W 66	高杯B ₂	S 66E1-5-1-5少, 8.9	②		
						225	-	N 20, W 100-120	底部D	S 66E2-1-5微, 8.9	④		
168	第988	N 24, W 252	長頸壺D	S 66E3-2-5-6, 8.9	④⑤								
169	-	N 30E1上	太鼓壺C	S 66E3-1-3-2少, 8.9	④⑤								
170	-	第Ⅱ区	壺台A ₁	S 66E3-2-3-5少, 8.9	②	226	第988	N 26, W 128	広口壺H	S 66E2-1-5-3少, 8.9	①		
171	-	N 40, W 212	壺A ₁ 中	S 66E3-2-3-5少, 8.9	①	227	-	N 17-24, W 37-42	広口壺F ₁	S 66E少1-5-4少	②③		
172	-	N 24, W 94	壺D ₁ 中	S 66E3-2-3-5少, 8.9	②	228	-	N 17-24, W 20-35	広口壺G	S 66E2-1-3少, 8.9	④		

土器名	排番	図号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	上器名	排番	図号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
229	第10区	N 19-24, W37-43	広口壺C ₂	◎1-2-3-5少、8少	(5)	287	第10区	N S 0-23, W20-40	鉢A ₂	◎1薄、8多	(5)		
230	*	N 16-22, W20-35	広口壺B ₁	◎2-3強、8微	(5)	288	第10区	N 21-22, E 0-5	器台A ₃	◎少少C ₂ -5-6少	(2)		
231	*	N 18-23, W54-60	広口壺H	◎6-2-3少、5-6強	(10)	289	*	N 20-30, W80-85	器台脚部	◎2-5強、8少	(2)		
232	*	N 17-24, W20-35	広口壺B ₂			290	*	N 14, E 4	器台体部	◎◎C ₂ -2強	(2)		
233	*	N 13-16, E 5-12	広口壺G	◎6-3-2-5強、8微	(4)	291	*	N S 0-23, W20-40	底部F	◎◎少少少2-1	(3)		
234	*	N 17-24, W20-35	広口壺E	◎8-2-1-5強、8強	(5)	292	*	N 20, W55	底部K	◎◎C ₂ -3-1少、8強	(5)		
235	*	N 13, E 3	底部B	◎2-1少	(9)								
236	*	N 18-21, W33-36	器台部	◎6-少少C ₂ -2-5	(1)								
237	*	北壁、W13	器台底部	◎少	(2)	293	第10区	N 43, E W0, 0	鉢E	◎	(2)		
238	*	N 21-23, E 0-5	壺A ₁	◎8-2-1-3少、1.8少	(9)	294	*	N 43, E W0, 0	鋤鋸車	◎	(2)		
239	*	N 21-22, E 0-5	壺A ₁ , 中	◎8-3-9少、C ₂ 強、8少	(9)								
240	*	N 13, E 3	壺D ₁	◎6-4少、C ₂ 強	(3)								
241	*	N 26, W128	壺	◎8-2-3-5少、8強	(5)	295	第10区	棕褐色土					
242	*	N 17-24, W20-35	壺D ₂	◎8-2-3-5少、8強	(5)								
243	*	N 16-21, W20-30	壺D ₃ , 中	◎少	(2)	296	*	N 12, E W0	広口壺B ₁	◎8-8-8-1-2, 1.2	(2)		
244	*	N 13, W3	壺D ₄ , 少	◎多	(1)								
245	*	N 19-24, W37-43	壺A ₂	◎8-2-1-5少、C ₂ 強、8強	(8)	297	*	明黄色陶粘質土					
246	第10区	N 21-22, E 0-5	器台A ₃	◎8-2-3-1-5少、8少	(3)								
247	*	N 10-15, W-2	器台A ₄	◎8-2-1-3-6少、8強	(5)	298	*	N 2, S 26	底部A	◎8-2-1-3少、C ₂ -3強、8強	(3)		
248	*	N 15-22, W24-30	壺A ₃	◎少	(1)								
249	*	N 18-23, W54-60	脚台C	◎8-2-1-3少、8少	(3)	299	*	南綠	壺A ₁ , 中	◎5-2強、8少	(2)		
250	*	N 10-14, E 18-25	脚台基部	◎8-5-2-3少、8少	(1)	300	*	表拌	壺A ₁ , 中	◎9.5-8-1-2強、8少	(2)		
251	*	北壁、W13	底部G	◎8-2-5-9少、C ₂ 強、8少	(2)								
252	*	N 26, W128	底部J	◎8-9少、C ₂ 強、8強	(2)	301	*	淡黃褐色砂質土	脚台E	◎2-5少	(4)		
253	*	N 19-24, W37-43	底部L	◎8-1-5強、C ₂ 強、8強	(5)								
						302	*	黄灰土色	脚台E	◎2-5強、8少	(3)		
黒色磚貼質土													
254	第10区	N 19, W40	広口壺G	◎8-2-1-3少、8少	(2)	303	*	淡黃色土	脚台B	◎8-2-1-3少、8少	(2)		
255	*	N 19, W40	広口壺G	◎8少	(2)								
256	*	N 17-21, E 0-5	器台A ₅	◎少少微2-5	(2)								
257	*	N 10, W40	広口壺H	◎1	(2)								
258	*	N 21-22, E 1	壺A ₅	◎8少	(9)	304	第10区	N 36, W240, 第3層	広口壺H	2	(2)		
259	*	N 18-20, E 0-5	壺D ₃ , 中	◎少	(2)	305	*	N 36, W220, 第5層	広口壺C ₁	◎8-5-2-1-2, 2-3少	(2)		
260	*	N 16-21, W1-5	壺A ₁	◎1	(2)	306	*	N 30, W180-200	壺頭部	◎8-1-5少	(1)		
261	*	N 16-21, E 0-5	壺A ₂	◎8-2-5-3少、(1)	(2)	307	*	N 48, W240, 第3層	広口壺F ₁	◎8-2-2-5	(2)		
262	*	N 19, W40	脚台B		(2)	308	*	N 30, W180-200	壺E	◎8少	(2)		
263	*	N 17, E 2	脚台C	◎1	(5)	309	*	N 10, W200-220	壺E	◎8少	(2)		
264	*	N 18, E 2	脚台B ₁	◎8少少微2-1-5	(2)	310	*	N 20, W200-220	脚台B	◎8少	(2)		
265	*	N 18, E 2	脚台C	◎8少少微2-1-5-3-9	(2)	311	*	N 40, W220, 塗込み	脚台B	◎8-8-8-2-5-5	(2)		
266	*	N 18, E 2	脚台D	◎8少少微1-2-5	(1)	312	*	N 48, W240, 第2層	脚台C	◎1-1-微	(2)		
267	*	N 16-21, E 0-5	脚台柱脚部	◎8-2-5少、8少	(5)	313	*	N 30, W200-220	脚台E	◎1少	(1)		
268	*	N 21-22, E 1	脚台C, 柄部	◎5-2強、8微	(2)	314	*	N 28, W200	脚台F	◎1牛	(2)		
269	*	N 16-22, E 0-5	壺A ₃	◎8-2-5-2-1-5-5	(2)	315	*	N 30, W20-260, 第3層	底部K	◎1	(2)		
270	*	N 16-20, W0-5	壺A ₃	◎8-2-3-3-4-5-6-7-8強	(5)	316	*	N 30, W180-200	底部N	◎8中	(2)		
271	*	N 16-21, E 0-5	壺A ₃	◎9	(1)	317	*	N 34, W160, 第1層	底部D	◎8-1-1-1-1	(2)		
272	*	N 19, E 1	壺A ₃	◎8-1-4強、8微	(2)	318	*	N 30, W248	底部E	◎1	(2)		
273	*	N 19, E 1	脚台F	◎2-1-5少、8少	(2)	319	*	N 10-20, W160	底部A	◎8-8-8-1-1微	(2)		
274	*	N 17, E WO	底部D	◎8-2-5-2-1-5-7-8強	(2)	320	*	N 30, W248	底部J	◎1	(2)		
275	*	N 17-21, E 0-5	底部A	◎1-5-6少、8微	(2)	321	*	N 20-30, W160	壺A ₂	9微	(2)		
276	*	北斜面、西壁	底部J	◎8少少微1-2少	(4)								
277	*	N 18, E 2	底部H	◎8少	(5)	322	第10区	N 10, W60-80	広口壺B ₁	◎8少	(2)		
						323	*	N 10, W60-80	器台A ₂	◎8少	(2)		
黄色小標混入土													
278	第10区	N 30, W120	広口壺B ₂	◎8-2-5-3少、5-6少	(2)	324	*	N 0-10, W80	脚台B	◎8少	(2)		
279	*	N 30, W128-136	広口壺部	◎8-1-2-3少、C ₂	(2)	325	*	N 10, W60-64	底部B	◎8少	(2)		
280	*	N 20-30, W110-120	広口壺G	◎2-1-5少、8微	(2)	326	*	N 10, W60-64	底部I	◎1中	(2)		
281	*	N 17-24, W40-50	広口壺	◎8少	(2)	327	*	N 10, W60-64	底部F	◎1	(2)		
282	*	N 20-21, E 0-5	長頸壺A ₂	◎8少少微1-5-6少	(2)	328	*	N 10, W60-80	底部D	◎8少	(2)		
283	*	N 0-15, E 20-30	手捏ね壺	◎8-1-5少、8少	(2)	329	*	N 20, W100-120, 第3層	脚台付壺	◎微			
284	*	N 5-23, W20-40	脚台C	◎2-5少、8微	(2)								
285	*	N 31-35, W129-128	脚台A柱底部	◎2-1-4-7少、◎微	(2)	331	第10区	N 0-北、W40	広口壺G	砂粒微	(2)		
286	*	N 21-22, E 0-5	鉢A ₂	◎8-5-3少、8少	(2)								
暗黃灰色土 黒色磚貼質土													

土器No.	排番	図号	出土地区・遺構・層位	沿槽器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	排番	図号	出土地区・遺構・層位	沿槽器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
332	第III回	N	S O-N 10, W 26第2層	広口壺E ₂	⑤⑥中	⑨	377	P L 60	N 1-6, W 3-8	鉢			
333	-	N	S O, W 40-60第3層	脚台D	⑤⑥少⑦微1-5	⑩	378	-	弥生 I				
334	-	N	S O, W 20-40第3層	脚台B	砂粒微	⑦			N 29-32, W 195-200	鉢			
335	-	N	S O, E 40-60, 第4層	脚D ₂ 小	⑤⑥3-5少、8	②④	379	第IV回	弥生 II				
									N 25-28, W 186-190	甕	⑤⑥8少、8少	②	
							380	P L 60	弥生 II				
									N 25-28, W 190-195	不明			
336	第IV回	N	40, W 270, 第2層	広口壺B ₁	⑤⑥微	⑧							
337	-	N	40, W 270, 第2層	広口壺B ₂	⑤⑥少	⑨	381	-	弥生 I				
338	-	N	W 270, 第2層	広口壺H	⑤⑥少	⑩			N 28-30, W 199-201	甕			
339	-	N	40, W 270, S D	壺	④⑤1少	⑪	382	-	不明				
340	-	N	40, W 270, 第2層	壺	⑤⑥1-5少、⑦6	⑫	383	-	淡黒色土				
342	-	N	30, W 264	高杯A	⑤⑥少	⑨			N 16-20, E 0-5	高杯基部			
344	-	N	50, W 270, 第2層	脚台AH状態	⑤⑥少	⑩	384	-	淡黒色土				
346	-	N	30, W 260-288第2層	脚台基部	⑤⑥少	⑪			N 17-22, E 0-5	高杯基部			
349	-	N	50, W 270, 第2層	脚台	9,3	⑫	385	-	小穂混入				
350	-	N	50, W 280, 第2層	底部F	⑤⑥⑦少	⑬			N 30, W 128-136	甕			
354	-	N	50, W 270, 第2層	脚台E	9多	⑭⑮	386	-	弥生 II				
355	-	N	40, W 270, 第2層	粘土車	⑤⑥少	⑯			N 31-35, W 201-210	甕			
							387	-	黄色砂質土				
									N 20, W 100-120	甕			
330	第III回	黒褐色土					388	-	弥生 I				
									N 29-33, W 232-236	底部			
341	-	N	S O, E 40-60	広口壺F ₁	⑤⑥少	⑨							
343	-	N	0, E 0-20第4層	壺A ₁ 中	2-9多	⑩	389	第IV回	弥生 II				
									N 29-35, W 214-219	甕			
345	-	N	20-30, W 120	脚台A状態	2-9	⑪⑫							
									N 6-13, W 136-140	甕			
347	-	N	20-30, W 120, 第2層	脚台基部	手捏ね脚台	9	⑬⑭	391	-	黒色小穂混入土			
									N 10-14, E 18-25				
348	-	N	0-10, E 40第4層	脚台F	9	⑪⑫							
									N 10-16, W 136-140	甕			
351	-	N	20-30, W 120	底部F	9多	⑬	392	-	弥生 II				
									N 29-33, W 225-230	甕			
352	-	N	20-30, W 120, 第2層	底部G	9	⑭	393	-	弥生 II				
									N 29-33, W 225-230	甕			
353	-	N	20-30, W 120, 第2層	底部E	9	⑮							
356	-	N	上り9柄, W 80第2層	広口壺B ₁	9	⑯	394	-	弥生 II				
									N 33, W 204	甕			
357	-	N	20-30, W 120, 第3層	広口壺B ₂	⑤⑥少⑦1-5少	⑰							
									N 5-S 3, W 70-80	甕			
358	-	N	20-30, W 120, 第3層	広口壺G	⑤⑥少⑦1-2-1	⑱	395	-	淡黄褐色粘質土				
									N 5-S 3, W 70-80	甕			
359	-	N	30, W 240-260	甕A ₁ 大	⑨⑩2, 8少	⑲							
									N 36-40, W 200-212	甕			
360	P L 54	黄色弱砂質土		脚台C			396	P L 60	N 20-30, W 120	甕			
361	-	黑色小穂混入土		脚台A			397	第IV回	第2層				
362	P L 55	黄色小穂混入土		脚台E			398	-	弥生 I				
									N 33-38, W 230-234	甕			
363	第III回	弥生 I	N, 36, W 223	甕?	⑤⑥5-1-2多	⑨⑩	399	P L 61	弥生 I				
									N 23-25, W 154-156	甕			
364	第IV回	N	15-22, W 24-30	甕	⑤⑥多⑦少2-6-3	⑪	400	第IV回	弥生 II				
									N 31-35, W 201-210	甕			
365	-	赤褐色土	N 10-14, E 20-25	甕D ₂ 中	⑤⑥2-3-4-7	⑫	401	-	明明白褐色土				
									N 15-20, W 25-32	甕			
366	-	上部包丁層	N 1-S 2, W 19-24	脚台基部	⑤⑥少⑦1-2-1	⑬⑭	402	-	弥生 I				
									N 29-34, W 230-234	甕			
367	-	黒褐色小穂混入層	N 17-24, W 37-42	底部A	9-13多	⑮⑯	403	-	弥生 I				
									N 29-30, W 199-201	甕			
368	P L 60	北斜面、表土層	甕		"		404	-					
369	-	北斜面、黒褐色土	甕		"		405	-	第2層				
									N 50, W 260-280	甕			
370	-	黒褐色土	N 17-21, E 0-5	甕	"								
371	第IV回	淡黄褐色粘質土	N 1-6, W 3-8	甕C	⑧⑨⑩⑪⑫⑬⑭⑮⑯	⑰⑱	406	-	弥生 I				
									N 31-38, W 224-227	甕			
372	-	弥生 II	N 25-28, W 186-190	不明	②-5少、③-6少、⑧少	⑨⑩	407	-	黄色弱砂質小穂混入層				
									N 20-30, W 80-95	甕			
373	第IV回	黒褐色土	E 10-16, W 13-15 火通器(中世柱)	壺類部	⑤少⑥少⑦微2-2	⑨	408	-	黄色小砂利混入層				
			N 12-30, W 153-180	把手	⑤⑥少⑦少2-1-5-3-6	⑩	409	-	N 14, E 18				
374	第IV回	N 10-16, E 8	N 10-16, W 120-130	把手	⑤⑥少⑦少2-1-5-3-6	⑪	410	-	N 5-50, W 95-100				
									黄色小砂利混入層				
375	-	N 20-30, W 120-130	底部K	⑤⑥少⑦少2-1-5-1	⑫⑬	411	-	N 0-18, E 20-30	黒灰色土				

土器No.	博 号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	博 号	出土地区・遺構・層位	器種器形	胎土・砂粒組成	色調 内外
417	P L62		甕		T 11	第1回	淡茶褐色粘質土				
418	第1回	N30-32, W120-130	甕	⑤±2-3・少, 8%w	④	T 12	-	N30-40, W228-240	土師小皿	⑤-10%w	④
412	P L61	井生 II		N22-25, W182-190	輪轂車	T 13	-	淡茶褐色粘質土		⑤-28%w, 8少	③
413	-	N29-34, W209-213	-	-	-	T 14	-	N30-40, W220-240	S K33	④5微	⑤
414	-	N28, W200	-	-	-	-	-	淡茶褐色粘質土	N30, W184	④2-1微	②
415	-	深黑色土	-	N18-20, E0-5	-	T 15	-	N23-25, W180-184	-	-	
416	-	小糠混入	-	N32, W40	-	T 16	-	S X2上	瓦器柄	-	
						T 17	-	S X2上	-	⑤10-少	④
						T 18	-	S X2	-	⑤1-少	④
						T 19	-	S X2 (巻の下)	-	④10少	④
						T 20	-	S X2	-	④	④
						T 21	-	S X2	-	9-2數入	④
						T 22	-	S X6	-	9-2數入	④
						T 23	-	S X6	-	9-2數入	④
土製品						T 24	-	S K40上	-	-	
Y D1	第1回	N0-10, W90-100	土玉	④1多	②	T 25	-	S K40上	-	-	
Y D2		淡茶褐色粘質土				T 26	-	淡茶褐色粘質土		④少④微2-5-6-9	④
		N30-40, W220-240	-	⑤1-5・少	④	T 27	-	N29-35, W190-192	-	④1-10%w	④
						T 28	-	淡茶褐色粘質土		-	
						-	-	N19-20, W194-196	-	④	
古墳時代						T 29	-	淡茶褐色粘質土		-	
C1	第1回	S B14, D区第2層	甕頭部	④2-1多	④④	T 30	-	N19-20, W194-196	-	④2-1少	④
C2	-	N15-18, W184-190	甕	④1少, ④1	④	T 31	-	中世ベル		-	
C3	-	S B14, 底面	小型甕	-	④	T 32	-	N25-26, S 5	-	④1-5-2少	④
C4	-	表土下		N20-30, W120	甕底部	④④少④少④少2-6	④④	N25-26, S 5-2少	-	④1-5微	④
C5	-	黄色弱粘質土		N40, W252	蓋杯身	④④中	④	N20, W189	-	微	
C6	-	黑色土		E0-16, N13-15	須恵器甕	④④少④少④少1-8, ④1	④	N36, W220, 第3層	-	④5-2微	④
C7	-	N10-16, W136-142	須恵器甕	④少④少, ④少④少④少	④	T 33	-	N23-26, W180-184	-	④10微	④
C8	-	S 5, W8	須恵器甕	④2-3少, 8%w	④	T 34	-	淡茶褐色粘質土		-	
C9	-	N17, W42表採	-	④1-3-2少, ④2-8%w	④	T 35	-	N36-40, W200-212	-	④10少	④
						T 36	-	N23-36, W180-184	-	-	
						T 37	-	N23-36, W180-184	-	-	
						T 38	-	S X2	瓦器小皿	④1-2少, ④2	④
						T 39	-	中世落ち込みII		-	
平安時代						T 40	-	W212-219	-	④2少	④
H1	第1回	淡茶色土		S 19, W280	土師容器	④少	④	淡茶褐色弱粘質土		④1少, 8少	④
						T 41	-	N30-40, W220-230	-	-	
						T 42	-	淡茶褐色粘質土		-	
						T 43	-	N20, W189	-	-	
						T 44	-	中世落ち込みI		-	
						T 45	-	W221-228	-	④1-2少, ④2	④
						T 46	-	N26-36, W189-192	-	④1微	④④
						T 47	-	N30, W212	瓦器口拂	④④④3-2-5少	④
						T 48	-	N30-40, W195-197	土釜	④4微	④
						T 49	-	S X2	-	④④3少-1-9, ④3少	④
						T 50	-	N23-36, W180-184	淡茶褐色粘質土	-	
						T 51	-	N19-20, W194-196	-	-	
						T 52	-	淡茶褐色粘質土		④④3-3少, ④2-3-4少, 8少	④④
						T 53	-	N24-30, W226-240		-	
						-	-	第2層		-	
						-	-	N30, W184-188	-	④④3-2-1少, ④4-5少	④
						-	-	S X5	-	④④3少-2-1-5-9	④
						-	-	-	-	-	

土器No.	排番	図号	出土地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調 内外	土器No.	排番	図号	出土地区・遺構・層位	器種形	胎土・砂粒組成	色調 内外
T54	第10回		中世配石内 N22-W200	土釜	④多、③微	⑩	T85	第10回			土鍋	3微	②
T55	-		淡茶褐色粘質土 N20-28, W203-212	-	④④-2-1中, ⑤2-3少、 ⑥少	⑪⑫	T86	-	第2層・砂層	E120, S6-10	-	3微	②
T56	-		淡茶褐色粘質土 N23-36, W180-184	-	④④-2-1中, ⑤4-6	⑫						3微	②
T57	-		淡茶褐色粘質土 N30-40, W195	-	④④-2-3少、⑤2-3少								
T58	-		中世I落ち込み W226-235	-	④④多①少3-2	⑩	E 1	第10回	S D-1, 南岸				
T59	-		N30, W197	-	④④微2	⑫	E 2	-	S 28, W265	土師小皿	5微	②	
T60	-		淡茶褐色粘質土 N30-35, W200-210	-	④④-2-1中, ⑤2-3少	⑫	E 3	-	S D, 南岸, レンチ	-	5微	②	
T61	-		第2層 N35-36, W200	-	④④-2-1少, ⑤3-2	⑩	E 4	-	黄灰色土, 南岸	S 19-24, W260-280	青磁碗		
T62	-		N36, W180-200	須恵質鉢	④④-3-1少、⑤2	⑩	E 5	-	黑色弱粘質土	N 1-3, W33-36	土師皿	④微	②
T63	-		N23-36, W180-184	-	④④-2-1中	⑩			N 1-3, W33-36	-			
T64	-		N30, W208表土	-	④④-2-3中	⑩	E 6	-	黑色弱粘質土	N 1-3, W33-36	-		
T65	-		N30-S 0, W200-220	-	④④-3-2-1微, ⑤3	⑩			N 1-3, W33-36	-	④微	②	
T66	-		共生 I N12-20, W180-190	-	④④-2-3-1少, ⑤2	⑩	E 7	-	黑色弱粘質土	N 1-3, W33-36	-		
T67	-		試掘トレンチ	-	④④-3-2-1中, ⑤3	⑩	E 8	-	中世土器埋り	N 1-3, W33-36	-		
T68	-		須恵質鉢 N19-23, W192-196	-	④④-2-1, ⑤1-1, ⑥1-3	⑩			N 1-3, W33-36	-	④2微	②	
							E 9	-	S K549	黑色小皿	④④①多	④	
							E 10	-	S K549	-	"	④	
							E 11	-	S K549	-	"	④	
T69	第10回		N15-35, W170-180	白磁碗			E 12	-	N S-0-S 10, W1-15	-	④④-2-3-2	④	
T70	-		S X5	-			E 13	-	S K549	-	"	④	
T71	-		淡茶褐色弱粘質土 N30-40, W220-230	青磁碗	-		E 14	-	S K549	-	"	④	
T72	-		N24-30, W165-170	-			E 15	-	S K549	-	"	④	
T73	-		N80, W216, 第2層	-			E 16	-	S K549	-	"	④	
T74	-		N23-36, W180-184	-							④④-2-3-1中, ⑥微	④	
T75	-		N33, W195	青磁皿									
T76	-		N23-36, W180-184	陶器	④少④④微1-3	⑩	E 17	第10回	淡黃褐色弱粘質土 S4, W11				
T77	-		S X11, 下層	土鍋	④少④④微1-3	⑩			灰色砂質土 S6, W80				
T78	-		淡黃褐色弱粘質土 N10, W60	-	-		E 18	-		煙管			
T79	-		黄色弱砂質土 N17, W30	-	-		E 19	-	-	寛永通宝			
T80	-		淡黃褐色弱粘質土 N10-13, W76-80	-	⑥	⑪	E 20	-	-	-			
T81	-		淡黃褐色弱粘質土 N10-S 5, W70-80	-	④少	⑪	E 21	-	-	-			
T82	-		淡黃褐色弱粘質土 N10-S 5, W70-80	-	④少	⑪	E 22	-	-	-			
T83	-		表鉢	-	④少	⑪	E 23	-	-	-			
T84	-		青灰色粘土混入 N30-40, W220-240	-	④少	⑪	E 24	-	-	-			
							E 25	-	南対岸日トレ表探 第V区表探	-			
							E 26	-		-			
							E 27	-		-			

縄文時代石器

石器No.	検出番号	出土地区・遺構・層位	石器の種類	法量 (mm)			重 量 (g)	石 材	石材の特徴・色調	備 考
				現 長	幅	厚				
J S 1	第64回	第Ⅱ区③掘り下げ	石鏟	20.8	15.0	3.5	1.1	サスカイト	灰褐色	
J S 2	~	第Ⅲ区②B区'区	~	27.0	15.9	4.0	1.3	~	青灰色	
J S 3	~	中世高ち込み I・N ?、W228-239	~	27.5	17.0	2.9	1.3	~	灰褐色	
J S 4	~	第Ⅲ区、下区、黄色砂質土	~	21.8	14.6	1.7	0.3	~	~	
J S 5	~	第Ⅱ区③掘り下げ	~	17.7	11.4	2.0	0.4	~	灰褐色	
J S 6	~	第Ⅲ区、S K238	~	(15.0)	12.8	2.0	0.3	~	淡灰色、粗い	
J S 7	~	N 5、W63、淡黄褐色側粘質土	~	65.0	11.5	4.0	3.5	~	灰褐色	
J S 8	~	N 6-10、W135-140、黄色側粘質土	削器	56.0	11.7	19.0	69.2	~	~	
J S 9	~	N 20-25、W150-180	~	45.0	55.9	9.0	30.0	~	灰褐色	
J S 10	~	W163、南縁、黄色側粘質土	~	27.0	70.2	10.9	22.0	~	~	
J S 11	~	N 18、W195	~	38.0	70.0	12.0	29.6	~	灰褐色	
J S 12	~	N 25、W90、黑色弱砂質土	~	52.0	81.2	18.1	71.8	~	灰褐色	
J S 13	~	N 23、W40(?)、黄色小礫混入土	石槍	93.4	55.2	8.3	51.9	~	灰褐色	
J S 14	~	W260-280 砥状	大型剝片	110.0	73.5	16.0	165.0	~	淡灰色	
J S 15	第65回	S B 10 柱穴、断削り、黄色弱粘質土	印石	75.9	71.1	44.0	391.0	花崗岩質砂岩	灰褐色	
J S 16	~	第Ⅳ区、S B 10 柱穴23、断削り	~	114.1	70.7	45.0	485.0	砂岩	灰(青)色	
J S 17	~	第Ⅱ区、B区	~	84.2	84.0	50.3	519.0	黒雲母花崗岩	淡黃茶色	
J S 18	~	N 30、W220-240、第3層	小型石斧	82.0	51.0	13.0	89.7	泥岩	灰黃色	
J S 19	~	S T、W26	磨石	(82.0)	96.1	39.0	393.0	砂岩	灰色	
J S 20	~	第Ⅲ区、F区、黄色砂質土	~	96.5	89.1	63.9	721.0	~	淡灰色	
J S 21	P L 27	S B 04、中央炉	用途不明	147.5	53.8	10.0	124.0	紅褐色片岩	紫青色	
J S 22	~	不明	~	116.7	55.4	10.5	1170.0	~	青紫色	
J S 23	第66回	第V区	石皿	263.0	270.2	92.0	10,100	砂岩	淡黃灰色	
J S 24	~	N 15、W190、黄色弱砂質土	~	287.7	249.0	73.0	8,900	~	~	
J S 25	~	第V区、包含層中性合	~	275.8	281.0	102.0	12,900	~	淡茶灰色	
J S 26	~	N 15、W176、黄色弱砂質土	~	253.1	176.7	81.0	4,800	~	淡黃灰色	
J S 27	第66回	第V区、S D 6中層(第4層)	玉	54.5	23.5	12.5	28.8	翡翠	白褐色~水色	

弥生時代石器

Y S 1	第108回	N 30、W236、共生下面	石鏟	34.9	14.9	6.0	2.2	サスカイト	灰(青)色	
Y S 2	~	S B 02、柱穴6、掘り方	~	42.9	23.5	7.0	6.1	~	~	白色粒進入
Y S 3	~	S B 10、B区、覆土直	~	50.0	24.0	7.6	7.0	~	~	
Y S 4	~	S B 01、C区、床面	~	43.7	20.0	4.0	2.8	~	~	
Y S 5	~	N 32、W203、共生I、黄色弱粘質土	~	41.5	18.9	4.3	3.2	~	黑灰色	
Y S 6	~	N 34、W229.5、共生I	~	(54.0)	15.0	6.9	5.8	~	灰(青)色	
Y S 7	~	N 32.5、W202、共生I	~	39.5	15.5	2.9	2.1	~	灰青色	
Y S 8	~	S B 01、C区、第1層	~	(42.8)	25.0	8.8	10.1	~	淡灰色	
Y S 9	~	S B 01、柱穴6	石刃	25.8	41.7	9.0	9.8	~	灰青色	
Y S 10	~	第Ⅰ区、共生I	石磨丁	113.8	45.0	7.8	55.0	点斑片岩	青綠色	
Y S 11	~	N 28、W252、共生I	~	136.0	46.0	9.8	89.1	綠色片岩	明綠色	
Y S 12	~	N 30、W202、共生I下面	~	(155.5)	38.5	10.0	96.4	~	深青綠色	
Y S 13	~	N 25、W204、淡茶褐色弱粘質土	~	(61.0)	54.5	6.4	39.8	綠色片岩	茶綠色	
Y S 14	第109回	S B 12上部	磨石b	111.5	70.0	57.0	668.0	砂岩	淡灰色	
Y S 15	~	S D 6、覆土	~	74.0	62.7	58.5	389.0	~	灰黃色	
Y S 16	~	S B 10	~	70.0	49.9	47.0	249.0	~	灰褐色	
Y S 17	~	S B 05、(南端)	~	57.4	69.0	54.7	293.0	~	灰褐色	緻密
Y S 18	~	N 29-38、W201-209、共生I下面	叩石・磨石	91.9	73.4	56.6	516.0	~	灰褐色	
Y S 19	~	S K 506	~	68.0	62.5	42.0	223.0	~	灰褐色	粗い
Y S 20	~	S K 15	磨石b	83.5	68.1	46.1	371.0	~	灰黃色	緻密
Y S 21	~	N 50-6、W160、黄色弱砂質土、削削り	~	96.4	88.5	38.5	502.0	~	灰茶色	
Y S 22	~	N 29-36、W221-230、共生II	~	105.8	91.0	69.9	895.0	~	~	
Y S 23	~	S B 10、柱穴7	叩石	60.5	35.9	35.0	111.0	花崗閃綠岩	暗褐色~白黄色	
Y S 24	~	S B 01、C区、サブトレ	磨石a	95.0	41.0	23.4	155.0	綠色片岩	灰黃色	
Y S 25	~	S B 02、D区、壁溝	~	106.9	41.4	26.6	134.0	砂岩	灰水色	
Y S 26	~	S D 6、第2ベクトル、西より上層	~	84.0	38.9	26.0	125.0	石英岩	淡黃色	
Y S 27	~	S D 6上層、黄色弱砂質土	~	112.3	34.7	28.3	181.0	綠色片岩	灰黃色	
Y S 28	~	S B 05、D区、壁溝	~	(55.9)	21.1	26.7	46.2	紅褐色片岩	網狀色	
Y S 29	第110回	不明	印石	107.0	93.9	50.9	705.0	白雲母花崗岩?	黃茶色	
Y S 30	~	N 50、W260、住居址上面、第2層	~	95.8	79.0	68.9	700.0	石英花崗岩?	淡黃色	
Y S 31	~	N 32-35、W229-230、共生I下面	磨石b	61.9	58.0	31.0	172.0	砂岩	灰黃色	

石器No.	標識番号	出土地区・遺構・層位	石器の種類	法量 (mm)			重 量 (g)	石 材	石材の特徴・色調	備 考
				現 長	幅	厚				
YS 32	第Ⅲ回	S K624	投擲	44.8	50.9	21.0	63.8	砂岩	暗茶色～墨灰色	
YS 33	〃	S B01, B区、第1層	〃	40.8	35.4	27.0	56.0	〃	灰色	
YS 34	〃	N S 0-S 9, W1-10, 黄色弱粘質土	〃	29.0	26.7	18.5	18.8	〃	淡茶黄色	粗い
YS 35	〃	S K659 (北)、下層	〃	46.7	38.0	32.0	74.4	〃	灰黄色	
YS 36	〃	S B03	叩石	156.1	97.5	38.0	857.0	〃	灰茶色	
YS 37	〃	S B03	磨石 a	141.5	57.3	40.0	515.0	〃	灰黄色	緻密
YS 38	〃	S B11, C区、覆土	叩石	(56.5)	46.3	13.8	54.8	泥岩	灰绿色	
YS 39	〃	S B03	磨石 a	(70.2)	56.9	36.0	206.0	砂岩	淡茶黄色	塊成並ける
YS 40	P L64	S K611	磨石 b	126.6	76.5	72.2	1032.0	〃	淡黄色	
YS 41	第Ⅲ回	N 0-20, W2-20、上面	叩石・磨石	(136.6)	42.9	25.0	275.0	綠色片岩	淡綠灰色	
YS 42	〃	S B03	砥石	196.0	(77.9)	57.0	1269.0	砂岩	淡黃褐色	
YS 43	〃	S B03	〃	188.9	86.3	78.0	2070.0	〃	灰黄色	
YS 44	〃	S B04、床面	〃	167.5	83.0	59.2	1331.0	〃	淡灰黄色	
YS 45	〃	S B10	〃	(75.2)	(69.7)	50.5	341.0	石英斑岩	淡黃灰色	
YS 46	〃	S B10, 柱651	〃	(61.9)	(42.2)	16.0	51.9	〃	淡黃(灰)色	
YS 47	〃	S D6、第2ベルト西より上部	〃	(51.7)	(56.0)	24.5	71.6	〃	淡黃茶色	
YS 48	〃	S B14、覆土上層	〃	(70.0)	71.8	18.0	145.0	〃	淡黃茶色	
YS 49	〃	S B11, C区、覆土	〃	(38.8)	22.8	23.0	26.9	〃	淡黃(灰)色	
YS 50	〃	S B06、A区、覆土表面	〃	(66.6)	(42.5)	14.0	42.3	〃	淡黃(灰)色	
YS 51	〃	S B07、C区、覆土	〃	(193.1)	38.0	25.0	135.0	〃	淡茶黄色	
YS 52	〃	S B07	〃	(40.0)	32.0	18.0	28.9	〃	淡黃(灰)色	
YS 53	〃	S B07、V区	〃	(38.0)	40.0	33.0	60.8	〃	淡黃茶色	
YS 54	〃	第Ⅱ回、S X 2	〃	(86.0)	38.5	23.9	107.0	〃	淡黃(灰)色	
YS 55	〃	S B11、ベルト	〃	(41.0)	(50.0)	19.1	47.2	〃	〃	
YS 56	〃	S B07、床面	〃	58.0	32.0	30.0	82.1	粘板岩	淡茶黄色	
YS 57	〃	S D7、下層	〃	(25.3)	34.0	8.0	9.3	石英斑岩	淡黃(灰)色	
YS 58	〃	N 32、W217、弥生 II	〃	31.2	33.9	30.3	39.2	〃	淡黃茶色	
YS 59	〃	S 3-N 1, W6-10、淡黃褐色弱粘質土	〃	31.0	(29.8)	13.2	21.2	?	淡黃色	
YS 60	〃	中世、W219、ベルト	〃	(38.2)	(38.9)	15.0	18.6	〃	淡茶黄色	
YS 61	〃	S B07、C区、覆土	〃	(42.2)	(50.9)	33.0	73.6	〃	淡黃(灰)色	
YS 62	〃	S B07、中世、ベルト	〃	(66.0)	80.0	(29.0)	130.0	〃	淡黃茶色	
YS 63	〃	S B07、D区、覆土	〃	(66.5)	(44.8)	43.2	131.0	〃	淡黃色	
YS 64	第Ⅲ回	S B07、床面北	砥石	(191.7)	(201.2)	73.0	4221.0	砂岩	淡黃灰色	
YS 65	〃	S B04、中央炉	〃	289.8	177.7	119.0	6,350	〃	淡茶黄色	
YS 66	〃	第Ⅱ回	〃	247.0	(168.5)	97.0	5,950	〃	淡黃灰色	
YS 67	〃	不明	石直・砥石	403.0	(244.8)	74.5	11,100	〃	淡黃茶色	
YS 68	〃	第Ⅱ回	〃	394.0	285.4	97.0	15,100	〃	灰黄色	
YS 69	〃	N 15, W95	砥石	387.0	185.8	131.0	11,100	〃	淡黃灰色	
YS 70	〃	S B07	台石	(283.2)	522.8	98.0	20,200	〃	黃灰色	
YS 71	〃	S B10	〃	309.1	259.9	151.0	24,000	〃	灰黄色	
YS 72	〃	S B10	〃	395.0	168.0	143.0	17,500	〃	灰(黄)色	
YS 73	〃	S B04	〃	362.0	230.0	108.0	19,900	石英?	黃褐色～白桃色	
YS 74	P L65	S B05	〃	308.0	289.0	65.0	11,600	綠色片岩	青綠色	
YS 75	〃	S B11	〃	353.0	166.0	152.0	14,900	石英片岩	白珊瑚～青綠色	
YS 76	〃	S B06	〃	91.4	106.8	23.0	315.0	花崗片麻岩	淡黃(灰)色	
YS 77	P L66	N 13-南隣、W170-180、黄色弱粘質土	用印不明	113.9	102.5	43.2	805.0	花崗片麻岩	黃(灰)色	
YS 78	〃	N 20-27, W180-186、弥生 II	〃	113.3	119.7	32.3	545.0	〃	黃白色	
YS 79	〃	N 20-28, W190-194、弥生 I	〃	95.0	119.0	43.0	650.0	石英斑岩	黃(白)色	
YS 80	〃	S B10	〃	114.2	138.0	32.5	775.0	〃	〃	
YS 81	〃	S B10	〃	137.5	137.2	31.5	863.0	〃	〃	
YS 82	〃	N 28, W244、暗黃褐色弱粘質土	〃	91.4	106.8	23.0	315.0	花崗片麻岩	淡黃(灰)色	
YS 83	〃	N 30-40, W220-240、暗黃褐色粘土混入	〃	112.6	125.0	31.0	727.0	砂岩	黃(灰)色	
YS 84	〃	N 20-30、砂層	〃	93.8	117.6	43.0	647.0	花崗片麻岩	黃白色	
YS 85	〃	N 42-48, W228-234	〃	84.8	35.2	28.8	114.0	砂岩	淡灰白色	
YS 86	〃	S B10	〃	80.0	36.0	23.2	88.8	〃	灰白色	
YS 87	〃	S B10、覆土床面	〃	99.1	31.4	25.5	73.6	〃	〃	
YS 88	〃	S B10	〃	93.6	31.0	25.0	108.0	〃	灰黃色	
YS 89	〃	S B10	〃	(91.1)	40.8	18.5	112.0	紅褐色片岩	茶綠色	
YS 90	〃	S B10	〃	(64.7)	41.4	17.0	71.4	〃	〃	
YS 91	〃	S B10、覆土床面	〃	103.0	38.5	22.2	143.0	綠色片岩	綠色	
YS 92	〃	S B10	〃	85.0	32.7	22.4	98.4	砂岩	黃灰色	
YS 93	〃	S B10	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	

石器No.	博物番号	出土地区・遺構・層位	石器の種類	法量 (mm)			重 量 (g)	石 材	石材の特徴・色調	備 考
				現 長	幅	厚				
Y S 94	P L 66	S B 10	+	78.1	35.5	24.9	88.1	砂岩	淡青色	
Y S 95	+	S B 10	+	72.5	41.8	28.5	111.0	+	灰色	
Y S 96	+	S B 01、第 2 層	+	83.5	38.8	19.0	80.4	花崗片麻岩	黄白色	
Y S 97	+	N S 0～S 9, W 10～15、黄色泥質土	+	97.7	23.0	13.0	47.4	紅巖片岩	紫青色	
Y S 98	+	N 30～36, W 220～226、中世包含層	+(117.4)	24.5	14.8	68.2			青紫色	
Y S 99	+	N 31～35, W 235～237、弥生 I	+	121.1	32.0	22.0	124.0	綠色片岩	綠色	
Y S 100	+	N 31～35, W 235～237、弥生 I	+	133.1	54.3	34.5	351.0	綠色片岩?	青綠色	
Y S 101	+	S B 10	+	110.6	42.5	25.5	150.0	チヤード	灰青色	
Y S 102	+	S B 10	+	117.0	68.0	54.0	653.0	砂岩	灰黃色	
Y S 103	+	S B 10、南側、遺構突出	+	160.0	66.5	47.9	744.0	+	+	
Y S 104	第11回	S B 07、柱穴 3	勾玉	40.0	25.9	12.0	13.9		青白色	
Y S 105	+	S B 10、柱穴 6	碧玉(本縣品)	25.5	12.9	9.5	6.0		淡茶褐色	

その他の石器

TES 1	萬山回	N 21 (20-22)、表探	磁石	115.0	68.0	33.0	413	石英斑岩	淡青色	
TES 2	+	E 60-80, S 7-10、黄灰色砂質土	+	116.9	68.5	46.0	609	+	淡黃茶色	

弥生時代鉄器

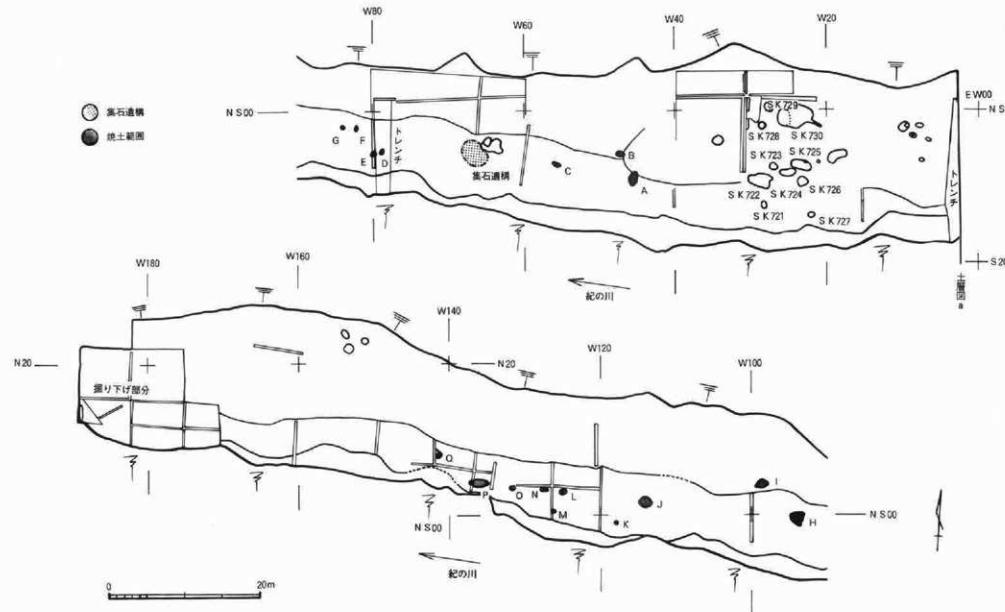
鉄器No.	揮因番号	出土地区・構造・層位	鉄器の種類	法量 (mm)			重 量 (g)
				現 長	幅	厚	
Y 1 1	第III区	S D 6下部、第1ベルト南	鍔	129.0	16.0	2.9	19.1
Y 1 2	-	S B 01、D区、第2層	-	(67.4)	17.8	5.4	9.4
Y 1 3	-	N 18-20、W 182-188、弥生Ⅱ	-	(78.0)	15.5	2.0	11.4
Y 1 4	-	N 34、W 227、黄色弱粘質土上面、弥生Ⅰ	鉄斧	109.2	50.2	10.0	248
Y 1 5	-	S B 05、床面、炉北側	鉄鎌	38.4	13.0	10.0	6.7
Y 1 6	-	N 30、W 223、黄色弱粘質土上面	不明鉄製品	80.0	(33.0)	4.1	16.2
Y 1 7	-	N 30、W 223、黄色弱粘質土上面	-	(214.0)	(36.0)	5.0	64.7

古墳時代鉄器

C 1 1	第III区	S B 05、第1層	鉄鎌	(54.2)	31.5	4.8	14.5
C 1 2	-	S B 04、覆土	刀子	128.0	17.0	2.5	21.4

鎌倉～江戸時代鉄器

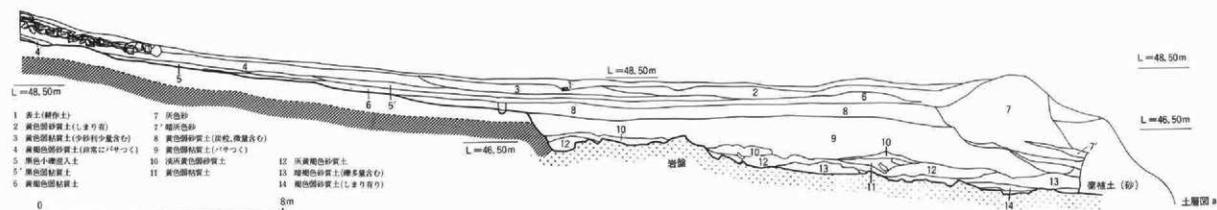
T I 1	第III区	W 228-239、中世Ⅰ落ち込み	鉄鎌	(100.0)	42.0	4.0	22.1
T I 2	-	-	-	(139.5)	47.5	3.0	-
T I 3	-	N 24-30、W 185-190	-	127.3	25.1	(6.0)	35.7
T I 4	-	N 20-30、W 160-180	-	(111.0)	23.0	6.2	26.7
T I 5	-	N 30-40、W 197-199	-	123.0	33.8	5.5	40.8
T I 6	-	N S O、E 0-20、第3層	-	(126.0)	(27.0)	2.2	-
T I 7	-	第IV区、包含層(南西)	-	(59.5)	(22.0)	4.5	17.2
T I 8	-	N 30-40、W 195-197	-	125.0	11.0	8.0	27.8
T I 9	-	N 30-40、W 193-195	不明	(119.0)	19.2	2.8	17.2
T I 10	-	北斜面地区、黄色土	鉄鎌	(63.0)	20.8	(11.0)	47.0
T I 11	-	N 221-228、中世Ⅰ落ち込み	鎌	(80.0)	21.0	5.0	22.9
T I 12	-	N 5-S 3、W 70-80、淡黃褐色弱粘質土	櫻	(68.0)	(18.0)	(18.3)	53.7
T I 13	-	S B 08、第7層	鉄釘	(26.7)	10.8	2.0	1.9
T I 14	-	第II区、S X 6	-	63.0	10.0	4.9	6.5
T I 15	-	N 32-40、W 216-220	-	(36.0)	7.9	3.1	2.6
T I 16	-	N 23-36、W 180-184	-	(49.0)	13.1	4.8	5.3
T I 17	-	N 30-40、W 220-225、淡茶褐色弱粘質土	-	36.0	7.6	3.9	2.7
T I 18	-	試掘トレシチ	-	33.8	11.5	3.0	3.1
T I 19	-	N 30-40、W 195-197	-	46.0	13.3	4.8	5.3
T I 20	-	N 30-36、W 210-220、淡茶褐色弱粘質土	-	(36.0)	10.4	4.1	4.0
T I 21	-	N 22、W 130、黒色堅土	-	59.1	5.0	4.0	4.9
T I 22	-	N 23、W 204、淡茶褐色弱粘質土	-	54.0	15.0	5.1	-
T I 23	-	N 30-40、W 190-195	-	57.0	8.5	4.1	4.9
T I 24	-	S X 6-一筋	-	35.7	7.0	5.0	3.7
T I 25	-	N 23-26、W 190-196	-	34.9	7.0	4.3	2.6
T I 26	-	S B 10、C区覆土中層	-	(40.5)	6.7	2.6	4.4
T I 27	-	第II区、S X 6	-	66.0	13.8	5.0	4.0
T I 28	-	N 30-40、W 180-200 梗出	-	(25.0)	5.4	4.9	2.8
T I 29	-	試掘トレシチ	-	58.0	17.0	6.0	11.5
T I 30	-	N S 0-3.5、W 23-37、淡黃褐色弱粘質土	-	(32.1)	15.5	6.5	8.1
T I 31	-	N 12-20、W 156-165	-	(32.5)	16.0	6.1	7.5
T I 32	-	第V区、表採	-	47.0	14.0	5.7	9.3
T I 33	-	N 20-30、W 95-120、黄色疊浸入層	-	(48.0)	20.5	11.5	15.5



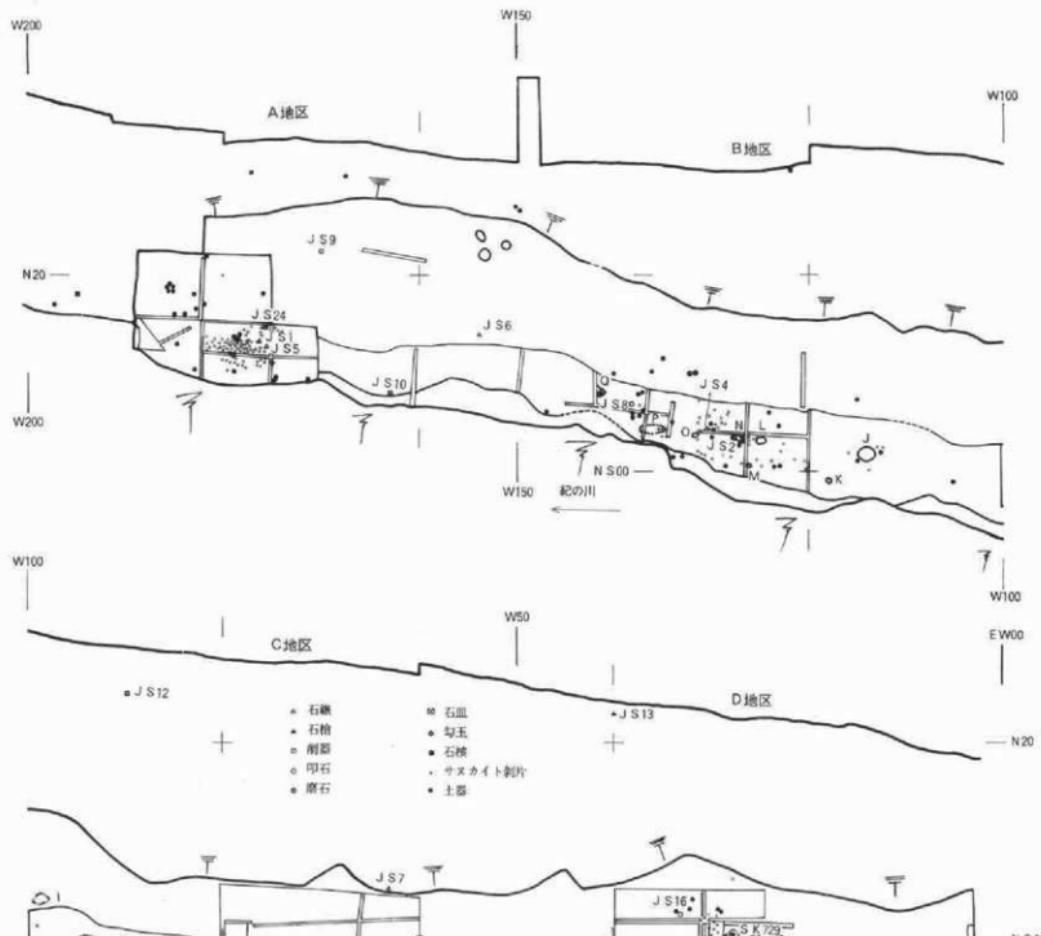
遺構名	規 模	出土遺物	時 期	備 考
S K 721	長軸 0.95m, 短軸 0.70m, 深さ 0.11m			
S K 722	× 3.05m, × 2.2m, × 0.15m		後期初期	
S K 723	× 1.05m, × 0.9m, × 0.3m	縄文土器	後期初期	
S K 724	× 2m, × 0.93m, × 0.15m			
S K 725	× 2.85m, × 1.4m, × 0.2m		後期初期	中津式
S K 726	× 1.12m, × 1m, × 0.1m		中期初期	燒土粒少量
S K 727	× 0.95m, × 0.75m, × 0.06m			
S K 728	× 1.25m, × 1.15m, × 0.52m		中期前葉	
S K 729	× 1.5m, × 1.05m,	縄文土器	早期末～中期初	
S K 730	× 3.5m, × 2.6m, × 0.9m		中期前葉	
集石遺構	底面約 4m	無遺物		川原石片岩
堆土 A	長軸 1.9m, 短軸 1.15m			
堆土 B	× 1.25m, × 0.83m			
堆土 C	× 1.28m, × 0.6m			
堆土 D	× 1m, × 0.75m			
堆土 E	× 0.85m, × 0.78m			
堆土 F	× 0.8m, × 0.35m			
堆土 G	× 0.4m, × 0.33m			
堆土 H	× 1.95m, × 1.65m			サヌカイト剝片
堆土 I	× 1.95m, × 1.4m			
堆土 J	× 1.95m, × 1.55m			
堆土 K	× 0.4m, × 0.3m			
堆土 L	× 1.1m, × 0.65m			
堆土 M	× 0.6m, × 0.48m			
堆土 N	× 1.1m, × 0.55m	石器		
堆土 O	× 0.75m, × 0.43m	サヌカイト剝片		
堆土 P	長軸 2.7m, 短軸 1.0m, 深さ 0.1m		後期初期	
堆土 Q	× 1.05m, × 0.75m	縄文土器		

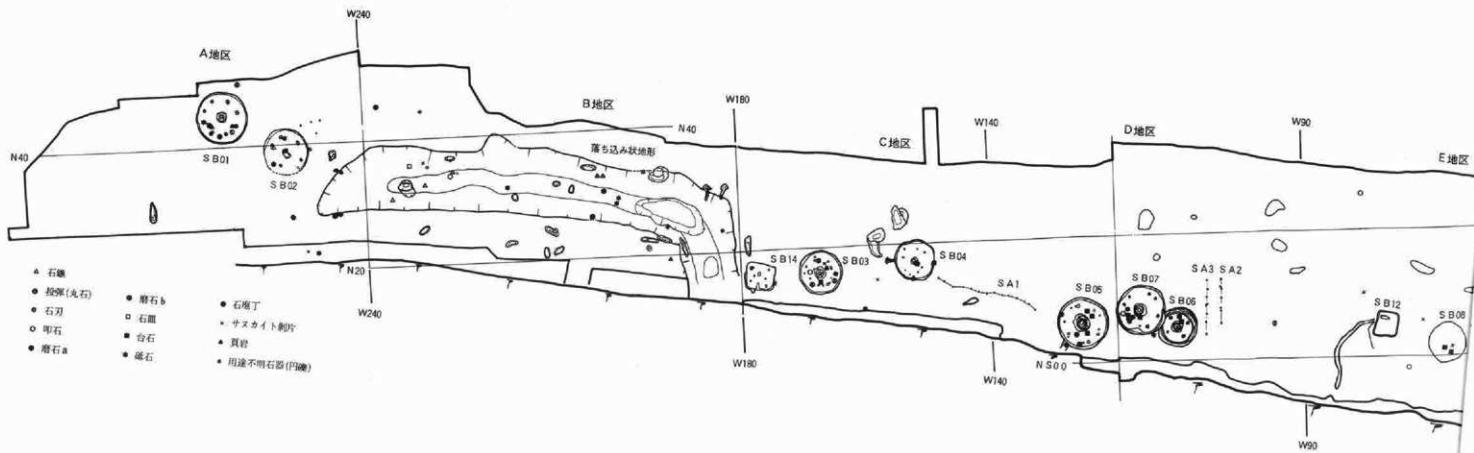
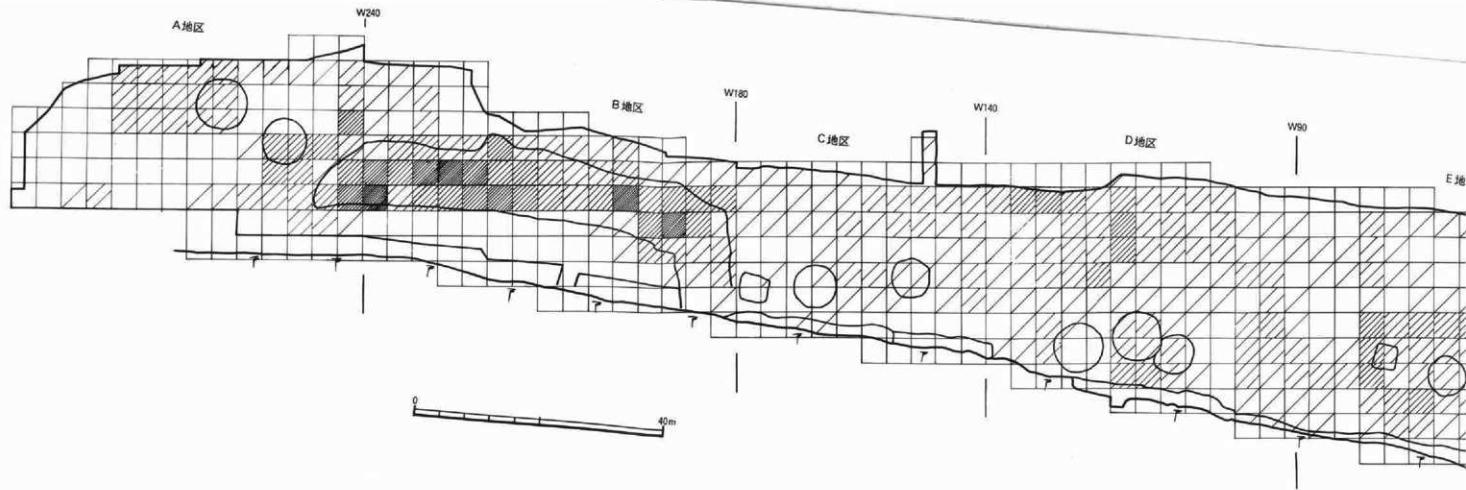
第2表 縄文時代主要遺構一覧

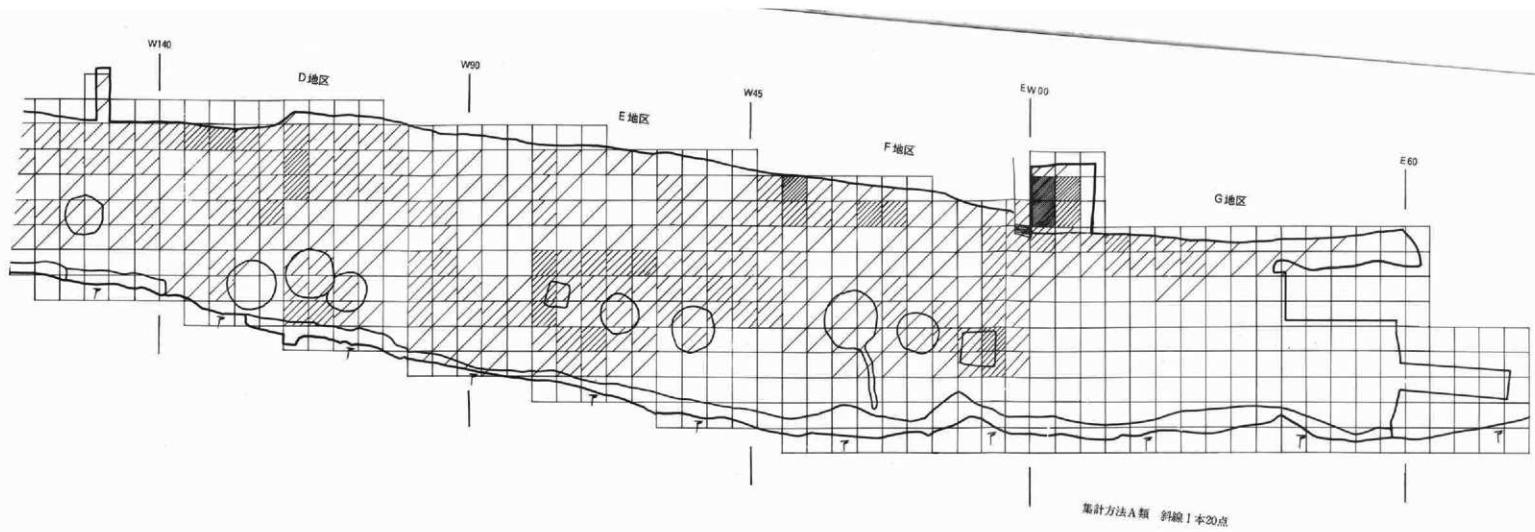
第10図 縄文時代遺構全体図



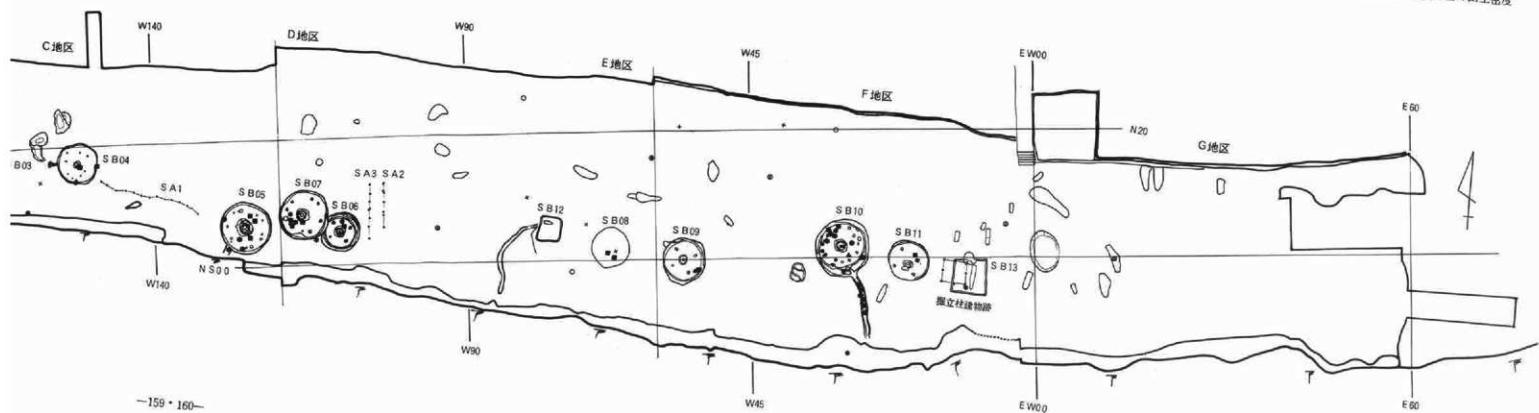
第11図 W 3南北トレンチ土層図





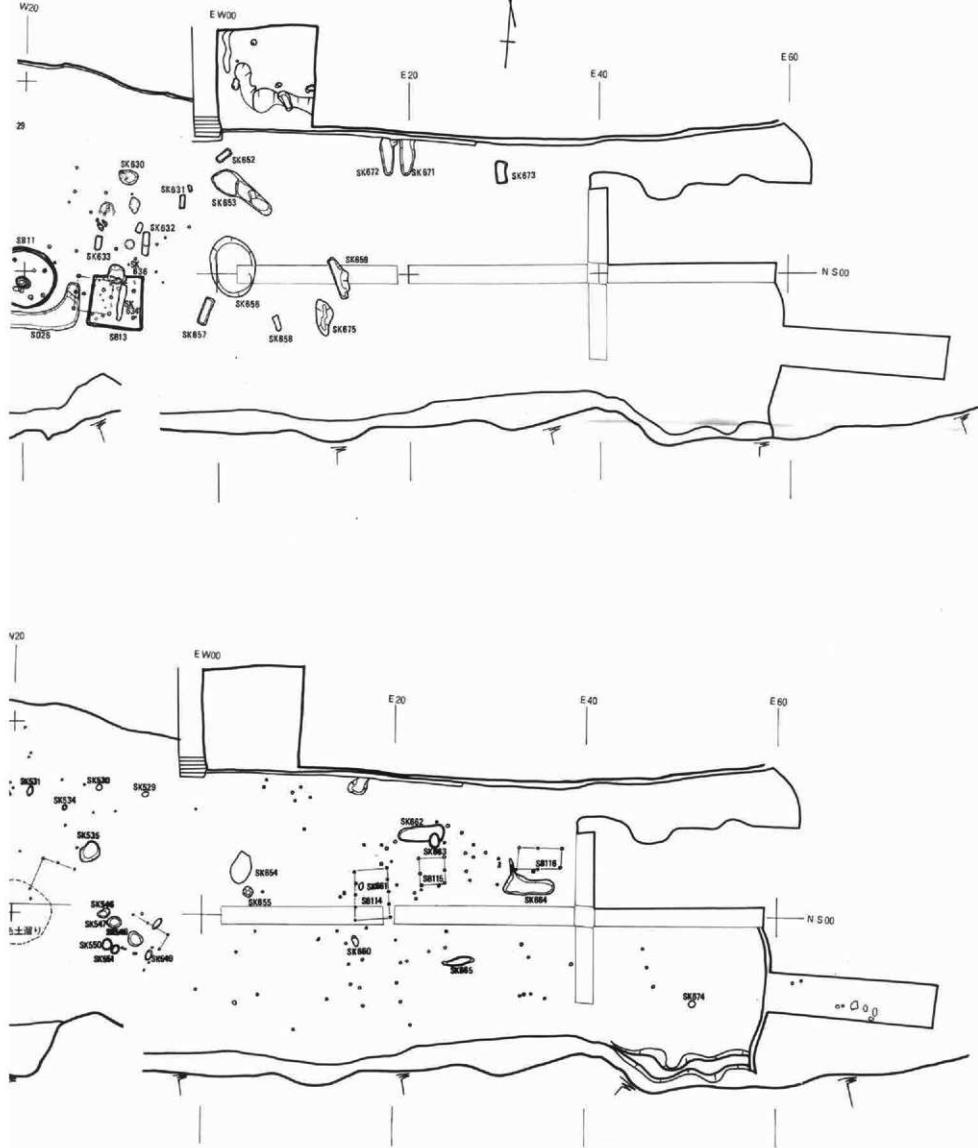


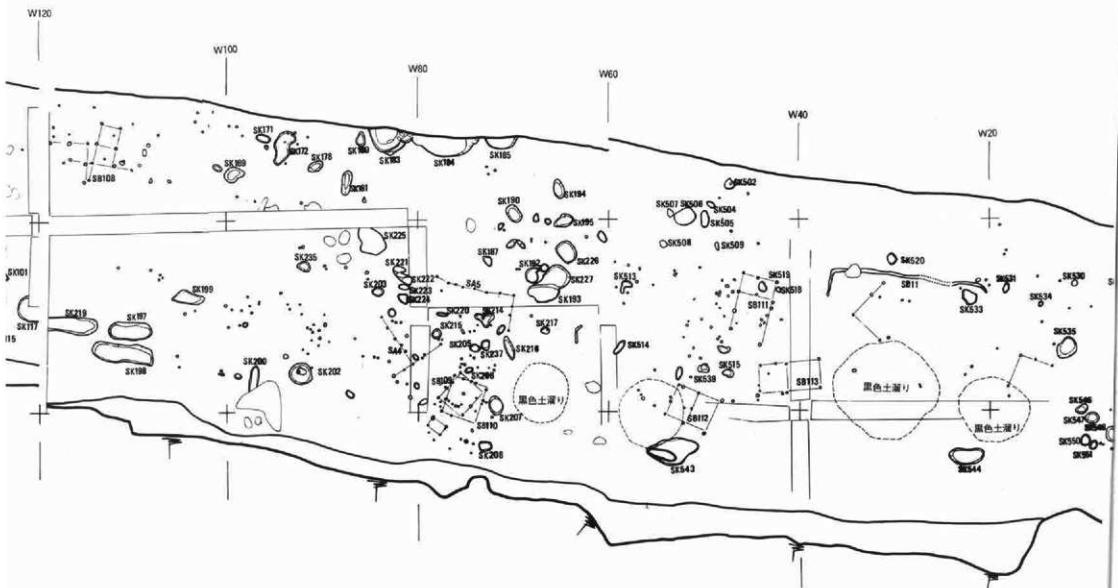
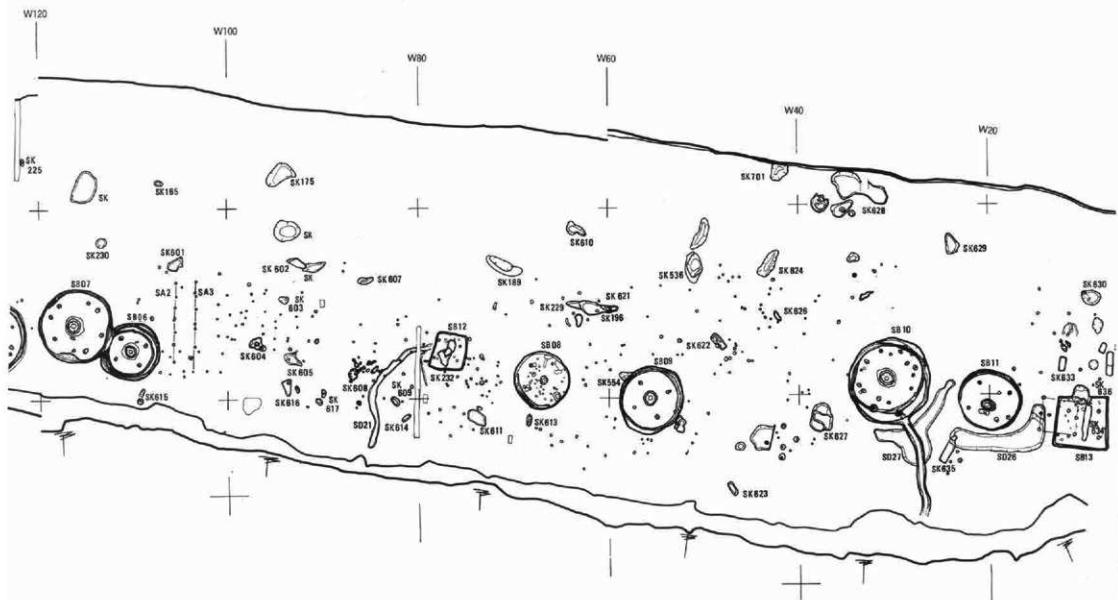
第125図 弥生土器の出土密度

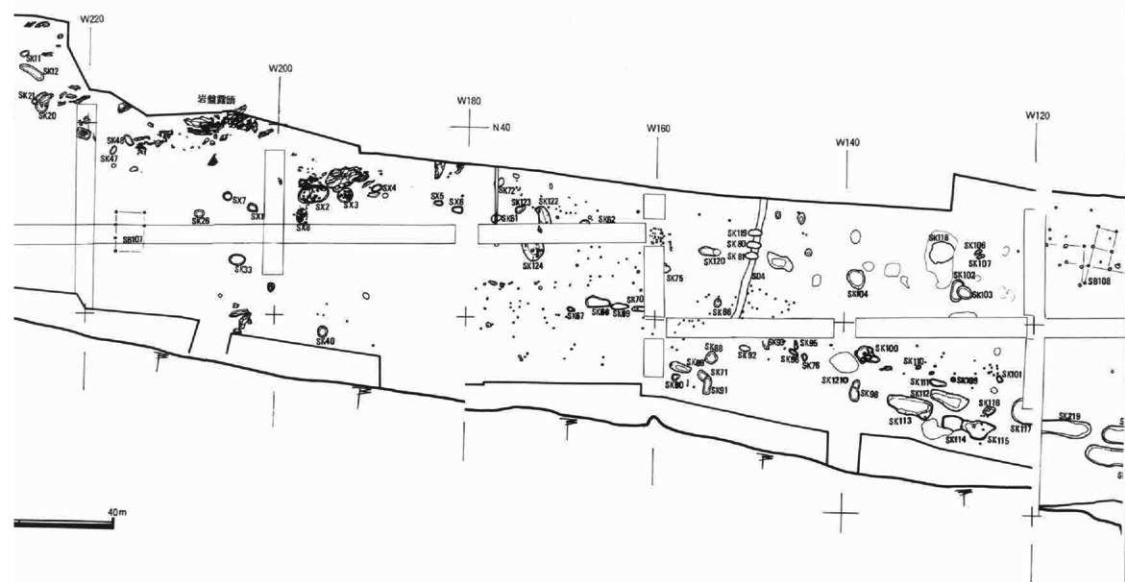
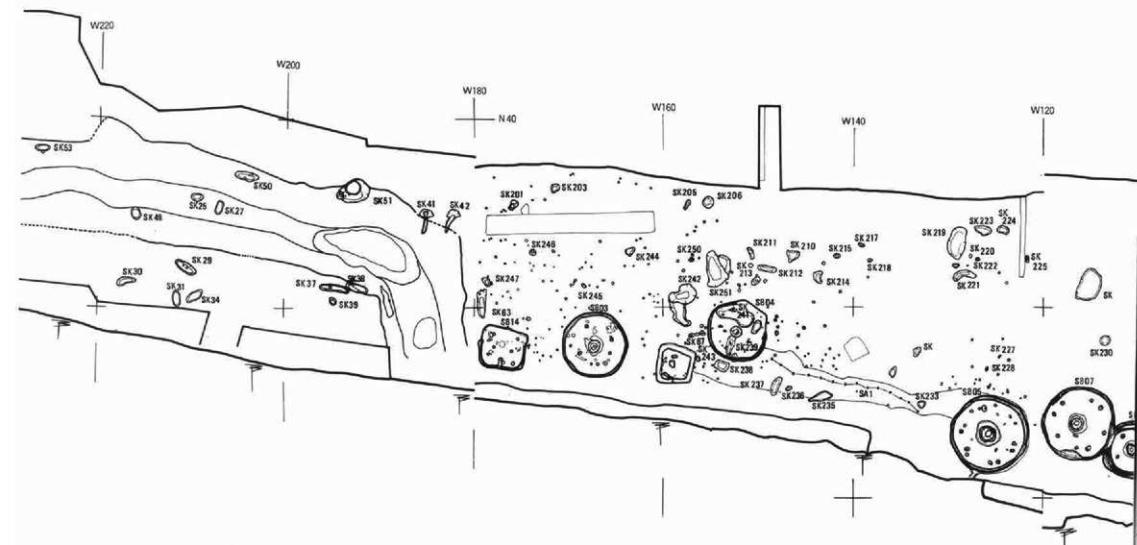


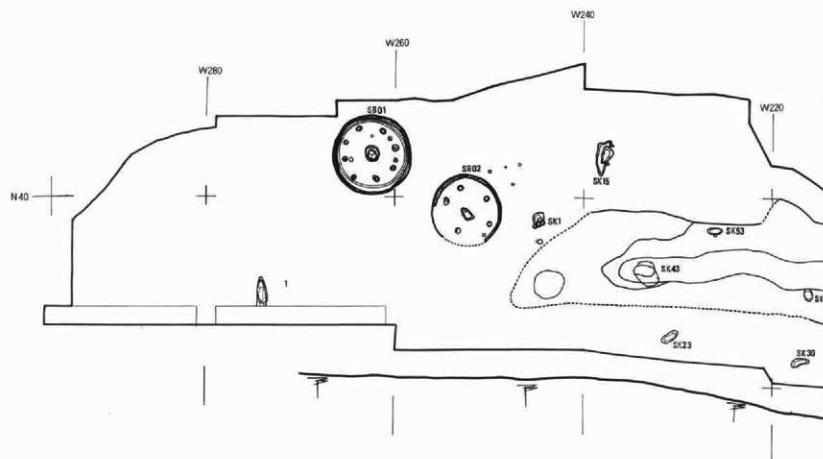
第126図 弥生時代石器の分布

付図 遺構全体図

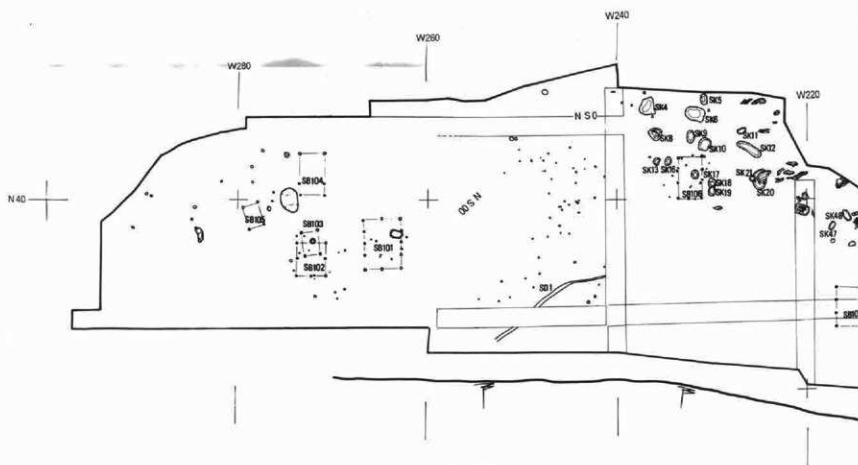








1. 弥生時代～古墳時代遺構全体図

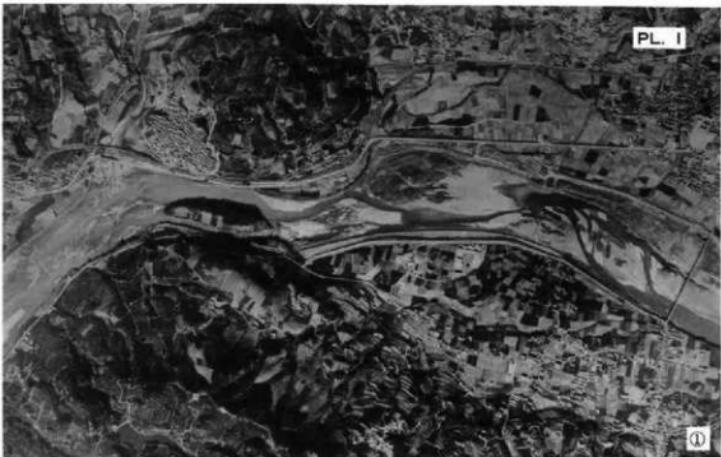


2. 鎌倉時代～江戸時代遺構全体図

A horizontal number line starting at 0 and ending at 40. There are 40 tick marks on the line, including the endpoints. The tick marks are evenly spaced, representing integer values from 0 to 40.

図 版

① 航空写真

② 遺跡遠景
(東から)③ 縄文時代遺構全景
(西から)

① SK725
縄文土器出土状況
(南から)



② 縄文時代集石造構
(南から)



③ W230南北トレンチ
中央土層
(北東から)



① 弓生時代
第Ⅰ区全景
(東から)



② 弓生時代
第Ⅲ～V区全景
(南西から)



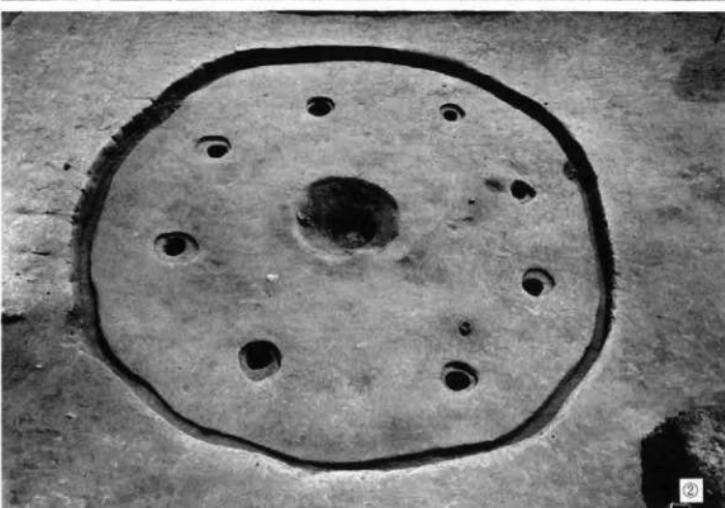
③ 弓生時代
第Ⅲ～V区全景
(南東から)



① 新石器時代
第III-V区全景
(東から)



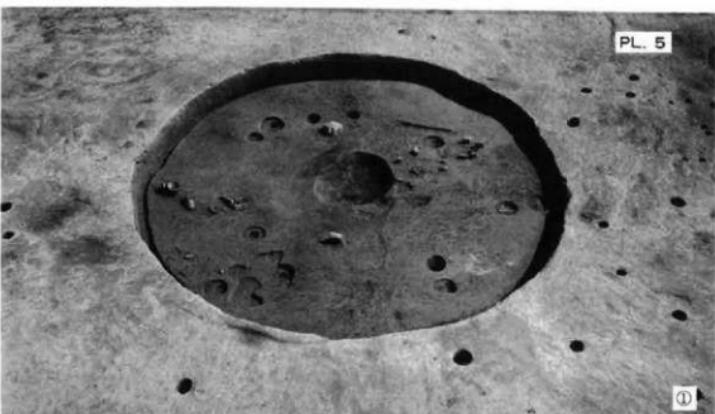
② S B01-c検出状況
(北から)



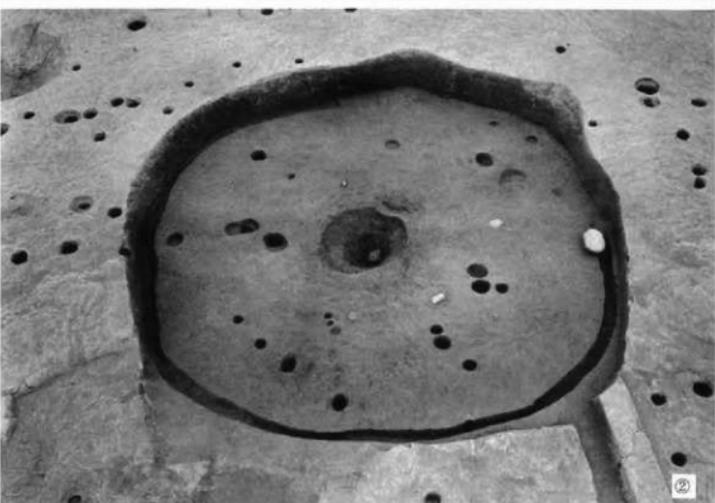
③ S B02検出状況
(東から)



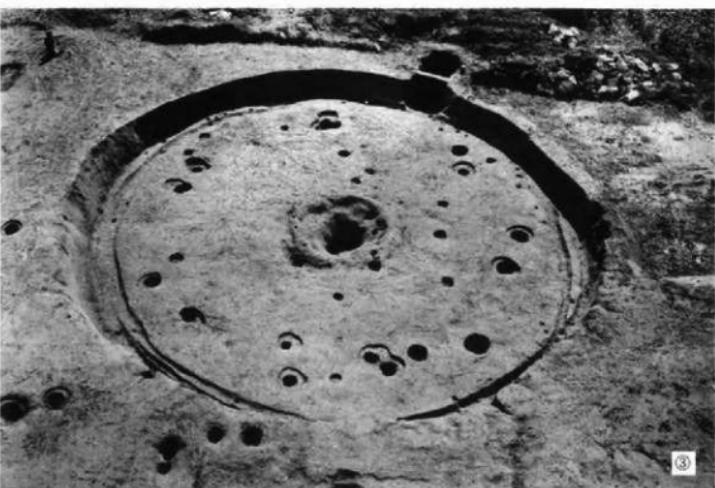
① S B03検出状況
(北から)



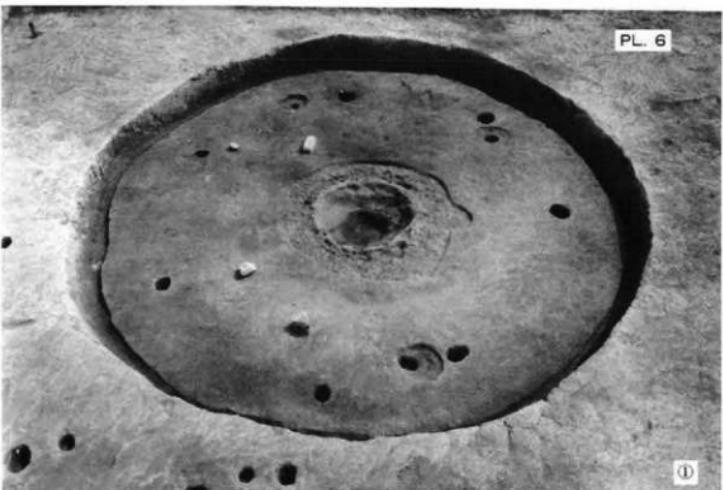
② S B04検出状況
(南から)



③ S B05-a-b検出状況
(北から)

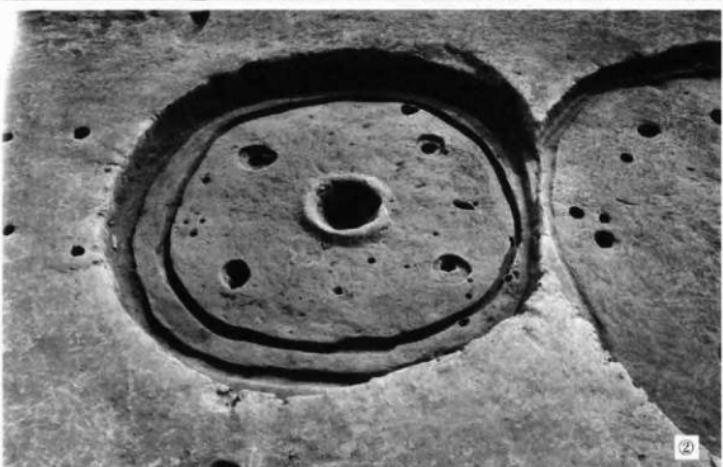


① S B05-c検出状況
(北から)



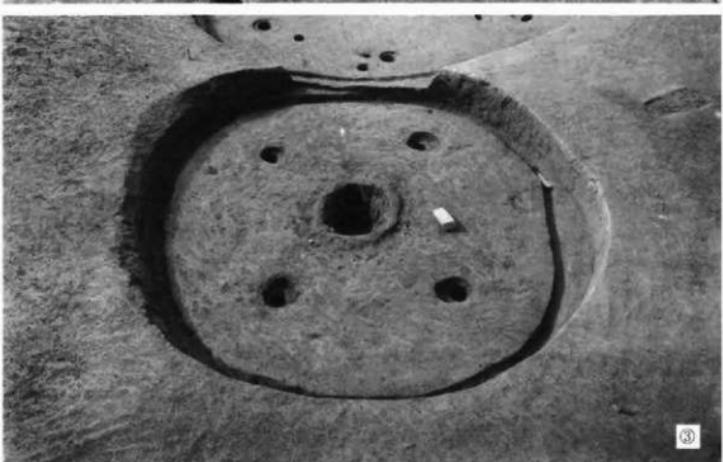
①

② S B06-a検出状況
(北から)



②

③ S B06-b検出状況
(東から)



③

① S B07検出状況
(東から)



①

② S B08検出状況
(南から)



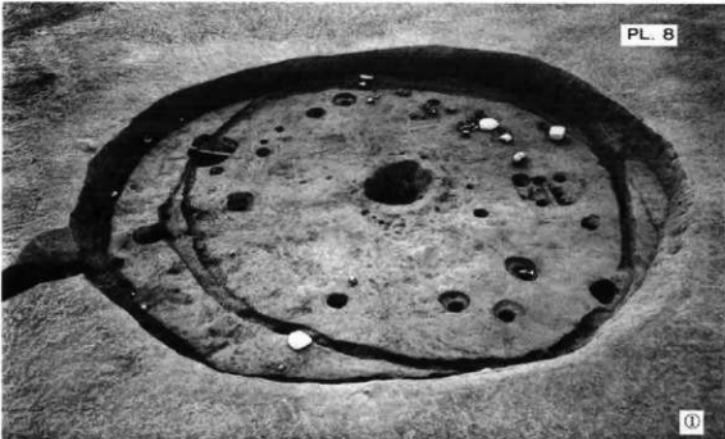
②

③ S B09検出状況
(南から)



③

① S B-b-e検出状況
(東から)



①

② S B10-a完掘状況
(北西から)



②

③ S B11検出状況
(東から)



③

① S B12検出状況
(北から)



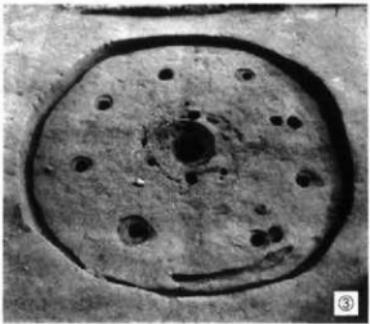
①

② S B13検出状況
(北から)



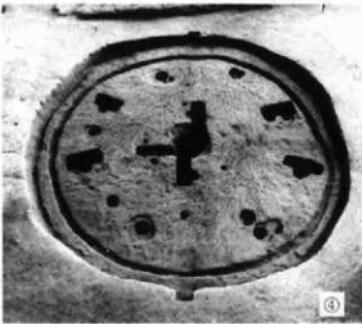
②

③ S B01-b検出状況
(北から)



③

④ S B01-a検出状況
(北から)



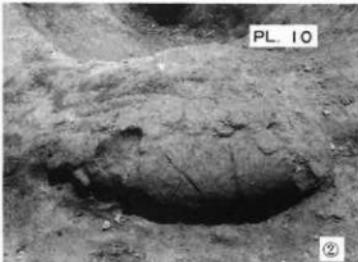
④

① S B01柱穴14・6
断削り
(南から)



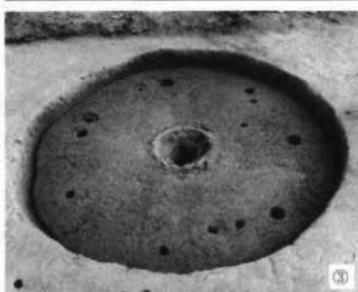
①

② S B04粘土塊出土
状況 (北東から)



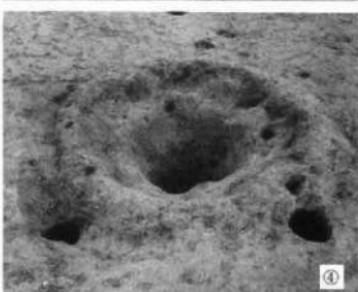
②

③ S B05-b検出状況
(北から)



③

④ S B05-bが検出状況
(北から)



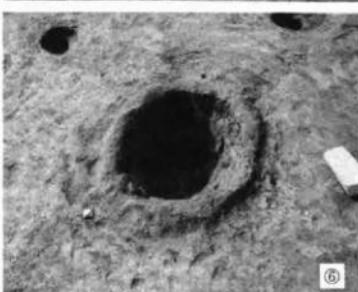
④

⑤ S B05柱穴20断削り



⑤

⑥ S B06-bが検出
状況 (東から)



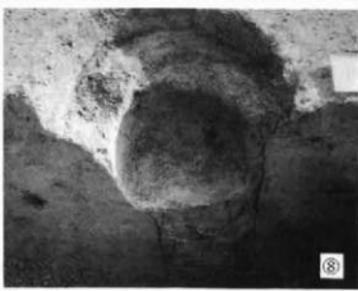
⑥

⑦ S B10堤断削り
(西から)



⑦

⑧ S B10柱穴 8断削り
(西から)



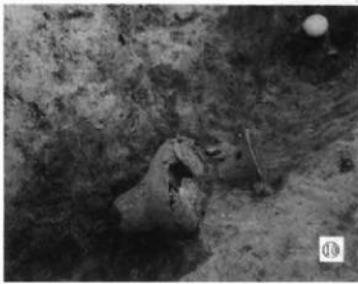
⑧

⑨ S B10柱穴 9断削り
(北東から)



⑨

⑩ S B10-c甕溝遺物
出土状況
(東から)



⑩

① S K165検出状況
(北から)



①

② S K234遺物出土状況
(南から)



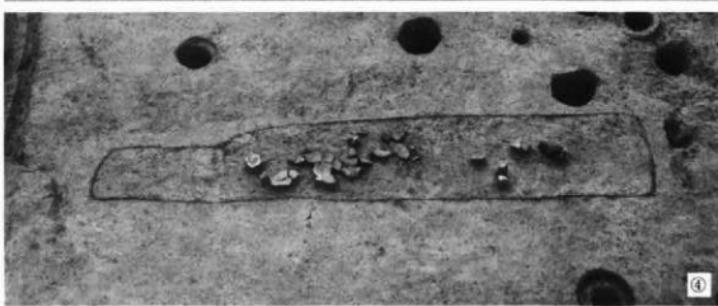
②

③ S K241検出状況
(南から)



③

④ S K634検出状況
(東から)



④

⑤ S K635検出状況
(東から)



⑤

① S K37検出状況
(北から)



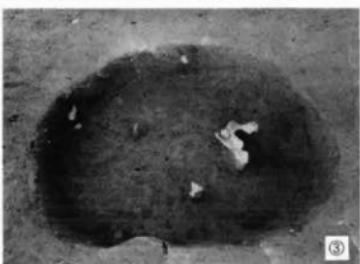
①

② S K196検出状況
(南から)



②

③ S K235検出状況
(南から)



③

④ S K554検出状況
(南から)



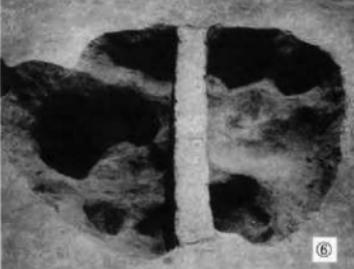
④

⑤ S K604検出状況
(北から)



⑤

⑥ S K608検出状況
(北西から)

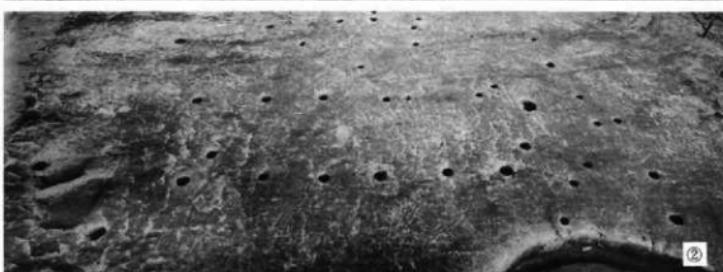


⑥

① 掘立柱建物跡
検出状況
(南から)



② SA2・SA3検出
状況 (西から)



③ 落ち込み状地形
検出状況
(東から)



④ W220南北試掘
トレンチ土層
(西から)

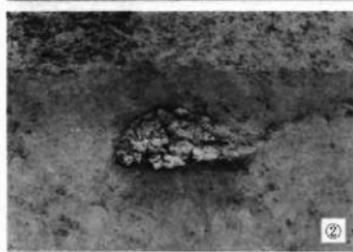


① 落ち込み状地形
遺物出土状況
(南から)



①

② 落ち込み状地形
鉄製品出土状況
(北から)



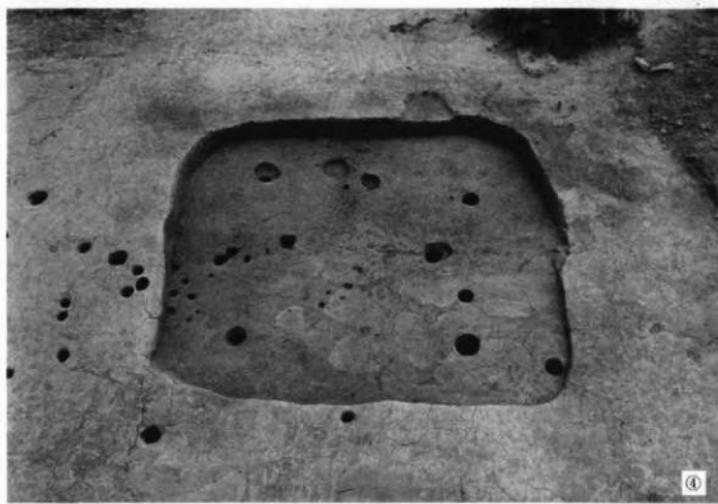
②

③ 第VI区北斜面
遺物出土状況
(西から)



③

④ S B14検出状況
(北から)



④

⑤ S B14炭化材検出
状況 (北から)



⑤

① 西拡張区全景
(東から)



② 第Ⅱ区上面全景
(東から)



③ 第Ⅲ区上面全景
(東から)



① 第IV・V区上面全景
(東から)



①

② 第VI区全景
(東から)



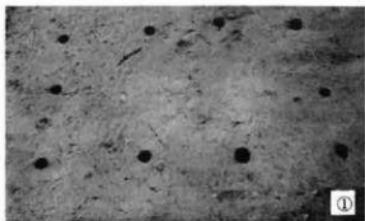
②

③ S B114-S B115-
S B116検出状況
(西から)

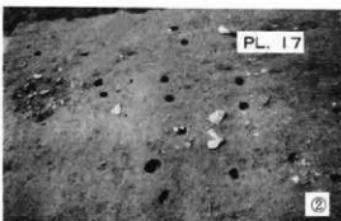


③

① S B106検出状況
(東から)



② S B108検出状況
(東から)



③ S B112検出状況
(北東から)



④ S B113検出状況
(北から)



⑤ S B109・S B110
検出状況
(南東から)



⑥ S A5検出状況
(南から)



① 中世土壤墓検出
状況 (南から)



② S X2検出状況
(南から)



③ S X3検出状況
(南から)



④ S X6検出状況
(北から)



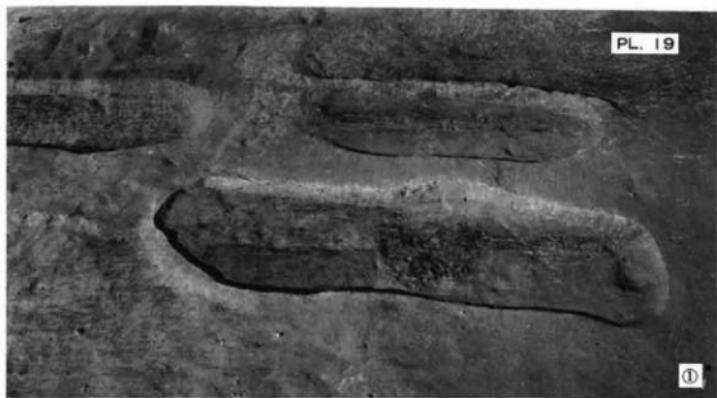
⑤ 試掘 S X1検出
状況 (北東から)



⑥ 試掘 S X2検出
状況 (西から)



① S K197-S K198-S K219検出状況
(南から)



①

② S K544検出状況
(北から)



②

③ S K544東西土層
(北から)



③

④ 第Ⅲ区上面西半
遺構検出状況
(北から)



④

① S K 61検出状況
(北から)



② S K 81検出状況
(南から)



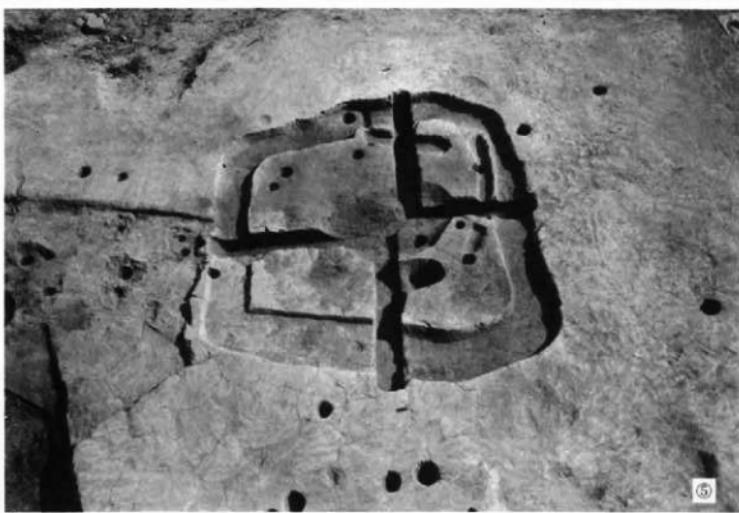
③ S K 81掘り方検出
状況 (南から)



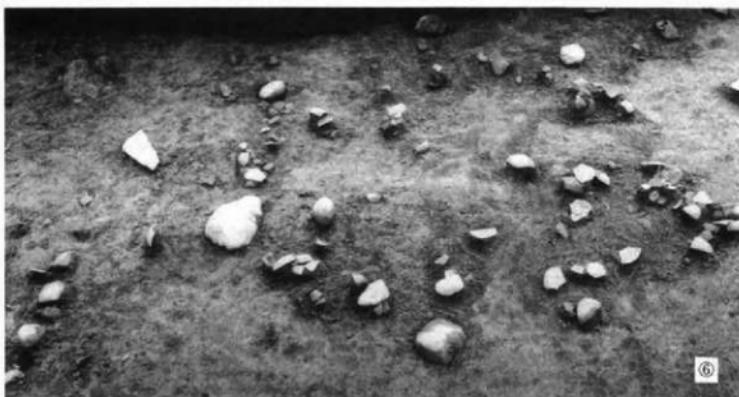
④ S K 549検出状況
(東から)



⑤ 方形周溝造構
検出状況
(北から)



⑥ S B 10上部落ち込み
遺物出土状況
(北から)



① 土壌状況
検出状況
(北から)

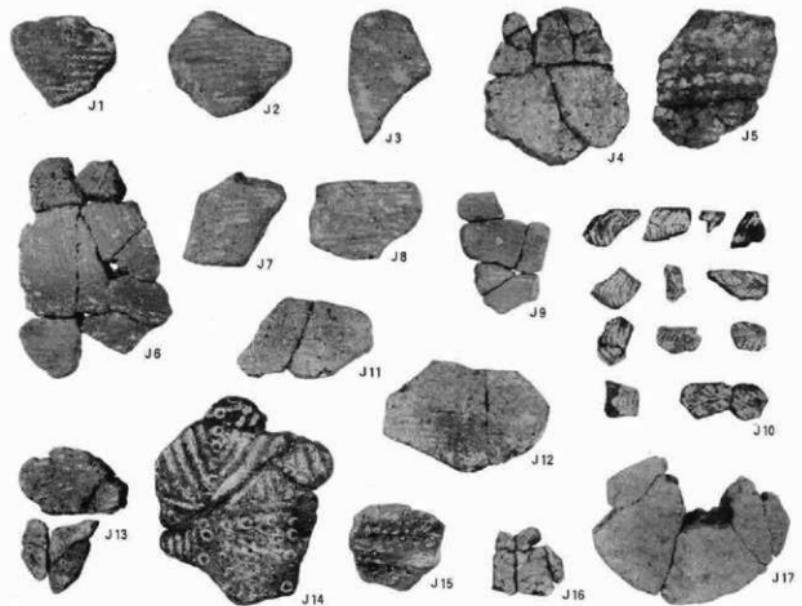


② 南岸調査区全景
(東から)

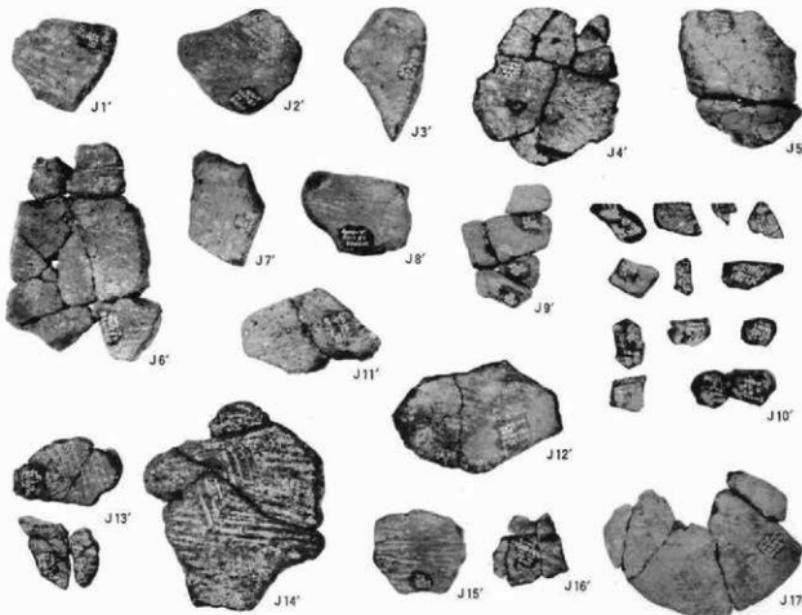


③ 南岸調査区
北縁土層
(東から)



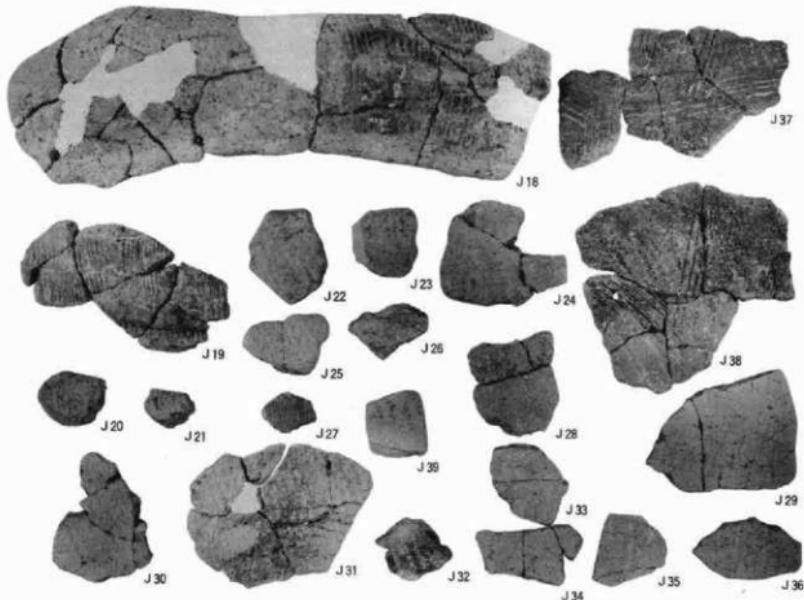


外面

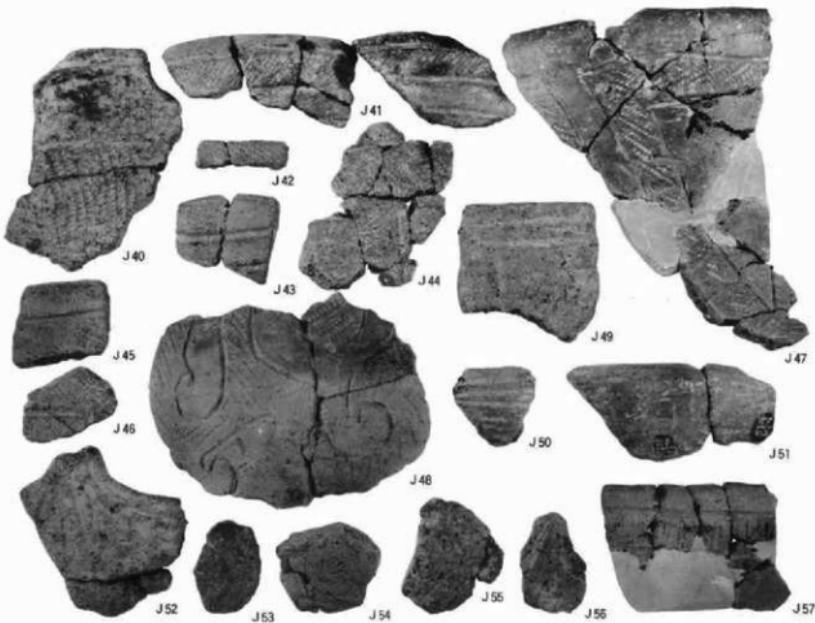
J₁

内面

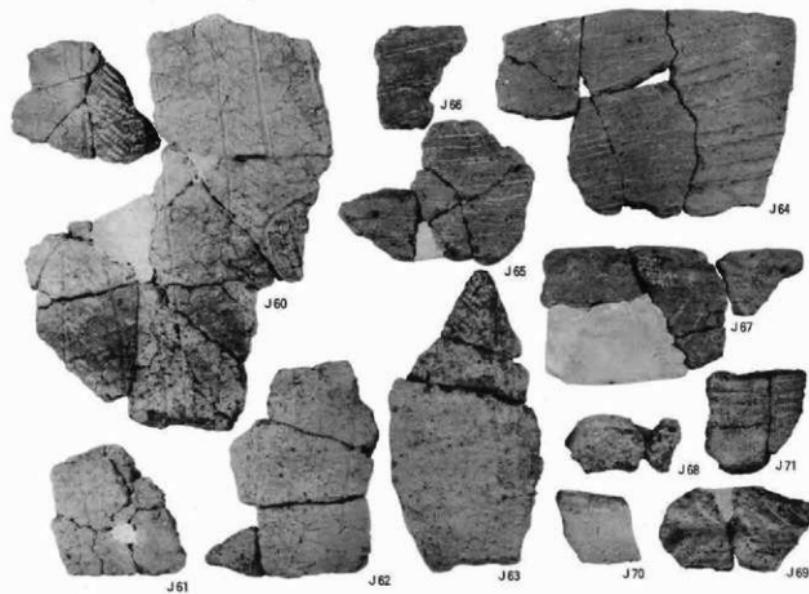
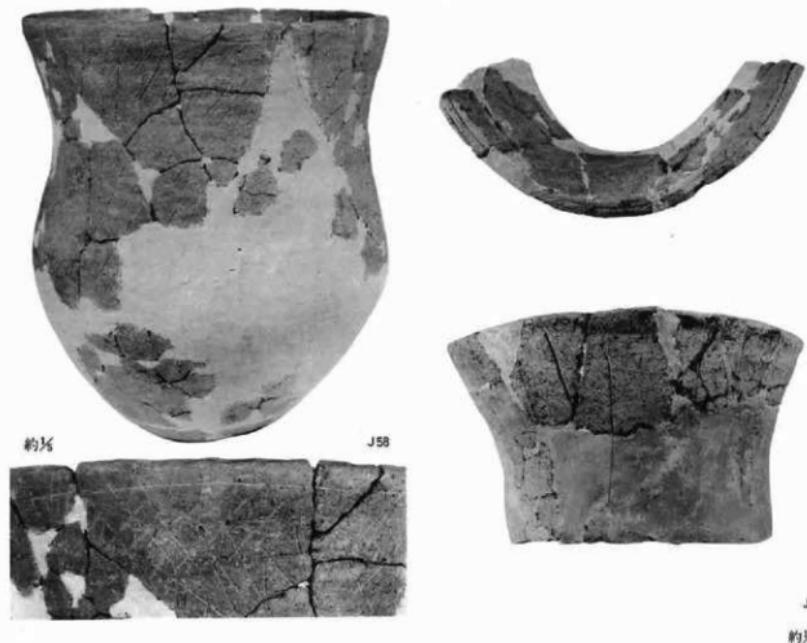
J₂



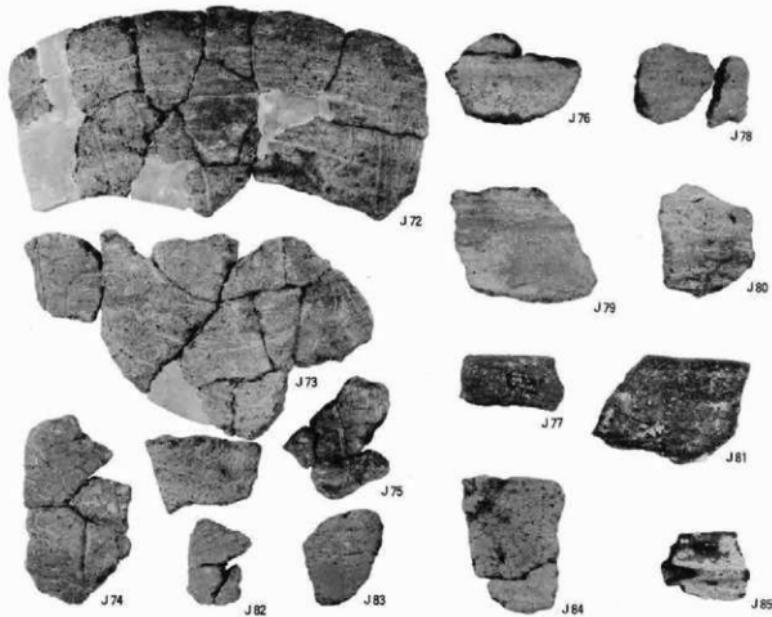
約36



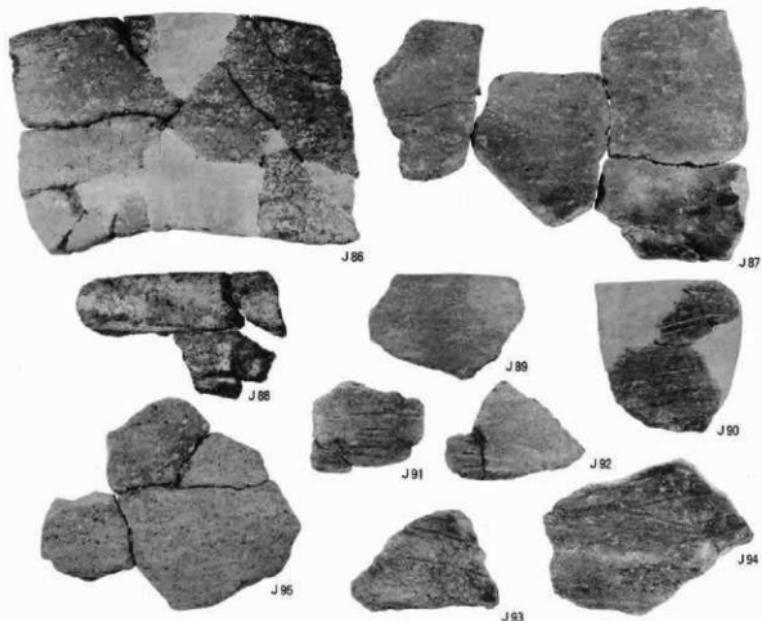
約32



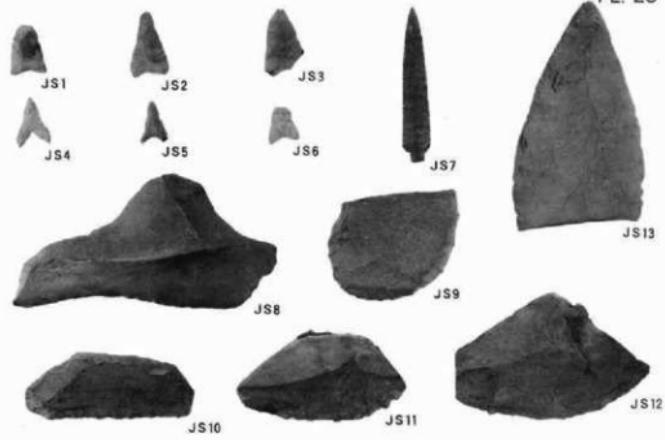
約34



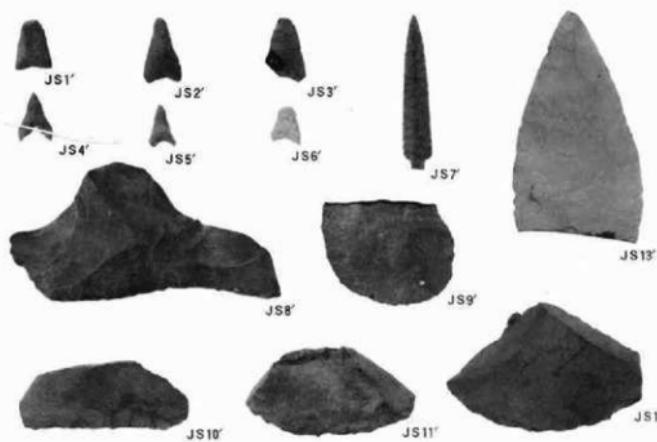
約36



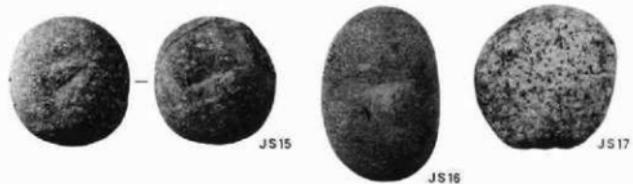
約36



3/4



3/4



3/4



3/4



JS
36



JS
13



JS
13



JS
27



JS
14



JS
14



JS
14



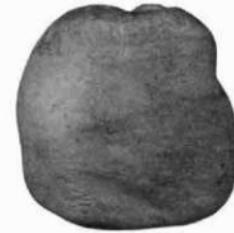
JS
21



JS
22



JS
23



JS
23



JS
25



約
JS
25



JS
25 約
JS
25



JS
24



B1



B4



B10



B12



B94

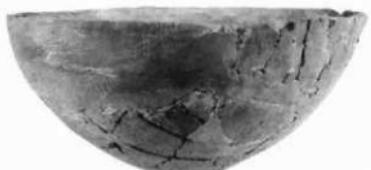


B5



B95

B1・B4・B5・B10・B12—SB01, B94・B95—SB03



B96



B215



B93



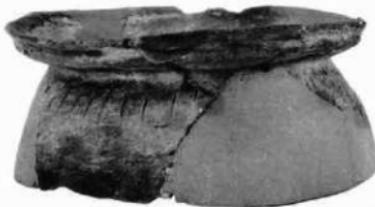
B291



B118



B371



B165



B372



B196



B373

B93・B96・B118・SB03, B165・B215・B291・SB05, B196・SB05・SB07, B371・SB06, B372・B373・SB07



B374



B407



B377



B408



B381



B409



B382



B417



B 439



B 444



B 432



B 495



B 433



B 434



B 496



B 459



B 497



B496



B677



B499



B683



B509



B682



B531



B703



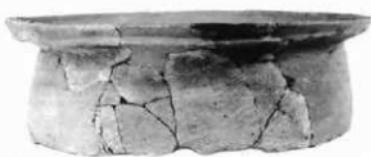
B617



B711



B719



B723



B788



B726



B789



B8



B161



B216



B26



B194



B175



B91



B212



B135



B176

B8 - B26 - SB01, B91 - B135 - SB03, B161 - B175 - B176 - B194 - B212 - B216 - SB05, B723 - B726 - B788 - B789 - SB11



B275



B339



B427



B276



B341



B440



B290



B391



B435



B321



B410



B436



B324



B411



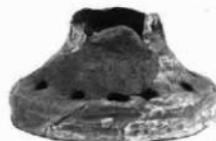
B461



B484



B543



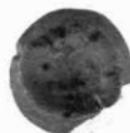
B611



B473



B501



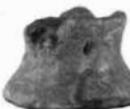
B568



B491



B504



B568



B557



B573



B614



B539



B570



B621



B696



B718



B779



B698



B721



B781



B673



B786



B670



B745



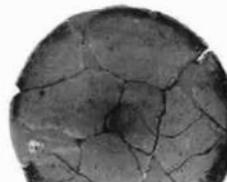
B744



B715

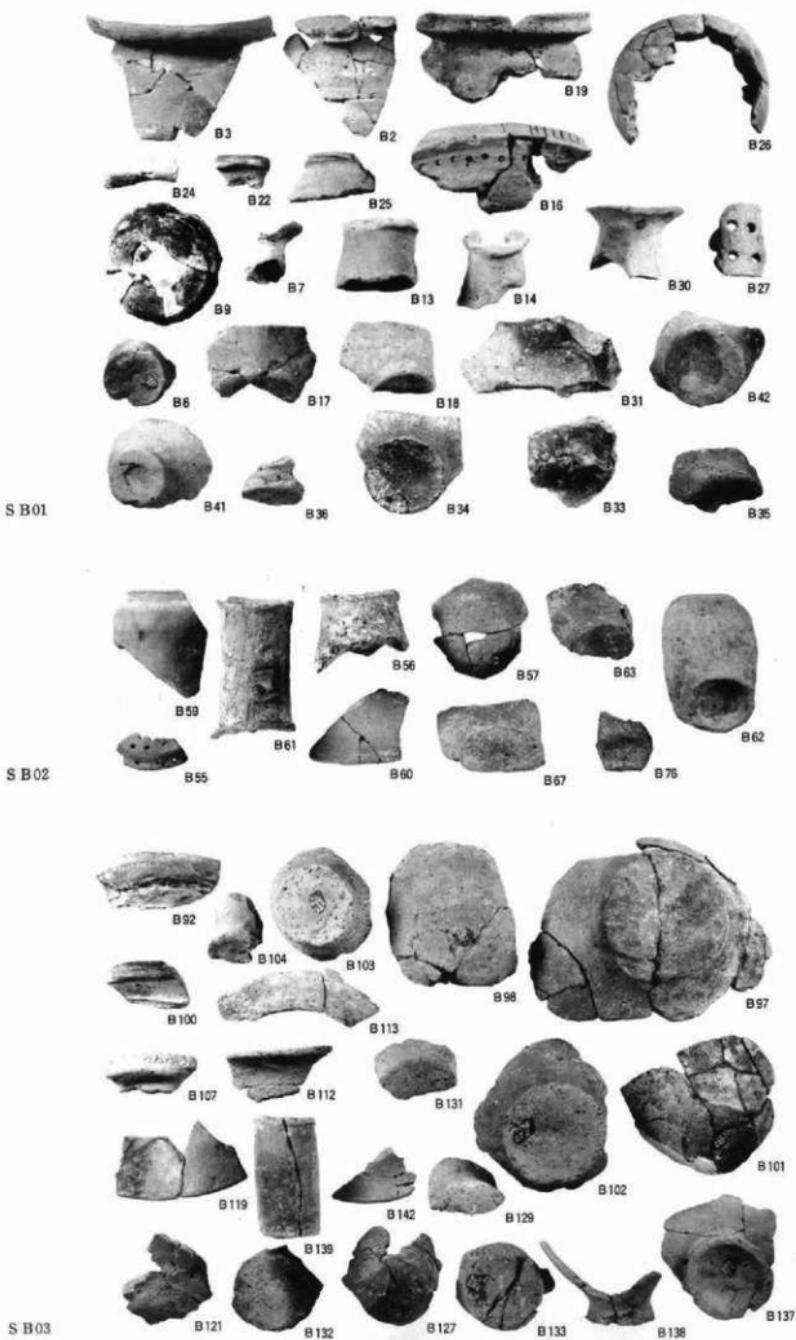


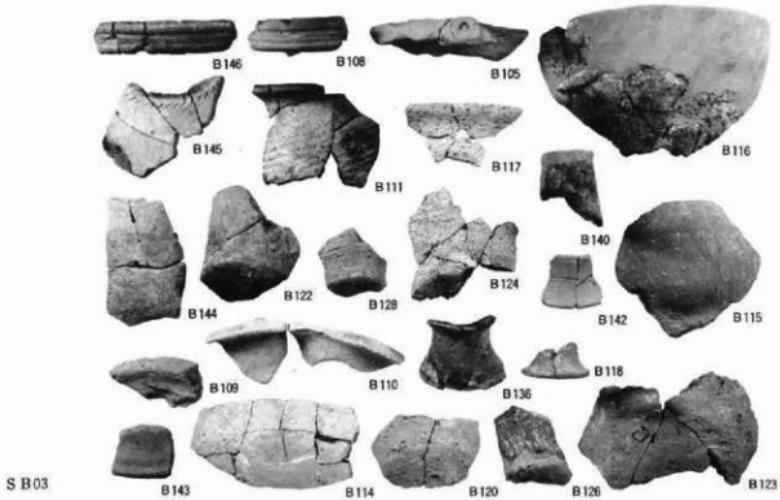
B783



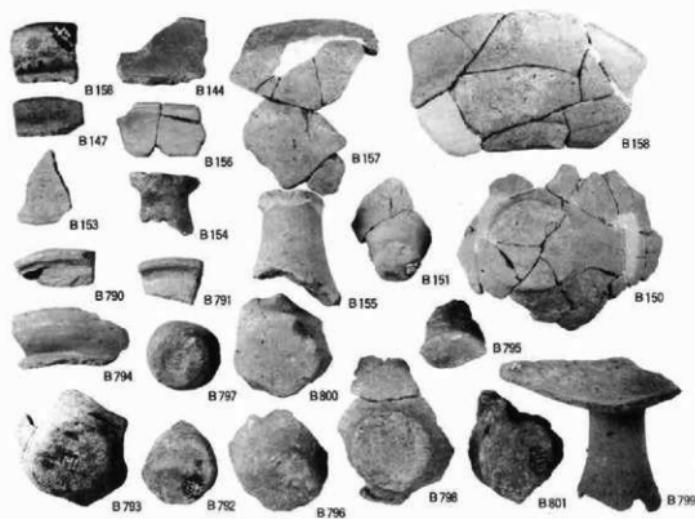
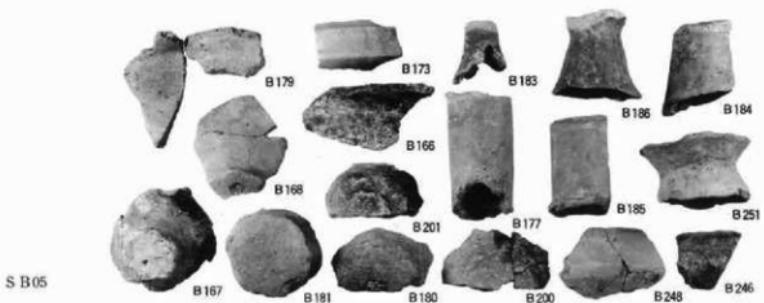
B788

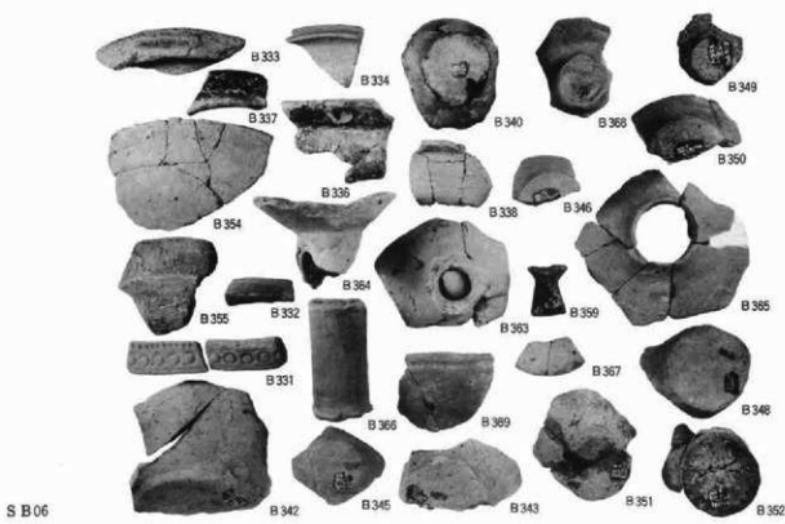
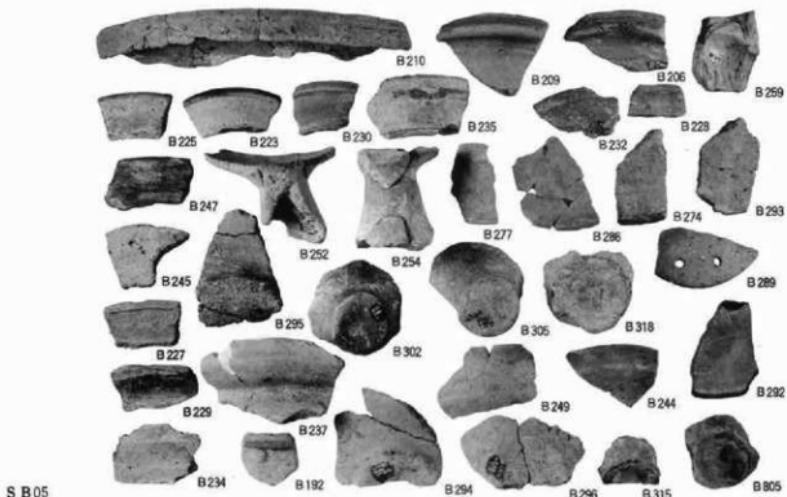
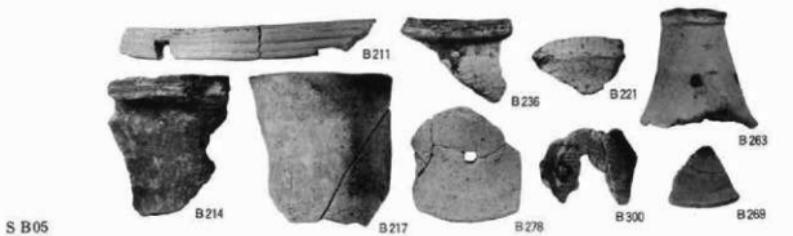
B670 - B673 - B688 - B696 - SB100 SD6, B715 - B718 - B721 - B744 - B745 - B779 - B781 - B783 - B785 - B786 - B788 - SB11

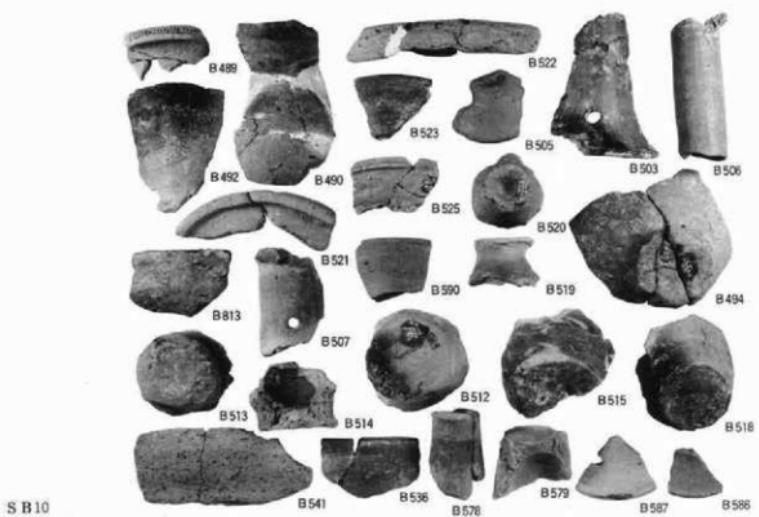
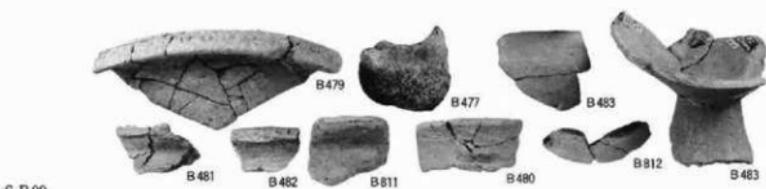
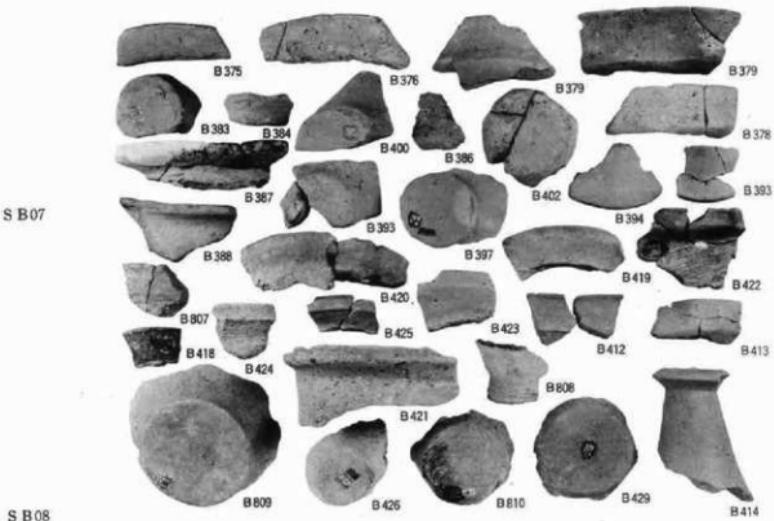


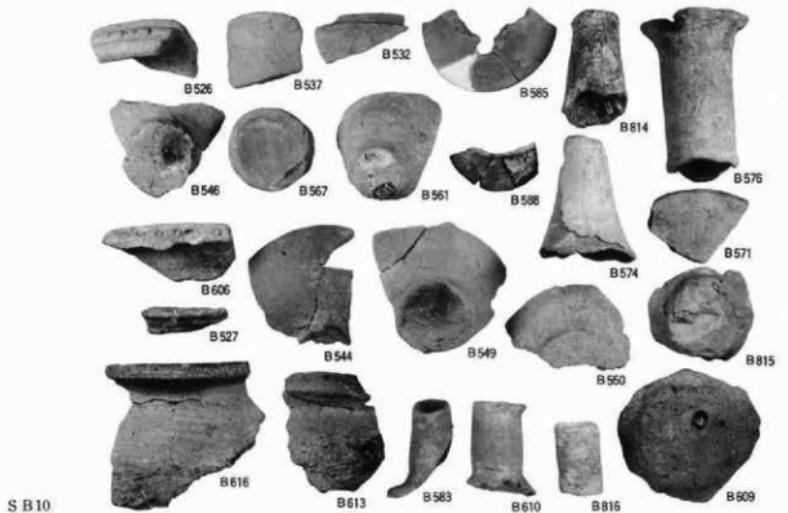


S B04

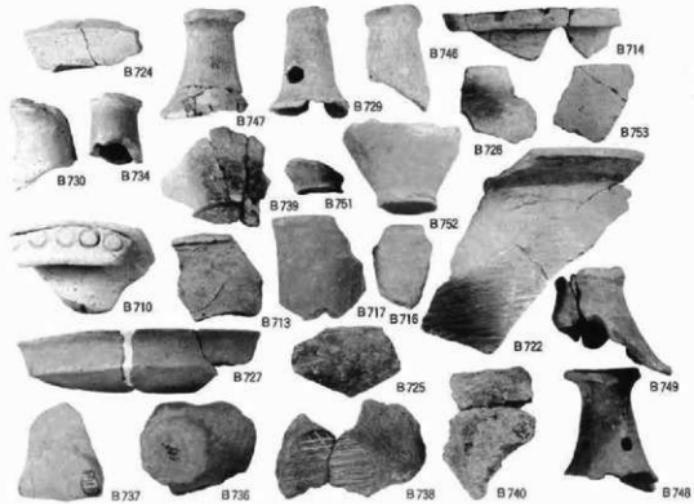
S B12
掘立柱建物跡







S B10のS D6





K1



K70



K176



K116



K188



K137



K190



K217

K1—SK1, K70—SK196, K118—SK234, K137—SK241, K176—SK598, K188—SK631, K190—SK634, K217—SK699



K191



K48



K178



K211



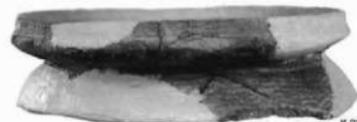
K213



K222



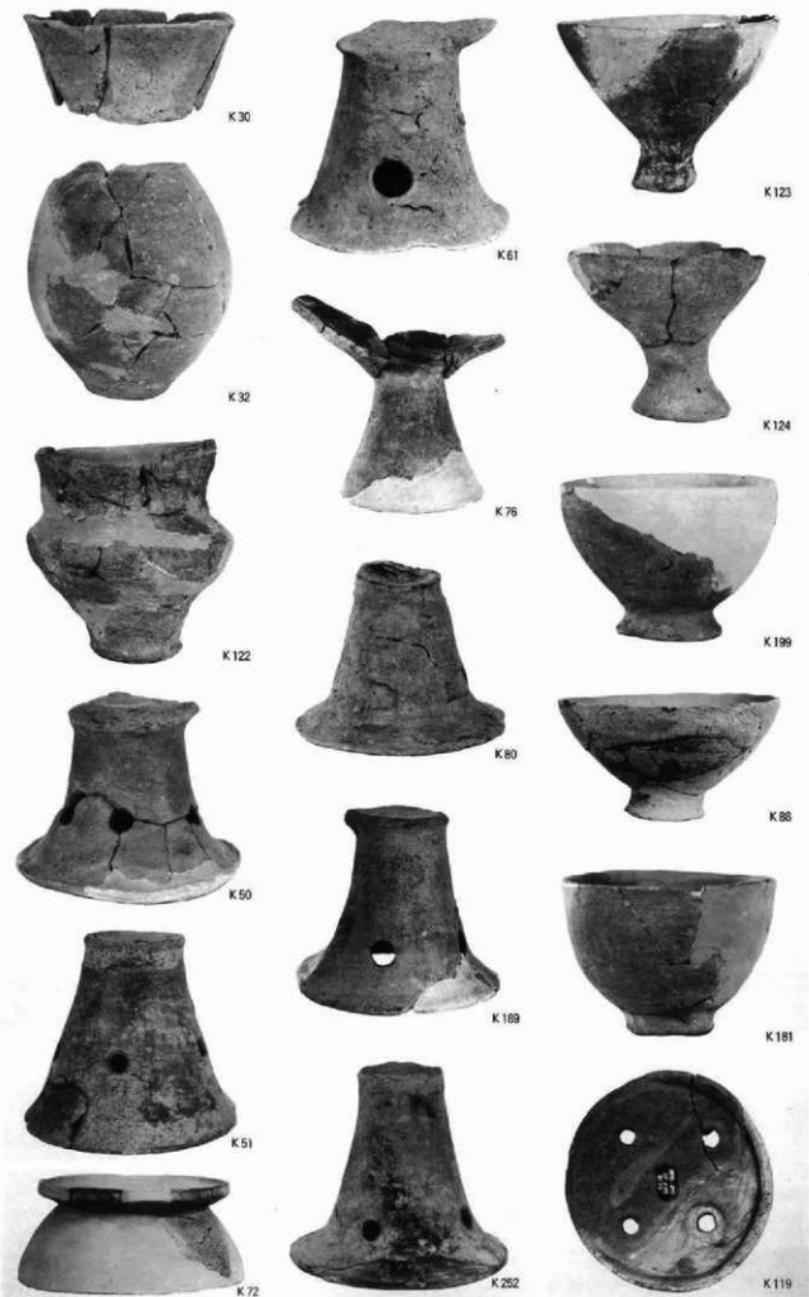
K212



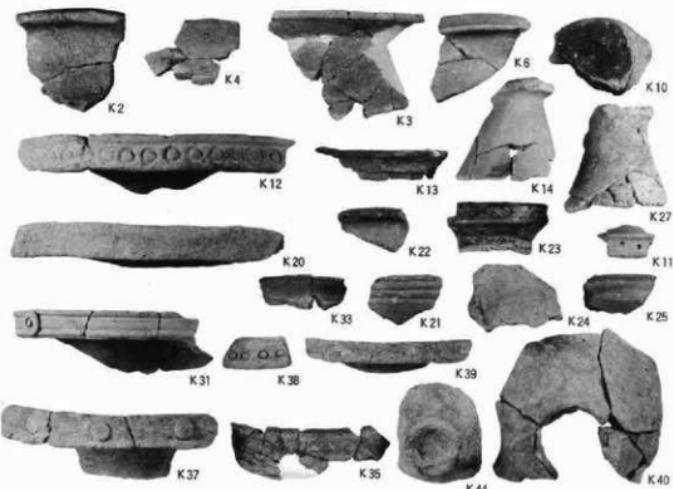
K238



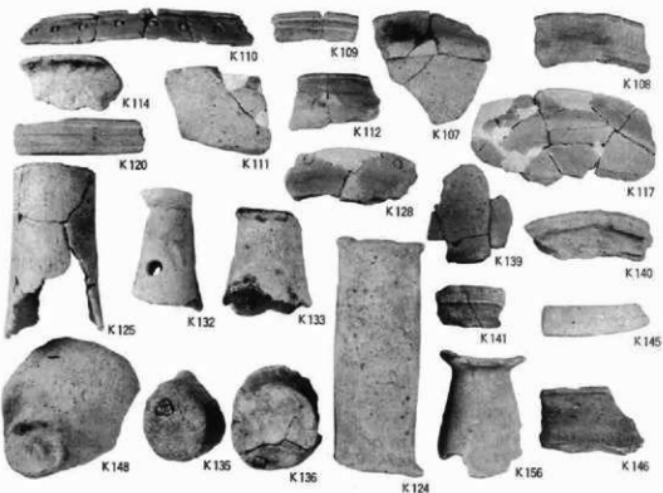
K34



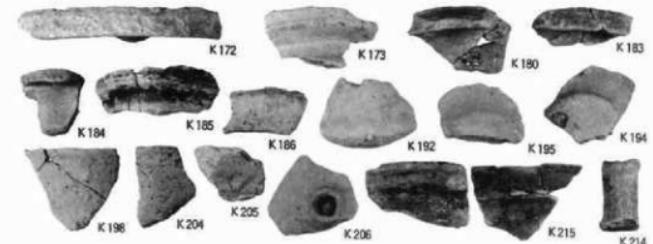
K30—SK102, K32—SK103, K50, K51—SK105, K61—SK175, K72—K76, K80—K88—SK196, K119—SK234,
K122—K124—SK235, K181—SK617, K189—SK631, K199—SK635, K252—SK



K2~K4~SK1
K6~SK15
K10~SK43
K11~SK53
K12~K14~SK37
K20~K24~SK87
K25~SK91
K27~SK72
K31~K33~K35~SK103
K37~K40~K44
—SK118



K107~K108~SK227
K109~K112~K114
—SK228
K117~SK230
K120~K125~SK235
K128~K129~K132~
K133~K135~K136~
—SK236
SK238
K139~SK241
K140~SK301
K141~SK501
K145~SK512
K146~SK515
K148~SK516
K156~SK528



K172~K173~SK550
K180~SK616
K183~SK626
K184~K186~SK629
K192~K194~K195
—SK634
K198~SK635
K204~K206~SK651
K214~K215~SK649



1



9



4



15



6



13



7



20



8



64



37



39



38



71



87



72



88



73



90



96



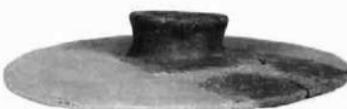
110



101



124



125



105



163



107



167



16—弥生時代遺物包含層Ⅱ。84—弥生時代遺物包含層Ⅰ。188·193·195·197·201·203·205·210—淡黃褐色粘質土



212



223



213



221



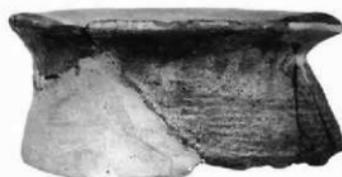
215



227



222



218



189



237



235



236



269



307



311



330



295



329

235—黑色小體泥入土。269—黑色圓底質土。282—黃色小體泥入土。295—暗黃色土。307·311—試掘 井生時代包含層 I
329—試掘 黃色砂質土。330—試掘 黑褐色土



56



58



57



41



40



62



53



54



46



50



49



68



93



94

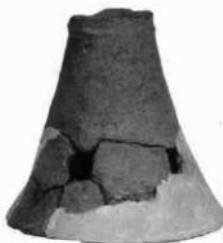


158



98

95



153

99

150



148



155

100



151



149



101



168



178



102



176



360



179



174



156



187



200



211



202



216



217



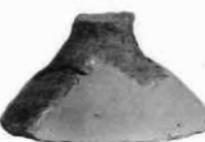
361



245



244



271

156—暗茶褐色黏質土。174、176、179、187、360—黃色黏質土。200、202、211—淡黃褐色黏質土。216、217—黃色砂質土
244、245、361—黑色小繪混入土。271—黑色面粘質土。



262



283



263



290



283



262



266



270



296



303



265



301



302



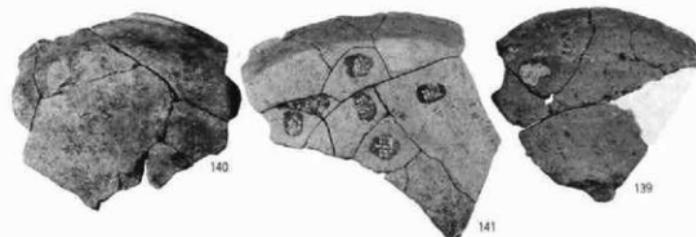
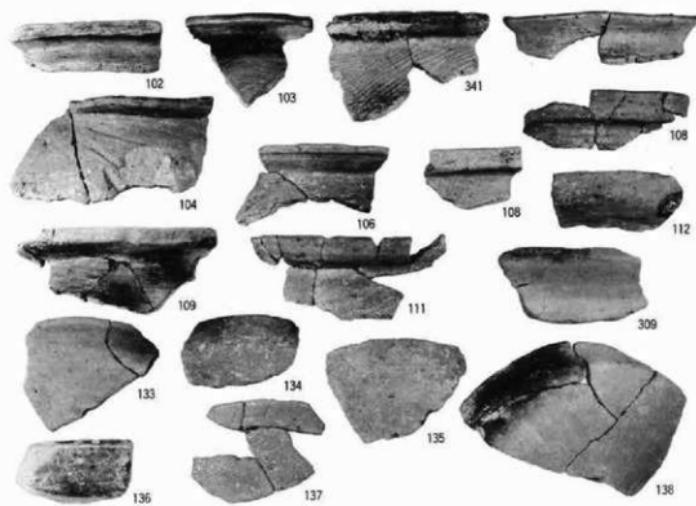
293



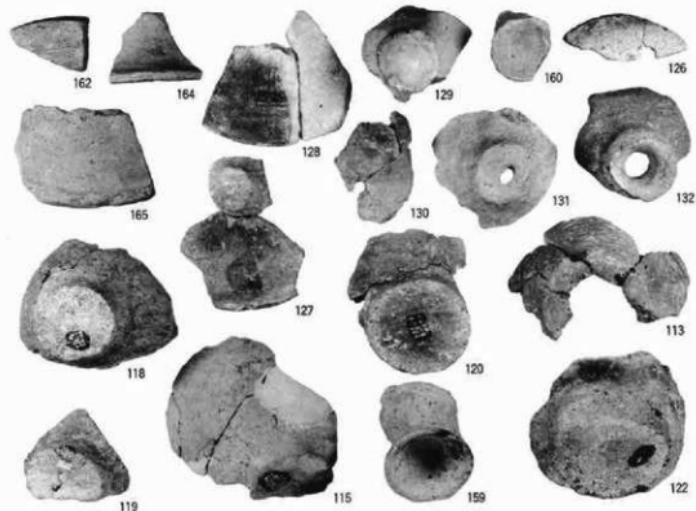
314



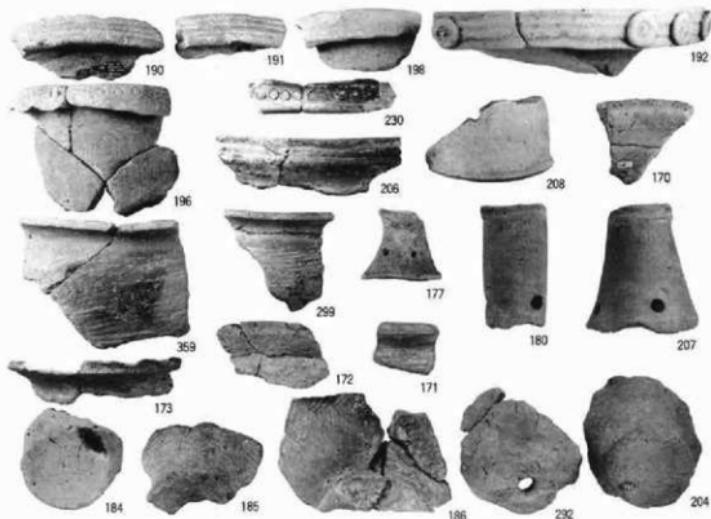
弥生時代遺物
包含層 II
19・27—試掘



弥生時代遺物
包含層 I
108 - 309 - 341 - 試掘



弥生時代遺物
包含層 I

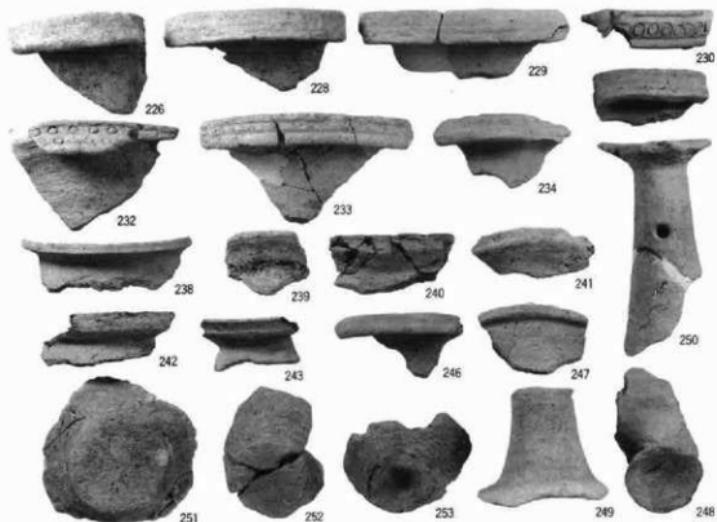


190~192・196・198・
204・206~208・230・
淡黃褐色粘質土

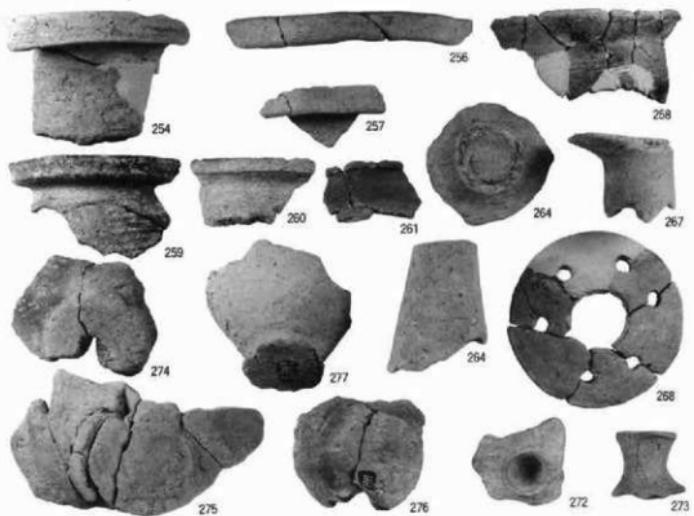
170~173・177・180・
184~186

黃色弱粘質土

292・299・358~
その他



黑色小砾混入土

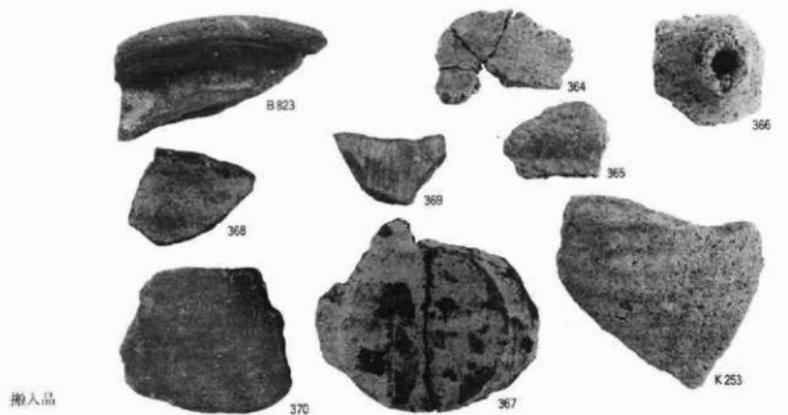


黑色弱粘質土

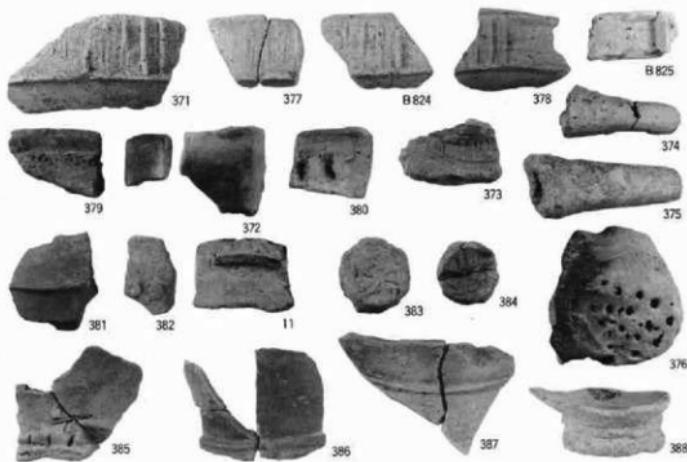


試掘調查

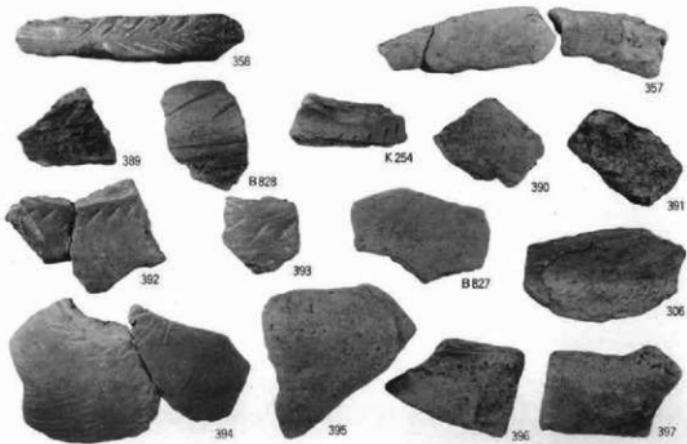
304・315・321—先生時代遺物包含層
325、327—黃色砂質土
331—暗黃灰色土
336・337・354—黃色砂質土



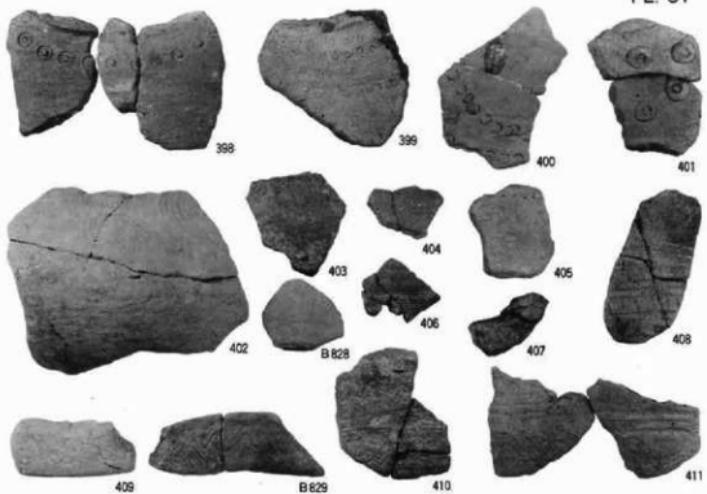
搬入品



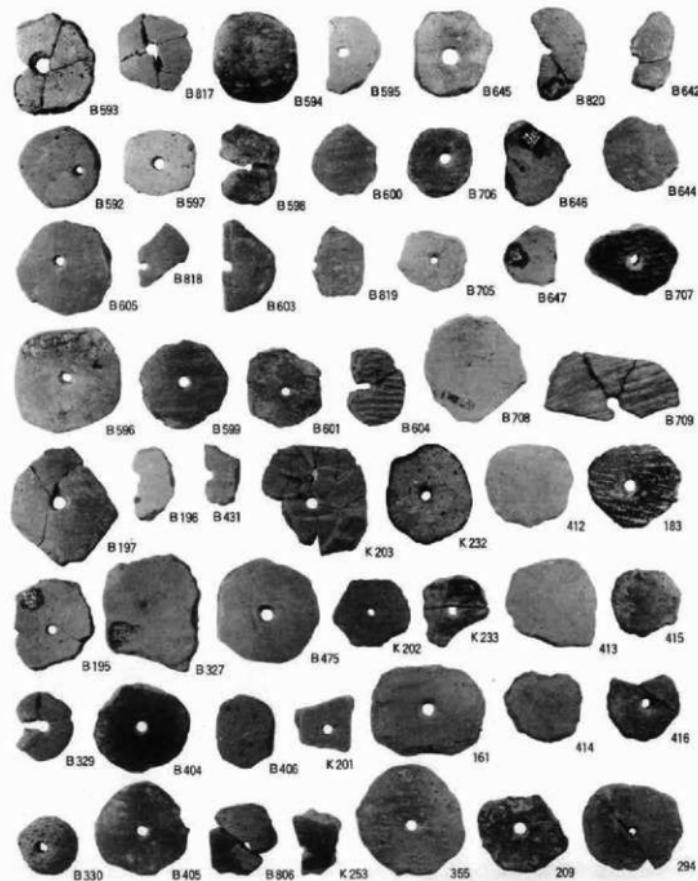
装飾文様ほか

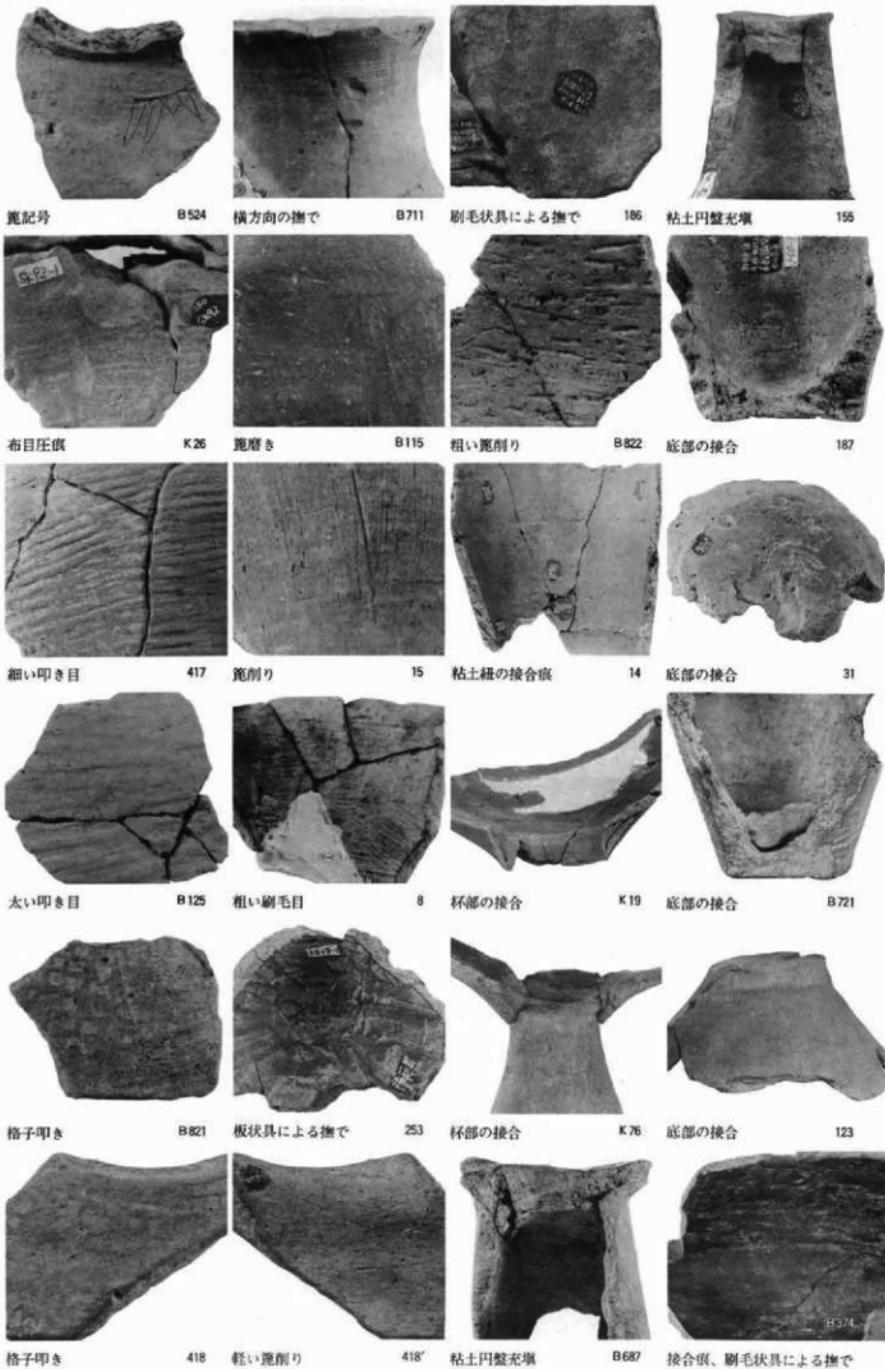


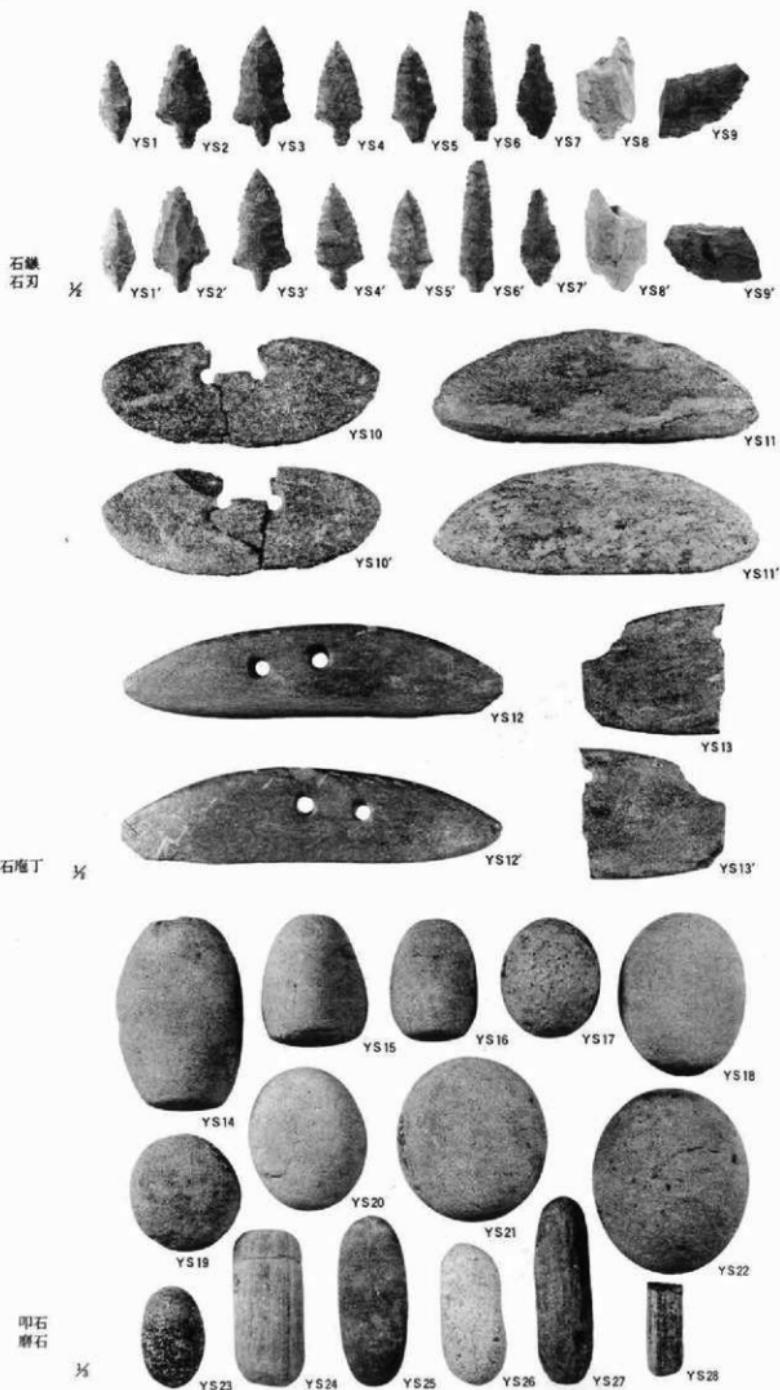
裝飾文檔

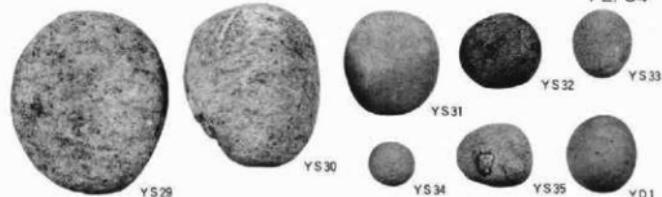


紡錘車









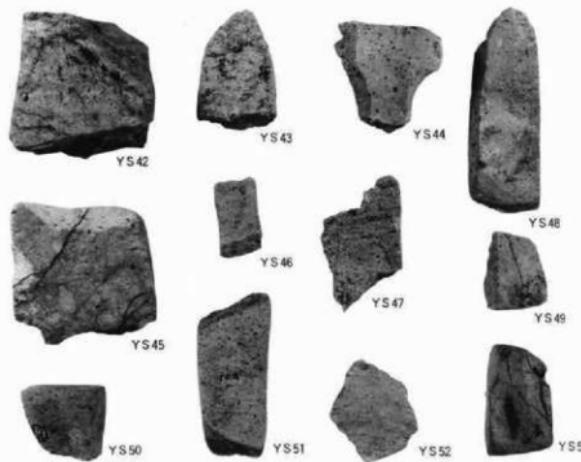
叩石
磨石
丸石

36



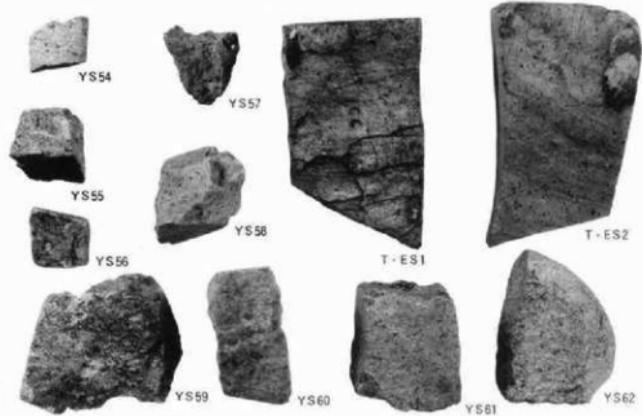
砥石

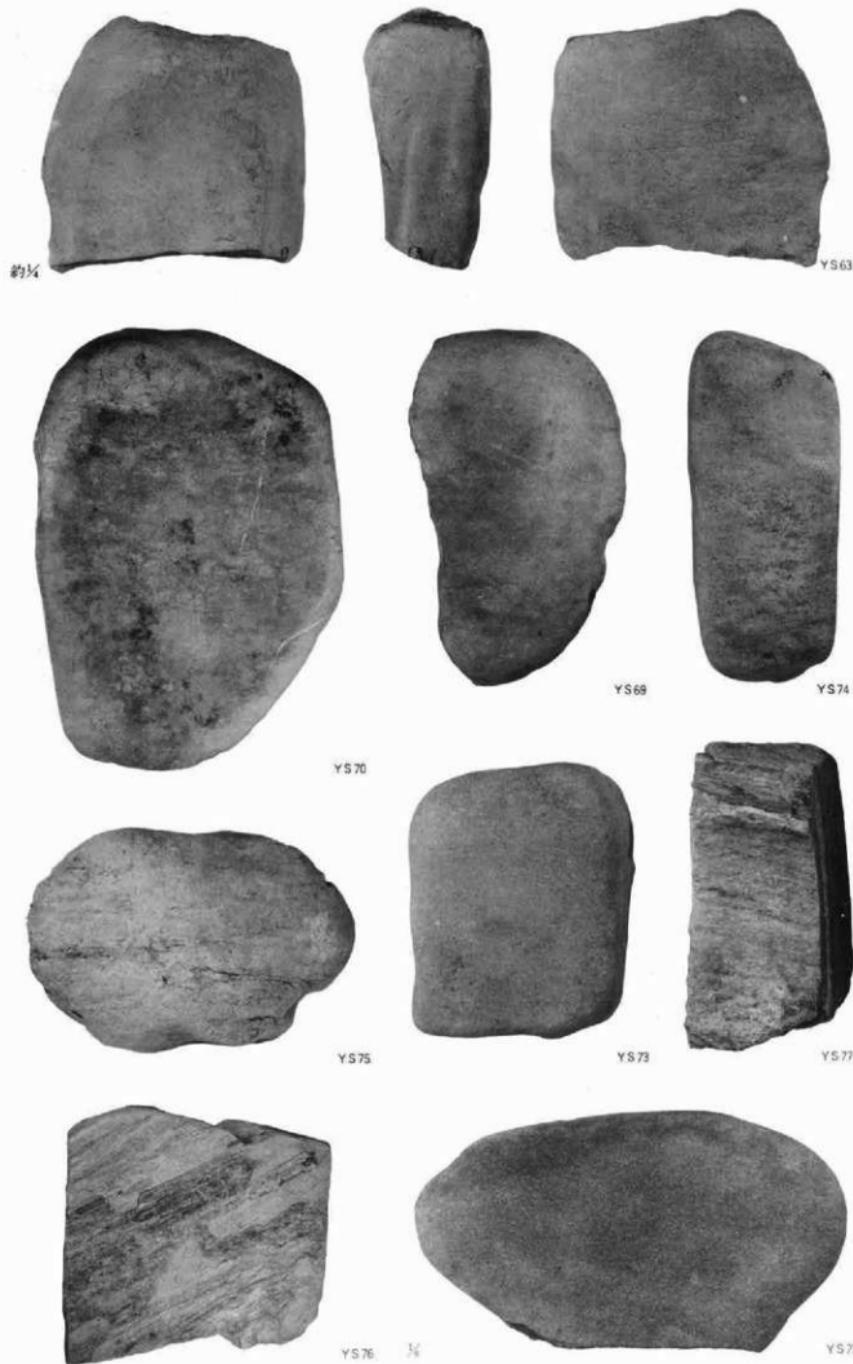
36.5



砥石

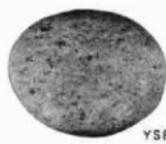
36.5







YS78



YS80



YS82



YS84



YS79



YS81



YS83



YS85



YS86

YS87

YS88

YS89

YS90

YS91

YS92

YS94

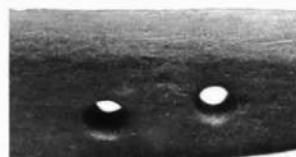


約片

YS95

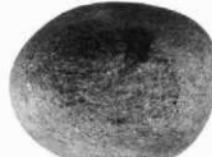
YS96

YS97



石庵丁刃先擦痕

YS12



磨石擦痕

YS14



砥石擦痕

YS48



石庵丁紐擦れ痕

YS12



叩石敲打痕

JS16

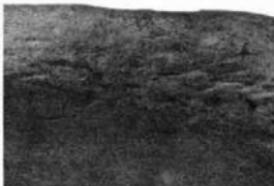


YS63



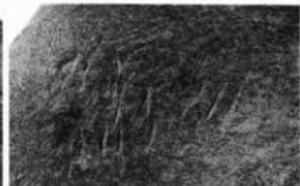
砥石裏面 敲打痕

YS63

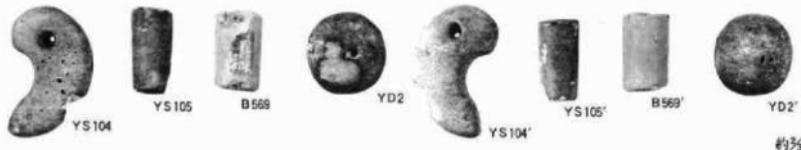


荒石侧面 敲打痕

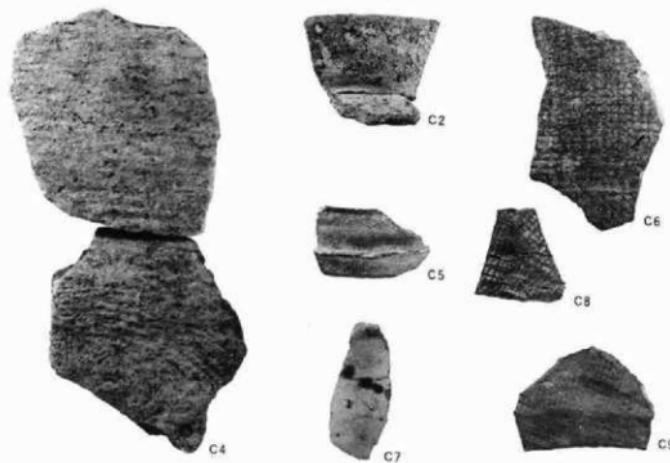
YS71



JS23



36



34

C4

C7

C9



T1



T3



T7



T8



T10



T5



T9



T11



T6



T12



T16



T17



T25



T22



T26



T23



T27



T24



T28



T30



T31



T46



T32



T39



T41



T42



T43



T44



T78



T79



T80



T81



T82



T83



T84



T85



T86



T87



T47



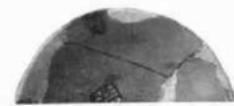
T54



T50



H1



E4



E5



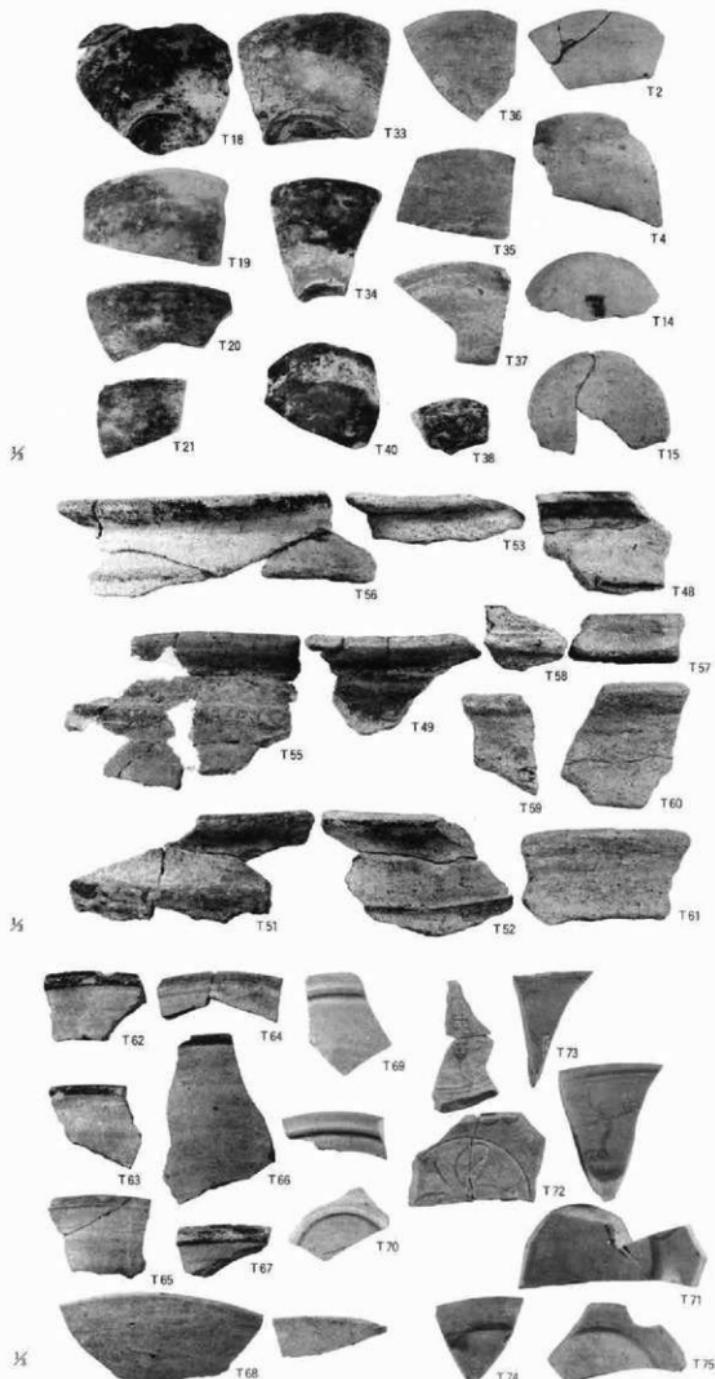
E7

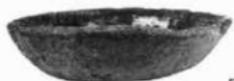


E6



E8





E9



E12



E15



E10



E13



E16



E11



E14



E1



E2



T11



T13



T14



T15



T16



T19



T17



T10



T11



T12



K.s.



E17



E18



E19



E20



E21



E22



E23



E24



E25



E26

昭和61年2月14日 印刷
昭和61年2月14日 発行

船岡山遺跡発掘調査報告書

一紀の川河川改修工事に伴う発掘調査一

著作権 和歌山県教育委員会
所有者

発行者 和歌山県教育委員会

印刷者 有限会社 真陽社